THE CENTRAL REVIEW

昭和五年八月十八日
昭和五年九月一日發行（每月一回一日發行）

中央公論

九月號

第四十五年 第九號 第五百十二號

出た!!

目の覺めるやうな美男ジュスが・・・

猶太人ジュス

フォイヒトワンゲル著

谷讓次譯

内に——妖熱を匿し颯爽として・・・血塗らざる復讐音なき反逆を見よ!!

モダン・ボーイ・ジュス ジュスはラッパズボンこそ穿かないがりうとした巴里型——一分の隙もない流行の尖端で身を包んでゐた。猫のやうな柔媚さで貴顯に取入り、相手の急所に打ち込む猛惡な爪と牙を始終磨きたてゝゐた。そして、一度喰ひ下つたが最後、死んでも離さぬだにのやうな執拗さと、骨までしやぶらねばやまない殘忍性を持つてゐた。かくして彼は其奔放な情熱を民族的の恥辱に押包み、周密な意識さ計畫のもさに凡ゆる女性を自分の膝下に征掠し、鰻上りに顯要の地位を獲得し、國政の樞機に參劃しては遂に、やんごとなき至上支配者の御内室なさへ毒牙にかけて飽くなき淫樂を恣にするのである。

世界大衆文學の王座

社會的經濟的基礎工事の上に建直された革命的歴史小説。その胸を抉られるやうな興奮と正確なる社會認識は、全世界の讀書界を根抵から揺り動かし既に數百萬部を賣りつくして所謂ヒストリカルロマンスの世界的流行を生んだ根源。祖國を持たぬ民族、團結を許されぬ彼等が不當な權力に反抗する不屈の意氣と執拗なる情熱を見よ

定價一圓五十錢　四六判七百頁送料十二錢

振替東京三四番　東京驛前丸ビル

中央公論社發行



貧乏ナンセンス物語

ラボカの社會化

絶大なる强壯劑の出現

▼最低費用の最大効力
▼最短時間の最大回復
▼共存共榮の販賣組織

最近……驚くべき强壯劑が發見された。

それはいふ迄もなく佛國リヨン醫科大學のラボカ教授によつて發見された滋養强壯、不老若返り、精力增進の大要素たるヌクイレンを合成した滋養强壯劑ラボカである。このラボカは實に人類の保健、衛生、不老、長壽の救主とも稱すべき絶大なる强壯劑であつて、あらゆる急性病たると慢性病たるとを問はず、更に老若と男女たるとを問はず、病弱者及び老衰者に回春の歡喜を齎らす文字通りの世界的强壯劑である。

就中……兎角病弱又は衰弱し易い酷暑の夏季にこれを服用せば病弱者に對して抵抗力を增加し、食慾を增し、消化を助け、便通を整へ、血色を良くし、夏痩を防ぐ等非常に顯著なる効果はあらゆる服用者の異口同音に感激讃歎する所である。而も、この世界的空前の名劑の輸入元小菅商會は一般輸入商並に資本家とは全然相異し、徹頭徹尾病弱者の、救濟と老若男女の健康增進を信條とするものなるが故に、その販賣價格に於ても殆んど原價に近き破格の廉價を以て提供しつつある。

勿論……この輸入元小菅商會主は純然たる素人藥業者であつて業界に何等の緣故のない人である。所が實に偶然のチャンスにラボカを入手以來服用者に百パーセントの効果を奏さしめ、連日無數の服用者より異常なる感謝を受けて居る。蓋し、この大事實は該商會主は單なる營業者たらざることを最も雄辯に且つ最も力强く立證するものなると共に、氏が日本人の平均生存年齡僅かに四十二年なる悲哀を救濟すべく敢然として藥品の社會化の實現を決意した殉教的信念の發露でなければならぬ。

而も……吾人は藥業家本來の天職を全うするために飽迄販賣組織の合理化を實現して業界の弊風を一掃せんとするものである。このためには、絶對的に有名有實偉効顯著なるラボカの普及を企圖し、兼ねて一般大衆の醫療費を輕減して最低費用の最大効力と最短時間の最大回復を期さねばならぬ。從つて本舖は業界の舊套を脱し、徹底的に特約店及び小賣聯盟店中心主義に立脚して特約店と小賣聯盟店のみの需めに應じて共存共榮の實を擧げんことを念願してゐることを明かにして置く。

粉末ラボカ十日分(百廿瓦入)定價金二圓

說明書進呈　送料三個迄十二錢

東京市芝區芝口復興ビル

東洋發賣元　**小菅商會貿易部**

振替東京七二九三〇
電話銀座一六〇二

特約代理店中央公論社代理部

東京府市八王子市橫濱市有名藥店にあり



秋風　　小杉放庵筆

現代人物評論

馬場恒吾著

「中央公論」讀者諸賢に告ぐ!!

本誌特輯論壇の花形馬場氏の「人物評論」竟に美装一卷として諸君に見えんとす。乞ふ――

燈下親しむべき

九月下旬

を待て!!

【内容一斑】

宇垣一成論　渡邊千冬論
床次竹二郎論　幣原喜重郎論
田中義一論　犬養毅論
安達謙藏論　伊東巳代治論
水野直論　井上準之助論
德富蘇峰論　牧野伸顯論
小泉策太郎論　大民政黨論
久原房之助論　大政友會論
若槻禮次郎論　陸海軍巨頭論

四六判五百頁・一圓五拾錢

中央公論社出版部

筆者の眼光・才筆・蘊蓄は既に定評がある。單に個々人を論ずるのみでなく、彼等を繞る政界財界の見えざる糸、黒幕の正體をハッキリと把握し剴切なる表現を與ふる齒切の好さ――興味中心につい惹き込まれ知らぬ間に「國勢通」になるのが本書の眞價だ。

◇吉松祐一氏新著◇ 《簡明に俳人一茶の全部を知り得る理想的の著述》—

新刊 人間一茶の生涯

世に所謂『一茶もの』は多く流布されてゐるが彼の眞面目『人間一茶』の解剖に就ては未だに研究の餘地が殘されてゐる、一茶の俳句は親しまれてゐるが純眞球の如き俳文の至寶たる彼れの隨筆は顧みられてゐない。本書は著者が一茶郷里の信州柏原まで踏査考證を遂げ性格趣味宗教等に至るまであらゆる『人間一茶』を赤裸々に解剖するに苦心した書である俳句愛好者及一般の人々の趣味の讀物として切に一讀をすゝむ。

四六判 最上製美本 全壹冊 四百頁箱入
正價壹圓八拾錢
送料十八錢

中井堅藏著 ●**日本婦人のゆくて** 肺肝の字熱血の句高遠の眞理を簡明に説き讀者を納得さす。（最新刊）正價金貳圓 送料十八錢

松木幹雄著 ●**若き中等教師と其周圍** 漱石の坊ちやん卅年前の夢と化す時本書出現せり（最新刊）金壹圓八拾錢 送料十八錢

大久保龍著 ●感想 **伸びんとする生命のゆくて** 小學教師として眞劍な感想告白なり（最新刊）正價金貳圓 送料十八錢

宮崎安衞門著 ●**隨筆草に醉ふ者** 文字通り無一物底無盡藏の生活者たる著者の廿年間の涙ぐましい記錄也（最新刊）金壹圓八拾錢 送料十二錢

山名正太郎著 ●思潮文獻 **日本自殺情死紀** 興味津々として珍らしく面白い本と大評判大好評で增刷す（三版）正價金貳圓 送料十八錢

岡田稔著 ●**西鶴日本永代藏詳解** 西鶴町人物最初の作で金を描いて深刻を極めた珍書也（最新刊）金貳圓八拾錢 送料十八錢

有ケ谷靜堂著 ●**支那書道史概說** 本書出現して書道愛好家の歡喜のみならず斯學研究の便宜多大なり（大好評）金五圓八拾錢 送料廿七錢

大關增次郎著 ●**カント研究** 近世哲學史上に巨木の如く聳立つカント啓學大系を思惟開展の順に評述せり（三版）金七圓八拾錢 送料廿七錢

日高瓊々彥著 ●**國家に及ぼす宗教の害毒** 全宗教を否定せる大論文一讀快を叫ぶ可き痛快書（三版）金壹圓八拾錢 送料十二錢

滋賀貞著 ●**世界大戰史概說** 晴味に富んだ筆を以て簡明に大觀を叙し挿畫地圖も亦豐富である。（最新刊）金貳圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區一ツ橋通町三
大同館發行
振替貯金口座 東京八七貳番

福澤式國富分配論

——(卷頭言)——

內閣統計局の發表に據るとて朝日年鑑の報ずる所に依れば、最近に於ける我が國富は優に一千億圓を超え人口一人當り約一千八百圓ばかりになり、而して國富逐年の增加は最近特に著しいと云ふ。

國富の增加とは取も直さず日本國民の作り上げる富の總量がその生活享樂等の爲め使消する總量を償ふてなほ餘りあることを意味する。斯んなせち辛い世の中に國富の逐年の增加なんて變な話だと思ふ人もあらうが、然うでなかつたら年々增加する人口が兎も角も養はれ且不十分ながらも所謂文明の利器が次から次へと設備されて行く道理がない。年每に生活難に惱む人の多くなるも事實だが、之は人口の增加に比して國富の減少する――少くも增殖せざる――を語るものでなくして新に增した富の分配の工合が下層の人達をして一向國富增加の恩惠に浴せしめざるに外ならないのであらう。而して新に附け加へられた富の分配の下層階級にまで行渡らないのは、富そのものの本來の分配制度に基因するは固より言ふまでもない。

假りに內閣統計局の推算を正確に近いものとすると、日本と云ふ共同團體の組合員たる個々の國民は國富全體に對して各一千八百圓の持分を有すべき道理である。一戶平均五人とすると、各家族は例へば九千圓の貯金を國家に托して居る格好になる。そして國富は年々增殖してやまぬと云ふから、各個人も普通に働いて居れば樂しく喰べて一切の公課を拂つてなほ且つ間違なく若干の剩餘を生じ得る譯である。斯う考へると日本國民は計算の上では決してさう生活に苦まねばならぬ理窟はないのである。

然るにも拘らず大部分の國民が常に生活の爲に喘ぎ惱んで居るのは何故か。是れ國富の分配が均衡を失し、富の一方的偏在の爲に國民の大多數が犧牲にされて居る結果に外ならない。社會的正義が日本國民の各人に一千八百圓の持分を保障するものなら、一人の手に一千八百圓以上の富并に其果實を獨占するのは本來譯もなく許さるべきことではないと思ふ。

明治初年明六社同人の間に妻妾論のやかましかつた時、福澤諭吉先生は「男女同數論」と題する奇拔なる意見を發表して學友を驚かした。その要旨に曰ふ「先ヅ世界中ノ男ト女ト數ハ大抵同樣ナルユヘ、男一人ト女一人ト相對シテ夫婦ニナルベキ勘定ナリ。若シ左モナクシテ、此處ニ餘計ノ女ヲ引込メバ彼處ニ不足ナカル可ラズ。いろはカルタノ娘ヒトリニ婿八人ガ不都合ナレバ、男ヒトリニ妾八人モ亦不都合ナラン（明六雜誌第三十一號）。若し福澤先生をして今日に在らしめば必ずや言ふだらう、日本人一人の平均持分は一千八百圓なり、若し此處に此限度を超えたる暴富を獨占する者あらば彼處に必ずやその犧牲となりて衣食に惱む者なかるべからずと。更に一步を進めて先生が餘計な富を龍斷する金持に限つて妾の數人を蓄へる、怪しからぬ話だと憤慨されるか否かは、保證の限りでない。

中央公論



資本蓄積理論の蓄積

高田保馬

第四十五年第九號
九月號
第五百十二號

一

資本の蓄積はどこまで、又は如何なる條件の下に於て可能であるか。それとも、資本の蓄積は本來行きつまるものであり、資本主義的生産それ自體は、必然に、更に嚴密に云へば經濟的に見て必然的に崩壞する外なきものであらうか。これは資本主義的經濟の考察にとりては最も重要なる問題たるを失はぬ。而してマルクス資本論第二卷は、資本蓄積の進行が如何なる條件の下に於て可能なるかを一定の樣式によりて說きながらも、更に進みて、資本主義的生産がどこまで行はれ

うるか、如何なる事情の下に行きづまるかを（例へば、第三巻に論及したるが如き機構を）此樣式の展開によりて論證することがなかつた。それゆゑに資本主義經濟に關する資本蓄積理論の十分なる展開はマルクス學者に課せられたる一の重大なる仕事として殘されてゐる、少くもかう考へられてゐる。近時資本蓄積に關する理論（蓄積の數式的取扱ひによらざる議論からはすべて離れて考察を進める）の引きつゞき發表せらるるのも決して偶然ではない。而して資本主義の經濟的に行詰るか否か卽ち蓄積の無限進行が經濟的にみて可能であるかないか、その答解はすべて此理論から結論として引き出さるるものと考へられる。

たゞ私の所信をば、豫め言明することを許さるるならば、かう云ひたい。資本蓄積理論の性質は、いくらこれを精密に考察してみたところで、資本蓄積の無限進行又はその崩壞の何れをも論證することを許さない。マルクス學者の人々がその崩壞を論證せんが爲に、その經濟的なる蓄積理論をいくら展開してみたところで、そこには常に許されがたき假定があり、許されがたき論理の飛躍がある。蓄積理論がいくら蓄積せらるるにしても、蓄積の可能不可能についての論斷を求めむとする限り、それは一の徒勞に終る。蓄積理論の蓄積は一方に於て、此問題の困難を物語るには足りよう、他方に於ては、たゞ蓄積過程を制約するところの種々なる條件の知識を與ふることにはなる、却つてそれ以上の役目を果すことは出來まい。

二

今までにあらはれたる蓄積理論は——若し私の注目したるものだけに就いて述ぶることを許されるならば——ほゞ、次の如きものに區分せらるることが出來よう。一は資本蓄積の無限なる進行を、少くも經濟的に可能であるとなすもの。他は蓄積の進行を何等かの理由によりて、經濟的に不可能なりとなすもの。

まづ、前者の最も代表的なるものとしては、ツガン・バラノウスキと、これと立場の上に於て可なりの距離をもつてゐるが、オットオ・バウアアとがあげられ得る。ツガンの見解は日本に於て知られすぎる位に知られてゐる。それは、消費財(享樂財)の需要、從ひて生產が減少してもなほ、生產財の生產が擴張せらるゝことによりて、資本の擴張再生產、從ひて資本の蓄積が無限に進行し得べしと云ふにある。此見解は、生產財が消費財の生產のための手段である以上、消費財の增加なくして生產財の增加のあり得ざることを忘れてゐる。(以上生產財と生產手段とを同義に、消費財又は享樂財と消費手段とを同義に用ふる)。『(1)生產手段の增加は消費手段の增加をひき起し、(2)此の如き增加は同時にこれらの消費手段に對する新なる需要を作り出すこと、その結果として、(3)生產手段の生產の一定狀態には消費手段の生產の全く一定なる狀態が相應する。』ことを忘れてはならぬ。『底なしの桶の如く生產手段の生產に任意にいくらでも、「勞働及び生產手段をつめこむことが出來る、一切は支障なく展開すると云ふ見解は全然成り立ち得ない。大體此の如き論據の下に、かのツガンの見解は今は殆どすべて顧みられない(カウツキイも、ロオザもブハアリンも、その他あまたの學者も、同樣なる論據からこれを論難してゐる)。たゞ此等の批評が理論的に見て、どこまで根據あるものであるかは、ツガンの立場の當否とは離れてなほ吟味せらるべき問題であるが、玆には立入ることを避ける。

オットオ・バウアアの立場は勿論ツガンのそれから可なりの距離にある。たゞ一定の限界の下においてならば、卽ち人口の增加、資本の構成變化の程度がある限界のもとにあるならば、擴張再生產が滯りなく進行し得る。たゞ此限界がやぶらるるときに恐慌が必然的に生ずる。而して、資本主義生產自體の機構によりて蓄積が此限界內にひきもどされる。資本主義は剩餘價値實現の不可能性によりて破碎せらるることはないであらう。』ヒルフアディングの立場をもこれからあまり遠からぬものとして取扱ひうるものと思ふ。彼にありては資本主義の「經濟的崩壞」と云ふことが常に拒否せられて居る。

これらの見解に對して正反對なる對立を形づくるものとしては、資本主義の經濟的崩壞理論をあぐべきである。その一

方の極端にあるものとして、たとへば、ロオザ・ルクセンブルクを擧げることが出來る。其所論に於て資本主義經濟の經濟的崩壞の理論は一の極端を形づくる。資本主義が純粹である限り、云はゞ生産物の買手としての、資本主義以外に於ける第三者がない限り、蓄積過程は一歩も前進することが出來ぬ。卽ち、資本の蓄積、擴張再生産は本來的に（餘剩價値の實現の上からみて、各部門の比例が保たれても）不可能である。此本來的とも云ふべき不可能性が取除かれるとしてもなほ、資本の構成が變化せずに、つゞき得るものであればともかく、さうでない以上、卽ち此構成の變化が必然的のものである以上、蓄積もまたそれに伴ひて行きつまらざるを得ざる理由がある（比例の維持の不可能）。ロオザにありて資本蓄積の遂行を不可能ならしめたる諸事情を以て、決して打ち克つべきものとは認めず、云はゞそれらの困難は取除かれうべきものであると考へながら、從ひて資本主義を本來的に不可能のものとも見ず、又資本構成の漸次に變化してゆく事をも認めながら、蓄積の結局は行きつまり、云はゞ資本主義の純經濟的なる崩壞の必然性を論證せむとする立場――その顯著なる一例として見らるべきグロスマンの立場がある。資本の蓄積は資本構成の變化に拘はらず、ある期間だけは圓滑に進行し得る、それも一定の期間を過ぐれば必然的に行きつまらざるを得ずと見る。

資本蓄積の進行を不可能なりとする立場を今までは、資本主義自體內部について見る限り（第三者を離れて見る限り）絕對的に不可能であるとするものと、それが絕對的に、云はゞ出發の當初から不可能であるとするのではないが、蓄積進行のうちに何等かの理由により行きつまるとするものとに分つた。たゞ後者について云へば、此行詰りの過程が種々に考へられてゐる。グロスマンの如きもたゞその中の一の代表的なるものであると云ふに過ぎない。

極めて概括的に考へて見る。資本蓄積の純經濟的崩壞はこれを三の方向に於て考へることが出來る。一體資本主義そのものは一方に於て過剩なる商品をうみ、他方に於て過剩なる人口を産む。此二の過剩なるものが資本主義そのものを行きつまらせると考へられてゐる。從ひて、其純經濟的崩壞の理論もまた、此二の傾向の何れかに重きを置くものであり得る。

商品の過剰、卽ち增加しゆく生產に對する消費の過少に重きを置くところの立場もある。勿論、蓄積理論がマルクス的背景の上に立つかぎり、資本主義經濟內部に存在する、又は再生產せらるる數多の矛盾に着眼しないのではない。けれどもそれらの中から特に、此生產と消費との不比例又は不調和を揭げ出すことによりて、行き詰りを論證せんとする。またかの過剩なる人口の增加に着眼するところの立場もあり得る。これらをそれぞれ、消費過少說(一面からは過剩蓄積說とも名づける)、蓄積過少說(過剩人口說とも)と名づける。このほか、なほ次の如き立場をも考へ得る。資本蓄積、從ひて擴張再生產の進行は常に社會的生產に於ける均衡又は比例を必要とする。これは勿論各生產部門相互間の生產の釣合を意味するのみならず、また、生產と消費との釣合(これも進みて考ふれば享樂財の生產と勞働力の生產との釣合に外ならぬのであるが)をも含む。消費過少說は主として後者に着眼したるものである。然るに、かゝる均衡には比例の何れかをとり上げると云ふのではなく、社會的生產に伴ふすべての不均衡、すべての不比例の必然性を認むることによりて、蓄積の行詰りを論證せむとする立場があり得る。單に可能的なる立場としてのみ見るならば、これらの三のものはともに、所謂資本主義の純經濟的崩壞理論にまで仕上げられ得るであらう。然れども、これらのうち、かの擴張再生產の數式の吟味と云ふ道行を人てかゝる結論までに導かれたるものは、たゞ蓄積や過少說だけであると云ひ得る。グロスマンはまさしく此立場に數ふべきものである。

たゞ資本蓄積の行きつまり、擴張再生產の行きつまりと云ふことは二樣に解せられ得る。一は資本主義の純經濟的なる崩壞であり、他は經濟的なる矛盾、不均衡を緣として勃發すると想定せられてゐるところの「純經濟的ならざる」崩壞である。而して、狹義に於ける行きつまり、云はば經濟的なる行きつまりは前者を意味する、廣義に於ける行きつまり、云はゞ經濟外的なる作用をまつところの行きつまりは後者を意味する。後者の意味に於ける行きつまりを眼中に置く立場にありても、それぞれ商品の生產過剩を重く見るか、又は過剩の人口を重く見るか、或は各方面に於ける矛盾の再生產を重

く見るかによりて、それぞれ異なれる議論が構成せられ得るであらう。而して、純經濟的なる行きつまりにどれだけの重きを置くかと云ふことについては議論また區々なるを免れぬ。一方に於ては純經濟的崩壞を信じないのは社會主義の不可能性に理論的説明を與へてブルジョアの陣營に移行するもの(タアルハイマア)であると云ひ、他方に於ては、純經濟的崩壞を肯定するは一切の社會的努力を不用にするもの、すべての運動を無力にするものであると云ふ。私は後に、此點を再び取扱ひたいと思ふ。こゝに述べたかつたのは、純經濟的なる崩壞を否定する立場が決して必ずしも、蓄積の無限なる進行を信ずるものでないことである。

今までのべたるところは、資本蓄積に關する種々なる理論の平面的敍述乃至比較であつた。これから極めて手みじかに、これらの種々なる理論の展開の順序を述べようと思ふ。云ふまでもなく、これらの理論の展開の端緒をつくれるものはツガン・バラノフスキィの蓄積進行可能の理論である。これに對する論難にして私共の注目すべきは、ロオザ、ブハアリン、カウツキイなどのそれである。ツガンの見解に對して最も極端なる對立をなすものとしては、資本主義生産の絶對的なる、出發點からの行きつまりを説いたロオザの見解をあぐべきである。ロオザの見解は一方に於て數多の熱烈なる支持者を見出した。河上博士もかつては、その一人として數へらるべきであつた。シュテルンベルヒの帝國主義理論もロオザの蓄積理論の上に立脚してゐる。而もそれに對しては他方に於て、また數多の論難が與へられた。ブハアリンは少くも、ロオザの第三者の必要の批評として見る限り大體に於て首肯すべき議論を立ててゐる。オットオ・バウアアは更に進みて、資本の構成の變化するに拘はらず、資本の蓄積が如何なる條件の下に進行しうるかについて精細なる分析を加へた。かくて、ロオザに對して消極的なる批評を與ふるに係らず、積極的に反對の立場を裏づけうべき數式の展開を試みてゐる。最近に至りて、グロスマンは此バウアアの議論のたて方、數式の展開を、そのまゝに認めながら、それが究極に於ては、蓄積の行きつまり、純經濟的崩壞に導かざるを得ざる所以を論結した。然るに、このグロスマンの蓄積理論もヴァルガ及びオット

オ・ベネディクトの批評によりて幾多の難點をあばかれたと見られる。ベネディクトは批評から更に進みて、資本主義に於ける矛盾、不比例が如何なる事情の故に必然的であり、それに內在的のものであると認めらるべきかについて、詳細の議論を組みたててゐる。私は今これらの理論のすべてに亙りて、今一々吟味を加へるだけの餘裕を有しない。たゞ最近、學界注目の一焦點をなしてゐるグロスマンの蓄積理論に最も多くの文字を費したい。

蓄積理論の世界に於ける展開に附隨して、日本に於けるそれをつけ足して置きたい。福田博士がツガンによりて、資本蓄積の無限進行の可能を說かれたのに對して、河上博士はロオザに從ひて、資本蓄積の一般的不可能を論ぜられた。私は此一般的不可能論を成立し得ざるものとして論難した。後れて猪俣津南雄氏が特有の論法を以てロオザ、河上博士の主張を論駁せられた。河上博士はそののち、第三者なくては資本蓄積が一般的に不可能であると云ふロオザの主張をすてられたと思はれる。ロオザに對してあれほどに辛辣なる批評を加へたるブハアリンの蓄積の條件に關する代數的表現をそのまゝに採用せられてゐる點から、また、私共の批評に對しては、此點に關する限り、何等の論駁をも與へられぬ點から、さう考へざるを得ないのである。なほ河上博士はツガン說を駁するために、生產手段の生產增加は必然的に消費資料の生產增加を伴はざるを得ずと云ふことを以てせられた。私は、資本構成の變化する限り、此論駁は十分なる妥當性をもたぬと云ふことを以てした。然るに、河上博士は原料と勞働とを以て生產の行はるる資本主義生產の例によりて、私見を非難された。私は、河上博士の論據とせられたる機械なき資本主義は幽靈の資本主義であり、非資本主義である、それから得られた結論は人間の歷史に見らるる資本主義にあてはまらぬことを以て答へた(『改造』昭和四年一月號『價格と獨占』第八論)。河上博士からも又マルクス主義者の何人からも、これに對して何等の論駁をきくことを得ぬ。謂ふに、かつての福田河上兩博士の蓄積理論の對立は、大體ツガン對ロオザのそれである。歐羅巴の學界にありて、それは蓄積理論に於ける前期のことがらとも見得る。そののち、河上博士と私との間の論爭は蓄積の進行が必然に生產過剩を伴ふや否やに關する。私は

固定資本と生産物の割合を考の中心に掲ぐることによりて、この問題に答解を與へむとした。この點は歐羅巴の學界においても(私の狹き見聞の範圍から云へば)、考へぬかれてゐない。はじめて之を考へぬき、それに數式的展開を與へたる織戸學士のプリオリテエトは十分に認められなければならぬ。さて私は、此小論に於て、すべての蓄積理論の蓄積が如何なる意味を有するかを考察するのであるが、その道行として日本に於ける蓄積理論の現狀に論及しつゝ、河上博士の最近の蓄積理論を分析し、進みて、グロスマンを中心としたる海外の蓄積理論の展開を述べたいと思ふ。

三

河上博士の近業に於ける『資本家的生産の行詰り』の理論を見よう。擴大されゆく再生産に於て一定の條件の存する場合に、それが圓滑に營まるることが資本論第二卷に於ける數式を基礎として述べられる。しかし、その見解によれば『斯かる複雜な諸條件は無政府的な資本家社會に於て、もとより十分に維持されてゆく筈はないのであり、從つてそれら諸條件の何れかが破壞さるるにつれ、その度每に經濟界の混亂を招く……。』『しかし吾々はまだ、資本家的生産の必然的行詰りを生ずべき原因にぶつつかつてはゐない。』『以上の考察においては勞働の生産力の發展を捨象し、從つてこれをば一定不變だと假定してゐる』しかし『資本家的社會においては、非常なる速度をもつて勞働の生産力の發展が實現されつゝある。だから吾々は最後にさきに捨象しておいた勞働の生産力の問題を改めて考慮に入れなければならぬのであるが、しかし、それを考慮に入れるかぎり、資本家的な生産關係は到底かゝる生産力の發展と永久には兩立し得ざることが明白になつて來る。』

『けだし吾々が勞働の生産力の増加を考慮に入れ、從つてC(不變資本)とV(可變資本)との比を年々次第に小さくすると同時にVとU(餘剩價値)との比を年々次第に大にするかぎり、吾々はそれに伴うて、剩餘價値のうち資本家により不生産

的に消費される割合を次第に増大せしむるのでなければ、先きに掲げたる擴大再生産の表式における如き、各種生産部門の比例的關係を維持することができないのであるが、しかも剩餘價値のうち不生産的に消費される割合が次第に増加するといふことは、資本の蓄積が次第に行はれなくなることを意味するのであり、それは畢竟するに、資本家的生産それ自體の自殺を意味するに外ならぬのである。』『これを要するに、勞働の生産力の増進、從つてVの相對的減少（社會總資本のうち勞賃の支拂に充てらるべき可變資本の占むる割合）は必然的に、先きの表式における生産兩部門の比例的關係を破ることになる』（『經濟學大綱』三〇一――三〇二頁。）

『かくて要するに、吾々が勞働の生産力の増加を許すかぎり、それが不變であるといふ條件のもとに始めて維持されてゐるところの、先きの表式における各種生産部門の比例的關係は全く破れてしまふことになる。けだし、社會の總生産物は（C＋V＋M（生産のため消費されたる不變資本と可變資本との和に加ふるに、生産されたる剩餘價値を以てしたるもの）から成り立つてゐるが、もし勞働の生産力が増加するならば、それにつれてVすなはち可變資本に相當する部分のみが相對的には益ゝ減少することとなり、かくて社會的生産は年々より擴張されたる規程において行はるるに拘はらず、從つてまた生産せらるる消費資料の價値量は年々増加しゆくに拘はらず、社會成立の最大多數を占むる勞働者階級のこれら消費資料に對する需要は年々相對的の減少を示すこととなるからである。もちろん、資本家階級の消費力は絶對的にも相對的にも増加する。けれども資本家階級のかゝる消費力の増進に問題の解決を求めんとするならば、吾々は、資本の蓄積に伴ふ困難を資本の蓄積そのものの抑制によつて解決せんとするの自家撞着に陷る』（『マルクス主義經濟學』一七六――一七七頁）。

河上博士の蓄積理論の要領は次の諸點につきる。(1)蓄積の進行しうるための條件は生産力の増加する以上（換言すれば資本の有機的構成が變化する以上）、存立し得ない。換言すれば、生産力の増加が必然である以上、行きつまりも必然である。(2)その理由。資本の蓄積生産の擴張あれば消費資料の價値量はそれに比例して、（――此文句は河上博士の所論にはない。

併しこれは別に數式的の展開を缺いてゐる博士の立場から云へば必然に背後に前提とせられてゐる。これが前提せられてゐなければ河上博士の論證は意味をもち得ないもの、理論のないものになるから)増加する。然るに可變資本は相對的には減少する。故に、消費資料の生産過剩消費過少が生ぜざるを得ぬ。(3)此生産過剩は資本家の消費増加によりて救はれない、それは資本家的生産自體の自殺を意味する。

河上博士の資本蓄積行詰り論は、當然その經濟學の眼目であると思ふ。資本主義社會の運動法則は考察の對象であり、その運動法則の骨子は資本主義社會の崩壞であり、資本主義社會の崩壞はその蓄積行きつまり理論によりて基礎づけられてゐる。然るに此行詰り必然の理論は「生産擴張はそれに比例する消費資料の生産増加を伴ふ」と云ふ前提の上に立つてゐる。生産力の増加につれて、可變資本、從ひて消費資料の（勞働者側からの）需要は相對的に減少する（これが絶對的にみては増加することとマルクス自身の明に認めたるところである）。然らば、かの前提からして當然に、消費過少が論斷せられうる。然れども、生産の擴張はそれに比例する消費資料の生産増加を伴ふと云ふ前提は許され得るや。生産力の増加そのことがある限り（消費資料の相對的減少をもたらしたるその生産力の増加がある限り）、この前提は成立し得ない。

なるほど生産力が増加せず、生産方法に變化なきものとすれば（資本の構成が變化せずとすれば）、生産擴張に伴ひて消費資料の生産が増加する。然れども生産力が増加する限り、生産方法の變化は一般に、年々に生産せらるる消費資料の一定量に對して、之を生産するに必要なるところの生産手段の量をして益ゝ多からしめる。從ひて必要に應ずるためには、假に消費資料の生産額を一定なるものとしても、益々多くの生産手段が生産せられなければならぬ。消耗せられて消費資料の上に移轉する部分は依然として同一であるにもせよ、使用せらるべき生産手段そのものが漸次増加せられ蓄積せられなければならぬ。此生産手段の増加の必要程度は一に生産方法、更に立入りて云へば生産技術の状態によりて定まる。かかるが故に、此生産方法の變更がどこまでも此必要を加へてゆくならば、消費資料の増加せざるに拘はらず、生産手段の生

產擴張はどこまでも進行し得なければならぬ』『價格と獨占』二六〇頁。河上博士の根本的なる論據はかくて成立し得ざるものである。生產力の增加する限り、生產擴張は消費資料の比例的なる增加を伴はざるをうるのみならず、消費資料の何等の增加をすら伴はざることを得る。然るに事實に於て、可變資本、從ひて勞働者の消費資料要素は絕對的には增加する。消費の過少資本蓄積の行きつまりが如何にして論證し得らるるか。私は、河上博士の蓄積理論に存する誤謬を幾たびか指摘してゐる。然るに河上博士は私の根本的なる論據について何等の論駁を加ふることなく、依然として、支持しがたき斷定をしばしばくりかへされてゐる。博士は論壇の寂寥を歎ずる前に、理論的負債を辨濟せらるべきではなからうか、それとも、豎子遂に教ふべからずとせらるるのであるか。

マルクスの擴張再生產の數式にあらはれたる不變資本Cは、たゞ消耗せられたる不變資本である、この外に使用せらるるに止るところの不變資本のあまたがある。これは河上博士のくりかへし說明せられたるところ、而して自明のことがらである。然るに拘はらず、一たび資本蓄積の理論を取扱ふに至るや、この使用不變資本卽ち固定資本の存在がどれだけの使用乃至影響をもつかについて全く眼をふさいでゐられる。それであればこそ、生產擴張は必然的に、消費資料の增加を伴ふと云ふ命題を自明のことのごとくに取扱はれてゐる。此點に於て、たとへばブハアリンも、カウツキも、河上博士をさることあまり遠くはない。しかし私を以て見れば、これらの人々の見解はすべてこの點に於て誤つてゐる。

四

資本蓄積が經濟的に行きつまることなくして進行し得るや否やは、一方に於て社會的生產に於ける比例の維持の可能なりやと云ふこと、他方に於ては過剩の人口がますます增加せずやと云ふこと（若くは人口が過剩ならざるやと云ふこと、——この差異は資本主義社會の人口法則の見方の差異から來る）に依存する。このほか、利潤率の遞降の傾向を重視して、

この遲降が蓄積の行きつまりに對して重要なる役目を營むものと見る立場にたつものも少しとしなかつたが、利潤率の遲降があるにしても、資本の増大のために、餘剩價値の總額は絕對的には增加すること、資本の蓄積も增大しうることの認識がかゝる立場そのものの力を弱めてゐる。從ひて、こゝにはそれに論及せずに置かうと思ふ。

社會的生產に於て維持せらるべき比例と云ふことが前述の如く二のものを意味する。一は各生產部門間の釣合、云はゞ消費財生產に必要なる、又生產財の生產に必要なるだけの生產財が生產財生產部門に於て生產せらるること、二は生產と消費との釣合、即ち可變資本と餘剩價値の蓄積せられざる部分(資本家の消費部分)との和だけが消費財生產部門に於て生產せらるることである。然るにマルクスの擴張再生產の數式にありては、此二の比例が十分に維持せられてゐる、而もそれは生產力の增加をぬきにしたるが故である。生產力の增加、從ひて資本構成の變化を併せて考ふる限り此比例が、維持せられがたい。必然的に蓄積の行きつまりが生ずる。此見解がたとへば河上博士にありては、生產の擴張が消費財の比例的增加を伴ふこと、而も同時に、消費財の需要は相對的に減少することの二の前提の結びつきから論證しようとせられてゐる。若し自らかゝる論證を企てずと云はれるならば、そこには何等の論證もないわけになる。ロオザにありては、それが新なる數式の展開によりて主張せられてゐる。しかし、ロオザのこの數式はある許しがたき假定に立つ、此假定をとり去るに於ては、ロオザの主張が成立せぬ。このことをオットオ・バウアァの數式が示さんとしてゐる。なるほど、バウアァの數式は資本構成の變化があるに拘はらず、比例の維持せられてゆくことを示してゐる。然れども、バウアァは別に人口五パアセントの增加と云ふ假定を立ててゐる。この假定に應じて可變資本の增加が五パアセントづゝの速度を以つて行はれねばならぬ。グロスマンはバウアァの前提を前提としてとり上げ、その數式を肯定しながら人口の增加と可變資本の增加との一致しない點から(表面に於てはさう云ふ文句になつてゐないが)破綻を導き出さむとしてゐる。そこで、こゝにはまづ資本構成の變化から比例の必然的に破れると云ふ見方が如何にして斥けらるるかを考へる。これはグロスマンの見方に

進み得る一の前置きである。

ロオザにありては、一本資本構成の變化卽ち生產力の增加が前提とせらるゝのみならず、消費財の生產、生產財の生產部門を通じて蓄積率が同一であり、且つ一の部門から他の部門に蓄積資本の移動することがない。これらの前提の上にたつならば、つねに消費財の過剩生產があくまで必然的であること、從ひて比例の破壞のさけがたきことを論結することが出來る。ロオザの數式にありて、消費財の生產過剩を示す爲に、兩部門を通じて常に餘剩價値の$\frac{1}{2}$が蓄積せられ、蓄積せられたる部分はCとVとの振分(Vの全資本に對する割合)、$\frac{1}{6}$(第二年度)、$\frac{1}{7}$(第三年度)…と變化することによりて、資本全體の構成が變化せられてゐると共に、その部門に於てのみ投下せられてゐる。

マルクスにありては、蓄積率兩部門を通じて$\frac{1}{2}$(第一年度二八五のうち一八四)蓄積せられたる部門に於て投下せらると云ふこの前提が與へられたにも拘らず資本構成の變化せざるが故に、比例は維持せられうる。

第一年 $\begin{cases} \text{I} & 5000c+1000v+1000m=7000. \\ \text{II} & 1430c+285v+285m=2000. \end{cases}$ (生產手段) (消費資料)

第二年 $\begin{cases} \text{I} & 5417c+1083v+1083m=7583. \\ \text{II} & 1583c+316v+316m=2215. \end{cases}$

第三年 $\begin{cases} \text{I} & 5869c+1173v+1173m=8215. \\ \text{II} & 1715c+342v+342m=2399. \end{cases}$

(Kapital II. S. 491)

ロオザにありて新に資本構成の變化と云ふ前提を加ふると共に、蓄積せられたる部門への投下と云ふ條件を固執することによりて、次の如き消費過少を示してゐる。

第一年 $\begin{cases} \text{I} & 5000c+1000v+1000m=7000. \\ \text{II} & 1430c+285v+285m=2000. \end{cases}$

第二年 $\begin{cases} \text{I} & 5428\frac{4}{7}c+1071\frac{3}{7}v+1183m=7583. \\ \text{II} & 1587\frac{5}{7}c=311\frac{2}{7}v+316m=2215. \end{cases}$

第三年 $\begin{cases} \text{I} & 5903c+1139v+1173m=8215. \\ \text{II} & 1726c+331v+342m=2399. \end{cases}$

生產財の不足についてはしばらく說かぬ。消費財の過剩が第二年度に一六、第三年度に四五にのぼる。然れども、此生產過剩の成立したる前提は三ある。(1)資本構成の變化、(2)蓄積率の二部門を通じての均等、(3)二部門の資本移動の否認(蓄積せられたる部門への投下)。第一の前提は此場合、問題とせらるることが出來ぬ。資本構成の變化は動かしがたき事實であるから。(2)(3)の前提の何れかがすてらるる場合にはもはや消費財の過剩が必然ではなくなる。

まづ、エックシュタインによりて、所謂均等蓄積の法則が問題とせられてゐる。其見解によれば、兩部門を通じてたとへば餘剩價値の二分の一が蓄積せらるると云ふやうに、均等なる蓄積率があると云ふのは、任意の假定である。加之如何なる部門にありても蓄積は資本がどれ丈有利に投下せらるるかと云ふ見込によりて支配せられる。而して此見込がすべての分枝を通じて一樣であるとは云へぬ。利潤率均等の法則にして支配する以上、均等の蓄積と云ふことはあり得ないはずである。オットオ・ベネディクトは此點に關して、第二部門(消費財產業の部門)に於ける方、蓄積率は小であるはずであると云ふ。資本構成に於て第一部門(生產財產業の部門)の方が高級である。即ち可變資本が割合に大である。そこで第二部門に於ける方、利潤率も高からう。加之、資本の構成の變化、その增加の速度は第一部門に大であらう、從ひて蓄積率は當然第二部門に於て小ならざるを得ない。さてこのベネディクトの主張にもまた吟味すべき點はある。併し、ロオザの如く、蓄積率の均等を論證しうべき論據は何物もないと思はれる、而して此均等蓄積の假定が取り去られると、ロオザの結論はすでに支柱を失ふ、云はば必然をもたぬものとなる。

併しながら、此均等蓄積の假定を許すにしても、第二部門に蓄積せられたるものを第一部門にうつし得るならば、云はば蓄積資本の移動を許すならば、また、消費財過剩の必然性が取り去られる。此道行によりて資本蓄積が一定の條件の下に於てならば故障なく進行し得ることを主張するのが、オットオ・バウァの蓄積理論である。(これについては『社會科學』第三卷第二〇號、向坂逸郎氏譯『資本の蓄積と帝國主義』參照)。

五

バウァアにありてはまづ次の如き假定が設けられてゐる。

(1)資本の構成の變化卽ち生産力の增加。年々の不變資本の蓄積二十パアセント、可變資本の蓄積を五パアセントとすることによつて、資本構成が變化してゆく。

(2)蓄積率は生産財の生産、消費財の生産、兩部門を通じて均等である。但し蓄積率そのものは第一年二五パアセント、第二年二六パアセントと云ふふうに少しづつ增加してゆく。

(3)第二部門に於て蓄積せられたる部分のいくらかは第一部門にうつされる。

(4)餘剩價値率を不變とする、その大さは一〇〇パアセント。但しこの不變性の假定は取り去らるるともその結論には關係せぬと思ふが、今それに說き及ばぬ。

(5)年々の人口の增加、五パアセントに應じ可變資本の增加がある。

今第一年度に於ける各部門の資本構成及び生産物を次の如きものとする。

$$\text{第一年度}\begin{cases}\text{I} & \overset{c}{120000}+\overset{v}{50000}+\overset{m}{50000}=220000\\ \text{II} & 80000+50000+50000=180000\end{cases}$$

可變資本の五パアセント卽ち二五〇〇だけが各部門に於て蓄積せられる。不變資本が總計に於て二〇〇〇〇〇、その一〇パアセントが蓄積せらるるから、これが大さ二〇〇〇〇、これだけの數量が兩部門に於て、而して均等に蓄積せらるるものとすれば、第一部門に於て一〇〇〇〇、第二部門に於て一〇〇〇〇、各部門とも蓄積部分が不變資本に於て一〇〇〇〇、可變資本に於て二五〇〇であるから、餘剩價値中の資本家の消費部分は 50000－(10000＋2500)＝37500 である。かくて

若し蓄積せられたる部門に於てのみ投下せらるるものとすれば第二年度の生産物は次の如きものとならざるを得ぬ。

(資本移動なき場合)

第二年度		c		v		m		
	I	130000	+	52500	+	52500	=	235000
	II	90000	+	52500	+	52500	=	195000

併しながら前述の如く、兩部門に同様なる蓄積率があり、而も蓄積部分は蓄積せられたる部門にのみ投下せらるるとする。兩部門の資本の割合は一樣であつて、而も資本の構成が變化するとすれば、當然に、消費財の生産が過剰となり。生産財の生産が過少となる。

前掲の表に就いて見よう。生産手段の需要(必要部分)は二二〇〇〇〇だけの消耗部分をとりかへるばかりではない、更にその一〇パアセントが追加せられればならぬ。合計二四二〇〇〇だけが必要である。然るに生産額は二三五〇〇〇だけ、七〇〇〇の生産不足がある。消費財について見る。第二年度の可變資本が合計一〇五〇〇〇各部門の餘剩價値五二五〇〇のうちから、蓄積せらるるもの、可變資本に於て五二五〇〇の五パアセント、卽ち二六二五、不變資本に於て二二〇〇〇〇の一〇パアセントのその半分卽ち一一〇〇〇、これだけを差引ける殘餘は資本家の消費部分に外ならぬ。その大さは次の式の示す如く三八八七五である。$52500-11000-2625=38875$. 第二年度に生産せらるる消費財の需要はかくて、可變資本の一〇五〇〇〇、資本家消費部分が七七七五〇(三八八七五の二倍)翌年の追加可變資本として五二五〇(二六二五の二倍)、合計一八〇〇〇〇である。然るに前の數式に於ける消費財の生産は一九五〇〇〇であり七〇〇〇の生産過剩がある。

兩部門に於ける過不足がないやうにする爲には、第二部門に於て蓄積せられたる部分のうちから割いて、これを第一部門に移さねばならぬ。『資本のより高度なる有機的構成への進歩は資本の消費財産業から生産財産業への移動を必要とする。』故に消費財産に於て蓄積せられたる餘剰價値の如何なる部分が生産財産業に移され、その擴張のために使用しなければならぬかを計算することが必要である。』此計算の結果、第二年度に於ける各部門の不變資本、可變資本、總生產物の大さは次の如きものとなる。

	生產財產業 I	消費財產業 II	總生產物
不變資本(c)	134666	85334	220000
可變資本(v)	53667	51333	105000
消費せらるる餘剩價値(k)	39740	38010	77750
蓄積せらるる餘剩價値 不變資本への追加(α)	11244	10756	22000
蓄積せらるる餘剩價値 可變資本への追加(β)	2683	2567	5250
計	242000	188000	430000

この計算の仕方。第二年度の消費財產業の生產物價値は一八八〇〇〇である。$c+v+m=188000$. 然るに m は v に等しい $c+2v=188000$. 他方に於て、第二部門に於て初年度新に蓄積されたる不變資本(α)可變資本(β)の割合に應じて(一〇〇〇〇對二五〇〇の割合に應じて)、第二年度に於ける第二部門の不變資本可變資本の增加$(c-80000)$と$(v-50000)$とが振分けられるとする。$(c-80000):(v-50000)=10000:2500$. 此二の方程式から $v=51333$. $c=85334$ を得る。第一部門の資本構成生產物の大きもこれから容易にしられ得る。第二年度以下についても同樣なる計算を行ふことが出來る。

資本の移動の行はるる場合

		c + v + m
第二年度	I	134666+53667+53667=242000.
	II	85334+51333+51333=188000.
第三年度	I	151048+57576+67576=266200.
	II	90952+52674+52674=196300.

さて、バウアの數式によれば、前述の如く、兩部門の蓄積率が均等であるに拘はらず、第二部門の資本を第一部門にうつすことによりて、消費財の過剩がさけられてゐる。かくして、生產と消費との不釣合が取り去られる仕組になつてゐる。第一部門の生產物が擴張の爲にすべて需要せられて過不足なく、從ひて生產相互間の釣合の保たるる仕組も亦そこにある。たゞ、これから問題の生じうるのは、年々五パアセントの人口增加に對して十分なる蓄積の行はれうるやと云ふことであ

る。換言すればもはやそこに消費不足の問題は起り得なくなつてゐる、殘されたる問題は人口過剩のそれである。

バウアァの數式については種々なる異論があらう。まづ、ロオザの云ふが如く、一定の人口の增加率の假定について問題がある。これについては後に論及する。ロオザはまた、第二部門から第一部門への資本の移動について、財の內容の上に障碍の存すること、例へば賣れ行かぬゴム靴(第二門部の生產物)を以て新しき機械工場をたてることが出來ぬことを以てしてゐる、併しながら此主張の成立せぬこと、各部門の生產物相互の交換について打ち克ちがたき困難の存せざることは、既に認められてゐる、こゝに論及しない。ただ、數式の基礎について次の如き反對を加ふるものがある(たとへばベネディクト)。部門の資本家は第一年に、不變資本に於て一〇〇〇〇、可變資本に於て二五〇〇だけを蓄積しようと、如何にして決心したか。バウアァによれば、社會の全資本の構成がそれを必要とするによつて。然れども各部門の資本家の蓄積部分の振分は自己の部門の新しき資本構成に從つてするのではないか。その新しき技術に應じてたとへば一應、第一部門に、一三〇〇〇〇(C)對五二五〇〇(V)の構成をもつに至れるものが如何にして一三四六六六(C)對五三六六七(V)の構成をもつに至るのか。この非難は些々たる事柄である樣に見える。自己の部門の技術に應じて蓄積部分の振分を定めると云ふことが何の必然性をもたぬ考のやうに思はれる。なほ次に、第二部門から第一部門への資本の移動が如何なる事情によりて促されるか、第二部門こそかへつて利潤多き部門ではないかと云ふ批評がある。(ベネディクト)生產物の過剩の見込まるる部分が利潤多いとは如何にして云ひうるか。第二部門の生產過剩に拘はらず、利潤の多いことが如何にして論證せらるるか。生產物過剩によりて第一部門へ蓄積資本が流れると云ふのはすでに第二部門の恐慌を意味せずやと云ふ、それが豫知によりて資本の有利なる部門にうつることが如何にして恐慌を意味するか。

バウアァの數式の意味は、ただ資本蓄積の進行しうる條件と限界とを見定めようとする役目をもつのではないか「孤立せる資本主義社會に於ても資本の蓄積はそれがその時々定められた限界をこえさへしなければ、可能である。」又「蓄積は資

本主義的生産方法自體の機構によつてかくの如き限界に自動的にひきかへされる。從ひて、如何なる現實の動機と過程とによりて蓄積率と蓄積資本の各部分への振分けが行はるるかは、此場合取扱ふことを要せざる問題であると思はれる。それはマルクスの擴張的生産の數式に於てもさうであつたやうに。例へば第一部門の擴張の程度に應じて第二部門の蓄積率が決定せられてゐる、而も現實の如何なる動機打算によるかは說明しようとせられてゐない。バウアァにありても、此數式の示すところと、資本蓄積の現狀が一致せざる場合には云はゞ過剩蓄積過少蓄積の場合には自ら一定の過程によりてある蓄積がその限度までに引きもどさるる傾向あることを主張の眼目としてゐる。

私の立場から云へば、固定資本部分が新に考慮の中にとり入れらるることを要する。而してこれがとり入れらるるときには生産財の生産は更につよく擴張せらるることを要し、バウアァの數式は書き改められて、著しき生産不足を示すものとなる。卽ち、五パアセントの人口增加に應ずるだけの消費財の生産を行ひ、而も、數式の示すが如き資本構成の變化に應じ、その上、固定資本の新設をなしとげるのは、生産力が著しく不足することとなる。この點、今立入りて論じない。ただ、資本の有機的構成の變化あるところ、過剩生産が必然的であると云ふ概括的なる斷定はあまりに素朴にして、そのままは理論的分析に値せざるものである。

六

グロスマンの理論の組立は一應バウアァの數式を認むることから出發してゐる。バウアァの數式は消費財生産の過剩を取除き、生産擴張を人々の增加と平行せしめむとしてゐる。然れども、グロスマンは、此蓄積の無限進行を肯定するかに見ゆる數式の背後に蓄積の行詰り、資本主義破綻の經濟的必然性を認める。

バウアァの數式は僅に四年だけ進行せしめられてゐる。けれども、更に長き年數によりて之を進行せしめよ。必ずそこ

に蓄積の不足する、而して餘剩價値の不足するところに到達する。年々可變資本は僅に五パアセントづゝ增加する。而して餘剩價値を一〇〇パアセントとすれば此可變資本に等しき額だけの餘剩價値があるわけである。假にその全部が蓄積せらるゝにしても、資本の構成が變化する以上、五パアセントづゝ增加する可變資本に組合せらるべき不變資本がその中からたへず、まかなはなければならぬ。資本の構成が高級のものとなるうちに、早晩蓄積部分は不足をつげる、資本家の消費部分は消滅しようとする。玆に行きつまらざるを得ぬ。グロスマンのこの行きつまりの見方は、私から見れば「增加しゆく人々に應ずるだけの蓄積が行はれ得ぬ、資本家といへども衣食をやめまい、その殘部の餘剩價値を蓄積する、而も、增加人口に應ずる可變資本がない、」から解すべきものであると思ふ。かう解釋すれば結局過剩人口による資本主義行詰り論である。バウアアの數式が一應前提とされてゐる限りに於ては(勿論グロスマンにとりては前提としてバウアアの數式をとることが一の偶然ではあらうが)、永續的なる消費の過少は問題となつてゐない。尤もグロスマン自身はこの行詰りを示すのに、過剩蓄積の結果の價値增殖の不可能といつてゐる、餘剩價値率が資本蓄積の結果として低下する、人口增加に應ずる資本を新に蓄積し得ないと云ふ點に眼をつけたのである。表現の仕方は何れでもいゝと思ふ。私は私の表現をつゞけて行かう。

グロスマンに於けるバウアア數式の進行をあとづけて見る。但し、α_k は餘剩價値の消費部分。α_c は不變資本の蓄積、α_v は可變資本の蓄積。

(バウアア)

	年度	c	v	k	α_c	α_v	年生産物價値	餘剩價値消費率	蓄積率
1.	I	120000 +	50000 +	37500 +	10000 +	2500 =	220000	75%	25%
	II	80000 +	50000 +	37500 +	10000 +	2500 =	180000	75%	25%
		200000 +	100000 +	75000 +	20000 +	5000 =	400000	75%	25%
2.	I	134666 +	53667 +	39740 +	11244 +	2683 =	242000	74.05%	25.95%
	II	85334 +	51333 +	38010 +	10756 +	2567 =	188000	74.05%	25.95%
		220000 +	105000 +	77750 +	22000 +	5250 =	430000	74.05%	25.95%

3.	I	151048 +	57576 +	42070 +	12638 +	2868 =	266200	73,04%	26,96%
	II	90952 +	52674 +	38469 +	11562 +	2643 =	196300	73,04%	26,96%
		242000 +	110250 +	80539 +	24200 +	5511 =	462500	73,04%	26,96%
4.	I	169124 +	61978 +	44465 +	14186 +	3087 =	292600	72,02%	27,98%
	II	96876 +	54024 +	38909 +	12414 +	2701 =	204924	72,02%	27,98%
		266000 +	115762 +	83374 +	26600 +	5988 =	497524	72,02%	27,98%
5.		292600 +	121500 +	86213 +	29260 +	6077 =	535700	70,93%	29,07%
6. (グロスマン)		321860 +	127627 +	89060 +	32186 +	6381 =	577115	69,70%	30,30%
……									
34.		4641489 +	500304 +	11141 +	464148 +	25015 =	5642097	0,45%	99,55%
35.		510537 +	525319 +	φ	+ 510563 +	14756 =	6156275	φ	104,61%

即ちバウアアの數式を展開せしめてゆくと、三年四年は何の故障もなくゆくやうであるが、第三十五年度に於て破綻が來る、資本はのまず食はずでゐても、もはや、増加してゆく人口に應ずるだけの資本を蓄積することが出來ない。併しこの事態は少しく考へれば容易に分ることであると云ふ。

グロスマンの考はかうである。人口は年々五パアセントだけ増加する。餘剩價値も年々五パアセントだけ増加する。しかしこれから、年々それ以上のものをひき出さなければならなくなる。勞銀の増加五パアセント卽ちそれだけがそれから取り出されねばならぬ。その上、人口よりも速に増加するところの（人口は五パアセントの増加であるがこれは一〇パアセントの増加である）追加不變資本a_cもとり出されねばならぬ。結局餘剩價値が不足すること、ならざるを得ぬ。結局餘剩價値を一の貯水池にたとへうる、そこには不斷に五パアセントだけの流入がある。しかし同時に五パアセント以上の流出がある。一時はそれでもよい。間もなく貯水池は涸れてしまふ。若し、貯水量が大であれば、此涸れる時期がすぐには來ないにしても、早晩やつて來る。

これを一定の數字をつかふ算術式ではなく、代數式を以て表はしてみる。

c を不變資本とする。はじめの卽ち初年度の不變資本を c_0 J年だけのちの不變資本を c_j とする。

v を可變資本とする。「v_0 v_j」の意義、前のに準ずる。m を餘剩價値とする。a_c は不變資本の、a_v は可變資本の增加率とする。k は資本家の消費部分。M は餘剩價値の總量したがつて、$M=k+\frac{a_c c}{100}+\frac{a_v v}{100}$

Ω は資本の有機的構成卽ち c/v、J は年數。$r=1+\frac{a_c}{100}$　$s=1+\frac{a_v}{100}$

j 年ののち、不變資本 c は a_c の增加率を以てすれば（グロスマンは a_c を蓄積率として表はしてゐる。しかし蓄積率は αm、βm であつて、こゝに云ふ a_c ではない。それで a_c を增加率として表はす。而もそれはまことの率ではない、百分率の分子の數と思はれる。要するに、グロスマンの表現は甚だ不精確である）、次の如くに表はされる。$c_j=c_0 r^j$

同樣にして、j 年ののちの可變資本は次の如くである。$v_j=v_0 s^j$

$j+1$ 年度に於ける餘剩價値は次の式を以て示されよう。$M=k+\frac{c_0 r^j a_c}{100}+\frac{v_0 s^j a_v}{100}=\frac{m v_0 s^j}{100}$

かくて　$k=\frac{v_0 s^j}{100}(m-a_v)-\frac{c_0 r^j a_c}{100}$

k が 0 よりも大である爲には次の如き關係あるを要する。$\frac{v_0 s^j}{100}(m-a_v)>\frac{c_0 r^j a_c}{100}$

n 年度に於て k 卽ち資本家消費部分が 0 である爲には次の關係を要する。$\frac{v_0 s^n}{100}(m-a_v)=\frac{c_0 r^n a_c}{100}$

かくて、資本家消費部分の消滅する年度 n は次の如くにして算出せられる。$\left(\frac{r}{s}\right)^n=\frac{v_0(m-a_v)}{c_0 a_c}$．$n=\frac{\log\left(\frac{v_0(m-a_v)}{c_0 a_c}\right)}{\log\left(\frac{100+a_c}{100+a_v}\right)}$

資本の有機的構成が高く、又不變資本の增加率 a_c が大に、又可變資本の增加率 a_v が小に、餘剩價値率 m が小なるほど、n は小である云はゞ行きつまりが早く來る。從ひてたとへば不變資本の增加率 a_c がそれ自體小となり、勞働力の價値低下して a_v が小となり、又不變資本の低價により間接に a_c が小となるが如きことあれば、n は大となる、卽ち行きつまりが先にのばされる（Grossmann, Akkumulations-u. Zusammenbruchsgesetz, 1929. S.180 ff）。

グロスマンの資本蓄積の行きつまりの論證についてはなほ說明を必要とする點もあまたのこされてあるけれども、茲にはそれらの點に說き及ばぬ。グロスマンはこれを以て、完全にツガン、バウアア、ヒルフアデイングなどの所謂新調和論者の所說を打破し得たりと信ずる。併しその論證がどこまで成功してゐるかは更に吟味を要すると思ふ。

グロスマンによれば、此破綻が資本家消費部分の消滅から來ると云ふ、此考方の肯定しがたいことは、今までの批評家(ヴアルガ、ベネディクト)の力說したるところであるから、それに立入らぬ。とにかく、增加しゆく人口に應じて可變資本(これに伴ひて不變資本をも)を增加するだけの餘剩價値がないと云ふことが其行詰りの眞相をなしてゐる。而もこれが爲には少くも次の二の前提が設けられてゐる。人口の增加が年々五パアセント、而して、資本請求の變化は不變資本の增加一〇パアセント、可變資本の增加五パアセントと云ふ割合に於て行はれる。而もこの前提はどこまで實現の可能性を有するか。

第一　人口の增加五パアセントと云ふが如きは今日の資本主義國を通じてみるとき、架空の數字である、事實の數は大體に於て一パアセントをあまりに上らない。しかしこれはたいした問題でもない。たゞ人口の增加そのことは資本の蓄積に依存することがらであり、從ひて、不斷に五パアセントの增加をつゞけると云ふが如きことはあり得ない(この點ロオザ、ヴアルガの批評を見よ)。而して此點は私がくりかへし論じたるところである。蓄積のすでに十分に行はれたるところほど人口增加の速度は小である(『人口と貧乏』參照)、ロオザが蓄積の速なるほど人口增加の速度は遲いと云ふ表現には不精確なるものがあると思ふけれども(『社會學的研究』收錄「貧富と出生率」參照)、考方の方針に於て誤つてはゐない。人口增加の速度が資本蓄積の結果としてゆるくなるものとすれば、グロスマンの結論は容易にひき出し得られなくなる。第二。不變資本の增加一〇パアセント、可變資本のそれ五パセントと云ふ一定の步調を以て、資本構成の變化の實現せらる、ことが前提せられてゐる。然れどもこれも甚だしく任意の假定であると云ひ得る。資本構成の變化がその高級となるにつれて困

難さを加ふるであらうことは別に述べた。それよりも大事なることは、資本の蓄積が獨占に導くことである。獨占が技術の進歩を阻止し、資本の構成を停滯的ならしむることは既に一般に認められたるところである。私が資本主義に於ける獨占の決る中間期間のむしろ長くなること、その變化の徐々となることを說けるに對して、グロスマンは資本構成の變化せざして完全なるものではなく、外部者の競爭が潛在してゐること、技術の變化が國內的顧慮によりてのみ行はれず、國際的競爭能力の爲にも行はるゝことを述べてゐるが、私の主張はそれによりてやぶれるとも思はぬ。獨占が進行するだけ、外部者の競爭の可能はへる、又國際的獨占がいよいよ進めば、結局、技術の變化が此獨占によりて左右せらるゝこと、なるのではないか。とにかく、グロスマンの第二の假定もまた、資本の蓄積の進行そのことによりて愈々とり去らるゝ傾向がある。なほ、餘剩價値率の一定と云ふことについても異論をとなふるものがあらう。これらすべての點を考ふるときには、その蓄積の行きつまりの理論は殆どその支柱を失ふと見ざるを得ぬ。

グロスマンの見解についてはその他なほあまたの論難が加へ得らるゝであらう。たゞその中、恐慌のみについて。恐慌はグロスマンによれば、かの蓄積過少（これは私の用語である、マルクス的立場自體の言葉をかれば蓄積過剩である。利潤率遞降可變資本の一定率に於ける增加に對して蓄積せらるべき餘剩價値の不足は共に加速的蓄積そのものを意味するに外ならぬ）の結果として生ずる。蓄積せられたる資本が可變資本不足の結果十分に利用せられざるに至る、此行つまりを打開する調節過程又は轉換過程として恐慌がある。此調節が何を意味するかは、こゝに說明することをさける。しかし恐慌にしてかゝる意味のものならば、それは資本の蓄積可なりに進行したる場合に於てのみ生ずることではないか、然るに、事實に於て同期的恐慌はすでに十九世紀のはじめから成立してゐる。加之、恐慌がグロスマンの云ふが如き性質のものであるならば、資本の蓄積の極めて進める國と遲れたる國とに一樣なる恐慌の波浪の襲來すると云ふことが如何にしてあり得るか。グロスマンの恐慌に關する見方がマルクスのそれから可なり距つてゐることについては、私の立場からは別に立入つて論ずる必要もな

いと思ふ。

グロスマンに於て主張せられてゐる純經濟行詰りの根本的性質に關しては後節に於て論及したい。グロスマンに對する今までの批評については、私の特有の見方とも云ふべきものも殆どない。私の述べたるところはベネディクト、ヴアルガの詳細なる批評の範圍を出でてゐない。

七

グロスマンの蓄積理論が資本主義の行きつまりを論證すること能はざることは前述の如くである。一體マルクスの蓄積理論に於てはたゞ一の原因、たゞ一の矛盾のみが例へば資本主義の崩壞と云ふ事象の說明の爲に取り出されるのではない。資本主義的擴張再生產は同時にその內部にはたらいてゐる矛盾の、衝突の擴張再生產であり、これらの增大しゆく矛盾が結局に於て資本主義そのものを破綻にまで導く。此意味に於てヴアルガはバウアア、ヒルファディングの如く僅に第一部門第二部門間の釣合だけによりて恐慌なき進行の可能なりと見る見方を斥けてゐる。かゝる立場から見て、擴張再生產の數式を以てする考察のうち、ベネディクトのそれが特殊の意義をもつ。勿論ベネディクトの考察とても、資本主義生產の內部に存する矛盾を掲げつくすことは出來ぬ。たゞ生產部門を三大別（消費財生產を勞働者の消費財、資本家の消費財の二に分つ）したる場合に於てすら、生產の圓滑に行はるゝために必要とせらるゝ各方面の調和又は釣合の如何に實現せられがたきものであるかを明にする。

たゞこゝには、ベネディクトの煩瑣なる數式を引用することを避けよう。たゞその立論の仕方の輪廓を述べるに止める。

三の生產部門にはそれぞれ特有なる資本の構成がある、而してこの構成は技術の進むに從ひて變化してゆく。各部門にはそれぞれ特有なる蓄積率がある。此蓄積せられたる資本がそれぞれ蓄積せられたるもとの部門に投下せられる。此場合

蓄積が順調に進行してゆくためには、例へば生産財産業の資本の大さの一つだけをとりでても、他の種々なる經濟的なる大さ(これは數學派の表現をかる)と釣合を保たねばならぬ。それは第一、消費財産業、資本家の消費財産業の不變資本及び蓄積部分と釣合を保たねばならぬのみならず、生産財産業自體に於ける蓄積部分とも釣合を保たねばならぬ。而も、この釣合が保たれうる爲には、各産業部門に於ける次年度の資本構成の與へられてゐることを要する。何となれば、蓄積部分のうち、どれだけが不變資本にあてられ、從ひて今年度に生産せらるゝ生産財の需要となりてあらはるゝかは、すべて來るべき年度に於ける資本構成に基いて決定せらるゝことであるから。その他如何なる經濟的大さ(例へばある部門の可變資本の大さ、蓄積率の大さと云ふが如き)をとつてみるにしても、かほどに多くの他の事象と複雜なる釣合を保つことを要する。從ひて、各部門に於ける生産と蓄積とが順調に進みゆく爲には、どれだけか複雜なる性質の釣合の存することを必要とする。而してかゝる釣合の實現せらるゝ可能性と云ふものは極度までに小なるものである。かゝる複雜なる機構は必然的に蓄積の進行上に於ける不比例。矛盾を生み恐慌を生ずる。これに關聯して、資本主義に於ける不均等なる發展の法則、最後の段階に於ける停滯の傾向などが論ぜられてゐるけれども、今はそれらに論及しない(『マルクス主義の旗の下に』第三年六號)。

さて私共はベネディクトの叙述から何ものを學び得るか。一部門から他の部門への蓄積資本の移動なく、且各部門の蓄積率にして一樣である時には、資本構成に變化ある以上、消費財の生産過剩があらはれる。ベネディクトにありては、勿論資本構成の變化の場合が取扱はれるのであるが、まづ、資本の移動を除外する。而して、蓄積率の各部門に於ける差異とその變動とによりて、均衡の成立を考へむとするのである。これはまさしく、バウアア、グロスマンにありて、蓄積率を均等としながらたゞ資本の移動を許すことによりて、消費過少から免れたのと逆なる行き方である。而もベネディクトはバウアア的方法の批評に於て、資本移動の困難をとき之を斥けてゐるがその論據は十分なりと云ひがたい、資本移動の可能を否認するだけの主張は成立してゐないと思ふ。此意味に於て、資本の移動を取除いて考へてゐることが始からの弱

味である、均衡不可能の必然性の論證はそれだけ弱められてゐるはずである。（人口との關係がはじめから除外せられてゐとも注目を要する）なほまた、蓄積率（又は人口増加の割合）の一定してゐる場合には、グロスマンの述べたるが如く、蓄積進行の行きづまること明であるが、これを措いて考ふるも、資本構成の變化の割合の一定してゐることと蓄積の進行とも相容れない、蓄積は結局ゆきづまる。而して、消費財需要の不足となると云ふ。この結論はもとより、グロスマンの主張と同じく、複雑なる數式の展開をまつまでもなく明白のことである。けれども、前提そのもの、即ち資本構成の變化率が一定であると云ふことの可能は殆どない。勿論、これが技術の變化の停止せんとする傾向を説明するに止ると云ふならば、それまでであるが、さうしては、此傾向と獨占との關係はどう説明せらるるか。

大體、ベネディクトの立論そのものの主旨は次の點にある。マルクスの擴張再生産の數式の吟味はバウアア的立場に於てさうであるやうにマルクス主義の修正に導くのではなく、それはマルクス、レニンの示したる資本主義の根本傾向を直觀的に明示するのに役立つ。而して、これを示すが爲に、その改作したる數式を基礎として、發展不均等の法則、資本構成の停滯の法則などを説明しようとしてゐる、特に主要なることは、均衡の成立しうる條件の複雑さのために、蓄積の圓滑なる進行の當然性極めて乏しく、その至難なことを主張したる點である。此進行のために必要なる條件を示すところの方程式の複雑はなるほどかゝる均衡の實現の困難を思はしめるに十分である。然れどもこれは果して均衡の理論的なる原則的なる不可能を意味するものであるか。

たとへば一の財の價格の構成を考へて見る。此價格の構成せらるゝがために必要なる條件は無數である。たとへば千萬の經濟主體についての收支の均衡各財の限界效用の均等、生産費と價格との均等、これらの條件を示す方程式の數は幾百倍に上ると思はれる、これらの條件の同時にみたさるべき價格の形成は、若し條件の複雑さの故に困難であるならば、絶望的に困難なるはずである。これらの條件のみたされうる當然性は無限に小であるやうに見える。けれども、社會は刻々

にかゝる價格の構成を近接的に（アプロキシメエトリイに）行ひつゝある。そこには不斷なる試行錯誤の連續があり、全體的なる均衡が自己を貫き通す。資本の蓄積の進行にとりて必要なる條件はもとより、第一部門第二部門の區別對比によりてベネディクトの展開したる如き單純なるものによりてつくされるわけはない。然れども、進行が可能であり得るものならば、試行錯誤の連續の間に實現せられてゆく。このことは今までしばしばの恐慌が、所謂蓄積の障碍の打開の過程として考へられたることから推知しうべきである。ベネディクトの蓄積進行のためのどれだけ複雜なる條件をあげるにしても、又それが都合よく企圖せられ實現せらるることの困難をどれだけ指示しうるにしても、それだけでは蓄積進行の行詰りを論證するに足らぬと思ふ。蓄積進行を可能ならしむる筋道からはづれたるもの、即ち不均衡なるものは、或は個々の資本家の失敗により、更に大規模には恐慌によりて修訂せられる。而して、その間に蓄積は默々として進行する。バウアアの理論の如きものも、蓄積が進みゆくものならば、かゝる進路をたどると云ふ見方に過ぎまい。從ひてその設けたるが如き假定の下に蓄積がゆきづまることを論證したるグロスマンの理論も、假定そのものの非現實性を認むれば、それと同時にくづれ去る。ベネディクトの崩壞理論が、資本構成變動率の一定を假定する限りは、同樣なる運命に陷る。

資本の蓄積、從ひて擴張再生産が資本主義内部に於ける撹亂矛盾、從ひて恐慌による矛盾の克服の過程の擴張再生産を意味する、而して此矛盾が遂に恐慌による克服を不可能なるに至らしめる。かう見方が論證し得らるるものならばそのときはじめて蓄積の經濟的破綻が根據づけられ得ると思ふ。然れども、ベネディクトの數式的展開そのものから、この矛盾の増大、恐慌の激化を結論しうべき何ものもない。なるほど生産の擴張はそこに認められる。しかも單に不比例の可能、均衡の困難をとくのみにては、時々の恐慌の作用が前提とせられてゐる以上、此矛盾の増大が如何にして論證せらるるか。論證せられたる形になつてゐるのは資本主義生産が種々なる方面に於ける不比例を、矛盾を藏するものであると云ふことだけである。而もこの論證の前提となつてゐる假定そのものの中に數多の許しがたきものの存することは前に述べたる如

くである。

八

資本蓄積の理論は勿論今後といへども引きつゞき發表せらるるであらう。云はゞ蓄積理論の蓄積はなほ進行するであらう。然れども、此蓄積理論は、それが經濟的理論である限り(從來の蓄積理論は殆どすべてさうであるが)、その論じ得る限界がある、卒直に云へば、その論ぜんとするところを論じ得ざるものである。

蓄積理論のめざすところは、資本の蓄積が無限に進行しうるか否かにある。種々なる蓄積理論の答ふるところは常に此問題に對する「然り」か「否か」にある。然れどもそれらは果して十分なる答解となり得てゐるか如何。まづ私はこれを蓄積の行詰り、資本主義の純經濟的崩壞的理論について考察しよう。

此經濟的破綻の理論についてはマルクシズムの陣營内部にも二の立場がある。一はロオザ的、經濟的崩壞理論なくば資本主義の無限進行の理論のみが、乃至日和見主義のみがあるとなすもの。二は全くこれに對立する立場である。純經濟的なる崩壞理論の否定であり、かゝる理論は意志的努力を弱らしめるとする。資本主義の行詰りは勿論經濟的なる矛盾に基くにしても、それは政治的社會なる具體的變化をまちて實現せられ得る。かの蓄積數式の進行の中から『純經濟的崩壞』の生ずること、『絶對的に遁れ路のない事情』に立至ることを否定する(たとへばヴアルガ『資本主義の蓄積と崩壞』七三、九五頁)。此立場は數式自體から必然的なる崩壞の論結し得られざることを認むる點に於ては所謂新調和論(バウアア等の)と一である、併しながら、内部に成長する矛盾が益々擴大せられて、經濟的に、而して同時に政治的社會的に特に對外的戰爭を通じて**崩壞の促さるべきことを信ずる點に於て異なつてゐる。**

こゝに當面の問題となるものは、純經濟的崩壞理論である。これはロオザ、シユテルンバルク以來クロスマンに至るまで

數多の學者によりて熱心に支持せられたるものである。然れども、これが果して何物を意味しうるか、しばらく、グロスマンを中心として考へて見る。グロスマンによれば此崩壞が人口の一定の增加率に應ずるだけの蓄積の餘裕なきことから起る。グロスマン自身は資本家消費部分の不足に重きを置けども、それは事實に於て重視せらるべきことではない。私はこの行詰りをオッペンハイマアに於けるが如き、可變資本の不足、過剩人口の增加に基くものと見るときに、相當の理論的價値あるものとなりうると見る。この意味に於てかゝる見解を蓄積不足說と稱しようとするのである。(グロスマン自身がこれを過剩蓄積に基く崩壞理論と見てゐることは前に述べた) それはとにかくとして、グロスマンにありて、一々の恐慌はすべて行きづまりの打開、資本主義的見地から云へば健康の回復を意味するところの均衡に立ちかへるところの過程である。たびたびの行詰りが此過程によりて均衡にまでもどされる。而してたゞ所謂最後の恐慌にありては何故に此事が不可能であるか、その理由は少しも明にせらるるところはない(この點はネディクト自身にもあてはまらないか)。更にまた資本の蓄積がそれ以上進行し得ざる事情にまで立至ると假定したところで、それだけから資本主義の崩壞が論結せられうる筋合のものではないと思ふ。蓄積なき資本主義、蓄積なくして而もそこに階級支配のみ存する資本主義、ことに獨占的資本主義の存しうることは容易に考へ得べきことである(ヴアルガ)。經濟的行詰り理論がどこまで資本主義的蓄積中の行詰りを論證したところで、その行詰りは決して直に資本主義そのものの崩壞を意味し得るものではない。『剩餘價值のうち不生產的に消費される割合が次第に增加すると云ふことは、資本の蓄積が次第に行はれなくなることを意味するのであり、それは畢竟するに、資本家的生產それ自體の自殺を意味するに外ならぬのである。』から云ふ河上博士の主張は一の純經濟的崩壞を意味するものではないか。蓄積の行はれ得ざることが直に資本家的生產の自殺を意味する。博士の蓄積理論は今日といへども、大體ロオザの蓄積理論の範圍を出でない(第三者の必要について は意見を改められてゐると思ふが、その他の點について)。此點を論證することは容易であるが、今それに立入らぬ。從つて、

純經濟的崩壞を重視せらる、根柢は既に深いものがあるであらうとは云へ、蓄積の不可能が如何にして直に資本家的生産の自殺を意味しうるか。それは蓄積なく資本主義の可能を顧ざる見解ではないか、而してかの崩壞を招來しうるものがまことに何物であるかを顧ない見解ではないか。それは資本家が自ら手を拱いて生産を全然差換ふると云ふことであるか。而して既に蓄積したる全資本をあげて放棄すると云ふことであるか。必ずや之を否定せらるゝであらう、そこに蓄積理論のまことの限界が見出される。

經濟的勢力(これは其實、一定數量の交換價値と云ふもの、他人を支配しうる能力に外ならぬ)は經濟外的勢力を前提とし、これが基礎の上に立つところの第二次的なるものである。勿論經濟的勢力が經濟外的勢力の上にある作用を及ぼすことを否定するのではない。しかし此作用はつねに、一種の反作用であるに止まる。巨富の集積はしば〳〵強大なる經濟外的勢力を伴ふ、けれども、それがかゝる力であるのは、社會の經濟外的勢力の組織に於てまづかゝる經濟的勢力の集積が許さるゝ爲であり、且つ此蓄積に至るまでの個人の活動の自由がその個人に認められたる結果である。從つて經濟的勢力それ自體の力を以てしては、經濟外的勢力の組織そのもの、根柢に何ものをも加へ得ざるはずである。勿論、經濟的勢力に於ける變動が經濟外的勢力の關係の上に變動を及ぼすことから來る間接の作用については、論自ら別である。此點は今まで別の機會に於て詳論したるが故にこゝには論述をさける。かゝる見地に立てば蓄積理論のもち得る意義を容易に明にすることが出來る。

まづ、消費過少による蓄積行詰りの理論について考へよう。これが必然性を論證することはまづ技術の變化が如何なる方向に向つて進むかの豫知しがたき以上、全然困難である此點を外にしても、それは勞銀の大さ、從つて餘剩價値率の大さに關するある前提を必要とする。而もこの前提は事實に於て動き得る可能をもつ。此餘剩價値率が生産力の増加からばかりではない。經濟外的勢力關係によりて動きうる範圍は可なりに大きいはずである。加之、獨占の作用は技術の變化勢

銀の變化に大なる支配力を及ぼすことが出來る。從つて、消費過少の阻止せらるべきいろ〳〵の餘地がある。然れども假に消費過少が現實に於て成立するとすれば如何。それは不景氣恐慌と云ふ一團の事象によりて再び均衡の確立の方向に導き得ざるか。過去に於て然りしが如く將來に於て何故にさうであり得ぬか。これらの種々なる可能なる道行は何れも、かの所謂蓄積の行詰りに拘はらず、資本主義の崩壞を必然ならざらしむるものである。經濟は弱い、社會は强い。資本主義的經濟組織にして作用してゐる場合、假りにその行詰りが生じ、蓄積の困難が生じたとしても、社會そのものが組織そのもの、改廢に直進せざる限り、その力を以ていくらでも此行詰りは打開せられ、資本主義組織の運轉は進行せしめられ得る。このことは蓄積理論が蓄積過少を中心とする場合に於ても同一である。人口の増加、餘剩價値率、蓄積率、資本構成の變化はすべて社會の事情によりて左右せられる、これらを一定の率に固定せしめて到達せられたる行詰り理論の必然性をもたぬことは云ふまでもない。假に行詰りが生ずるとしても、一方に於ては恐慌によりて、他方に於ては社會の事情による、特に經濟外的勢力關係にまつところのこれらの前提條件の改廢變動によりて、新なる圓滑の進行が考へられ得るはずである。種々なる方面の不比例性を中心とする行詰り論についても亦、同樣なる批評を下すことが出來る。資本蓄積の理論はこれを資本の蓄積だけの考察として見る限り、それは資本蓄積の行詰りの必然性を論證し得ざるのみならず、非經濟的なる行詰りの到來を論證し得たりとするも、資本主義崩壞の必然性を論證し得ない。資本主義の維持存續と否とは直接には蓄積の行詰ると否とに沒交渉なる事柄である。

要するに、純經濟的崩壞の理論はそれ自體經濟的勢力の本質を顧みざる議論に過ぎぬ。資本主義の崩壞は過去に於て資本蓄積の行詰りから來らず、露西亞を見よ、ある時期に於ける匈牙利を見よ。これを崩壞せしめたるものは經濟の機構そのもの、外にある經濟外的の事情である。蓄積理論はどれほどそれが蓄積せられても、あくまでそれが經濟的理論である限り、資本主義の運命に關する決定的理論を形づくることは出來ぬ。經濟外的勢力こそは、蓄積の行きつまらざるに資本

主義を除去したが、その力はまた當然に、蓄積の行きつまり如何に拘はらず、資本主義を維持しうる力をもちうるはずである。此意味に於て、資本主義崩壞の問題に最後の答解を與ふることは、何等經濟理論のなしうるところではない。勿論經濟的なる蓄積理論を無視し得ざるにもせよ、問題の重點は全く別にある、それはたゞ經濟外的勢力關係の分析のみがこれをなしとげ得るであらう。

要するに蓄積理論について私の述べたいと思ふ眼目の諸點は次の如くである。蓄積の經濟的行きづまりの理論は論證の必然性をもち得ない。此理論に於て常に最も重視せらるゝのは消費の過少、生産力の過剰である。前者は對立的なる分配關係の故に縮小せむとし、且つ生産力の増加に伴うて縮小せむとする、後者は資本蓄積の要求、利潤の追求に伴うて擴大する。かくて、ある立場からすれば、蓄積の行詰りそのものがこれに基いて生じ（ロオザ）、他の立場からすれば、蓄積の進行そのものが不可能であると云ふのではないけれど、消費と生産との不調和がたえず反復しまた増大する恐慌となりてあらはれる（たとへばブハアリンも、ヴアルガも）。これは純經濟的なる考察であるが、これが理論的必然性を有し得ざるところは次の點にある。前述の如く技術の變化從つて資本構成變化は豫見しがたい、別して餘剰價値率は變化の餘地を多く有する。しかるにこれらをある一定の大さのものと見定めずしては前述の考察が有效に行はれ得ない。而して、此後の點は蓄積の經濟的行詰り論そのものがすでに經濟的にのみ考察し得ざることを示す。此行詰りの必然であるかないかは、勢力關係の變動を顧慮せずして考察せられ得べきことではない。グロスマン的なる蓄積過少説についても、純經濟的考察そのものが經濟外的なるものゝ考察をまたずして行はれ得ざること、前述の如くである。

更に進みて、資本蓄積が經濟的に行きつまると假定しても、それが資本主義組織そのものゝ崩壞を意味するや否やは全然別の問題である。そこには社會的政治的なる事態があつて支配する。崩壞の實現は見よ、その發達の低いところ露西亞に於て行はれて、最も高き英米に於て行はれてゐない。今までの數多き不均衡、不調和は恐慌乃至不況の形に於て清算せ

られて來た。資本主義組織の運命について決定的なる作用を有するものは社會であつて經濟ではない。而して、從來の蓄積理論にありて看過せられたるものは社會乃至社會的勢力の作用の分析である。たとへばヴァルガに見よ。剩餘價値率は生產力の增加につれて增加する。而して、これに對して、社會的勢力關係は何等の作用をも營み得ないのであるか。また『正しき圖式の構成は何等の困難をも示さないであらう。しかしわれらにとりてすべての圖式は極めて複雜なる再生產の過程の近接的なる例示としてのみ役立つにすぎぬ』と云ふ。かくして、蓄積進行は本來的に不可能とされるのではない。たゞ矛盾の擴張再生產のうちに、經濟的社會的政治的なる條件の全體が急激なる變動をもち來すべき情勢を作り上げる。而も此急激なる變動をもち來し得べき社會的事情が——それは無產者の擡頭であるが、それほどの勢力が蓄積過程の進行に於て何等の能動的作用を營まずと云ふこと、消費過少によりて矛盾が愈々增大するまでも、云はゞ何等の作用をも及ぼさずと云ふことが如何にして可能なるか。剩餘價値率も進みては資本の構成も、それによりて左右せられずと云ふことが如何にして可能なるか。資本主義崩壞の必然論は、一方、純經濟的崩壞理論をとくことによりて、論證を無力ならしめてゐるばかりではない、他方、社會的なる崩壞理論を說くにしても、社會的勢力の作用を、その結論に都合よく到達せむが爲に、必要に應じて或は無視し或は強力のものと見てゐる、そこに論證の必然性が失はれてゐる。

かくて結局、蓄積理論の考察は自ら經濟と社會との關係に轉ぜざるを得ぬ。此仕事は、私の第三史觀經濟と權力との關係についての私見を展開すると云ふことに外ならぬ。（昭和五年七月十九日。此稿終らむとするころ、四十年來にないと云ふ暴風にあふ、雜用にまぎれて敍述意の如くならぬ。或は理路の一貫を缺くところないかと恐れてゐる。）

日本財界景氣變動の原則

(不景氣の根因と對策)

勝田貞次

不景氣の眞因

人に依ると、日本、今日の不景氣は、大正三年頃の不景氣に比して大差なき不景氣であつて、世人が、今日、不景氣を大呼するのは、大正七・八年頃の大好景氣の夢を今尚忘れ得ないためである、なぞと云ふ。一寸聞くと、そうか、とも思へるが、夫は、統計を皮相に弄した者のたわ言に非ざれば、御用學者が爲めにする處ある言に外ならぬ。どうして〳〵、今日の我が不景氣と來たら、大正三年頃の比ぢやない。未曾有の大不景氣である。然り、慥かに、今日の我が不景氣は未曾有の大不景氣である。

然らば、どうして、そんなことが云へるのか、と云ふに、蓋し、不景氣の程度は、不釣合の程度に應じて定まるものだが、その不釣合の程度が、今日ほどに甚だしいことは、日本の資本主義制度建ち始つて以來、曾て、一度も、ないことだからである。

處が、御用學者などになると、徒らに、數字の膨脹した點ばかり指摘して、日本の財界も、昔に比較すると、却つて、大いに、内容が充實して來たなどと、怪しからぬ言を弄し、大學教授と云ふ背景を利用して、國民を欺くのである。が、計數が、どんなに膨脹して大きくなつて居らうとも、かくも、不釣合が益々酷くなつて行くんでは、景氣も何もあつたものではないのである。だから、吾々は、誰が何と云つても、不釣合が酷ければ、不景氣も、また、酷いのだ、と主張せざるを得ないのである。從つて、また、吾々は、玆に、不景氣の原因として、不釣合と云ふことを主張せざるを得ぬのである。

現實問題と學者の架空論

處が、學者は、また、この『不釣合』と云ふ極めて明白なる事實をば、大變にむづかしく考へ過ぎて、却つて、非常な間違に陷らうとするのである。現に、從來とも、學者は、不景氣の原因をば、不釣合に

求め乍らも、さて、不釣合とは何か、と云ふことになると、抽象論に走つて了ひ、例へば、不釣合を以て、『正常的經濟均衡の破壞』であるなどと解し、恰も、正常的經濟均衡と云ふ標準が、現實の財界に、寒暖計の樣に、プラ下つてでも居るかの如く考へるのである。が、考へて見て下さい。生動常なき現實の財界に、正常標準なんてものが、プラ下つて居る筈がないではないか。爲めに、學者の不景氣論は、言葉だけのもので、實際に役立たぬ架空の言ともなるのである。『實際に役立たぬ』などと云ふと、忽ち、學者は、學問は神聖にして、實益と一緒にさる可きでない、などと云ふが、如何に學問が神聖だからつて、事實の眞相を曖昧にして居つては、學問の値打がないではないか。

已に、ミッチエル教授の如きも、從來の學者の觀念論的な經濟均衡正常論を攻擊して、「私の考へに依れば、正常的經濟均衡の概念などを豫想して、夫に基いて、景氣變動を考へるのは、一種の抽象論であつて、その結果は、徒らに、經濟均衡の考へをば曖昧にする計りである、尤も、經濟學者が、靜學の範圍にばかり止つて居る限り、その危險も大ではく、その方法の不正確も曝露されないのであるが、一度、經濟學者が、靜學の範圍からして、眞の動學の範圍へと、一歩を踏み出すが最後、忽ちにして、彼等は、以上の樣な抽象論の、如何に無力にして、如何に危險多きかに氣附くであらう、故に正常的經濟均衡の概念は、之を、正常的なる經濟均衡などとして、觀念的に考へないで、モッと、具體的に、正常標準などと云ふ考へから離れて單に『何々の間の不釣合』として考へる可きであらう、」と云つて居るではないか。

故に、吾々も、學者に從つて、『不釣合』をば、抽象的に考へないで、モッと、具體的に考へて、何々の間に、不釣合の事實があるからして、世界的に財界が不景氣であるのだ、と云ふ風に、ザックバランに、物事を考へて行きたく思ふ。

不釣合にも種々あるが

と云ふと、人、或は、生產と消費の間の不釣合をば聯想するかも知れない。或は、また、人口と生產力の間の不釣合を考へたり、分配と消費の間の不釣合を考へたりするかも知れない。けれども、そんな不釣合は、まだ〱、抽象的な不釣合であつて、そんなことならば、學者でも知つて居ることで、今更、とり分けて云々する程のものもないのである。

反之、私の茲に云はんとする不釣合は、非常に具體的で、從て、極めて、簡明な事實なのだが、而も、誰れも、未だ、夫と氣附かない處の不釣合であるのだ。然らば、夫は、如何なる種類の不釣合か、と云ふと、夫は、卽ち、バランスの不釣合なのである。勘定の合はないことなのである。プラスとマイナスがピッタリと一致しないことなのである。詳しく云ふと、資產勘定が少くて、負債勘定が多く、從て、兩者の間に、釣合がとれないことなのである。だから考へて見れば、至極、明々白々な、簡單なことなのだが、夫に世人は氣附かない。毎日〱、

世人は、バランスが合はない爲めに、四苦八苦して、その爲めに、自分の買ひたいものも買ひ控へたり、銀行へも頭を下げながら、さて、[illegible]不景氣の原因はと聞かれると、ヤレ金融が不圓滑で候ふの、物品の賣行が惡いの、生産が過剩して居るの、と云つて、一向に、自分達を苦るしめ拔いて居る足下の事實に氣附こうとはしないのである。爲めに、不景氣の原因をば、徒らに、むづかしく考へ廻して計り居る。馬鹿氣たことではないか。

根本はバランス問題なり

と云ふと、世人、或は、問ふであらう。『何故、バランスの合はないことが、不景氣の原因になるのであるか』と。

が、然し、この問ひは、問ふ人自から、反省して見たら、すぐと解ることだ、と思ふ。何となれば、資本主義經濟の今日では、錢勘定と云ふことが根本をなして居つて、錢勘定が合はなければ、結局は、どうにもこうにも行かなくなつて、無産者階級に沒落し、自分の勞働力を捨てうりに出さなければ、最後の購買力すら發揮することが出來なくなることが、直ちに、分るだらうから。だから、生産と消費が不釣合だとか、分配と生産が不釣合だとかと、標準のハツキリしないことを云々する必要は、少しも、ないのである。營利經濟の世の中では、必す、バランスとか、錢勘定とか云ふものがあるのだから、夫が合はなければ、不釣合だ、と考へた方が、一番に分りがいゝではないか。それ以外に、むづかしいことを云ふ必要がどこにあるか。

勿論、バランスの合はなくなるに至つた原因には、澤山あらう。搾取の行れることも、その一因であらうし、不生産的なことの行れることも、その一因であらうし、不勞所得を製造することも、その一因であらうし、資産を過評して、借金を作り、夫を濫費するのも、その一因となるであらう。或は、また、蛸配當をやつたり、過度の重役賞與を捻出したりして、資産に穴をあけるのも、その一因たるに價するであらう。然し乍ら、何れにしても、一度、バランスが合はなくなつた以上、遂に、夫は、種々な形になつて、財界の表面に浮び出て、不景氣を來さずにはすまさないのである。現に、借金で苦しんで、金融難を叫ぶのも、その人のバランスが合つて居ないからのことではないか。また、購買力を充分發揮し得なくなるも、バランスが惡くなつて、會社がやつて行けなくなつたり、懷具合が淋みしくなるからのことではないか。だから、金融不圓滑と云ふも、生産消費不一致と云ふも、結局は、バランスの合はざることから生じたものに外ならぬのである。故に、この點から考へて見ても、バランスなるものが、財界にとつては、如何に大切なものであり、從て、また、バランスの合はないことが、如何に、財界不況の原因をなすかが分るではないか。

債權棒引論擡頭は當然なり

從て、不景氣が深刻になり、從て、また、不景氣の根因が、勢ひハ

ッキリしてくるにつれて、世人が、不景氣の根因をば、債權過多に求めて、債權の棒引論を主張し出すのも、當然なことである。日本に、目下、盛んである平價切下說などもこゝをねらつたものであらう。尤も、私としては、平價切下は、債權棒引の效果を、結局に於て、來さない、と考へるからして、從來とも、夫に、贊成はしないが、兎に角、日本でも、債權棒引論を、ボンヤリした形に於てではあるが、兎に角、考へる人々の出て來たことから見ても、不景氣の根因が何であるかが分るだらうと思ふ。

處が、獨逸の學者達は、モウ、ツッと前から、この點に氣附いて居つて、盛に、債務過多だの、債權過多だの、と云ふことを主張し、以て、バランスの合はないことを以て、世界的財界不況を說明して居るが、是は、尤もなことである。蓋し、一方に、歐洲諸國の如く、債務過多で困つて居る一群があり、他方に、米國の如く、債權過多で困つて居る一群があつて、爲めに、經濟が、世界的にバランスを失ひ、それに依つて、財界の車が廻らなくなり、從て、生產と消費が一致を缺き出したといふ生きた事實を目擊した彼等としては、夫も、決して、偶然なる眞理の發見ではなかつたのであらう。眞理は苦痛の產物だ、とはよく云つたものだ。人は、苦痛にならなければ、現實を直視することの出來ない動物と見える。

本末轉倒の不景氣說

が、何れにしても、以上からして、吾々は、生產と消費の不一致をば、不景氣の根本的原因なり、と考へる思想の大間違ひであることが判つたらう、と思ふ。然り、茲に、生產と消費の不一致は、財界バランスの合はなくなつた爲めに、經濟活動が萎微して、夫から生じた現象なのだから、夫は、不景氣の結果でこそあれ、決して、不景氣の原因ではない筈ではないか。だから、不景氣の原因をば、吾々は、決して、生產と消費の不一致に歸してはならぬのである。生產力に比較して消費力が少くなり、消費力に比較して生產力の多過ぎるのは、之れ、全く、バランスが、全財界に亘つて合はなくなり、從て、不景氣になつた結果だからである。少くとも、夫は、不景氣を深刻化する原因かも知れないが、不景氣そのものの根因ではないであらう。

同樣なことは、金融の不圓滑に就ても、生產の過剩に就ても、價格の下落に就ても、人氣の惡化に就ても、購買力の減少に就ても云へる。蓋し、金融の不圓滑にしても、生產の過剩にしても、價格の下落にしても、人氣の惡化にしても、購買力の減少にしても、是等は、皆な、生產消費の不一致と共に、財界のバランスが惡くなつて、經濟活動が萎縮した爲めに生じたもので已に生じた不景氣を、更に深刻化する力はあつても、不景氣そのものの根因ではあり得ないからである。然り、不景氣が一度スタートを切つて進行し出してからはバランスの惡化が價格を下落せしめたり、價格の下落がバランスを更に惡化せしめたりして、種々の要因が、因果相應する關係をなして、ゴッチャに

作用するからして、必ずしも、一因のみが、不景氣を深刻化するものであるとは云へなからうが、苟も、不景氣が、その第一歩を切り始めるのは、財界バランスの悪化に原因するもので、他の何れにも原因しないことが斷言出るのである。

現に、その證據には、バランスが釣合ふようにならぬ限り、決して、財界は好景氣には向ひ得ないことを、吾々は屢々經驗したではないか。日本では、日清日露の大戰とか、外資輸入とか云ふような財界のバランスを釣合ひよくする出來事に依つてのみ、從來、不景氣が一掃されて、生産消費の一致を來せるに依て見ても、夫は分るではないか。だからして、生産と消費の不一致を、直接、一掃しようと努力しても、夫は出來ない相談であつて、生産と消費を一致させようとならば、先づ以て、その基礎條件に逆つて、財界のバランスを釣合よくすることが必要となるのである。從て、亦、以上の如く、財界バランスを釣合良くしてかゝらなければ、生産消費の不一致も決して一掃され難いと云ふ可きであつて斯かる事實から考へて見ても、不景氣の根因は、財界バランスの不釣合にあつて、生産消費の不一致にはないことが分るのである。

然るに、世人は、今尚、本末を轉倒して、不景氣の原因をなす處の『バランスの不釣合』をば、却つて、不景氣の結果であるとなし、不景氣の結果である處の『生産消費の不一致』や、『金融の不圓滑』や、『購買力の減退』や、『價格の下落』やを以て、却つて、不景氣の原因であるかの如くに考へんとはするのである。だからして、大藏大臣閣下と共に、不景氣對策を確立し得ないことにもなるのである。故に、吾人にして、若し、不景氣問題の眞相を解さんと欲するならば、須らく、先づ、不景氣の根因をば、『バランスの不釣合』に求め、本末を轉倒しないようにしなければならぬ。

バランス不釣合發生の原因

然らば、『バランスの不釣合』なるものは、どうして生ずるか。問題は、これであるが、少くとも、この『バランスの不釣合』が、景氣變動そのものから生じたものでないことだけは、茲に、斷言し得る、と思ふ。蓋し、景氣變動そのものゝ中からして生じたものである以上、夫は、決して、景氣變動を支配する根因とは看做し得ぬからである。また、そんな理窟を抜きにして、事實の上から見ても、世界經濟今日の不釣合は、世界戰爭と云ふ景氣變動以外の原因からして發生したものであることを見るではないか。現に、見よ。世界戰爭の結果として、歐洲各國は、資産以上の負債を負ふことになり、米國にばかり、無暗と債權が集中したので、バランスが、世界的に合はなくなつて、金儲けは減退し、世界經濟は不況化し、購買力は減少し、生産は過剰し、金融は不圓滑となり、斯くて、不景氣は益々加速度を以て進行するに至つた次第ではないか。

故に、問題は、資産と負債の不釣合に歸着せざるを得ぬのである。

單に、負債が如何に多くとも、借金がいくらあらうとも、そんなことは問題ではないのである。問題の中心は、資産と負債の間の、釣合がうまく行くかどうか、その間の決濟がうまく附くかどうかである。これがうまく附かなくなると、不景氣になるのである。また、その決濟がうまく附くようになる迄は、財界は萎縮し、不景氣も持續せざるを得ないのである。

而して、已に、一言せる如く、このバランスの不釣合は、決して、景氣變動そのものからは起らないで、景氣變動の外なる原因から起るものなのである。現に、現在の日本を見ても、夫は分る。何となれば、現在の我が不景氣の原因であるバランスの不釣合は、關東地方の大震災とか、長い間に亘る財界膨脹政策とか、資本主義制度の濫用とかの如き景氣變動以外のところから起因せるを見るではないか。

然り、現在の我が財界に於て、負債勘定の高が多いと云ふだけならば、別に問題もないのであるが、資本主義制度を濫用して、資産に大穴を開けたり、資産を過評して、借金をして夫を濫費したり、入超のあるにも不拘、更に、外國から借金をして、國民に奢侈をさせたり、その上に、大震災に依つて、資産が破壞されたりして、遂に、返濟不能の負債がウンと出來てしまひ、從て、資産と負債の間の釣合が取れなくなつたからこそ、これが原因となつて、今回の不景氣は襲來し、夫は、收益の減少とか、金融の不圓滑とか、購買力の減少とか、生産の過剩とか、株價の下落とか、富の減少とかの形を採つて、更に、不景氣を加速度化するに至つたのではないのか。從て、バランスの不釣合こそ、不景氣の根因であつて、生産過剩その他は、不景氣を加速度的に進行せしめる諸要因に外ならぬ。從て、このバランスの不釣合と云ふ不況の根因を、何等かの方法でもつて、一掃しない限り、日本の財界も、不景氣の底入を來すことは絕對に出來ないと云ふ可きであらう。

同樣なことは、世界經濟に就ても云へるのであつて、世界の經濟を二・三年内外の短期間に、好況化さうと思つたならば、先づ、米國に債權棒引をして貰ふことであつて、不幸にして、夫が出來なければ、歐洲人が、額に汗して、その債務を返濟するまでの長い〳〵期間をば、米國も、歐洲と共に、不況であへいで暮らさねばならぬことになるのである。

日本財界不況の副因

吾々は、以上に於て、日本財界不景氣の主因をば、バランスの不釣合に求め、從て、之が一掃されない限り、人爲的に、金融の圓滑を計つて見た處で、購買力を刺戟して見た處で、何の役にも立たぬことを一言したのであるが、更に、また、日本財界の不景氣には、以上の如き主因の外に、數個の副因があつて、爲めに、日本財界の不景氣は、獨逸財界の不景氣に比して、不景氣の程度の深刻に感ぜられることを一考しなければならぬ。殊に、獨逸では、ベルリン市内に住する相當の家庭ですらも、トイレットペーパーの代りに、新聞紙を切つて使つ

て居るほどであるからして、之から見ても、獨逸財界不況の程が思ひやられるのであるが、それにも不拘、日本の方が、不況の程度の深刻に感ぜられるは何故であるか、と云ふに、人に依ると、夫は、獨逸の財界は已に惡くなるだけ惡くなり切つて了つたが、日本の財界は目下惡くなりつゝあるからであると云ふ。夫にも、勿論、一理あるけれども、然し、何れかと云へば、夫は、極めて、相對的な理由であつて、並に、問題とするに價しないのである。

並に、先づ問題とす可き第一の理由は、獨逸の財界に比較すると、日本の財界が、非常に不安定な狀態にあつて、獨逸の不景氣は、單なる不景氣であるが、日本の不景氣は、不安定を藏した不景氣である、と云ふことである。寔に、日本の財界は、不景氣の底に、更に、不安定と云ふことがあるので、何時まで經つても、不景氣が底を入れ得ないのではないのか。

然らば、何故に、日本の財界には、不景氣の外に、不安定が見られるのか、と云ふと、その一因は、日本に於ける諸株式會社のバランスが、獨逸に於ける諸株式會社のバランスに比して、甚だしく不健實であり、どちらかと云へば、病的であることに存するのであるが、然し、夫は、寧ろ、左樣に重要視す可きほどのものではない。最も重要視す可きは、日本政府の財界對策が、インフレーション政策ならインフレーション政策、デフレーション政策ならデフレーション政策と、ハッキリ、その何れかに決定されて居らないことである。現に、日本人は、その爲めに、財産をば、貨幣の形で持つて居つた方がよいか、物品株券不動産等の形で持つて居つた方がよいか、の決心が附かず、從て、金で財産を持つて居る人々も、物で財産を持つて居る人々も、共に、等しく、不安な感じて居るではないか。これでは、經濟活動の基礎が定まらないから、財界不況が、何時まで經つても、底を入れるに至らないのも當然である。獨逸でも、マーク價値の動搖時代には、同樣の狀態にあつたが、今は、夫がなくなつた。處が、日本には、目下、それがある。爲めに、日本の財界は、不況であると共に、不安であつて、不況と不安とが、日本の財界では、目下、一緒になつて居る。これが、獨逸の不況に比較すると、日本の不況の方が、ズッと、深刻であると思はしめる原因をなして居るのである。故に、日本で、最も必要なことは、一刻も早く、政府の財界對策を、モッとハッキリと、收縮政策か膨脹政策かに限定す可きことである。下手に、不景氣の對策を講ずるよりは、この方が、餘つぽど、不景氣對策として有效なものであると思ふ。

資本主義財界機構の缺乏

更に、モウ一つ、獨逸の財界に比して、日本の財界の方が、不況の深刻を訴へざるを得ない理由がある。夫は、即ち、日本の財界には、財界が不景氣になつた時に、夫をばはね返す處の財界機構がないことである。獨逸には、そうした財界機構があるために、財界が不景氣に

なるに從て、不景氣が自然と財界を刺戟して財界を改善化する藥物の働き作用をなすのであるが、日本には、そうした財界機構がない爲めに、日本では、財界が不景氣になれば、不景氣になるほど、不景氣が財界を改善化さないで、却つて、財界を毒することになる。爲めに、日本の不景氣は、獨逸の不景氣に比して、シミ〲と深刻に感ぜられるのである。

然らば、日本になくて獨逸にのみあると云ふその財界機構とは、そもく〲、如何なるものか、と云ふと、一言で云ふと、夫は、資本主義機構である。獨逸では、政府と工業と金融とが、三位一體化して、高度の金融資本主義機構を作り上げて居るので、不景氣になつてもその爲めに、財界が亂れないで、却つて、不景氣が財界を結合化し、財界を醫治しつゝあるのである。從て、日本でも、不景氣が財界を毒することを防止しようと思へば、何を措いても、獨逸の如く、工業と金融と政府との間に、緊縮なる協力結合の關係を來さしめ、金融資本主義機構の確立に務める處がなくてはならぬ。これこそ、日本に於ける不景氣對策の有力なる一をなす可きものである。

不景氣の原因と對策

以上を要するに、我が國不景氣の原因は、(一)惡質の債務が過多であつて、バランスが不釣合となつて居り、(二)政府の財界對策が徹底して居らない爲めに、インフレーション化すのか、デフレーションにして了ふのか、その見定めが付かず、國民が非常な不安を感じて居つて、財界が不況の底を突き得ないこと、(三)並に、財界が不況化した際に、その財界不況を擊退する財界機構が、日本にないことの以上三つに存するが故に、從て、また、我が不景氣對策も、(一)惡質過多の債務一掃と、(二)財界政策の徹底と、(三)資本主義機構の建設との三となるのであるが、就中、必要なるは、勿論、第一の惡質過多の債務一掃であつて、之には、(イ)債務返濟の方法と、(ロ)債權棒引の方法との二がある。而して、前者債務の返濟は、自然に委して措けば、何時までも永びく計りで、不景氣を益々深刻化するからして、結局、政府が債務を肩代りして代辨する積りでなければ徹底しないことになる。從て、また、非常に大規模な民間救濟でも、政府がやる氣にならないと、この『債務の返濟』をば不景氣對策たらしめることは出來ない筈である。然らば、日本の政府が、そんなことをやるか、と云ふと、恐らく、夫は、行はれ難いであらう。だから、結局、殘されたるものは、債權棒引であるが、然し、債權棒引なんて云ふことをば、資本主義制度の今日、露骨に、直接に、實行するなどは、思ひも及ばない處だからして、要は、間接に、それとなく、債權の棒引に似たことを、財界の有機作用を通じて行はしめるにある。然らば、その方法如何と云ふと、先づ、第一は、パニックを來さしめることである。蓋し、パニックが來て、債務者が破産して了へば、債權者も債權放棄を餘儀なくされ、從て、債權債務の決濟が、兎に角、實行されたことになるからであ

る。世人が、よく、不景氣も、パニックで底を入れる、と直覺するのも、全く、以上の事實を裏書きするものである。また、大概の財界が、極く自然に放棄されて居る場合には、財界自然の生理作用からして、不景氣からパニックを來し、債權の放棄によつて、財界は荷を輕くして立ち上るに至るに依て見ても以上のことは分るであらう。

處が、このパニックで、債權棒引の效果を來さしめ、財界不況を底入に導くことは、一種の緊縮政策であるからして、國民の大多數は、これを嫌やがる。そして、なる可くならば、通貨膨脹とか、平價切下とかに依つて、物價騰貴、株價昂騰を來し、擔保物件の値上りで、債務者を生かし、以て、債務の辨返を圓滑にする方法を採りたい、と願ふ。一寸、考へると、この方法も、妙案のようだが、然し、更によく考へて見ると、斯ふしたインフレーションの方法は、間もなく、大反動を來して、一時、債權債務の釣合をよくするように見えても、再び債務過多を來すからして、決して、パニック程の妙案ではないことになる。只、この方法に依れば、インフレーションの進行期から、その反動期へかけてのドサクサまぎれに、機敏に立廻り得る經濟知識に秀でた人々には、最も好都合を來すが故に、斯る地位にある人々が、自分達の立場からして、夫を歡迎するに過ぎない。債權債務の決濟を、財界全體として、インフレーション政策で完成される、と思つたら、大きな間違ひである。

故に、結局、冷靜に考へて見ると、早くパニックを出して、小さなパニックで、財界バランスの釣合を作り、財界不況の底入を來さしめる方が、賢明なる不況對策たり得る譯である。グズ〳〵して居ると、財界バランスの不釣合は、更に、雪だるまの如く累進的に財界バランスの不釣合を大にし、夫を掃除しようとすると、非常に大きなパニックになる心配があるからして、一刻も早く、寧ろ、パニックを出して、財界バランスの不釣合のまだ小規模なうちに、夫を一掃するに若くはないのである。

處が、若しも以上に反して、何時までも〳〵、財界パニックを恐れて、財界バランスの不釣合を、そのまゝになして置いて、且つ、政府としても、大救濟で、民間の債務を肩代りしてやらうともしなかつたとしたら、その時は、どうなるか、と云ふと遂には、獨逸で、吾々の經驗したように、貨幣價値がゼロになつて、今迄の債權債務關係を、一切、否定し、以て、財界バランスの不釣合をば、自働的に矯制しようとするであらう。これ、財界破産に依る債權債務決濟方法である。

故に、行詰つた債權債務の決濟方法には、(一)政府の大々的救濟か、(二)財界にパニックを出すか、(三)財界を破産させるかの三途しかないことが分るのである。私も、今迄に、隨分、種々なことを考へて見たが、財界バランスの釣合を計る策としては、以上の外に對案を考へ得ないのである。寧ろ、以上の三方法も、對案と云ふよりは、せつば詰つて、已むを得ず、行れる處の財界本來の生理作用に外ならぬものかも知れぬと思ふ。

景氣變動機械觀の破綻

一體、今迄の人々は、餘りに、財界を人爲的なものに考へ過ぎ、財界に特有な財界生理作用の必然性を無視したきらひがあるのである。同時に、また、財界の生理作用が、景氣變動であつて、從て、景氣變動の基礎には、創造的進化の道程を辿る生きた財界のあることを認めない爲めに、景氣變動までを、飴の如く、人爲でどうにもなるものと考へたり、時計の針の如く、機械的に動くものである、と考へて、その結果、財界對策が誤れる傾向が、公私ともに、少くなかつた、と思ふ。が、凡そ、景氣變動なるものは、創造的進化の道程を辿る生きた財界の作用であつて、固定して動かざる物理界の單なる運動ではないのだから、例へば、不景氣になつたからつて、財界の有機作用を無視して、人爲で、不景氣を否定する譯には行かぬものなのである。然るに、從來は、有機的な作用と、物理的な運動との間に横はる微妙なる差異を看過して、作用を運動として見ようとする經濟學的傾向が強烈であつたので、從て、勢ひ、これまでは、景氣變動も、機械的反覆現象として、極めて、機械的に觀察されたのである。景氣循環論は、その代表的のものである。爲めに、その景氣循環論に禍されて、景氣變動論も、科學的發達を示すことが出來なかつた。處が、幸か不幸か、今や、景氣循環の學說を裏切る諸事象が、世界經濟のこなたかなたに頻出するに至つたので、景氣變動をば、景氣循環として、機械的に見ることの不可であることが分りかけて來たのである。十年一日循環說を盲信する連中が、近頃、非常に減少して來たのでも、夫は分るであらう。

一體、世人が、景氣變動をば、景氣循環として、機械的に觀察するに至つたのは、景氣變動をば、自己原因で、財界構成の支配から離れて、自働的に動く一個の自働運動と前提したからであるが、實際上は却つて、その正反對であつて、景氣變動は、常に、財界構成に依つて、支配され、制約され、條件付けられて居る處の一個の有機作用であるのだからして、景氣變動は、之を、財界構成を通じて把捉さる可きもので、景氣變動それ自體の構造からして、機械的に、自働運動として、景氣變動を觀察す可きでないのである。蓋し、假令、そうしたいにも、景氣變動には、固定したそれ自體の構造などと云ふものはないからである。實に、景氣變動は、財界と云ふ一個の有機體內に於ける一つの有機作用であるからして、夫は、財界構成に照應して觀察さる可きものであつて、景氣變動それ自體に於て景氣變動を觀察してはならないのである。從て、また、過去の景氣變動に依つて、將來の景氣變動を豫測しようとする米國式の所謂「景氣循環論的統計分析法」は、全く以て、過去の株價變動の足取を以て、將來の株價變動を豫測しようとする例の罫線法と少しも變らぬものである。從て、景氣變動を把捉するに當つては、夫を制約する諸條件をば、現下の財界構成中に見出さねばならぬものである。徒らに、過去の景氣變動の型のみを基準として、將來の景氣變動を豫測しようとしてはならぬ。蓋し、過去は過去であつて、將來ではないから。從て、吾々は、過去の景氣變

動型は、將來の景氣變動を豫測する場合の一つの參考資料とす可く、過去の景氣變動型に囚れて、將來の景氣變動を推測してはならぬ。

以上が、景氣變動に對する有機說の主說であつて、獨逸でも、ワーゲマン敎授、フォーゲル敎授、ハルムス敎授、ゾンバルト敎授等は、その主張者である。私自身も、夫が景氣變動の本質を說明し、その把捉を可能ならしめる上から見て、最も當を得たる見方であると考へて居るのである。反之、高田保馬博士の如く、景氣變動をば、財界構成から分離して、景氣循環の型に當嵌めて、動反動が進行する自働運動であるとし、概念の遊戲に墮することは、世人をして、景氣變動の把捉を不可能ならしめ、資本主義經濟の指導を害するが故に、不可である、と斷言せざるを得ない。

景氣變動の制約條件的觀測法

以上の如く、景氣變動は、純動態的の現象であつて、從て、過去の型に依つて、將來の姿を推測することの出來ないものだからして、斯る景氣變動の把捉は、是非とも、夫を制約し、夫を支配し、夫を條件附けて居る處の現下の財界構成に基いてなさる可きことが分る。從てまた、日本財界の目下の不況も、同じく、財界バランスの不釣合と云ふ不況を制約し、支配し、條件附けて居る一種の財界構成に依つて、之を理解し、夫に基いて、不況對策を講ずるようにしなければならぬ。換言すれば、景氣變動に對する觀察法は、有機觀たる可く、機械觀たる可きではないのである。

失業反對闘爭

——失業の展開とその克服の過程——

橋　和　雄

一

『従來の記錄を破り激增した勞働爭議』——内務省社會局が最近調査した昭和四年度の勞働爭議概況は數量的には爭議件數六百件、參加人員七萬八千人で、日本の最高記錄であつた大正八年の爭議件數四百九十七件、參加人員六萬三千百三十七人を優に突破して、未曾有の激增を示したが、これが原因につき社會局は左の如く見て居る、

一、事業界極端の行詰りによる勞働條件の低下、賃金不拂、

二、經濟界不振匡救の唯一の途だとされた産業合理化運動の影響を受け、各種事業の合同整理、機械の利用が行はれたこと、

三、金解禁前後の政府の緊縮政策のため、事業主が積極的に事業の整理縮少を斷行したこと、

四、昨年七月一日から實施せられた婦人少年工の深夜業廢止のため勞働時間の短縮、生産費の低下、勞働者の增加、賃銀値下等を招來し、解雇者を續出せしめたこと、

五、深夜業禁止直前に勞働組合が牽制策として紡績工業の大規模な爭議を發生せしめたこと、

六、……

（昭和五年五月、東京朝日新聞）

『せち辛くなつた勞働爭議の實狀』——近年産業界の著しき不況の結果各企業の休廢による勞働者の解雇、生産制限のための操短等の事業縮少に伴つて、勞働爭議は著しく增加して居るが、先日内務省社會局で發表した本年（昭和五年）上半期における集計によれば、總件數七二八件、參加人員七六七九一に達し、昨年同期の四八五件、三九二一七人に比較すれば、件數約一倍半、人員實に二倍の多きに及んで居る。うち同盟罷怠業、工場閉鎖を伴つたものは三四七件、四〇八三四人で、昨年同期の二二六件、三四九〇七人に比し著しき增加を示して居る。しかしてこれ等爭議の原因は、不景氣による勞働者の解雇及び生産費低下或は生産制限の操短による解雇手當、賃銀給

與の停廢止、乃至は減額等に發するもので、特に上半期における勞働爭議の特殊的現象を列記すれば左の如くである。

一、大企業における爭議が增加したこと——深刻なる不景氣の結果大企業のもとにおいてもそれぞれ經營の行詰りを來たし、使用勞働者との間に解雇、賃銀諸給與の廢止、減額の問題について紛爭を發生したることを物語り、東洋モスリン、東京市電、神戶市電鐘紡、淺野セメント、富士ガス紡績、星製藥等は社會の注目を惹いた主たるものであつた。

二、工場閉鎖が著しく增加したこと……事業主が罷業前に工場閉鎖を斷行したことは從來比較的少なかつた、最も多かつたとせらるる昨年一ヶ年を通じてすら二八件にすぎなかつたが、本年度上半期だけですでに四二件を算して居る……。

三、爭議が殆んど不可避的のものに限局されたこと。(昭和五年八月六日、中外商業新報)

一九二八、九年は世界プロレタリア運動における一轉向點を形成して居る。戰後第一期の資本主義の危機が征服せられて以來漸次に衰退して行つた醱酵の浪、植民地へと移つて行つた醱酵の浪が、この一九二八、九年を轉期として急激に、しかも世界的規模において上昇し始めた。このことは唯に植民地のみに止らず、資本主義諸國、イギリス、日本等々においてもこれを確認し得ることは注目すべき點である。すなはちイギリスにおいては一九二九年の爭議件數は一九二七、八年の夫々三〇八、三〇二に對して、四三〇に上り、直接、間接の參加人員數は夫々十萬八千人、十二萬四千人に對して、五十三萬三千人を算へ、全喪失日數は夫々百十七萬日及び百三十九萬日に對して、八百二十八萬日と云ふ——一九二六年を除けば——戰後第一期以來の激しい醱酵的情勢を示して居る。そして爭議當りの參加人員數、並びに喪失日數の著しい增大は、この一九二九年が戰後第二期における運動の情勢から截然區別せらるべきものであることを敎へる。フランス、ドイツ、日本等々についても同一のとがあてはまる。左にこれを證明する二三の數字を揭げておかう。

こゝに留意すべき事は、かくの如き醱酵的傾向への著しい上向があらゆる社會民主主義諸黨、並びに資本家階級の產業平和への專心の努力にも拘らず益々顯著となると云ふ事實である。嘗ては勞働者階級を一時的に支配し得た「產業平和」の精神も「爭議調停法」の力も今や「民主主義」の玉座より退位することを餘議なくせられた。社會民主主義のファシスト化はこの事實のあらはれである。

二

それではかくの如き重大な變化を齎した要因は何であるか?

イギリス勞働爭議の趨勢

年度	年度内發生爭議數	當年度内發生爭議參加人員數			當期間發生爭議による全喪失日數
		直接參加者	間接參加者	總計	
1919	1,352	2,401,000	190,000	2,591,000	34,970,000
1920	1,607	1,779,000	153,000	1,932,000	26.570,000
1921	763	1,770,000	31,400	1,801,000	85,870,000
1922	576	512,000	40,000	552,000	19,850,000
1923	628	343,000	62,000	405,000	10,670,000
1924	710	558,000	55,000	613,000	8,420,000
1925	603	401,000	40,000	441,000	7,950,000
1926	323	2,724,000	10,000	2,734,000	162,230,000
1927	308	90,000	18,000	108,000	1,390,000
1928	302	80,000	44,000	124,000	1,170,000
1929	420	492,000	40,000	532,000	8,280,000

(The Ministry of Labour Gazette.)

ドイツ勞働爭議の趨勢

一九二七年及び一九二八年の前半年中の經濟闘爭

年度	分類	經濟闘爭數	參加工場數	參加者及び閉出し人數(間接關係者を含む)	喪失日數
一九二七年	經濟闘爭數	三六八	五、三五七	三八八、四一六	一二、七〇〇、八[illegible]
	ストライキ	三四三	四、二一八	一四四、九六九	一、〇七五、五四六
	閉出し	二五	一、一三九	二四三、四四七	一、〇五一、四六[illegible]
一九二八年	經濟闘爭數	四五九	五、四六六	三六六、六六六	七、七九一、五三三
	ストライキ	四三三	四、一三三	一九五、〇七[illegible]	三、五六五、四五五
	閉出し	二六	一、三三三	一七一、五九四	四、二三六、〇七[illegible]

フランス勞働爭議の趨勢

一九二八年後半	經濟闘爭數	參加工場數	罷業者及び閉出し人數(間接關係者を含む)	喪失日數
經濟闘爭	三七七	三、二五八	九六、八六六	七、三二八、七八[illegible]
ストライキ	三四[illegible]	一、三六八	八六、〇二三	八八九、四七五
閉出し	三六	八〇八	一一、七八八	六、四九九、二七八

(K. P. D. 第十二回中央委員會報告)

日本勞働爭議の趨勢

期間	ストライキ數	ストライキ參加人員數
一九二八年第一四半期	一〇〇	四〇、八三六
第二〃	二二〇	三一、六九八
第三〃	三四〇	八四、九五五
第四〃	三六九	二一三、六一五
一九二九年第一〃	二八四	一七三、八六七
第二〃	五五三	二三七、一八六

	爭議件數	參加人員數
昭和三年	七五二	八〇、八六六
昭和四年	一、三〇六	一八九、一〇五

これこそ政治經濟情勢の發展それ自體である。資本主義的合理化政策とソヴエート・ロシアの社會主義的反應との對立の上に築かれたる、世界政治經濟情勢の發展それ自身である。マクドナルドは第一期の危機に當面して、この危機が再び克服せらるるべきことを說き、モンド・ターナー會議は炭坑ストライキの經驗を再び繰り返さぬために勞働者の尊敬すべき愛國心に訴へて「國難」の打開を謀つたのであつた。ヒルフアーディングは恐慌の條件をば生產と消費との單なる不均衡の狀態に求めることによつて――それが生產と消費との孰れより生じたかと問題にすることなく――戰後の景氣をば戰前のそれと等位においたのである。かくて彼等はいづれも資本主義的矛盾の克服せられる、資本と勞働との對立の克服せられる時代を豫想したのであつた。併しこの夢想は客觀的事實の發展によつて、無殘に破壞せられた。

戰後資本主義發展の基柱をなす產業合理化政策は、唯に資本主義的諸矛盾を解決し得なかつたに止らず、これを著しく擴大再生產した。それは先進資本主義諸國內部における矛盾を擴大再生產したのに止らず、その帝國主義的政策の支配下にある植民地、半植民地をば盡く、著しい窮乏狀態に置いた。かくしてこの矛盾は先づ第一に、世界的規模にまで擴大せられたところの、恒常的失業となつてあらはれた。今や失業者は單なる產業豫備軍としてではなく、絕對的失業者として、たゞにヨーロッパの一部に止らず、廣く資本主義諸國及び植民地半植民地に充滿して居る。

三

『シーメンス工場七千名解雇――（ベルリン聯合廿六日發）――ベルリンのシーメンス電機工場は職工七萬人中の一割卽ち七千名に對し廿六日正式に解雇の通告を與へた。右はドイツの勞働界のみならず、政治產業界に目下非常な衝動を起して居る。』昭和五年七月廿八日、東京朝日新聞）

『ドイツの失業問題益々重大化す――（ベルリン、七月二十九日、聯合發電）ドイツ財界不況は益々著しく、シーメンス及びアルゲマイネ・エレクトリチテート會社の整理發表に續き世界的に名の知れた大會社が續々關係勞働組合に向つて賃銀の一般的引き下げを承諾するか、然らずんば使用勞働者の大淘汰に甘んずるか何れか一つを選ぶ樣通告を發して居る。これに對し勞働組合側では賃銀引下には絕對反對の態度をとるものと見られて居るが、その場合若し各會社側で解雇を斷行するとすれば、一般財界に及ぼすべき影響は由々しきものがあるべく、殊には解散後の總選擧も近づいて居るので、共產黨初め極左派の候補者に對する投票數が激增するのではないかと懸念されて居る。この點に關し從來は最も穩健だと評判のあつたド

イツ有數の有力な團體たる被傭者聯合會では、事態容易ならずとなし、政府に對して一つの覺書を送つて、現下の形勢に對する注意を喚起する所があつた。」(昭和五年七月廿一日、中外商業新報)

ドイツに於ける失業については嘗て最近の機會において述べた。こゝに特に注目すべき點は、一九三〇年二月の三百四十萬人、組合加入者の二十三%五に及ぶ失業者は、戰前の最高五%に滿たず、しかも週期的に吸收し盡された失業者とは根本的に異る意味を持つものでなければならず、彼等は一九二九年十二月のドイツ工業帝國聯盟の決議したる第二次の合理化政策によつて愈ゝその數を增大するであらうと云ふ事實である。シルヴエルベルグは社會民主主義的な幻影を持つあらゆる政策に卒直に反對した、恒常的失業は彼等によつて餘りに高過ぎる賃銀に歸せしめられ、賃銀の切り下げ、勞働時間の延長、失業保險負擔金の增課、大衆消費税の甚しい引き上げが提案せられ決議せられた。

「英國失業者激增——在ロンドン松山商務官發電廿四日——英國產業界はいよ〳〵不振を深刻化したため、十四日現在の失業者は百九十四萬人に達し、前年同期に比し八十萬人の增加である。」(昭和五年七月廿九日、中外商業新報)

イギリスは戰後を通じて常に百萬人を越える失業者が職業紹介所に登錄せられて居る。しかしこれ以外にイングランド及びウエールスにおいて救貧手當法の保護を受けるもの(これは一九二九年三月三十日に百十萬六千六百七十三人に及んだ——保健省第十同年報)スコットランド救貧局の保護を受ける者三十萬人、並びに最少限五十萬人と見積らるる、何等の救助をも受けない人々が考慮せられねばならぬ。これらの人々はあらゆる勞働者の努力にも拘らず減退の兆を示さず、一九二六年六月十日の、勞働黨政府の權力掌握の時の百十一萬二千七百九十二人(職業紹介所登錄の分のみ)と云ふ數字は、半年後の十二月三十日の百五十一萬二百三十一人に增大し、爾後更らに增大の趨勢を示して居る。しかも勞働黨の失業對策の歸趨は、失業救濟金削減に署名して有名となつたボンドフィールドの勞働大臣への採用、トーマスの三ヶ年間に亙つて二萬八千人を救濟せんとするその政策の中に明かに示されて居る。のみならず「眞面目に仕事を求めない」とか、「勞働者の過失と怠慢とによつて失業した」と云ふ理由で保護を拒絕せられたもの、並に失業保險の加入資格を剝奪せられたものの數は保守黨の時代に比して甚しく增加さへしたのである。

一九二九年に入つて生じたポーランドの景氣下向のテムポは失業をば破壞的な大いさにまで發展せしめた。我々は官廳報告

による登錄失業者數をとるも最近三ヶ月間に次の數字を得る。

	完全失業	短操勞働者
一九二九年十一月	九三、八〇〇（七九、六八九人……一九二八年）	八四、七一七
〃　十二月	一二六、六四四（九四、六八九人……一九二八年）	八九、六二八
一九三〇年　一月	二〇六、〇〇〇（一五六、四九九人……一九二九年）	一〇〇、〇〇〇

（數字は月初めの日のそれをとる）

かくして我々は、一九二九年十一月より一九三〇年一月までに登錄せられた失業者數は九萬三千より二十萬六千への、二倍以上に上つたこと、更らに一月中にこの增大のテムポは、更らに速かとなり、約二十八萬に及んで居る。一九二九年十一月の初旬の大中工業に從事せる勞働者數は八十八萬五千八百人であつた。登錄せられた失業者の大多數は工業勞働者である。それ故一九三〇年一月の失業者數は、一九二九年十一月の工業勞働者總數の約三分の一であつた。しかもこの登錄失業者數は失業者の實數の一部分に過ぎない。何となれば、五人以上の從業者を持つ工場の勞働者のみが登錄せられて居るから。それ故今季節に十數萬の失業を數へて居る農業勞働者は考慮せられて居ないこととなる。

ポーランドの全失業勞働者中二〇%がロッヅに集つて居ることは注目すべき現象である。最初に失業に見舞はれたのは纖維工業であつたが、金屬工業及び建築工業も一九二九年十一月より一九三〇年一月までの間に失業は著しく增大した。そしてこの失業、その益〻擴大する範圍、その增大のテムポはポーランド經濟の全部門に亙る恐慌の結果であり、世界恐慌の一環としての現象であることは注意すべき點である。經濟的に薄弱な基礎を持ち、世界經濟に依存する所なきポーランドでは、恐慌の發展は脅威的速度と破滅的範圍に亙るのである。

然らばこの失業に對するファシスト政府の對策は如何？　登錄失業者の中でさへ失業扶助を受けて居るものはその半數に足らぬ。かくて二十萬六千の登錄失業者の中、一九三〇年一月四日には九萬五千四百のみが救濟を受けて居た。しかもこの救濟は十三——十七週間に限つて支拂はれ、しかも作業員五人以下の工場の勞働者は救濟を受けず、他方同一家族中の救濟者は一人に限られて居る。季節勞働者は勿論何の救濟も受け得ない。

（一時的救濟は殆んど云ふに足る大いさではない。）

かくてポーランドにおける階級鬪爭は著しく尖銳化して來た。就業勞働者と雖も、纖維工業においては、大部分操短勞働を行つて居る。そしてこれは今や全產業部門を襲つて居る。彼等は屢〻一週間の中二日乃至三日しか勞働せぬことも稀ではない。

ポーランド勞働者の低い賃銀を以つてしては（ポーランド石炭工業の生產性の增進は、長時間勞働といづれのヨーロッパの國々よりも低

い賃銀の購物である。その收益の三分の一への減退は實に飢餓的存在を意味し、救濟を受けて居る失業者よりも生活が低級である。しかも資本家は恐慌を利用して解雇をもつて脅かし、賃銀に對する攻擊を續け、團體契約をもつて保證せられた賃銀を切り下げる。資本主義的合理化は極度に押し進められて居る。

我々はこゝに餘りにも周知な日本、アメリカ合衆國、支那とインドをこゝに擧げることをしないであらう。（日本については昭和五年五月中央公論、川西實三氏論文。改造社經濟學全集「産業合理化」を參照せられたい。アメリカについては同じく「産業合理化」を參照せられたい。）

ラテイン、アメリカにおける失業は如何なる情勢にあるか。これらの諸國の純農業的性質、しかもその封建的、奴隷的並びに金融資本的の三様の支配下にある農業における急激な合理化の過程は先づ見逃すべからざる點である。合衆國よりアルゼンチンへのトラクターの輸出は一九二六年の二三四九臺より一九二七年の三一二五臺へ、一九二八年の四七〇三臺へと增大し、コムバインの使用數は一九二六、七年の一萬一千四百四十臺より一九二八、九年の二萬五千臺に增大し、其の他の機械と合して賃勞働を八十%減少せしめて居る。合衆國よりメキシコへの農業機械の輸入額は、一九二七年の百六十五萬二千弗より一九二八年の二百十萬五千弗にまで升した。この結果小地主、小作人間の土地喪失は急速に促進せられ、その結果失業者群が增大して居るのを見る。しかし斯くの如き合理化による失業以外に、資本主義諸國の合理化せられた技術とダンピングとによる工業生産部門における沒落を見ねばならぬ。戰時中の工業化の過程は合理化の時期に當面して二重に失業者層を增大したのである。手工業者層の沒落と、工業プロレタリアート自身の失業者群への沒落と。更らに植民地においては、その單一耕作への移行の結果、世界市場價格の下落による滅亡的影響を考察しなければならぬ。アメリカ合衆國及びイギリスへの原料供給地に轉化せられたラテン・アメリカは合衆國及びイギリスの過剩生産によつて、原料の過剩生産に陷らざるを得なかつた。そして珈琲と牛肉價格の下落はそれのみでブラジルを恐慌狀態におき、アルゼンチンをして金の輸出を禁止せしめたのである。

メキシコよりの報告は一九二八年末には七萬人中二萬人以上の鑛山勞働者が解雇せられ、石油工業では從業員は四萬五千人より一萬四千人に減じ、かくてその總失業數は官廳の報告によれば三十萬人、統一組合同盟の報告によれば五十萬を越えて居る。ブラジルの織維工業勞働者は全數十四萬人中三萬人以上が失業し、工場は一週三日乃至四日開かれて居るに過ぎぬ。農業

の失業者は數へるに遑がない。失業者の食糧貯藏者及び「平和なる市民」週報の報告は農村プロレタリアートの間の失業が尨大な範圍に亙ることを如實に證明して居る。アルゼンチンでは一九二六年に三十萬の失業者が數へられて居るが、それは餘りにも少數である。其の他パラグワイ、ペルー、エクアドル、ボリビア、ヴエネズエラでも夥しい失業者群の存在が報告せられて居る。かくて一九三〇年度の最少限度の失業者數（官廳及び勞働組合の統計による）は次の數字に上るのである。

合衆國	五、〇〇〇、〇〇〇
ドイツ	三、五〇〇、〇〇〇
イギリス	二、〇〇〇、〇〇〇
イタリー	八〇〇、〇〇〇
オーストリア	四〇〇、〇〇〇
ポーランド	四〇〇、〇〇〇
チエコスロヴアキア	四〇〇、〇〇〇
ハンガリア	三〇〇、〇〇〇
ブルガリア	二〇〇、〇〇〇
ユーゴースラヴイア	二〇〇、〇〇〇
ルーマニア	一五〇、〇〇〇
ギリシア	一〇〇、〇〇〇
スペイン、ポルトガル	一五〇、〇〇〇
スカンヂナヴイア諸國	一五〇、〇〇〇
其の他のヨーロッパ諸國（オランダ、サヴエート同盟の邊境國）	一〇〇、〇〇〇
南アメリカ	一、〇〇〇、〇〇〇
メキシコ	五〇〇、〇〇〇
カナダ	二〇〇、〇〇〇
オーストラリア	二〇〇、〇〇〇
南アフリカ	一〇〇、〇〇〇
日本	一、〇〇〇、〇〇〇
合計	一六、八五〇、〇〇〇

この千七百萬人に及ぶ失業者の存在、益々增大しゆく失業者數並びに不斷の失業による脅威こそは資本家階級並びに社會民主主義者達に對するプロレタリアートの階級意識をば自然發生的なるものより、自覺的なるものへと高める可能性を與へるに役立つた。社會民主主義的、資本家的理論は、アメリカの永久的繁榮の理論と共に消滅せしめられたのである。そこで、彼等には知らねばならぬ機會が與へられた、資本の蓄積は不斷に勞働條件の惡化を伴ふべく運命づけられて居るものであり、失業は唯に產業豫備軍として資本主義に不可離なものたる段階に止らず、戰後においては景氣の如何に拘らず益々增大する要素たることを。換言すれば彼等失業者は今や資本主義の中には最早やその席を見出すことの出來ない分子として宣告せられて居ることを。

斯様な意味において、プロフインテルンは失業の現在勞働運動において有する意義を極めて重要なものと評價して居る。そしてこの失業の敎訓を通じて、これが克服を目標とする現下の醱酵的傾向をば次の如く特徴づけて居る。

『我々が現在經驗して居る新たなる醱酵と戰爭直後即ち一九一九—二〇年のそれとの區別せらるる所以は、後者においては醱酵的情勢がヨーロッパ諸國の一部にのみ限られたと云ふ點に存する。當時においては多くの國々において惠まれたる條件が支配して居たのであつたが、しかし主體的要素が缺除して居た。當時にあつては×××の萌芽、×××組合の萌芽は存在して居たが、××的情勢を充分利用し得る様な主體的條件が存在して居なかつたのである。現在はこれと趣きを異にする。醱酵狀態は唯にヨーロッパを充溢して居るに止らす、ヨーロッパ外諸國をも襲ひ、植民地を襲つて居る、それは新大陸、ラテイン・アメリカを席捲し、インド、支那、××等々の怪物をもその渦中に引き込んだ。それは既にヨーロッパの限界を遙かに乘り越えた。醱酵はしかし未だ一九一九、二〇年の尖鋭をば示して居ない。しかし他方新たな要素はこの醱酵の範圍…のみに止らない。戰爭直後に缺除して居た主體的要素の存在は又新しいことでなければならぬ。』(R・G・I・第六回中央委員會におけるロソカスキーの報告、一九三〇年より)

四

『國際失業紀念日——國際共産黨員は三月六日を期し第一回失業國際紀念日となし、世界的示威運動を行つた。同日運動に關しては或は倫敦、伯林、紐育、巴里、華府等に於て官憲乃至軍隊消防隊と衝突し、各地に流血の慘事を現出せりとも云ひ、又各地に小規模の騷擾ありしのみで、全然失敗に終つたとも云ひ、外電の傳ふる所は區々であつた。』(昭和五年三月十五日、東洋經濟新報)

『ベルリン、一九三〇年三月六日發電報——ドイツは今日××的勞働者階級の飢餓と失業とに反對する示威運動の表徴の中に立つて居る。ベルリンでは全市を通じて、特に勞働者街及びシテイにおいて午後より夜晩くまで強大な示威運動が試みられた。そして街上における敵手の官憲による繰り返し行はれた護謨杖による襲撃や銃器の使用にも拘らず、これを鎭靜することは不可能であつた。…』

『ロンドン、一九三〇年三月六日發電報、——ロンドンのトゥーヴァー・ヒルにおいて行はれた××的示威運動には一萬人の失業者が參加した。ドイツよりの一參加者の演說は大センセーションを呼び、私服による抑壓にも拘らず續行せられた。…

マンチェスターでは官憲による禁止にも拘らず集合が行はれ、七人の檢束者を生じた。…』

『ニューヨーク、一九三〇年三月六日發電報——ニューヨークでは鬪爭日は壓倒的な經過をとつた。これは數年來における最大の××的

無産階級示威運動であつた。全市は××をもつて固められ、官憲は隨所催涙ピストルによる攻撃をもつて大衆を解散せしめようと試みた。……』

『パリ、一九三〇年三月六日發電報――官憲の力をもつてする不斷の阻止にも拘らず、パリ及びその近郊においては×××××の命合が遵守せられた。特に注目すべきは建築業における勞働休止である。全ての建築場は放棄せられた。パリでは午後組合樓上で中央示威運動が行はれ、三千の勞働者が參加した。……』

プロフインテルンにとつては、失業者運動及びこの運動の客觀的可能性と失業者の組織方法に關する問題が今や特別の意義を持つて居る。大衆的失業は資本主義的諸關係動搖の要素である。かゝる理由よりして何處の資本家階級も社會ファシスト諸黨派も失業者に特別の注意を拂つて居る。この生産から追放せられた勞働者、經濟組織に對する充分な不滿を持つ失業者を指導し、××することは、プロフインテルンの意見によれば、主體にとつても重要な××であり、それは唯に失業者の運動としてプロレタリア運動の一部たらしめるに止らず、プロレタリア運動全體をして、階級意識に醒めた運動たらしむる重要なる××であると云ふ。かくてロソウスキーは日ふ、

『最も重大な任務は、失業者運動をプロレタリアートの一般的階級運動と××する點にある。如何なる失業者の組織もたゞ失業者だけから構成せられてはならない。就業者の代表者は絶對的にすべての失業者の委員會會議に出席せねばならない。我々は失業者の闘爭を運動の特殊形態として見てはならぬ。何となれば失業は決して職業ではないから。今日は仕事を持たない失業者も明日は仕事を得るかも知れないし、今日は仕事に從事して居る者も明日は街頭に投げ出されるかも知れない。失業はかくて何よりも先づ勞働者階級の問題である。こゝにおいては、ある瞬間に職を持つと否とに關係なく、あらゆるプロレタリアートがこの問題に關係を持つ。それ故に失業者と勞働者との間の有機的結合の問題は、現在の闘爭段階においては、我々の全××の中心問題である。失業者運動を孤立せしむることは勞働者階級をば就業勞働者と非就業勞働者と云ふことによつて、二つの異なる集團に分裂せしむるかも知れない。しかしてこのことは就業者にも非就業者にも破壞的な結果を齎すかも知れない。それ故失業者と勞働者との有機的聯關、兩者を闘爭のために獲得すること、更らに共通要求の提起があらゆる××的組合の注意の焦點にたたねばならぬ。そして、それに向つてたゞに失業者のみに止らず、全組織、全勞働者階級が全體として進まねばならない。失業者の問題

は全勞働者階級の問題である。このことはどのプロレタリアの心にも銘記されねばならない事實であり、我々のすべての方策の出發點とならねばならない。そしてこれこそ失業者を把握するためのあらゆる組織形態及び失業闘爭のすべての形態と方法との基礎となるべきものである。この根本方針より少しでも脱線し、又この中心問題をば少しでも忽にするならば、我々の組織を極めて困難な狀態に陷らしめるかも知れない。かゝる根據よりして、我々は今一度現段階の最も重要なスローガンを強調する、「失業者の問題は全勞働者階級の問題である！」と。』（R・G・I・一九三〇年三月號所載「失業は勞働者階級全體の問題である」より）

『更らにこれによつて、失業者の勢力を如何にして、又何處に向けるべきかと云ふ問題が提起される。我々は既に失業者は×××力の恐ろしい貯水池であると力說した。然らばこの力は何處に向けられるべきか！　…………我々は部分的スローガンを…………一般的スローガンと結びつけることなしには失業反對の如何なる闘爭をもすることが出來ないし、又失業者及び就業者の前に××××××展開することなしには、如何なる部分的要求をも提出することが出來ない…………。だがこゝで我々は極端に走つてはならない。「唯部分的要求のみ」と云ふスローガンも「唯一般的要求のみ」と云ふスローガンもこの場合適當でない。部分的要求を一般的要求と結びつける處に失業反對闘爭の眞の本質がある。そこに失業反對の國際闘爭デーの意味と意義とが含まれる。…………。だが我々は大衆をば初歩の、彼等にとつて最も火急の部分的要求によつて之に向けることを理解せねばならない。…………。これによつて我々は失業者をば資本主義經濟組織の障壁を×××一つの××××××に轉化する。かくて就業者の前に失業問題が正しく提起せられるのである。』（前掲、ロソウスキーの論文より。）

こゝで我々は、コミンテルン及びプロフィンテルンによつて組織せられた失業反對闘爭の國際デーの意義を聽かねばならぬ。一九三〇年三月十五日のプロフィンテルン執行局の三月五日に對する決議は次の如く語つて居る。

『一、失業反對闘爭の國際デーは、就業勞働者と失業勞働者との運動の統一に向つて、××的勞働運動の勢力の鞏固化及び資本主義體制竝びに社會フアシズムに對する闘爭の國際化に向つて、一大進歩をなしたものである。數十萬數百萬の勞働者が同じスローガン（七時間勞働制、國家負擔による失業扶助、サヴエート同盟の××等々）をもつて同時に進擊した

ことは、この闘爭デーに眞の國際的事件たる意義を附與するものである。

二、三月六日の運動は、昨年八月一日のカムパーニャより、遙かに廣汎な範圍に亙つて決行せられた。二三の國（例へばアメリカ合衆國）においては組織者自身も驚いた程尨大な大衆の活動を喚起した。ブルジョアジー及び社會ファシズムの全勢力を擧げた動員にも拘らず、最も重要な國々の失業者及び就業勞働者の意義深き共同の示威集會が行はれた。これが極めて重大な政治的性質を持つて居ることは、この日に、勞働と資本との間の利害の對立が明確に前景に押し出されたことを以つても知られる。國際失業反對デーの運動の規模はストライキが餘り起らなかつたにも拘らず、勞働者大衆が益々×××スローガンに從つて××といふこと、及び運動の國際化が勞働者大衆の間に反響を不斷に擴大しつゝあると云ふこと、それを立證するものである。』（R・G・I・一九三〇年四月號より。）

かくて、失業並びにこれを克服するための無産階級の闘爭は今や「重大な問題」を呈出することとなつたのである。（一九三〇、八、七）

新支那論

室伏高信

一．

夏の夜の上海は限りないまでに多くの問題をもち出してゐる。エロの街としての上海、國際賭博場としての上海のことは、誰の耳にも熟したことだ。

こゝは實に百パアセント・エロの街でもあり、また百パアセント・スペキュレエションの街でもある。モダアニズムの屑が完全にまでも夜の上海を支配する。

だが、これ等のモダアニズムの屑と並んで夜の上海を彩つてゐる異樣の光景をわれ〳〵は見逃すことはできないであらう、あの多くのディオゲネスたちが夜の上海を占領してゐることの光景を。

到るところの街上に、アスファルトのうへにだ、蓆一枚を延いてゐるものは上等の部である、裸體のまゝに身を大地のうへに横へて、天地とともに眠つてゐる、これ等の數限りない苦力や、黃包車夫や、それから小商人たちの生活振りを見よう。

彼等の晝間の生活は世界都市としての上海への適應である。けれども夜の生活が完全にまでも宇宙への適應であることを見よう。彼等は晝は上海の市民、そして夜は宇宙の市民だ。

宇宙の市民が如何に上海の往來に横はつてゐることか！彼等が如何に世界都市の沙漠の間にあつて「片隅の幸福」を吸ひとることを知つてゐることか！そしてまた彼等が如何に一枚の蓆のうへで宇宙的偉大を生活することを知つてゐることか！

われ〳〵はこの意味から何の誇張もなしに呼ぶであらう、これ等の東方の多くのディオゲネスたちを見よと。

そして彼等を文化以前だといふ人たちに告げていひたい、四

千年の文化をもつてゐる支那において如何にして文化以前の世界がありうるであらうかと。文化年代學からいふと、彼等は原始的であるよりもストア的なんだ。

たゞ、ストアと彼等との間に橫つてゐる、見逃すことのできない相違を見逃すことは、一層に大きな過誤を犯したこととならう。ストアが末期的現象であるのに對して、支那にはたゞ「はじめ」があるのみだといふことを、先づ注意せしめよ。

こゝには間拔けさはあらうが、神經衰弱はない。「あきらめ」はあるが、絕望はない。生活の最低標準はあるが、生活不安はない。

經濟的條件がこれに呼應する。こゝには多くの賤業はあるが、近代的な失業はない。こゝにはスエッチングの忌むべき制度があり、少年勞働の恐るべき苛酷はあるが、操短もなく、締出しもない。

支那には「終り」はなく、世紀末はなく、行詰まりは存在しない。支那は破產したのでもなく、落伍したのでもなく、また試驗されたのでもない。私は休息の理論において今日の支那を見る。ニイチエが限りなくも愛した休息の理論において。

そしてわれ〳〵は支那において學ぶであらう、大なる休息からして大なる緊張が生れてゐるといふことを。

二

支那の生活はどこか伸び〳〵したところがある。こゝには空間的には廣大さがあり、時間的には永久さがある。われ〳〵は支那にきて手足が一二尺も伸びたやうにさへ感んずる。けれどもこの伸び〳〵しさには如何なる空虛もないであらう。支那の廣大さのうちには如何なる沙漠もないであらう。

こゝにはエネルギイが、力が、魂が、意志がそれから支那の廣大さを一つの統一にまでもちきたす緊張さが支配する。

國民政府の墮落振りは兎も角である。あの孫中山への崇拜振りを見よう。あの天才兒汪精衛の革命的な情熱を見よう。それから馮玉祥の力强い表現振りを、共產黨的な惡戰苦闘を、それからまた靑年たちのマルクス主義的な狂宗振りを。

それからまた一層にあのマッチさへすれば直ぐにも燃えあがらうと待ちかまへてゐる支那の大衆たちを。

古るい表現を借りてくるなら、山雨到らんとして風樓に滿つ。天才よ立つて笛吹け。全支那は一人のごとくにして天才の出づるのを待つてゐる。實に今日の支那のやうに國民的天才を翹望してゐる時代は少ないといふことができるであらうに。

その人は支那を支配するであらう、その人は全支那の神にま

で高められるであらう、そして實に人類解放と建設との偉大な役割を受持つことができるであらうのに。

そして天才は生れたか。如何なる天才が生れたか――新支那は方向を與へられたか、新支那の全エネルギイに方向を與へるところの國民的な表現が嘗つて與へられたか。

否、否、否。

三

今日の支那は、一個の天才を生むことの代りに、世界の頭腦を混亂させた。

列國の帝國主義者や、軍人や、外交官や、殖民地的な資本家や、凡ての反動の七面鳥が支那についての認識を誤つたことの數々はいふまでもないことである――英國の狼狽振りを、アメリカの無定見さを、それから田中義一を最後のおどけ役者とした日本の帝國主義の時代色盲の一齣を見よ。

コミンテルンが支那について犯した過誤もまた決して帝國主義者以下ではなかつたことをわれ／＼は躊躇なく指摘することができるであらう。ロイや、ボロヂンや、これ等の三流四流のボル人はいふまでもなく、陳獨秀や、譚平山や、瞿秋白や、これ等の青年支那の善き頭腦の一部までが、コミンテルンとともに、彼等が、如何に支那についての原理喪失者であつたかを一瞥せよ。そしてまたあの汪精衛のやうな現代支那における第一人者までが、共產黨と西山會議派との間にあつて、如何に左顧右眄の長い日和見主義に時間を浪費したかを見るがいゝ。

凡ての人たちが支那についての認識を誤まつたのだ。凡ての理論が支那の現實的局面において破産を宣告されたのだ。

も少し詳しくいふことを許るせ、西山會議派や、軍閥や、帝國主義者や、これ等の反動主義の理論はもちろんのことである、自由主義も、社民も、共產主義も、一切のヨオロッパ的な、それから同時に近代的な、社會・政治・經濟の全理論が、支那の現實の前において破産の宣告をうけたのだ。

如何なる既成の公式も支那においては適用されないであらうといふことが證據立てられた。如何なる革命の「光榮ある」經驗も支那においては適用されないであらうといふことが證據立てられた。そして支那の現實は如何なる既成の理論よりも、また經驗よりも複雜であるといふことを。それからまた支那の現實を指導するものは支那の現實以外の如何なるものから生れた理論でも經驗でもなくして、實に支那の現實がそれ自身のうちにもつてゐる方向そのものでなくてはならないといふことを。

支那の現實は如何なる方向を示してゐるか。今日の支那は如

何なる方向に向つてそれ自身を緊張せしめてゐるか。――支那は如何なる理論を要求してゐるのか。

四

われ／＼は先づ支那が今日通過しつゝある社會過程についての認識からはじめよう。世界の頭腦を混亂させてゐるのもこの認識だし、支那においてのあらゆる革命的情熱を浪費させてゐるのもこの認識の問題だから。

　封建主義か、資本主義か、殖民地か、そして封建主義から資本主義への一過程であるか。

　凡ての人たちの認識はこれ等の二三に盡きるであらう。そしてまた多くの人たちが封建主義から資本主義への一過程といふの立場において一致するのを見るだらう。共産黨も、國民黨も獨　も、秋白も、第三黨も、改組派も、西山反動派も、それからまた李石曾的な聯省自治の看板を立てたり下ろしたりしてゐるものも。

　私をして支那にあらしめたと假定しよう、この限りなくも懐かしい革命の國に――私は獨り別の旗を樹てるであらう。如何なる旗を？先づ認識の問題に戻つて行こう。

「打倒帝國主義（タフタイテエコウチユイ）！」

われ／＼をしてこの言葉を解剖せしめよ、この古るくもあり新しくもある言葉を。

　帝國主義！これはたしかに共産黨的な表現だ。レエニン的臭味が百パアセントだ。もしもレエニンの「資本主義の最後の段階としての帝國主義」なる一小册子がなかつたとしよう、帝國主義といふ言葉は十九世紀とともに捨てられたかも知れない。

　この多分にビスマアク的な、軍閥的な、ミリタリスチックなそれから實に自由主義以前の意味をさへももつてゐる帝國主義なる言葉の、如何に不思議な運命をもつてゐることであることか、レエニンのお聲がゝりによつて、十九世紀的な時代錯誤が二十世紀の尖端にと立つた。嘗つては對外的侵略形式を意味したにしか過ぎなかつたこの言葉が今日では經濟組織の一定階梯を示すことの言葉にとなつた。

「打倒帝國主義（タフタイテエコウチユイ）！」

　支那においてはこの言葉は如何なる意味をもつてゐるのか。二重の意味だ。こゝにはレエニン的な言葉の獨裁もないが、これは十九世紀的な、そして自由主義以前を意味するだけでもない、交響樂だ、レエニン的な帝國主義と、ビスマアク的な帝國主義との。だから共産黨もこの言葉を彼等のスロウガンとすることができるであらう、西山會議派のやうな排共主義もこの言

葉の魅力のもとに一致することができるであらう。凡ての支那がこの言葉のもとに、一人のごとくにして立つことができるであらう。この言葉は全支那をとらへた。支那はたしかにこの言葉のもとに一人のごとくにして立つた。この言葉のやうに、全支那を勢揃ひさせたものは、未だ嘗つて見ることができなかつたといつてよい。

何ゆゑにこの言葉、この二重の意味をさへもつてゐる、新しきがごとくに、古るきがごときこの一つの言葉が、かくまでに全支那をとらへたか。これが、われ／＼の第二の問題となつてくる。

人々は說くであらう、支那の民族的自覺がこゝまで達したのだと。ヘエゲル流には世界の意識が「こゝまで」達したといふべきであらう。そしてマルクス的轉倒からいふならば、この意識を決定する經濟的基礎構造がこゝまで達した、といふべきであらう。

支那の民族意識も、世界の意識も、それからこれに照應する經濟的段階も、「こゝまで」來た。これはたしかだ。この意識の過程を、それからこの意識を決定する何ものかを豫定することなくしては、誰だつて支那におけるこの言葉の流行病的な流行を解釋することはできないからだ。けれども、これは答か、答の延期か。

「こゝまで」とはどこまでゝあるのか。それから民族的自覺とわれ／＼のいふてゐるものは、またヘエゲル的世界意識とは、支那においては如何なる意味をもつてゐるのか。私のいはんとすることは次の意味だ、四千年の民族的歷史を傳統してきた支那が今日において何ゆゑの民族的自覺であるか。それから今日までの支那は、では、民族的自覺をもつてゐなかつたといふのか。また、では、支那は今日まで民族ではなかつたといふのか。

それからヘエゲル的世界意識についてもだ、われ／＼はアジアを古代のうちに葬り去つたヘエゲル的世界意識の、獨逸皇帝的おべんちやら論をそのまゝに受取つてよいのか。また、マルクス的な「アジア的生產方法」なるものを、われ／＼の東方世界に烙印づけてゐるやうな、あの恐ろしいまでの輕蔑をそのまゝに受取つてよいのか。

一切のナンセンスに終りを與へよう、一切のヨーロッパ的なアジア解釋に。そしてあべこべに支那の現實がヨーロッパ的な凡ての頭腦に混亂を與へてゐることの、今日の、廿世紀的な、最も新しくしてまた歷史的意義深い、目前の事實に立戾つてこよう。そして打倒帝國主義（タータオテイコチユイ）！この言葉の流行性が示してゐる、支那的現實の中に立入つて、その現實のうちから、支那の、國民的

願望と、それから世界の歴史上において支那が受持つべき役割について考へて見よう。

五

支那が一個の殖民地であつたことはたしかだ。阿片戰爭（一八三九――四二年）の時からして今日まで、支那はヨーロッパ的帝國主義のもとにおいて、軍事的な、また經濟的な、あらゆる搾取と暴壓とをうけた。

支那はその主權を失つた。支那の一部は分割され、また支那の他の一部からは支那の主權が完全に驅逐された。支那は帝國主義者の軍事的獨裁のもとに立つてゐた。

經濟的搾取がこれに應じたことはもちろんである。阿片は支那政府の意志に反して輸入され、そして支那民衆の心臓を犯した。阿片戰爭の前後において年々三百萬封度の阿片が輸入されたことの一事に見ても、阿片が支那に及ぼした經濟的、並に精神的な剝削の如何なるものであつたかを知ることは容易だ。

帝國主義の尖端に英國が立つてゐた。自由主義の英國が、それからまた自由貿易の英國が、アジアにおいて帝國主義のピイオニアでもあり、選手でもあつたといふことは、われ／＼には百パーセントの注意を要する。それからロシヤが、アメリカが、日本が支那に來た。

英國と日本とが支那から剝削したものの總計は、優に一つの國を痲痺させるに足るものがある。英國の纖維工業はこれによつて榮えた。勞働者でさへも、殖民地的剝削の餘澤に與つてゐることは、エンゲルスが、英國では勞働者もまた搾取者であるといつてゐることによつて示されてゐる。日本は、日本はこれによつて國を立て、また大日本となり、工業日本となり、今日の帝國的日本の一切の基礎をつくつたといつてよい。

支那はこうして一つの殖民地であつた。列國の帝國主義は支那において最大の殖民地をもつた。砲艦外交こそは、かくのごとき殖民地的存在の最高シムボルだ。

こゝに打倒帝國主義！　打倒日本帝國主義！　かくまでに、自然な反應はない筈だ。こゝに五四事件があり、五三があり、等々がある。もとより何の不思議もない。たゞ一つ不思議がある、何んぞその來ることの遲かりしかといふことの。

周佛海は嘗つて自分の愚著を飜譯したことのある人だ。この人が今日では國民黨蔣介石派の理論的代表者の一人だ。この人の解釋による、支那の對外的態度は、鄙視からはじまつて、排斥となり、それから轉じて畏懼となり、諂媚となり、倚頼となつたと。周佛海「三民主義之理論的體系」は恐らくは事實に近い

であらう。

鄙視から排斥までは、義和團事件によつてシムボライズされてゐる。畏懼から、諂媚、倚頼は、正に殖民地心理だ。そして正にこの時代だ、世界における殖民地的帝國主義の興隆時代を意味するのは。支那では、買辦時代といつてよからう。買辦がこの時代の產物であるばかりではない、この時代の支那精神を如實に代表する、諂媚の、畏懼の、倚頼の、支那精神を。

「打倒買辦！」

買辦の時代は終つた。買辦はその役割をもち、そしてその役割を終つた。支那は數十年間の買辦時代に幕を閉ぢようとはじめた。打倒買辦の時代がきたのだ。打倒帝國主義の時代がこれに應ずる。

支那は、長い間の、畏懼、諂媚、倚頼、それから買辦のまたそれから帝國主義的殖民地の時代からして、打倒帝國主義の時代にと來た。支那はそれ自身の力を知つた。そして帝國主義それ自身の力をも。

私はこゝに支那現實の微妙さを——特殊性と、世界性とを見る。

六

資本主義が、支那の內部に發展してきたことは事實である。支那の若い思想家たちが支那における國民運動の發生と發達とをもつて、支那における資本主義の發展に歸せしめようとする企ては（例へば朱新繁「中國資本主義の發展」同「中國革命の現在與將來」）一個の新しい試みである。

支那資本主義の發展は正に國民運動と相携へてきた。一九一一年の革命においてまた甚だ微弱であつた支那のブルジョア階級は、世界戰爭において飛躍の機會をもつた、日本のブルジョア階級の飛躍的發展が、世界戰爭によつて機會を與へられたやうに。

紡績會社だけでも十六も新設された。製粉工業は四十の會社を組立てた。銀行の數でさへも十行、これ等の資本を合せると一億元である。そして尚ほこれに外國人經營の工業を加へるなら、この數字は倍加されるであらう。

支那の資產階級は自らの翼をもつた。賣國奴的な買辦は、近代的な資本家にとつて代られた。對外的な諂媚が、倚頼が、畏懼が、支那の資產階級の利益と一致するの時代は過ぎた。支那の資產階級は一轉して、外國資本主義との競爭にはいつた。この段階に聲を與へたものが五四運動であり、孫逸仙であり、國民黨である。凡ての不平等條約を廢止せよ！ 關稅自主權を回復せよ！ 租界を撤回せよ！ 打倒帝國主義！ 用意はできた。

マッチはすられた。火は燃えた。孫逸仙は支那の神にまで高められ、廣東政府は武漢へ、南京へ、北平へ、國民黨は遂に天下をとつた。三民主義は支那の新しい精神となり、周禮の代りに「實業計劃」が新しい支那の新しい經典となつた。

「封建主義から資本主義へ」

これが認識だ。凡ての人々がこの認識のもとに立つた。國民黨も、共産黨も、改組派も、流産に終つた第三黨も、それから共産黨の解黨派も。

何が彼等を黨派的に分裂させたか。政權爭奪のことはしばらくいはない。勞農ロシヤが投下した「赤い資本」のこともこゝには問はない、彼等の相違は、社會認識における段階の相違だ、今日の支那が如何なる程度にまで封建主義から資本主義への發展過程にあるかについての。

右翼は怠慢であるかも知れない。左翼は性急であるかも知れない。けれども支那の社會が、封建主義から資本主義への過程にあるといふことの一點においては、みな一致する。マルクスの古るい言葉に聽こう、工業的に進歩した國家は「凡ての後進國の鏡である」と。

蔣介石は浙江財閥の力を知つた。そしてそれの注文に應じて政府を組織した。宋子文が活躍し、張靜江が大黑柱となり、胡漢民先生が「妾婦」となり、孔祥熙が下手な踊りを踊つた。そして遂に産業合理化のフォオド的ラッパをさへも吹き出した。

共産黨はもとより封建主義から資本主義への認識のもとに、彼等の理論を出發させはした。封建主義とアジア的生産方法との區別は否定された。マルクスがしば〱書いてゐる「アジア的生産方法」そのものさへも否定された。そして封建的殘滓の打破といふことの名目のもとに、スタリン的な機會主義は、國共提携を要求し、共産黨の國民黨への屈服を要求し、それから民主主義革命の成功の後に、空を仰いで、社會主義のお天氣がくるであらうことを待ちながら、支那の共産黨に對して、「國民黨のための苦力の役割」を演ずることを命じた。

そこで改めて問ひたい、支那の所謂封建主義なるものは、資本主義への、そして資本主義の脚下に上揚される、一個の階梯であり、支那の社會はヨオロッパのやうに資本主義化し、「工業的に先進の國家」は、支那の鏡となり、そして東方的生産方法も、東方的文化も、ヨオロッパ文明の前に解消して了ふであらうかと。

七

支那の資産階級はなぜに發展したか、世界戰爭はなぜに機會

を與へたか。

この間において、ヨオロッパに革命が頻發したことを、われわれは知つてゐる。ロシヤにおいて、獨逸において、墺太利に、おいて、またそれから伊太利の工場占領において、われ〳〵はヨオロッパの革命的な狂風を見た。ジノギエフのやうな成り上りものが、ロシヤにおいて世界を統治するの時が來たるであらうと考へたことに、何の不思議もなかつた。共産主義がヨオロッパを席捲し、共産主義でなくとも、英國の勞働黨は、自由黨を永久的に打潰して、これに代つた。

勞働者が自覺したためか。萬國の勞働者は團結したのか。勞働者が「支配に適し」たためであるか。

それも一つの理由である。一層に大きな理由は何か、資本主義の疲弊、罷病、衰弱、行詰まり！

資本主義の最も弱かつたところに社會革命の成功したのを見るがいゝ。實に、資本主義の最も發展したところにおいてではなくして、それの最も薄弱なところにプロレタリヤ革命の起されたことについて。

それから尙ほヨオロッパにおいてプロレタリヤ革命の起こされてゐる世界の客觀的狀勢のもとにおいて、支那において、資産階級が翼をもつたことについて一考せよ。

われ〳〵はこゝに一つの鍵を見る、支那資産階級の遙かの發展についても、それからまた支那における帝國主義打倒運動の發生と發展とについても。こゝに解答がある。こゝにのみ解答の可能がある。支那における反帝國主義運動は、支那の內部的發展過程に應じたとともに、世界の新しい過程に應じた。資本主義が行詰まりにと近づいて、それからビスマアク的、チスレリイ的帝國主義が終りに近づいて、帝國主義打倒運動が生れた。帝國主義打倒運動は、凡ての社會的運動と同じやうに、それの可能の客觀的狀勢のもとにおいて、またおいてのみ、生れ且つ發展した。支那における反帝國主義運動の發展は、世界における帝國主義、それからまた實に資本主義そのものの落潮を語つた。

沒落しようとする世界帝國主義に最後の引導を渡すことにおいて、支那における反帝國主義運動の、私は世界史的な意義を見る。そしてこの認識を支那の頭腦にはつきりと印象させたい。

「資本主義の最後の段階としての帝國主義」！最後の段階だ。資本主義が壇の浦にと落ちて、反帝國主義運動が起つた。支那において起つて來た資本階級の勢力についての長々しい說明を止めよう。「資本主義が最後の段階」にと到達した時に、資本主義の勃興を語ることはナンセンスだから。

八

支那の社會が、複雜なことは爭はれない。この複雜性をそのまゝに認識しよう。そのうちの或るものは清算されるであらう。清算されつゝあるものも、されたものも少くはない。

楊樹浦（ヤンジップ）が煙を吐いた。機械工業に代らうとし、自動車と鐵道とが昔の南船北馬にとつて代り、上海が世界都市となつて、南京に中山路が出來た。

ギルドは破滅した。宗法社會は半死の病人となり、昔の老人崇拜から青年中心の世界となり、女性奴隷の代りにアメリカ的フェミニズムの時代がきたかに見える。孔子がこゝに威信を問はれ、佛教が市に暴露された。

封建主義の殘滓といはれるものが日一日と清算されてゐることに疑を挾むものはない。けれども支那が遂にヨオロッパ化するであらうかどうかについては別の觀點がある。

支那は遂にヨオロッパ化するか。支那におけるあらゆる文化は、傳統は、民族性は、それからして「アジア的生産方法」の悉くは、農民的經濟とともに、奇麗に清算されてゆくか。そして支那は、公式どほりに、ブルジョア階級の支那となり、都會の支那となり、中央集權の支那となり、工業主義の支那となり、機械的大量生産の支那となり、それから「資本主義の最後の段階としての帝國主義」の時代に入り、ブルジョア階級とプロレタリアとの一大鬪爭の後に、新しい世界が待つてゐるか。

ヘエゲルがその歴史の體系に一致しないあらゆる事實を切捨てたといはれるやうに、支那の社會的現實のうちから、マルクス主義の公式に適合しないあらゆるものを切りとることは、マルクス主義の「理論的任務」かも知れない。けれども事實は殘る。理論が事實を指導することの代りに、事實が理論に命令する。具體的現實から生れた理論だけが現實に方向を與へることができる。私はこれを純粹現實の名で呼んできた。純粹現實だけが眞實の理論でありうる。われ〳〵にとつての問題は次の一點に歸着する、支那においての純粹現實は何であり、その方向はどこを指してゐるかと。

私はこの問に答へよう、この問題を先づ次のやうな形式に置きかへることによつて——世界の資本主義が最後の段階にはいり、少くとも近づいた時に、支那においてだけ、そして支那の現實だけが、資本主義の方向を命令することが可能であるかといふの。

そしてまた次のやうな形式にこの問題を置き換へてもいゝ、資本主義の發展は一國において可能であるかといふの。既言王

義は一國で可能であるといつてゐるスタリン的な問題よりも、私にはこの問題が一層に重大だと思はれる。重ねていふ、資本主義の發展は一國内において可能であるか。

九

アメリカが一つの答を與へたことは事實だ。アメリカ的資本主義がヨオロッパ的なものに比べて、一個の全然別異な理論を示したことは爭はれない。

「アメリカはそれ一國だけで繁榮することができる」！われわれはこの言葉を大げさだとはいはない。そこに多くの眞理がある。ヨオロッパ的寄生經濟に比べると、アメリカはたしかにそれ一國において繁榮することができる。九百億弗といはれてゐる年生產額のうちで、輸出はたつたその一割にしか過ぎないのを見よう。そして、これを海外市場を目當てにして組織されてゐる英國や、獨逸や、もしくは日本の工業主義に比べて見よう。アメリカの經濟は自給的經濟に向つての原則を示した。そしてまたこれによつて世界經濟の方向を示した。

そのアメリカでさへも、海外にもつてゐる二百五十億弗の債權はどうだ。この債權からくる利息と、權力とはどうだ。

英國に至つてはもとよりいふまでもない。英國の富は、海外市場の經略から成つてゐる、印度の、支那の、埃及の、濠洲の、それから新大陸としての南北アメリカの。世界都市としての七百萬の倫敦の人口は、英國資本主義の、世界的剝削のシムボルである。

工業的に後進の諸國家——實に諸國家だ、諸國家を豫定することなくしては、英國の富も、偉大も、資本主義も、帝國主義も考へることはできない。最初に來たものとしての英國は、無人の野を行くやうに、世界剝削の廣大な機會を獨占した。こゝに英國的自由貿易がある。——自由剝削の貿易が。

自由貿易が英國的資本主義の黃金時代を代表したやうに、今日の保護貿易、ビイバアブルック・ロザミア的帝國運動が、そして勞働政府の存在そのものでさへも、その落潮期を代表する。支那における反帝國運動がかくのごとき落潮期——英國の落潮によつて代表されてゐる、世界的な帝國主義的落潮期において、それ自身を舞臺にのぼせた、この意味深い事實を、も一度考へて見よう。

支那は第二の英國となりうるか。英國は支那の鏡であるか。支那もまた英國のやうに資本主義化し、都會化し、ブルジョアとプロレタリア化し、マルクス的公式の精確さと普遍妥當性とを證據立てるために存在してゐるか。

一切の社會科學的ナンセンスに終りを與へよう。一切のマルクス主義的なエピゴオネンツウムに終結を與へよう。今日は十九世紀ではない！英國的資本主義の黄金時代は終つた！國家的分業といふやうなことも考へられなければ、また世界の工業主義化――英國化――「先進國」化といふごときことは、今日では半世紀前の夢である。支那の兄弟たちよ、先づこの夢から醒めよう。虚心坦懐に支那の現實と、それから支那の現實に反影されてゐる、世界の高度現實とを見よう。そしてわれ〳〵の認識をこの點からはじめよう、支那問題を解釋し、もしくは解決するといふだけではなしに、世界の問題を解決するといふの意氣をもつて。

一〇

私の高調するのは次の一點である、支那の問題は最後の問題であるといふこと、そして、支那の資本主義的存在が、最後に來るものの存在だといふことの。

英國の資本主義が「最初に來たもの」の世界であることに注意を拂はう、それから支那のそれが、資本主義であるにせよ、ないにせよ、「最後に來るもの」の世界であることに注意を向けよう。その間に一時期を劃してもよい。劃した方がより善い。アメリカ的資本主義がこれだ。

アメリカのことは第二である。こゝには英國のそれと、支那のそれと――來りつゝある、また來るであらうところのものと對立させよう。

英國的資本主義が資本主義の典型的形態であることには、どこにも異論がない。これは工業主義である。もしくは工業主義的資本主義といつてもよい。これが自由主義であらうと、帝國主義であらうとは、こゝには問題外であることが必要だ。われ〳〵は先づこれを小社會的・自給的・田舍的・農業經濟に對立させる。近代の産業革命は、工業の革命であることを意味するだけではない。工業が指導する。農業の代りに、工業が、そして工業が商業をも指導する。「商業の優勢それ自身が今日では大工業存在諸條件の優勢をもつて條件とする」といふた、マルクス的資本論の意味もこれだ。英國的・ヨオロッパ的・十九世紀的・初期的・資本主義の本質は、工業主義といふことにある。

工業主義が世界の廣大な市場――廣大な「後進國」を前提條件とするものであることは既に一言した。英國はこの條件をもつて、その工業主義を樹てた。英國における八割の都會人口は、工業主義によつて支持された。英國人口の大多數がプロレタリア化したことは、工業主義の結果である。ところが支那ではど

うだ。支那にはこうした機會があるか。必要があるか、また必然があるか。

殖民地の分割は終つた。「後進國」はそれ自身の工業をもつた。新大陸もまた工業過剰にと轉化した。殖民地においてさへ工業の勃興において世界經濟の潮流に呼應した。それから？ それから新しい大陸は再び發見されない。新しい市場はどこにもない。世界の工業的發展、高度機械、大量生産の面前において、市場は、關係的には、日々に縮小した。帝國主義的な諸國家は、合理化的な失業製造と、それから單調な安物と、それのダンピングとによつてのみ、市場をもとめた。そして、それにもかゝはらず、市場は却つて縮小した。世界の所謂先進國なるものは、日本のやうに中途から、しかし急速に參加し、發展したものでも、行詰まり、煩悶し、涙を流した。

この世界の現實を前にして、支那は工業的な國家となりうるか。支那は第二の英國となりうるか。支那は都會の支那となり、農民は第二線にと引退し、農業經濟の代りに工業經濟がとつて代り、傳統が一掃され、支那四千年の歴史の代りに、ヨオロッパ的イデオロギイが支那をとらへ、孔子廟の代りにマルクス銅像が新支那に君臨し、苦力が資本論を讀むやうになり、――これを要するに、今日の支那はヨオロッパ的資本主義への單なる過渡期であるか。

否、々、々、支那にはかゝる條件の一つもない。必要もない。必然もない。支那がヨオロッパ化するであらうといふごとき、マルクスの時から、或はもつと以前の資本主義者の時代からして、今日まで、世界の頭腦を支配してゐる。そしてこのことが彼等の革命の、もしくはイデオロギイの前提條件となつてゐる、この最も非現代的な、そしてまた最も非現實的な、空中の假定に退却を命じよう。私は支那認識にとつての、またその認識の錯誤をもちきたらしたところの、根本的條件をこゝに見る。くりかへしていふが、支那は、資本主義國の長い系列の間において、最後に來たるものの一つだといふことに、常に注意を怠つてはならない。

二

私はこゝに一つの結論を與へる。支那は遂に工業主義化しないであらうと。

このことは、もちろん、支那の工業が發展の道を辿らないであらうといふごとき、如何なる非現實的なことをも意味しない。却つて、支那は、その工業を發展させるであらうといふことを意味する。支那においての今日のあらゆる條件と形勢とは、支

那における工業の、實に急激であらうと思はれる、發展過程を示してゐる。

世界戰爭中に緒をもつた支那の工業のやうに、多望な前途を示してゐるものは少ない。こゝには資本の集中が乏しいし、交通の不發達からくる障害も、政治的社會的弊害、就中軍閥と匪軍からうける打擊も、容易ならざるものがある。けれども勞働力は過剩である、地大物博である、工業上のあらゆる原料はこゝにある、それから四億の民衆が消費者として手許にある。支那のやうに安價に生産される可能もないだらうし、また販路を自有してゐるものもないだらう。アメリカの一億二千萬に對してこゝは四億だ。

支那には工業がどしどし起るだらう、また既に起つてゐる。その工業が英國を驅逐する、アメリカを驅逐する、日本を市場から追ひかへす、凡ての帝國主義は支那においての市場を失ふに違ひない。英國資本主義の落勢がこゝに倍加されるであらう。日本の産業的行詰まりは日本の破滅へと導くに至るであらう。支那は遂にそれ自身の工業をもち、これによつて完全に獨立を回復するであらう。

國民黨も、共産黨も、北平も南京も、浙江財閥も勞働者も、この黨では一人である。打倒帝國主義(タアタオチエコウチユイ)がこゝに意義があり、またこゝに果實をもつ。支那は工業國としても偉大な國家の列に入るに相違ない、否、世界における最大の工業國とさへなるであらう。

けれどもこの傾向とともに、この傾向への二つの重大な制約を同時に考へないことは、取りかへしのつかない大きな過誤を犯したものだ。支那の資本主義的出發が、世界において最後にきたるものだといふことを、私がくりかへしたのはこの點である。二つの條件とは何か。

支那の工業經濟は、自給以上には出でないであらうといふことが先づその一つだ。支那はその國内に廣大な市場をもつてはゐる。けれどもこれだけだ。これだけが偉大ではあるが、しかしどこまでもこれだけだ。

私はアメリカについていくらかを語つた。アメリカ的經濟が自給的經濟に一つの原則を與へたといふことについて。そしてこの點においてアメリカ的經濟をヨオロッパ的寄生經濟から區別することができると。

ヨオロッパの次にアメリカがきたことは、この點で、意味深甚である。アメリカの次に支那がきたことは一層に意味深い。ヨオロッパ的寄生經濟の行詰まりの後に、アメリカ的經濟が自給的原則への傾向を決定した。そして、支那がこの原則を完全

に實行するものとして立つた。

この點からわれ〳〵はこの點に劣らない、重大な第二の結論を導くことができるであらう。

支那の自給的經濟は、もちろん、支那の國内的需要に應ずるものであるが、この國内的需要の意義は、商品の量にだけ關してゐるものではない筈だといふことがこれである。支那の新しい生産は、國際的商品であることの代りに、國民的商品となるに至るであらう。國際的無政府制の代りに、國民的嗜好、民族性、傳統、歷史が、こゝに反映されるだらう。從つてまた「殖民地向き」のまやかし物の代りに、技術的要素が生産の一方の重大な要件となるに違ひない。

それからもう一歩を進めよう、この種の國民的生産からして如何なる觀念體系が生れるであらうかといふことの。これをマルクス的に上部構造といつてもよい、如何なる上部構造をわれ〳〵は期待することができるか。私はこゝで斷言しても差支ない筈だ、來るべき支那の文化は、國民的生産に應ずる國民的色彩を濃厚にもつであらうといふことを。

二

第二の問題にと移らしめよ。そして最初に先つ結論を與へせしめよ。支那においてはレッセエ・フエエルによつて特長づけられてゐるやうな資本主義の自由た發展も、また資産階級の自由な發展もありえないであらう。

支那においての資本主義的發展が「最後に來たるもの」の世界であるといふ、私のくりかへしての立場は、こゝにおいても、重大なかゝはりをもつてゐる。資本主義の末期において、起つたとき、あらゆる思想と運動とが支那において資本主義的思想と運動とともにきたといふことがこれだ。

支那には、その資本主義への出發において、世界の、少くともあらゆる社會思想が存在する。社會民主主義も、共産主義も、スタリン派も、トロツキイ派も、無政府主義も、それから支那特有の三民主義も、――マルクス主義は、こゝでも本屋の店頭に洪水をなしてゐる。運動のうへからいつても、國民黨左翼があり、聯露運動があり、共産黨があり、解黨派があり、第三黨も問題に上り、勞働組合があり、ジエネラル・ストライキがあり、傳單があり、コミンテルンの命令があり、「赤い資本」があり、社會科學聯盟があり、またプロレタリア文藝と、演劇と、繪畫とがある。レッセエ・フエエルのもとに生長した英國の資本主義と、支那の所謂資本主義とを、この點において對立させよう。かくのごとき條件のもとにおいて、支那における資本主義、

そして資産階級が自由な發展を樂しむことが想像されるか。

しかも國外においてはどうか。ロシヤにおいて、英國において、獨逸において、世界の强大な資産階級は、歩一歩、その地位と、勢力と、希望とを失つてゐる。支那の資産階級は、敵對する帝國主義をその周圍にもつてはゐるが、聯盟すべき仲間をもたない。この微弱な資産階級の運命について一考せよ、それはそれ自體においては、軍閥を打倒し、封建的勢力を打ち潰すことの實力さへもない。支那革命の中心勢力は、早くも農民とそしてプロレタリアの手に移つてゐる。就中、農民が支那の革命において受持つ役割は百パアセントである。この條件を一考せよ、支那の資本主義にとつてのこの客觀的狀勢について。

支那の工業的經濟が國家の手によつて擔當されるにせよ、また資本家階級を中心とするにせよ、われ／＼にとつて明らかに觀取しうる一つの條件がある、支那の資本主義は、資産階級の獨裁下に發展し、もしくは、存在することを許されないであらうといふことがこれだ。蔣介石派でさへも、あの浙江財閥の手先だとまでいはれてゐる蔣介石一派の國民政府でさへも、資本の節制といふことをその重要な看板にしてゐることの事實を見るがいゝ、そして英國政治家の自由放任主義に對して、支那政治家の資本節制を對立させよう、實に支那の資本主義がヨオロッパ的なそれとは全然別個の形想において生存し、また發展するであらうことは、想像に易い。

三

支那において王道的理想が實現されるの時がきたるかどうかを私は知らない。けれども王道的要求は、支那の歷史において死んではゐないし、また將來も死なないであらう。そして上からの王道の代りに下からの王道がきたるかも知れない。支那は善き歷史をもち、傳統をもち、文化をもち、その實行されたとされないとは別とするも、善き國民的理想をもつてきた。私は張之洞的な折衷主義はもとより說かないであらう。大隈重信的な東西文明の調和といふごときことも私の志でない。新しい經濟は新しい舟に乘つてくるに違ひない。新しい現實は實に新しいイデオロギイを産むし、またこれによつてのみ理解されるに相違ない。けれどもこの新しい經濟とは何か、この新しい現實とは何か。國民的需要において條件づけられてゐるものは、國民的な社會形式を生むだらう、また國民的な觀念體系をもつだらう。

私のいひたいことは次の一語に要約してもいゝ、支那はヨオロッパ化することの代りに、ヨオロッパを吸ひとつてしまふだらう。そしてアメリカを超へるであらう。（七月二十二日上海にて）

墮胎論

安田德太郎

一

「私は工場勞働者でありましたが、不景氣風を喰つて昨今失業してゐます。現在では私達の生活は全部家內の勞働で辛うじて維持されてゐる狀態であります。ところが家內は數ヶ月前から姙娠しました。ツハリのために半月ばかり職場を休みましたら、首を馘るぞと嚇かされました。私達は前途を考へて暗憺といたします。先生どうか私に適當な處置方法を敎へて下さい。」

「わたしの主人は肺患のために數年來家でぶらぶらしてゐます。わたしは四人の子供を抱へて、朝から晩まで職業婦人としてやつと一家の生計を支へてゐます。ところが最近姙娠いたしました。今は未だ働けますが、これから先き分娩や產褥のため、わたしが働けなくなれば、私達の一家はどうもかうもなりません。先生何とか私達に適當な方法を敎へていただけないものでせうか。私達には親子心中するより外に方法がないのでせうか。」

かういふ內容の手紙が九州、中國、北陸、東北、北海道の未知の勞働者から近頃私の許にまひこむやうになつた。このやうな注文に對して私はいつでも型のやうな非人情な返事を書く。あなたも私も日本人として法律によつて墮胎を禁ぜられてゐる。私は心からあなたに同情はするが、現在のところ私の力では何とも出來ない。素人流に勝手な眞似をして元も子もなくしてしまつては大變である。今度は何とかして子供を生んで下さい。私はこれ等の人達がその後どうしたかを知らない。ただ私は彼等がプロレタリアートの一員として「未來はわれ等のものである」といふ希望の中に、勇敢に生きて行くことを心から希

望してゐる。

我國現行刑法はその第二百十二條から第二百十六條の法規をもつてはつきりと墮胎行爲を禁止してゐる。懷胎の婦女自らが墮胎をしても一年以下の懲役に處せられる。婦女の囑託を受けて素人がやれば二年以下の懲役に處せられる。さらに又醫師、産婆、藥劑師、藥種商が婦女の囑託を受けて墮胎を行つた時は五年以下の懲役に處せられる。墮胎によつて婦女を死傷に致した場合は實に七年以下の懲役に處せられる。卽ち法律上の根據なしにみだりに墮胎を施してやれば素人でも醫者でも刑務所行きを覺悟せねばならぬのである。

墮胎罪によつて處罰されるものは日本でも毎年可なりの數にのぼる。そして情狀酌量で不起訴に終るものを加へれば、それは非常な數にのぼるだらうといはれてゐる。法律の前には原則的にはブルもプロもないのであるから、ダンス狂ひのブル夫人が因果の胤の始末に窮して、大金を投じて祕密に墮胎を講じたことがたまたまバレて容赦なく法のさばきを受けるといふこともあるが、墮胎罪三百餘件の訴訟記錄を調査した某法醫學者の統計を見れば、墮胎罪に關して世人が懷くところの從來の偏見を棄てねばならなくなる。

何故であるか? 墮胎罪はその大部分がプロレタリアートの生活苦に胚胎した犯罪であるからである。被告の殆どすべてが產業婦人として貧農に屬してゐる。產兒の所置に窮したとか世間や親戚に面目がないとかいふ表面的な理由もあがつてゐるが、私生の被告の大部が自分の家は貧困で生まれた子供の養育が出來ないといふ理由を强調してゐる。公生であつても、夫は病氣で家計困難に陷り自分獨りで生計を支へてゐるためとか、夫が入營して生計困難であるためとか、夫に六ケ月前死別し、赤貧洗ふが如き境遇にあつたためとか、三人の子供がある上に又ぞろ姙娠したためとか、姙娠にはいつも身體が惡いのでこれをのがれたいためとかの理由の下にひそかに墮胎して貰つたといふ實例がその多數を占めてゐる。彼等の施術者がすべて產婆、按摩、鍼灸治業者である。報酬を受けなかつたといふのもある。ほんのしるしと二十錢、三十錢、五十錢の極めて少額の謝禮を受けてゐるのが非常に多い。二圓請求したが貧困のため六十錢にまけたといふのもある。約束しなかつたが二圓だけ無理において行つたといふのもある。錢がないために野菜や米ですまして貰つたといふのもある。すべてがプロレタリア的である。

私は勞働組合や農民組合の鬪士を通して、無產階級の姙娠悲劇を聞く立場にあるが、プロレタリアの產兒の多數のものが一度は墮胎操作の試練を突破して來たことを聞いて戰慄をおぼえ

たのである。たとへば、姙娠したために毎日毎日女房の腹を亭主が足で×つた。併しいくら×つても一向おかまひなしに、お腹がますます大きくなつて行く。女房は悲鳴をあげて何とかして今度だけは子供を生むやうにして呉れと妥協を申込む。かういふ因縁つきの子供がこの坊主でございますと往診のさいに私に披露に及ぶこともある。婦人雜誌や新聞に姙娠中はかくかくの事はやらぬがよいと書いてある。その逆の事を實行する。たとへば下劑をひつきりなしにかけるとか、姙婦に嚴禁すべき不攝生のすべてを勇敢に行ふとかする。たとへば神戸では姙婦で子供が欲しくなければ摩耶山を徒歩で上下すれば子供がおりると俗間でいはれてゐる。そこでわざわざこれを實行する。又可なり高い代價を拂つて通信販賣の通經劑を買つて、ひそかに服用する。かういふ試みがすべて無效であることは言ふまでもない。中にはこれらの試みのために却つて肉體を痛めるものもある。子供を一人生んで間もなく肺尖加答兒をわづらつた年若い女患者がはげしい下痢のためにやつて來た。私とその患者の間に次のやうな問答がかはされた。「何か食物にでもあたつたのですか。」「いいえ別に。」「月經はありますか。」「いいえ。ずつと三月とまつてゐます。」私は下痢の原因がのみこめた。「通經劑などのんではいけませんよ。」私の言葉は命中したのである。患者はうなだれて眼に涙をためた。

二

墮胎は嬰兒壓殺と同じに極めて古いものである。我國古代にも既に墮胎は存してゐた。平安朝時代にも墮胎術があつた。鎌倉時代以後やうやく大衆的に行はれ、徳川時代にはひつて墮胎は最も普遍的なる現象となつた。都市においては「中條流」の女醫者が公然、隱然墮胎手術を生業とした。農村においては「まびき」と稱して嬰兒壓殺が公然に行はれ、又「おろし婆」が貧農の墮胎を擔當した。これらの遺風が現代なほ地方の農村にのこつてゐる。

古代法には墮胎に關する處罰はみられない。日本國民もまた久しい年代を通して墮胎を罪惡とは觀じなかつた。徳川時代においては墮胎は社會的慣習となつて政府も無干渉主義をとつた。領主の苛酷誅求の結果、農村は極度に疲弊し、胎兒を墮し赤子を殺すもの一國十八萬に及ぶとさへ録されてゐる。即ち我國は明治初年に到るまで墮胎公認國であつたのだが、明治十三年にはじめて法律をもつて政府は墮胎を禁止し今日に及んでゐるのである。

墮胎觀の變遷を唯物史觀に立つて考察することは甚だ興味あ

ることであるが、私はここでは單に古代諸國の墮胎觀に觸れるだけに留めておかう。墮胎觀には二つの潮流があつた。第一は墮胎を神に對する罪惡として宗教的見地から禁止したもの。たとへば古代印度の吠陀經、マヌ法典、ペルシャのアヴェスタ、さらにキリスト教はこれに屬する。第二は墮胎を罪惡視せず、むしろ奬勵したもの。古代ギリシャ、ローマはこれに屬する。

ギリシャにおいては墮胎は大衆的に行はれた。墮胎は決して罪惡とされなかつた。哲學者は墮胎を自然なるものと觀じ、奬勵すべきものとさへした。プラトンは四十歳以上の婦女はすべて胎兒を墮すべき義務があると唱へた。アリストテレスもまた墮胎を奬勵した。スパルタでは墮胎よりもむしろ嬰兒殺しが廣汎に行はれた。生まれた子供はすべて氏族の長老によつて吟味され、虚弱な嬰兒は自由に淘汰された。ギリシャでは墮胎手術は非常に發達してゐた。ギリシャでは女醫者が非常な勢力を持つて墮胎の領域を一切擔當してゐた。産婦人科方面が專ら女醫者によつて獨占されてゐたために、ヒポクラテスの婦人病書は臨床的經驗において非常に貧弱であるといはれてゐる。女醫者はギリシャ時代において非常に尊敬され、中には傑出したものもあり、又科學的著述をものしたものもあつた。

ローマでは、ギリシャとは少なからずその趣を異にしてゐる。ローマ人は哲學的にはストア派に屬してゐた。胎兒は固有なる存在を持つものでなくて、腹の實であり、母の一部であり、母の肢體であつた。さらにローマの家族制度では父に絶對權が賦與されてゐた。從つて墮胎を認める認めぬは家長の自由であつて、國家權力もこれに向つて何の干渉も持たなかつた。即ち哲學的にも法律的にも墮胎は公認されてゐたのである。ローマにおいても墮胎專門業があつた。これはサゼーとよばれて專ら産婆が擔當してゐた。墮胎は廣汎に行はれた。夫が子供を欲する時は、妻がこつそり墮胎しないかと心配のあまり見張番をつけたといふほどである。ローマでは父は息子を賣ることも、棄てることも、殺すことも自由であり、從つて母胎内の胎兒を殺すことも自由であつた。ただ夫の許可なくして妻がみだりに墮胎を行つた時だけが犯罪となつたのである。

セプチミウス・セヱルス王の時代にはじめて國家權力をもつて干渉して墮胎を處罰するやうになつたが、婚姻外の墮胎は自由であつた。夫の許可なくして墮胎を行つた妻は短期間の流刑に處せられた。

キリスト教はその起源よりして墮胎を禁止してゐる。胎兒も不死の生物である。嬰兒厭殺と等しく墮胎も罪惡と觀ぜられた。併しこれは人道主義的な觀點からではなかつた。胎兒も生

ける人間として罪劫を背負つてゐる。この故に洗禮を受けることなしに死去する時は、胎兒といへども永劫の地獄に落ちなければならぬからである。併しかういふ公認哲學が一般大衆に浸潤しなかつたのは當然である。從つて歐洲中世紀にも嚴密なる禁止がなかつたのである。

墮胎禁止法適用にあたつて興味のあるのは、胎兒は受胎後何日目から魂がはひるかといふ問題である。アリストテレスもこれを問題とした。ギリシャではあるものは四十日説を唱へ、あるものは六十日説を唱へた。ローマでは魂のはひらぬ胎兒の墮胎は犯罪とはならなかつた。十五世紀の寺院法では墮胎を行つたものは死刑に處せられた。併しこれは魂のはひつた胎兒だけに限定されてゐた。だから受胎後六週乃至十週以内の墮胎は犯罪とならなかつたのである。歐洲における墮胎禁止法は十八世紀になつてはじめて成立したのである。即ち墮胎禁止と資本主義制度には甚しく密接な關係が存在してゐる。

三

以上のやうに日本では墮胎は法律をもつて禁ぜられてゐる。ところがただ一つ例外がある。即ち刑法第三十五條の、正常の業務に因り爲したる行爲は之を罰せずといふ條文に準じて行ふところの、醫師の手による姙娠中絶である。從つて非醫者にはこの權利が絶對にないのである。勿論醫師とて無暗矢鱈にこれを行ふことは出來ない。胎兒を犠牲にして母體の健康を保つといふ、即ち醫學的適應症の範圍内においてのみこれを行ふことが出來るに過ぎない。即ち我國現行刑法は狹義の純醫學的適應症における墮胎だけを許可してゐるのであつて、社會的適應症の見地よりの墮胎は絶對に許可してゐない。貧困だとか、強姦されたとか、子供が多いとか、離婚になつたとかの理由をもつて姙娠中絶を行ふことが出來ない。獨、佛、英ともに社會的適應症を認めてゐない。ただチエッコスロバキヤでは社會的見地よりの墮胎が公認されてゐる。たとへば婦女が養育すべき子供三人以上を有する場合とか、婦女が既に五回の分娩を經過し、これ以上分娩することによつて生計が脅される場合は、墮胎を合法的に行つて貰ふことが出來る。

醫學的適應症の下に醫師によつて墮胎を受ける患者數は我國でも年々遂次增加して、その人員は莫大な數にのぼると想像出來る。婦人科醫を洗滌醫者とかおろし醫者とよぶ程の世の中である。現代の婦人科醫は、形態こそ違へギリシャの女醫者、ローマのサゼー、徳川時代の中條流おろし屋の職業を擔當してゐる有様である。子宮癌專門では餘程の大家でなくては家が建た

ない。從つて普通一般の婦人科醫は姙娠中絶を歡迎しなくては、まとまつたボロい金儲が出來ない。掻爬手術さへしつかり身につけておけば一人前の婦人科醫として立派に開業出來るといはれてゐる。ことほどさやうに現代では姙娠中絶手術が患者から要求されるのである。婦人科學者ブンムによると、伯林で姙婦は毎年五萬にのぼり、そのうち合法的に姙娠中絶をするものが一萬に達してゐる。これに加へて非醫者による非合法的姙娠中絶を算すれば非常な數にのぼるだらうといはれてゐる。たとへば伯林だけでも、素人流墮胎によつて死亡する女が毎年一萬五千人にのぼるとさへ報ぜられてゐる。

問題は所謂醫學的適應症である。この範疇は今日でも議論の餘地がある。姙婦が何等かの生命にかかはる危險狀態、たとへば重症のツハリ、子癇、心臟疾患、腎臟炎等々を發して、これ以上姙娠狀態を持續することが、母體の破壞を招くといふ場合は、無條件に醫學的姙娠中絶を行はねばならぬ。この適應症に對して何人も異論を立てるものはない。吾々に問題となるのは結核等々に對する豫防的な相對的な人工流產である。

醫師に許される合法性は醫學的適應症の範疇のみであるから、胎兒が公生であるとか私生であるとかの差別は醫師の問題でないのである。

ある婦人があつた。結婚して半年目に夫に棄てられて實家に歸つた。ところが姙娠してゐることが分かつたが、今さら何としても追つかない。實家は貧困で、母親と二人で間借をしてゐる。父なし子が生れては明日から生活が出來ない。何とかならないものかといふ相談を受けた。私はさういふ理由では婦人科醫のところへ行つても手術などして吳れない。併しはつきりした病氣さへあれば喜んでして吳れるだらうといつた。子供時代に重症の僂麻質斯にかかつてそれから心臟が惡くなつてゐるとの話であつた。診察すると立派な心臟辨膜不全症であつた。そこで私はどこかはつきりした官公立の病院へ行くやうにすすめた。それから人傳に聞いたのであるが、その婦人がその後さる病院を訪れたところ、こんなひどい辨膜不全症ならどうしても今のうちに中絶しなければならぬ、と醫師の方からすすめられて、彼女が望むとほりに父なし子が免ぜられたのである。

ある婦人があつた。結婚して一年目に夫に愛相をつかして實家に逃げ戾つた。あんな放蕩な夫のところに歸るぐらゐなら死ぬ方がましだと泣いた。そこできつぱりと離婚の手續をとつてしまつた。ところが實家に歸つて間もなくツハリが現れた。醫者にみて貰つたら姙娠三ヶ月であつた。事情を打開けたら醫者も非常に同情して官立病院の診斷書を貰つて來たら中絶手術を

してあげようと約束した。その結果父に伴はれて病院にやつて來たのである。私は診察したが娘は非常に健康でどこを探つても病氣がなかつた。そこで私は健康といふ診斷書は書けるが病氣といふ診斷書は書けないと言つた。ところが娘の父が非常におこつた。私達父子はかういふ悲慘な立場にある。婦人科のお醫者は私達に同情して内科醫の診斷書を貰つてこいといはれた。それだのにあなたは私達に何の同情も示して呉れない。あなたの診斷書一枚で娘の生涯が救はれるのだと。私とて無論大いに同情はするが、同情のあまりうその診斷書をかけば私の方がひつかかると説明して、きつぱりとことはつてしまつた、その娘がその後どうしたかを私は知らない。

　卽ち同じ境遇にあつても前者は幸運にも心臟瓣膜不全症のため父なし子を生むことをまぬがれ、後者は不運にも無病息災であつたために父なし子を生むべく餘儀なくされたのである。

　肺結核は立派に姙娠中絶に對する醫學的適應症になりうる。そこで現今廣汎に行はれてゐる豫防的人工流產の適應症の大部はこれに屬してゐるのである。喀血したとやつてくる。發熱もなければラッセルも聞えぬ。といつて科學的には初期結核における喀血に發熱があつたりラッセルが聽えるものときまつてゐない。初期結核だと相手にせず中絶手術を拒否してしまふと、姙娠末期や產褥期に病勢が急に惡化して、醫師の無責任を糾彈される場合もおこつてくる。そこで現代の婦人科醫は初期結核も姙娠四ケ月に中絶手術を行ふといふ大勢になつてゐる。

「適應症を決するにあたりては、全然醫學的見地に立ち、毫も社會的事情を顧慮すべからず」と日本の法醫學者は仰せになるが、これは全然患者の脈をとつたことのない基礎醫學者の言葉である。結核の豫後をきめる上に患者の社會的事情ほど重大な因子はないからである。一度勞働者住宅に往診するとよい。一度水平社××に往診するとよい。百聞は一見にしかずである。ここに肺尖加答兒の女患者があつたとする。患者はプロレタリアである。日光もはひらない、ジメジメした細民長屋にくすぼつて惡い食物をくひながら寢たり起きたりしてゐる。ここにブルジョア令夫人があつたとする。肺尖加答兒のために金に飽かして轉地、サナトリウムと、現代醫術の粹を集め、一流の主治醫を招じて靜養につとめてゐる。病氣は同じ結核であつても、社會的事情によつて豫後は斷然と違つてくる。若し姙娠中絶を持ちこまれた場合、適應症としては前者の方にうんと强味があることは大家の鑑定を仰がなくても決定出來る。ところが現實ではどうであらうか。前者の患者がみすぼらしいみなりで婦人科醫を訪れると「肺尖ぐらゐで中絶手術をしなくてはならぬとい

ふ理窟はない。そんなことをすれば俺は警察から睨まれること態よく拒否される。ところが後者の女患者が盛裝して行けば、「はは。そいつはいけませんな。肺尖をすてておくと產褥期にはひつてから病氣が進んで大變なことになりますよ。三ヶ月ですね。よろしい。早速に中絕手術をやつてあげませう。」ブル患者はかくの通りに歡迎される。ブンムでさへかういつてゐる。「同じ結核性變化でも、裕福なる婦人と貧困なる婦人においてその醫學的適應症のつけかたを變へなくてはならぬ。それは同情からでない。結核の恢復に對して社會的環境が重大なる條件であるといふ知識からである。」

警察の墮胎罪摘發は專ら私生の姙娠中絕に集中されてゐる。ひつかかるのは私生兒にからまる墮胎である。だから醫師は私生の姙娠の人口流產を非常におそれる。十六歲の娘が私通のため姙娠した。ある婦人科醫が立派な醫學的適應症があつたので二名の醫師立會の下に中絕手術を施してやつた。ところがこのことが同業者の手から警察に密告されて問題にされた。大體辯護士と醫師ほど仲間同士の鬩牆のはげしいところはない。密告、デマ、中傷がさかんにとばされる。かういふ事情から工場地帶で開業する婦人科醫は、工女の姙娠中絕は問題がおこるとうるさいとの理由で、たとへどんなに立派な醫學的適應症があつても一切拒絶してゐるといふ話も聞く。勿論三十圓、五十圓といふまとまつた金が工面出來ないプロレタリアートの女はこのやうな恩惠に浴することは出來ないが、たとへお金をつんだところで產業婦人は身分が卑しいために中絕手術を拒否されるのが日本の現狀である。

四

最後に各國の墮胎禁止法の現狀を見よう。

日本の法律は佛蘭西法の飜譯であつたために、墮胎刑法もまた佛蘭西刑法そのままであつた。即ち日本の國狀に即しない、キリスト敎的影響を多分に含んだ外國刑法の條文が明治十三年以來日本臣民に適用されたのである。大體佛蘭西でも獨逸でもその内容は同一であつて、墮胎を禁止しこれを犯すものは處刑されることになつてゐる。英吉利でも墮胎は禁止してゐるが、姙娠三ヶ月以內において行はれた墮胎の處斷如何は裁判官の任意となつてゐて、大體に處罰されるものは極めて稀有である。卽ち英吉利は日、佛、獨と異つて、三ヶ月までの墮胎を默認してゐる。

獨逸では夙くより墮胎禁止法改正が叫ばれて、法律家、醫學者も論議し、それが一つの社會運動となつてゐた。歐洲大戰後

獨逸は新しく共和國となつたが、墮胎禁止法の徹底的改正は見られなかつた。ただ獨逸社會民主黨が墮胎現行法の改正を綱領に掲げ、姙娠の法律的解釋を四ヶ月とし、姙娠三ヶ月以内の人工流産は各自の自由に任すべしといふ修正案を提出してゐるが、これも現在のところそのまま握り潰しになつてゐる。一方獨逸プロレタリアートは刑法第二百十八條の撤廢を戰ひとらうとし、この運動は産業合理化による失業の增大、プロレタリアの極度の貧困化と共にますます盛になつて行く。最近の事件を述べよう。

上シュレージーン州の小都市ヒンデンブルグで本年三月正服私服の警官隊によつて三百名の婦女子が疾風迅雷に檢擧された。それはアルブレヒトといふ婦人鬪士が數年間祕密に非常に多數のプロレタリア婦人に墮胎を行つてゐたことが暴露したためであつた。アルブレヒトは純粹のプロレタリアであつた。自らの階級の姙娠悲劇や生活苦、失業苦を見るにつけ、斷乎たる決意の下に醫學的中絶手術を習得して、すべて無料でもつて無産婦人に墮胎手術を施行してゐたのであつた。公判の結果三百マルクの罰金刑が宣告された。併しアルブレヒトは法廷において冷然として裁判長に向つて、わたしはかやうな××裁判に屈服出來ない、わたしは恥知らずな刑法第二百十八條に身をもつて××するのであると叫んだ。ヒンデンブルグでは八千の失業者群があふれてゐた。親子心中、棄子、自殺が急激に增加して行つた。彼女に對する同情は翕然と集まつた。全プロレタリア層は異常なショックを受けた、忽ちに抗議運動がまきおこされた。我等のアルブレヒトを奪還せよ！　犧牲者三百名を即時釋放せよ！のビラがまかれた。四月八日には二千の大衆が裁判所におしかけて、墮胎禁止法××！　××裁判絶對反對！を叫んだ。

しからばサヴエート・ロシアではどうであるか。一九一七年十月サヴエートが樹立されるや、勞働者農民の政府は直ちに墮胎禁止法の撤廢を宣言した。それは男女の社會的、産業的平等のカンパニアの當然なる歸結であつた。墮胎の字句はサヴエート刑法から影を消した。かくてサヴエート・ロシアは世界唯一の墮胎××國となつたのである。三年間の實驗から非醫者による墮胎手術が感染の危險を伴ふことが認められたので、サヴエート政府は一九二〇年十一月十八日に新しく布告を出した。即ち、サヴエート國立病院で絶對に無害な墮胎手術を行はしむること、醫師に非ざる者に對しては墮胎手術の實行を嚴禁すること、墮胎を行つた産婆は資格を剝奪すべき事、營利の目的をもつて祕密に墮胎を行つた醫師は罰せられることが規定された。

一九二二年六月一日に發布された刑法典第百四十六條による

と墮胎は次の如き場合に有罪となる。第一に懷胎婦の承諾なくして行ふ時、又は營利の目的で行ふ時は五年以下の强制勞働に處せられる。第二に婦女の承諾あるも、醫學的資格なきものが手術したる時、又は醫學的資格あるも、完全に消毒したる醫療機械を使用せざる時は一年以下の强制勞働に處せられる。第三に婦女を死傷に致した場合は五年以下の强制勞働に處せられる。一九二六年に發布され、一九二七年一月一日から實施された改正刑法典第百四十條は大體前記の内容をはつきり限定したものであつた。

明確な理由なしに母性を拒否する婦人も出て來たために、一九二四年に地方委員會が各地に設立されて、墮胎を希望するものは委員會に申し出て資格檢査を受けることになつた。この委員會は一人の醫師及び一人若くは一人以上の婦人委員からなつてゐて、前者は醫學的方面を擔當し、後者は社會的、經濟的方面を擔當する。この委員會は一週一回開かれる。公然許可されるものは、第一に職業紹介所より補給を受けてゐる獨身の失業婦人、第二に既に一人以上の子供を有する獨身の勞働婦人、第三に多數の即ち三人以上の子供を有する勞働婦人、第四に多數の子供を有する勞働者の妻女、第五に獨身の農業婦人及び多數の子供を有する農民の妻女、第六に社會保險に加入せるその他の婦人となつてゐる。

人口凡そ三萬の都市では全姙婦の約二〇パーセントが地方委員會に墮胎を申し出で、そのうち一八パーセントが許可されてゐる狀勢である。遠隔の農村においては非合法的墮胎も旺んに行はれてゐる。かやうにして三年間に五萬五千の合法的流產が行はれ、又非合法的墮胎は六萬七千にのぼつてゐると報ぜられてゐる。墮胎公認の結果として、棄子が著しく減少し、乳兒死亡率がはつきりと遞減した。資本主義列國の强制母性に對立して、そこには永遠に自由なるサヴェートの母性が光り輝いてゐる。プロレタリアート婦人は姙娠悲劇から完全に解放された。

現代××を襲ふ失業の洪水、姙娠、分娩、育兒にからまるプロレタリアの窮乏化、親子心中、棄子、自殺、しかも一方において貧困による墮胎は禁止され、貧困による產兒制限すら彈壓されようとしてゐる。だが歴史ははつきりと吾々に新しい展望を示す。荒れ狂ふ嵐の中を××のプロレタリアートもまた墮胎公認の世界を××して行進しつつある。（一九三〇・七・二二）

全國大衆黨の結成

堺利彦

モット深く、モット強く、モット大膽に、或はモット主我的に書く人のものに對する、多少の參考(或は補足)にはなるでせう。

一

中央公論編輯諸君。

諸君は僕に、全國大衆黨成立までの經過を語れと註文された。それは僕に取つて大なる光榮である。然し諸君、同時にそれは、僕に取つて、色々の意味に於いて可なり困難の仕事でもある。

フト思ひだした漢詩の二句がある。「廬山の眞面目を識らざるは、只だ身の此の山中に在るに緣る。」少し立ち離れて見た方が、眞面目は善くわかるのだらう。

然し、山中に在る者が全く山を知らないと云ふわけにも行かない。又どこまでか知つて居るには相違ない。だから僕は今、出來るだけ率直に、自分の觸れたまゝ、聞いたまゝ、見たまゝを、荒筋だけ書きつけてみる。

二

今年春、總選擧の後、私は「落選の報告」に於いて、次の如く云つた。「我々はこの大失敗を却つて絕好の機會として、こゝに無産黨大合同の機運を作りいだす事が、最も切迫した眼前の急務であることを痛感」すると。

實際その後、合同の機運は急速に諸方面から動いて來た。私の直接の關係としては、安部磯雄、島中雄三、松谷與二郎、堺利彦等の會合の間から、先づ「無産黨合同促進協議會」が生れた。世間からは「長老會」と呼ばれてゐた。少し後には、河上肇、水

谷長三郎、賀川豐彦、下中彌三郎等の諸氏もそれに加はつた。各黨の長老が網羅されたわけであつた。

これに對し、一方には各黨の靑年分子を網羅する『合同促進靑年協議會』が生れた。靑年分子と長老分子とが、各黨の幹部を兩方から挾み打にして、合同を促進するといふ形勢であつた。

各黨の幹部としては、先づ勞農黨が『無條件合同』を提唱した。然しこれは、從來の征服主義、他黨排擊主義からの、餘りに急激な變化であつて、只外形上に合同主唱のイニシエチヴを取らうとする、例の筆法だと目された弱點があり、實際上、依然として『批判の自由』を何處までも保留すると頑張る難點があつた。そこで社民黨では先づハツキリ勞農黨を相手にせぬ事に決定し、只だ大衆黨のみに向つて合同の協議を持ちかけた。大衆黨は『全合同を最善の方針』と認めたが、それ以上の態度は容易に決定せず、只社民黨に對し全無產黨の合同協議會だけを勸告したが、社民黨が(既に豫想されて居た通り)それに應じないので、話は自然その儘になつた。

その時、全國民衆黨は直ちに先づ勞農黨の提唱に應じ、他の諸黨に對しても參加を勸告した。元來、各派對立の情勢上、全民黨こそが、(新たに社民黨から分離獨立して、諸方から引張凧になつたといふ情勢上)、先づ全合同を提唱すべき最も適當な地位にあり、我々も實はそれを切望したのであつたが、勞農黨がその不適當な地位にも係はらず、敢て自ら進んで提唱の功を立てようとしたのは、誠に惜しい事だつた。然し全民黨がそうした事情にも係はらず、おとなしく勞農黨の提唱に應じて、全合同の大義名分に從つたのは、誠に喜ぶべき成行であつた。

次に私共の屬する『無產政黨戰線統一全國協議會』(京都、奈良、神戶、大阪、廣島、愛知、千葉、岩手、宮城、秋田、東京、十一黨の結合體)も亦、最初からの無條件合同論者であるので、當然、喜んで勞農黨の提唱に應じたが、然し勞農黨の、從來の謂ゆる『戰鬪的統一』(征服主義、切取主義)の『野心』を指摘し、それに反對する意味での無條件合同たるべき事を明示した。

そこで要するに、勞農黨は合同を主唱したけれども、その誠意が見えず、社民黨は又、どうしても勞農黨と共に合同を議する意志がないといふ實情であつた。そして、それ以外、全民黨は社民黨から分離したばかりだといふ事情があり、統一協議會の一部たる私共の東京無產黨は、これもツイ先ごろ、大衆黨から分離したといふ關係にあり、そこらにも合同の難點が存してゐた。從つて合同運動は、止むを得ず、暫らく『停頓』の形であつた。

三

これより先、三月六日、大阪中島公會堂に『合同促進演說會』の催しがあり、私も招かれてそれに出席した。外には勞農黨の細迫兼光君、全民黨の古野周藏君、社民黨の馬嶋僩君、無產大衆黨の中西伊之助君、大阪無產大衆黨の栗須七郎君などが演說した。

その日、大衆黨の河野密君等數人も大阪行の途中で、私等と同じ汽車であつた。但し河野君等は演說會の爲でなく、別に合同問題に關する要件の爲であつた。

當時、大阪の森戶辰男君等は、謂ゆる『單獨合同論』者として、大衆黨と全民黨との二黨合同を力說し、强くそれ以上の大合同を危ぶんで居られた。河野君等も大體その立場であつたと思はれる。私は公會堂の演說で全合同の必要を說き、この際、二黨のみの合同がそれの第一步とならず、却つてそれの妨げとなるべき事を注意し、勞農黨も今日では、既に多少の變化を生じてゐる筈だから、その變化さへあるならば、我々もそのしりへに從つて、相共に合同の爲に働き得る筈だと語つた。

『六日の大阪は「、『無產黨合同デーの如き觀を呈した』とは、『東日』の『大阪發電』が傳へた言葉であつた。

その日、私はつくづく感じた。河野君と私とは、黨の關係上、云ふまでもなく餘り面白からぬ關係にある。現に全合同と單獨合同との對立もある。然しそれでも、同じ汽車の同じ室で、談笑しつゝ一夜を過せば、決して惡い氣持はしないものである。更に總選擧の運動中の事を想へば、候補者の立會演說に呼出された時、現に私はこう云つた事もある。これは決して、我々がシノギを削つて居るのでなく、實はこれが、他日の親和結合の第一步であるのだと。實際そんな氣持がした。又そうでなければならないのであつた。

然し事實上には、やはりしばらく合同が「停頓」するより外なかつた。

四

四月廿五日、全國民衆黨では、「幹部を代表する田萬淸臣、山內鐵吉、兩氏」が大阪から東京に來り、『在京の同黨宮崎龍介氏等と徹宵協議の結果、』全民黨、大衆黨、協議會の「三黨合同を急ぐことに決し、勞農黨に對しては」その提唱の『合同協議會へ參加することを取消した。』

大衆黨でも、廿六日急に中央執行委員會を開き、勞農黨の合同提唱を拒絕すること、全民黨と協議會に對しては、直ちに合

同を申込むことを決議した。

私共の協議會としては『停頓』中に於ける、この形勢の急轉に少しく驚いたが、もちろん兩黨の態度に反對する理由はなかつた。勞農黨提唱の合同協議會については、既に全民黨が參加を取消し、大衆黨が拒絕の答を與へた以上、我々の參加も事實上、消滅したものと見て差支はなかつた。そこで我々は、引續いて何處までも猶は全合同の爲に努力しつゝ、遂に止むなくば、一先づ三黨合同に落ちつくべき事に決定した。だから我々としては、三黨合同は只だ全合同の第一歩を意味するに過ぎなかつた。

かくて我々は大衆黨および全民黨から、正式に三黨合同の申込を受け、前記の意味に於いて合同協議會に參加した。

五

所で、この三黨合同案と、全合同案と、單獨合同案（卽ち二黨合同案）との關係を理解する爲には、先づ少しく、當時に於ける無產黨と勞働組合との關係を知る必要がある。

當時、大衆黨を支持する主要な勞働團體は『勞働組合全國同盟』であり、全民黨を支持するそれは『日本勞働組合同盟』であり、若しこの二つの大組合が合同するなら、實に未曾有の大勞働團體を現出させ得るわけで、それ以外は總て比較的小組合に過ぎないのだから、その大勞働團體が一旦成立しさへすれば、それに依つて勞働組合の全合同が明かに期待され得るわけであつた。そこでその大希望の下に於いて、漸次その計畫が遂行されつゝあつた。そして後にそれが、六月初、遂に『全國勞働組合同盟』の新名稱を以て實現されたのであるが、その計畫の進行中、その趨勢を政黨界に移して、兎にかくこの際、少なくとも一應、大衆黨と全民黨とを合同さすべきだといふ註文を生じたのは、それもまた無理のない、自然の成行だつた。

謂ゆる單獨合同論（卽ち二黨合同論）が生じたのには、實際こうした事情があつた。初め、全民と大衆の二黨以外には、京都の勞農大衆黨、私共の東京無產黨など、個々の小政黨が存在するばかりの如く見えて居たに相違ないので、しばらくそれを無視する傾向を生じたのも、あながち無理ではなかつたかも知れない。

然しその間に、地方政黨は急速の發展を遂げた。卽ち三月の中旬には、勞農大衆黨、千葉勞農黨、宮城無產黨、岩手無產黨、中國無產黨、大和無產統一黨の六黨が、新たに東京無產黨、大阪無產大衆黨、秋田無產黨、愛知無產黨、神戶統一無產黨の五黨と結合して、合計十二黨を含む全國的大團體となつた。そして事務局が新たに東京に置かれ、役員が任命され、機關紙が發

行された。この新團體が卽ち「無産政黨戰線統一全國協議會」で、水谷長三郎氏がその書記長となり、私が議長といふ事になつた。これはもはや、無視されるには少し大きすぎる組織體であつた。そこで後には三黨合同案をも作りいだす形勢になつて來たのである。然るに單獨合同論者の中には、この發展の事實をも無視し、或は誤算して、やはり飽くまで二黨合同案に立てこもらうとする者もあつた。

又一方、組合内に於ても、最初から可なりに全合同論があり、それが政黨側の形勢の發展につれて、やはり同じ傾向の發展を見る事となり、そこで結局、全合同說が段々優勢となり、それが又一轉して最後に三黨合同說を産みいだしたわけである。

今一つ、組合關係について、考へておくべき事がある。先年の「七黨合同」の時には、「農民組合系」と「組合同盟系」との對立の形があり、前者が遂に優勢を占めて中心勢力を作つたのだといふ見方もある。然るに今度は勞働組合側が大合同の勢ひを以て、農民組合側以上の實力を示したので、そこに種々なる形勢の變化を生じて居るといふ見方もある。從つて今度の合同には、前の合同に比べて稍や進歩的な氣分が多く、今度の合同の内部に在つても、農民組合系の分子は勞働組合系の分子に比べて、稍や保守的な傾向があるのではないかとも考へられる。そこらにも、やはり、單獨合同と全合同、二黨合同と三黨合同との對立關係を生じた原因があるのかも知れない。

六

かくて三黨合同は一擧にして實現さるべく期待されて居たが、扨て實際には可なりの、種々なる行惱みもあつた。

三黨はそれぞれ合同委員を擧げて、合同協議會を持つたが、その進行は必ずしもスラ〳〵と運ばなかつた。

合同委員の顏ぶれは、大衆黨が松谷與二郎氏、山名義鶴氏、河野密氏、淺沼稻次郎氏、坂本孝三郎氏。全民黨が宮崎龍介氏、田萬淸臣氏、阿部茂夫氏、古野周藏氏、茂野××氏。協議會が鈴木茂三郎氏、水谷長三郎氏、岡田宗司氏、村井一夫氏、今野賢三氏。そして數回の合同協議會と、小委員會とが開かれた。もちろんそこには遠慮もあり、不遠慮もあり、隱忍もあり、押强さもあり、妥協もあり、衝突もあつた。私共の地方政黨殊に東京無産黨に對する處置などは、はじめから可なりの難問題だつたらう。種々なる流言もあり、誤解もあり、臆測もあり、疑懼もあり、術策もあつたらう。しかしそれも結局、どうやらこうやら解決された。役員のふりあて、黨名の選定など、ずいぶん六かしかつたらう。くわしいイキサツは、私は聞いて居な

いが、兎にかく全民黨の合同員が袂を拂つて大坂に引きあげたほどの混雜も一度はあつた。協議會側では、そのお蔭を蒙つて居る點が少なくないかも知れない。

然し七月二十日午後、合同大會は遂に芝公園の協調會館に開かれた。

七

合同大會の經過。大衆黨書記長河野密氏の開會の辭。議長に松谷與二郎氏(大衆黨)、副議長に宮崎龍介(全民黨)、水谷長三郎(協議會)二氏の就任。山名義鶴氏(大衆、合同委員)の合同經過報告、淺沼稻次郎(大衆)、田萬清臣(全民)、水谷長三郎(協議)三氏の各黨情務報告。次に三黨代表としての麻生久、宮崎龍介、堺利彥三氏が壇上に並び立ち、代議員、傍聽者、總起立の中に、左の宣誓文が朗讀され、『感激の拍手のあらしは立並ぶ四百五十五名の代議員の胸をひしく\と打つかに見えた。』實に一個の『劇的シーン』であつた。(そして私はその朗讀の任に當るの光榮を有した。)

『日本大衆黨、全國民衆黨、無產政黨戰線統一全國協議會は全大衆の名に於いてここに合同を嚴粛に宣誓す』

如何にも『嚴粛』な『宣誓』であつた。こうした感激の溢れがあつてこそ、初めてこの、疑惧と、不安と、行悩みと、衝突との後に於ける合同の成立が、安心を以て信頼され得るのである。

次に綱領、政策、規約、宣言、黨名等が可決され、役員が發表された。政策と規約は省略するが、綱領と宣言の大要だけ、ぜひこゝに載せさせてもらふ。

△綱領 一、我黨は勞働者、農民、無產市民、その他一切の被壓迫大衆の利益を代表す。一、我黨は有產階級の壟斷する政治的、社會的、文化的、諸制度を改革し、無產階級の解放を期す。一、我黨は無產大衆の合法的組織力を以て之が目的達成の爲に闘ふ。

△宣言 資本主義が世界的恐慌を乘り切らんとする必死のもがきに對し、我が無產階級が取るべき唯一の正しき方向は、只被壓迫大衆の强固なる戰線の結成にある。我々が今こゝに合同政黨の結成を見たのは、大衆が如何に熱烈に戰線統一を要求して居るかを、決定的に實證したものである。我が合同政黨は決して獨斷的な指導原理を大衆の上に强制するものではない。故に我々は常に、あらゆる分裂主義的傾向に反對し、飽くまでも共同戰線黨たる我黨の本質を擁護することを宣言する。三黨の合同は即時に實現せられ得る最大限度の合同である。同時にこの合同は即ち全的合同への第一步である。然し我々は今、社民勞農兩黨の大衆諸君と直ちに握手し得なかつた事を大なる遺憾とする。そして我々は必ず近きに、諸君をその分裂主義の手から解放し得ることを信じて疑はない。日常闘爭を通じて合同政黨の擴大强化に努めよ。(大要)

綱領の內容は、從來の多くの無產諸黨と別だん異なる所はない。私はその異なる所のないのを見て買ふ爲に、特にこれを揭

載する。中んづく『合法的組織力』とすら明言して居る點を見て置いて貰ひたいのである。

そこで次に『宣言』の内容が問題になるが、私は先づこの宣言が、特に強く『戰線統一の要求』を說き、『共同戰線黨』の本質を語り、明かに他の『分裂主義的傾向』に反對して居る點を喜ぶものである。そして次に私は、この宣言が、『三黨の合同』を以て『即時實現の最大限度』と認めながら、同時に又、更にその步を進めて、社民勞農二黨の大衆に呼びかけ、近き將來の結合を約束して居る點に於いて、殊に又大いなる滿足を感ずるものである。猶この點は後に再び話す。

八

次に黨名については、最初、日本大衆黨からは『日本大衆黨』全國民衆黨からは『全國大衆黨』私共の協議會からは『日本無產黨』を提案したが、協議會としては、初からそれを固執する積りはなかつた。然るに大衆黨と全民黨との間に於いては、遂にこれが可なりのやかましい問題となり、結局、『全國大衆黨』が採用されて、その代り(と云ふわけでもあるまいが)、略稱『大衆黨』といふ事に折りあつた。そこらに交渉當局者の困難と苦心が想察される。

次に役員については、麻生久君が先づ中央執行委員會議長に就任した。(これは委員長とは稱されて居ない。)麻生君の就任の挨拶を聞くと、實に謂ゆる『涙ぐましい言葉』がある。

『合同は大衆の要望であると同時に至難の業である』『今迄の城を捨て、新らしき未來に進出する』には『人間としての悲哀を感ずる』『この悲哀を階級的良心に依り克服しなければならぬ』『我等は七黨合同で苦い經驗を持つたが、今や新らしき合同に依り新らしき道を進む』『今や三黨は合同した』『これは無產階級の大なる光である』『私は今後も階級戰線の一兵卒として闘ふことを誓ふ』

次に書記長については、初め河野密君が舊大衆黨から引續いて重任との噂が傳はつたが、次に山名義鶴君の呼聲が高くなり、結局、温厚純潔の名ある德望の人、三輪壽壯君に落ちついた。これには異議も苦情も出樣があるまい。山名君は舊『組合同盟』の人として、現に全國勞働組合の代表たる地位にあり、三黨合同の爲には人知れず殊勳を立てた人物だと、私共は聞いている。河野君は先日、新聞記者その他の會合の席に於いて、『僕は論旨免官だ』と、無邪氣な諧謔を繰返していた。すると、そこに居あはせた、社民黨の赤松克麿君がそれを聞いて、イヤそれは違ふ、君は加藤軍令部長だよと云つて、大いに笑つてるのを、私は見た。アラシのあとのナギとでも云つたような、愉快な心持が感じられた。

中央執行委員二十九名は左の如し。これには舊大衆黨の古い幹部達と、その諸分派、諸地方、諸團體の代表者達(合計十九

名)と、舊全民黨の代表者五名と、舊協議會の代表者五名とが網羅されている。

吉田賢一、坂本孝三郎、山名義鶴、淺沼稻次郎、田所輝明、河野密、須永好、藤岡文六、三宅正一、安藤巌、今村等、高山久藏、上條愛一、淺原健三、望月源次、河上丈太郎、棚橋小虎、川出雄二郎、末中勘三郎(以上舊大衆黨)鈴木茂三郎、横田忠夫、水谷長三郎、黒田壽男、佐竹新一(以上舊協議會)、田萬清臣、古野周造、宮崎龍介、岡部茂夫、山内鐵吉(以上全民黨)

外に統制委員十名と、顧問六名左の如し。

△統制委員　大矢省三(長)、加藤勘十、菊川忠雄、皆川利吉、平山何三雄、荒谷宗治、宮本官治、庄司彦雄、與倉健次、中谷玉造、吉川守國。

△顧問　高野岩三郎、杉山元治郎、賀川豐彦、山崎今朝彌、高橋龜吉、堺利彦

統制委員の中、加藤勘十君は、初め中央執行委員に擬せられて居たが、自らその地位を避けたのだと聞いている。中谷玉造君は舊勞農大衆黨、吉川守國君は舊東京無産黨である。

猶ほ中央執行委員中の常任、及び本部の部長および委員會長左の如し。

△本部常任委員　淺沼稻次郎、田所輝明、河野密、須永好、山名義鶴、宮崎龍介、岡部茂夫、鈴木茂三郎、黒田壽男。

△關西事務局常任委員　坂本孝三郎、河上丈太郎、淺原健三、田萬清臣、古野周藏、山内鐵吉、水谷長三郎、吉田賢一。

△本部々長及會長　組織部長　淺沼稻次郎。宣傳部長　松本淳三。情報部長　岡田宗司。教育部長　木村毅。財務部長　高橋長太郎。事業部長　平野學。機關紙部長　河野密。國際部長　岡部茂夫。選擧部長　鈴木茂三郎。青年部長　宮崎龍介。議會對策部長　水谷長三郎。勞働委員會々長　三輪壽壯。農村委員會長　田所輝明。政策委員會長　高橋龜吉。

九州八幡の淺原健三君の名が、關西事務局常任委員として、京阪の人々の間に見だされるのは、少し珍らしい感じがする。關西事務局の新制度はその效果を今後の實際に徴するより外ないだらう。兎にかく、人物の配置、役員の割振等が、種々なる情勢と、種々なる意味との上からして、總て最も、公平、穩當適切な所に歸着して居るものと見わたされる。

そこで之を要するに、我々は只、あらゆる忍耐と、努力と、自制と、發憤とを以て今後に於ける黨の發展と成長を期するのみである。

九

扨こゝでまた思ひだされるのは、前に話した二黨合同說と、それにも係はらず遂に實現された三黨合同との關係である。現時の情勢として、一方には二黨合同のみの『可能』が力說され、他方には三黨合同の『可能』が主張され、『可能』が同時に二種ある事になつたのは、少しおかしく思はれるが、兎にかく後者が實現されたのだから、それが矢張『可能』であつたのである。

して見ると、最初からの『可能』説は、事實上の可能、客觀的の可能を意味したのでなく、むしろ主張者の望み（もしくは好み）を意味したものであつたかと考へられる。

例へば森戸氏の主張の如き、氏の立場上、三黨合同が有利有效と認められた結果、それのみの『可能』が力説されたものの如くに見える。現に森戸氏は、三黨合同が段々と事實上に發展して居る時、猶ほ（或は却つて）熱心にそれの『停頓』と『失敗』を指摘された。そしてその結果、氏の『不可能』が遂に『可能』として實現されたわけである。

して見ると、これは元來から、可能不可能の問題でなく、可能をどこまで制限して觀察するかの問題であり、結局、謂ゆる『指導精神』の問題であつたわけである。そして森戸氏に依れば、それが『純正社會民主々義を重心とし』て、その『左・右の兩側』『をも包容する』『指導精神といふところに落着くので』なければならぬ筈であつた。所が事實はそれと異なり、森戸氏の希望に反し、或は氏の引止めにも係はらず、前記『宣言』に善く現はれて居るとほり、我々の新黨は、『獨斷的な指導原理を大衆の上に强制せぬ』『共同戰線黨』となつて現はれたのである。

一〇

そこで殘る問題は只、社民・勞農・二黨と新黨との關係である。

新黨の結成（即ち三黨の合同）が全合同の第一歩である事、あるべき事、あらねばならぬ事は、既に最も明白である。然らば新黨と他の二黨との關係も亦た明白な筈である。

社民黨は既に我々と共同鬪爭を行つている。彼等は更に『選擧協定』を我々に提案するとさへ云つている。我々は選擧協定の後に合同が來ると考へるよりも、選擧協定の必要を合同に依つて解決すべきだと考へるが、然し我々は又、社民黨がモウこのうへ永く、その社會民主々義の――（森戸氏等の分類に從へば、恐らく右翼社會民主々義の）――看板を持ちこたへ得ないだらうかと考へる。だから我々は、社民黨が今、モウどうしても、或種の分解、或は轉換の過程にあるものと觀察せざるを得ない。それならばもう、問題は大部分解決されて居る。

然らば最後に殘るのは勞農黨である。勞農黨が一番の難物たることは云ふまでもない。然しこれもである。その內部に於ける動搖は既に殆んど見えすいている。彼等は共同鬪爭をすら、或はサボつたり、或は拒絕したりして居るが、その進退兩難の立場はむしろ同情に値する。我々はこゝにも又、或種の分解（或は轉換）を豫測し得るのではなからうか。

三黨合同は見事に出來あがつた。全合同の第一步はたしかに踏み出された。全無產階級共同戰線黨確立の光は既に見えた。

中國共産黨の現勢

藤枝丈夫

七月の下旬から八月初旬にかけて、世界の耳目は、一時全く支那からの電報に集中されてゐた。否、各國軍艦からの一種獨特の聲援によつて、何健軍が易々と長沙をその手に奪還してしまつた今日に於いても、なほかつ、揚子江中流一帶に低迷する暗雲は、今だに世界の視聽の過半を吸ひ寄せてゐる。かゝる時何人の胸にも浮ぶものは、時局の前途に關する樣々の憶測であり、就中、人々の知らうとする點は、この時局に際して中國共産黨が如何なる政策を展開するか？　といふ點であらう。筆者は不幸にして、この點に關しての何等の資料をも持ち合はさぬが、支那事情に關心するものの一人として若干の素人考へを述べて見たいと思ふ。

日本の一ブルジョア新聞は、その社説欄に於いて『長沙ソヴエート政府の樹立は、近年稀れな大事件として‥‥地球の全貌を震撼せしめた』と書いたが、事實、この言葉は單に『地球上の全ブルジョアジイを震撼せしめた』と訂正するだけで、全く正當な表現であるといへる。中國赤衛軍の攻擊によつて、湖南省の首府たる長沙が陷落し、ソヴエート政府が樹立されてから、更に何健軍の入城、赤衛軍の退却、武漢、九江、南昌等の危機の切迫‥‥これらの事件的經過は、も早や、こゝに摘出して繰返すまでもない程「震撼せしめられた」ブル新聞によつて、「慘虐なる赤衛軍の暴狀」「資本家、地主は悉く逮捕さる」等々の修飾語と共に、充分に普及化されてゐる。

では、これ程「世界を震撼せしめた」長沙事件は、如何なる力が根抵となつて起り、如何に發展、波及して行くのであらうか？　時局の前途や共産黨の政策如何の問題に立ち入るためには、是非とも、先づこの疑問から解決して進まねばならない。

今回の事件を見る者が、第一に氣付かせられることは、中國共産黨が一定の整然たる計畫のもとにこれを決行したといふことである。

勿論、從來といへども整然たらぬ計畫でのみ行動してゐたといふ譯ではない。だが、今度の長沙攻擊は、今まで赤衛軍の各軍團が區々になして來た軍事行動とは異つて、直接その衝に當つた第五軍團は、右翼に連つて湖北省境に進んでゐた第二軍團や、洞庭湖の東北・沼澤地帶を武漢に向つてゐる第六軍團と、完

全に協同作戰を行ひつゝ進退した。更に揚子江北岸一帶に在る各軍團との間にも、機宜に適した連絡行動をとり、敵の勢力を完全に兩斷してしまつたのである。この點、從來、ともすれば孤立的分散的に偏したのに比して、實に格段の進歩と言はねばならない。

この進歩は一體何ものを父として産み出だされたか？　少し記憶の好い人は、本年五月、全支に漲る大衆的鬪爭の激浪のうちに、最初の全支ソヴエート區域代表大會が開かれたことを知つてゐるであらう。そこでは南支、中支の各地域に建設されてゐる十九のソヴエート區域に共通した各種の問題が討議決定されたのであるが、その中には勿論、これらのソヴエート區域を擁護し強化し發展せしめるための軍事勢力――赤衞軍の問題が取上げられた。そして、中國共産黨の當面の重要政策の一つとしての××軍の行動を統轄、聯絡すべき機關――いはば黨の軍事委員會――の確立がなされた。これがために從來の孤立的指導は排されて、直接、黨の整然たる計畫的指導が全赤衞軍の行動の上に及ぶこととなつたのである。これが今回の勝利を産み出だした直接の力――父である。

父は分つた。だが、これらの力を受入れて一個の生きものにまで育てあげた母胎は何んであるか？　いふまでもなく、それは種々なる經濟的、政治的要因によつて醸成された全支に漲る大衆鬪爭の擴大發展である。殊に今年上半期より、愈々避け難き最後の世界的爆發を豫約しつゝ進行してゐた南北戰爭（北方聯盟對南京政府の戰爭）によつて、このことは一層深められたのである。

八千萬に垂んとする饑民、銀價暴落による土着工業の衰滅、失業勞働者の洪水、打ち續く戰亂と軍閥の驚くべき無慈悲な收奪に因る廣汎なる農業經濟の破産……これらが交互に作用し合つて、危機がますます深められ行く上に、更に、生産と消費の矛盾に惱む「慢性恐慌病」にかゝつた資本主義諸國は、この殘された最後の市場を獨占せんがためにあらゆる手段を盡してのしかゝつて來る。しかも、國民黨政府は、これらの帝國主義の力と戰つて支那を半殖民地的狀態から完全なる統一、獨立共和國の狀態に引戻すべき何等の努力をも示すことなく、反對に、これがための走狗となりて、廣汎な勞役大衆の苦痛をいやが上にも增大せしめてゐる。そして、國内的矛盾に對するその唯一の切札たる改良主義諸政策は、完全に無能力を暴露し、それらの「改良」が常に資本家・地主の利害のための「改良」であることを明瞭にした。かゝる時、一九二七年後半期に於ける一時的敗北の痛手から恢復し、峻烈なボルシエヴイキ的強化の××による成長發展を獲ち得つゝある中國共産黨こそは、眞に自らが勞働者、農民大衆の利害のために帝國主義並に國内反プロレタリア勢力と戰ふ×であることを身をもつて示すことが出來、廣汎なる大衆獲得の目的を着實に果し行くことが出來たのである。そして、これらを如實に表はしたものは、今年初頭よりの南北戰爭であり、これに對する共産黨の全精力を傾けた反戰鬪爭であつた。この事は、更に黨

が大衆の信頼を獲得する機會となつたといふだけではなしに、まさに黨の政策が、これらの母胎——客觀的狀勢を正しく把握し、資本主義體制の根本的な××をば正しく衝きはじめたこと、言ひ換えれば、ブルジョア的支配に根本的な××を與へ得る地位に自分を置いたといふ點、こゝに最大の意義が見出されるのである。長沙ソヴエート樹立の成功も、こゝを見脫してはその意義の過半は失はれてしまふ。

　この事はまた同時に、技術的な正確さを産み出す基礎となつた。筆者は軍事技術については殆んど無知識である。だが、第五軍團が最少量の努力によつて最短期間内に何健軍を一掃することが出來た經過を眺むる時は、何がはなしに、プロレタリアートの創意性とか、スターリンが軍團指揮に於いても所謂軍事專門家を遙かに凌駕してゐたことなどを思ひ合はせるのである。事實、第五軍團が長沙占領に際して示したところはそうであつた。……何健軍がその三個師團を他に移動させ、殘りは一個師團だけとなつた時機を計つて、湘江の左岸、長沙の西南方から小部隊を出沒、接近させた。そして、優勢に慢じた何健軍が、一擧にこの「小癪な小部隊」を叩き潰さうと主力を左岸に移し、全注意を集めてゐるときを見計つて、右岸（長沙の東方及び南方）から第五軍團の主力を進め殆んど陣形を立直すひまを與へずにこれを湘江左岸の各地に四散せしめてしまつた……。この正確なる戰法と巧みな勝利とは單に軍團長彭德懷氏の軍事專門家としてのえらさから來るのではない。それは取りも直さず、勞働者、農民の階級的利益を護るための赤衞軍と、單なる殺戮機械としてのブルジョア××との本質的な差異から來るのである。この技術的正確さは、單に追擊の場合にのみ現はれてゐるのでなくて、ソヴエート政府の成立後、何健軍が各國軍艦からの獨特の聲援によつて再び長沙に殺到して來た時　第五軍團はソヴエート政府と共に整然と平江、瀏陽の線に退却した。そして、南昌を包圍してゐる第四軍團、岳州東北方の沼澤地帶を占領してゐる第六軍團、大冶、九江附近の揚子江岸にある第一軍團……これらと大きな馬蹄形の孤線を描いて連絡し、揚子江左岸に迫つてゐる第一、第三、第十二の各軍團と共に、武漢、九江、沙市等の重要地點（單に南京政府にとつて重要なだけでなく帝國主義ブル共にとつてより重要な地點）をプロレタリア政府の手中に奪還すべき第二期攻擊の姿勢に移つたのである。この事は、今回の軍事行動が最も整然たる一定の計畫のもとに、中國共產黨の直接的統制をうけてなされたことの一つの明證でなければならぬ。

　以上によつてほゞ明らかなやうに、今回の事件の主要な意義の一つは、中國共產黨が整然たる軍事計畫をもつて攻擊の姿勢に移つたことにある。では、その對照は何んであるか？勿論、支那に於ける全支配層の最上位に位置する帝國主義であり、次ぎにはこれがために走狗として直接、大衆の上に臨んでゐる資本家、地主の權力である。この場合、機械的武力に缺ける赤衞軍が、直接、帝國主義軍艦と

決定的に交戰しなかつたことに、決して右の言葉を覆すものではない。プロレタリア軍隊の特質は野蠻なるそして單純なる好戰的强さにあるのではなくて、あらゆる科學的な力の計劃の上にたてられた計劃的行動にあるからである。

長沙ソヴエート樹立の今一つの意義は、更に次の點にある。それは、コミンテルン竝びにその××としての中國共產黨の政策が、絕對に正しかつたこと、從つて、これに對してあらゆる卑劣な誹謗と欺瞞とを大衆の中に振り撒いてゐたトロツキイ主義者——反對派の主張が、全く鼻持ちならぬ謬見に充ちた根據なきものであり、最惡の反動に過ぎないことが、一層明らかにされたこと、これである。（支那問題に關するトロツキイ主義者——反對派の主張を、こゝに爼上に上せるならば、この點はより明白となるのであるが、主題が外れること竝びに行數の制限があるのでこれを他日に保留する）。これには單に一つの例を示すだけでも充分である——。彼等はいふ——『いまはブルジョア的支配の安定化の時代である。××主義者はあらゆる隱忍と合法的手段の極大限の利用によつてこの時代を大衆獲得のために費さねばならない。支那に於けるソヴエートの存在？ それは局部的現象であつて、赤衞軍と稱する半土匪的なものが二三の地域で勝利したからとて、決して全體の勝利を確保するには足りない。我々はコミンテルンの盲動政策に反對する。それは明らかに極左だ』——そして彼等は恥知らずにも、英帝國主義の手先たる改組派と全く口を揃へてかう結ぶ——『われわれは當世支那に於ける重要政策の一つとして全國民の意志を代表し執行する國民會議を提唱する！』

だが、彼等の意圖はかくさるべく餘りに露骨だ、大衆獲得をば基本的な鬪爭の線に沿ふて果さうといふのでなく、ブルジョア、地主をも包含した全國民の會議（！）を提唱する（！）ことによつて、形式的な民主的權力への幻想を植えつけ、事實は大衆を敵に引渡すための行動にしか過ぎない。これらの行動に於いて最も右翼的であつた陳獨秀とその一派は、『赤衞軍の勝利などは今の段階に於いて絕對にあり得ない。若しあつたとしても、それは單にブル新聞の風聲鶴唳的報導か、でなければ、ウルトラ共の誇張だ』とまで斷言してゐたのであるが、これらの言葉の一切が、客觀的には單に反動的役割しか持たぬこと——たとへ陳獨秀個人が、その「解黨派宣言」に於いて力說するごとく『黨を憂ふる熱情』からであるとしても——それを明白にしたものの一つとして、今回の長沙ソヴエート樹立の意義が擧げられるのである。

長沙事件が以上の如き意義を持つものとするならば、今後の時局に於ける變化は如何？ 殊に中國共產黨は如何な行動を執るであらうか？ この疑問に對しては、我々は全く一般的に答へ得るだけである。

一般に、如何なる狀勢が基本的なものとして存在するか？

第一に、世界戰爭の××がいよいよ深めら

れる。――同義的には、各國に於けるブルジヨア支配が愈々その××の度を深め、プロレタリアートの勝利のための素地が開拓される。

第二に、北支那に於ける封建勢力の政府樹立、いはゆる「中央軍の新たなる攻勢」によつて表現されるところの、支那に於ける列強間の矛盾が増大する。

以上の二點に關しては、殆んど論證を必要としない程、明瞭なことである。何故なら、この點に關してはブルジヨアジイ竝びにその別働隊たる社會民主々義者の陣營からさへ、最も端的に語られてゐる今日であるから――

第三に、たとへ、列强間の矛盾、從つてその××たる軍閥間の衝突が、中國共產黨を先頭とする革命的勢力の强大化によつて、一時的に緩和されることはあつても、決して根本的に解決され得ることはない。この點を手近い例で說明するならば、長沙が赤衞軍の手中に陷入り、南昌、九江、沙市、宜昌、武漢……揚子江中流の重要地點が、次ぎ次ぎと陷落の危機にさしせまられて來た時、英國は米國に對して共同出兵の提議を持ち込んだ、だが米國はあくまでもその行動の獨自性を主張した。事實、各國とも赤衞軍に對しては共同砲火を開くが、だが飽くまでもその獨自の態度を捨てなかつた。……これらの事は、明瞭にそれぞれの根本的に相容れぬ獨占慾を示してゐるものであつて、多くの論證を必要としないところである。この點、各國の經濟的政治的狀態を見るならば、それが最早や何等かの根本的な妥協を許容し得ぬまでに突詰めてゐることが分つて、一層明白であらう。

中國共產黨は恐らく、支配者側のかゝる矛盾を衝いて、その中心的な任務――帝國主義のあらゆる經濟的政治的支配を支那から××すること、帝國主義の支配を維持するための道具となつてゐる國內の封建的竝びに資本主義的諸關係を徹底的に排除すること――を完成せんがために、全活動の一部としての軍事行動をも毅然と押進めて行くであらう。このことはその戰爭反對の主張と何等の矛盾を生ずるものでなく、反對に、かゝるプロレタリア的手段のみが眞に「戰爭」を消滅せしめるものであることを、誰れよりも全支那の勞役大衆が黨を支持することによつて確證するであらう。勿論、その前途には種々なる「障害」が屹立する。その最大なるものは言ふまでもなく帝國主義の側からする强襲である。だが、支那プロレタリアート竝びに農民大衆の鬪爭が、國際プロレタリアートの核心的な鬪爭の勝利に重大なる聯關を持つものである限り、それらの「障害」も次第に弱められて行くであらう。國際プロレタリアートがこの初步的理解を失ふものでない限り、中國共產黨竝びにその率ゐる勞役大衆の勝利は、明朗なる光明に充ちてゐるのだ。

――一九三〇年八月――

資本主義現段階に於ける

輸出資本の話

山崎靖純

一

小麥、コーヒー、棉花、砂糖、ゴム、其他重要諸商品の滯貨が世界を通じて山積して居る間に、他方に於てはパンもコーヒーも砂糖も充分に獲られない失業者や貧困者が空前の記錄を以て激增して行く。然るにアメリカのコーンベルト（小麥地帶）に大旱魃が襲來して、去る七月中だけでも穀物の損害が五億弗に達し、ヨーロッパも亦甚しい旱魃に襲はれると、忽ち小麥の相場は暴騰を來し、ヨーロッパ、アメリカ間、ヨーロッパ、オーストレリア間等は小麥輸送の爲に海運界も色めき、全般的な景氣恢復說さへアメリカで唱へるものがある。それ程最近に於ける資本主義經濟世界の形相は矛盾が深刻化して來て居る。然し資本主義經濟も一つの有機的均衡體系であつて、人間の肉體と同じやうに自動的な訂正作用を持つて居るから、この最近の矛盾的形相も、いづれかは一時的に多少の訂正を見るであらう。が、近年の諸矛盾には末期的な、それ故に根本的な性質を帶びるものが頗る少くない。茲に云ふ資本輸出もその一つの現れである。

資本の海外投下と云ふことは既に古くから行はれた現象であつて、イギリスやフランスは歐洲大戰前に於てこの意味に於ける一大投資國であつた。當時に於ける海外投資の目的は

（一）例へばインドの棉花栽培事業、南阿の採金事業等の如く、其の土地の特色たるべき事業を起すこと

（二）それ等屬領、後進國、未開國の特色事業を起す爲に、鐵道、運河、道路、工場な建設すること

（三）單なる債權投資として他國の募債に應募すること

等がその主なる特色であつた。而してこれによつて投資國は被投資國から利潤や利息を獲ることの外に、投資によつて當然起るべき諸々の建設に要する諸材料を輸出し、更に進んでそれ等後進國の經濟的活動の結果刺戟される一般日用商品の需要に對して自國製品を輸出することの利益を得、かくして先進資本主義諸國は、その燦爛たる發展を招いたのである。然るに、この種の海外投資は現在でも無論數多く行はれて居るが、近年の海外投資の中には右とは大分その動機や目的の異つたものが際立つて多くなつて居る。こゝに「資本輸出」と云ふ言葉で現す所のものもその顯著な一例である。即ち資本主義工業の普及によつて、各國一樣に同種の產業が起つて來るとそれぞれの國は自國の資本家に獨占市場を與へんが爲に關稅障壁を高くして他國品を排擊することに努める。そこで從來、自分の製造

した商品を他國に賣りつけて居た產業資本家達は非常な困惑に判逢する。だが幸ひなことに如何なる國も資本の輸入に關税をかける國はないから、こゝに於て自己の資本を關税障壁の高い外國内に移して――云ひ換へれば工場を外國内に移轉して――其處で外國の勞力を購つて生產を起し、その利潤を自由に回收するといふのが近年特に顯著なる資本輸出の例である。この作用を今少し詳述しよう。

二

今日如何なる資本主義諸國も商品貿易を行はない國はないが、それはも早や有無相補ふと云ふ程度を遙に超えて、他國に生產されるものでも價格の競爭によつて輸出し合ふと云ふ激しい競爭狀態を現して居る。それはほんの少し各國の貿易の内容を一瞥したゞけで、誰にもわかることである。何故かやうな現象が起るかと云ふに、資本主義經濟は、その靜的なる狀態の下に於ては、元々生產力に相當する購買力を人々に與へない、其處で如何なる國も自國内だけの購買力では自國内の生產力に適應することが出來る仕組になつて居ない爲に、各國間には有無相通ずる貿易（即ち特產品等の貿易）を行ふ以上に各國何れも具有して居る商品の輸出を價格の競爭によつて行ふ必要を感じて居るのである。この事は例へばアメリカの如き國内に於て重要物資の殆どあらゆる物を產する國に於ても同じことである。よく我々は『アメリカは外國貿易に依賴せずともやつて行ける國である』と云ふことを聽かされるが、これ位ひ見當違ひな觀察はない。アメリカ資本主義の擴張の最盛時に於ては、當然その靜的なる狀態の下に於て不足を感ずるであらう處の購買力を、生產手段の擴張から發生する購買力によつて補はれる爲に、アメリカ一個國内で生產と消費との適合を見るやうな感を持つことはあり得る。この場合は生產力と消費力との矛盾が潜在的となつて居るのである。然しながら、ヴアルガも云ふやうに『生產手段が生產されるのは、それによつて消費手段を作る爲なのである。不景氣局面の終り頃から始まつた生產裝置の擴張は高景氣局面に打切りとなつた。新設工場もしくは增設工場が完成商品を市場に投げ込み始めると、商品の過剩生產が生じる。固定資本更新の一時的打切りと同時に勞働力が投げ出され、固定資本用の原料の需要が減退するから、この過剩生產はなほ更である。』

即ち生產裝置の擴張が打切られて、靜的な狀態に還れば、購買力が生產力に匹敵しなくなるのは當然のことである。それは極く簡單な例を考へて見ればわかる。例へばこゝに百萬圓を生產する會社があつて、その生產の一半は勞銀の形で勞働者に分配され、他の一半は資本家（重役を含む）に分配されると假定する。その場合勞働者の收入は百パーセント衣食住の直接消費に向けられるが、資本家の收入は衣食住の外に貯蓄と投資とに向けられる。そこで投資による生產裝置の擴張が行はれて居る最中は、それも一種の消費であるから、結局此の關係では百萬圓の生產に對して百萬圓の消費が起ることになる。だから生產擴張されて居る最中に於てのみ、或る社會の生產力と消費力とは出會ふが、それが濟んだ靜的狀態の時、或る生產力が與へる或る消費力は常に生產力に及ばないのが資本主義の仕組である。それは決してその國の大小によつて變るものではない。そこで製品市價は暴落

して陥没せる消費力の總量に適應しようとするが、その場合にはこの暴落せる製品市價に堪えられない所の劣敗資本家と、幾多の失業勞働者とが投げ出される。かくしてアメリカもまた世界の他の資本主義諸國と共に、高景氣局面の打切りと共に遂に生產過剩を感じ、外國貿易に依賴しなければ立つて行かない國である事を益々以て明白にしたのである。

三

そこで現在の資本主義諸國にとつて何が最も必要なことであるかと云へば、出來るだけ自國の資本家の爲により多くの市場を獲得せしめることであつて、その當然の結果として諸國はそれぞれ關稅の障壁を引上げて先づ國內市場を自國資本家の爲に獨占せしめることに努めて居る。これは歐洲戰爭を區劃として簡易な資本主義產業が屬領、後進國に普及した爲に、それ等の諸國が本國や先進國の同種製品を排擊せんとするものと、先進國の間に夫々特色のあつた產業（例へばイギリスの染料、ドイツの染料、硫安の如き）が今や特色を失つて各國間に普及した爲に、自國のものに保護を與へるべく關稅引上を行つて居るもの等に分け得る。然しながら前にも述べたやうに、元來、生產力がそれに相當するだけの購買力を與へ得ないのが資本主義の立て前であるから、假に或る國の全勞働者が生產に參加することを得る狀態がありとすれば、それは非常な生產擴張時代でない限り、少からぬ過剩生產を他國に賣りつけることによつてのみ可能である。是を逆に云ふと、過剩生產を他國に賣りつけることが多ければ多い程、その國の勞働者を吸收する力が多いと云ふことになるのである。十八九世紀から二十世紀の初葉にかけては、先進國のまゝになる屬領や後進國が豐富にあつて、それ等に對して先に說明したやうな開拓的投資を行ひ、以て購買力を刺戟して過剩生產を賣りつけた。だからこの時代に於てはイギリス資本主義なども大に榮え、國民には可なりな程度まで不自由のない職業と相當高い生活程度を與へ得たのである。が、現在はもうさうは行かぬ。其處で、自國市場を獨占して殘る過剩生產は是を他國にダンピングをすると云ふのが、その一般的な行き方になつて來て居る。

一體、生產事業にとつて普通に云ふ所の採算點とは、原料費に加工費（勞銀、金利、動力代、地代、運賃、包裝料其他）を加へた點で、この點以下に賣れば損になるのであるがダンピングとはこの損をして賣ることを云ふのである。では何故に損をしてまで賣るかと云ふに、假に製品市價が採算點を割つた爲に操業を休止するとしても、猶その事業は金利地代、重役竝に最小限度に必要なる社員勞働者の人件費、其他諸雜費を要し、一定の損を負はねばならぬ。それ故に操業を繼續しその製品を採算點以下にダンピングするとしても、猶それが操業休止による損害より少い場合には資本家はダンピングを選ぶであらう。卽ちダンピングにはダンピングの採算點がある。況や國內に於て獨占市場を形成し、この方で相當の利潤を收め得る場合には、海外に向つてダンピングすることによつて、

（一）大量生產を可能にし、それによる諸種の利益を獲得し、

（二）勞働者解雇の必要がなくなる

と云ふ積極的な利益を收め得る。

四

然し乍ら、ダンピングされる方の國の立場になつても考へて見る必要がある。例へば硫安の製造力のない國の市場を獲得する爲に二三の國がダンピング競爭をやるならば、その輸入國にとつては却つて幸せであるが、今日ではそれだけの市場では間に合はぬ爲に、前にも述べたやうにその製造力を持つた諸國にまでダンピングを行ふのが常である。そこでそれ等の國では段々關稅障壁を高くして防遏する。終ひにはダンピングも猶及ばないプロヒビッティング・レート（禁止率）まで關稅を高くして終ふ。今春引上げられた印度のわが綿布に對する關稅の如きは其の一例である。かうなつて來ると從來ダンピングを行つて居た生産事業の經營が甚だ困難になつて來る。そこでそれ等の事業に殘された一つの切拔方法は、資本をその關稅障壁を高められた國内に輸出し、その障壁の中でその國の勞働を用ひて生産し、その生産商品をその國内で自由に――そこには最早や關稅がない爲に――資り、それによつて獲た利潤を自己の手許に取寄せると云ふ方法である。

現に日本に於てもフオードやジエネラル・モータースの自動車を始め、ヴイクター・レコード、マツダランプ、ネツスル・チヨコレート其の他幾多の外國資本による經營があり、また日本自身も支那、印度に於ける紡績工場等に資本を輸出して、行詰りの打開に腐心して居る。この種の資本輸出は今や世界的に年と共に甚しくなり、アメリカの自動車工業がヨーロッパ各所に工場を設け、ドイツの同種事業の株式を買收してそれを自分の支配下に置く等のことは特に顯著に目立つて居ることである。殊にドイツがこの種の方法によつて今や外國資本の支配下に立つて居ることは甚しいものである。アメリカのジエネラル・モータースはドイツの自動車生産高の四割五分を占めたアダム・オペル會社の株を昨年三分の二買收して、その經營を自分の手に移し、フオードはドイツのフアルベンインヅストリー會社の協力を獲て、ドイツ内に工場を設立し、又ドイツのA・E・Gの普通株の三割、オスラム會社株の一割六分がアメリカのジエネラル・エレクトリックの手に入つてその勢力を受け、シユッフハルト及びミックス・ウンド・ゲネストの二有力電機會社が最近ウエスターン・エレクトリック系のスタンダード・エレクトリックの支配下に屬した。其他ドイツの各種部門に亘る有力産業が最近イギリス、フランス、スウイス、スウエーデン等の資本系統下に屬した例は頗る少くないのである。

五

このやうに有力産業國の資本家がダンピングを爲し得る限度に達した爲に商品輸出に對する執着を緩め、代りに右の如き資本輸出時代に入つて來たことは、明かに資本家が自國の勞働者吸收を見捨てざるを得なくなつたことを意味するのである。アメリカが自動車を輸出する代りに、その工場を日本にもヨーロッパにも作つたことは、日本やヨーロッパの失業者を救濟して自國に失業者を排出することである。即ち昔の海外投資は輸出促進になり、國内勞働需要の喚起になつたが、近年に於ける右の如き意味の資本輸出は失業輸入を意味する。然し乍ら同時にその利潤は資本輸出國が持ち去つて行く、故に資本輸入國には

輸入資本に基いて生産されたゞけの購買力は與へられない。こゝに於て資本輸入國の商品輸入能力は唯資本が輸入された時を除いては却つて削減されて來る。それはヨーロッパ諸國殊にドイツに對するアメリカの資本輸出が一寸でも中斷されると忽ちドイツの商品輸入能力が陷沒し延いてアメリカの輸出が更に不振になる例を見ても明白である。かくて資本主義が遺憾なく普及し來つたにつれて、世界經濟は益々その矛盾を深め來つたやうに思はれる。商品輸出の市場確保の爲に戰艦が必要であつた時代のやうに、輸出資本を確保する爲により多くの軍艦と飛行機が必要になつて來て居る。債權國にも債務國にも深い惱みが培はれて居るが、とゞの詰りはこれが何う解決するか。國内的な財界の不均衡は恐慌によつて一先づ解決されるが、國際的に深まり行く矛盾はそれだけでは濟まぬ。結局は債權債務の帳消しか戰爭かそれとも世界○○か、それは姑くお預りにしておかう（完）

新即物性文學と日本文學

茅野蕭々

最近數年間の獨逸文學界に於て、兎に角人々の視聽をひいた新即物性——ディ・ノイエ・ザハリッヒカイト——の要求に關して、東京朝日新聞紙上に私が短い紹介の筆を執つてから、意想外にも多數の人々の注意がこの新運動に傾倒され、特に獨逸文學の青年研究者達の興味を刺戟して、既にこれについての研究紹介又は翻譯等の二三發表されたのを見ることは、私にとつては少なからぬ喜びであると言はなくてはならない。

しかしながら所謂新即物性の要求——私は最初假に新即物主義と譯してみたが、主義といふ語は此場合少し堅すぎて稍々伸縮性彈力性に乏し過ぎる憾がないではない——は、これを狹義に解する時、必らずしも現今獨逸文壇の主潮であるとは言ひ難いこと、丁度オスカア・ヴルツェルがその著『ゲョエテ死後より現代に至る獨逸文學』の末尾で明言してゐる通りであらうと思ふ。彼は言つてゐる。「總べては混沌としてゐる。自然主義の當初以後の藝術的に豐富に動搖した二三十年間に於けるよりは一層混沌としてゐる。かういふ混沌を一つの統一に結合する合言葉はない。『新即物性』にも、『魔術的寫實主義』にも存しない」と。

實際今日に於ける獨逸文壇の種々雜多な現象を仔細に見れば見るほど、かうした感は愈々深くならざるを得ないであらうと思ふ。プロオデル・クリスティアンゼンの所謂一昨日の大家等、即ち嘗て自然主義印象主義の指導者であつた人々は暫く別とするも、昨日の藝術表現主義の勃興に際してその尖端をきつた今日の中堅作家等が時代の推移と共に更生の一路を求める精進努力の諸相は言ふまでもなく、今日と明日との文學を雙肩に擔つてゐる青年新進作家の試みの跡を見ても、その方向と面貌とは殆ど悉く異なつてゐると言つても差支ないやうに思はれる。それ故新即物性といふやうな合言葉でこれを律することは不可能であるとするヴルツェルの見解も、一應當を得たものと考へられる。

しかしながら他の側面から觀察すると、獨逸現今の文學が、大戰から引續いて跳躍した表現主義から脱出して、その狂熱的な主觀の高潮、精神の飛揚、幻想的忘我境から覺醒して、漸く強固な根底のある、落ちついた、同時に古的でない、未來を約束する何物かを希求してゐるといふ事實は復何人と雖も之を拒否することは出來ないであらう。パウル・フェヒネルはこれを「新現實性」と名づけ、フランツ・ロオは「魔術的寫實主義」と呼ばうとしてゐる。或は「新しい理想主義」、「新自然主義」等

等・文藝史家又は批評家がその觀點と力點とを異にするに從つて、命名の上には種々の相違はあるものの、等しく皆なこの新傾向を認識してゐるのである。さうしてかういふ一般的傾向を總括して、新即物性への要求といふことが許されるならば 最近獨逸文學に於ける一大主潮は新即物性であると揚言して、必らずしも間違つてはゐないと思ふ。私が當初新即物主義と呼んだのも斯ういふ廣義の解釋に於てであつたし、今ここで言ふのもまた同樣である。新即物性(ディ・ノイエ・ザハリヒカイト)の提唱されてから、既に數年の歲月を經てゐるに拘らず、作品は勿論、理論の上でもなほ人によつて多少の見解を異にしてゐるものがあるやうであるから、一應ここに斷つて置く譯である。

さて斯ういふ風に所謂新即物性文學を廣義に解釋するとして、それが日本現代の文學と如何なる交涉があるであらうか。これが本誌記者によつて私に課せられた問題である。私はそれに對して豫め率直に言はなくてはならない。私の答は明快を缺くに相違ない。何故かといへば、これは半ばは豫言に屬してゐ、可能性に拘つてゐ、今後の展開に待つものが多いからである。日本文壇が獨逸新興の文學からどれだけのものを吸收することが出來るか、新即物性が日本文學に如何なる寄與をなし得るかは全くこれからの問題であつて、簡單に豫測することは出來ないからである。それならば果してどれだけの可能性と蓋然性があるかといふことを考へるとすれば、當然兩者を構成する主要な特質を精細に解剖して、その發達の歷史にまで溯る必要を生ずるに定つてゐる。しかしそれは與へられた紙數と時間の到底許さないところである。それ故私はただ獨逸に於ける新即物性文學の要求の主要な點二三を說明して、それが日本文壇に與へ得る刺戟を考へて見るに止めようと思ふ。

新即物性の文學はその名稱の示すやうに、先づ何よりも事物、事實に即することを最も根本的な標識としてゐる。これは前にも述べたやうに前時代の表現主義文學が餘りに人間の精神靈魂の力を過大視し、主觀の熱狂と狂喜的恍惚とを高潮し、事物そのものを離脫して空想と抽象との世界に深入りした反動であり、その積弊からの覺醒である。それ故我が日本文壇のやうに、海外に於ける一流行現象くらゐにしか表現主義の經過を傍觀しなかつたところでは、新に事象の把握を提唱するといふやうな主張は、恐らく十分な同感と理解とをかち得ないであらうと思ふ。事物を離れないといふやうなことは、寧ろ大まかに自明なことであると解されるであらう。しかし魂への逃避とも言ふべき表現主義を產むだ、その同じ政治的・經濟的・社會的生活の窮乏疲弊が、同時に新即物主義の一背景をなしてゐるといふやうな事情は、我が國の所謂無產者文學に或る種の暗示を與へる可能性を持つてゐるかも知れない。

獨逸に於ける最も若い文學者たちは、世界大戰と共に戰つた今日の壯年者よりは、一層慘憺たる衣食の爲の戰を體驗して來てゐる。彼等は全く幸福な少青年期を味つたことがない。且つその上に亞米利加主義の物質的文明が如何に人間を征服して行くかを、いやといふほど見せつけら

れてゐる。彼等が事物事象に對する抑壓し難い關心は實に此處にも原因するものと思はれる。しかし彼等がこの物質の力、事實の勢を征服する方法は、表現主義の一分派ともいふべき主動主義（アクチヴィスムス）等とは全く異つてゐるイデオロギイによつて眼前の事實を變改しようとする時代は既に昨日になつた。人間精神が作り出す夢想的幻像に導かれて現實を否定しようとするには、新人の視聽は餘りに強く實際の生活に縛られてゐる。それ故新即物派は他の方法によつて、この事實を征服しようとする。彼等は逃避を敢てしない。寧ろ進んで事物そのものを認識し、その機能を理解し、組織機構を明にし、その生命を把握しようとする健氣な、勇敢な態度を取つてゐる。それ故新即物性文學は決して單なる暴露文學ではあり得ない。又決して一定な社會思想に奉仕してゐる有目的文學でもない。況んや煽動文學などでは全くないのである。自然主義や主動主義からの脱出が此處にある。新即物主義は一切の感傷を斥ける。空虚な幻想を敵とする。ユウトピアを頭に描いてゐない。ただ事物を嚴格に客觀的に究明する。純粹に科學的な態度をとる。冷靜で而も根強い。

新即物性文學は事物を重んずるけれども、それは決して事物の表面や形態を描寫しようとするのではない。現實の生活を對象とするけれどもその氣分情調を再現浮動させて、人をしてその領域にある思あらしめようと企てるのではない。さういふ附屬的なものをば一切除去排斥して、直に事物事件の眞髓を抉剔把握し、その本質と、その機構の原理とを究めようと望むのである。これは一面に於ては自然主義文學の所謂表面描寫と著しい差異のあることを示すと共に、他面に於ては明に表現主義文學の遺産を繼承してゐることを語つてゐるものであつて、時にこの新文學が新自然主義の名で呼ばれてゐるにも拘らず、表現主義の鍛錬の火を通過したことが、如何に新文學の面貌を變化せしめてゐるか、如何にその目標と方向とを規定してゐるかは、特に注意しなくてはならない點であらうと思ふ。新文學は非常に嚴肅な事實の探求の報告でなくてはならない。輕く人生の表皮に觸れて、其處にユウモラスな味を喜ぶ所謂ナンセンス文學とは正に對蹠的なものと言はなくてはならない。これは文學を遊戲の具としてはゐない。これは自然と現實とを新しく把握することを努め、「その中の恐しい原始力を認識し、その烈しい粗野な顔貌を」覗いて人生の新しい進路を求めようとする、淸新な且つ眞面目な試みである。

新即物性文學は一切の裝飾的なものを排斥して、成るべく單純に、率直に冷かに合目的に、事物の作用と、その根底の力とを報告しようとする。從つて其處には從來の文學作品とは全然異つた新しい美が發生しつつあることは、否み難い事實である。それは言はば機械美と比較してもよいかも知れない。此處では作者が自分の言葉で、事物や境遇を描寫しようとはせずして、事物をして事物本然の言葉を語らしめてゐる。飛行機は飛行機自身の言葉を語り、これに乘る飛行士は飛行士自身の語を發し、これを遮る雲霧は雲霧自身の言葉を持つてゐる。丁度ダイナモはダイナモ、調帶は調帶、汽罐は汽罐の運動と形態とを持つてゐて、しかも

一種の調和ある美が成立してゐるやうなものである。グュンテル・ミュラらが、「美は合目的性に歸する。」……最も合目的な形態が最も意味深い形態である」と言つてゐるのもこれを指すのであらう。レンの『戰爭』、ルマルクの『西部戰線異狀なし』の如きにも斯ういふ要素は可なりに窺ふことが出來る。冗長な形容詞や、描寫說明の迂路を經ないで、直接的事實の報告によつて、一つの運命、一つの事件、一人の人間の內部生命の機構が明確に端的に指示される。單純な文章と文章の間には、常に一種の飛躍ともいふべき不要物の排除が行はれて、「最も現實的な現實」へ讀者を導入する、重要な合目的なもののみが、立體的に組合はされてゐる。斯ういふ意味で新即物的文學をば、繪畫的であるよりは遙に建築的であると述べた或る評家の言は、可なりよく肯綮に當つてゐるものと思はれる。思ふに事物に事物自體の言葉を與へるといふやうな企ては、表現主義の先驅者とも數へられる詩人オットオ・ツウル・リンデ等から始つて、表現主義文學を貫流してゐる一つの流であるが、主觀の我意と奔騰とが抑壓されると共に、此流も漸く混濁と激發とを失つて、その清澄な姿を新即物派の中に現はして來たものと觀察される。それは兎に角としてプロイス・バウエルが「無技巧即物性」と呼んでゐる此種の作風は、私の管見を以てすると實は無技巧の技巧であつて、それが適當な程度に於て利用せられてゐるとき非常に新鮮な感觸を刺戟することは明かであり、今後の發達によつては敍述描寫の上に確固たる新樣式を建設するものであらうと思ふ。さうして其關するところが主として技巧手法に關するものであるから、これは我が日本文壇に取入れて、適宜に消化するならば、作品の樣式を豐富ならしめる上に於て、必らずや何等かの貢獻をするだらうと豫想される。アルフレット・デョブリインの最近の作『伯林のアレキサンダア廣場』の如きはその最も代表的なものだと言はれてゐる。大都市の下層階級の生活を、主人公フランツ・ビイベルコップの話によつて語つてゐるものである。

私は最初この稿に於て、新即物的文學をば最も廣義に解して、表現主義脫却の新文學の意にとつたけれども、以上その特徵の二三を語つてゐる間に、自然にその最も尖銳的な姿をのみ語る結果になつた。實際多くの文藝史家が告白してゐるやうに、この新文學の面貌は今日に於て未だ判然と見透しのつき難い狀態にあるのであるから、それについて強て言說を建てやうとすれば、勢かうした特異な點のみを擧げなくてはならなくなるのは已むを得ない。從つて今日の獨逸新文學が以上に述べたやうな特徵を、純粹に具備してゐると考へるのは大きな間違であるは勿論、批評家によつて其代表的作品と指示されてゐる作品も、これ等の特徵の一々を純粹に且つ徹底的に實行してゐるものは極めて稀であつて、最もその傾向が顯著であると言はれる小說界に於てでも、或は表現主義的な殘滓と混合し、或は自然主義的寫實の要素と抱合し、或は倫理想主義や、象徵主義等々と雜居してゐる。ヰルヘルム・シュパイエル、ヰルヘルム・フェルスポオフェン、イョハネス・ムロン等にしても、デョブリイン・シッフナア、シッフェル、ボンテン、フランク、ノイマン、ツァイヒトリ

シゲル等の作品に於ても同樣である。

戯曲に於ても更に一層その感を深くするが、抒情詩に於ては最もさうであつて、所謂新進青年詩の選集と稱するものも、多くは前代巨匠の影響の下に立つか、然らずんば一層舊い理想主義の詩に繋がりを見出し得るやうなものである。ただしかしながら之等總べてを通じて、健康な若若しさ沈著な淸新の氣が一脈貫徹してゐるもののあるのが何となく感ぜられる。さうして其處から鬱然とした巨大な藝術が産れて來さうな氣がする。それが何であるかは俄に斷定しがたいけれども、その方向は恐らくパウエルが分類した三つの何れかに屬しはしないであらうか。

彼に從ふと新文學の傾向は、前にあげた「無技巧的卽物性」の外に、「藝術的卽物性」と、「藝非卽物性」に區分せられる。前者は所謂詩的寫實主義に近いものであつて、十分な卽物性現實性と共に精神的思想的な要素を含み、新らしい理想主義への傾きを持つたものであり、後者は卽物的でありながら、なほ一定の政治的見解、黨派的理念に導かれて時代の問題を取扱ふものである。これは言ふまでもなく新文學の特質よりは、一層舊時代の文學特に主動主義からの遺産を多分に持つてゐるものであるが、政治上經濟上社會上の思想の戰鬪が尖鋭化してゐる現代にあつては、また全くその存在を否定しきれないであらう。ただそれが藝術作品として如何なる地位を占めなくてはならないかは、十九世紀前半に於ける「青春獨逸派」の運命がこれを語つてゐるやうに見えるが、果してどうであらう。これは我が文壇に擡頭しつゝある所謂無産派文藝の前途に横はる問題であらう。

新刊紹介

何を爲すべきか（レーニン著、平田良衞譯）「獨斷主義と批評の自由」「大衆の自然成長性と社會民主々義の目的意識性」等五章より成る。（ポケット型二四五頁、定價・四〇、岩波書店）

ドイッチエ・イデオロギー（リヤザノフ編、三木淸譯）この原書の價値については、本誌前號に於て紹介した。（ポケット型一四〇頁、定價・二〇、岩波書店）

日本經濟年報（石橋湛山編）日本經濟最近の推移を鳥瞰的に大衆的に展開せんとせる試み。「現日本を強襲しつつある恐慌の本質」「經濟各部面の分析」「恐慌期に於ける金融資本の成長」の興味深き部門より成り、昭和五年の上半期を取扱ふ。（四六判二二〇頁、定價一・〇〇、東洋經濟新報社）

社會主義か資本主義か（小池四郎譯）登場する討論者は、勞働黨のスノーデン、ヘンダースン、マクドナルド、自由黨のロイドジョーヂ、モンド、統一黨のグリーム、アメリー、共産黨のニウボルド等。（四六判、二六九頁、定價一・二〇、千倉書房）

十三人倶樂部 創作集である。川端康成、淺原六朗、加藤武雄、岡田三郎、翁久允、中村武羅夫等、マルキシズム文學にあきたらぬ人々十三人の創作を收む。（新菊判三六二頁、定價一・六〇、新潮社）

誰だ！花園を荒す者は！（中村武羅夫著）「文壇隨筆」以後の氏の評論集（四六判三一一頁、定價一・一〇、新潮社）

金のない猶太人（マイケル・ゴールド著、寺田鼎譯）著者の自傳的小說（四六判三三一頁、定價一・〇〇、新潮社）

サヴエート國家の現勢（スターリン著、茂森唯士譯）（四六判一四七頁、定價・五〇、戰旗社）

景氣轉換策

三土忠造

現在、不景氣の深刻なること殆んど前古未曾有ともいふべき狀態であり、此儘すすむならばさらに好轉の見込みたたざるのみならず、寧ろ益々惡化せんとするの傾向にあるので、一般國民はその職業のいかんをとはず、非常な不安におそはれ、是が挽回策に就て、大旱に雲霓を望むの狀勢である。

而して不景氣挽回の適切なる方策を講ぜんと欲せば、先づ以てこの深刻なる不景氣の因つて來れる原因から如實に明瞭にしてかからねばならぬ。而も是を明瞭にするに就いては、虚心坦懷、何らの拘束を受けず、政略にとらはれざる公明の態度を必要とする。

吾々は度々の機會に於て説明したる如く、この不景氣の主要なる原因は、大體三つに分つて見るべきものと思ふ。

第一は、無理無準備なる金解禁の斷行。第二は、緊縮節約の强調。第三は、外的事情であつて、外的事情のうちには、世界的不景氣、銀相場の暴落、印度濠洲其他諸國の關稅改正の三つが含まれてをるのである。

是らの原因に就いて、一々詳論せずとも世人は大體是を了解してをることと信ずるが、金解禁に就いては、今日まで世界多數の國々が之を實行した跡を見ると、我國ほど非常なる爲替相場の開きを僅かに半年の間に人爲的に之を引あげたといふやうな無理をした國はないのである。故に吾々は、此の無理無準備なる金解禁の事のみにても、我が經濟界は相當激甚なる打擊を受け、深刻なる不景氣に陷ることを豫斷して居たのである。然るに天下の言論機關も有力なる實業家も、只爲替相場の安定といふ一點にのみ着眼して、其經濟上に及ぼす複雜なる關係を推斷するの明を缺き、只政府の樂觀的宣傳に眩惑されて、ともにと

もに國民を欺き、且甚大なる損害を齎らしたのである。

然し是が非でも金解禁は既に斷行せられたのであつて、其後に於ける經濟界の打撃、豫想外の正貨の流出に驚いて、近頃は金の輸出再禁止を唱へる人も段々多くなつてくる狀勢であるが、此の問題は、非常に重大にして、經濟上各方面の事情を考慮すると輕々に論議するをゆるさない性質のものであるから、先づ金解禁のままで進むものと考へて置かねばならぬ。隨つてこの金解禁に依つて當然うけたる不景氣については、容易に是を挽回するの道はないと考へねばならぬ。

世界的不景氣については、政府は今日の我國の經濟不振の原因の殆んど全部を是に歸せんとつとめてをるやうであるが、是は金解禁の打撃や緊縮政策の結果を皆無に歸せんとする政略的說明であることは、何人にも明瞭である。吾々は政府がただ自己の立場のみに着眼して、國民の死活に關する經濟問題に就いて、國民の意識を曖昧に導かんとする態度を衷心より遺憾とするものである。若し政府の云はるる如く、今日の不景氣の主要原因は、世界的不景氣にあるとするならば、何故にかくの如き不利なる時期を選んで金解禁を斷行したかといふことを問はねばならぬ。世界的不景氣は、我國の金解禁後に起つた偶發的事實に非ずして、金解禁前より夙に顯著なる事實であつたのである。而るに本年一月金解禁當時に於てのみならず、總選擧の際に於ても、あれほど宣傳に努力した政府當局は、一言半句も世界的不景氣に就いて言及せざりしのみならず、金解禁については內外共に諸般の準備完成せるを以て、金解禁後に於て、我が經濟界に何ら憂ふべきものなしと強調し、又正貨の流出の如きも多額にのぼるが如きことなしと明言してをつた事は、世間公知の事實である。而るにも係はらず、その樂觀的斷定が忽ちにして根柢より裏切られ、經濟界は益々深刻なる不景氣に陷り、正貨は急速度を以て多額に流出し、物情騷然人心恟々たるを見るに及んで、突如として、其原因を世界的不景氣に歸し、自己の不明を蔽ふに汲々としてをるのである。

何れにしても、世界的不景氣は、是をいかんともすることはできぬ。又銀相場の暴落、印度濠洲其他諸國が關稅の障壁を高め我國の輸出貿易に打撃を與へたことも如何ともすることはできぬ。

斯くの如く詮じつめて見ると、不景氣の原因について、是れを除去し得べきものは、只、緊縮政策の撤廢の一に歸するのである。

緊縮節約に就いては、政府が昨年七月是を聲明した際に於て、全國民の多數は非常に共鳴したやうであつたが、自分はこの聲明を見て、戰慄を禁じ得なかつたものである。抑ゝ金解禁の一事だけでも、政府が近く是を斷行するの強き意志表示をした以上は、何人も直ちに物價先安の推定をするから、急激なる消費購買の見送りとなり、商取引の停頓となり、ストックの激增となり、諸物價の暴落となり、信用の破壞となり、金融の硬塞となり、ひいて金融難のために商品の投賣が始まつて、不自然なる物價の暴落を來し、事業不引合ひに陷つて操業の短縮、生產の減少を來し、失業者を生じ、破產者を出すことは免るべからざる歸結であらねばならぬ。その上に政府は事業の中止繰延べを行ひ、物資の購入を手控へ、府縣市町村に向つても同樣に之を強ひ、更に一般國民にも是を學ばしめんことを極力慫慂するのであるから、それだけでも急に商品の賣行は減退し、生產過剩に陷り、取引に大頓挫を來さしむるのみならず、金解禁と共に物價下落の二重原因となるのであるから、この關係よりも一般國民はい物價先安見越しを一層強大にし、益ゝ前述の如き現象を重加するのである。

斯くの如くにして、消費の減少と共に生產取引も減少し、生產取引に從事する人々には共に共に收入所得の激減をきたし、更に多大の損失を蒙らしめ、經濟界に於ては、消費の減退、生產の減少、取引の不振等、互に原因結果を相成すため、不景氣は日一日と深刻となり、その底止する所を知らざる狀勢に向ふことは、經濟理論の上から極めて明瞭なことである。

要するに緊縮節約の結果として、經濟全體のスケールが縮少して、貿易も減少すれば、國民の收入も減少し、國家竝に自治團體の收入も是に比例して減少し、只債務のみは金高に變りなくして實質的に非常に增大せられた結果になつて、益ゝ事業の經營が困難になるといふほかには、寸毫も利する所はないのである。

濱口首相、井上藏相はじめ、政府が緊縮節約を必要とする理由は、金解禁すれば爲替の騰貴だけ外國品が安く輸入せられるから、之に對應するためには、國内品の生產費を低下せしめねばならぬ、その低下の手段として、消費を節約すれば、生活費が低下する故、生產費の大部分を占むる勞働賃銀を引下げ、之によつて生產費の低減をはからねばならぬと考へたからであらうが、そこに根本の誤があらうと思ふのである。

眞の生產費の低下は、需要の增進に基く生產の多量による所

の技術の進歩、能率の増進、品質の改良に基礎をおかねばならぬ。今日世界各國のいかなる産業にても、その計算の基礎に國内消費におかざるものなく、國内消費の増進せざる産業は、遂に萎微衰退に陥り、從來相當の輸出をなしてをつた品物でも漸次減退の已むを得ざるに至ることは、その事例に乏しくない。

今日政府の緊縮政策に依つて、物價は著しく下落したけれども、その下落したのは無理に消費を激減せしめた結果であつて、眞の意味に於ける物價の下落ではないのである。この不自然なる物價下落のために、前述の如く、凡ての事業が不引合になり、隨つて輸出品の經營も困難になり、その生産を制限し、或は製造工場を閉鎖せねばならぬといふが如き悲境に陥つて、物價の下落は却つて貿易の不振を來さしむるの原因となつて居ることは、玆に改めて言ふまでもない。

政府は金解禁の準備對策として、國民の消費節約は絶對に必要である、世界各國皆この政策を遂行して始めて金解禁を行つたのである、即ち世界の試驗濟みであり、定石であるといつて、如何にも誠しやかに宣傳したのであつたが、吾々は左樣な經濟の理論に合しない政策を世界各國が採るべき筈なきを信じ、金解禁を實行した四十何ヶ國に就いて一々之を調べて見たが、政府の言ふ所は全然虚構の宣傳であつて、左樣な國は一國もないのである。今日に至つて、政府の緊縮政策の我が財界に及ぼしたる結果が、全然その期待に反したことは、政府に於ても明らかに是を認めて居るに相違ないと思ふけれども、行き懸り上強いて之を隱蔽せんとして、種々樣々の曲解を試みて居るやうであるが、最早多數の識者にして之に欺かるるものはなからうと思ふ。

政府は何とかして不景氣の挽回を計らんとし、急に色々の政策を提唱し始めたが、その失業救濟といひ、産業合理化といひ、輸出奬勵といひ、國産品の愛用といひ、何れも確固たる信念の下に適切なる手段方法を抱いて之を提唱して居るのではなくして、只一時を糊塗するに終るの恐れなしとしない。

我々を以てすれば、政府が財政經濟に關する根本方針を變更し、その變更したることを充分に國民に徹底せしめて、人氣の轉換をはかり、消費と生産とを普通の狀態にひき直し、商取引の停頓を緩和し、破壞せる信用を恢復せしむるに非ずんば、是ら政策は、到底その實効を擧げることができないと信ずるのである。

近頃政府與黨並びに與黨出身閣僚の間にも、相當熱心に政策

轉換の要望が起つて居るが、濱口首相の如きは、衷心より緊縮政策を以て財界立て直しの正道となし、今日政策を轉換することは、經濟界を邪道に導くものであると力說して居られる。かくの如くにして政府が從來の方針を飽くまでも固執する以上は、之を理論上より考へても、之を實際の現象にてらしても、我經濟界は立て直るどころではなく、益々萎微沈衰して終には收拾すべからざる悲慘なる狀態に陷ることを、吾々は衷心より憂慮してをるのである。何となれば、政府が此の方針を以て進む以上は、前に述べた如く消費は益々減退する、生產は之に伴ふて減少する、隨つて國民の收入所得も減少の外なく、國庫の收入も之に比例し、自治團體の收入亦同樣である。而して消費の減退と生產の減退と互に原因結果を相成して、經濟活動は益々萎縮するの外はないからである。

故に不景氣挽回の對策として是非とも財政經濟策を根本より變更することが、何よりの急務である。之がおくるればおくれるほど挽回が困難である。この經濟政策が根本から變更さるれば人氣が轉換し、經濟界の不景氣が底を衝くといふ氣構へになつてくる。そうなれば先物の取引も始まり、信用も恢復され、金融難も緩和される。左樣な趨勢になつてくれば、政府の今行はんとする不景氣對策もその實行があがり易くなる。例へば產業合理化の如きも、製品の賣行の多くなることを前提とするものであり、又之には資金の必要が伴ふのであるが、今日の如く消費の減退を以て經濟の基調とする政府の政策の下に於ては、如何に之を唱道しても實行のされやうがないのである。が、人氣が一轉して消費が增進してくれば、政府が奬勵しなくとも當業者自ら進んで產業の合理化に努めるであらうし、又之に對して資金の供給をするものもし易くなるわけである。

國產品愛用の如きも之が奬勵は、非常に必要なることであつて、自分は一個人として數年前より各所に於ける經濟講演などの機會に於て熱心に之を唱道して來たのであつて、政府がこの事に就いて力を用ふることは、大いに喜ぶ所であるけれども、今日の如き經濟方針の下に於ては、折角外國品に代るべき製品が續々出來かかつて居つた勢を阻止されてしまひ却つて內地品を捨てて、外國品の需要に移らんとする傾向を生じつつあるのである。經濟政策の根本が變更されて內地製品の賣行が增進してくれば、自然に國產品の品質も改善せられ價格も低下されて、國產品愛用がし易くなるわけである。故に近頃政府の提唱して居る政策をして實效あらしむる點からいつても、經濟政策の根本を變更することを以つてその前提とせなければならぬ。

最後に失業救濟の應急對策として、政府は失業救濟を目的とする地方土木事業に限定して、起債の認可を緩和することにして居るが、地方の起債を認可する以上は、何故に失業救濟を目的とする土木事業に限るのであるか、又地方の起債をゆるすならば、何故に國家の非募債主義を固守するのであるか、公債政策のみから言へば、普通の經濟狀態の下に於ては、政府の非募債政策は確かに一家の見識たるに相違ないけれども、經濟界不振の極に陷り失業者續出、人心頗る不安の狀況を呈して居る今日の如き非常なる場合に於ては、非常なる對策を講じなければならぬ。それには非募債主義を放棄して、償還計畫の確立すべき事業に對しては相當思ひきつた計畫をたて、この財源を公債に求め、死活の巷にたてる勞働階級に職業を與へ、その生活の不安を緩和することは、是非とも之を斷行せなければならぬ。かくして失業を救濟すると共に、又一面に於て購買力の增進を促し、經濟といふ大きな深い井戸に向つて、向ひ水をそそぐことになり、ひいて不景氣挽回の有力なる手段となるのである。

要するに無理無準備なる金解禁を、このままにして不景氣の挽回策を講ずるには、何よりも誤つたる財政經濟政策の根本的轉換を以て、第一の前提とせなければならぬ。

新刊紹介

The Little Oxford Dictionary (George Ostler 編) 簡約オックスフォード英辭典を基準として、厖大に緊縮されたものであるが、アメリカン英語其他現行英語を網羅して甚だ簡便だ。(ポケット型六二六頁、定價・八五、丸善株式會社)

Problems of the Pacific,-1929 (J. B. Condliffe 編) 昨秋京都及奈良に開かれた第三回太平洋問題會議の成果である。「機械時代と傳統的文化」「太平洋に於ける人口食糧問題」「太平洋諸國に於ける工業化」「支那の對外關係」「支那の財政立て直し」「滿洲問題」「太平洋に於ける外交關係」等の重要諸項目を含む。事實及問題を自由討議せる結果を茲に展望し得るを喜びたい。(菊判六九七頁、定價五弗、シカゴ大學出版部)

海軍縮小の話 (永川俊美編) 朝日政治經濟叢書第一篇、收むる所ロンドン條約締結の經過並に結果、及ワシントン會議、ジエネーヴ會議の概觀。附錄として統帥權問題論戰記。便利な書物。(四六判二一六頁、定價・五〇。朝日新聞社)

豫算の知識 (前田美稻著) 豫算制度の大衆的解說、卽ち稅金の使はれ方が誰にも分るやうに記されてある。時宜を得た出版である。(四六判三五九頁、定價一・五〇、千倉書房)

日本商業史 (菅野和太郎著) 日本經濟史研究勃興の產物として、日本經濟史一般、農業、土地、財政に關する論著は、多く世に發表されたが、資料に乏しい交換に關するまとまつたものはあまりない。本書はその交換現象特に商業現象の發達史(四六判三五二頁定價一・八〇。日本評論社)

漫談・劇と映畫

坪内逍遙

先づ、劇の盛衰談からはじめる。

「演劇の落伍」といふ題で、劇とはいひ條、主として歌舞伎劇場の不振を論じた去る七月十七日の『東京日々』は、その論中に次ぎのやうな統計を掲げてゐる。

昭和二年、東京市及び府下映畫常設館二百二館、入場人員二千二百八十萬人。

昭和三年、同前の常設館二百二十館、入場人員三千二百六十五萬人。

一年間の増加約四百萬人。

昭和二年、東京市内の劇場、入場人員五百卅六萬人。

昭和三年、同前の劇場、入場人員三百五十八萬人。

一年間の減少約百八十萬人。

論者は劇――主として歌舞伎劇を指すらしい――衰微の原因を、(一)入場料の高價な事、(二)内容が陳腐で、現代の趣味、好尚に合はぬ事、(三)明治期限りである筈の舊作を今だに幾たびも反復して上演してゐる事、(四)興行時間の長過ぎる事等に歸し、それに反して、映畫は時間も短く、觀料も廉、その上、内容は時代知識の尖端づくめ、題材は無限に變化する、老若男女ともに悦んで見る、云々、といつてゐる。

いかにも其通りだ。今の所謂歌舞伎劇は、いや、新派劇とてもだ、現代の趣味に合はないばかりでなく、或ひは老人連の趣味にも合ふまい。本來、小説だの、劇だのをムキになつて面白がつて見るのは、女は知らず、わが國のインテリとしては、四十前後まで、あるらしい。殊に、わたしなんかは、もと〳〵國劇の刷新を目的に、早くから批判的にばかり觀劇する習癖が附いてゐるたせいもあつて、陶然なぞとは言はぬまでも、多少われを忘れ、夢心地の藝悦めくものを感じたのは、明治も三十六七

年が限度であつた。まして團、菊死後の興行物ではだ。一般には熱狂的に歡迎されたらしい劇にさへも、ほんの生温い感興を覺えたに過ぎなかつた。さうはいふものゝ、今でも目のわるい老妻の手引き役をして、年に五六度ぐらゐは歌舞伎座其他を觀には行く。が、退屈で困る事が多い。よくも今の若い人達が――滿員なのは、半分がた義理見物であり、興行政策の結果であるとしても――まるで、時代錯誤で、其思想にも趣味にも合はなかりさうな劇を、あんな常套な仕草を、ケレンを、筋を、相當な教養もありさうな淺黃手柄の大丸髷やボッブの洋裝までが、(勿論、幕あひには筋書きから目を離さずに)聲を揚げて笑つたり、少々頭のてッぺんが赤みかけた鼻眼鏡の紳士や、ともかくも市内のサラリー・マンであるらしい新調の春服までがハンケチで頻りに目をこすつたりして、よくも、さも面白さうに觀てゐられたものだ。わたしはむしろ不思議でならない。

さういふ自分だ。今の劇には愛想を盡かしてゐるわたしだ。だから、『東日』の論旨には何の異議もないが、あれだけでは論が大ざつぱだと思ふから、思ひつくまゝを少々繼ぎ足して見よう。映畫は別問題として、劇、殊に歌舞伎劇盛衰の因緣は、あ、簡單には方附けられない。

歌舞伎は、野生藝術ではあるが、約三百年の奇異な進化と一種無類な、而も半無意識的な練磨で出來たものである。で、其藝術としての資格が、古典的といふ點だけでは、能やオペラや文樂の操りと同格のものだが、其不思議な複雜性と變通性との故に、一概に彼等と同一視するわけにもいかない。能も今は時代に遠ざかり、文樂も、又外國のオペラとても同斷なのだが、彼等とても、(甚しく變質せない限り)、長永に光る古典藝術としての素質を持つてゐるから、決して容易に寂滅はすまい。つまり、古典は後の新藝術の種子になることもあれば、酵母や肥料になる場合もある。わが人形芝居や歌舞伎は能と狂言を種子にして生れた。後者は、つい昨今までですら、時々それを肥料にしてゐた。一體、一國の文化は悉くトラディションを解脫しては成長せないものだ。殊に、藝術はである。藝術其者、作者其人がさうであるばかりでない、鑑賞者とてもだ。例へば、四十前後までは、專ら油畫や新畫ばかりに向つてゐた目が、『讀賣』の名寶展なぞが導火となつて、雪舟、周文、住吉、土佐と遡り、元明、唐宋と寂びてゆくやうなものだ。古典にさういふ魅力のあるのは、要するに、トラディションに一種の不可抗力があるからだ。傳統を撥無してしまつて、一國の新文化の成立つ筈がない、あつたら、それは外國のそれの直移植だ。只の模倣だらう。

歌舞伎は不思議なトラディションの複合から出來てゐる總藝術だ。首だけで、胴だけで、尻尾だけでも生きられる。百足のやうな舞臺藝術だ。維新前にも既にさうであつたが、明治以後は、それに妙な翼が生えたり、角が添はつたり、雲を起したり、火を吹き出したりして、おそろしく複雜な變通自在な化け物になつてゐる。ヘラクレスを傭つて來ても容易に退治られさうにない。舞踊性、レギウ性、象徴性、ロマンス性、ナチュラリズム性、リヤリズム性、ナンセンス性、大甘な幼稚病性、扮裝、仕草、セリフ廻しのグロテスク、濡れのエロ、殺傷のテロ、御大衆樣本位のプロ傾向、——何でもかでもお好み次第の獻立である。十錢均一でないのが疵だが、こんな調法な劇藝術の公共食堂が世界ぢうのどこの國にだつてあるものか？

だから、歌舞伎は、觀覽料さへ下げりや今のまゝでいゝ、なぞといふのではない。が、後でいふと議論めくから、これは、いはゞ、公理同樣のトルイズムであるといふ事を先きへ斷つておくまでゝある。

そこでだ。

『東日』の論者は、第二(或ひは第一)の劇不振の原因として、劇の内容の時代趣味に合はない事を擧げてゐるが、わたしはむしろそれと同等もしくはそれ以上の要因として、大劇場の急テンポの増設と人氣俳優の凋落、女形の不振といふ事を擧げて見たい。

現下、大小の劇場で上演してゐる脚本は強ち舊い作ばかりではない。丸本物も大ぶ減つて來てゐる。默阿彌其他の舊作家物の數も以前ほどではない。最も優勢な綺堂物、錦花物、松翁物の外にも、少くも第二流の劇場では最新進作家の作も時々上演されてゐる。なるほど、現代風俗を其儘といふやうな世話物は、新派や五郎の出し物を除くと、至つて尠い。イデオロギッシュな物も築地派のそれら以外には殆ど絶無だといつてよい。けれども、前に暗示しておいた如く、「忠臣藏」や「先代萩」や「鏡山」さへも初めて觀て、相當滿足に享樂し得る男女老若の觀客が、さやうさ、今の大小劇場の觀劇者何百萬人中の、少くも三分の一はあらうと推定されると考へて見ると、若し觀劇料さへ廉くなれば、まだ／＼こゝ十年二十年は此まゝでもといへぬこともない。映畫だつて、外國物を除くと、大多數は講談や草双紙をほんのちつとばかり現代好みにした鑄物ではないか？ 脚色から扮裝から上目を使つた大見得、場面、仕草、何から何までも舊劇趣味の適用若しくは變用に過ぎぬではないか？ つまり、大多數の要求は娯樂たるに過ぎない。めづらしければ何でもいゝのだ。アトラクチーヴでさへあれば、いゝのだ。スリ、

ングなら、センセーショナルなら、センジュアルなら、アジテチーヴなら尚ほいゝのだ。たゞそれだけである。趣味だ、好尙だといつたつて、さほどやかましい程度のものぢやないのだ。だから、長二郎の、すみ子の、信子の劇場出演が人氣を呼ぶのだ。原色以上の原肉顔や原肉聲に憧れるファン心理を推し究めて行くと、――わたしは必ずしもかのピランデロ其他の論者のやうに、トーキーは、要するに劇の大敵ではなく、無言映畫それ自身の獅子心中の蟲だなぞとは言はないが――肉顔、肉聲の人氣俳優(歌舞伎の)に一種特別の魅惑力のあることを注意せないわけにはいかない。大收容力を持つ大劇場が急に二ヶ所にも三ヶ所にも出來なかつたら、花柳界や出入商人方面に義務見物を割り當てる興行者側の政策も、在來通り、もつと滑かに行はれるであらうし、甚しい割引きもせずに濟むであらうし、不況とはいへ、外にどういふ大きな娛樂場とてもない東京だ、突ッ掛けの客もまさか現在ほどに減りもせなかつたであらう。しかし、一體、ふりの觀客に對する劇場當事者の態度なり扱ひ方なりは甚だ不當だ。强制觀劇の驅催しや切符の前賣に忙殺し熱衷するの結果、一等も二等も初日早々から總べて好いとこは豫約濟みだ。中日以後でも、突ッ掛けで二等もしくは三等の席を求めると、知りあひの案内者か當事者かゝゐない限り、成るたけ陋の方の、見よくない席へ入れられる。或時、わたしは、或劇場で、わざと三等切符を買はうとした。と、たしかに有る筈だのに、二等しか無いと言はれて、二等の而も甚だ見よくない處へ入れられた。勿論、姓名を名宣つたのではない。况んや四等以下のフリの客に於てをやだ。四時あき、五時あきの大劇場の入口へ、一時、二時から詰めかけて、ソヱートの勞働者が配布を待つやうに、金魚の糞のやうにつながつて、有閑階級でもある事か忍耐づよく、開場間際まで順待ちの行列。ともかくも大歌舞伎だから、一圓五十錢乃至七八十錢は必ずしも高くないとしてもだ、「時は金」の無産者に取つてはたまつたことでない。映畫の輕便、均等、低廉とはどえらい逕庭。

中以下のフリの客に取つては右の如く、中產以上に取つては負擔過重。觀劇者の減るのに何の不思議もない。

それに、かて、加へて、人氣俳優の凋衰、花形の不振。

歌舞伎衰亡の豫言は今にはじまつた事ぢやない。團、菊の亡くなつた當時、もう既に其前途を悲觀されたものだ。だが、存外、案じたやうでなく、西では、雁、延、福ら、東では、歌、仁、羽、梅、幸、宗十らの本營、左、菊、吉、勘、宗之、猿、福らの前衞が新鋭の意氣すさまじく、ともかくも大正中期までは持ちこたへた。ところがだ、本來、わが歌舞伎といふ特殊の

劇は、今更改めて言ふまでもないが、半分方以上、形式美、視覺美の劇である。それを歌舞伎劇通なぞは主として型──藝風の上のトラディション──の美であるといふかも知れない。が、それだけではない。劇全體を蔽ふ一種不思議な、鵺式な複合美、想化でもなく、寫生でもなく、舞踊でもなく、歌謠でもなく、──もう大ぶ變質した今となつては、故岸田劉生君が言つたやうに、強ち無智、稚拙、野鄙とばかりは言ひ切れない、──いはゞ、不卽不離の一種の美が所謂歌舞伎の生命なのである。とにかく、心に訴へるよりは目に訴へる部分がずつと多い。能や支那劇にも同じ趣きがあるが、所詮は文學や理窟やイデオロギーが主ではなく、形式の美が第一なのだ。だから、丸本物や南北前期の物なぞを觀て、封建的イデオロギーを氣にしたり、其不合理、不自然を難じたりするのは、文樂の黑ごや出遣ひを氣にしたり、オペラ役者がセリフの代りに歌を唄ふのを、能の假面や小道具や足取りや直おもてを氣にするやうなものだ。歌舞伎は動く畫だ、動く彫像だ、有形にされた音樂だ。先づ專ら目で以て鑑賞すべき劇である。

歌舞伎は、だから、特に舞臺面の、動く畫としての、動く彫像としての、有形な音樂としての統整を要求する。それが缺けたら、形式美本位の劇としては零だ、死だ。統整とは、作意の──よし其作意が如何に不合理、不自然であらうとも──舞臺上に於ける完全な實現、いひ換へれば、各優人のイキがよく合つて、其藝が其役々に適すべく精練されてをり、座頭、立お山から端役、床、下座、道具方、其他の末々にまでが全く有機的に合體して働くことをいふ。いや、まだある。

歌舞伎として極めて緊要な事は其役々が其人らしいばかりでなく、其人らしく見た目に愉快であるといふことである。此點に關しては、故劉生君がうまい事をいつた。いや、うまい名稱を附けた。といふのは、これは苟も寬政以來の役者繪を見慣れてゐる者の一樣に心附くことであるのだが、それを歌舞伎劇の一種の特徵であると標榜して、「役者美」と名を附けたのは當を得てゐる。さういふと、役者美は映畫にだつて、外國劇にだつてあることだ。ブースは、アーギングは、コクランは、ベルナールは、デューセは、チャツプリンは、フェヤバンクスは、長二郞は、大河内は、阪妻は？　すみ子は、靜江は、蓉子は？　と抗議されるでもあらう。なるほど、外國劇にも、殊に映畫には大ぶ似た事があるらしい。役者の柄や持味を見立てゝからシエナリオを作るが、歌舞伎の舊作物は皆が皆それだ。劉生君が羽左衞門や源之助であればこそ「知らざア言つて聞かせやせう」も「月もおぼろに白魚の」も魅惑的だが、他の役者ぢや妙でない、

役者其人に美があるからだといふ意味の事をいつてゐる。わたしは、それは本來が柄に嵌めて書いた作だからと言ひ足したい。羽左や源之助が其役らしく感ぜられるのは、五代目畑、田之助畑の役者だからだ。お嬢吉三はもと／＼作者が粂三に嵌めて書きおろしたものではあるが、實をいへば、羽左衛門時代の五代目か田之助でなくてはならない役なのだ。だから、粂三は成功ぢやなかつたらしい。

すべてわが舊作物は役者美本位で書きおろされたものだ。仁木や權太は丸顔では何となく折合はない。脊が低くゝてもいけない。でぶ／＼肥つて、(たとひ藝はうまくても)姿がわるくては妙でない。成るべくは、長面、隆鼻、目に凄味があつて、やゝ瘦形で、すつきりとした役者でありたい。さういふ事は仁木や權太に限つた事ではない、舊名歌舞伎一般に亙つた事であるのは、單に書きおろしの連想や役者錦繪の印象からばかりではない。脚色全部が、其劇的局面の一々が、其セリフが、其ポーズが、總べてそれらの役者美に當て嵌めて書かれてあるからである。外國の劇にだつて、多少は當て嵌めて書くといふ例もあるが、あちらのは純な科白劇、所作式の美を主眼とした作でないから、オセローが瘦せてゐようと、ハムレットやイヤゴーがでぶ肥りであらうと、必ずしも妨げない。心に訴へて感動させさへすればよい。クラシックに對してすらさうだ。テーマ中心の近代劇に至つては尙は更である。役者の姿の美なぞは第二義、第三義である。

歌舞伎は見た目の美しさを第一とする劇である。動く畫であり、動く彫像であり、有形な音樂である。例へば、寫樂、春章らの役者繪が其何役を描いたのかさへも不明であつて、尙ほ一種の魅力を持つやうなもので、歌舞伎は、其イデオロギーが如何に陳腐であらうと、其脚色が如何に荒唐であらうと、わたしが前に擧げた上演條件さへ備はつてゐれば、苟も美の鑑賞眼のある者には愉快に見られる。二度、三度と見直しても飽かない。寫樂の役者繪や勝川流のそれが額に仕立てゝおかれると同じ理合だ。そこが只單に新奇な物や場當り物やテーマ物やナンセンス物や移植物や一夜作り物とちがふところだ。

が、それは飽迄もわたしのいふ上演條件が悉く具備してゐる場合の話だ。一たび舞臺面の統整が崩れはじめ、優人各自の藝練磨が不十分となり、其役々にふさはしい見た目の快さが缺けた日には、歌舞伎は劇として死んだも同然であるのだ。が、氣の毒な事には、それが現在の歌舞伎の有様である。

東京にも、大阪にも、今はもう舞臺の統一といふことは殆ど、いや、全く絕無だ。藝に精練なといつてもいゝ名優はまだ大ぶ生

き殘つてはゐるが、いづれも六十間近か、七十以上だ。俳優に齢はないといふが、三百燭光以上の前には、たかゞ、五十五六が限度だ。稀世の名優九代目でさへ、六十以後の舞臺は寧ろ氣の毒だつた。とりわけ女方はだ。老女や年增に扮すりや格別、どう贔屓目に見ても、三十以下とは見られないのが廿歳そこいらの娘役をする。皺が目立つ。入齒聲が耳立つ。或時は無氣味、或時は氣の毒、時としては見てゐるはうで氣恥かしい。「近附きの女方あり年の暮」どころの感じぢやない。曾ても論じたが、若女方の凋落がわが歌舞伎の致命傷だ。青年劇の粂三や田之助や今の歌右衛門の福助時代の人氣を獲得しさうな女方の卵が只の一顆でもあるか？　若女方の變態エロなしには、歌舞伎は零(ゼロ)である。

立役とてもだ。其鼻を拭いた紙を變態性の見物女に拾ひ取られるやうなのが只の一人でもあるか？　中堅どこ、若手連といつたつて、もうみんな分別盛り、或ひはそれ以上だ。いづれも色氣は稀薄だ。ところが本來が何等かの意味のエロ趣味で養はれもし、醇化もして來た役者本位の歌舞伎に色氣の稀薄は禁物だ。贔屓が薄れる筈だ。

以上、歌舞伎不振の原因は、第一が入場料の不廉、第二（或ひは第三）が大劇場の過剰、第三（或ひは第二）が名優の凋落、花形及び若女方の缺乏、第四が脚本の陳套。時間の長短なぞは第五程度の原因であらう。

＊　＊　＊　＊

入場料の不廉と脚本の陳套を不振の主因だと強調する論者は、或ひは曾我廼家（五郎）劇の興行毎の成功を其反對の例として引用するでもあらう。なるほど、五郎の芝居は廉い。新作本位でもある。時尚を、時事を、時代相を、流行を巧みに取入れることを忘れない。此二つの特色が先づ以て客を引く原因だといふのに異議はない。だが、若し彼れの劇の長所が只單に右の二ケ條だけであつたならば、迚も長續きはせなかつたらう。厭かれる歟、類似の他の喜劇團に取つて代られたであらう。

いや、五郎の劇にはまだ別に種々の特色がある。一々說明三昧もうるさい。左にざつと一つ書きにする。

一、舞臺面の統整と配役の妥貼。これは主座俳優の五郎が作者、演出者、舞臺監督を兼任するから出來るのである。

二、蝶六、大磯、其他の老練家が揃つてゐる事、で、藝に危なげのない事、イキのよく合ふ事。これは、掛け持ちせす、切り賣りせず、長年一しよに日立式の練習を積んで來

た一座である上に、監督の熱心な督勵が效を成して、如何な新作をも、如何な不自然な滑稽をも、觀た當座だけは、とにかく尤もらしく感ぜさせるに足るからである。

三、作柄が大多數の好みに適する事。役者各自の持味と時の新聞種なぞを巧みに利用した脚色上、動作上のをかしみと場當りの滑稽なセリフ、意表に出た舞臺裝置、ナンセンス的の趣向、通俗平易の筋立、常識的な、誰れしも異議のない教訓、餘り苦くない、さはりのない輕い諷刺、親子並んで見てゐてもさしつかへないエロ趣味。これが存外他の劇には缺けてゐるのである。

四、悲喜混淆劇、時としてはちよつと手に汗を握らすやうな荒つぽい無氣味な立廻りもして見せる。幕切れまでは悲劇脈であることもある。喜劇としては甚だ不純な、變な物だとも言へるが、そこが五郎の興行者たる所以である。出刃やピストルを折々持ち出させて、劍劇の株をも半分取り、子役や老人を使つて、新派の(時々は變な醫物、時代物を出してまで)歌舞伎の株をも横取りするからである。

五、東京市人にもどこの見物にも分り易い程度の大阪言葉。これもたしかに一特色である。一體、五郎の劇は脚本で讀んで見ると、甚だそつけない。面白味は主として表情、動作、セリフ廻はし、とりわけ、役者各自の持味にあるからだ。要するに、喜劇は關西言葉に限る。純東京式のチャキパキした語調ではをかしみが薄い。猿之助、友右衛門の彌次、喜多もをかしみは、筋立と科介のクスグリに在つて、其セリフには——少くも其セリフ廻はしには——乏しい。

六、不思議に若女方に素直なのが多い。どうしてあゝ自然な藝風を習つたのか? 五郎、大磯の薫陶だらうか?

七、關西人の贔屓を如才なく驅り催す五郎の策動。

此七特長があつて見れば、五郎劇の成功は別に不思議でもない。不思議はむしろさほど聰敏な五郎がだ、どうして名人の藝は七分といふ呼吸を忘れてゐるかといふ事である。二度いへばよい事を五度もいひ、二度振ればいゝ頭を五度も六度も振る。master's reserve——誰れか二三粒呑ましておやりなさい。

あゝ、わたしの劇の話までが七分どころか十分過ぎた。どうやら映畫の話をするセキがなさゝうだ。しかしお約束だ。一通り喋舌つて見よう。御迷惑だつたら、以下は、出來そこなつたフィルムなみに、切り取つて捨てゝ下さい。

* * * *

映畫嫌ひの私が、妙な行きがかりから、ことし初めて其撮影

にまで携はつた。珍といや、只それだけが珍だ。

なぜ私は映畫が嫌ひだつたか？　何となく罐詰物の味や臭ひがするからだ。わたしは、ほんの野菜物の一二種を除くの外、あらゆる罐詰が大嫌ひだ。隨つて、といふわけでもないが、およそ罐詰に似てゐる物は嫌ひだ。時代におくれた話だが、とかく機械で拵ちた物を好かない。ガスや電氣で煮燒きしたもの、冷藏庫物、どれも好かない。で、蓄音機も嫌ひ、ラヂィオも嫌ひ、電話も嫌ひ、飜譯も――自分も止むを得ない因緣で不束ながら幾らかやつたけれど――實は嫌ひ。まづいのは殊に嫌ひ。でも、寫眞や版畫や複製なぞは、さすがに嫌ひぢやない。だが、同じく寫眞でも、映畫は、自然を、山水だの、鳥獸、草木だのを其儘に寫したやうなもの丶外は、何となく蟲が好かず、表現派式映畫の出現を境ひに、わたしは映畫界に遠ざかつてしまつた。其癖、此新興藝術とわが過去の民間文藝との間に存する一種不思議な類似性に關しては淺少でない感興を覺えてゐた。それは大正二三年ごろの事だ。前の歌舞伎漫談の補遺といふ意味にもなるから、其舊稿の一部をこ丶に引抄することを許して貰はう。

「わたしは、世界中で、最も早く活動寫眞の可能性を直覺し、一種特別な、創意的な方法で、千變萬化してそれを實行してゐたのは、世界ぢうで、恐らくわが國の外にはなからうと思ふ。わが國では、少くも百三四十年以前から、言はゞ、原始的活動寫眞ともいふべきもの丶フィルム製造に著手し、著々その規模を擴張し、今から百年前ごろからは怖ろしい長尺物をさへも製りはじめた。さうして年々に製り足して、竟には何百何十間に亙る程のが幾らも出來た。その發生の始めには、畫面が、今の廉物の幻燈畫に比して、更に粗末、更に幼稚な、ほんの子供だましに過ぎなかつたのだが、それがおひ／＼成人向きになり、やがて滑稽物（今でいふとナンセンス物）を主として映寫するやうになり、それがまたいつの間にか、殘酷な人殺しの畫面を主とするやうになり、又更に發達して怪談味が加はり、人情味が濃くなり、竟には立派な、のべつ幕なしのメロドラマとまでも發展した。勿論、それらは總べて、今の普通の寫眞同樣、ブラックとホワイト式で、無彩色であつたのだが、其内容は中々凝つたものであつた。或ひは其頃大當りをした歌舞伎劇そのま丶なのもあつたが、多くは、古い淨瑠璃や歌舞伎の成功した部分だけを拔粹して、いはゞ、パーミューテーシヨンといつたやうな鹽梅式に、繰返し／＼、千狀萬態に組み合せ、綴り合せたに過ぎない風の新作物であつた。お

まけに、それに使用される俳優は、中ごろからは、全部第一流の歌舞伎役者で、例へば、かの永木の三津五郎、鼻高の幸四郎、七代目團十郎、半四郎、菊之丞などが、其第一滿開期（エフロレセンス）の（此特殊の）活動役者であつたのみならず、尚ほ一種の發辟機關までも、初めからそれに附屬させてあつて、中には其説明が中々立派な美辭でもあり警句でもあつた。其幾部分かは今の人が之れを藝術品扱ひにしても、強ち不當でないやうな名文章であつた。

といふのは、日本式の影畫のことをいふのか、と訊く人もあらう。

いゝえ、さうではない。

黄表紙から合巻、二册、三册限りの合巻から二十篇、五十篇、七十篇、九十篇の草双紙と發達したわが説明附きの畫小説なるものゝ變遷は、いはゞ、一種の、幼稚な、原始的の、併しながら、頗る複雑な、世界に類例のない活動寫眞畫の進化史ではあるまいか？

畫を主位に置いて文章を從位に置くわが國文學の特質は、遠く土佐、住吉の畫卷物――これもまた歷とした一種の藝術的活動寫眞畫である！――に濫觴してゐるが、近代に近づくに隨つて、繪卷式は奈良繪本式に及んで一頓挫し、同時に畫を主とするよりも文を主とするやうになつて、挿畫といふことが始まり、それがお伽草子や浮世草紙やに至つて、次第に盛んになり、八文字屋物に傳はり、寶暦から天明、天明から文化、文政までの滑稽本や洒落本や讀み本や人情本にまでも及んでゐる。が、これと同時に、畫卷物式――即ち原始的活動寫眞式――の方も、一たん頓挫こそしたれ、決して根が絶えたのではなく、夙に操り芝居や歌舞伎の繪盡しや狂言本や乃至畫番附等に其血脈を復活し、つゞいて赤本、黒本、青本にそろ〳〵新しい根を延ばし、黄表紙の流行に伴つて、次第に敵討物の枝葉を繁らせ、所謂合巻草双紙の大進展によつて、竟に精巧複雑を極めた――時には驚くべき長尺の――活動フィルム式の一種不思議な大畫ばなし集と發達したのである。

さうしてそれらのフィルムは、今も尚ほ幾らも保存されてゐる。前後百數十年間に亙つて、少くも六七百種は、今だに完全に保存されてあると斷言してもいゝだらう。其内容は、殆ど悉く劇であると前にいつたが、それは決して比喩ではない。明かに悉く劇式であり、あまつさへ役者は悉く其頃の名優の肖像なのである、それのみならず、すべて表紙畫は原色版式であつて、極彩色になつてゐる。いや、

そればかりでない。これらのフィルムの一々へ、例の說明――細字の字幕――を添へるに當つて、文字は殆ど悉く表音字――本假名――ばかりで、しかもそれを六號活字式の細印刷でやつたなぞは、新假名主張論者やローマ字論者を凌ぐ時代錯誤の大ハイカラではないか？（下略）」

かういふ豐富な閱歷があり、經驗のある國民としては、其映畫界に於ける進展は餘りに緩漫である。前にもいつた通り、わたしはもう久しく映畫館へは足を入れない。けれども雜誌や新聞で否應なしに其畫面の若干は見せつけられる、シェナリオのあらましをも讀まされる、一二度は實寫をも何かの引ッかゝりで見させられる、想像と類推とで大概の模樣は解る。解つた結果はます〱私を映畫に遠ざからせるばかりであつた。

ところが、妙な行きがかりで――其理由は必要がないから、省くが――自作の或兒童劇をさる敎育映畫會社用の爲に映畫化することを承諾したので、さてどう誂へたら、自分の作意にも又先方の目的にも叶ふだらうかと、責任上、とくと考へて見ねばならなくなつた結果、内外に於ける最新映畫の若干を見學する事の必要を感じた。

右の映畫會社當事者の斡旋で、私は最近比較的好評だといふ――主として兒童目的の――内外の製作品を若干觀た。――わざとロケーション式の實演物を忌避して、ドイツ製のシルーエット物だの、内外の漫畫物だのを見せて貰つた。其うちで、例の「アクメット王子の冒險」が先づ大きに私の心を惹いた。この式ならば繡詰物ではない。「アラビヤンナイト」の話譚を三つ四つ、人名や地名や筋や關係を取り換へて、それへギリシャ神話まで織り込んで、勝手に縫ひ合せたに過ぎない細工は、取りも直さず、わが草双紙式であるのだが、さすがに末期浮世繪と近世西洋線畫、ノロマ人形とジャヴ操りほどの藝術品としての趣味上の差があつて、斯ういふ類の物なら、自分もちよいと試みて見てもよいなといふ氣が起つた。線漫畫にも多少の好感が持てた。たゞ内地物はとかく題材がまづしい。如何に兒童向きだからといつて、其作意が、脚色が、構想が、趣向が餘りにも陳套であつたり、貧弱であつたり、只目に見る物としても空疎過ぎる。藝術價値に乏しい。しかし此線漫畫といふものは、利用すれば、たしかに映畫界に一大生面を開展し得るものに相違ないと感じた。

次ぎに、演劇博物館との關係で、大阪へ行つたついでに、大阪每日新聞社の好意で、同社專有の「魔法の時計」といふ人形を使つて映寫したフランス出來の新映畫を一覽した。これがまたドイツの影繪映畫以上に私を感心させて、映畫即繡詰觀を少く

も半分がた撤回するの餘儀なさにおとしいれてしまつた。なるほど、此意氣で進展すりや、映畫は、第六だか、第七だか知らないが、立派な藝術になるに相違ないと思つた。

　そこから歸京して、はじめてトーキーをたつた一つ見聞した。豫想よりは聲が金屬的でないのに感心したが、――又同時に伴奏附きの外國新畫を二三觀たが――たかゞ、「鑵詰も近ごろのは大ぶ進歩したやうですね」ぐらゐのところで、それ以上の新感想もなければ、第一、批判する資格がない。

　現行映畫に就いての私の蘊蓄は、精々で、これッきりだ。それでゐて、撮影の指圖なぞは押しが強過ぎるが、まァ聞いて下さい。

　伴奏、原色、影繪、線畫、偶人及びトーキーとまで急テンポで進化して來た映畫といふ新興藝術の前途は迚も私のやうな門外漢の逆睹し得る所でない。どんな不可思議な、眞個破天荒の映畫様式が遠くもない未來に、ツイ鼻の先きへ飛び出して來るかも知れない。それにも拘らずだ、從來私が見聞した限りのものでは――内外の自然物、文藝物、新作のロケーション物、セット物、一時行はれた表現派様式の物、演劇を殆ど其儘に移植したものまでを含めてだ――何だかまだ甚だ物足りない。筋(ストーリー)を拵へてセットなりロケーションなりで實演したものは、内地のは勿論、外國のも私にはまだどうも拵へ物らしいのが見え透いて嬉しくない。殊に、内地製は、シェナリオのあらましと雜誌、新聞の畫面、傳聞、及びほんの最近に觀た一二によつて類推すると、たかゞ、大衆用の甘い見せ物で、藝術視するにはまだ遠いものだ。比較的髷物や茶煎物が多いやうだが、史實なぞはどうでもよいとして、時代風俗の考證なり調査なりが如何にもぞろッぺなのが存外多い。隨つて、脚色も演出も不自然、不合理で、藝術的になつてゐない。これはシェナリオ作者が餘り年が若い歟、學殖が不足な歟、とにかく立派な藝術家でないから歟ではないか？　「アクメット王子の冒險」や「魔法の時計」を見ると、作者も相當の藝術的人格者である上に、年所をも重ねて、苦心に苦心を重ねた末の製作であるだけに、前者は只のお伽話ながら、意匠が面白く、局面の變化が豐富であり、後者は何となく哲學、科學の匂ひまでさへもほのめかさせて、相當のインテリにも幾らか會心の笑みを洩らさせる。なぜさうか？　明かに作者の人格がちがふ。學殖がちがふ。製作に至るまでの渉獵、考案、練磨、研鑽がちがふ。誠意と熱心が作の全部分に漲つてゐる。それに比べると、内地製はやゝすぐれた物さへも概して大衆小説の移植か、模倣か、外國映畫の翻案に過ぎないもののやうだ。そもそも線畫式といふ畫法はわが畫家の特長であ

るのだから、漫畫映畫などには外國に類例のない作物が出來さうな筈なのだが、今はまだそんな片影さへも射さない。「太郎さんの夢」の畫家などは目下の第一人者ださうだが、――さうしてあの夢の部分などは中々面白いのだが――實演との聯絡が十分藝術的になつてゐない。太郎の子役を新派劇の子役式に只もう奇麗に可憐にメーク・アップしたり、若い父母をも同じく新派劇式に行動させるなぞが陳套だ。セットを漫畫式にし、すべての人物を夢のそれと比較的調和せしむべく、多少漫畫化したらよさゝうなものぢやないか？　勿論、さういふ式は外國のにもないらしい。が、一さい合さい、外國の指導や創始を待つとは無念ではないか？

大藤某氏新案の千代紙映畫は一部に好評ださうな。が、内容が如何にもまづし過ぎる。それに千代紙は女兒用に限るものといふことを作者は忘れてゐるらしい。畫風も一律式だ。浦島を青類のチョン髷なぞは草双紙式の傳說にもない。いつそ五分刈の背廣姿にでしたはうがをかしからうぢやないか？　浦島傳說だの羽衣傳說だのは、映畫化する場合には、幾らも奇想天來の新案が浮びさうなものだ。私は「アクメット王子」や「魔法の時計」を觀てゐる瞬間に、日本及び支那の神話や古傳說や古小說に幾パーセントかの象徴味なり科學味なりを加へて上手に狸汁式に調理すりや、このくらゐの物は、――少くもシェナリオを作るだけは――決してむづかしい仕事ぢやないと思つた。即座に、實際、其瞬間にも、二三の腹案だけは浮んだ。

なぜわがシェナリオ作家は、時代物といふと、講談や草双紙の現代化めいたものばかり書いてゐるのだ？　いつまで、博徒や俠賊や毒婦の話を反復してゐるのだ？　劉生君が妙なパラドキシカルな評語を捻出して、歌舞伎を「下品美の高級藝術」だといつたが、講談や草双紙は、其只少數を除くと、全部が「下品美」の、而も概して低級な藝術品だ。さうして今のわが映畫作品は、少くも其時代物は、そつくり其儘その藝系統を傳承してゐるのではなからうか？　何等かの通俗美はあるだらう。が、あまりにも營業本位だ。どこにエセチック・インテリを悦ばすに足るヒューマーがある、ウィットがある、品位がある、氣韻がある、觀察がある、意匠がある？　況んや哲理や科學の暗示をやだ。

新作家群中の濟々たる秀才はなぜ徒らに目白押しをしてゐるのだ？　なぜ此方面へ、此無人の野へ進出せないか？　彼等が其アムビションの方向を一轉させる high time だ今は！

*　*　*　*

演劇博物館との關係で、去る五月のはじめに、十餘年以前の舊作に係る兒童劇を早稲田の大隈講堂の舞臺で上演することを肯諾させられた結果、其指導及び訓練に携はらないわけにはい

かないことゝなつたと同時に、前にいつた妙な行きがかりで、その上演を更に又映畫にする事をさへも承諾せねばならぬこととなつた。

　ところが、わたしの兒童劇は、一般に謂ふ童話劇とはちがつて、いはゞ、多少づゝ漫畫式に出來てゐる。だから、到底ロケーションものでなく、セット式にしても普通のでは折合はない。どちらかといふと、影繪式か線畫式の映畫にしたはうがいゝのだが、さしあたりドイツ影繪の眞似をでさへも相應にしてのける畫家もなし、線畫式とても目下賣れッ子の專門家はたつた一人だ、といふので、さつきうの註文には間に合ひさうもない。で、上演濟み三種のうち「道灌と缺皿」といふ一作だけを、とにかく漫畫式の實演をそのまゝに、シュナリオに書き改めて、一かバチか漫畫式セットといふやつで試みて見ようといふことになつた。演出及び大道具、小道具一切の誂へはわたし自身、撮影監督は仲木貞一氏、カメラマンは白井某氏、役者は飯島綾子の、あのいつまでも小さい體を利用して、主役の缺皿、其他の役々には早稲田兒童藝術研究會員總出、撮影所は小田急沿道の某スチューディオ。

　さて、其出來榮は？

　こいつは――賣り値にさはるとわるい――當分、無言の映畫としておかう。

（昭五、七、二〇）

鬼才牧逸馬が初めて世に問ふ長篇戀愛小說

この太陽

貴女の太陽…僕の太陽…そして…すべての若き人々の太陽!!

近代的明朗、イットとウイットそれがモダニズムの精髓だと言ふならば是は正に現代文學の王座だ……

男から男へと飛び交ふ**妖艶毒蛾の如き博士夫人蘭子**と彼女に約婚の青年を奪はれる**純情水晶の如き曉子**の目ざめ。新しく彼女の中にさし昇る太陽は何か？若きマルキストに戀して得ず空しく散り行く**ブルジヨア娘多美枝**の生涯はそも何を暗示するか？ 中年夫人の爛肉の味に醉ひ痴れる**美靑年元雄**は周圍にいかなる波瀾を捲き起すか？ 舊道德、自由主義、新社會觀それらを代表する凡ゆる階級層の男女が見えざる糸に操られ織り出す物語は正に一九三〇年代世相の活畫であり透徹した批判である。

發賣豫定 九月一日

四六判上製 七〇〇頁 定價二圓

筆者牧逸馬の筆鋒は愈々鋭く愈々輕快にその心眼は年齒と共に冴えわたつて、今や彼の前には何物を遮る扉もない。

彼は恰もX線のごとく燐光のごとく人體の秘奧に浸透し暗夜の密室ベツドカバーの下までも仄白く忍び寄る。而もその光の叡智に滿ちたる、當然の歸結として朗らかなるユーモアの全篇に漂ふを見よ！ 一言にして盡せば、この太陽一卷は、尖銳にして老熟せる作者の**戀愛觀**・**結婚觀**・**社會觀**の總決算にして而も七色撩爛たる超特作である。

中央公論社發行

チヤツプリン著
高瀬毅訳

僕の旅

チヤアリイ來る！　と傳へらるゝや類書簇然たる中に獨り光つてゐるのは本書だ。何故かならばこれはジヤーナリズムを離れてチヤツプに對する純粋な愛からなされた完全な全譯だからだ。

『チヤアリイよ、消えてなくなれ！』旅に出る時の彼の至願がこれだつた。彼は閑寂を欲した、靜穏に惠まれた休息を求めた、たゞひたすらに逃避したかつたのだ。……然しそのすべては容れられなかつた。此處に憂鬱な喜劇役者、人生受難者としての可哀想な彼の姿を見ろ。人間チヤアリイ淋しい詩人チヤツプリンを見てやつて貰ひたい。

四六判三〇〇頁
瀟洒フランス綴
珍貴寫眞數葉
定價八十錢
送料内地六錢

新版

大東京案内

本書は斷じて在來の案内記の類に非ず選ばれたる藝術家數氏を統整するに今和次郎氏の科學的頭腦を以てせる前人未踏の興味津々たる大東京の活現だ。特撮寫眞三百又一大都會藝術寫眞帖だ

【内容】
東京の顏
動く東京
七大盛り場
享樂の東京
カフエ料理店
ダンスホール
遊覽の東京
異名の新名所
スピードの展觀
味覺の東京
郊外生活展望
特殊街九期
花柳總一覽
玉[illegible]價一覽表
私娼公娼六宿
旅館・ホテル
東京生活百態
新職業百態
マネキン波瀾記
細民の東京
復興の東京

東郷青兒氏装幀
四六判四〇〇頁
特撮寫眞三百葉
石版刷地圖四枚
定價一圓八十錢
送料内地十二錢

東京驛前丸ビル五階　中央公論社　振替口座東京三四番

娼妓解放哀話

沖野岩三郎著

「フジヤマ」と「ヨシワラ」——それが等しく國粹だといふなら臺所も便所も一しよだ。併し日本人として我國特殊存在の一なる公娼制度に就いて明確な認識を持つ事は我等の義務である。人身賣買は法的に禁ぜられてゐるとは言へ、彼女等の生活が果して白色奴隷以外の何者だと言ふのだ？ 農村の窮迫、工場の閉鎖、操短——傷ましい小羊は人肉市場に氾濫する。われ〳〵は拱手傍觀してゐてい丶ものだらうか？ 本書は初めて世に送る自廢運動史であり民權史の一部、女性解放史としての文献的價値以外に、應急對策の指導書、血涙の觀戰記だ。

新吉原「吉原掟」拔萃 ——本文より——

一、遊女勤の儀は第一に偽を專らとし、かりそめにも誠の心あるまじきこと。

一、美男、大通、心意氣の面白き客たりとも惚れることは停止致し置候故、その儀は屹度相愼しみ申すべきこと。

一、醜男、ひげ武者、老人、又は梅毒かきのお客なりとも、金澤山のお方は惚れたるに見せかけること。

一、朝夕の食事は控へ目にいたし、客のものをたんと食べ候やう心掛けること。

一、召抱への砌、代金相濟せる上は、年明の日まで主人より一錢の合力もこれなき間、左樣心得精々主人方へ金を過分に取り入れるやう心掛ること。

一、衣類夜具頭のもの其外諸道具殘らず拵へかた致し候については萬事客人にねだり掛け傍輩にまけぬやう氣をつけ借金出來候ことは毛頭考へ出すまじき事。

一、定め通りの仕着せは地合あしく、値段の安い品を與へる故なるだけ自分の力で、上等の衣類を拵へ申すべく仕着せは安物故使用致すを恥と心得、早速除け候こと勝手たるべきこと。

一、客人歸りて後は無益の酒をのむことは停止いたし候こと。

（以下略）

又と得難い珍奇な寫眞資料八葉

四六判四〇〇頁

定價一圓二十錢

送料内地十二錢

目次摘要

中央公論社

東京驛前丸ビル

振替東京三四番

興味と教養の二大紀行文集

谷讓次著

踊る地平線

新鮮な感覺と、ユニークな表現と、急速なテンポと、輕快な諧謔と——一言にしていへば、モダーンそのもののやうなジョーヂ・タニー氏の「新世界巡禮」である。十五ヶ國を二箇年に廻つて歩いて、然もその人情と風俗の機微を極め、或る時は中世紀の遺風に接して感激し、或る時は機械文明の最高層を觀て驚異し、また或る時は巴里に淫賣婦の身上話に耳傾け、或る時はスカンヂナビヤの野に戀を讃美する。まさにこれ各國人情の縮圖であると共に世界的教養をもたらす地理書である。一本を備へて君が書架と教養を豐富にし給へ。

四六判上製
貳圓五拾錢
送料拾八錢

ウイリアムス著　前田河廣一郎譯

ソヴエート・ロシヤ風土記

ロシヤの紹介書は汗牛充棟もたゞならないほどある。農村に關したものだけでも數へきれない。だがそれ等の多くは、官報的統計であり、觀光客的瞥見に過ぎなかつた。由來ロシヤ農村は「偉大なる謎」と呼ばれてゐた。然り「偉大なる謎」である。これが眞の實體を解くものは一人、永く彼の地にあつて土民と親しく生活を共にしたもののみである。本書は卽ちそれだ。これは、單なる紀行文や調査ではなく、農民の生活を小說よりも面白く生々と寫し出してゐる。然も著者は日本版のため新たに三章を加へた。ロシヤ農村の眞の紹介書はこれ。

四六判假製
定價壹圓
送料拾貳錢

東京市麴町區丸ビル八五八　**中央公論社發行**　振替口座東京三四番

航空小說

空に踊るロボツトとその顚落

平野零二

◇……1

海に臨んだ航空研究室のなかで、玉井海軍少佐は腕時計を眺めた。

青空クラブの例會の時間が迫つてゐた。

少佐は、室の細長い机の上に並べた、二十數個の乾電池と、ホイトストン・ブリッヂと、レオスタットなどの雜然たる中に身體をのしかゝるやうにして、十數個の配列された白い象牙の押釦の板の横でスウヰッチをひねつた。

ジ、、、と微かな音が各個の電機のなかを走るやうに傳はつて、三個の大きな電流計の針が動いた。

少佐は固いマイクロホンの前で號令のやうに「歸れ！」と叫んだ。

潜水帽のやうな頑固い、鐵製の重さうな頭にエボナイトと鐵のデルタとゼンマイのやうに螺旋に卷かれた針金で構成されたギリシャの甲冑を着たやうな姿を想はせる、身長三尺位の怪奇な機械人形が、ぎごちないその構成に似合はず、くるりと身體をくねらせると、蟹のやうな關節を幾つか持つた肢體を自由に動かせつゝ歩き出して、勝手に室の一隅の開けられたボックスのなかへ入つて、ゴム製の椅子にピタリと腰を折つて座つた。

玉井少佐の作つた、このロボットはなるべく人間の形體からかけ離れた、眞に必要な部分だけが知らず〳〵人形的な形態を具へただけであつた。

玉井少佐の理想は、魂がその人造人間に入つたりする左甚五郎の人形のやうな、或はカール・チャペックのロボットのやうに、人間の代りに勞働の任務だけを負ふべく作られたりするも

のではなく、寧ろその人形からは極力、人間的な形態をすら避けやうと云ふ設計のもとに作られてゐた。でもまた何處かに人間を想像される形態が幾分殘つてゐるのが少佐には不滿だつた。

只、簡單な飛行作業に必要な命令を、少佐の口からマイクを通じて聞いた機械が、無電作用を經て、これを受信してその動作をさへ完全に行へばよかつたのだ。

玉井少佐のロボットは既に少佐の命令は、二十數個の動作を完全に受けるやうになつてゐた。殘るところは機械人形が、航空機のなかにあつて、その空中の天候、雲の高低、風速等を、晴雨計、氣壓計の代りに感じて、これを地上に逐一報告することであつた。少佐はこれにテレヴイジヨンを應用することに研究を續けてゐた。

少佐は自分のロボットがボックスのなかへ神妙に歸つたのを見すまして、そのボックスのドアに鍵をかけると背廣の上着を取つて、研究所を出た。

少佐のこの機械人形の研究は、世間では勿論のこと、海軍部内でもほんの一部の航空部の主腦の外は秘密が保たれてゐた。然し玉井少佐の昔から續けてゐた飛行機の無電操縱の方は、既にその權威者として世間にも知られてゐた。

靑空クラブの例會で、玉井少佐はその夜、來る數日後の日曜日には帝都に近い海岸で、そのクラブ員を招待して、完全に行はれる飛行機の無電操縱の實演に一同を招待することを發表する段取りになつてゐた。

玉井少佐は晴れやかな氣持ちで自動車を走らせた。

◇………2

靑空ビルデングは、一九三〇年頃の遺物である角張つた他のビルデングのうちに、流線美を集めた特異な姿を際立つて見せてゐた。それはナポレオン帽を逆樣にしたやうな怪異な建物であつた。

玉井少佐の眼からは、その建築は別に珍らしくもなかつた、海の航空母艦を地上に持つて來て据え付けたに過ぎないものである。或る百貨店が、最近にこの靑空ビルを眞似て新建築を誇つたが、少佐は建築家に寧ろ創意の尠ないことを嘲笑ふ氣持ちがあつた。

ビルデングの表には既に數臺の自動車が到着してゐた。綠色のコートを着たボーイが叮寧に少佐を迎へた。

少佐はエレベーターで、クラブの會議室へは入らずに眞直に八階の屋上まで突き拔けた。

夏の宵の氣配が、ビルデングの上に迫つてゐた。屋上には、只一枚の扁平な板であるところの、コンクリートの白い庭があつて、そよ〳〵と吹く夕風が、屋上庭園の一端に聳えてゐる鐵骨の無電燈の尖端になびいてゐる吹流しを動かせてゐた。

『アォゾラクラブ』とネオンサインの赤い標識が、一つは空へ向つて、一つは地上へ、强烈な光りの文字を投げてゐた。

藍色のボディに、銀色の翼を擴げた、華奢な輕飛行機が、屋上の一隅にあつた。エバーシャープ鉛筆のやうに尖つた、水冷式のエンヂンのキャップを風の來る方向に向けて、滑走車の脚のところから鎖で、屋上の鐵の鈎につながれてゐるところは、航空機と云ふよりは矢張、何か生きてゐる動物を想はせた。

『飛行機も好い加減に、鳥の模倣から解放されねばならんがなア』

玉井少佐は、つながれてゐる輕飛行機は、會員の三枝伯(さいぐさ)のであるのを知つて、附近に伯の姿を求め乍ら、航空機の新らしい形態を考へてゐた。三枝伯は飛行機の蔭から、輕快な白の洋服姿を見せて、笑ひ乍ら近付いた。

『玉井さん、お早いですね』

『役所から眞直に來ました、空には大分見えとるやうですが……』

『さうですか、空の方は私が一番乘りですよ、それにしても、釦一つで飛行機を自在に走らせる貴官が、のこ〳〵土地を這つて來るなんかは聞えませんね』

『僕は、貴方のやうな遊び人じやないからなハ、、、、』玉井少佐は親しい友をたしなめるやうに云つた。

『遊び人か、一言もない……』然う云つて三枝伯は空を眺めた。

ブウン〳〵と夕暮近い空に、一定の距離に、連續的なプロペラーの音が響いた。

『道樂でないのは、あれだけだな』と三枝伯は玉井少佐を見た。

空には、警視廳の、百七號飛行機が胴體の長い、海軍の艦上攻擊機を改造した、消防自動車のやうに赤いボディを空に浮かせて、ビルデングを中心に大きく規則的な旋回を續けてゐた。

『ウヰー〳〵』無電塔の中途位に、辨當のやうにブラ下つた、眞圓いサイレンが玉井少佐と三枝伯が、恰度向ひ合つて立つてゐる頭の上で、奇怪なうなりを發した。

サイレンは續け樣に三つ鳴つた。

『お客樣、お揃ひで御到着だ』三枝伯が呟く。

無電塔のなかから、白い帽子に、古服の作業夫が數名、サイ

レンを合圖にバラ／＼と飛び出した。

警視廳の百七號は、無電で機上からサイレンを通じると、ぐつと高度をつけて、夕暮れの雲の近くへ上昇した。

三機、ふくら雀のやうな格好のが、ポッカリと空に浮んだ、三機翼の上には竹とんぼのやうな四枚の翼を別にくつ着けて、三機は編隊でビルデングの空へ來たと同時に、その三つのオートジャイロは、プロペラーの音を止めて、竹とんぼの翼だけをくる／＼と廻轉を始めると、空から垂直に一機が先づ下降を始めた。屋上の作業手達は、昔、旗取競走に使つた三角形の箱に赤い旗を突き立てたのを、夫々、屋上着陸上の三ヶ所に配つて、下降して來るオートジャイロ三機の繋留場所を指定した。

三機が着陸すると、玉井少佐と三枝伯が迎へるやうに近づいた。

三機からは航空聯盟の、銀の翼のマークを背廣の胸ボタンにつけた、學生らしい青年が機上から降りた。そのうちの一人は若い婦人だつた。

三人は飛行帽の外は、地上にある人の服裝と變らなかつた。只婦人の服裝が矢張、昔のまゝの乘馬服であるだけだつた。

『三枝さんが一番乘りですか』背の高い方の青年が聲をかけた。

『けふはね、少し早目に出て、途中例の三ツ星百貨店のルーフを見て來ましたからね』

『どんなですか調子は』

『好ささうですね、それからジャイロと、ブレインとの着陸場を全然別にしたのは好いですね、我々輕業師は、君等のやうな垂直着陸師とは、同技に扱はれちや不滿ですよ、このクラブのやうに――』

『三枝さんなんか、矢張り古いですね、飛行機に冒險が伴はないと面白くないなんて時代の遺傳があるんですね。』背の低い方の學生が云つた。

『君、威張るなよ、ジャイロなんか、寧ろ初期にあつたんだよ。第一、あの背中にくつついてゐる竹とんぼなんか、古くさいぜ。モダーンじやないよ。それに引かへライトプレンのスマートさはどうだね』

『あら、あんなこと仰言つて、妾し素破拔きますよ、ほら、この間、ステーションの屋根で、とう／＼屋根の端まで滑走して、もう少しで地獄まで滑走なさるところだつたつて、チャンと聞いてゐますよ、ライトプレンさん。』背の高い學生の妹である婦人は助太刀を打つた。

『いやあ、あれは別だ、エンヂンの調子を見なかつたんでね』

三枝伯はハンチングの上から兩手で頭を抱へて、兩足をダン

スのやうに浮かせた。玉井少佐も笑つた。

『冒險飛行家、どうか近代飛行界のために御自重を祈ります、墜落と云ふ字引の文句が、新聞社で又零號活字に必要になつたりすることは迷惑ですからね』

『近頃の學生は益々生意氣でいかん』

玉井少佐は航空機を享樂する若い人々の冗談口を注意深く聞いてゐた。そのジョークが續いてゐる間に、三臺のオートヂャイロは繋留されて居た。

『舌戰は、室のなかでやらう』三枝伯が一同を促して、無電塔の下の降り口で、エレベーターの釦を押した。

◇…………3

二階の鳩の間には、飛行機を持たない會員が十人近くもう集つてゐた。

天井は眞中が八階まで突き抜けてゐて、曲線的な鐵骨構成を露はに出したドームが開けてゐた。階下一階は、飛行機の模型等が陳列されて一般のために開放されたのが、二階からも覗かれた。

井戸のやうな建物の眞中を貫く、その圓を中心にして、金屬管の倚子が竝べられてゐた。壁のところ／＼に、機械畫化された鳩の彫刻がついてゐた。

一方の壁には、四角なスリ硝子張りの行燈が壁にはめ込んだのが三十數個竝んでゐた。

ＡＪＫ、ＡＵＯ、ＡＵＰ、ＡＵＱ、各自の飛行機番號の數字が、ランプの點滅で現はれるやうになつてゐた。三枝伯と三人のジャイロ組が、到着會員としてそのランプが點じられてゐた。

太平洋横斷をもう十數回、大旅客機の船長を勤めたと云ふ老航空士の和喜山孝三郎翁、ツェペリン時代に太平洋上のパーサーを幾度か勤めたと云ふ今は三ツ星百貨店の支配人の陶山藤吉氏、その昔國際飛行場の場長を勤めた蔭山老陸軍少佐。石油會社の社長、帝國航空協會の援助者である實業家、新聞記者、輕飛行クラブ員、グライダー俱樂部員、など若い學生や紳士、勞働黨の代議士でパイロット組合の幹部などが、夫々のグループに依つて集つてゐた。

ＢＴＳ、壁のランプが點いた。人々は雜談の目を一齊に向けた。

『空中給油の村井だ』

新聞記者の一人が連れの男に說明するやうに云つた。

『奴さん、近頃また自分でも操縦(やつ)てゐると云ふじやないか』

パイロット組合の武田が石油會社の社長に云つた。

『いや、自分では操縦らないらしい。だが自分の乘る輕飛行機を先日買つたと云ふことだ。會社の者に操縦らして、合乘してゐるんだよ』

『それにしても、永い間、航空病だつたのが、あんなに忘れたやうになるのかね』

『何でも、給油會社を始めてから、カストル油の臭ひをかいでゐたら、何時の間にか、又飛行機に堪らない愛着心が蘇つて來た――なんて言つてゐたよ』

『航空病なんて、一種の神經病だからね』

『乘りたいと云ふのも、一種の航空病だらう』

『隨分古い飛行家だつたね』陰山老少佐が感慨深氣に口を出した。

『ほんとですかね、醉拂つて陸上機を飛ばしてゐて海へ着水して、海へ飛び込んだは好いが、金佛だつたのを忘れてゐたので、ブクブクとなつたのを助けられた――と云ふのは』新聞記者が口を出した。

『うん、そんな話もあつたな』陰山少佐は昔を回想して北叟笑んでゐた。

壁のランプは何時の間にか、十數個が點じられて英語文字が華やかに並んでゐた。

屋上には客待ちのタクシーの列のやうに、輕飛行機が翼を並べてゐた。

警視廳の百七號も着陸した頃には、夕暗が空をこめて、屋上からサツト射した照空燈が一筋の光を投げてゐた。

百七號が着陸すると入れ替りに、繫留氣球が揭げられて、それには二人の交通巡査が乘り込んだ。

暗の空では、カーキ色の氣球が照空燈に照らされて銀色に輝いて見えた。

『もう來ないだらう』

警視廳機の飛行士と警部とが階下へ降りて行つた後で、白服白帽の航空手達も、煙草をのむべく階下へ降りて行つた。

無電技師室の隣りの室にたつた一人だけ、航空手が番兵のやうに立つて殘つた。

屋上の飛行機の群れは靜かに並んでゐた。時々オートジャイロの翼が、微風に風車のやうに輕るく廻つてゐた。

雲の去來が少し上空では激しかつたが、屋上の吹き流しはイの字を書いてゐたので、地上數十數メートルは和風だつた。

鳩の間の會員が殆んど顏を合はした頃、青空ビルデングの照空燈をかすめて、夜行の大連行の旅客機が大きな音を立て、通

り過ぎた。

◇…………4

三十餘名が大體揃つたので端の間の客は食堂へ流れ込んだ。

和真山老船長、蔭山少佐などがメインテーブルに着いて幹事の三枝伯、玉井少佐がその横に伯がすゝめるまゝ座つた。パイロツト組合の武田などがその前に並んだ。婦人會員は學生の兄妹であるオートジャイロ組がたつた一人だつた。

『今日はコムパクト連は尠いね、そろ〳〵飛行機は御飽きになつたかね。』

三枝伯が卓上を見廻はし乍ら、先刻の屋上の仇討のつもりで、婦人にからかつた。

『どう致しまして、皆さん、明日出發なのよ、素晴らしい元氣で』

『何處へ』

『婦人聯盟でも火山見物に行くんですつて』

『航空會社で募集してゐる、あの遊覧飛行ですか』新聞記者がオードウブルを頬張り乍ら覗いた。

『いえ、婦人聯盟は別に、輕飛行機を持つて行くんですつて』

『ライトプレンでアラスカまでは無理だな、いくら御轉婆の御孃さん達でも――』

『三枝君のうかつだね、僕の方では大きな給油所をアリユーシヤンにも千島にも置いたのを知らんかね』

給油會社の村井氏が責めるやうに云つた。

『いや、出來ることは聞いてゐたが、そうかもう出來たのか、その宣傳に婦人連中を使ふことはすごいね』

『會社の方は、どうです。もう滿員になりましたか』和真山老が航空會社の阿野氏に聞いた。

『お蔭様でね、第二回をやらうかと思つてゐる位です、貴方の昔ばなしが大分、利目がありましたよ。』阿野氏はニコ〳〵してゐた。

『和真山さんの話では、アラスカのあそこでは、何しろ、青空ビルの五倍位の石が、火焰の中に手玉となつて踊つてゐると云ふんだから豪いもんだ』三枝伯が新聞記者の方へ首を突き出して云ふ。

『あれは、貴方がた嘘と思つとるが、ほんとの話ですぞ、今度會社で連れて行けば判ることじやが……』老人はむきになる。

『私達は、何時もアメリカ通ひの旅客機では、あすこを通らないんだ、只パッとすごい火柱の大きなのを遠くには見るが、そ

んな石ころなど第一近付けませんや』パイロット組合氏が横槍。

『そりや火山の上へは、私だつて出たことはない、然し噴火のひどくない時には火口の大きいことは充分見られる。世界の地理にもあるし、初期の太平洋横斷飛行者も、その日記に書いてゐることで、こりや私だけのつくりごとだけじやごわせんで』老人は一寸むきになり出した。

『あれは一體、火山見物が目的なんですか、それとも、アルプス見物ですか』

新聞記者氏は依然パク付いたまゝ、

『アルプスは毎年のことですからね、今年は和莫山さんの話から思ひついて、勿論景物ですが火山見物を添へたのですよ』阿野氏は愉快相にブドウ酒のコップを取り上げた。

『捕鯨會社では、パイロットが罷業をやつてゐるさうだね』實業家の葉山氏が眼をギロつと輝かせ乍ら、組合の武田氏を見た。

『まだ納らないやうですね』他事のやうに武田氏はうそぶいてゐた。

『どうしたのかね』和莫山翁が心配相に乘り出した。

『問題は簡單なんだ、飛行士が一人、鯨に銛を打つたのが、どうしたはずみか鯨に引づられて、飛行機の安定を失つたのさ、とうとうそれでやり損つたんだね、飛行士は助かつたが、それを會社では、飛行士の技術の罪にして、負傷したのに對して規定通りの見舞金を出さないで、鼻くそほどの涙金で納めやうとしたんだ』

『昔は樂だつたね、飛行機は只鯨の群れを發見さへすれば好かつたんだが……』

和莫山氏は又しても追懐にふける。

『そんな荒事はみなロボット飛行に讓るのだね』三枝伯は貴族らしく片付けた。

『海軍じや、そろ／＼ロボット飛行も民間へ許す方針だと云ふじやないか』

グライダー倶樂部の會長で、その昔歐洲大戰に參加したと云ふ、飛行機の負傷で身體の自由の利かない海軍大佐の老人が、モガ／＼した言葉で話に割り込んで來た。一同が期せずして玉井少佐の方を向いたが、玉井少佐は只ニヤ／＼笑つて興味あり氣に寧ろ聽手の側に廻はることを望んでゐた。

『まだ／＼許したつて、民間じや駄目だらう』帝國航空會長が簡單に片付ける。

『無電操縦で萬事やられた日には、我々飛行機享樂時代も、も

う御しまいですね、やつと人間が自由に飛べるやうになつて、百年ばかりだのに、もうそれを取り上げるなんて、人間は自分で作つて、自分でぶち毀すんですね、何んでも蚊んでも、つまんないなア」

背の高い背廣の學生が口惜し相。

「さうだ、人間は元來、自分が飛びたいから一生懸命犠牲を拂つて、飛行機を發明し、製作したんだ、それに今更、無心なロボットの手に飛行機を任すなんかは馬鹿氣てゐる」

三枝伯も享樂飛行の急先鋒らしい熱心さを帶びて來た。

「飛行士の失業時代か」

パイロット組合長も呟いた。

「でも、これから戰爭があれば、皆ロボットがやつてくれるから好いじやないの、磯谷大佐のやうにお怪我なんかしなくて好いわ」

若い婦人の言葉に磯谷大佐は負傷の痕のある顏を歪めて、笑ひを見せた。

「さうなつたら、戰爭なんか止めさ」

實業家がつまらな相に云ひ放つた。

「飛行機は、そも／＼武器として發明されたものじやないんでしやう。何でも昔しは軍縮會議てのがあつて、軍艦が作れないので飛行機の方へ力を入れたつて話ですが――」

學生が磯谷大佐の方を向く。

「始めは武器じやなかつたが、飛行機の發達は武器となつてはんとうに長足の進歩をしたことは事實だ。私達が參加した歐洲大戰が飛行機發達の大きな段階だつた。

「じや我々のスポーツ航空は、何にも航空界に今後貢獻しないでしやうか」

學生は磯谷大佐を難詰するやうな調子にさへなつてゐた。

◇……5

玉井少佐は、老若のオーナーパイロット達が、漸々異狀な熱を帶びて來る會話を微笑ましげに聽き乍ら、依然押しだまつてゐたが、そのうちに何時か、少佐の秀麗な眉宇には、焦ら立たゝしい氣分が現はれて來た。

ボーイが後ろからビールを注がうとしたのを、手で斷つて、空になつたブドウ酒のコップを差し上げて促がした。ボーイがかしこまつて取つて返して、クラレットを注ぐとグッとそれを一氣に飲み乾して、使はないフォークを右手に取り上げて、そのお尻でトン／＼と强く卓をたゝいて、卓の上にのしかゝるやうにして一同を見廻はした。

三枝伯が、隣席で驚いたやうな調子で、ナフキンを口に當て乍ら少佐を振り向いた。

『お話中ですが……』少佐は干高い若々しい聲を喉につめて云つた。

『大分、御議論があるやうですが、その問題の無電操縱の航空機に就いて、今夕皆樣に御讃同を得たいことがあります。豫て我が海軍では研究を重ねてゐたことは皆樣御諒承のことと存じますが、これは元來、一般には公開を致しません、將來も如何かと存じますが、幸ひ今囘は、當クラブの會員だけにはその運用狀況を、一應御覽に入れても好いことになりまして、船空部長や大臣の同意も得まして、來る日曜日を期して、××海岸に御光來の榮を得たいと存じて居ります。この航空機の無電操縱は、既に我が國に於ても、二十數年前に外國でその研究が行はれて以來、着々と劣らぬ苦心が拂はれて居りましたが、最近實用時代に入る自信を得ましたので、限られた一部の民間の航空關係の方々にもその一端を御披露することが出來たのであります、いづれ航空研究所から正式の御案内を御送りすること、存じますが、今夕私より前以つて御知らせ出來ることを喜ばしく存じます』

玉井少佐は、いと堅くるしい調子で、若々しい頰を上氣させ乍ら演說口調で述べ終ると一禮して、三枝伯に

『君、宜しく願ふよ』と囁いた。

食卓は俄かに、無口な玉井少佐の提議に依つてざはめき立つた。磯谷大佐が例のモガ〳〵した調子で饒舌になつたり、學生組が干高におしやべりを始めたりしたが、玉井少佐は妙に沈欝な調子に益々落ちて行つた。

三枝伯は中でも陽氣で、貴族らしい朗らかな樣子を一段と高めて、玉井少佐の人格を賞めそやしたりしてゐた。

ボーイが紙片を持つて、三枝伯に示した。伯は輕くそれにうなづいて、紙片をポケットに納めた。

プッデングが出て、コーヒが廻つた頃、伯は待ち構へたやうに、一同を促した。

『飛行機を置かれる方の外は、もう時間が參りました』

一同がぞろ〳〵と立ち上つた。

自動車の組は鳩の間へ引き揚げたが、輕飛行機を屋上に繫留してある人々は、玉井少佐に對して、いづれも一應の挨拶を殘して、エレベーターの前に立つた。

警視廳の規則で、夜の飛行は午後八時までしか帝都の空では許されてゐなかつた。警視廳航空課の警部は一足先に、食卓を滑り出て屋上の航空手達と立ち話を始めてゐた。

天候通報が無電室からボーイに依つて幹部へ届けられた。

空に綠燈を輝かせてゐる、繫留氣球へ信號が送られた。

學生組が先づ、順にオートヂャイロを引出して出發した。三機は胴の背中の廻轉翼だけを靜かに響かせて、夜の光の海の上に舞ひ上つた。それに續いて十數分置きに輕飛行機がT字を、はめ込みの厚い硝子敷きの灯のついた離着場に引出されては、エンヂンの音をビルデングの屋根にふるはせた。

オートヂャイロの三機は既に、ビルデングを遠く離れて西の郊外の方へ、赤い灯を尾翼の方に見せて編隊を作り乍ら飛んでゐるのが望まれた。

玉井少佐と三枝伯は無電燈の、臺脚に凭れて、飛行機の風を受けて立つてゐた。

『ロボットの方も公開するのかね』三枝伯は囁くやうに聞いた。

『公開と云ふわけじやないが、一緒に乘せて見るつもりだ』

『じや、もう完成してたんだな』

『何に、あれは君達が想像するほど大したものじやないんだよ』

玉井少佐は三枝伯の熱心な樣子を迷惑相に避け乍ら輕くあしらつてゐた。

『御出發になりませんか』航空手が三枝伯を促した。

『あゝ、そうだ、だが、玉井君どうだね、飲むんだつたら御つきあひするが、飛行機は今晩、こゝに預けて、

『ツバサへでも行くか』何時になく玉井少佐が判乎答へた。

『じや君、お願ひする、明日乘りに來るまで格納して下さい』

航空手は心得て立ち去り、階下からキャンバスのカバーを屋上へ運んだ。

三枝伯は、玉井少佐の成功を祝する意味で共に自動車を驅つて、クラブ員の行く酒場のツバサへ走つた。

◇…………6

玉井少佐の無電操縱飛行機公開のことは、部下の新聞が筆を揃えて書き立てた。

けれども當の玉井少佐は益々幽靜だつた。將校集會所でも人氣は玉井少佐に集つた。少佐がその賞讚に對して少しも調子づかないことを同僚達は、

『彼奴は學者だからね』と評してゐた。

公開する日曜日が來た。

海軍大臣を始め、陸海軍の將星、航空省の役人達、大學の教授達、青空クラブの人々が、海兵達が嚴めしい警護をしてゐる××海濱へ集つた頃、玉井少佐は平常通り脊廣服で自分の研究所へ入つた。

二人の助手が緊張した樣で少佐を迎へて敬禮をした後、

『お目出度う御座います』と頭を下げた。

『御苦勞』少佐は上着を脱いで椅子にかけた。

大理石の配電盤には、チラ／＼と光る赤い銅製のスウヰッチが無數に竝んでゐた。机を竝べた上には、ゴムの被覆線を冠せた電線が血管のやうに卓子を走り廻つてゐた。その亂雜な配置のなかに眞空管が銀色の光を揃へて整列してゐる。整流機、針を十字に揃えて竝んでゐる幾つかの黑い地に白地の目盛りのあるダイアル、小型のループアンテナが室の天井に近いところに團十郎の紋どころのやうな模樣を見せてゐた。

『電池室は好いかね』玉井少佐は助手を顧みた。

『全部調べました』一人の助手が答へると、も一人のが、思ひ出したやうに

『あのう、それから、何ですか、ピアノの先生とかが見えて居りますが……』

『あゝ、さうだ。待たせてあるか』

『えゝ、集會所の應接室に』

『こちらへ御連れして呉れ』

『ハ！』

一人の助手が出て行くと、少佐は部屋の隅にある黑い蔽ひを取りのけた。蔽ひの下からはツヤ／＼とした新らしいピアノが一寸姿を現はした。

殘つた助手はあきれたやうな顔で見てゐたが、

『少佐殿、それは矢張ピアノでありますか』

『うん、さうだよ』少佐はニヤ／＼笑つてゐた。そのピアノの底にも電線が這つてゐた。三枝伯の紹介の音樂家が助手に案内されて入つて來た。

『玉井です、どうか』自分の廻轉椅子をすゝめて玉井少佐は突立つてゐた。

『大體は三枝君から聞きましたが……』

『えゝ、音階だけを聞き別けて戴けば結構なんです、實は私には譜が判りませんから、ピアノの打つ音を譜にさえ殘して置いて戴けば好いんですが』

『そのロボツトとやらは、何か、その音樂でもやるんでしやうか』音樂家も妙な顔をし乍ら突立つて話した。

『いや、音樂ぢやないんですが、音を出すのです、その出した音を譜に取つて置いて戴けば好いのです、言葉の代りですから』

『ハハア』音樂家は何だか判つたやうな判らないやうな樣子で、不思議相に室のセツトを眺めて、ピアノの方へ近寄つた。

『このピアノは矢張、普通の……』

「え丶、普通の電氣ピアノと變りません」

玉井少佐は、ケースの中から一枚の大きなセクションペーパーに引いた奇怪なドローイングを見せて、その大體の説明にかゝつた。電氣的なコンネクションが圖のなかには一パイに描かれて、彼の云ふロボツトと云ふもの丶設計圖もそこにあつた。それは音樂家の目には、共同水道栓のお化けのやうなものであつた。

玉井少佐の説明に依ると、そのロボツトは飛行機内の、操縱者席にあつて、恰度そのお腹のやうな場所に、納めてある氣壓計、風速計、測定計、などいろんな空の狀態を敏感に感じる諸種の精密な計器の數々が、若しも、無電操縱の場合に、その飛行の障害となるべきコンデシヨンに遭遇した場合には、聲で報告する代りに或る一定したピアノの鍵盤の幾つかを打つ仕掛けになつてゐる――と云ふのであつた。

音樂家は頭の心が熱くなるやうに感じ乍ら玉井少佐の説明をボンヤリ聞いてゐた。

◇…………7

部屋の壁についた擴聲器がガザ〳〵と音がした。玉井少佐と二人の助手は異狀な緊張をした。音樂家は今にもピアノが鳴り出すのかとおはて丶、ポケツトから手帳を取り出して鉛筆をかまへて、不安さうに擴聲器を仰いだ。

『用意宜ろし』天井から聲が落ちた。××海岸から無電飛行機の操作用意の報告である。

玉井少佐は靜かに配電板に近い、ダイヤルの前に立つた。

『スウヰツチを切つて』助手に命じた。

ジ丶………と云ふ音が部屋中の沈默のなかに響いた。玉井少佐は八つのダイヤルを音もなく順にひねつた。ボルトメーターの針がチカ〳〵と硝子のなかで顫へた。

『クーペー』ダイヤルを握り乍ら少佐が叫んだ。助手が白い象牙の釦の一つを押した。

『コンタークト』次の釦を押した。

『揚げ揖!』別の釦、

數十秒、途端にピアノが鳴つた。

低い調子のミ、レ、ド、ミ、レ、ド。

音樂家が周章て丶譜をとつた。

『右、方向舵!』第二の助手が釦を押した。

『金廻!』エボナイトの夏目のやうなキーを助手が前方へたほした。

干高いピアノが鳴つた。

少佐は口を固くしめ乍ら配電盤の前に突立つてゐた。

『上げ舵！』

『左、方向舵』

干高いピアノ。

『右、補助翼（エルロン）たけ！』

『大成功です、機體は海岸を約二キロ離れてゐまアす。』天井から聲が來た。

部屋のなかでは異狀に緊張した空氣のなかで、玉井少佐の號令のやうな聲が狂氣じみて聞えた。しばノ\鳴るピアノの音に音樂家は狐にだまされたやうな氣持で、然し何だか脈せられたやうに、一生懸命に音譜をとつてゐた。

少佐は配電盤の横に吊るした捲き込みのマイクロホンを恰度自分の口を前へ引き卸して叫んだ。

『投げ！』これは機上のロボットへの命令である。

『投下の成績良好！』天井から聲が應じた。玉井少佐はニヤと笑つた。

突如、少佐は、苦り切つた表情に變ると見ると、助手の横に近付いて下げ舵の釦をグツト押へた。

助手の顏色が變つた。

ピアノが滅茶々々な音をたてた。音樂家はボウ然と立つた。

『どうしたノ\、飛行機が落ちたぞ』

擴聲器が怒鳴つた。

普通の卓上電話がけたゝましく鳴つた。

ピアノは狂つたやうな最後の音で止んだ。

それは海にロボットが落ちた瞬間の斷末魔の音だつた。

少佐の顏は青ざめてゐたが、平靜だつた。

『飛行機はね、人間のものなんだ。三枝にさう云つて下さい。私はこのまゝ軍法會議へ行く、皆さん、御苦勞だつた』

驚いてゐる助手と音樂家を殘して玉井少佐は靜かに室を出た。

——ヲワリ——

熱風の都

村松梢風

廣東戲劇研究所

四月廿四日の朝七時頃、私と、M社の香港特派員T君と、K女史と、女史のお父さんと、其の四人の道連れが昨夜香港から乗つて來た臘のやうな恰好をした汽船が、廣東の西堤の碼頭へ横づけになつた。

「それぢや、失禮ですが、私は自由行動を取らせて頂きます」

縞の着物に絽の羽織を着て、袴をはき、ゴム草履――日本を遠く離れた南支那では、さうした服裝は少なからず行人の眼をひいた――K女史のお父さんは、船が停るか停らぬうちから、あとの三人に向つてかう云ひ捨てゝ、人混みに紛れてサッサと上陸してしまつた。其の行動が可成り奇人的に見えた。此の人は、平常大阪に居る時は、毎日五里の道を散歩することを多年日課にしてゐると云つた。それが、旅行に出てからといふものは、毎日々々汽車や汽船の乗り物續きで自分の足が他人の物のやうに感じられてきた。何も目的はないから今日一日だけ自分獨りで廣東の街を思ふ存分歩き度いといふのであつた。K親子は昨日臺灣から香港へ着いたばかりだが、明日はもう上海へ立つといふので、今日一日の暇を利用して廣東見物に來た人達だつた。

海岸通には旅館や百貨店などがあつて、片側街だけれども非常に繁華である。私達は徒歩で海岸通を歩いて、沙面のS氏といふ日本人の宅を訪問した。其處で私の旅館のことを相談したり、手荷物の始末なども頼んだりした上で、K女史のために自動車を傭つて見物に出掛けることにした。が、私は、其の前に會ひ度い人があつた。それは「廣東戲劇研究所」を創立して、新劇運動に從事してゐる歐陽予倩であるが、彼も私を待ち設けてゐる

る筈である。

泰康路といふ大通を眞直ぐに行くと、往來の傍らに、小さな石橋がある。其處が廻龍橋であつた。其處で自動車を降りた。裏通は自然石を敷いた舊市街で、番地を聞き〱行くと、やがて大きな建物の前に出た。「廣東戲劇研究所」といふ看板が懸つて、銃を持つた兵士が一人立番をしてゐる。

私達は直ぐ二階の奥まつた部屋へ通された。其の家は支那風に多少の洋式が加味してあり、部屋も澤山あるやうだが、久しく住み荒されたあとと見えて、床も、壁も、屋根も夥しく朽廢してゐる、が、柱や、欄間や、窓や、扉には、手の込んだ古風な彫刻の裝飾が施されてゐて、質のいゝ金箔の色が落ちついた時代色を見せてゐる。予倩君は急いで其處へやつて來た。私達は一年半ぶりで會つた。云はふやうない强い歡びで二人は手を握りしめた。

一昨年の秋、私は彼と一緒に南京へ行つた。其の時彼は廣西派の重鎭であつた李濟琛を說いて、廣東に演劇研究所を作ることに成功した。(李濟琛は當時廣東省長だつた。)彼は直ぐ樣單身廣東へ來て其の仕事を始めた。すると、其の翌年二月、李濟琛は南京で蔣介石の爲に捕縛され、爾來彼はいまだに南京に監禁されてゐる。其の結果廣東に政變が起り、李濟琛の廣西派は驅逐されて、陳銘樞一派が政權を掌握した。かういふ戰爭と政爭が行はれたにも係はらず、歐陽予倩の仕事は故障なく繼續されることになつた。それは新たに廣東省政府主席となつた陳銘樞は、學者肌の政治家で、藝術にも十分の理解を有つてゐる人であつたので、李濟琛の下に生れた廣東戲劇研究所を其の儘受けついで彼が保護することになつたのだつた。

歐陽予倩の理想は、中華民國の新らしい演劇を作ることにあるのだが、目下は爰で學生を募集して俳優を養成し、傍ら「戲劇」といふ雜誌を發行してゐる。學生は現在男女併せて五十名、職員は所長歐陽予倩以下十數名ゐる。學生は一切校費で養成し、其の經費は總べて省政府から支出されてゐる。

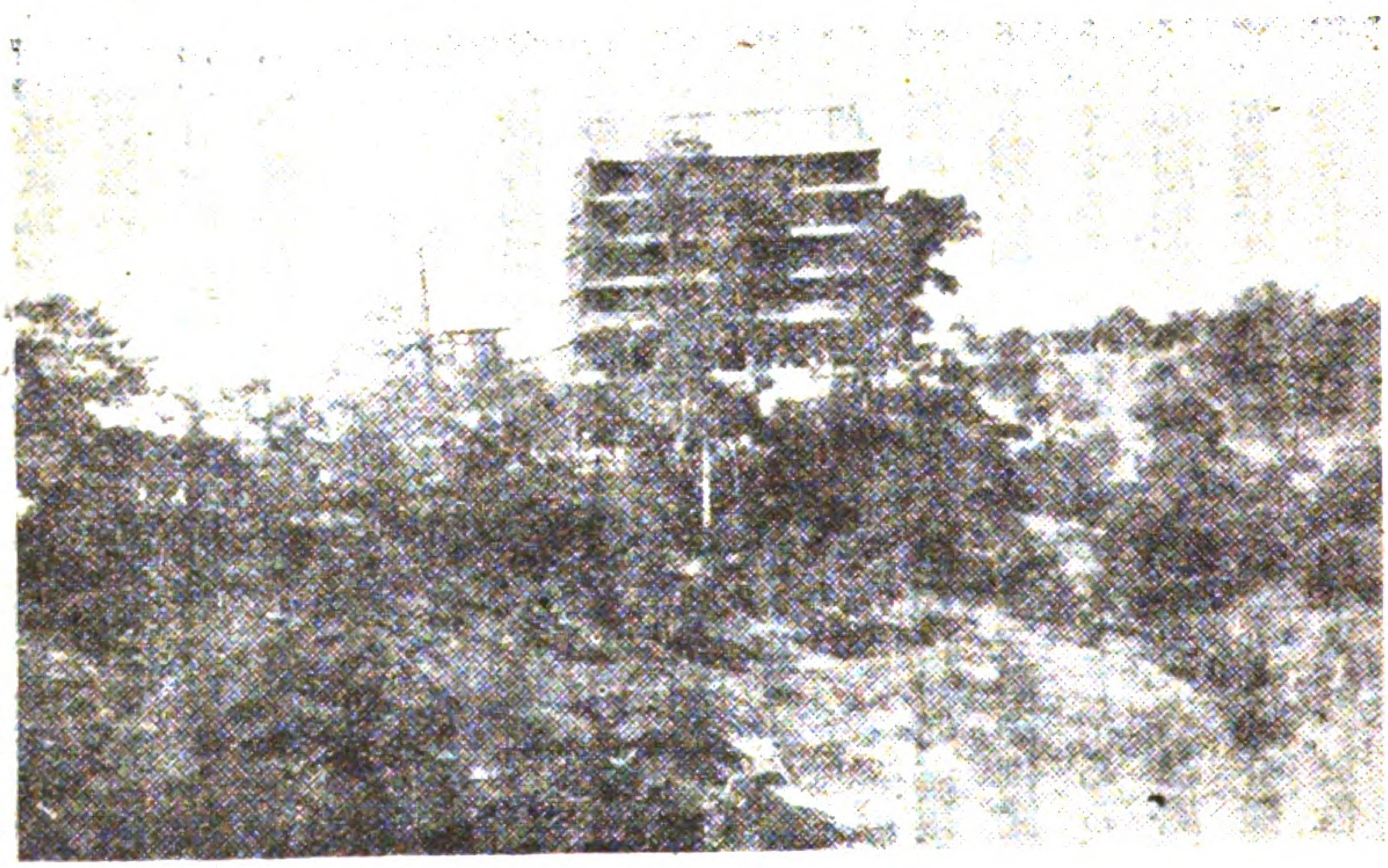
私達が話しをしてゐる處へ「やあ村松さん」と云つて飛び込んで來た人があつた。それは私が上海以來馴染の唐槐秋君であつた。唐君は予倩君と一緒に廣東へ來て其の助手を勤めてゐるのである。

あしたから四日間、研究所の中で「椿姫」の試演があると云つた。舞臺は階下の一室を改造してそれに宛て、看客席にはガラス張りの屋根の下の敷石の庭を利用してある、それでも二百五六十人は入れると云つた。椿姫といふ名を「茶花女」と譯してある。私はあすの晩見に來ようと約束した。

それにしても、此の研究所の建物は、いかにも古くて由緒ありげだから、一體以前はどういふ人の持家だつたらうと歐陽君に尋ねると、

「此の家にはなか〱歴史があるです。これは昔康有爲が住んでゐた家なんですよ」と予倩君は云つた。

滿洲朝廷の時世に於て、かの有名な『變法自彊』の策を上疏して、一布衣の身から召されて北京政府の總理に任命せられ、滿腔の經綸を抱いて一大改革に着手して、内外の耳目を聳動せしめた康有爲は、廣東省南海縣の人で、省城に家塾を興して千三百人の子弟を敎へ、其の家を『萬木草堂』と號した。變法自彊策は、西太后一派の守舊派の憎惡を買つて、半途にして挫折し、それが爲に光緒皇帝は幽閉の憂目を味はひ、康有爲は日本に亡命しなければならなかつた。彼は、滿洲朝廷の末期に於てたつた一幕華々しい殺を買つたゞけで、可惜一代の才學も、金鐵の操志も、其の後中國の爲に活用する機會を得ずに終つたけれど、其の變法自彊は滿洲朝廷に對する一大鐵槌であつた。彼は革命前派ともいふべき或時代の支那の指導者であつた。



鎭海樓

廣東戲劇研究所の建物は、其の有名な『萬木草堂』の跡である。

「處が、もう一つ面白い事はですね、此の家は一時陳獨秀が住んだことがあるんださうですから、皮肉ぢやありませんか。」

予倩君はさう云つて笑つた。康有爲が日本へ亡命して、東京へ着くと、其の翌日孫逸仙はわざ〱彼を訪問した。が、康は孫に面會しなかつた。其の後日本の有志が樣々に斡旋して兩者を會合させやうとしたけれども、康は承諾しなかつた。康有爲は、思想家としては當時の急進論者であつたけれども、彼は光緒皇帝の知遇に感激するものであつたから、朝廷を覆へさうとする孫逸仙と相許すことは出來なかつたのである。

陳獨秀は云ふまでもない現在の支那の共産黨の首領だ。此の家の壁は、程朱の學を研究し、公羊學を鼓吹した康有爲の氣息を吸ひ込み、陳炯明でさへ驚嘆して危うく引つ込まれかけたといふくらいの共産主義者陳獨秀の博辨宏辭を吸ひ込み、今は又歐陽予倩門下の、唱や、音樂や、芝居の科白を日夜吸ひ込んでゐる。壁は、支那の重要な學問、思想、藝術の、發聲しない蓄音器だ。

私達は、予倩君と一緒に、最初公安局長の歐陽駒氏を其の役所に訪問し、それから歐陽駒氏が校長をしてゐる大沙頭の警官學校を參觀した。其處から再び自動車を走らせて郊外の黄花崗の七十二烈士の墓を見に行つた。宣統三年の三月、黄興を首領とする革命黨員百餘名の同志が、白晝總督衙門を襲つて、總督を殺して一擧に廣東を占領しやうと企てた突然の出來事だつたので衛兵も防ぎ切れず、總督張鳴岐は樓上より綱に縋つて墻外に逃れ出で、辛うじて一命を完うした。とかくするうち革命黨員は大部隊の官兵に包圍されて潰滅し、多數の同志が枕を並べて討死したり、捕縛されて殺されたりした。黄興は夜城壁を越えて脱出して香港へ逃れた。後に此の事件の犧牲者七十二名の靈を合祀したのが此の墓である。

それは大きな紀念碑で、上に自由の女神のやうな石像が立つてゐる。孫文の『浩氣存長』の四文字が正面に大きく彫り付けてある。此の墓は南洋の華僑が資金を集めて造つたものだ。其の形式が餘り西洋カブレだといつて罵倒する人もあるが、四邊の風景がいゝので、さう惡くもない。

直ぐあとから、警官學校總務部主任易元兆氏がやつて來て、側らの料理店の瀟洒な亭で晝飯を食べた。其處から今度は觀音山へ行つた。觀音山は市の北隅にある小高い山で、廣東市を一眸の下に俯瞰し、洋々たる珠江を望み、踵をめぐらせば北方に起伏する山々や、平野や、山川の形勝をゐながらにして究めることが出來る。古來廣東では無數に戰爭が行はれたが、攻擊軍が觀音山を占領すれば、其の時廣東城は陥落するのが例であつた。

山頂に、鎭海樓といふ五層建の古建築がある。一名望海樓ともいふ。明の洪武年間の建造だといふ。高さは八丈あり、雄大で堂々としてゐる。最近市で修復を加へて博物館に利用してゐる。やゝ下つた處に、素晴らしく立派な中山記念館を建築してゐる。もう八分通り竣工してゐる。

山下には、灰色や、鼠色の壁で圍まれた民家が果しもなく續いてゐる。處々に樹木が立つてゐる。

「僕はかういふ處が好きなんですよ」

私が、其の古臭い、見すぼらしい、城外の民家を指しながら云ふと、

「まあ、どうして？」とK女史は眼を睜つて云つた。

「村松さんユートピヤですね」

予倩君は朗らかに笑つた。

山を降つて六榕寺へ行つた。それから西堤へ戻つて、K女史を船へ送り込むと、女史のお父さんもたうに歸つてゐた。其の船は四時に出帆した。

歐陽君は夕方から芝居の舞臺稽古を見てやらなければならぬので一先づ歸り、私とT君は其處から直ぐ近くの新亞洲酒店へ行つた。

革命的都市

翌日の午後、T君も香港へ歸つた。私は晝の間、沙面の在留邦人の誰彼を訪問し、夜は研究所の『茶花女』を見物に行つたりした。

新亞洲酒店は去年出來たばかりだといふが、純洋風に近く、設備が整つてゐて氣持がよい。其處は太平路の目貫の地點で、西堤といふ海岸通から一足入つた處だ。其の近所には、銀行や貿易事務所になつてゐる大きなビルディングや、料理店や、旅館や、百貨店などが集つてゐるので非常に繁華である。廣東の市街は數年前から城壁を取り崩し、其の跡には大道路をつけ、市中全體にわたつて新しい都市計劃を實行したので、先づ殆ど近代都市の外觀を備へてゐる。地方に道路を開くことと、都市改造は近年中華民國の流行の一つだが、廣東地方は殊に進取的だから、それが盛に行はれてゐる。私が南支那を旅行した中で、城壁が崩れたまゝでも殘つてゐた處は惠州だけだつた。廣東市内の店舖は堂々たる大廈高樓が多く、商品も豐富で、市中到る處活氣が充滿してゐるやうに見えた。銀暴落と世界的不景氣の影響を受けて廣東の經濟界も沈衰しかけてゐるといふ話を聞いたが、さういふ事は外觀では分る道理もなかつた。私の旅館の四階の部屋から街路を見下してゐると、廣東の盛大と、活氣と、色彩と、尖端とが遺憾なく眺められた。此の土地が古來革命の根據地となつて來た理由が、それらの事物を見たゞけでも頷けるやうな氣持がした。

銀價の暴落は、中華民國の對外經濟に非常な打擊を與へたことは勿論だが、輸入品以外の國内の物價には左程影響が現はれてゐなかつた。早晩現はれるものであるかも知れぬが、一般の民衆の日常生活は國内の貨幣價値が變らない限り大した脅威は

受けずに濟んでゐる。例へば俸給生活者は、銀の對外價値が變つても、彼等の生活内容は從來と變りなく充實してゐる。廣東では紙幣は殆ど流通してゐない。中央銀行の紙幣が二分ノ一位の相場で少しは取扱はれるといふ。それと一圓紙幣だけが便宜的に額面で流通してゐる。實際廣く流通してゐる貨幣は全部廿錢銀貨である。どういふ種類の取引でもすべて廿錢銀貨で行はれてゐる。

國内戰爭の影響もあるにはあるが、これとても外國で想像するほど人民を疲弊させてゐるとは云へない。廣東省政府は、廣西派と戰さをする爲に月額四百廿萬元の軍事費を支出してゐる。然るに政府の收入は六七百萬元しかない。大部分を軍費に掛けてしまふから政府の財政は極端に窮乏してゐる。そこでいろんな名目を設けて民間から新税を徴發することに努力してゐる。然らば人民は皆重税に苦しんでゐるかといふと、あながちさうでない。支那は何處へ行つても戸籍法が施行されてゐないのと、近代的税制が確立してゐないために、戸數や人頭に應じて直接に税金を徴收することが困難になつてゐる。そこで税金は多く商總會とか、民會とか、税金取立ての營業會社とかの請負事業になつてゐる。かういふ機關の介在することは、税金を重からしめる理由にも擧げられるが、反對に輕からしめる理由ともなる。少くとも、取り立て易き一部の者には重く當る代りに一般の民衆は負擔を輕減されるといふ傾向がある。税金は多く直接物品に掛けられる。鹽税のやうな例外もあるが、生活必需品に對しては餘り多く課税されてゐない。從つて下層社會の生活は比較的安易である。



廣東の

地方の農民や商人に對して打撃を與へてゐるものは、戰爭や政府の税金取り立てよりも、土匪の横行から受ける損害である。これが地方の有らゆる產業と文化の發達を阻害してゐる。しかし支那の土

匪は今更始まつたものではなく、昔も今と同じ様にあつたのだから、農民や田舍の商人は、其の中で出來るだけの手段や方法を考へて、曲りなりにも商賣も營めば産業にも從事してゐるのだ。

其の一例を擧げると、私が廈門の貿易家から聞いた話だが、福建省の地方へ入ると近年は共産土匪軍が猖獗を極めてゐる。其の首領は朱德、毛澤東等で、どちらも共産黨の錚々たる人物だ。それで、地方との商取引は非常なる危險が伴つてゐる。が、それでは全く取引が杜絶してゐるかといふとさうではない。どうして商賣をするかといふと、商人が其の共産土匪に加盟するのである。さうして或程度の義務を履行してゐれば土匪軍から掠奪されるといふ恐れはない。農民は勿論のことで、彼等は何時でも召集を受ければ鍬を抛ち銃を持つて土匪の軍隊になる。が、平常は家にあつて純朴に農業に精出してゐる。福建省の省長海軍大將楊樹莊が、共産土匪を討伐すると



市街

いつて堂々と福州から廈門へ乘り込んで來た。そして討伐の軍費を廈門の金持や商人から徵發した。が、楊樹莊は莫大の軍費を集めたばかりで戰爭はやらずに何時の間にか福州へ歸つてしまつた。といふわけであるから、人民の立場から云ふと、土匪でも軍隊でも同じことである。危險といへば、どつちも等分に危險であるし、軍隊には規律があると云へば、土匪にだつて土匪相應の信義がある。楊樹莊の場合などは寧ろ土匪以上の惡辣とも云へる。これは一福建省の例だが、かういふ事は何處の軍閥でも多少はやつてゐる。

かういふ狀態だから、支那の人民の個々の生活や經濟狀態は、必ずしも外國關係や政府の方針に依つて左右されてはゐない。此の外にも、飢饉があつたり、洪水があつたり、惡疫が流行したり、いろんな不可抗力に支配されつゝ、其の時々に

順應した方法を考へて生活してゐるのが支那の國民の大多數である。しかしそれだから、産業の發達も文化の普及も覺束ないことは勿論だが、さうかと云つて直ちに民衆全體が極端な疲弊に陷つてゐると考へることは早計である。

民國十六年十二月十一日、廣東に勃發した共産黨の暴動は、言語に絶した恐怖時代を現出した。其の時廣東の軍隊は全部北上してゐた。共産黨は其の虚に乘じて事を擧げたのであつて、僅か殘留してゐた張發圭の軍隊の共産分子と聯絡を取り、監獄を破壞して囚人を解放し、廣東の重要なる機關を悉く占領してサヴエートを組織し、三日間に亘つて廣東を支配した。其の間放火、掠奪、殺人、有らゆる暴虐の限りを盡して、其の爲に目貫の市街は殆ど燒き拂はれた。此の暴動は、惠州から急行した李福林の軍隊が猛烈な市街戰を行つた結果漸く鎭定したが、廣東全市は一時阿鼻叫喚焦熱地獄の巷と化し、殺戮された者幾千人、街上は死屍累々たる光景を呈し、物質的損害は數千萬元に達した。其の時燒かれた建物が骨だけになつて今でも殘つてゐる場所もあるが、大體は全部新らしい家が建ち並んで、以前よりも立派な賑やかな市街になつてゐる。

廣東省は、國民黨の策源地で、孫中山は僅かに一省に據つて多年北方幾多の軍閥と對抗して來た。廣東人の身內に流れてゐる革命の血が、孫逸仙及び其の一黨をして發熱せしめたのであることは勿論だが、廣東の經濟力がよくこれを支へることが出來なかつたなら、中國革命は成り立たなかつたであらう。

茘枝灣

朝十時頃、歐陽予倩と唐槐秋の二人がやつて來た。

「今から易さんの家へ遊びに行きませう」

と云ふ。一緒に表へ出ると自動車が待つてゐる。易さんといふのは、警官學校の總務主任易健全氏のことだ。其の人の住宅のある場所は舊城外觀音橋の附近であつたが、此の邊へ來ると全く舊市街で自動車は通れないので途中から歩いて行つた。先方の家に着くと主人の易氏が門口迄出迎へた。其の家は非常に古くてそして市中の家としては廣かつた。私達は最も奧の客室に通された。今日は日曜なので易さんは私達を御馳走してくれる序でに、戲劇研究所の教師や生徒を大勢其の自宅へ呼んで音樂會を催すといふので、別室の方には二三の音樂の先生と十人ばかりの學生が來てゐて、盛んに樂器を鳴らしてゐた。易さん自身も音樂に堪能だといふ。

聞いて見ると、此の家は百年位前に建てた家で、易さんの家は代々爰に住んでゐるのだといふ。現在も、易さんの兩親や、

長兄夫婦や、弟の夫婦、それから大勢の弟妹達、それらの大家族が此の家の中で別々に住んでゐるといふことだつた。支那でも廣東は大家族制度の一番發達した土地だ。さういふ傳統的な制度のいろんな形式や典禮を説明するものが此の家の中に澤山あつた。然し、家族制度は守つてゐても、易さんの兄弟達は皆新らしい學問をして、長兄は法律家で、直ぐの弟は官吏、其の次の弟は美術家といふ風だから、實際の生活には舊時代の遺習は殆ど交つてゐないらしかつた。

午飯の卓には、私達三人のほかは、主人夫婦と、易さんの嫂と、研究所の教師の嚴工上氏と蘇氏とそれだけで、隔たりの無い愉快な食事をした。易さんの夫人も、兄さんの夫人も、どちらも近代的女性だつた。食卓で、廣東人のイカモノ食ひの話が出た時、私が、廣東の婦人は禾虫といふ稻に附く虫が非常に好物で夫が死んだ時でさへ先づ禾虫を食べてらないうちは動哭しないといふ話をある書物で讀んだことがあるがそれは頑個ですかといふ質問をすると、湖南人である歐陽君が直ぐ様、一ほんとですよそれは。つまり廣東にかういふ方言があるのです。夫死夫還在、禾虫過期恨唔返――つまり、夫は死んでも掛け替へが幾らもあるが、禾虫は時期を通り越すと悔んでも追ひ付かないといふのですがね―

すると雨易夫人が納まらない。

「歐陽先生は湖南人だもんだからあんなことを仰しやるが、それは廣東の女に對する非常な侮辱です。現にわたし達でも禾虫なんか大嫌ひですからね。嘘だと思つたら此の人に聞いて御覽なさい」

易氏は「アハ〳〵」笑つてゐるばかりで、夫人が禾虫を好きだとも嫌ひだとも云はなかつた。

食後に表の方の廣い部屋で音樂を演奏した。蘇さんは頭の禿げた老人だが、胡弓を彈いては廣東第一の名手だといふ。嚴さんは三弦の名人であつた。易さんも加はつて、皆々いろんな樂器を使つた。セロから工夫して變へたやうな新樂器もあつた。歐陽予倩の新作になる『楊貴妃』林黛玉の唱である『瀟湘夜怨』などをやつた。唱は二人の若い女の生徒が交る〳〵歌つた。古典の支那樂には幽婉極まる調がある。それには古代の美しい生活ばかりが表現されてゐる。宮廷婦人の榮華や、深窓佳人の戀愛や、歴史や文學に現はされてゐるそれらの美的生活が音樂を聽いてゐるとそつくり感覺的に甦つて來るやうな氣持がする。

私と予倩君だけは、二時間ばかり音樂を聽いた後で人々より先に易さんの家を辭した。予倩君は私を荔枝灣へ案内して呉れる約束があつた。

私達は其處から十丁ばかりの町を歩いた。市區改正を行つてゐる立派な住宅が並んでゐる通を眞直ぐに行くと、町端れの狹い河に高い木の橋の架つてゐる處へ出た。橋の附近には布の日覆を掛けた艇舨(サンパン)が澤山ゐて客を呼んでゐる。予倩君は前にも度々來たことがあるとかで馴染の艇舨を呼んで乘つた。

狹い河とも濠割ともつかぬ動かない水の流れがある。水の色は濁つてゐる。古びた家が河岸に並んでゐる。其の邊には紫洞艇といふ宴會料理をやる船が澤山ゐる。濠割は幾つにも枝流が分れてゐる。ところ／＼に高い橋が架つてゐる。樹木の繁つてゐる中を通る。岸近くに、簇がり立つ竹林に圍まれた警察の出張所があつたりする。さういふ處を、今日は休日のせいもあらう、艇舨を浮べた遊客が右往左往してゐる。下流へ行くに從つて河幅は幾らか廣くなつて、遊船の數も增して來る。此處の名物になつてゐる粥船が澤山出てゐる。黃色い水が粘土の岸をピチャ／＼洗つてゐる。兩側は平地で、畑があつたり、土手の上に榕樹の繁つた枝が擴がつてゐたり、何の奇も無い景色のやうだけれ共、それでも何處ともなしに漂つてゐる古さと、一種の情趣とがある。

茘枝(ライチー)の樹はところ／＼に殘つてゐるに過ぎない。昔は此の水鄕はもつと廣かつたものだといふ。さうして水邊到る處茘枝の樹があつて五六月の其の季節になると、皮の紅く熟した實が低く垂れ下つて來るのを船中から採つては食べたものだといふ。茘枝灣の名はそこから始つたものである。

茘枝(ライチー)といふ果實は近頃は餘程一般的になつて來た。日本あたりまで氷詰にして輸出されて來る。が、どういふわけか此の果樹は廣東地方でなければ育たないらしい。古來中國人が茘枝を賞美することは非常なもので、それに關するいろんなエピソードがある。楊貴妃が茘枝を食べたいといふので、番禺(廣東)から遙々長安の都まで早馬を以て輸送して見たが、いつでも途中で腐れてしまふので、さすが榮華を誇つた貴妃も是れだけは慾望を滿すことが出來なかつたと云はれてゐる。

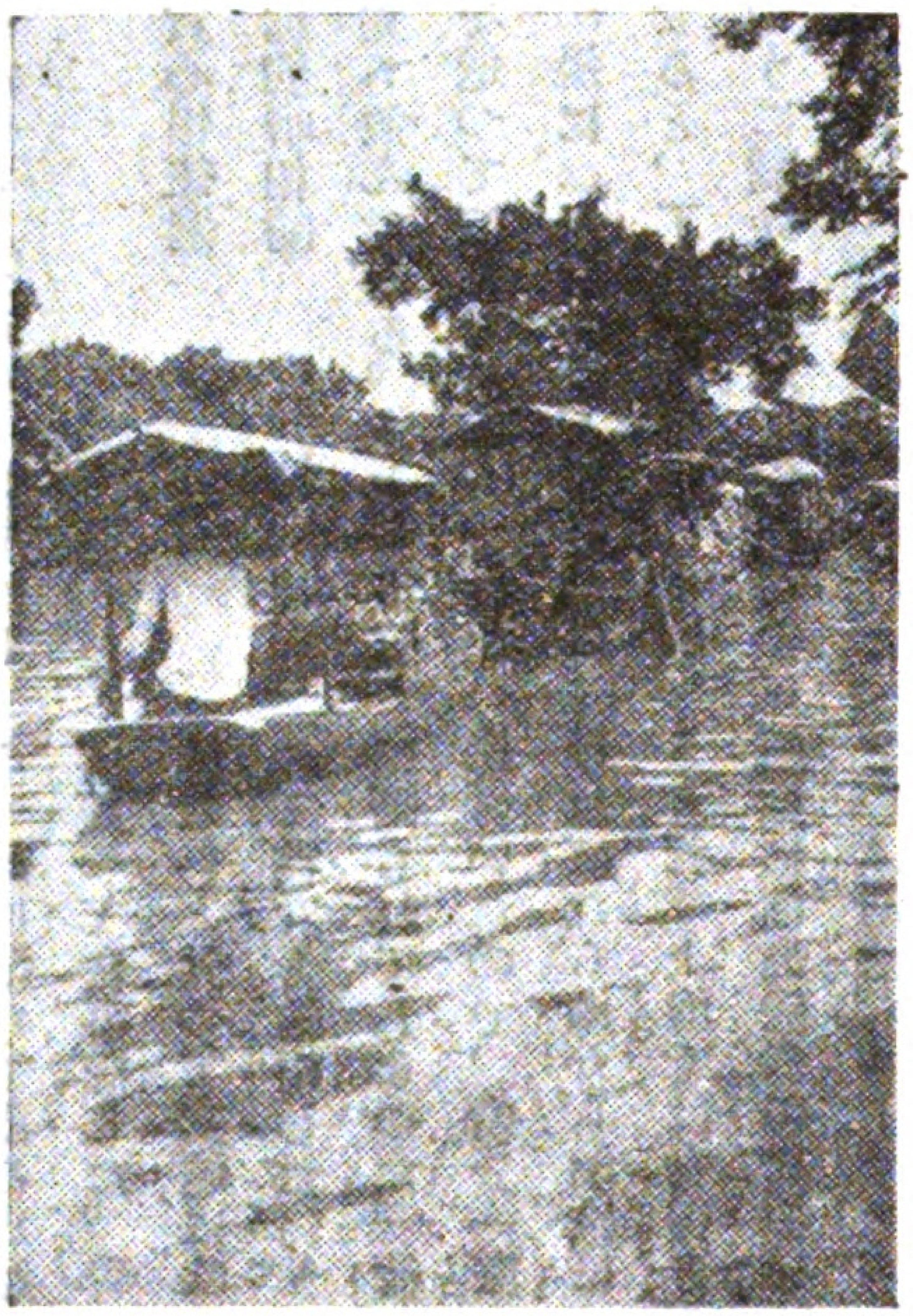
宋の大詩人蘇東坡は、宰相王安石に反對したため今の廣東省の惠州へ流された。此の詩人の不運は茘枝を一層有名にした。東坡は餘程茘枝が好きだつたと見えて茘枝を讃美した詩を數篇殘してゐるが、初めてこれを食つた時、

初食茘枝　　蘇軾

羅浮山下四時春
盧橘楊梅次方新
日啖茘枝三百顆
不妨長作嶺南人

荔枝が市へ出始めるのは五月の中旬からだが、出盛りは六月である。走りは廣東で一ボンド五六十錢が相場だがそれが、上海へ行くと一弗で三顆位の値段になる。何しろ水分ばかりと云つてい丶果實だけに生の儘では永く保存が出來ない。が、唐の時代に冷藏輸送が發達してゐたら楊貴妃をして狂喜せしめたであらうに殘念なことである。近來は外國迄輸出する勢だから、田舍の方へ行くと此の栽培が盛んに行はれて上等の畑を一面に荔枝の園にしてあるのを見受ける。

由來支那では荔枝を果實の王にしてゐる。私などは口に慣れぬせいか其ほどには思はぬが、しかしあの固い表皮に包まれた水分の張り切つた肉塊、優れた玉のやうな透明な肌、馥郁たる芳香、それらが中國人を魅了する理由を解することはできる。皮は熟すると表側まで鮮血の滲んだやうに紅くなるが、裏面の黄ばむだ肌へサッと紅を散らしたやうな色の付くのは世にも鮮やかな氣持がする。支那で尊まれる多くの食物が必ず強精劑的効力を兼ねてゐるやうに、荔枝も同じ價値が說かれてゐる。其の眞價については判斷しがたいが、荔枝の魔醉的な香氣には仙女を聯想させる感覺がある。そしてあのすきとほつた肌の色は、直ちに美人の肌を想像させる。荒い、固い皮の下から忽然として轉び出る荔枝の肉塊には、たしかに神祕と處女性が包まれてゐる。


荔枝灣の舸船

日曜日だから學生が一番多い。ユニホームを着た中學生が勇ましくボートをこいで來たり、女學生ばかり滿載した船が澤山ゐる。夫婦づれ、友達同志、さては才子と佳人が喃々と語らつてゐる場面もある。私達の船と擢れ違つた一艘の小船には矢張りさうした一組の男女が乗つてゐる。男は體を曲げて女の顔の側へ口をやつて何か話してゐる。

「村松さん、今の男が何を話してゐたか分りますか」

「い丶え」

「たつた一言だけ聞えた……將來僕ら二人……とね」

予倩君は爆發したやうに笑つた。

やゝ廣い處へ出た。岸邊に巨大な榕樹があつて、其の根方に一間四方ばかりの小さな祠がある。一人の老婆が祠の前に腰掛けてゐる。壁に『拾花仙院』と書いてある。其の名前がいゝので一寸吊り込まれて船を寄せて上つて見ると、老婆は祠守で靈簽を賣つてゐる。予倩君と私は一本づゝ引いた。私のは下(凶)だ。

深山水盡少人知　樵子貪心恨往遲
利害不明終踏險　窺人虎豹暗相隨

下流へ來ると兩側は水中に家が立ち並んでゐる。水上一丈位の高さの柵を建て、其の上に家屋を造つて住んでゐる。それから間も無く珠江の本流へ出る。其の邊には無數の水上生活者の船がゐる。舢舨を本流へ漕ぎ出させると、丁度引潮の處へ、風が吹き出したので、船が木の葉のやうに飜弄せられて危險なので直ぐ樣元の入江の方へ引つ回した。

私達の舢舨の船頭は十六七の娘で、黑木綿の布子を着て、身に何の飾もないが、日に燒けた其の顏は案外整つてゐて、健康な手足や、純朴な性格が誰でも好感を持たずにゐられないやうなものがあつた。

上海から來た或るアメリカ歸りの青年が偶々此の娘の船に乘つて、先づ其の純眞さに惹き付けられた。それから娘のすべてが美しく見え出した。櫂を使ふ時の姿勢や、手足の力や、肩の曲線や、背中に垂れてゐる長い髮や、何も彼もが彼に取つては偉大な發見となり、魅力となつた。それから青年は夢中になつて毎日荔枝灣へやつて來ては此の舢舨へ乘つた。或日娘の母親と一緒に暮してゐる水邊の汚ない小家へ行つて鷄を一羽料理して貰つて食事をした。青年はこれ程うまい御馳走を食べたことはないと云つて友達に吹聽した。到頭青年は娘のおふくろに向つて彼女と結婚したいと申し込んだところが、其の願ひは美事に斷られてしまつた。彼女に一人の姉があるが、其の姉が昨年緣付いたので、當分一家を彼女と母親とで働いて支へて行かなければならぬからお嫁には上げられないと其の時母親は云つたさうだ。上海では女優と浮名を流した青年ださうだが、廣東の艇妹には失戀者の立場を味はせられて銷然として上海へ歸つたといふ滑稽なローマンスを予倩君は私に語つた。

船はすべて艇と呼ぶ。船の娘のことを艇妹と云ふ。

「私は艇妹の戲曲を作つて見やうと考へてゐるが、まだ出來ない」と予倩君は云つた。

何十艘となく粥を賣る船が出てゐる。粥は廣東名物の一つである。私達も一艘の粥船へ舢舨を着けて魚生粥を食べた。それ

は鯇魚といふ魚の刺身に、落花生、スルメ、ネギ、芫茜(ヤイサイ)、薄脆(ポーツイ)などといふ藥味を入れ、其の上から煮立つた白粥を掛けたもので、粥とは云ひ乍ら非常に美味だ。廣東では夜更けになると、街の辻々や暗い横町などで『魚生粥(ユイサンチョク)――』と呼んで賣つてゐる。

元の方へ船を漕ぎ戻す。荔枝園といふ茶館がある。其處で船を上つて茶を飲んだ。園は可成り大きな池に面して造られてゐたが、建物も樹木も荒れ切つてゐる。

荔枝一灣涼入夢
香風三徑懶忘歸

聯の句は汪兆銘題としてある。ジメ〱した庭に龍牙花といふ黒ずんだ眞紅な花が蒸し暑げに咲いてゐた。

花艇

夜の十一時過ぎ、私と唐君は新亞酒店を出た。西堤馬路まではは一足しかない。

珠江に臨んでゐる其の街は燈火と群衆が一杯漲つてゐる。四月の末の此の土地は丁度日本の眞夏である。涼しい河風が吹いて來る。河上に碇泊してゐる無數の艇が、岸から照らされる燈火の中で、ユラ〱、ザハ〱と蠢動してゐる。

街路樹の根方や、倉庫の壁に添つて、渡船の娘達が五人十人づゝ併列して客を喚んでゐる。

「吽艇否(ヤセウテンツ)ー」
「吽艇否(キユウテンワ)ー」

私達は一艘の艇(テン)へ乗つた。此の艇には二人の娘と一人の老婆がゐた。娘達は、一人が櫓を使ひ、一人が櫂を使つた。六十餘りの老婆は私達の前の處へ蹈み込んで何やらお追従らしいことを云つてゐる。私達が花艇(フアーテン)へ行くお客だといふことが分つたからだ。

艇は上流の方へ進んだ。河の上は眞つ暗になる。艇の中には三分芯の洋燈が吊してある。向う岸の河南(ホーナム)には、賭博館のイルミネーションが晃々と輝いてゐる。間も無く沙面(シヤメン)の岸壁の側へ出た。岸壁の上には、榕樹や楠の大木が夜の空へ黒い枝葉を擴げてゐる。楠の新芽の香が水の上までこぼれてくる。

此の邊にも夥しい艇が集つてゐる。中流には、處どころに外國の軍艦が碇舶してゐる。

沙面を通り過ぎた處に、又一團の艇が密集してゐた。燈火が河の上を火事のやうに明るくしてゐた。それは大多數が花艇だつた。

花艇はおよそ五列位に併列して、其處に幾筋かの船の街を形作つてゐる。そして各々の筋には三十艘位の艇が並んでゐる。

艇の中には、一人乃至二三人の遊女と、彼女達に附屬してゐるそれ〲の人間（おもに阿母や小さい娘）がゐた。お客の上つてゐる艇もある。其處では、小さな酒盛りをしてゐたり、麻雀をやつたり、遊女が琴を打ちながら歌をうたつてゐたりする。

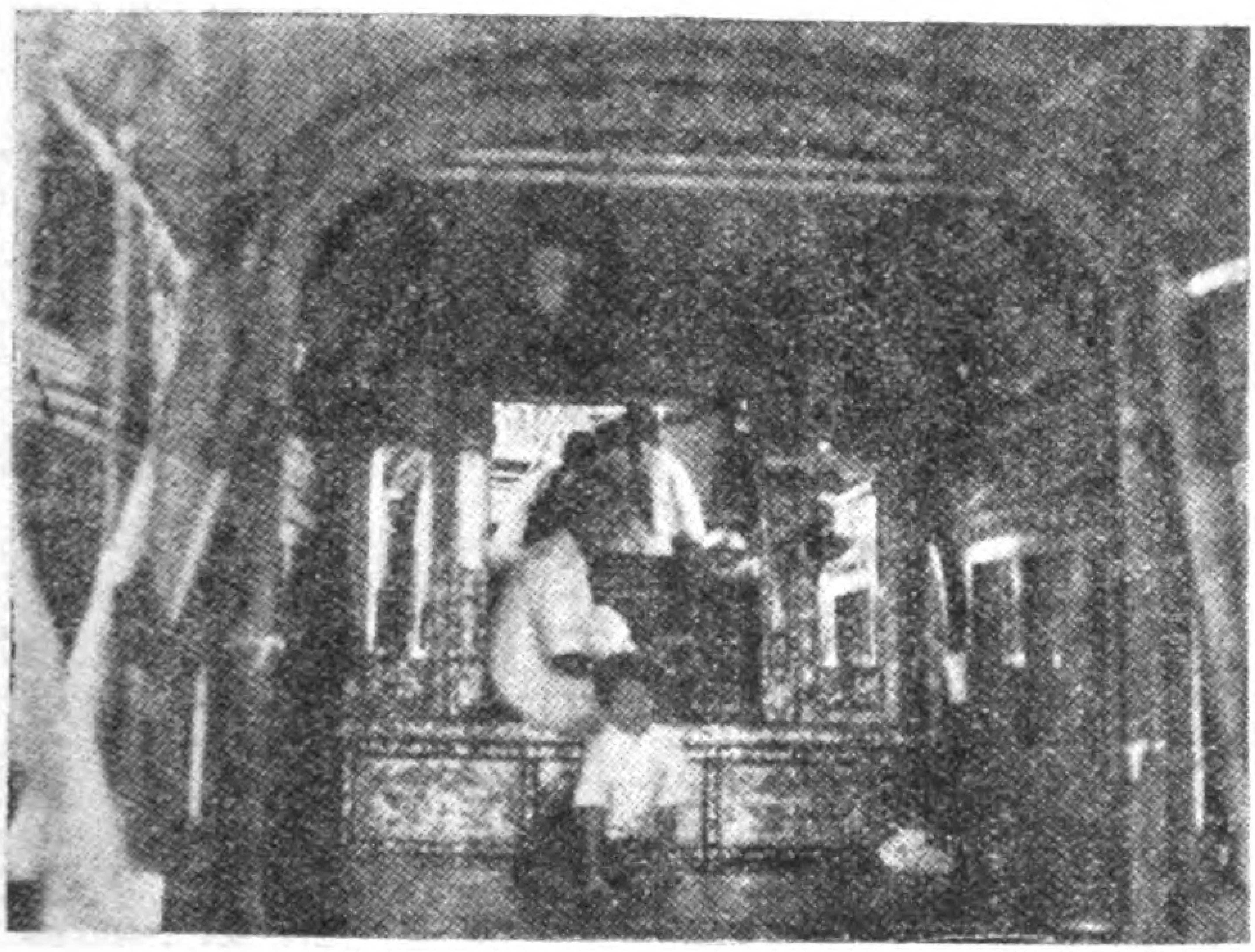
花艇の街と一條の水路を隔てゝ、紫洞艇が十艘ばかり並んでゐる。其の大きな船では、大勢の客と遊女とが打ち交つて盛んな宴會が開かれてゐる。胡弓や、琴や、歌の聲が、麻雀の牌の音や、人々のざわめきの音響の中から杜切れ〲に聞ゑてゐる。川波は、光と、騷音と、色彩とを載せて、陽氣に躍つてゐる。遊女達は優美な聲を揃へて

「吽艇啊――」

「吽艇啊――」

と素見しの船を呼び留めてゐる。

花艇はどれも可愛らしい小さな船である。そして、蒲鉾形の屋根の下の小さな座敷には、陸上から電燈が引かれてゐて、其處は金箔や螺鈿で裝飾されてゐる。遊女達は其の穴のやうな部屋の中に座つてゐるのだが、中には舳の處へ出て快活に饒舌つたり、船から船へと身輕に飛んだり、或ひは彼女達を、花艇から紫洞艇へ送り迎ひをする一層小さな舟に乘つて往き來したりしてゐる者もある。さうして是れ等の船全體が、街全體が、絶えずユラ〱、ユラ〱動搖してゐる。



花艇の内部

何んといふ華やかさ……けれども其處には近代的豪奢の跡は微塵もない。征服され、滅亡した民族が生きんが爲に考へ出したところの悲しい生活の綾織である。

私達は花艇の街をグル〱漕いで廻らせた。此處の遊女達は總じて身なりも質素である。

とある船の一人の遊女が私の眼に留つた。彼女は舳の方の板敷の處で小さな腰掛に腰を掛けながら縫物をしてゐるた。青い釦をつけた白地の襯衣に黒い袴子をはいてゐる。

「遊んで入らつしやい」

「幾許で遊ばせる」

「十二元です」

「六元に負からないか」と唐君は云つた。

女は返事をする代りに縫物を始めた。

「それぢやあ幾許まで負ける？」

「九元に負けて置きませう、それより負かりません」

「九元は船だけの値段なのか……それとも」

「船も人も全部で九元です」

「宜し」

さう云つたかと思ふと唐君はヒラリと先方の船へ飛び移つた。

胴の間の方から阿母(おふくろ)が出て來てチヤホヤ歡待する。十ばかりの小娘が茶を運んで來る。其の部屋は鳥籠のやうに狹くて、そして金箔と螺鈿が隙間なく鏤めてある。蒲鉾なりに彎曲してゐる天井は低くて眞つ直ぐに立つことができなかつた。床には竹を編んだ敷物が敷いてある。胴の方との境には一寸した腰があつて、其の上に二本の綺麗な戸が立てゝある。其處には額や聯が懸つてゐる。額の字は『珠江夜月』としてあり、聯の方は『翠羽双棲香國閣、鳳簫三弄畫高』と書いてある。此の艇の號は翠鳳といふのだ。

遊女は阿金(アカム)といふ名で、年齢(とし)は十八だといふ。此の艇には遊女は一人しか居なかつた。

私達は料理船を呼んで目の前で料理を作らせ、强い燒酒を少量飲んだ。水の上の街は賑やかさを增すばかりであつた。いろんな飲食物を賣る船が呼聲をあげて通る。遊女の送り迎ひをする艇のやうな小さな船が、行き交ふ艇の間を縫ひながら矢のやうに走つて行く。遊女は其の舳の處へ眞直ぐに立つてゐる。それは陸の者には到底出來ない藝當で、其處に艇の女の微かな誇りが見える。盲妹といふ、盲目の女藝人が流して來る。

盲妹を呼び留めて歌をうたはせた。二人の盲目の女が、一人は胡弓を彈き、一人が琴を打つた。外題を書いた帳面を見せてお客の註文を聞く。私が其の中から『送情郎』といふのを註文した。

盲妹の中には稀れに美人もあつて、さういふのは市中の茶館へ傭はれて歌を謠ひに出る。民國十二三年頃非常に有名な盲妹があつて、一日十數弗で茶館に出てゐたが、或粹客のために數千元で落籍されたといふ話がある。しかし近年は女伶といつて普通の目明きの女藝人が茶館へ出るやうになつて以來盲妹は弊履の如く棄てられてしまつた。彼女達は多く夜市中を流して歩くが、さうして藝を賣るばかりでなく、僅かの金で操も賣ることになつてゐる。彼女達にはそれ〴〵親方がある。生れつき盲目

の者もあるが、中には滿足の眼を持ちながら親が貧しいために盲長屋の婆さんの處へ賣られた者もある。さうすると親方は針の先に毒を付けて其の子の眼玉を突き刺して强制的に盲目にしてしまふ。彼女達は盲目であるがために何事も一心になり、藝も覺えるけれども、盲人の微妙な感覺によつて、一種獨特な性的技巧に達してゐると云はれてゐる。

盲妹の歌は何んとなく哀音に豐んでゐる。それは彼女達自からの悲しい運命を呪つてゐるかのやうである。

唐君は二時頃、それ迄待たせてあつた渡船へ乘つて歸つた。其の船に、明朝六時に私を迎ひに來るやうに命けて置いた。私の船では寢る仕度をした。阿金は船底から蒲團や枕を取り出した。表へ面した方へは紅い[illegible]を掛け、更に其の外を厚い防水布で包んでしまつた。

翌朝六點鐘に阿金は私を搖り起した。舳へ出て渡船を喚ぶと、昨夜の船が直ぐ前に來て待つてゐて、苫の下から老婆がムクムクと起きて來た。私は其の船へ乘り移つた。黃濁した動かない水があつた。花艇は皆汚れた防水布を掛けて夜の睡を續けてゐる。空は曇つてゐる。風雨にさらされてドス黑い、[illegible]に朽ちた見すぼらしいそれらの船が、底波のためにユラ／＼動いてゐる。紫洞艇との間の狹い水路へ出ると、引潮の急流の中を多くの荷船が上下してゐる。船頭達は先を爭ひしきりに喚き叫んでゐる。舷と舷と擂れ、舳は艫と觸れた。慌たゞしい櫓の音に老婆は猿のやうな聲を擧げて叫び乍ら、棹を向うの船に突き當てゝ危うく覆りさうになる船を操つてゐる。私は駭き夢から醒めたやうに茫然となつた。

蛋民

廣東の人口は云ふ人に依つて異ふから正確なことは分らない。ある書には八九十萬と出てゐるかと思ふと、ある書には二百五十萬となつてゐる。百五六十萬又は百八九十萬とも云ふ。比較的信ずべき最新の地理書に據ると、總人口百五六十萬、其の內水上生活者の數が約二十萬となつてゐる。

廣東の第一印象は、珠江の上に浮いてゐる無數の船であつた。蒲鉾形の屋根のある、せい／＼長さ三四間の艇である。さういふ船が江の岸から小幅へかけてギツチリと密集してゐる。幾千萬とも數へ切れぬ夥しい艇である。それは丁度珠江といふ大きな幹へ無數の油蟲が寄生してゐるやうな光景だ。

水上生活者を總稱して蛋民と云つてゐる。彼等は其の一隻の小艇を以て家庭とし、寢床とし、財產としてゐる。生れるのも

此の艇内であれば、死ぬるのも此の艇内である。冠婚葬祭すべて此の小艇内で行つて、波濤を友として其の五十年を終始するのである。蛋民は古來一種の賤民階級に屬してゐて、陸上の者は彼等と緣組をしない。淸朝時代には、蛋民は進士擧人たるの資格が無いばかりか、普通人民としての權利は大概與へられてゐなかつた。其の代り一方から見ると、政府は彼等を編戶の外に置いてゐたので、有らゆる義務を課せられることもなく、謂はゞ波浪と共に浮かんでゐる一種の自由民であつた。蛋民の歷史は、茫乎として知ることができないが、周代に於て越族が朝命に服せず、惠王は是を討つた。其の時越族は四散し、其の水上に逃れた者が蛋民族の始であると云はれてゐる。其の後、南宋や明の末路に當つて、南支那に據つて舊朝廷の爲に義旗を擧げた者は少なくない。それらの徒が、勢の窮まるところ、遂に逃れて蛋民の列に伍して追迫を免がれ、やがて是に同化した者も澤山あつた。

蛋民の職業は主として旅客貨物の運搬と漁撈である。彼等の中には大船主や大漁業家がある。が、大多數は一隻の小艇を家として住んでゐる下層民である。さういふ家庭の男は大概大きな船主に傭はれて働いたり、陸上の勞働に從事したり、海外へ出稼ぎに行つたりしてゐる。さうして男は多く外へ出て働くが留守を預る妻や娘は其の小艇を利用してあらゆる商賣を營む。一番多いのは渡船である。蛋民の娘で、少しく姿の美しい者は賣笑をする。さういふ女のことを蛋家妹（タンハンムイ）、或は鹹水妹（カンスイムイ）と云ふ。公娼も私娼もある。私娼は何處ともなく散在してゐるが公娼は一ヶ所に集合してゐる。それが花艇（ファーテン）である。外國人はフラワー・ボートと譯して呼んでゐる。

花艇の集合してゐる場所は、東堤（トンタイ）といふ處と、沙面（シャミン）との二ヶ所である、東堤の方が起原は古いさうだが今は衰へて沙面の方が繁昌してゐる。一九〇八年一月九日の眞夜半頃、東堤の花艇の間に火事が起つた。折柄の狂風に煽られて、凄まじい紅蓮は忽ち江上を蔽ひ、數百の花艇は須臾の間に烏有に歸した。遊女も、客も、老幼も、悉く逃げ場を失つて燒け死んだ。其の數千人に達して、其の後幾日かに亙つて遊女の死骸が江を埋めて漂蕩してゐたといふ酸鼻な出來事があつた。

水上には獨立した一つの社會が出來てゐる。其處には有らゆる生活機關が備はつてゐる。米穀、野菜、薪炭、肉類、雜貨、其の他何でも賣る船がある。自分の艇に座つてゐても賣りに來るのを買ふことができる。病院船があり、學校があり、寺があり、役所があり、代書人がある。艇の者が死ぬと、水上の道館から僧を聘んで經を上げる。其の人のことを「南無先生（ナムモウシーサン）」と云

つてゐる。道館は澤山ある。瑤光譚道館、李祺道院、銀河祭道除、瑤池譚道館、といつたやうな寺名の船がゐる。しかし、埋葬は矢張り陸地の墓地へ持つて行つて行ふ。蛋民だつて祖先は土の上で生れた人種である。だから彼等も生涯を終つて死んでしまふと土に還元する。

葬式に比べると、婚禮はなかなか華美なことをやる。それは樓船といふ席貸專門の船があつて、これは主に婚禮の場合に使はれてゐる。樓船は船も大きく船内には立派な設備が出來てゐる。一度に四五十人の客を容れることができる。樓船は紫洞艇のやうに船内で料理は作らない。かういふ場合の料理の仕出しをする菜艇といふ大規模な料理船がある。東堤には樓船が十數隻屋根を竝べてゐる。

蛋民は太古の民である。彼等の生活の中には近代的文明は少しも侵入してゐない。彼等は其の小さな艇の中で昔ながらの簡易極まる生活をしてゐる。廣東は海から八十哩遡つてゐるけれども珠江の水は海潮の干滿によつて七八尺の高低が生じる。河水は黄濁して有らゆる不潔物を含んでゐる。しかし、水上生活者は皆其の水を煮沸して飲料とし、器物を洗ひ、顔も洗へば口も漱いでゐる。けれども不思議に彼等は健康である。陸上に傳染病が蔓延する時でも、蛋民の間にはそれが滅多に及ぼさないといふことだ。彼等がいかに強壯であるかといふ一つの例は其の繁殖力である。普通陸上の者は平均一人か二人の子を持つに過ぎないが、蛋民は少くも四五人の兒女を持つてゐる。處が、天は公平で、三四年毎に一回は必ず襲來する有名な大颶風が、僅々數時間の間に幾千萬の人命を魚腹に葬つてしまふといふことである。



水上の道館

花艇ほど私を空想的にするものはなかつた。其處では何一つ現代の匂ひはない。私は其處で盲妹の歌をきゝ、狹苦しい船房

で睡つてゐると、自分もいつしか太古の民族に同化してしまつたやうな氣持がするのであつた。花艇の女が、他のいかなる支那の女とも異なる點は、素足を隠さぬこと、平常敷物の上に座つてゐることである。支那にも唐の初期あたりまでは座居の生活様式があつたが、西域の影響を多く取り入れるやうになつて以來座居は廢れて現在のやうに椅子に腰掛けることになつた。然るに蛋氏は、男女を問はず平常船の中で座つてゐる。其の座り方は、片足を片方の腿の上に載せて所謂趺坐といふことをする。それが何となく日本人にとつて親しみ易い氣持がする。

或晩私はM君といふ若い日本人と二人で夜明け近くまで花艇で遊んでゐて、それから待たせて置いた渡し船に乗つて歸途についた。沙面の岸壁に沿つて下ると、時刻が時刻だけに四邊の水上は寂として只私達の艇の櫓と櫂の音だけがギーギーと緩やかに聞えてゐる。舳の方の船縁（ふなべり）へお尻を据へて、兩脚をウント伸ばして、満身に力をこめて船を漕いでゐる阿地（アティー）といふ艇妹は此の邊で評判の美人であつた。まつたく阿地がまるい竹の笠を冠り、新しい黑の防水布の着物を着て、長い水棹を持つて舳に立つてゐる晝間の姿は、支那の古劇に出る花旦（ホァタン）のやうであつた。今夜は朧ろ月夜であつた。

其の邊にも無數の艇が泊つてゐる。私達の船は其の近くへ漕ぎ寄せられた。

「阿春（アチュン）――」

と二三回呼ぶと、一隻の艇の中から低い返事が聞えて、一人の女が船の覆布をかゝげてムックリ起き出でゝ來た。女は睡たさうに眼をこすりながら其處へしやがみ込んで

「お遊びなさいな」と云ふ。

「遊んでもいゝが幾許だ」

「三元です」

「高い、一元に負けろ」

M君は女とそんなことを云つてゐた。船房の中を覗き込んで見ると、小さな洋燈が點つてゐて、其の奥の方からは誰が寢てゐるのかグウ〳〵と鼾の音が聞える。女は齢頃は二十二三だが艶も香もないやうな女だ。

「軍艦が入つて景氣がいゝだらう」

「駄目、近頃の水兵さんはお金をつかはないから」

女は燐寸をパッと擦つて、煙草を吸ひ付けながらこつちの船の中を覗き込むやうにした。其の時、阿地（アティー）が睡たさうなあくびをした。

陳銘樞氏の印象

或日私は歐陽予倩氏と同道して、廣東省政府主席、陳銘樞氏を訪問した。

省政府は、廣々とした敷地で、大きな樹木が繁り、支那風の平建ての建物が奥へ奥へと幾棟も續いてゐる。其の邊に衛兵が澤山立つてゐる。此處は革命前から總督の役所だといふ。さうした古い厳めしさが今でも殘つてゐる。幾つかの建物と庭を通り過ぎると、一番奥に二階建の洋館があつた。其の二階には、可成り廣い質素な接見室があつた。私達は一先づ其處へ通された後、直ぐに主席の事務室へ案内された。それは北向きの窓を持つた極く狹い部屋で、陳銘樞氏は其處で大きな机に向つて事務を執つてゐたらしかつたが、私達が入つて行くと直ぐ立ち上つて莞爾々々しながら握手をして、それからいろんな談話をした。



陳　銘　樞　氏

陳銘樞氏は當年卅九歳だといふが、いくらか老けて見える。薄色の絹の支那服を着てゐた。丈は高く、ガツシリしたい、體格である。頭髪を長くのばして、黑い縁の眼鏡を掛け、鼻下に薄い髭を貯へてゐる。

談話は極く靜かな聲で其の落ち着いた態度には滋味がある。沈靜な風采は政治家といふよりも學者か詩人に近い氣持を起させる。

私は其の事務室の中を一見して異様な興味を覺えた。先づ其の机の上には、中央に古い鑄物の釋迦像が置いてある。それから硯が二三面と、十數本の筆と、何挺かの古墨と、古人の詩集らしいものが二三册置いてある。背後の戸棚の中には唐紙や絹が澤山卷いて積んである。それは中華民國の尖端を行く廣東の政治家の事務室として

は豫想と甚だ相違した感があつた。
「筆は何處でお求めになりますか」と私が尋ねると、
「北京からも取寄せますが、大きな字を書く筆は日本の品を使ひます。近頃は日本の方がい丶筆が出來ますね」と彼は云つた。
入口の側の壁に小さな黒板が掛つてゐる。それは何れ事務的な約束でも書き付けて置く黒板だらうが、見るとそんなことは少しも書いてなく、其の代りに『人生微塵裏。進化一轉廻』と白墨で書いてある。もつと奇拔なことは、机の右手の壁には、一振の日本刀が架けてあつた。それは蠟色の鞘に、鐵の鍔、白鮫の柄、目貫は黄金色の象嵌の見える赤銅か何からしい。
「珍らしい物がありますね、是れは何處で手に入れられたんですか」
すると陳銘樞氏は笑ひ乍ら、
「是れですか、是れは先年私が武昌の戰爭の時敵から捕つたんですよ」
「日本人が持つてゐたのをですか」
「いや、持つてたのは中國人ですがね」
私は此の風流な、溫雅な政治家が、同時に有名な武人であつたことを思ひ出した。
「あなたは今度どういふ目的で廣東へ來られたのです」
と彼は私に尋ねた。私は自分の目的を話した。私は中國革命の初期の時代に關係した日本の志士の行動に就いて從來から多少研究してゐる。廣東へ來た第一の目的はそれで、勿論人事に關する資料も蒐めたいが、同時に此の革命の發祥地である廣東地方の山川風物に自ら親しんで見る必要を感じたのである。
「材料は集まりましたか」
「まだ大したことはないですが……それについて私は惠州へ行つて見度いと思つてるんですが、あちらの方は大變危險だといふことで、誰でも私が行き度いと言ふと、止した方がい丶と云ふのです。」
「それは面白い、惠州は是非行つて御覽になる必要がある。あなたが行かれるなら、私が方法を考へて上げませうが」
と陳銘樞氏は熱心に云つた。私は非常に感謝して其の事を彼に一任して歸つた。私が所期の目的通り惠州へ旅行することが出來たのは全く陳氏の賜物だつた。それは後の話、私達がそんな雜談をしてゐる處へヒヨツコリ入つて來た人があつた。
其の紳士は、頭髮を一分刈りにして、丈は餘り高くないが、色の黒い、小肥りのガシリした體格である。脊廣を着て、ヅボンのポケットへ兩手を突つ込んだ儘ノソノソ入つて來ると、主席の机の側へ行つて、凭り掛るやうにしながら何か低聲で話し始

めた。私は其の人の顏を見た時「オヤ」と思つた。それは確かに何處かで見覺えのある顏だつた。さう思つて考へて見るまでもなく私は思ひ出した。それは私が香港から廣東へ來る時、同じ汽船に乘り合せた人だつた。其の船の廣いサロンで彼は多くの人と話しをしてゐた。或時はテーブルの上に頰杖を突き乍らヒソ／＼と密談でもしてゐるやうな容子で話してゐるかと思ふと、直ぐその後で別のテーブルへ行つた時には大聲で笑ひ乍ら大勢の人を相手に快活に饒舌つてゐる。西洋人の紳士が入つて來ると彼は親し氣に握手をして達者なフランス語で話し始めた。其の社交的な同時に粗野で豪放な態度が甚だしく私の注意をひいたのだつた。風采を見れば一個の無骨漢だが、其の引締つた容貌や性悍な擧動が隼のやうな感じを與へた。

彼等の用談が濟んだ時予倩君は其の紳士を私に紹介して吳れた。

「黃强さんです。省防軍の司令官で、陳さんの參謀です」

「僕はあなたと一度會つてますよ」

黃强氏は吃驚した。

「何處でゞすか」

「先達て香港からあなたと御一緒に來ました」

「フン／＼、さうでした／＼」

黃强氏は、私の顏を見詰めて思ひ出したやうに云つた。それから二三言葉を交した後で「もう一度緩くり會ひませう」と云つて手を握つて出て行つた。

陳銘樞には有力な乾分が二人ある。一人が黃强で、いま一人は公安局長歐陽駒だ。歐陽駒が右の腕なら、黃强は左の腕だ。

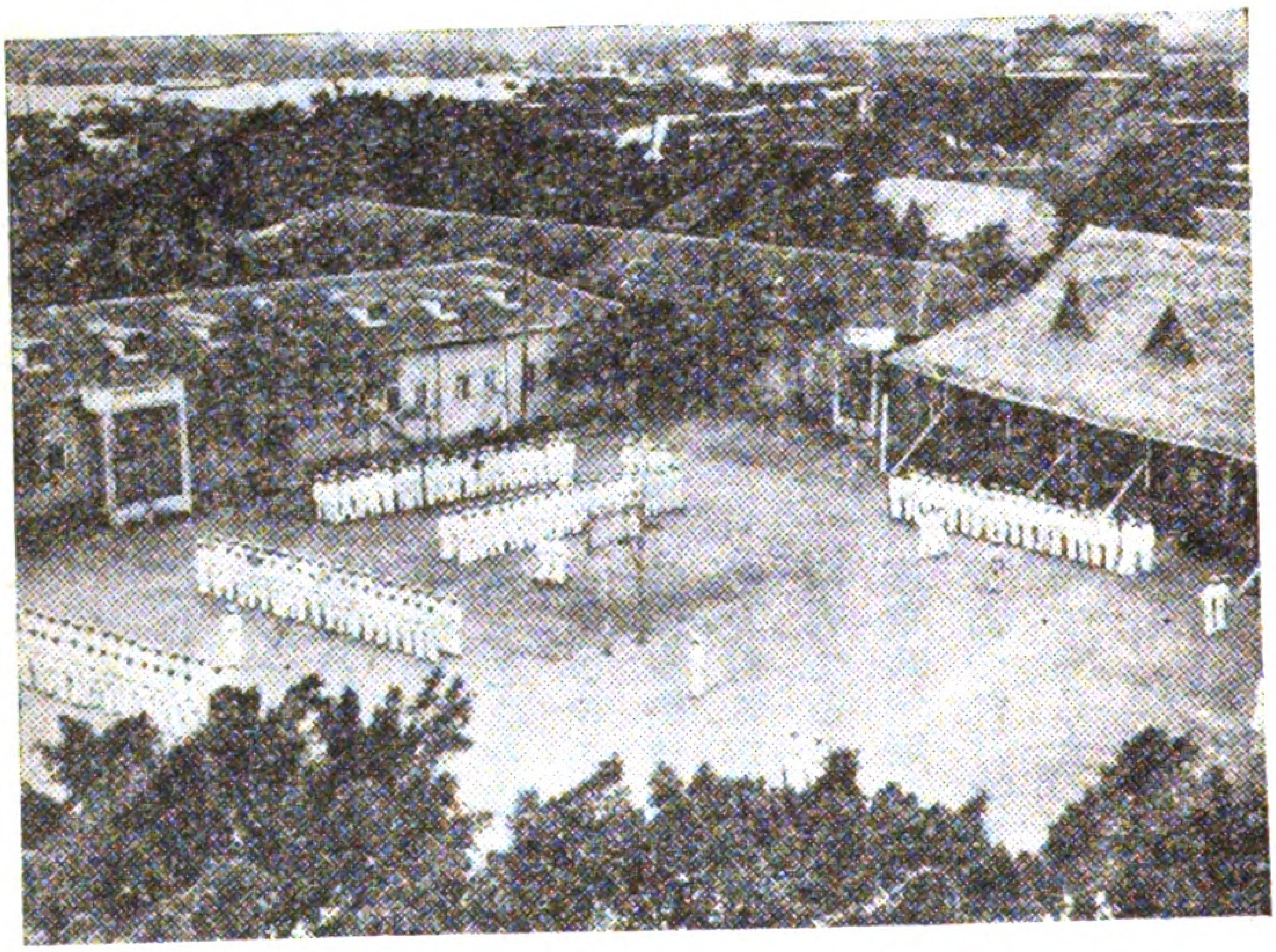
歐陽駒氏とは、私は廣東へ來た第一日に會つてゐた。そして彼が校長をしてゐる大沙頭の警官學校を參觀したのだつた。

警官學校は、去年の末に開校したばかりだが、現在學生は五百名ある。全部官費生で、目的は新時代の警察官吏を養成するにある。特別班と本科とがあつて、特別班は速成科で、黃浦軍官學校、高等警察學校、法制學校等の卒業生の中から選拔して二百名を限つて入學させ、三ケ月で警察制度に關する教育を授けて是れを全省の警察署へ分布する。本科は中學卒業生を收容して二ケ年で卒業させる。大沙頭といふ處は、珠江の中にある大きな島で、其の一部に警官學校を建て、他の空地は陸軍の飛行場になつてゐる。校舍は僅か造りのバラックだが、各種の設備も一通り揃つてゐて、殊に淸潔なことゝ、學生の規律の嚴肅なることは驚くばかりであつた。

警官學校の設立は、廣東政府の政治の方向を或程度に表現したものだ。即ち軍事行政に代ゆるに今後は警察行政を以てしや

うとするのである。黄埔軍官學校は今日では昔の威勢はなく、時代は警官學校に移つて來た。現在の支那は矢張り軍閥が勢力を占めてゐる。從つて社會の安寧秩序の維持も軍隊を有する者の手に握られてゐる。そして、都會も田舎も警察力は全く微力である。しかし、それでい丶と思つてゐる者は軍閥以外にはないのであつて、此の狀態を改めなければならぬといふことは心ある政治家は一様に考へてゐることである。さういふ時代意識をともかくも或程度に具體化したのが廣東の警官學校である。さて此の結果がどうなるかは將來に俟たなければ分らぬことだが、少くとも時代の一轉期として注目すべき事柄だと思ふ。

其の警官學校長歐陽駒氏は、黄強氏とは正反對の印象を人に與へる人物であつた。同じく陳銘樞の股肱であつても、黄強は才氣煥發滿身智惠の固まりみたいで寸分油斷のならぬやうな印象を人に與へるが、歐陽駒の方は餘程ノンビリとした人道的な明るい印象を與へてゐる。政治には、善い意味でも惡い意味でも、明暗兩面のあることは事實である。陳銘樞の左右の腕として此の二人はとにかく面白い對照である。



廣東警官學校

廣東に易者があつて、大層其の易が中るといふので評判であつた。或時陳銘樞も人にすゝめられて其の人に易をみて貰つた。すると易者が「あなたは近い内に生命に係はる程の火難に逢ふ。しかし其の時勇敢に振舞へば生命に別條はない。と云つた。

民國十八年の冬、彼は夫人と共に香港の皇后酒店（クインスホテル）に泊つてゐた。すると夜半ホテルに火事が起つて、一階から二階へ掛けて猛火に包まれた。彼の部屋は三階であつた。其の時彼は易者の云つた言葉を思ひ出した。そして夫人に向つて、此處から街路へ飛び下りよと云つた。彼は先づ自分が飛び下りた。續いて夫人も飛んだ。やがて火は三

階から上を全部燒き盡した。

其の時、陳銘樞夫妻と同じ樣に三階邊から飛び下りた者が十幾名あつたけれども、其の中で助かつた者は彼等夫妻だけであつた。陳銘樞は脚を折り、頭部にも負傷したが、夫人の方は比較的輕傷だつた。夫妻は揃つて香港の病院へ入つてゐた。

其の時、南京では、廣西派の重鎭で、廣東省政府の主席であつた李濟琛が、中央政府に對する反逆罪の名の下に、突如として蔣介石のために監禁されてしまつた。李濟琛の失脚は、當然廣東に政變の起る前觸れであつた。果して五月になると、廣東省出身の陳銘樞、陳濟棠、陳策の三名が聯合して事を擧げ、それ迄廣東を握つてゐた廣西派と戰つて勝利を得た。其の結果、陳銘樞は廣東省の主席となつた。

其の頃、陳銘樞の負傷は、頭部は癒えたが、脚が癒り切らなくて漸う杖に縋つて步ける位だつた。すると丁度其の時日本の某といふ氣合術の教師が廣東へ行つて居たのを、或る日本人が陳氏にすゝめて治療を受けさせたところが、不思議に驗目(きゝめ)があつて忽ち杖を捨てゝ步けるやうになつた。前の易者の話や何かもどの程度まで事實か知らぬが、私は廣東でさういふ話を聞いた。

陳銘樞は廣東の合浦の出身だ。彼は嘗て日本に遊んで寺尾亨等が始めた法政學校で暫く學んだことがあるといふことだ。彼は特に親日派といふではないかも知れぬが、日本に對する十分な理解を有つてゐるやうに思へた。

今年五月九日の有名な國恥記念日に、廣東省黨部が發表した「告日本國民書」なる決議文は、從來かういふ時に揭げられたやうな感情的排外的な空文でなく、辛亥革命に遡つて日本と中國との關係から說き起して、血は水よりも濃しの譬へを引き、中國の開發は、日本の資本、技術、人材に俟つべきものが多々あることを論じて、然るにそれが日本に取つても何等利益をもたらさゞる二十一ヶ條の條約の爲めに阻げられて近年兩國間の親善を缺き居ることを遺憾であるとなし、最後に、解鈴還仗繫鈴人なる古語を引いて、惡條約を虎の頸に附けた鈴に譬へて喝破してゐるのは、條理を盡せる名文であつたと同時に、現在の廣東政治家の日本に對する理解の程度を說明して餘りあるものであつた。排日宣傳はどうかすると日本人自身のはふが多く宣傳することがある。國民黨や中國一般の政治思想も年と共に進化し、殊に實際的になりつゝある。此の際日本の識者も心頭を冷却して中華民國を見直す必要がある。

海門號の秘密

板倉卓造

九

秘密の情報を得て旅順口外へ急航す

斯る間に、ジエームスは海門號の傭船期限延長に關して考をきめねばならぬ時が來た。そしてモーバリー・ベルは期限延長の決定方を彼に一任してゐたのであるが、當時旅順口から得た情報に據ると、露國巡洋艦レトウイザンとザレウイッチとは實際に再び航海し得るやうになつたとのことである。之はマカロフ提督が今や日本よりも少し優勢な戰鬪艦隊を隨意に行使し得ると云ふことと、又どう見ても近く艦隊戰鬪が行はれると云ふ見込みがあると云ふことを意味するのである。此來らんとする艦隊戰鬪の見物こそ、彼が海門號利用の最大眼目であつたのだ。彼の報道機關の現在の能率と、又今もし海門號を解傭してしまへば同船はタイムスの競爭新聞の爲に取られるかも知れぬと云ふモーバリー・ベルの心配とは、ジームスをして斷然決意させた。即ち彼は香港の船會社に打電して、更に三箇月間傭船期限を延長することにした。夫れは可なり重大な責任問題であつた。と云ふのは、又更めて六千磅の負擔になるからである。併しトラファルガー以來初めての大海戰を報道し得る機會と思へば、彼の決定は正に當然のことであると考へたのである。

パッスモーア船長の晴雨計は彼を欺かなかつた。其豫示した颶風は四月七日に威海衛を襲ふたのである。夫れは凄まじく狂ひ吹き捲く暴風雨で、三日の間は海門號の出港も、黄海に於ける海戰も、固より問題にはならなかつた。天候の稍々回復するのを待つて、九日を以て出港した。翌朝の午前十時、仁川に投錨し、黒木第一軍に從軍するフレーザーを平壤へ送り屆ける爲めに、更に翌十一日朝、鎭南浦へ向け將に拔錨せんとした。其

時、突然日本警備艦大島の入港し來るのを見た。仍つて海門號は外波中佐が同艦に行つて指圖を受けるまで出帆を延期した。一時間許りして、中佐が歸つて來て祕密にジエームスに話す所に據れば、若し天候が今の調子で都合好くなつたら、日本側では旅順口外に二箇所の沈設水雷區域を設ける筈であるとのことであつた。

海門號は翌朝五時三十分、申分のない天氣に大同江の入口に當る徳嶼に到着した。船長の言を聞くに、午前三時、日本艦隊の或部分が緩漫な速力で航行してるのを通り過ごしたと云ふ。外波中佐とジエームスとは夫れが何事を指示するものであるかを知つてゐた。

『鎭南浦に到着すると直ぐ、外波と私(ジエームス)は扶桑艦へ行つた。細谷提督は至極愛想好く、そして海軍作戰上、私等が日本に役立つたと云つて、私を襃めそやすのであつた。彼は又外波に告げて、多分正午頃には私等に吳れる情報があらうから、短時間の通知で再び出帆出來るやう用意して置けと云ふので、私は海門號へ歸つて、船長に、正午を過ぎたら何時でも出られるやう機罐を焚いて置けと命じた。夫れから私は上陸して、陸軍の從軍通信員として私の資格證を携帶してゐるスタンダード紙のマックスウエルを尋ね廻はつた。其資格證は私が外波と相談の上、フレーザーに渡す筈であつたのである。私は舊友マックスウエルが通信員の一行と共に、前日私等がヴインセント大尉を置いて來た所と同じ茶屋にゐたのを見出した。マックスウエルが喜んで私を迎へて吳れたとは云へない。實際の所、彼は非常に私をいやがつてゐた。そして彼は私と私の船とは到底競爭が出來ない。何故かと云へば、彼が傭船の許可を申込むと、素氣なく撥ね付けられてしまつたからだと云つた』

歸途ジエームスは彼を探してゐる外波中佐に出會つた。中佐はたつた今受取つた情報より判じて、卽刻出港することが絕體的に必要だと云つて、大分騷いでゐる所であつた。そこでジエームスは乘船すると直ぐに、船長に半時間內に出港するのだと申渡した。船長は海圖室にゐたが、海圖の上へ身をこゞめながら、大同江の燈臺には點燈してないからもう遲い、今夜は其中途で投錨せねばなるまいと云ふので、ジエームスは外波中佐の所へ行つて相談した。中佐は是非とも其夜の內に外海へ出なければならない。猪島の北に近道があるから、江を下航する必要はないと敎へた。けれども船長は淺瀨をスッカリ乘り越すまでにはもう遲くなつてしまふから、水先案內なしには船をやりたくないと云ひ張るのであつた。併し實際、機關長が十分に蒸氣

を起せば、大同江の急潮流に乗つて、殆ど二十浬を出すことが出來るのだから、未だ明るい内に乗り越してしまへると思つたので、ジエームスは機罐の給炭を倍に殖せば、誰でも一人殘らず褒美をやると云つて見た。すると老バツスモーアは急に元氣を出し始めて、口の中では誰かゞ船に責任があるのだと云ふやうなことをブツ／＼つぶやきながら、行けと云へば直きにやつて見ると答へた。

次に起つた面倒はフレーザーのことであつた。フレーザーの出立振りと云つたら、夫れはとても悠々緩々なものであつた。それでジエームスは彼に君の小馬は今陸揚げされてゐるから、君は約五分間の内に船を出てしまはねばいけないと云ふと、フレーザーは大分氣短にジエームスに喰つて掛つた。ジエームスは乃ち夫れに相應しい調子で、

『フレーザー、君の小馬が出ると、其瞬間に僕等は錨を揚げるぞ、若し僕が出帆するのに、君が未だ船に殘つてるなら、君のタイムスに對する勤は之れ限りだぞ！』

此際ジエームスは手きびしくやらざるを得なかつたのである。分秒と雖も彼には大切な時間であつたのだ。併し彼は一見如何にも無理な命令をして、フレーザーを追ひ立てなければならない理由を洩らしてはならぬ義務があつた。それで頗る不氣嫌になつてゐるフレーザーに手傳つて、彼の荷物を何でもやたらに放り出し、そして訣別の挨拶をも待たずに、小馬の後から彼を艀舟の中へ押し下ろした。

錨は揚げられた。海門號はフレーザーの艀舟が纜を解かない内に、もう走つてゐた。夫れは太陽との競爭であつた。機關部員等も其氣になつて懸命に働いたので、大同江の潮流に乗つて矢の如く快速に走つた。船は可成り震動したが、ジエームスはカフーンと外波中佐と共に船橋に昇つて船長を激勵した。船の前方に最後の最大の危險な通路が見えた頃には、既に黄昏であつた。夜暗は迫つた。バツスモーアの氣力はもうフラ／＼になつてゐて、動もすれば其手を機關室の通報器の方へやらうとして、ムヅ／＼してゐた。

『今停めてはいけない。停めるにはもう來過ぎて居る。しつかりしろ！』

とカフーンが叫んだ。船は疾走して、邊り一面白銀の飛沫が散る。今こそやる時だ。ハツと思ふ間に暗黑の夜は來た。到頭やつてのけたのだ。四面暗澹たる闇夜で、前方は唯だ滿々たる大海であつた。ジエームスはバツスモーアの方へ振り向いて、彼の手をグツと握つた。羅針盤の光で、彼の帽子の庇の下に大きな玉のやうな汗が珠數繋ぎに滲み出てゐるのを見た。機關室へ

の通報器が鳴ると、船は經濟速力となつて、船長は彼等の古巣なる圓島に向け進路を取つた。ジエームス等は船橋から降りて來ながら、もう少しの處で海上保險會社がやられる所だつたと思つた。否な彼等自身も亦やられる所だつたのである。

翌朝四時、當直の船員がジエームスの室に來て、前方に若干隻の戰鬪艦が見えると知らせた。船橋へ行くと右舷の方に當つて、單縱陣をした六隻の戰鬪艦の黑影が朦朧と現はれて居る。是等の戰鬪艦は消燈して、海門號と殆ど同じ速力で航進してゐた。

十

露艦ペトロパウロスク沈沒とマカロフ大將の戰死

陽光麗かに曉雲を拂ふと共に、海門號は驚く可き壯觀の眞ん中に行つてゐたのが判つた。即ち彼等は日本戰鬪艦隊の中央にゐたのだ。右舷の方には三笠を先頭として、六隻の戰鬪艦、更に約六浬先きには日進、春日を先驅とした單縱陣形の第一巡洋艦隊が居り。側面には若干の驅逐艦隊がゐた。此全艦隊は海門號と同じ方向を取つて微速力で航走してゐた。二時間許り彼等は此樣にして進んだ。すると俄に日進と春日とは戰鬪艦隊に合す可く信號命令を受けた。此運動が完了すると直ぐさま、艦隊は全速力を以て旅順口の方向へ疾走し去つた。

海門號は其能力の許す限りの最大速力を出して、艦隊の跡を追ふたのであるが、軍艦に比べて其航走力の遲々たること、彼等に取つては實にじれつたい程であつた。海門號が出來る限り速力を出して跡を追ふてゐる間に、技師ブラウンが露國側らしく思はれる躁狂的な一無線電信を接受した。其電信の末尾に露艦バーヤンの名あることだけは判つたが、其他の文句は一切ちんぷんかんぷんだつた。ブラウンは判斷して此無線電信は旅順口の陸上電信局のものではないと云つた。ジエームスはマカロフ艦隊亦洋上に在りと即時に斷定した。斯う信じたからは石炭代はいくら掛つても構はんから、最善を盡して海門號を走らせろと、彼は機關長を鼓舞激勵した。

旅順口の前面に於て何事か起つてゐたかに就いて、今玆に正しい配景を記さねばなるまい。外波中佐が先にジエームスに内密に話した所に違はず、四月十二日に一隻の機雷沈沒船が、驅逐艦二隊と劣勢な一巡洋艦隊の掩護の下に海州を出發した。海門號が仁川から德嶼への航行中、通り越したのは即ち是等の軍艦であつたのだ。彼等は航行の時間を計つて、夜半頃旅順口沖合に到着するやうにし、其間に東郷大將は麾下の戰鬪艦隊と第一巡洋艦隊を從へて、十三日拂曉圓島に到着す可く航進した。同艦隊が其處に到着した時、海門號は初めて彼等を發見したのである。而して日本艦隊の豫定の計畫は、先づ右の機雷沈沒船

が旅順口前面の海上に機雷を沈設する。夫れから明け方になつて、劣勢な掩護船隊が海軍砲臺に對して無謀な冒險をやらない程度で、出來るだけ要塞の方へ進んで行く。するとマカロフは夫れに引掛つて此劣弱な日本側の攻勢を片付ける可く、彼の艦隊を率いて出て來るであらう。露國艦隊の出て來るのを見たら、敵が日本艦隊の中斷を試みんとして、追擊して來るやうに彼等を誘引する進路を取ることにする。之が露艦隊を機雷海面近くに引張り込む計略だ。若し此機雷海面をはづれて、尙ほ追擊して來たら、其處に待ち構へて居る東郷艦隊は、其主力を以て戰鬪を開始しやうと云ふのである。

露國艦隊は果して追擊に出て來た。そして日本巡洋艦を中斷しやうと努力してる内に機雷海面をはづれた。日本巡洋艦隊の司令官は、もう十分に露國艦隊をおびき寄せたと思つて、其旨、無線電信で三笠の東郷大將に通報した。而して海門號に居るジエームス等は此通報の結果を實見した。日本戰鬪艦隊は全速力で前方へ迫つて來たのである。

併しながらペトロポウロスク艦上のマカロフ提督も、亦東郷提督と同じく此無電を捉へたのであつた。彼が此暗號無電を解讀し得たものかどうか、又彼が單に怪しいなと感じただけであつたかどうか、固より知る由もないが、然も此無電の發せられると直ぐ、彼は追擊を中止して、俄に旅順口へ踵を返したのである。

海門號上のジエームス等の眼前に旅順口が展開した時、敵味方の兩艦隊をハッキリ見分けることが出來た。其時、露國艦隊は港口目掛けて一散に航走してる所であつた。すると突如として前方の露國艦列が亂れたと思ふと、後續の諸艦の艦首から、閃々たる火光が閃めいた。望遠鏡を持つてゐたカフーンは、流石に慣れたもので、

『奴等は機雷區域の中に入り込んだ。機雷を爆發させやうとして海中へ發砲してゐる！』

と云つたが、彼は續いて、

『アッ、先頭の露艦が顚覆してゐる！』

と叫んだ。

海門號は十浬の距離に在つた。其時、全く無風狀態で、眼界は完全に明瞭であつた。程なく大きな波紋が這ふやうに海門號の方へ押して來た。カフーンはジエムスの腕をムッと摑んで、そして其波紋を指さしながら云つた。

『君、あれが見えるか？　あれは大きな軍艦が沈んだのだ。あれが其波なのだ！』

ペトロポウロスクの沈沒に依つて起つた波の爲に、海門號は

實際、聊か傾斜したのである。

健氣なマカロフは此艦と共に沈んだ。そして露國海軍の希望も、彼と共に此遼遠の海底に消え失せたのである。

殘餘の露國艦隊が逃げ終はせたことは、海門號の彼等にハッキリ判つた。併し東郷大將は其威風堂々たる戰鬪艦隊を單縱陣に構へ、戰鬪旗を翻へしつゝ、尙ほ其まゝ立ち留つてゐた。キッカリ午前九時に旅順要塞の第一砲臺は火蓋を切つた。ジェームスは此機會を逸せず、短い報道を威海衞へ無線電信で送つた。

彼自ら記して曰く、

「私は敢て斷定する。之れこそ新聞の歴史あつて以來、戰鬪開始後一分間以内に、戰場から直接新聞社へ報道の送られた最初のことである。噫、夫れも私等の場合には又最後のことであつた。そして斯う云ふ機會は決して又と再び與へられぬであらうと、推定しても宜いかも知れない。

戰鬪の開始された時、私等は旅順口沖合十浬の所にゐた。然も地球の反對側に在るロンドンのプリンティングハウス・スクエアーのタイムス社への連絡は完全であつた。誰でも否定する者は否定して見るがよいが、實際それは新聞記者として大成功であり、又完全なる報道であつたのである。

四月十三日の事件は、海門號の眞の能力の最高潮に發揮された時と云はねばならない。又この事件の證明する如く、私の新聞記者の全生涯に於ける最大成功の日であつた。若し夫れマカロフ提督にして勇氣を振ひ起し、旅順口の逃げ穴へ逃げ歸るやうなことをしなかつたなら、私等は艦隊戰鬪の現場を實見したであらうし、又マカロフは今日尙ほ生存し、更に或は戰に勝つて、世界の全歷史を一變することすらあつたかも知れないのに、彼は遂に奮起せず、隨つて艦隊戰鬪も行はれなかつたのである。併し夫れは非常に興味のある海戰であつた。影響の及ぶ所、頗る廣大な海戰であつた。

私は東郷提督が之に依つて十分に露國艦隊の戰鬪力を奪ひ、近き將來に侮り難い出擊を試むるが如き機會を失はしめたと云ふ結論に達したものと思ふ。そして之と同時に彼は自分の目的の爲に、私等の海門號から受ける利益は、最早や取るに足らない程、減縮してしまひ、又是等の利益などは、彼の艦隊が戰略的行動を取つてゐる場合に、戰鬪區域内へ海門號のやうな汽船が現はれると云ふ不利益と比較して、差し引き損になることゝ考へたらしい。私は其後自分の行動に對して加へられた制限に照らして、斯く判斷するのである。」

軈て東郷艦隊は長距離射擊を交へた後、其處を引き揚げて東南に向つて去つた。日本艦隊が僞りの針路を取つてゐることは

明かであつたので、海門號は同艦隊を水平線の餘程向ふの方まで行かせて置いて、夫れから德嶼への行路を取つた。翌朝六時に德嶼を一巡し、同十時に鎭南浦に投錨した。ジエームスと外波中佐は直に扶桑艦上の司令官の所へ行つて、彼等の實見談を聞かせて喜ばした。

『其夕刻、私(ジエームス)等が碇泊してゐる間に、ブラウンは露國側の無線電信を傍受したので、私等は夫れを扶桑艦に傳達した。細谷司令官の恭僚は其暗號を解讀することが出來た。夫れはペトロポウロスクの沈沒と、其結果マカロフ提督の死んだことを報告したものであつた。私等は勿論一隻の戰鬪艦が沈められたのは知つてたけれども、其艦と共に露國艦隊司令長官が海底の藻屑と消えたと云ふことは初耳であつた。三月十六日、司令官は間もなく私等に呉れる情報があらうから、極く近くに投錨してゐろと信號で知らせて呉れた。私等は翌日まで旗艦と一緒に碇泊し、此間、小柄で快活な司令官を相手に時を過ごしたが、彼は自分達が一緒に愉快な時を送つた其記念として、美しい赤い滿洲狐の毛皮を私に呉れた。』

十一　露國極東太守の布告と日本政府の制限令

扶桑艦の親切な友人達に別を告けて、海門號は十七日午後三時十五分拔錨した。同六時威海衞のアサーンと接觸を取り、威海衞でジエームス等の爲に留め置いてあつた電信を續々接受した。然るに其中には愉快な便りは一つもなかつた。五通は同じ意味のものであつたが、是等の電報はロンドンのタイムス社、威海衞の英國艦隊長官、東京の英國公使、北京の英國公使及び東京のブリンクレーから別々に來たのであつて、其電文に據ると、露國政府は凡ての中立國に通牒を發して、今後露國は中立國船舶が新聞通信員及び無線電信機を搭載して、旅順口附近に出沒するを許さず、而して同政府は斯る通信員を間諜と認め、其船舶は戰時捕獲物として處分す可き旨通告したとのことであつた。該通牒の原文と云ふのは次の通りである。

『露國皇帝の極東太守は次の如き宣言を爲すに至れり。

中立國船舶にして遼東半島の沿岸、又は露國海軍の行動範圍内に於て發見せられたる場合、該船内に未だ諸條約中に於て豫示せられ居らざる機械を使用して、敵に情報を通ずる新聞通信員を乘するものは、該通信員を間諜と認め、其機械を搭載する船舶は之を拿捕し、戰時捕獲物として抑留せらる可し』

然るに斯くの如き裝置を施して居た船は、當時固より海門號だけであり、又その船に乘込んでゐた通信員と云ふのも、タイ

ムスのジエームス一人より外にはなかつたのであるから、此攻撃の矢の的が誰であるかは問ふまでも無い。マカロフ提督が海門號とバーヤンの邂逅後、直に此判斷を下すに至つたことは、此宣言の日付を見て分明であつた。

四月十八日午前八時、海門號は威海衛に投錨した。海門號が威海衛へ無事歸つたのを見て、友人達はスツカリ安心した樣子であつたと云ふのは、アサーンは模範的な技師であつて、情報の一言たりとも他人に洩らさなかつた爲め、多くの人々はジエームス等が露艦にテツキリやられてしまつたものと思ひ、又露國側が先づ最初に海門號を片付けて置いて、然る後に中立國政府へ前揭の通告を發したものだと、斯う信じてゐたのである。

其夕刻天津から上海行の汽船でモリソン（タイムスの北京駐在通信員）が到着して海門號に來た。ジエームスは次の日の拂曉、長崎へ向け出航する旨、命令を下した。

四月二十一日の朝九時頃、海門號は長崎港内の浮標に繫留した。少々機械を修繕する必要があつたので、一晝夜火を引いて置かねばならなかつた。

「しゆつ／＼と蒸氣の拔けて行く音を聞いて、私（ジエームス）は何となく背中に冷水を浴びせられたやうに思つた。こんな氣の立つた時であつたに拘らず、私は自分の力を失ひつゝあるやうに感じた。夫れは或は將に來らんとする、失望と困難の豫報であつたかも知れない。私は此騷々しい蒸氣の拔ける音が、洋上に於ける自分の活動に對する弔鐘のやうに考へられて、どうしても之を念頭から追ひ拂つてしまふことが出來なかつた。が、さう思つたのは間違ひではなかつた。夫れは後に述べる通りだ。

厭やな報知ほど早く知れ渡るものはない。入港してから一時間もたゝない内に、色々の知らせが雪崩のやうに續々到來した。第一の知らせは外波からで、彼は訪問先きの日本軍艦から、びつくりするほど早く歸つて來た。彼は軍艦で彼に宛てた次の文面の電報を受取つたのである。

「陸軍參謀本部は追ふて通知するまで、海門號が仁川、芝罘線以北に航行す可からざることを命ず」

續いてブリンクレーからも同じ意味の電報が來て、夫れから私が此意味を咀嚼してゐる間に、小舟が長崎の英國領事から亦同樣の通知書を齎した。

地圖を一目見れば、私の從軍許可の期限の餘日が、自分の新聞報道の見地から見て、如何に無用なものかゞ明白である。

私は前記の通知書を持つて自分の室に閉じ籠り、此思ひも掛けなかつた命令の意味合ひを篤と考へて見た。すると本能的

に其意味が判つた。私が結局、虻蜂取らずに爲つたことが火を見るよりも明らかであつた。一方には海軍當局、一方には陸軍參謀本部がある。日本は私に右の手で與へたものを、今や左の手で奪ひ取らうと云ふのである。私は一命をも投げ出して其一方の目的を手傳つた。他の一方に取つては私は何の役にも立たず、否な恐らくは邪魔者である。此禁止令に依つて、日本が將に遼東半島を孤立させる爲め、陸軍を上陸させる所だと云ふことが判つたのである。

私は勿論何の不服を申立てる理由はない。若し日本の陸軍當局が北陸軍作戰上、私を危險だと認めたなら、夫れを遂行するに當つて、一外人記者の便宜などにはかゝはつては居られないのである。併し私に獸やに不愉快な感を起させたことは一體私は自分自身の機械を以て、彼等の利益になるやうに今まで努めて來てゐるのだ。夫れが爲に日本側に取つて今後の作戰上不利を來すかも知れないと思つたやうな事柄は、敢て外波に許可を求めるまでもなく、凡てタイムス社には祕密にして送つてなかつたのだ。實際の所、外波は私の電報と海軍側の公報とを比べて見て、此點に就いては私の方が東鄕大將よりも、もつと用心深いと屢々評してゐた程である。

そこで、私は此問題を外交的に日本政府に訴へて解決しやうと欲した。

私には自分とタイムスの此薄幸なる船とが、日本の海軍當局と陸軍參謀本部との爭の元となつたものと思つたから、外波を東京に遣れば、彼は問題の眞相を見定めることも出來るだらうし、又海軍省高官の友人等の助力をも得て、仲裁策を案出することが出來るだらうと考へ、彼を東京に送ることにした。彼の考へでは夫れは出來るだらうし、又兎に角彼は親しく事情を知つてゐるのだから、全然根も葉もない不信の噂などは、論駁してしまふことが出來ると云ふのであつた。

斯う云つては陳腐の嫌ひはあるが、東洋人はどんな場合でも、時間の考へなどは伸縮自在なものである。日本では殊更らさうだ。何故と云ふに、一日本人をまあ午後の八時に晩餐に招待でもしたら、彼は恐らく約束の日の明け方に、もう君の家の玄關に來てゐるだらう。

處が二日と云つた外波はもう十日も東京に留つて居る。海門號の役に立つ十日の貴重な時日が失はれたのだ。彼が漸く歸つて來た時、從は解禁に就いては差し當つての見越しも付いてなかつた。併し彼は私等の雜問題の原因に關して、私の疑つてゐたことが事實であつたことを認め、尚は齋藤中將から、陸軍の獨裁者等の抑壓の手が緩められるまで、私がジッ

と辛抱してゐれば、中將は私が威海衛へ歸航した時分、恐らく何とか助力することが出來るだらうと云ふ意味の手紙を持つて來た。更に中將は、露國側では第二の出港準備をしてるやうな氣配を示してゐないから、私は艦隊戰鬪を見る機會を失ふものでないことを、私に知せて呉れた。其艦隊戰鬪こそ、私の海上に於ける重大な希望であつたことは、中將も能く知つてゐたのである。

夫れまでに私はもつと諦めが良くなつてゐた。夫れはモーバリー・ベルは日本當局に逆らふなと云ふ一事を、頻々訓令して寄越してゐたし、又露國側が前掲の宣言に關して、何國かの外交的抗議に動かされて發したと思はれる寛大な聲明にも依つたことであるが、其聲明と云ふのは、露國側では私と私の船とを戰時俘虜及び捕獲船として抑留することはあるが、間諜に對する極刑を私に加へるやうな意思はないと云ふ意味のものであつた。

齋藤中將から内密に送られた情報に依つて、私は黄海の自分の根據地に歸ることに決した。威海衛への航程は。溫度こそ下りつゝあつたが、天氣は晴朗であつた。アサーンとは百九十五浬の海上で接觸を保つた。私は海軍の狀勢動くと見て取る理由があつたから、船は夜間遠く陸を離れた航路を取り、例の古巣（圓島）附近に達するやう廻り道を行つた。處が其夜は凶變の夜であつた。日本海軍では露國側の機雷で初瀨を失ひ、更に深更に及んで八島を失つたと云ふ悲慘な夜であつた。新聞記者としての私に取つても亦悲慘であつた。と云ふのは、私は是等日本海軍の損失をタイムスへ報道することが出來ず、こんな事件は全く起りもしなかつたと云ふ風に、夫れを忘れてしまはなければならなかつた。

私は思ふに、責任ある新聞記者の職務遂行上に於て、重要なるニュースを持ち合せてゐながら、之をどうしても秘し隱しにしなければならないと云ふことほど、むづかしいことはない。其記者は秘密嚴守の約束で貴重な情報を貰つてゐるであらうし、私の此場合に於ける如く、若しあれを公表したらば、自分が共通の利害關係、又は夫れに類した關係に依つて束縛されてゐる人々の利益を害するやうな情報は、其記憶から抹殺し去る可く餘儀なくされることもあらう。それで是等二主力艦が一夜の内に失はれたことは、海軍作戰上の局面を一變した。露國側は今や復舊作業も著しく進捗したので、果して夫れと知つてゐたかどうかは疑問だが、東郷大將の率ゆるものよりも、少しく優勢な戰鬪艦隊を旅順口に擁することになつたのである。彼等の情報機關が初瀨の沈沒を嗅ぎ付けたかも

知れぬと云ふことは、正にあり得べきことであつたが、併し八島の運命に就いては之を知る可き手近かな方法がなかつた。冷靜に打算すれば、此一隻の軍艦だけが現存するか否かは、露國側をして海軍狀況の判斷を一決せしめたかも知れないのである。

日本側は此圖らざりし戰鬪力減少に鑑みて、今や滿洲沿岸に於ける大規模の上陸作業に沒頭し、瞬時と雖も艦隊戰鬪を挑むやうなことは望まなかつた。そんな行動に出ることは陸上作戰全部が危機に瀕してる今の場合、一種の博奕をやるやうなものであるからだ。

夫れで若し露艦隊を旅順口内に閉込めて置きさへしたら、日本では依つて以て同艦隊を無害ならしめやうと望んだ他の計畫があつたのだ。此日本の興敗に關する海軍の祕密を嚴守す可き件に關して、外波が東京から種々の通告を受けてゐたことは私も知つてゐた。彼は當局に對して、夫れは信用出來る人物の手に在る旨を保證することが出來たのである。

海門號は五月十七日威海衛に歸着した。アサーンは一日千秋の思で待ちわびてゐた所だつたので、其歸着を非常に喜んだ。海門號が遠く長崎に行つてゐる間、彼は其暇に任せて、彼の無電局に達した種々の無電暗號を研究してゐた。日本軍艦からは無數の電信が來るし、又威海衛には英國軍艦アンドロメダとフィーヤレスが居り、其極く近所にはレヴァイヤサンが居ると云ふ具合であつたから、是等の軍艦から發する無線電信は、甚しく混信狀態に陷つた。以前仁川にゐた一イタリー軍艦は今芝罘に來てゐたが、其無電が殊に一生懸命になつてアサーンの局を呼び出すので、一層無線圏内の發信を混亂ならしめてゐた。併し唯だ獨り旅順口の露國無線電信局のみ、靜かに沈默してゐた。

所謂「一時的」の禁止令は早や其十四日目にもなつたので、ジエームスは以前にも增していら〳〵し出した。プリンクレーとの間に電報が頻に飛んだ。日本の海軍當局者が其戰鬪艦沈沒に關する大切な情報をも洩らさなかつた事を、もう知つて居る筈だから、彼等は陸軍の主腦部に對して、彼の誠實と善意とにもつと信用を置くやうに說き付けることが出來るだらう、とジエームスは密に思つてゐた。處が夫れは全然空頼みであつた。ブリンクレーからは辛抱しろと云ふ忠告の電報が數通來たが、併し他人の金を一日百磅も使つて辛抱してゐると云ふのは、ジエームスに取つては辛い仕事であつた。

夫れから海門號は今一度洋上に出た。丁度その頃旅順口は日本上陸軍の爲に完全に孤立させられてゐた。再び威海衛に歸つ

て見たら、プリンクレーからジエームスに宛てた電報が屆いてゐて、カフーンの日本艦隊從軍の件は許可になつたから、出來るだけ早く同人を仁川に送れと云つて來たのである。そこでジエームス自身は威海衛に留まつてクラブに居を定め、海門號はカフーンを乘せて、其日の午後出帆した。

船が港を出ると、入り違ひに一隻の支那商船が漂然として何處からか入港して來た。

十二　『タイムスは賣物ぢやありません』

其夕刻、彼はクラブで夕食をすませてから、其晩はみつしり仕事をしやうと決心して、丁度帳簿に向つた許りの所へ、支那人のボーイが彼に會ひたいと云ふ一人の紳士が尋ねて居ると知らせに來た。ジエームスは夫れは沖に停まつてる軍艦からの友達だと思つた。處が一見して外國人と判る背の高い男が、大股に彼の室へ入つて來て、名刺を差出し、そして彼の手を握つた。ジエームスは客に椅子を勸めつゝ、其名刺を一見した。『男爵ルバヴィン』其宿所は上海とあつた。客は完全な英語で話し始めた。

『私は貴下にお目にかゝらうと思つて、今夕着いた船で上海から參りました。重要な件に就いてです。死活的重要と申しても差支へありますまい！』

彼が一寸休んだ時、ジエームスはあゝさうですかと云ふ風に頭を下げた。

『全く卒直に申上げませう。實は私はロシヤの間諜です。支那に在る諜報部に勤めてるのですが、御承知のやうに旅順口の我要塞は孤立となりましたので、クロパトキン將軍が日本の占領軍を破るまでは、旅順口と通信する方法がありません。處が幸に貴下は此地に無線電信の設備を持つてゐらつしやる。夫れで私は旅順口へ送る此短い暗號電報を所持してゐるのですが……』

と云つて彼はポケットから數字の暗號で書いた一紙片を取出した。夫れは六百語乃至八百語以上はないらしかつた。

『若し之を打つて下されば、私は之を貴下に差上ける權限を與へられてゐるのです』

さう云つて彼は他の一方のポケットから、大きな銀行紙幣の札束を取出して、テーブルの上に置いた。ジエームスはびつくりして其大金を見た。之は膽を潰すやうな厚味のものであつた。ルバヴィン男爵は我意を得たと云ふ風にうなづいた。

『極く短い電報ですよ。で此札は英貨二萬磅あります。宜しいですか、之は非常に重要な電報です。此金をお受け下さい

ますか、之は貴下のものなんです」ジエームスは斯んな大金を見せ、突然催眠術にでもかゝつたやうな氣になつた。正氣に歸るまで、可成り時間がかゝつたと思ふ程面喰つてしまつたのである。應答が出來る位に正氣付いた時、ジエームスはハッキリ云つた。

「男爵、貴下は間違つてゐらつしやる。貴下はタイムスを買收しやうと爲さつてゐますが、タイムスは賣物ぢやありません」

自分等の會見は終つたと云ふことを暗示するやうに、ジエームスはスッと立上つた。すると其ロシヤ人も亦立つた。彼は慇懃と云ふよりも、寧ろ甘言を以つて釣り込まうと云つたやうな調子で、につこり笑ひながら、

「貴下こそ誤解してゐらつしやる。私は之を差上げて、タイムスの御意見をどうしやうと云ふのではありません。唯お願ひしてゐるのは、二三分間許り貴下の無線電信機を使はして戴くだけのことです。タイムスとは何の關係もありません。唯だ貴下と私と兩人間の小問題なのです」

男爵はテーブルから札束を取上げて、ジエームスの方へ出した。

「男爵」ジエームスは可成り無愛想に云つた。

「夫れは同じことです。此際私がタイムスです。タイムスは買收されません。さようなら」

此ロシヤの男爵は暫く突立つた儘、ジエームスの顔をジッと見てゐたが、

「電報は非常に大切なものです。ですから私は其報酬金額を增しませう」

「男爵、お願ひですから此處を立去つて下さい。私は貴下と取引きをする身分ぢやないんです」

ジエームスは彼を玄關まで追ひ出した。庭へ出た時、彼はもう一度口說かうとしたが、ジエームスは到頭彼を追拂つてしまつた。

ジエームスはつく〴〵考へた。あれほど仰山な金を持つてゐる男は、自分に取つても危險だつたが、併し二萬磅とは、どんな正直な人でも容易に動かせさうな大金である。さう思ふと同時に、彼は突然帽子を冠り、上着を着て、夫れからポケットの内へピストルを忍ばせた。其夜彼の目指す所は丘陵の頂上に在る無線電信局であつた。

無線電信局まで登つて行くのは殺風景でもなかつた。時はもう夏の季節で、夜の情景は心地よい趣きがあつた。無線電信柱の下へ建てた小屋へ辿り着いたのは、もう夜も十一時頃であつ

たらう。技師室には燈が灯いてゐた、窓から覗き込むと、アサーンは受話機を耳に懸けたまゝ、寢臺の上に寢轉んでゐた。海門號は洋上に出てゐたのだが、彼は電話機に通ずる色々樣々な騷音の間に眠つてゐても、海門號から來た時だけは起きることの出來るやうに、自分で慣らしてゐたのだ。ジエームスは彼を起こす必要もなかつたので、要害の地點に陣取り、徹夜寢ずの番の仕度をした。

半時間許りたつと、俄然誰か近寄つて來る足音が聞えた。五分許りして二人連の姿が夜の暗がりから、ひよつこり現はれた。

『止まれ、男爵。其處から少しでも局の方へ來てはいけない。私は武裝してゐますぞ！』

『大佐、私の申し出を御再考下さいましたか、ほんに些細の電報ですがねえ』

『再考の要などありません。私はどうしても貴下に私の局へ侵入して貰ひ度くないのです』

二人の男は踵を旋へして、そしてうねくねした小徑を下りて行つた。もう一人の男が誰であつたかは判らない。

ジエームスは其丘の頂上で、遙に遠いく東方に、太陽が壯嚴な燦然たる光を輝かして登るまで、孤影寥然として寢ずの番をしたのである。

昨夜見た支那商船が其翌日の朝早く、又洒然として芝罘と天津へ向けて出帆した。ルバヴィン男爵――若し夫れが彼の本名なら――は夫れに乘つて行つた。技師のアサーンはジエームスがあの物凄い幾時間を無線電信局の外で見張つてゐた事などは全く知らなかつた。彼は夫れほど安らかに眠つてゐたのである。ジエームス後日記して曰く、

『出來事は私に非常に深刻な印象を與へた。私は今が今まで、日本に對する自分の信用に、こんな危險が襲ひ來る可能性があるとは想像も及ばなかつたのである。私は私の技師の誠實を疑ふやうな理由は微塵もなかつたが、其誠實を動かす爲に、あんな大金が使はれることもあるなぞとは、私の人生觀には全然なかつた。人間の性質と云ふものは、之に附隨する弱點と共に過去未來を通じて、常に變りはあるまい。私の心は非常に動搖した。そこで私の云つて置かねばならないことは、此ことがあつてから後は、私は日本陸軍當局の態度を、そんなに辛いものとは思はなくなつたことである。（モーバリー・ベルが私への一齊論中に本當に云つた通り、日本は私の名聲や、タイムスの金などよりも、更に無限大の危機に直面して居たのであるからだ』

ジエームスは例の男爵が沿岸航路船で去り行くのを實際に確めた後、クラブに歸つて、そしてグッスリ氣持よく寢込んだ。午後遲くブラ／＼と無線電信局へ登つて行つて、アサーンと無駄話をした。アサーンは二百浬を距てた仁川灣に居る海門號と通信を交換してゐたが、彼は何氣なしにジエームスに取つては興味のあることを洩らした。

『誰かゞ又旅順と通信をし始めたらしい。夫れは極く近所だつた。芝罘よりも遠い所ではないと思ふ。普通のマルコニー式だつたやうだが、其通信は數字の暗號だつた。私は其初めの方の二三語を取つて置いた』

彼は約二十語許り書き付けた紙片を、ジエームスに示した。芝罘は威海衛から航行僅か二時間許りの所である。ジエームスは昨夜の秘密を打明けなかつた。アサーンは確に何事も知つてゐなかつた。併しアサーンの今云つた言から推して、あの男爵の所謂、頗る重要の電報が、包圍中の旅順の目的地に遂に送達されたことが想像される。

ジエームスはアサーンに海門號からの電信に氣を付けるやう注意して、再び元來た丘の小徑を下りて行つた。其の時はもう殆ど暗くなつてゐた。丁度今しも市場から買物を持つて、せつせと登つて來る支那人の料理番と通り逢つた。續いて之まで數回ホテルの邊にウロ／＼してゐるのを見たことのある一ヨーロッパ人が、彼を待ち構へてゐるのと不意に出合はした。其男は當時この地方には珍しくない大抵の支那開港場あたりをうろついてゐた得體の知れぬ者共の一人であつた。其男が一つの提案を持つてゐた。彼は旅順の要塞で缺乏してゐると思はれる食料品を、多數のジャンクに積込んで、封鎖を破る準備をしてゐると自ら語つた。時しも濃霧の季節が迫つてゐたので、彼は凡ての用意を整へて、一番初めの都合の好い濃霧の夜に乘じ、海に乘り出さうと云ふのである。そこで海門號で其ジャンク隊を八十浬許り曳き船して呉れないか、若しやつて呉れるなら、一千磅やらうとジエームスに談判を始めた。

此申込みを聞いて、ジエームスは愕然として氣が付いた。之は自分は自分の職業を穿き違へた。大新聞に對する責任ある一個の通信記者として、其任務を盡しもしないで、黃海の沿岸邊で海賊の相手になりすますなんて——で此男に對し彼は一刀兩斷の決答を與へた。すると彼はスッカリ落膽してしまつた許りでなく、ジエームスの拒絶を聞いて、本當にびつくりした模樣であつた。併し其時には海門號が出帆してから、ハッキリ十二時間は經過してゐたのである。

南方行の沿岸航路線は又上海行のモリソンを乘せて來た。同

船は僅の時間しか寄港しなかつたのであるが、ジエームスは此賢明な同僚と篤と相談を遂げる機會があつた。モリソンは露國男爵の一件を、若し日本側が知りでもしたら、彼等は現に君に對して締めきつた扉へ、更にもう一本の辛張棒をかうだらうから、之は君だけの胸に收めて置いた方が良いと注意した。彼等が別れんとするに際し、モリソンは兩の眼を瞬きしながら斯う言つた。

「夫れは素晴しい大金だつたね。一生涯年に千磅づゝか。併し其札と云ふのは本物だつたかしら。此沿岸地方には大部贋札があるからね」

モリソンは二三日中に、又威海衞に歸ることを約した。

先きに前章中に、五月十七日に海門號が威海衞に歸つた時、洋上の日本軍艦や港内の英國軍艦から發する無線電信が入り亂れて、一時混信狀態に陷つた所に、芝罘にゐるイタリー軍艦の無電が、殊に一生懸命になつて海門號を呼び出すので、一層通信を混亂せしめたと云つたが、其頃山海關には北京と通ずる無電局があつて、夫れは往年の拳匪事件以後設けられたもので、之も亦イタリー人の管理の下に在つた。斯くて日露戰爭が終つてから、數年後、ジエームスの一友人がイタリーを旅行してゐた時、其友人は當時高速度自動車界に評判を取つてゐた或年若き金持のイタリー人と知合ひになつた。段々親しくなつて行く裡に、或時右の金持のイタリー人は其ジエームスの友人に、タイムスのジエームスを知つてゐるかと尋ねた、そして此若きイタリー人の云ふ所を聞くに、彼は曾てイタリー海軍にゐて、日露戰爭中には極東に居り、無線電信士官としてジエームスの海門號とは幾度交信してゐたこともあつたが、彼は其戰爭中、思はぬ金儲けをして、夫から間もなくイタリー海軍を退いたと云ふのであつた。後日この話を傳へ聞いたジエームスは、「其所謂思はぬ金儲けと云ふのは、威海衞の海軍クラブで、昔、丁汝昌が自殺したと云ふ同じ室の私の机の上に、數分間置いてあつたあの金ではあるまいかと、私は屢々一人で疑つた。」と、其話の節々が餘り符合するのを密に怪んだ。併し之は後の物語りで、海門號の記事は再び元に返へる。

五月三十日早朝、海門號は威海衞に歸航した。外波中佐も乘つて來たが、カフーンは後に殘つて、仁川に留まつた。海門號は日本海軍の命令した制限區域内で二日間許り巡航して見たが、遼島沿岸を周航したに拘らず、結局徒勞に終つたので、六月二日又威海衞に歸つた。ジエームスと東京との間に交換された幾多の電報は、發明の解禁が差し迫つてゐるやうな形勢も見えなかつた。夫れに彼の腦裡には既に日本軍部に對する不快な疑

間が起つてゐたので、愈々傭船引渡しの爲め、香港へ電報を打つ決意をした。之は彼に取つて實に切ない思であつたのであるが、併し現狀の宙ぶらりんの行動を徒に續けて行くのは、無用に大金を浪費するものだと、ジエームスは考へたのである。

芝罘から出帆の手續をすませて、海門號は威海衞へ向つて航行した。七時十五分、同港に入港し、ジエームスはアサーンに最後の指圖を與へ、午後八時港外に出て、彼は自分の活動舞臺を其最後の見納めに望み見たのであつた。

次の日、山東角越に彼は海上の海門號から、タイムスへ送る最後の無線電信を打つた。

『南方への航海中は實に心地良い天氣であつたが、私（ジエームス）は直覺的に新聞通信の補助物として此船と、其無線電信設備の效用は、もう其過程を終つたのだと云ふことを感知した。私は成功した。そして成功の中に失敗した。私は勝利を博した。そして勝利の裡に破れた。或程度まで諦めの心持は、モリソンと二人であの氣持の良い夏の天候の下で、海門號の甲板を歩いてゐる間に湧き起つた。多分私は疲勞してゐたのかも知れない。大抵の場合、戰地で特派通信員を勤めるのは、一人前の仕事として澤山である。然も是等の任務の外に、私は船主としての氣苦勞や責任があつた。様々な昂奮と絕間ない辛苦の裡に、或反動が來た。夫れを私は日本へ歸る無聊な航海中で感じたのである。

八月八日の黃昏、私等は瀨戶內海の入口に橫はる六連島に達した。翌日の朝まで水先案內を得られなかつたので、神戶には十日まで着くことが出來なかつた。私等は海門號を神戶に殘し、汽車で東京へ歸つた。

私は其後唯だ一度海門號を見た。私が九月の下旬、遼陽戰の後、ピー・オー會社の船で歸英の途中、海門號は香港に來てゐて、私の船と竝んで船渠に着いてゐた』

左翼教授辭職の裏面

眞木 鐵

去る七月十二日の東京朝日新聞に、小さくではあるが、『平野山田兩助教授辭職』といふ見出しで、次の如き記事の出てゐたのを、讀者はまだ記憶せらるゝであらう。

『東京帝大法學部助教授平野義太郎同經濟學部助教授山田盛太郎兩氏は、さきに辭表を提出したが、教授會の承認を經、文部省でもその手續をとつたので、こゝに兩氏の辭職を見ることになつた。

なほ、今回の兩氏の辭職の理由は、某事件に關係ありといはれ、責任上辭表を提出したものであると傳へられ、學界各方面から注目されてゐる。』

また、七月十五日には東京日日新聞にも『教授辭職頻々』と題して次の記事が出た。

『某事件に關係してその進退を注目されてゐる人々のうち學界に籍をおく人としては東大法學部助教授平野義太郎氏、經濟學部助教授山田盛太郎氏が十二日付で辭職許可となり、同時に東大醫學部助手小宮義孝氏も辭職した。また最近他界した小林丑三郎博士の息で專修大學教授小林良正氏も先月限り同大學を辭職して以後同大學と無關係の位置についた。(下略)』

いま、これらの人々の辭職について、自由に筆を執ることが出來ないことを、甚だ殘念に思ふ。

しかし、回顧すれば、左翼教授の烙印を刻せられて講壇を追放された人々は、既に十數氏を以てなほ餘りがある。それらの事件の一つ〳〵を拾つてゆくうちに、何故に、またいかにして、平野山田教授等が辭職しなければならなかつたか、その輪廓が——たとへそれがソフト・フォーカスであらうとも——讀者の瞳底に映じて來ないとは限らないものでもあらう。

◇

赤化教授として大學を追放された最初の人は、大正八年秋、東大經濟學部の機關雜誌『經濟學研究』に『クロポトキンの社會思想の研究』を寄せた東大助教授森戸辰男氏であらう。この論文の末尾にクロポトキンが×を否定した文章が引用してあり、それが當局の忌諱に觸れて、朝憲紊亂に問はれ、森戸助教授及び同誌の編輯署名人であつた助教授大内兵衛の兩氏は起訴され同誌は發禁になつた。是が森戸事件といつて八年の暮から九年にかけて、大きな社會問題化し、世論紛糾を極めたことは讀者御承知のこと。當時は社會運動の勃興期であり、吉野博士によつて點火されたデモクラシーが思想界を風靡する時代でもあつた。森戸事件が投じた一石は學問の獨立問題、危險思想問題等種々の波紋を社會に描いたが、上杉愼吉博士等の興國同志會を除いて讀者は

あげて當局の彈壓に反對し、大學の自由のために此の新人を辯護する風があつた。しかし、司法當局の態度は頑强で、兩氏は文官分限令第十一條第一項第二號によつて休職を命ぜられ、刑事裁判の確定と同時に失官及び位記返上といふことになつた。森戸氏は三ケ月の禁錮に處せられ九年の十一月に入獄した。

これが表面の事實で、さてその裏面話であるが、森戸氏は問題の論文以外に、度々クロポトキンに關しては研究を發表してをり、强ひて問題化しなければしないで濟んだものである。しかし、社會思想の黎明期に新人の急激な論議は、保守的政治家のよろこばないところである。それにお灸をすえる意味で、原内閣の對思想政策の犧牲になつた觀がある。最初、司法當局が文部省に迫つた時は、森戸氏が謹愼の意を表するならば起訴を差控へるところまで讓步する意志があつたのだ。それは時の東大總長山川健次郎男が、事件以前に森戸氏を召喚し『もし君が此の際謝狀を一札入れるならば、問題にしないやうに、大學は文部省を通じて司法當局に諒解を求めよう。だが、君があくまで研究の自由を高唱して應じないならば、大學は君を保護しないであらう。』と言つたことでも明らかである。

森戸氏は、大内氏とも相談した。また二三先輩の意見をも訊ねた。が、森戸氏はもともと生一本な純情の人である。大内氏もまた熱情家だ。そして共に若い。學問の自由のために殉職するといふ悲壯な感激が、膝を屈しても大學に止まるといふ打算的な考慮を蹴とばしてしまつた。森戸氏の極めて戰鬪的な返答に接して、總長や學部長は事が穩便にすむやうに望んでゐただけに頗る狼狽した。山崎博士が矢作榮藏博士と二人して、本郷の本屋を殘らず步いて『經濟學研究』を買戻して廻つたことなどはこの間の挿話である。同誌が市場に出てさへゐなければ危險思想も流布しないのだから、買戻せば萬事が糊塗出來ると信じてゐたのだつた。

「それにしても、現に大原社會問題研究所員として、いまだに高校生的氣分がぬけず、各種社會思想のカクテルに醉つてゐるやうな森戸氏にして、起訴を以て脅かさるゝも屈せず、敢然として難に赴いた態度こそは、後世社會思想家の特に肝に銘ずべきことであらう。

◇

大正十二年には早稻田大學から、佐野學、猪俣津南雄の二氏が追はれてゐる。その直接原因は十二年六月に發覺した堺利彦氏を首盟とする第一次日本共產黨に、兩氏が中心人物として加盟してゐたことにあるが、間接には、それ以前から折紙附きの赤化教授として、兩氏が睨まれてゐたことにある。

佐野氏は當時早大商學部の講師で、經濟史を講じてゐた。傍ら勞働運動にも關係し、その進步的な言說は、若いワセダニアンの心臟に觸れるものがあり、北澤新次郎教授の商學部における人氣を一擧にして作つた形にあつた。そして大山郁夫教授と共に、學生の急進分子を結成した思想團體早大文化會を指導し、學校當局からは社會主義的色彩の強い教授として目せられてゐた。しかし當時にあつては、多少社會主義的であるといふことが、早大としても學生の人氣を呼ぶ一つの手段になり得たし、その上佐野氏は文學部の元老金子馬治博士の女婿でもあつたから、特にどうといふことはなかつたのである。

が、學生の間にあつて暗默のうちに對立する陣營——急進派と保守派——を形成しつゝあつた二つの潮流がつひに表面に出て大きな鬪爭を演ずる日が來た。それは十二年五月十日に、發會式をあげた早大軍事研究團に對して、文化會と建設者同盟とが合體した文化同盟が反對し、その式の當日、來賓の石光第一師團長、白川陸軍次官、古川教育局長等の祝辭演說を彌次り倒し、團長青柳篤恒教授の挨拶には『青柳恥を知れ！』『軍閥に學閥を賣るか！』などの罵言をあびせて滅茶苦茶に會を破壞してしまつたことである。ところがその直後、中央校庭で軍研反對の學生大會が開かれたところ今度は武道選手を中心とする保守派の縱横クラブの猛者が暴れこんで來て、大亂鬪を演じた。この兩者の對立は、學校當局の調停で喧嘩兩成敗となつて漸時鎭まつたが、文化同盟の指導者を佐野氏と睨んだ當局は、同氏が講師の職にあることをよころばず、保守派の學生を動かして辭職を勸告せしめたが、氏は頑としてこれに應じなかつた。

ところが、一方では共產黨組織が進涉してゐた。二月の千葉縣市川における會合、三月の東京府下石神井における黨大會が、祕密裡に行はれ、その祕密文書を佐野氏が保管することになつた。そこで氏は、まづ絕對安全だと思はれる早大の研究室にこれを隱しておいたのである。けれども學園内の思想的對立が激化して、佐野氏自身が屢ゝ保守派學生から襲擊さるゝ危機に頻するやうになつては、萬が一を保障しがたい。で、一時これを他所へ移さうと考へて、かつて鑛夫總聯合に關係してゐた當時、信賴してゐた若い勞働者某にあづけた。某は自分が重要書類を託されてゐるといふ感激から、一種の革命家的昂奮に醉ひ、同志を下宿に集めて革命歌を高唱した。そこを官憲に踏みこまれた。取調べの結果不穩と見て、突如、檢事局と警官隊は早大に佐野氏の研究室を襲ふて、有力な證據を探索したのである。これは大問題を惹き起し、學の獨立研究の自由を蹂躙したところから、學內では學生大會の示威となり、學外では三宅雪嶺博士の如き思想界の元老組までが演說會に出て反對の叫びを高めた。

が、當局の檢索の結果は、つひに共產黨組織が暴露し、六月五日早曉の大檢擧となるのであるが、逮捕命令に先手を打つて四日の午前佐野氏は講義中面會に來た男と、緻密な尾行をまいて、その夜のうちに陸軍中尉の軍服姿に變裝して上海に脫出した。——上海からロシヤへ。

此の失踪事件で、早大における講師の職は難なく免職となり、早大との緣は切れた。此の當時の岳父金子博士は、心痛の餘り、ひどい神經衰弱となり、一時は講義不能を噂されたほどであつた。

佐野氏と同じ共產黨仲間の猪俣津南雄氏は早大を出て米國ウイスコンシン大學に留學し歸朝後母校に迎へられた人である。當時はやはり講師で、政經學部に經濟學を講じてゐた。我國學生運動史に特記すべき文化同盟對縱橫クラブの抗爭には、文化同盟と共に反軍國主義運動に參加した。また一方、左傾運動の理論的指導者を以て任じてゐたので、官憲側からもその行動を注視されてゐた。學校當局も猪俣氏の存在は、學生の思想運動をして益ゝ尖銳化せしめる要因と見て、一時外國に再遊せしめて騷動を緩和しようとした。猪俣氏には鄉國越後にパトロンがあつて、その出資で

洋行して來たのだ。學校が再遊學を勸めるのも、勿論此のパトロン氏の出資を考慮に入れてのことである。

しかし、氏にその意志がなく、當局と睨み合つてゐるうちに、檢擧された。檢擧の當日は氏は平素の如く早大の講壇に立つてゐた。そこへ官憲が、少し取調べたいことがあるから至急面會してくれと名刺を通じた。氏は學生達に向つて『一寸待つて下さい』と傳へて教室を出た。そして取調べが一應すんでから再び教室に戻つて來て、講義を續行した。その間、氏の顏色は何ら變ることなく、終始冷靜そのものゝやうであつたと語り傳へられてゐる。

氏が收監される直前、最後の取調べが終ると、檢事が氏に『今日はこれで終ひです』と語つた。で、氏が歸宅しようと廊下に出ると、バラ／＼と刑事が出て來て、『先生、本廳の方へどうぞ』といふ。氏が『これから歸へるのだ。晝御飯もまだゝから』と答へると、それでも不可んといつて手を引つぱらうとする。押問答の末に、刑事の一人が『では、先生にはこんなものが發せられてゐるのですが……』と言つて懐中から氏に對する收監狀を出して見せた。

その後、氏も佐野氏と同樣簡單に免職になつた。元來、早大には當時まで教師の任免に關しては確乎たる規則が設けられてゐなかつた。これは早大が東京專門學校時代から財政の關係で專任の教授をおくことが少く、大部分は講師で間に合はしてゐたからである。從つて佐野・猪俣兩氏の處分も、事件の性質とはいへ、特にそのために教授會を開くといふやうなこともなく、殆ど事後承諾的に免職の件を通知したものである。しかし、このことがやがて、多くの教授間に、徐々に教師の任免をなすべからずの輿論を喚起せしめる動機となつた。後に昭和二年の大山教授辭職問題に至るまでに、官立大學とほゞ同等な細則が制定された。これは此の事件の副産物である。

◇

大正十五年の春には、法政大學からも赤化教授を一名出した。それは京大の河上門下で政治研究會に關係してゐた小林輝次教授である。政治研究會は十一年七月山川均氏によつて提唱された『方向轉換論』の具體化したものだ。多くの知識分子がこれに加入してゐた。十四年十月の臨時大會には、同研究會が無產政黨の組織大綱と綱領原案について、市川正一、佐野文夫氏らの評議會系の最左翼と、鈴木茂三郎、黑田壽男氏らの山川派との對立となり、まさに解散の運命を胎んでゐた。その時再選された中央委員の中に、小林輝次氏が加へられてゐたのである。だが、氏自身としては不承諾で、任命を肯じなかつた。しかしこの事が學校當局に知れ、また、氏がかつて入營中に社會主義者として、過激の言動があつたといふやうなことや、野坂鐵氏の產業勞働調査所にも關係してゐることなどが判明して、それが理由で、辭職を强要せられた。

その裏面には、氏が同大學の平貞藏、友岡久雄の諸教授——主として『社會思想』の同人——と思想的感情的に對立し、加ふるに小林氏のかなり常識を缺いだ言行が、全般的に不人氣を買つてゐたことなどが、有力に作用してゐたことをも見逃してはならない。

◇

昭和二年の劈頭には、大山郁夫教授の辭職問題で、早大は再び大騷動を惹起した。表面に現はれた經過を言ふと、大正十五年の十一月社會民衆黨の創立に際し、中央執行委員長に就任した安部磯雄氏が、早大教授を辭任して講師の職に就いた。同時に、十二月の勞働農民黨の大會では中央執行委員長にあげられて受諾した大山郁夫氏も、早大教授の職を退くべきであるといふ論が起つて、十二月十四日附で大山氏は辭表を高田總長に宛てゝ提出したのである。ところが學生間に大山教授留任運動が猛烈に起り、當局がこれを阻止せんとして彈壓方針を執つたのが却つて學生の反抗の氣勢をあふり、大山氏も學生の熱誠に感激して辭職を飜意し、黨首と教授の兩立論を眞向にふりかざして、翌昭和二年の一月一杯を學生と共に鬪ひとほしたが、數度の教授會の結果大山教授辭職勸告派が絕對多數を占めて可決され、氏は早稻田と訣別するのやむなきに至つたのであつた。

この裏面史を辿る場合、早大の事務理事で總長の實際上の事務を一手に掌握してゐる法學博士田中穗積氏の獨裁過程を中心として、考察しなければならぬ。田中理事は、新聞記者出身ではあるが、極めて保守的傾向の人物で、思想的に大山氏と相容れないばかりでなく、將來は有力な總長候補として學園の內外に聲望のある大山氏をそのまゝにしておくことは出來なかつた。大山氏の擡頭を看過することは、それだけ自らの支配圈を縮小することであるから。

無產政黨が結成されて、その黨首として大山氏が街頭に進出したことは、田中理事にとつて絕好のチャンスであつた。まづ、大山氏が辭職すべき下地をつくるために、溫厚な人格者安部氏に教授を辭せしめた。その時の安部氏の提出した辭職理由書が面白い。意味は社民黨の委員長になつたので「一日も學校を休まないといふ主義」に反するから、といふのだ。誠に主義に忠實な先生である。

一方、大山氏の方は、多年恩顧を受けた高田總長から口說かれて、辭表を提出した。これが一月十四日の教授會に上提されたところ事の急なるに驚いた教授間に、大山教授留任[illegible]正式の手續をとつてゐないといふ名目で、安部氏の分だけを先に採決して散會した。

此の時、大山氏に辭意のあることが學生間に洩れてゐた。熱烈な大山黨は、次の教授會までの間に、大山氏に飜意せしめねばならないと、猛烈な留任運動を喚起し、有志は自邸に押しかけて泣いて留任を懇願した。

大山氏もまた情熱の人である。留任そのものが黨首受諾と理論的に何ら背馳しないものであることを考へると、いさぎよく留任を決意した。よろこんだ學生團は、教授と黨首との兩立論を教授會に通過せしめるために、專斷な田中理事の排斥運動に主力を轉向した。大山教授辭表提出の裏に田中理事の魔手の動いてゐることは、敏感な學生達の既に氣づいてゐるところであつたから。

ところが、學校當局は疾風迅雷的に事を處決しようとして、二十二日の理事會では、二十四日緊急教授會を召集することを決した。この理事會の空氣と、當局の意志とを傳へるために、高田老總長は自ら大山邸を訪ねた。二十三日の午後である。懇談數刻、總長は大山氏の人格と思想とを惜しみ、しかしながら司法當局や文部當局の壓迫も愼重に考慮しな

ければならぬことを說き、左翼無產黨の首領を教授におくことは、どうしても不可能であることをくり返した。だが、つひに妥協點は見出せなかつた。辭せんとして總長が思はず洩らした一言は、大山氏の胸を針の如くつきさした。『自分も近く總長をやめたい。何の貢獻もなくやめるのは嫌だが、最後に味噌をつけてやめなきあならんのか……』

總長を送り出した大川氏は泣いてゐた。『多年恩顧を受けた高田先生のためには、どんなことでもしたい、しかし、今日のやうに問題が社會的なものとなり、かつ、自分の確信と隔離してゐる場合には、どうしても贊同出來ない。熱湯をのむ感があるが、兩立論を死守するのみだ』と側近者に語つてゐた。

二十四日午後三時からは恩賜館で教授會が開催された。大山氏を除く十七名の教授が出席したが、激論深夜に及んで、一票の差で留任希望者が勝を制した。そして大山問題を十日間保留して、其期間內に大山氏と當局との間に一致點を見出さうといふ案を可決した。

この會議中、窓外では學生大會が開かれてゐた。田中派の曖昧教授を葬れの叫びが怒濤の如く窓ガラスを震はした。夕暮頃には、臨監の警部補が追つぽり出されたほど、學生の示威は凄かつたのだ。

ところが、その日の深更、緊急理事會が召集され、田中理事は教授會の決議を無視して、一擧に事を決すべく、廿六日に教授會を召集する件を可決して、鹽澤政經學部長の名で召集令を發せしめた。廿六日までに、大山氏を支持する教授の切りくづしが猛烈に行はれたことは言ふまでもない。

翌廿五日召集令に接した學部主任の高橋清吾教授は、聲明書を發表して、廿四日の教授會の決議を蹂躙して、かくの如き突然なる召集令は、主任として承認し難いからとて、主任の職を辭任した。また商學部の北澤新次郎教授も當日聲明書で大山教授を留任贊成の意を表明した。しかし、これらはすべて學生の人氣取り策であると目せられて、却つて學生の反感を強めてしまつた。殊に前者の高橋教授は、田中理事の廻し者といはれてゐた。大山教授と當局との妥協案にも、學生側と接衝しながら、學生側の支持する兩立論を却けて大山氏の黨首辭任若しくは講師として殘ることを主張したことなどが、益々高橋氏をして不利な地位に陷れてゐた。

廿六日は愈々即時採決に入る最後の教授會である。外には熱狂した學生大會の嵐がある。嚴重な警戒裡に午前十時から恩賜館の三階で開かれた。出席教授は學部長の鹽澤昌貞博士をはじめ、高橋清吾、平沼淑郎、林癸未夫、三木保幾、阿部賢一、煙山專太郎、服部文四郎、副島義一、內ケ崎作三郎、青柳篤恒、淺見登郎、中野、本多、梅若、宇都宮の全部で十六名の教授、高田總長も今日傍聽者として出席してゐる。

前回の教授會では一名の差で留任派が勝つた。今日の採決では、何名が田中派のために切りくづされたか？　內ケ崎、副島の二教授が、大山教授の留任交涉委員としての報告をすませた後、無記名投票で採決に入つた。結果は？

辭任贊成	十四票
辭任反對	一票
白紙	一票

それから、滿場一致で大山教授の早大における多年の功勞に對して、感謝の意を表する

ことを可決した。

右の投票のうち、辭任反對の一票は阿部賢一博士で、白票は二木保幾教授であつたさうである。ともあれ、大山教授は教授會から辭職勸告を受け、ついに正式に辭職の手續をとつた。

こえて二月十日には、學生の大山教授送別會が舉行された。大山氏はあくまでも兩立論の原則を説き、かつ熱涙をふるつて恩師高田總長に對する氏の苦衷を披瀝した。感激の極にあつた學生らは、委員の提案によつて此の送別會を、學校行政の改革運動に向はせるため、即時、學生自治同盟の發會式に移らせた。

この同盟の出現には、當局も一歩を先んじられた形であるが、一週日の後、突如首謀學生九名に對して退學處分の通告を發した。(讀者よ。何故送別會のことまでクドクドしく書くかに怪しまれるであらう、が後の大森助教授の事件のところまで、この日のことを記憶してゐてほしい。)

◇

九州帝大でも、昭和三年の四月に三教授と助手一名とを赤化教授として浪人市場に送つた。即ち、法文學部の佐々弘雄、向坂逸郎、石濱知行の三氏と、助手の塚本三吉氏。

九大では、その前に同じ法文學部教授間の感情鬪爭に端を發して、山内一郎、風早八十二、瀧川政次郎、杉野原舜一、木村龜二、東季彦の六教授が馘首されてゐる。この時、所謂赤化教授の三氏も若干内紛問題に關係があり、佐々氏の如きはその一方の領袖であつたのだが、休職を免れて存續した。そこで少なからず大學當局にとつては、注意人物だつたのだ。

大體において、九大は保守的な教授の多いところだ。そこへ法文學部の創設委員長だつた東大の美濃部達吉博士が、新人會出身の急進氣鋭の連中を澤山教授として採用した。例へば向坂逸郎氏などは、東大經濟學部の助手時代、森戸事件以來左傾に脅え切つてゐる山崎學部長が、助手室を見廻つて、助手の讀む本を祕かに調べたところ、向坂氏のマルクス張りであつたことに驚き、美濃部博士に推薦▶[illegible]助教授の任命を決すべき教授會では本人の希望で九大へ行くことになりましたと報告したさうである。

そこで、前記の三教授が圓滿に他と伍してゆく筈がない。高田保馬、藤澤親雄、大森研三等の所謂反動學派と目せられる教授達との間に事每に反目してゐた。つまりは、兩者の間に介在して、緩衝地帶をなす自由主義の教授が少ないことが、兩者の對立を一層尖鋭化したともいへるのである。

ところで、三・一五事件が突發した。多數の純眞なる學生が事件に連座したことは、指導教育の任にある教授が左傾してゐるからだとの理由で、水野文相は各帝大總長を招致して、左の五教授に對して斷乎たる處置を執るやう嚴命した。

東京帝大助教授　大森義太郎
京都帝大教授　河上　肇
九州帝大教授　向坂　逸郎
同上　石濱　知行
同上　佐々　弘雄

なほ此の外に東北帝大の鈴木義男・新明正[illegible]授を指名されてゐたが、小川總長の[illegible]で文部當局は却下した。

――で、九大では三教授が追ひ出されねばならない。大工原總長が急遽福岡に戻つて來た時分には、教授間にあつてもその事が問題となつてゐた。哲學の四宮兼之教授や宗教學の佐野勝也教授の如き、純情で比較的自由主義的な人々は、無暗と彈壓を加へることに憤慨してゐた。そして三教授が護りたいと焦つてゐたが、何らの闘爭理論をもつ人でもなく、かつ初めて接した事件とて、熱意はあつてもどうしてよいか迷つてゐる態度であつた。

が、總長の歸へるのを待つてゐた評議員會は、直ちに三教授に依願免職を強要することを決議して學部長をして傳へしめる手筈になつた。

一方、三教授の方では内紛事件以來、狹い天地でイザコザを續けてゐることに嫌氣がさしてゐた頃である。いつでも城を明け渡すつもりで、その辭職強要の決議のあつた日は、石濱教授の自宅に集つて雜談してゐた。そこへ新聞記者が訪問して、評議員會の結果を報告してくれたのである。ソレと知つて、辭職が餘儀ないものならば、こちらから先手を打つて辭表を叩きつけてやれと、その場で辭表を認ためた。そして少し氣の毒には思つたが、學部長の春日政治教授を石濱氏の家まで呼びつけたものだ。春日氏は國文學者で極めて氣の弱い人である。新聞記者から追ひ廻されるのに弱り切つて、その日は同僚の家に夜おそくまでかくれてゐたくらゐだ。早速、石濱氏の家につくと、慌てふためいた恰好で『こんどはお氣の毒で……』と言つたきりペシヤンと座つてしまつた。

大學當局が發表した辭職要求の理由といふのは、餘程頭をひねつたものらしい。思想がマルクス的だといふのでは、大學そのものが第一困る。そこで理由の發見に苦しんだ揚句が『三・一五事件に關係あるものと推定す』といふのだ。三・一五事件に關しては、司法當局から召喚されない筈の者が、關係ある者と推定される理由がない。だが、辯明は一切ゆるさぬといふことであつた。

この事件で附記すべきことは、土地の新聞に關してゞある。福岡日日新聞は政友系であるから、政府の方針を支持し、大學當局の處置に百パーセントの贊意を表してゐた。九州日報は民政系で「福日」の競爭相手でもあるから、當局の處分に反對し、三教授を擁護する筆法に出てゐた。面白いことは、辭職する教授に感想を訊きに來た時、向坂氏が大工原總長の無能と政府に對する屈服的態度とを痛罵したところ、翌日の新聞に大きな見出しで『腰の弱い大工原總長』とデカ〲と書かれたので、總長は口惜しがつて激怒したとのことだ。もつとも大工原博士は農藝化學の專攻で、思想問題などは扱ひ馴れない一面もあるが、他の總長に比べて上り氣味な點がないでもなかつた。例へば京大の荒木總長は、河上肇博士の俸給を一級に昇したり、東大の小野塚總長事務取扱は、大森助教授の昇給手續が間に合はなかつたので手當を倍額にしたり、それ〲優遇方法を考慮して、おちつきのある餘裕を示してゐる。そこへゆくと大工原總長は何らの方法も講じなかつたので、辭職した側では東京に引上げる旅費の當面にさへ弱つたさうである。

◇

京大の河上肇博士の辭職は、比較的よく世間に知れ渡つてゐるから、簡單にする。四月

十六日荒木總長が文部當局の嚴命を受けて東大に戻つて來ると、經濟學部長神戶正雄博士を招いて、河上教授に辭職强要の件を密議した。法學部などの反對を慮つて、直ちに翌十七日に經濟學部の教授會を開催した。この教授會の顏觸れを見渡したところ、河上教授を除いた殘りの七教授中、まづ反對をするであらうと思はれる强硬論者は河田嗣郎博士一人ぐらゐのものである。河田氏は日頃から河上氏の支持者でもあつた。ところが運惡く（？）河田博士は大阪商科大學の創立委員として下阪中であつた。大切な教授會であるから出張中と雖も近いところではあり召還すべき筈だと思はれるのに、河田氏の欠席のまゝ教授會は開かれ、滿場一致で辭職案に可決してしまつた。留守をネラつてやつたものとして、他の學部あたりでも非難のあつたのは、無理もないことのやうに思はれる。

辭表を出してしまつた直後の河上氏は、流石に沈痛な面貌で、書齋の一角を睨んでゐた。そこへこれも運惡く（？）弟子の小林輝次氏が東京から訪ねて來た。小林氏の顏を見るなり博士は無氣鋭く「僕は二十年來勤めた大學を今日限りやめて感慨無量のところなんだ。こんな深刻な感慨でゐる時に、フラ〳〵とやつて來ることがあるかッ』と御機嫌頗る斜だ。避易した小林氏は、そのまゝ逃げ出して弘文堂の二階で晝寢してゐたさうである。

それから、も一つ。河上氏は大學をやめると、もう大學の誰とも顏を合はさない。研究室には澤山の藏書や書類が置いてある。これを自宅に移さなくてはならないのであるが、同僚なんかに顏を見られるのがイヤだ。で、皆のゐない日曜日をえらんで荷車を引つぱつて行つた。しかも此の日は朝からひどい雨で、いかに潔癖家の河上さんらしい面目が躍如としてゐる話とはいへ、手傳はされた者はたまらない、と弟子の一人がコボしてゐたものである。

◇

東大の大森助教授は、西の河上博士と一日遲れた四月十八日附で免官になつた。その前日の十七日午前十時から東大構內大講堂の一室で、最高評議會が開かれた。いふまでもなく小野塚總長事務取扱が、文部省の腹を聞いて來たので、その報告並びに對策についてである。此の時の光景は實に異常の緊張を示してゐた。入口には立番を附し、一步も近寄らせぬ嚴重さである。小野塚博士をはじめ各學部長及評議員廿一名、學生監及び文部省からは西山專門學務局長の出席を求め（西山氏はかつて東大書記官として學內の事情に精通してゐる）、新人會の解散及び經濟學部の助教授大森義太郎氏の辭職勸告の件について、協議を重ねた。つまり事の外部に洩れることを防ぎ、絕對秘密裡に事をはこぶ算段であつた。大森氏の方も新聞記者を避けて、數日間市內の某所に潛伏して、友僚教授と前後策に腐心してゐた。ところが十七日になつて、家のことも心配になるので、鎌倉の自宅に歸へると鎌倉驛に張つてゐた「東京日日」の學界擔當のT記者につかまつた。T記者は大森氏と面識があるので逃げられない。Tから評議員會その他の切迫した事情を聞くとジッとしてゐられなくなつて、大森氏はそのまゝ東京に引返した。友僚たちと最後の態度を決するためである。その汽車の中で、Tは「東日」の鈴木茂三郎氏が大森氏に至急會ひたがつてゐる

ことを傳へて、有樂町で下車して大森氏を東日の應接室に入れてしまつた。鈴木氏と大森氏とは政治研究會時代からの親友で、今回の選擧問題についても鈴木氏の意見を訊く必要があつたのである。鈴木氏との會談後、本鄕の某氏宅で友僚教授（助教授山田盛太郎氏外數名）と會合し、そこで大森氏は辭表を書いて、午後十一時を過ぎて小石川の小野塚博士邸の門を叩いた。T記者の乘る東日自動車がクッついて來たこと勿論である。そのため翌日の東日朝刊には「昨夜深更辭表提出」と大きく出てしまつた。

十八日は午後一時から教授會である。河津學部長をはじめ、山崎覺次郎、矢作榮藏、森莊三郎、土方成美、本位田祥男、荒木光太郎、上野道輔、矢内原忠雄、舞出長五郎、大内兵衛、中西寅雄、河合榮治郎の全部で十三名の教授出席、規定によつて助教授は人事の處分問題に入つた場合には、席から退くことになつてゐる。しかし、大森氏は東日の記事に關して、一身上の辯明をしたいと退席しなかつた。そして四圍の客觀的狀勢の切迫から大學の沒落を說き、研究の自由の領域が極度に狹められたことに及び、むしろかゝる大學を棄てゝ、自由なる天地で實際運動に從ふこそ自分の本意であるから辭表を出したと述べた。

その時、教授會では中立的態度を持する人物として一般から思はれてゐた河合榮治郎教授が起つた。そして大森氏に、何故職を賭して當局と一戰を交へないのであるか、自ら退却するのはマルクシストの態度ではない。その點に多大の不滿があると詰問した。蒼白の顏で、興奮のためか身體がブル／＼顫へてゐた。しかし、大森氏は沈默してゐた。大内、中西の兩教授が起つて、大森助教授を辭職に至らしめた大學は、何らかの責任を負ふべきではないか、との意味を述べ、土方教授は本人が辭表を出すなら、辭職せしめてもよいではないかと簡單に片づけた。そしてすぐに採決に入つた。數日前の形勢では、相當の激論が豫想され、三分の二の決定數を獲得することが出來ず、大森助教授の辭表は宙に迷ふのではないかと危ぶまれたが大多數で辭表受理に一決した。

そこで、何故、あの鬪爭的な大森氏が、一戰を交へずして退却したか？　學生間でも相當に、大森氏擁護運動が叫ばれてゐることではあり、四月廿七日の東大學生大會の決議には、その一項に大森助教授の復職要求が掲げられてゐる。新人會の滅亡と共に、戰つて散つてこそ大森氏の面目ではなかつたか？　だが、次のやうな事實もあるのだ。三・一五事件前から、日本新聞あたりが、しきりに大學の赤化教授を問題にしてゐた。そして文部省の方針では、遠からずそれらの教授に對して處分をしなければならないとの腹を決めてゐた。たゞ、その機會を待つてゐたのみだ。吉野博士退いて後は、小野塚總長の學内行政顧問は、河合榮治郎教授であるが、此の河合氏が大森氏に、言動を愼まないと幹部の間では處分するといつてゐるよと忠告したことがあつた。そして、もし大内教授や山田助教授がそれに對して辯護するならば、同じ赤化教授として處分される方針らしいと附言した。河合氏は一高時代から大森氏のよき先輩であつたから、大森氏は河合氏の忠告を信じてゐた。

しかし、萬一そのやうな場合があるとした

ら自由主義者の河合氏は、大學の自由のために奮起してくれるであらうか？ 此の點を確かめるために山田助教授は河合氏を訪問して訊いたことがある。その時河合氏は『自分としてはそれは出來ない』と逃げた。

それから間もなく三・一五事件だ。文部當局の態度は絕對的な強さで、高壓的に、處分を迫つて來る。かうなると、大森氏を支持して戰ふことは、所謂赤化教授の一味として一束にして處分される機會を自らつくるやうなものである。大森氏が友僚教授たちと、屢〻祕密裡に會合したのも、それを斷るためであつたらしい。

時日は急迫して四月十八日になつた。河合氏から大森氏に手紙で、今日の教授會の前に二人で小野塚總長事務取扱を訪問しようではないかと申しこんで來た。大森氏は、同僚の意見を求めこれを拒絕することにした。河合氏に帶同されて小野塚博士を訪ふことは、何らかの諒解運動に行つたもの〻如く世間體には取られる。それは河合氏に有利であつて、大森氏には不利である。しかも[illegible]深更に、小野塚博士と大森氏との會見の結果は、明らかにその無意味なることを、看取出來るものであつたのだから。その夜、小野塚博士は大森氏の身邊を語つた。それは大森氏以外にも文部省から處分を指令して來てゐる赤化教授なるものがある。大內、山田、矢內原、平野、末弘の諸氏だ。今、大學當局は、これらについて防備の陣を張るに努力してゐるが、但し、大森氏だけはその陣の外におかれてゐる。たゞ大森氏が、今後決して實際運動に携はらないと誓ふならば、護つてやらうといふにあつた。大森氏は今後とも正しいと信ずる一途に進む以上、實際運動をやります。そのためには辭職を覺悟して來ました。といつて懷中の辭表を取り出して博士の前においた。博士は默してそれを受けた。

十八日の教授會で、辭職が決定されると、大森氏はすぐに聲明書を出した。それは小野塚博士の前や教授會で述べたのと、大體同じ意味のことであつた。河津學部長もステートメントを發表した。曰く――『自分の知れる限りでは、文部省あたりから東京帝大に對し[illegible]。また總長や學部長から大森氏に對し彈壓をしたこともない。從つて所謂大學の威信といふものは犯されてゐないと思ふ』(下略)

若し、大森氏が、何と言はれても辭表を出さず、知らぬ顔をしてゐたら、果して『大學の威信』とやらは保たれてゐたことであらうか？

こゝで少し長くなるが、六月七日に學生主催の大森氏送別會が、開催に先だつて學生監から禁止されてゐることを附記しておかう。早大の大山教授送別會が、突如として學生自治同盟の發會式に變形した事實に鑑みてのことである。鬪爭は兩者の戰術を、漸次に進化せしめるものだ。

◇

昭和四年春の宇都宮高等農林學校で、林學博士鏑木德二教授と服部實教授の二人が休職になり、平井廉夫・横川次郎の兩教授が免官になつた。四教授とも表面は左傾教授だからといふのであるが、これは內部の暗鬪が、文部省の思想彈壓政策に辭職の形式をかりたものだ。果してこれらの四教授を左翼教授と目すべきかに對しては、甚だ躊躇せざるを得な

い。

　が、その直接原因となつたものは、學生の左傾運動に類するものである。同校農政經濟科で出してゐる『經濟ニュース』と題する定期パンフレットが、學間の性質上勢ひ社會科學の領域に及ぶことがあり、それが田舍警察をして神經過敏ならしめた。それから手をつけて調べてみると、前記の教授を指導者として、研究會を開いてゐるので、一網打盡、學生十七名を拘留して取調べた。中に非常に急激な思想をもつ者を發見したが、その學生の言動は治安維持法に抵觸せしめ得るものであつたので、學校に通告して起訴猶豫にすることにした。學校當局ではそれらの學生をそれぞれ處分したが、同時に責任者として前記の四氏に自決を迫つたものである。この裏面を少し洗つてみると、校長の佐藤義長博士は明治廿一年の東大出身といふ古い人物、萬事に保守的で、その代り自分の學校は、親族緣故者で固めた同族學校といふやり方だ。常に校長側の教師と、進步的な反校長派とに別れて喧嘩をする。ところで鏑木德二博士は反校長派の巨頭で、清廉で正直な人である。しかし思想的には別に進步的ではない。他の三教授は新人で、マルクシストではないが、リベラリストだ。そして反校長派だ。

　今回の問題は、この若い三教授が研究會などに關係してゐた。そして鏑木博士は校友會學術部長である。多少の關係はある。これが校長並びにその派の奇貨とするところであつた。反校長派一掃のチャンスだ。佐藤校長は、上京して山崎文部次官に會見し、文部省の思想取締方針を嚴守して、彼等左傾教授を放逐すると申告したものである。司法當局が學生の前途を考慮してその處分猶豫をなす場合にも文部當局と學校當局とは、斷乎として處分をなする場合がこれである。しかも校長自身は、かくの如き多數の左傾教授(?)を出しながら何ら責任を問はれてゐないのが、なほさら奇怪である。

◇

　宇都宮事件に前後して、東大醫學部の助教授國崎定洞氏が、やはり左傾教授の一人として免官されてゐる。極めて秘密裡に進行した事件である。國崎氏は社會衞生の專攻で、橫手千代之助博士の研究室にゐた。助教授になると間もなくドイツに留學したのだが、洋行前に、社會思想の洗禮を受けてゐた氏であつた。ドイツでは共産黨の運動に接近し、その黨員の美しき婦人タイピストと戀におちた。國崎氏は感情の純粹な人で、殊に女性に對しては餘りにも初心である。他の留學生のやうに滯在中だけヨロシクやつて、後は棄てゝ歸へるといふことが出來ない。留學の期限が切れたが、愛人と別れることが出來ないのと、共産黨の運動そのものに深入りしたことゝで、容易に歸朝することが出來ない。

　かねて氏が共産黨に入つて活動してゐるといふことはスパイの報告で日本にも知れてゐる。東大では眞相を確かめ、かつ氏の眞意を訊くために、醫學部長の林春雄博士がはるばるドイツまで出かけて行つた。表立つては海外視察に名をかりて三年九月下旬にシベリア經由で出發してゐる。會つてみた結果が、國崎氏の志の動かし難いことを知つて、遂に處分に出たのであつた。最近東大の助手を辭職した小宮義孝氏は、國崎氏の後繼で、この研究室にゐたのであつた。

◇

昭和五年に入つて、冒頭に片鱗を出しておいた平野助教授等の辭職事件がある。これは今のところ記述に苦しむが、次のことだけは發表して差支へなからう。

平野義太郎、山田盛太郎、小林良正の三氏は同窓關係で、かつ思想的にも一致してゐること。

平野、山田兩氏が、前述の諸事件を通じて見らる〻如く文部當局の睨んでゐる赤化教授であること。

平野助教授の洋行問題の紛糾した時に、小野塚總長事務取扱が、平野氏に今後決して實際に携はらぬとの一札を入れさして、文部當局の諒解を求めたといふこと。

山田助教授は、東大でマルクスの資本論を講義のテキストに採用しようとして、經濟學部教授會をして一騷動起さしめた人。

以上の三氏が今回の辭職の背後には、當局が動いて三氏が××さる〻やうな材料を握つてゐること。

××××が文部當局を通じて、大學當局に處分方を命じて來た形勢のあること。

おとなしく辭職するならば、××を差控へるのではないかと思はれるふしのあること。

小林氏は明大の教授を即時にやめたが、專修大學の方では實權を握る道家齊一郎教授一派の小林教授に對する彈壓政策に憤慨して、學生の代表者が大學當局に詰問に行くと、言ふだけ言はせておいて、そのま〻刑事に學生を引渡したこと。等々。

◇

さて、以上の事實を通觀して、讀者は自由主義なるものが、現在の大學において既に亡んでゐることを痛感されたであらう。思想的に尖端をゆく優秀な智識分子は、漸次大學を追はれて、大學が形骸化すると共に、浪人市場は益々汎濫して賑はふことになる。それは德川幕府時代の官學にひとしい大學が出來上る。眞に時代を導く陽明學や勤王學や蘭學は、林大學頭などによつて主宰される官學からは生れなかつた。今日のブルジョア科學は[redacted]はまさに蘭學の地位にある。官學と私學の區別は、大學が官立であると私立であるとの區別ではないのだ。

だからして、賢明なる讀者は早大にあつても帝大にあつても、思想に對する彈壓の方針と態度とがひとしきものであることを察知されたであらう。森戸事件以來、或る場合には互に反撥し合ふかの如き觀のあつた三つの强權――司法當局、文部當局、大學當局――は、その據つて立つ××の性質上、つひに同一××の形を變へた派生物に過ぎないことを自ら悟つたのか、急速に、合流の過程を辿りつ〻ある。今回の平野助教授等の辭職事件などに至つては、その完全な三位一體ぶりを示すもの〻やうだ。今後頻發するであらうところの此の種の事件について、吾々は何人かの手によつて、より詳細に、より正確に、此の間の消息が暴露さる〻日を來るであらうことを期待する。

海軍お家騒動の總勘定

水野廣德

◎不得要領の參議會決議

歸朝入京の日あれ程盛んな國民の歡迎を受けた若槻軍縮全權が調印した「倫敦條約」に對し、日本海軍に於ては新聞の活字が目を廻はすほど頻繁に巨頭會議とかゞ開かれて、揉みに揉み粘りに粘り遂に國寶的元帥までがサイレントアドミラルの名を裏切つて所謂「强硬なる意見」を開陳したる揚句、漸く軍事參議會に於て

「倫敦條約の兵力量は軍備作戰上不充分なるも同條約は短期間なるを以て國防計畫を樹立し得るものと認む」

といふことに意見の一致を見たと云ふことである。何といふ不明確な不徹底な、そして又不得要領な文句であらう。例へて言へば、「あの女は容貌が好くないけれども短期だから仕方がない辛棒する」と云ふのと同樣である。

元來兵力の必要は戰爭に備ふる爲めである。結婚第一の目的は子孫を設ける爲めである。縱令容貌が惡るからうと女房とする以上は一年を出でずして子供が出來ることもある。同樣に兵力量は不充分でも軍備が對立する以上は戰爭が何時起らぬとも限らない。若し軍事參議會に於て條約期間たる五年間は戰爭が起らぬものと斷定するならば倫敦條約の兵力量に對して文句を付ける必要はあるまい。もし又戰爭が起るかも知れぬとするならば、作戰上不充分なる兵力を是認することは軍事當局者殊に天皇の軍事諮詢機關として無責任の至りと言はねばならぬ。且つ又短期なるが故に補充の途があると云ふのは全然無意義である。短期なら補充が出來るが長期では出來ないと言ふことは恰も短期なら避姙が出來るが長期では出來ないと言ふのと全然同

一で、科學的論理は皆無である。

であるから此軍事參議會の決議意見なるものは、前半が合理なれば後半は不合理である。後半が合理なれば前半は不合理である。卽ち合理と不合理と、同時に成立し能はざる二つの命題を「も」の一字に依つて繋ぎ合はしたるものが此決議であつて、前半は加藤軍令部長の體面を保持する爲め、後半は財部海相の責任を回避する爲めに苦心慘憺無理に捏つち上げたる其場治めの彌縫に過ぎないとしか思へない。

◎軍縮會議と兵力量

倫敦條約そのものに對しては旣に幾多の人々に依つて種々の方面から縱論橫議し盡され、贊否交〻の名論卓說が數ヶ月に亙つて多くの新聞雜誌を賑はしたので最早や蛇足を加ふる必要はない。要するに軍縮會議なるものは參列各國が各軍事上の見地より割出したる最少限度の兵力量を互に讓歩して協定を成立せしむるか、否らざれば各國が其の最少限度とする兵力量を固執して會議を決裂せしむるかの二つの外は無いのである。言ひ換ゆれば各國は兵力量の滿足か條約の成立か、何れか其の一方を採ばねばならぬので、兩者を同時に護持することは絶對に不可能なのである。故に各國の表明せる兵力量の最少限度なるものに掛値が無いとすれば、一方に於て條約の成立といふことは他方に於て兵力量の不足といふことを必然的に意味して居るのである。卽ち條約の是認は自ら兵力量不足の是認であり、兵力量の滿足は自ら會議の決裂を意味して居る。故に日本の海軍が兵力量の不足を唱ふることは條約否認の意思表示と認めねばならぬのである。

之に反して海軍が兵力量に滿足したる時こそは卽ち倫敦會議の決裂したる時である。倫敦會議決裂に因る必然的產物が各國の海軍擴張競爭であることは殆んど疑ふの餘地はない。それは倫敦條約が成立してすら尙ほ種々の口實を設けて軍備の増勢を圖る國の存するに徵しても明らかである。若し倫敦會議が日米の意見不一致に依つて決裂したる場合には、兩國の海軍競爭熱は感情的に一層激烈なるものがあるであらう。世界を擧げて不景氣の嵐吹き荒び、產業は萎微し、農村は疲弊し、百萬の失業者は都鄙に滿ち、政府の財政すらも不安なる我國今日の經濟難を以てして、米國を相手に海軍擴張の競爭などが出來るであらうか。財部海相は全權として渡英の途中米國で、

『海軍費を豫算から取ることが出來ない場合には、畏くも御手許金から支出すると言ふのである。……』

と大に見得を切つて[illegible]記したさうであるが、それは恐らく誠

であらうと思ふ。倫敦會議の決裂は直接に必然に我國經濟を破誠に導かずには措かぬであらう。政府が國家内外の大局に鑑み、若干の兵力量を犧牲とし軍縮條約を成立せしめたるは誠に已むを得ざる適當の處置と云ふべきである。しかも犧牲は各國の等しく拂へるところで、獨り我國のみが拂はされたのではないのである。

斯くの如く倫敦條約の締結は事理極めて明白で、政府は正に爲さゞるべからざるところを爲し遂げたのである。我國民が若槻全權の勞を多とし熱誠なる感謝を以て其歸朝を迎へたることは、國民が同條約を是認せることの表現に外ならない。いかに軍備萬能病に捕はれたる軍人と雖も、殊に世間から海軍の巨頭とか呼ばれて國家の重きに任ぜる者にして、倫敦會議の決裂が如何に重大なる影響を我國に及ぼすかを知らぬ筈はない。然るに彼等の或者が執拗に頑强に兵力量の不足を唱へて國防の缺陷を叫び、結果的に倫敦條約を破棄せんとするのは何故であらう。少しく遡つて討檢する必要がある。

◎妥協案に對する軍部の見解

軍部の巨頭連とても恐らく軍縮協定の成立を好まない譯ではあるまい。併しそれは彼等が獨斷的に定めたる我兵力量の最少限度卽ち所謂國防の三大原則＝水上補助艦總括的對米七割、八吋砲巡洋艦對米七割、潛水艦現有量保持＝を破らぬ範圍に於ける協定である。兵力量の主張貫徹と軍縮協定の成立とが到底兩立せざることは前に述べた通りである。倫敦會議に於て日本の三大原則なるものが英米の强硬なる共同反對に會ふて會議は全く行詰り最早や決裂の外なきに至るや、彼我全權は茲に海軍人を交へざる政治的解決の必要を認め、松平リード兩全權の私的白山懇談が開かれ、種々折衝の結果漸く一の妥協點を發見し、財部全權の同意を得たる上、若槻全權より之を最後の妥協案として我政府に對し請訓し來つたのである。之に對し我海軍に於ては倫敦に在る不平黨よりの情報も加はつて、請訓案を以て尙ほ頑張りの餘地あるとなし、全權折衝の拙劣殊に海軍大臣たる財部全權の軟弱を難じ、外務省起案の回訓案に對して加藤寬治大將を部長とせる軍令部に於て强硬なる反對意見を表明し、玆に初めて紛爭の種子が蒔かれたのである。要は若槻全權より請訓の妥協案を以て外務省に於ては之を最後的のものと認め、軍令部に於ては否らずとする見解の相違である。併し之は表面の波紋であつて、底には尙ほ暗流がなくてはならぬ。

若槻全權以下の交涉折衝の巧拙に就いては之を計るべき標準がない。唯併し若槻全權は我國政治家中頭腦最も明敏で議會に

於ける應酬亦最も巧妙であることは世の定評である。今の日本に於ては遣外全權として彼に優る人物は恐らくあるまいと思はれる、若し彼にして外交折衝が拙であつたとすれば其は日本のベストを盡したる後の運命と諦らめねばなるまい。若槻全權より請訓せる妥協案なるものが外務省の見る如く最後的のものであつたか、或は軍令部の言ふ如く尚ほ頑張りの餘地があつたかは、會議地より數千哩を距つる東京では判かる筈がない。唯直接交渉の衝に當つて空氣の動きを體認せる責任ある全權の言を信ずる外はあるまい。會議から除外されて不平滿々たる專門委員よりの情報などが當にならぬことは言ふ迄もない。現に日本に居る間は勿論米國に於て迄も七割比率を強調疾呼して、若し我主張にして容れられざれば會議の決裂も辭せずとさへ豪語したる財部全權が、之を最後妥協案として同意したる一點より考ふるも、會議の空氣が如何に緊張して妥協か決裂かを決する最後の案であつたことを容易に想像することが出來る。然るにも拘はらず我軍令部が飽迄も強硬意見を採つて讓らなかつた所以は、單に頑張りを以て美德とする軍人心理の發露のみでなく、彼等は製艦能力や乘員補充等の關係上、米國は我國に對して製艦競爭を爲すの力なく、加ふるに米國政府は内政關係に於て是非とも軍縮條約を成立せしめねばならぬ立場に在る。從つて我に向き決心と強き主張とがあれば我要求を貫徹し得るといふ對米觀察に基づけるものと思はれる。でなければ愚圖るだけ愚圖れといふ緣日の商賣根性であつたのである。

◎最少限度宣傳の自繩自縛

併し軍令部方面の此の對米觀察は多くは想像に過ぎないので、そこに論理的根據があるのではない。幸に的中すれば結構であるが、不幸にして外づれた場合には國家經濟の點に於て軍縮條約の成立を寧ろ米國以上に必要とする我國は、會議決裂の責任國として經濟上に於ても、外交上に於ても、國際的に極めて苦境に立つに至ることは明らかである。責任ある政府としては無責任なる軍部の一六的觀察に聽從することの出來ぬは當然である。優柔にして細心なる濱口首相はそれでも尚ほ約半個月の間種々手を盡して軍令部の意見緩和に力めたが、軍令部に於ては飽まで當初の三大原則を固執し頑として讓らない。流石に隱忍自重の濱口首相も背に腹は代へられずと斷然遂に意を決して軍令部の意見を排し外務省案に從つて、請訓案承認の回訓を發し茲に所謂軍令部無視問題となつて政府對軍部の抗爭が愈表面の舞臺に表はれるに至つたのである。

政府が軍令部の主張を退け、全權より請訓の最後案を承認し

て條約の調印を了するや、軍令部は忽ち躍氣となつて政府の統帥權干犯を叫び、加藤軍令部長は參内して何事かの帷幄奏上を爲し、且つ將卒にも、大將にも倫敦條約は我國防に缺陷を生じ而かも他に補充の途なき旨を中外に聲明したのである。それが軍令部長の名を以てせると否とに拘はらず、苟くも作戰用兵の局に當る軍令部に於て國防の絶對缺陷を公表する如きは餘りにも不謹愼なる行爲であつて、嚴格に言へば軍機漏洩の重大犯罪である。

事茲に至りては軍令部は政府に對し眞つ正面より挑戰したるもので、政府辭するか、軍令部長辭するか、何れか一方が退かねば問題の解決は絶對不可能となつたのである。

如何に政府の處置に對して不滿なりとは云へ、苟くも海軍大將海軍軍令部長として帷幄の重臣に列する者が國軍の威信を失墜する如き放言を爲すに至りたるは、一は彼の熱情的にして生一本の軍人氣質の然らしめたる所もあるであらうが、一は又度に過ぎたる七割宣傳の繩に自ら縛られて、自己並に軍部としての面目上、事爰に出でざるを得なかつたのである。初め我國は倫敦會議に臨むに當り、海軍に於ては海軍省及軍令部の一致を以て會議に提案すべき國防兵力の基準即ち三大原則を定め、之を以て我國防（國防の語は此場合適當でない、兵力量といふべきである）の最少限度と爲し一歩も讓るべからずとなしたのである。

○國防最少限度の意義

時の軍令部長加藤寛治大將は嘗て華盛頓會議の際加藤全權（友三郎大將）の主席專門委員として會議に參し、常に強硬なる意見を述べて全權を惱まし、遂に加藤全權から「國家の大問題が御前等に解かるか」と叱られたと言はれる程に熱烈なる海軍第一主義である。彼は華府會議の時日本内地に於ける國民の輿論が一致せざりしのみならず、在米通信員すらも動もすれば米國の提案を支持したるを見て同會議の不成功（彼に依れば）は國論の一致と國民後援の足らざりしに因るとなし、今回の倫敦會議に際しては豫後備軍人、御用記者、反動思想家、政界の不平分子等を動員して全國に大々的遊說を行ひ、所謂國防の三大原則就中補助艦及大巡洋艦の對米七割を宣傳して輿論の喚起に力め、縱令會議を決裂せしむるも七割を讓るべからずとの強硬なる意思を表明したのである。加藤軍令部長は國際會議と野球の仕合とを同一視し、國內輿論の強き後援さへあれば相手が屁垂れて我要求は貫徹し得るものと思つてるのであらうか。此方で後援すれば向ふでも後援する。野球の應援でも度に過ぎると自ら殺氣を帶びて敵愾心を起さしめ往年の早慶戰の樣な結果を

生ずるに至るものである。軍縮會議は喧嘩の談判ではなく平和の協議である。鳴物入りの國民的後援などは寧ろ會議の空氣を險惡ならしめ、協定の成立を困難ならしむる感がある。

我海軍で定めた國防の最少限度なるものが幾千度の論理的正確さを有するかは玆に論じない。併しそれは日本の海軍が自國の都合本位に勝手に定めたるものであることは事實である。日本の海軍に國防の最少限度があれば、米國海軍にも、英國海軍にも、夫々自國本位に定めたる國防の最少限度があるべき筈である。否な有つてよい筈である。然るに多々益々辨ずる軍備の根本的性能より見るも、又多々益々欲する軍人の本能的心理より考ふるも、各國の定めたる最少限度の軍備なるものは必ずしも凸凹相嵌合するものでなく、そこには各國の間に幾多の衝突や錯綜があるに極つて居る。例へば日本海軍は補助艦の對米七割を以て最少限度とせるも、米國海軍は對日五―三の比率を以て最少限度と稱して居る。しかも双方共にそれ相當の兵理的論據を持つて居る。併し軍縮會議は兵理の討論會ではなく、相互に如何に歩み寄り譲り合ふかの相談會である。若し日本の最少限度は正札であるが外國のは掛値があるなどゝ言ふ者あれば、それは猿の尻笑ひの類で最初から軍縮會議などに出ぬ方が優しである。最初は死物狂ひでも[illegible]假に潛水艦現有量に早變はりするなどは、聊か現金過ぎはせぬ

であらうか。

◎百貨店と縁日商賣

百貨店で正札を値切る客は田舎者と笑はれるが、縁日の夜店を正札で通さうとする商人も唐變木の誹を免れぬであらう。それは理屈の問題でなく事實の問題である。國際會議が縁日商賣であることは今に始つたことではなく、外交は國際的掛引と昔から相場が極つて居る。然るに日本の軍令部が自分獨りで定めた國防の最少限度なるものに正札引なしのマークを付けて倫敦會議を押し通さうとしたのであれば、それこそ餘りにも馬鹿正直な世間知らずの縁日商人の類であると言はねばなるまい。若しそれなれば此不景氣緊縮の世の中に二百萬圓もの巨費を使つて態々倫敦まで孤被りを擔つぎ込むまでもなく、「最少限度」に切手を貼つて倫敦會議へ送り付けるだけで事は足りた筈である。

倫敦縁日會議に於ける我全權のセリ方が下手であつたか何うかは知らぬが、果然眞に果然日本の最少限度は正札の儘では賣れなかつた。そこで最少限度に二つはない、縱令一分一厘でも割つた以上は理屈上國防に缺陷を生ずるといふ問題が生ぜざるを得ない。政府反對者等は「待つて居ました」とばかりに聲を大[illegible]「國防の缺陷を如何せん」は大衆を煽動するには最も有效なスローガンである。軍令部としては先きの宣傳

の手前、今更引くに引かれず何とかせねば國民に對する面目がない。偶、議會に於て濱口首相が「國防に關しては政府が全責任を負ふ」など、聲明したので、國防の本家を以て自ら任ぜる軍令部としては愈以て癪に障らざるを得ない。そこへ臨時議會の開會を機に政權に飢へたる政友會あたりの絲も加つて問題は益ゝ複雑化すると共に漸次政治化さへするに至つたのである。

◎軍令部無視か政府無視か

加藤軍令部長の投げたる「國防缺陷」と「統帥權干犯」の爆彈は忽ち議會の問題となり、種々なる質問の矢が政府に向つて放たれた。事面倒と見た政府は條約調印後急遽歸朝の途に在りたる財部海相に因果を含めて哈爾賓で急病に罹らしめ、濱口首相が海軍大臣事務管掌として專ら答辯の衝に當りたるなど、聊か財部海相敬遠の氣味があつた、濱口首相が「國防の責任は政府に在り」と喝破したるは大に立憲政治家としての貫祿を高めたるも、統帥權問題に對して沈默の業に耽りたるは龍頭蛇尾の憾がある。立憲を標榜せる政友會殊に曾ては憲政の神とまで謳はれたる犬養老總裁までが軍閥の提燈を持ち、統帥權干犯を口にするなどは政爭の爲めには手段と武器とを擇ばざるが舊政黨の常とは云へ、騏も老ひては駑に如かず命長ければ耻多しの感が深からざるを得ない。

議會に於ける質問の中心は「政府の軍令部無視」であつた。之に對し濱口首相は「軍令部の意見は充分考慮した」と答辯して居る。元來軍令部無視には二つの意味と場合がある。即ち其一は軍令部そのものを度外視して其存在を無視する場合であり、其二は軍令部と交渉したるも意見の一致を見ず已むを得ず其の意見を無視する場合である。彼の謹直嚴格にして事を爲すに意氣地なき程小心翼々たる濱口首相が最初より軍令部の存在を無視する如き行動を爲し能はざるは常識を以て想像するに餘りがある。もし濱口首相にしてあの謹嚴に加ふるに軍部の存在を無視する程の大膽と勇氣とがあるならば、彼は世界の大偉人となり得るであらう。濱口首相は彼の言へる如く軍令部の意見をば餘りにも考慮し過ぎた。彼は總理大臣として國策の重點をば、兵力量の滿足よりも軍縮條約の成立に置くことに決定するや、海軍大臣事務管掌として軍令部の諒解を得る爲め各國の全權が倫敦で欠伸せるを顧みず、世間からは優柔不斷と誹らるゝを意とせず、約半月の久しき間手を代へ品を代へ軍令部と交渉したのである。而かも國防最少限度の自家宣傳に縛られたる軍令部は統帥權の獨立と帷幄奏上とを盾とし、頑として政府の意見に從はなかつたのである。政府が軍令部を無視したと言ふよりも、寧ろ軍令部が政府の存在を無視したと言ふ方が或は適當かも知れぬ。

政府と軍令部との間に板挾みとなつて人知れぬ交涉に最も苦勞したのが時の海軍次官山梨勝之進中將である。彼は人として素朴率直、衒はず、飾らず、一見恰も村夫子の如く、重厚寧ろ學者肌の人物で腰の短劍が借物の樣に思はれる。明治三十年兵學校の首席卒業生であるから頭の惡い筈はない。殊に英語は最も得意とせるところで、彼の奧州ズウ／＼の日本語よりも英語の方が達者ぢやとさへ言はれて居る。彼は最後の囘訓案に對し、軍人としては軍令部の意見に聽かねばならず、海軍次官としては政府の意に從はねばならず、進退兩難恰も平の重盛の如き境地に立つたのである。併し彼の明知と達識とは軍是よりも國策の重きを認め、頑瞑なる軍人側よりの非難を一身に受けつゝ、濱口首相を扶けて倫敦條約の成立に力めたのである。彼が神經衰弱を以て職を退きたるは熊野に死を祈りたる重盛の心事にも似たるものとして大なる同情を禁じ得ない。倫敦條約の成立は外に在つては若槻全權、內に在つては彼れ山梨の功が多きにあると言ふべきであらう。併し海軍々人の總てが必ずしも軍令部案を頑守したのではなく、要路の軍人中にも最後の妥協案を以て已むを得ざる讓步と認めたるものも尠くはなかつたのであることを斷つて置く。

◎御家騷動のクライマックス

臨時議會の爲めに一時小康の狀態に在りたる政府と軍令部との抗爭は財部海相の歸朝に依り再び燃え上り、兵力量問題に關して財部加藤の間に論爭が開始さるゝことゝなつた部内の內訌を憂ひたる前海軍大臣岡田啓介大將等は其間に立つて融和に力めたるも、反政府感情に燃ゆる加藤は頑として容れざるのみならず、軍部內に於ける反政府策動は部外の不平分子と策應して漸く露骨となれるが爲め、財部海相は海軍次官の交迭と同時に軍令部次長末次信正中將の罷免を斷行したのである。片腕をもがれたる加藤軍令部長は翌日直に帷幄奏上の爲め參內し、「帷幄の幕僚に長として國防の重任を全ふし得ざりし責を負ふ」旨を伏奏し、骸骨を乞ふの非常手段を取つたのである。海軍の御家騷動は此時正にクライマックスに達した。

軍令部長には帷幄奏上の權がありとは云へ、突然參內して直接骸骨を乞ふが如きは我政治史上稀有の珍事であつて、宮中に於ては直に財部海相の御召となつた。寢耳に水の財部海相は急遽參內善後の處置を講じたが、事變に至つては軍令部長の交迭を奏請するの外に途はない。牧野內大臣は薩摩出身である。侍從長鈴木貫太郎大將は國家あつての國防位の事は心得て居る人である。軍令部長交迭は電光石火的に案外にスラ／＼と運んでさしもに揉み拔いた海軍の內輪喧嘩は、之でケリが付いたかと思はれたが問題はさう簡單には運ばなかつた。

一刻者の加藤軍令部長の執りたる行動は軍人としては或は痛快味があるかも知れぬが、政治的には餘りにも單純無思慮の嫌を免れない。軍人としての彼の將來は尙ほ光明があるであらうが政治的將來は大なる疑問であると言はれて居る。併し彼の打ちたる今度の芝居は彼れ自身の創作ではなく、眞僞は知らぬが彼の女房役たる末次軍令部次長が書き下したる筋書を踊らされたものであるとの世評もある。末次中將は軍令部次長として所謂三大原則の立案者である。御用記者や海軍協會あたりをして七割宣傳を爲さしめたのも彼である。最後回訓案に最も強硬に反對したのも彼である。反動團體や洋々會を使嗾して倫敦條約反對運動を爲さしめたのも或は彼かも知れん。彼は兵學校時代は頗る平凡に韜晦して居たが、海軍大學に入るに及びて俄に頭角を顯はし、首席卒業後大に將來を囑目さるゝに至つたのである。彼はいつかの本誌に於て馬場恒吾氏から「海軍に恐ろしく頭の良い人が居る」と言はれた如く頭も良し腹もある。彼の頭の良さを以てして倫敦會議に我三大原則が正札の儘で通ると考へる筈がない。もし通ると信じたならば彼の頭は時代後れの軍人的聰明に過ぎない。之が先づ疑問である。

　馬場氏は又彼を評して政治的才能があると言つて居る。彼に政治的才能の有るや否やは知らぬが、彼は山口の產で故田中義一男と同郷である。素より現役軍人たる彼と田中との間に政治的關係などが有つたとは思はぬが、田中の園遊會に招かれるだけの親しさはあつたであらう。倫敦條約反對運動の中には相當濃厚な倒閣運動が色づけられて居た。其の策源地が何處であるかは判らない。彼の所には反動雜誌記者などが常に出入したと云ふことである。樞密院に配られた軍縮怪文書の材料の出所が何處であるかは詮索の限りでない。彼は海軍に在つて尙ほ大なる將來を有して居る。反動浪人や不平政治家の尻馬に乘つて妄動をする筈がない。之が第二の疑問である。新聞に依ると彼の罷免は懲戒の意味さへ含んで居たと云ふが其の眞僞と理由とを知らない。女房小賢しうして牛賣損ねといふ諺があるが、加藤大將も良い女房役を持つたものである。

軍事參議會のヂレンマ

　聖聽をまで煩はしたる財部對加藤の抗爭は軍令部長の交迭に依りて一先づ加藤の退却となつた。熱情的にして負嫌ひの加藤たるもの豈痛慣せざらんやで、彼の反感は益昂騰した。財部が加藤を軍事參議官に推奏したるは虎を野に放ちたるにあらずして、敵を臥榻の下に置いた樣なものである。軍事參議院は國防計畫の諮詢に應ずるの府である。國防の缺陷に對し補充の途なしと稱して喧嘩別れをしたる加藤が、財部の推薦したる新軍令部長の樹てたる如何なる計畫に對しても同意する筈がない。彼

は新計畫が參議院に諮詢せらるゝの時大々的反對を唱へるに極つて居る。反對しなければ加藤は自分の聲明を自分で裏切る譯である。財部が參議會の開會を遮つたのも加藤がその開會を迫つたのも共に腹に一物が有つてのことである。樞密院の諮詢を經ねばならぬ政府の政案に反對して内閣を去つた大臣を直に樞密顧問官に奏薦する總理大臣があつたなら、世間では恐らく狂人と云ふであらう。此狂人めいたことが不思議と思はれずに平氣で行はれるのであるから、何と言つても軍部は特殊社會である。軍令部を逐はれたる加藤は新に軍事參議院といふ一段高き堡壘に據つて敵を邀撃せんものと作戰を運らし、先づ軍事參議會の開會を迫ると共に、參議會に列すべき元帥並に參議官の口說き落しを謀り、東郷元帥を始め各軍事參議官の抱込運動を開始した。新軍令部長の方に於ても新計畫に對する說明の爲めと稱し恰も政治家が西園寺詣りをすると同樣海軍首腦部の東郷山登りが流行し、噓か眞か、東郷元帥の所謂「强硬意見」なるものが屢々新聞に報ぜられた。あの時の「强硬意見」とは倫敦條約反對を意味するものである。由來東郷元帥はサイレント・アドミラルとして其名世界に喧傳せられ沈默こそは此人の身上であつて、その偉人たるところも亦此一點に存するのである。約二年間に亙る日露海戰を通じ彼は我聯合艦隊司令長官として一切の作戰を參謀長以下の幕僚に一任し自己の意見といふものを述べたことがなかつた。彼を國寶とまで祭り上げたる日本海々戰に於ても彼は唯木像の如く三笠の艦橋に默立したのである。此部下に對する絕對信任と絕對沈默とは、何人も爲し得べきことで而かも彼以外何人も爲し得ざるところである。

此沈默元帥が今回の軍縮條約に限り平素の沈默を破つて政府反對の意見をベラ／＼と喋舌つたとは思へない。恐らく爲にせんとする者が元帥の聲望を自己の宣傳に利用したものであらうと信ずる。その先輩を瀆すること甚だしきものである。我等は老元帥が何處までもサイレント・アドミラルとして國寶的存在たらんことを祈るものである。

かくて愈々軍事參議會を開くこととなり、豫め諒解運動や下相談が幾度か海軍巨頭とかの間に行はれたが容易に意見の一致點を發見しない。もと／＼事の起りは一方は國防に缺陷を生ずると云ひ、一方は生ぜぬと云ふ全然正反對の主張である。千回會議を繰り返へしてキヨ頭を捻つたとて、一方が屈伏せぬ限り意見の一致する筈がない。軍事參議會で「國防に缺陷が無い」と言へば加藤の面目は丸潰れとなり、「缺陷が有る」と言へば財部は切腹問題である。軍部は遙かにヂレンマに陷つたのである。そこで四巨頭會議とかで文殊以上の知惠を絞り無理に捏ね上げたものが最初に掲げた參議會の意見なるものである。「國防」と云ふ代りに「軍備作戰」などいふ新熟語まで案出して御茶を濁したる

點など誠に苦心慘憺の跡が窺はれる此參議會の一致意見なるものが木に竹を繼ぎ合はした不得要領のものであるとは前に述べた通りであるが勝負は七分三分で財部に七分の負がある。之は財部が加藤に負けたのではなく財部に依つて代表せられた内閣が加藤を支持する軍部に負けたのである。夫にしても參議會が國防といふ字を遠慮して軍備作戰といふ字句を用ゐたのは、無意識の發表かは知らぬが慥に軍部の頭の進歩である。今の世に軍人が國防の全責任者であるかの如く自惚れて居るのが間違ひで軍人は軍備の設計と作戰用器の技術者に過ぎないのである。

◎同情すべき境地に立てる財部海相

今回の軍縮劇に登場せる人物中最も所作の拙劣であつた者は財部海相である。彼は政界軍界に跨る兩棲物たる上、更に全權として三重に人格の使ひ分をせねばならぬ其の境遇と立場とに對しては充分同情を表するも、苟くも大臣、大將、全權といふが如き重職に在る人の言動としては餘りにも信念と思慮とを缺きたる非難を免れ得ぬであらう。彼は内地に於ては勿論、米國に渡りて後迄も海軍大將としてゞなく軍縮全權として所謂三大原則を以て國防の最少限度とする軍令部の意見を強烈に支持し、如何なることあるも絶對に七割を讓るべからずとの極めて固き決心を國民の前に示したのである。

然るに倫敦會議が豫期の如く日本の七割問題に依つて暗礁に乘り上げ愈決裂の危急に迫まるや、財部全權は若槻全權の大局論に口說き落されて遂に最後の妥協案なるものに同意するに至つたのである。之は彼の變節と言ふよりも寧ろ彼の政治思想の進歩として視すべきであつた。然るに彼は軍令部よりの詰責に接するや、忽ち軍國主義のお里が現はれて信念に動搖を來し、前後妥協案を是認するが如く、せざるが如く、全權として條約に調印はしたものゝ、其後に於ける彼の言動は愈支離滅裂となるに至つた。哈爾賓の禁足を終へ、下の關の兇漢に嚇かされながら甚だ淋しく東京に歸るや、最初統帥權問題、兵力量問題に關して政府の所見に同じながら、後には軍部と歩調を合はすなど若槻に口說かるれば若槻に靡き、濱口に泣付かるれば濱口に從ひ、加藤に詰られゝば加藤に就く。昨日は彼方、今日は此方の岸に咲く浮草同樣、漂々浪々として賴りなきこと此上ない。彼は政治家として若槻の深き思慮なく、軍人として加藤の固き信念なく、しかも海軍の長として加藤友三郎の威望と才幹とを缺いて居る。是れ少壯より權兵衞伯の女婿として先輩よりはチヤホヤされ、僚友よりは持上げられ、盤根錯節の苦を知らぬ溫室育ちの彼の弱點の發露に外ならない。畢竟するに彼は一面には海軍大臣として政治的地位を保たんとし、一面には海軍大將として軍人の御機嫌を損せざらんとし、反走する二頭の馬に跨つて

左顧右眄二兎を追ふて遂に一兎を得なかつたものである。之も憲政上不合理なる軍人大臣制度の生みたる悲劇の一で、彼ならずとも多くの人が陷るべき弊である。

◎跡仕舞

倫敦條約兵力量は軍備作戰上不十分と認めたる結果、軍令部に於ては之が補充の爲め新に航空隊十一隊、六吋砲一萬噸巡洋艦三隻、航空母艦一隻、外に條約制限外艦船を加へて經費總額約二億六千萬圓の海軍擴張計畫を立てること丶なつた。海軍部内内訌の手打式の引出物として我國民は此不景氣の時代に、五個年間に二億六千萬圓の海軍擴張費を背負はされる譯である。水が水素と酸素との化合物で、空氣が酸素と窒素との混合物である位のことは誰も知つて居るが、統帥權の獨立、帷幄奏上權、武官大臣、軍事參議院の四原素の凝成物から二億六千萬圓の海軍費が搾り出されるなどは、瓢簞から駒以上で恐らく御釋迦樣でも御存知はなかつたであらう。

之で百日に亘る海軍の御家騷動は大體ケリが付いた譯であるが後に殘るものは經濟困難の今日、政府がどの程度まで此海軍補充計畫を容れるかの問題と、倫敦條約に調印したる財部海相が「軍備作戰上不十分」と認めたる軍事參議會の決定を承認したる責任とである。海軍大臣たる軍人が自ら兵力量不十分と認めたる條約に調印したる以上、晏如として霞ヶ關の角に腰を据へて居る譯には行くまい。そこで後任問題が起る。現役大將中より擇べば前海相岡田啓介と軍事參議官安保清種との外には無いが安保大將は倫敦會議の專門顧問として財部海相と一蓮托生の連帶責任上出る譯には行くまいと云つて政友會内閣の岡田大將を借りて來ることも出來まい。そこで豫備大將から任命の新例を開くとしても見渡す限り何れ劣らぬ洋々會ばかりの顏振ばかり。栃内曾次郎、井出謙治、百武三郎あたりなら軍政畑の出身であるから、當人に色氣もあらうし、やるにやれない事もあるまいが時代逆行の誹を免れない。思ひ切つて中將級から採るとすれば差當り橫鎭長官大角岑生であらう。彼なれば高級副官から次官を勤め上げて今では中將の古參ではあるし、既に五十を大分越して居るから大臣になつても早い年ではない。大將でなければ大臣になれないなどは惡い慣例である。此際士氣振興の爲めにもあの位の所を持つて來たら面白いであらう。

兎に角今度の御家騷動に依り、識者が多年海軍に寄せて居た同情と信頼とは著しく裏切られ、海軍も陸軍同樣、盲目的軍國主義者の巣窟であることを暴露したものである。國民が若槻氏の歸朝を熱迎したのは軍縮全權としてであつて軍擴全權としてではないのである。政府の考慮と軍部の反省とを望まざるを得ない。(五・八・三)

貧乏ナンセンス物語

金貨一丁の夢

辰野九紫

1

僕は機會ある度毎に吹聽する如く錢湯眼識者である。世界の猛獸相手に半日暮らす動物園の金十五錢も惡くはないが、天井の高い廣廣とした浴槽に半眼を閉ぢて、まだ口開けの午前中、女湯の饒舌に耳を傾く金五錢、亦樂しからずや！

『ねえ、番頭さん——銅貨で一圓てば隨分重たいでせう？』

公侯のお姫様がたから御下問あらせられるなら多少筋も通るが、やんごとなき令孃は社會學に興味を持たせられて、公設市場を御見學遊ばす事はあつても、山の手三等地の花柳界に於ける女湯を覗かるる筈はあるまい。然り、箸より重いものを持つたことのなさそうなこの賢聞を、三助相手に發したおどけない聲の主こそは、わが神聖なる錢湯を貞操の洗濯場と心得て御座る姐さんだから笑はせる。彼女等は生れながらにして藝妓になつたわけでもなからう。いや、その大半は親父が甲斐性なしの呑兵衛で、阿母は長屋無頼の金棒引き、滿足に駄菓子も買つてやれない貧乏世帶の末親の困果が子に報いて、天晴れ孝子となりにけらしな身の上で、銅片百個——隨分重たいでせうが聞いて呆れる。

そこで僕は男湯の氣焔を上げる爲めに、横丁の隱居のスコ醉にカムフラーヂしてやつた。

『ねえ、御隱居さん——金貨で五萬圓てば隨分重いですね。』

『何を……つまらんこと……』

『ははは、持つたことのない人にはわかりますまい。ちよいと重いものですよ。』

牽制功を奏して女湯は忽ち屏息したが、やがてひそひそと語り合ふ彼女達に聞耳を立てれば、愉快にも僕の身の上に及んでゐる。

『あの聲——いゝ男みたいね。』

『私、今夜、あの人に聽ばれさうな氣がするわ。』

『ほゝゝ、脊負ツてんのね、私の方が先口だわよ。』

『ちよいと、番頭さん——どんな人？』

『へツへ、問題になりません。』

『あら、いやだ。もう妬いてるのね。』

『誰れが……あんな奴——姐さんの前ですが彼奴は時々湯錢を忘れて來やがる。』

『のんびりしてるのね、いゝわねえ。』

『いゝえ、承知してゝ、わざと忘れやがるんだから癪ですよ。』

『まさか——ねえ。いくらなんだつて、わざと忘れるなんて……』

『いゝえ、ほんとですよ。文なしのぐうたら兵衛の癖に、いやに負惜しみの強い野郎で……』

『そんな大きな聲するもんぢやないわ。——失禮ぢやないの……』

『なアに、たまにはいつてやられえと……』

『止しなさいッたら、番頭さん——お金持ッて一體出し汚いもんよ。いゝわ、私、拂つて上げるわ。』

『私に立替へさしてよゥ。番頭さん——いくらあつて?』

『それがね、年に積ると中々馬鹿にならねえんで……』

『いゝわよ、私、年期増しても責任持つわ。』

『私、旦那に速達を出さうかしら……』

『まア、隨分氣の早い人ね、縁切り種?』

『うゝん——お湯錢の無心をしといて、それから……』

僕たるもの、いゝ心持にならざるを得ないではないか。

2

問題の珍品五——無論、僕は利權を漁る政商でもなし、一齊の陣笠共を頤使する總裁でもないから、貴重なる體驗を語る資格はないが、どの位重いものか大抵見當はついてゐる。その點に於て寸鐵輕妙を誇る某大新聞の夕刊短評子よりも、僕の方が若干頭腦明敏の心算である。

いつぞやわが帝大の名譽教授老博士が水銀還金説を發表した時、彼氏は國家の爲め猛烈な太鼓を叩いて合掌した。

——一匁六錢の水銀から一匁五圓の金が獲れる。科學の進歩、世界的發明、日本のほまれフジヤマと櫻のみかは

粗忽者が讀めば、原料六千圓の水銀で五十萬圓の金貨をざく／＼させることが出來て、金解禁なんて誰がやつても朝飯前の仕事みたいであつたが、折角の研究も、其後杳としていて新聞紙上影を潜めて終つた。當時、僕は既にタカを括つてゐたのだが、何でも他力本願で物事を成就しようと考へる虫のいゝ連中は、老博士畢生の大研究を唯一の頼みに、不用意な金貨解放を斷行したので、今や日本は百パーセント貧乏に陷り、わが東海君子國のほまれフジヤマと櫻のみかは……である。

その金解禁直後、暴力團に愛國心の有無を詰られてまでも、敢て正貨現送の流行つた頃のこと——麥酒一打入りの化粧函よりも小柄な、木の香新しい分厚な函を一山積んだトラックが某銀行の通用門に停止すると、數名の警官は舗道に護衛の眼を光らせた。偶然通り合はせた僕が中味の何であるか知らう筈もないが、餘り物々しい警戒振りな異樣に感じて佇むと、默々と運ぶ人夫の中に、

『これが一個五萬兩とは嘘みてえだなア……。』

『まつたくよ、馬鹿にしてやがる。』

己れの一生を輕蔑し切つたやうな口吻で、自暴半分に捨鉢調の不所存者があつた。

『こらッ、默つてしやべれ。』

およそ世の中で一番自分に縁の遠い他人のやうに眺めてゐた僕だが、斯う注意を發して人夫の及ばぬ戀をたしなめたので、

『ははん、これが大和魂より貴いイクトか——』

と敏感な僕の貧乏神經は忽ちにして痙攣を起し、恥も外聞も忘れて唄ひ出した。

——こゝに金貨が五萬と御座る。御座る金貨は何貫目？……

そして、尋常一年生にも出來さうな割算であるのに、嵩、嵩、嵩の多い位取りに面喰らひ——一ン五つ五、一ン五つ五……と、何遍

も同じことを繰返してゐる間に、計數に明かな筈の僕の頭腦はくら〳〵と眩暈を起して、舖道にぶッ倒れて終つたらしい。

氣がつけば四邊はいつしか夜となり、僕は寢臺に臥してゐる。

『ヤア、君、如何だい。——えらい人騷がせをやつたぜ。』

『一體全體、これは何處ですか。警察署の留置場でもなささうですが……』

『冗談いつちや罰が當る。——此處は△□銀行の宿直部屋さ。』

『あ、成程——一が立つて、一ン五が五、一ン五が五……五零ノ零、五零ノ零……』

『君、君、君——もう止めて吳れ、お願ひだ。またやられちや大變、僕は寢るに寢られぬ籠の鳥だ。』

僕の橫たはる快適なスプリングは、當夜彼の占領すべきものであつた。僕は匆々にして辭去しなければなるまい。

『これは失禮、とんだお邪寬をしました。』

『いや、構はん、——それにしても金貨癲癇とは珍らしい文明病だね。』

『どうも申譯ありません。』

『うちの頭取は非常な苦勞人だよ。君が正氣づいたらこれを上げるやうにッて、僕に預けて歸つて行つた。この際遠慮はいらんさ、宜しく餞でもやるべしだね。』

授けられた硬貨一片——昭和五年新鑄の二分玉と思ひきや、地獄の沙汰はまだ愚か、極樂の蓮華の花の上までも通用する、彌陀の光まばゆき二十圓金貨だから、その有難さは晝飯ヌキの骨身に徹し、三拜九拜したこと勿論である。

3

吞兵衞だから貧乏するのか、貧乏しても人德あつて吞む機會に惠まれるのか、兎に角、僕は始終湯錢にも不自由勝ちな男の癖に、相當吞めるから世の中が面白くて堪らない。——その日も愉快な日であつたらう。實は三年越しの失業にメコが出來て、數字の細かい女房との家計爭議に疲れた身體を、市街線に晒さうと思つて犬の川端步きを試みてゐたのであつたが、僕の現實の惱みとは餘りに桁の違ひ過ぎる金貨の量目に迷つて、貧血の醜態を演じた爲めに、却つて生れて初めての幸運を攫んだのである。豈に祝杯を擧げざる可けんやだ。

斯くて正直な僕は親切な銀行の善良なる宿直員にヒントを與へられた通り、已が姿の見すぼらしさを顧みる心の餘裕もなく、東京名代の蒲燒屋の二階に陣取つて、大串の極上等を三人前も註文したものであつた。——久方振りに攝取したヴイタミンAは灘の芳醇黑松白鷹と程よく相和し、僕をして羽化登仙の想ひあらしめた。

やがて勘定の段に及んで、僕は日本金融政策の名譽を保持すべく、堂々と正貨を以て支拂つた。ところが、客の心を知らぬ鰻屋の女中は僕の態度を怪訝に思つたらしい。

『あら、これ、出來たての銅貨と違ひますわね。まア、金貨！失禮しちやうわ。』

『はッはッは、有る所には有るだらう』

『呆れたわね、ほんとにあんたの？』

僕は答辯の限りでないと思つたので默つてゐた。すると彼女は何を感じたのか、折角のお會計をその儘に姿を消して、いくら手を叩いても呼鈴を押しても返事すらなかつた。……

馬鹿々々しくもそれからの僕は某署の留置場に宿直の身となつたのである。そして翌朝僕獨特の金解禁の由來を百方陳疏辯明するのだが、頑迷な司法主任は一向に諒解しない。

『いや、何と申立てゝもそれでは筋が通らん。平素、君がどんな貧乏な暮し向きかは、ちやんと調べが上つとるんぢや。そりや君、金貸を夢みて孕む女はザラにあるが……金貸稼業なんて馬鹿らしい。ナニ、嘘だと思つたら五萬圓積め？　引ッ繰返つて見せろッて……ふうむ、君は本當に怪いものねだりをする氣か……怪しからん奴ぢや。』

不潔同盟

（ミゼラブル？　しかも？　ノンセンスな一例？）

吉行エイスケ

I

楊樹浦河口の暗い煉瓦塀に「女工に戯れるな」といふ赤いビラをなにものかがはりつけたころ、ミス・リ・カイ・エンは、南京路に華麗なイルミネエションの夜の衣裳をつけた永安公司附近の雑沓のなかで、露出を好む男をひろふと敏體尼路の巣窟につれこんで、支那寝床で彼女は蠢く感覚をくつぐるやうに男に云つた。

——お客さん、お客さんのイレクテイルのとこを……。

それが、涎を吐き出すやうなことばだ。沓と、酒淫と、参墨によつて教養された、これが實淫だ。

II

ミス・李家英は、大世界から南京路かいわいを城廓にした桃色の野鶏だ。しかし彼女の姉、ミス・李淑英は、楊樹浦河口のタンヤン路の百軒長屋とむかひあはせた工場の牢獄のやうな部屋に住むプロレタリアの女だ。

二人の姉妹は陝西の旱魃で數百萬の餓死によつて腐敗した屍體と、千五百萬の罹災者を踏みこえて上海にやつてきた。だが、彼女達の「都市」への出發は悪辣な人肉賣買人が動物を賣買するときのやうな、十圓一束の呼價によつて落札した肉票によつてはじめられたのだ。その人生への首途において、姉のリ・シユ・エンは三兩の肉票でもつて紡績女工周旋仲買人がこれを買ひとると、上海で三十兩に競りあげられて楊樹浦の紡績工場に賣られた！

美しい妹のリ・カイ・エンの肉票は五兩で仲買人が購つた。餓死するよりも賣買されることは擇ばれた幸運だと人々は考へてゐた。リ・カイ・エンを作つた仲買人は漢口の商人の妾に彼女を百兩で賣りとばした。そこでリ・カイ・エンは愛慾の鎖をつけて百鬼夜行の女となつた。阿片と、賭博と、賣淫と、殺人の暗黒街でリ・カイ・エンの漢口における快樂は家畜と貧困の壁一重のなかに生きてゐた。半年後、商人が破産すると彼女は揚子江の濁流に乗つて上海にやつてきたのだ。

五卅事件と、剪髪と、乗馬鞭と、世界資本主義の出張と、百萬の勞働者のゐる上海。

III

エロチズムの横行するフランス・[illegible]カンの歓樂の路地へ、ミス・リ・カイ・エンはその夜の幾人目かの[illegible]の客と前後になつて黄包車を走らせてきた。その奇怪な路地の周

圍には大陸藥房といふかいがはしい賣藥店と南洋カフエーの不潔な卓子が街路から見えた。そして雑貨店、廣術號と、カゴヤ、廣昌號の二軒が隣合はせてゐた。廣術號の二階の部屋では、祚讀賣の中年の夫婦が間借りをしてゐて、部屋一杯の寢臺に寢ころんで、ときどき訪れてやつてくる客を相手にしてゐた。

リ・カイ・エンが客をつれて、物賣の密集する狹い路地に這入ると突然、人家の軒下で乞食が鳴らす胡弓の弦音にをくられて、南豆玉の八角燈が不氣味にぶらさがつた一軒の家の扉をノックした。すると、小さな覗窓から支那人の顏があらはれると、やがて汚物が電氣仕掛けの吸收器に滅入るやうにリ・カイ・エンと客は家のなかに這入つていつた。そこの最初の小さな部屋には、中風を患つた纏足の老婆が汚れた支那ソフアにうもれて銅錢を客に求めた。濕氣のある廊下。兩側の小さな物置きのやうな部屋では、惡疾の病氣のために起きあがることのできない若い女が數人、飢餓と高熱のために苦しさうに呻いてゐた。

つきあたると螺旋になつた階段があつて、その下が水口になつてゐた。よれ曲つた階段を昇ると、人熅れのした左側の部屋には猥雜なものがパノラマのやうにひらいてゐた。引つけ部屋では十數人の女たちが百花が萎れかかつたやうな姿態をして、大茶毘に誘はれてくる男を待つてゐた。彼女たちは貧農の兩親によつて樂値で賣られたばかしの、まだ街にでる手練のない見習女たちだ。

その黄色い女たちのなかにまぢつた鼠色の十三、四の少女がゐる。カムボヂヤの華僑と黑奴との混血兒、これが流行の新種族、Pra-kans に屬する女だが、生育したばかしの新らしい種族でさへ、すでに貧困による華美な生活の一歩を踏みだした。

リ・カイ・エンと客とは、落花狼籍の巷を感じながら、監視部屋のかたはらの彼女の部屋に這入ると、男は固い寢床に棲み、彼女は寢床の前方の人間の手垢で汚れた垂幕をひらいて姿見のまへで化粧をはじめた。それから、リ・カイ・エンはなみなみとたえられた水桶から、一掬の水を洗面器にうつすと、すでに靴下だけの女はかすかに、慘酷な自分の姿が瞬間、洗面器の水に映るのを見たのだ。

IV

「女工に戯れるな」といふ赤いビラのはられた楊樹浦河口、タンヤン路の百軒長屋、一名殺人長屋。ここは都市の不良な片隅の街だ。

この街には病院のかはりに死體運搬人が住んでゐた。民衆食堂のかはりに黄塵の街頭に不消化物を賣る露天商人が群がつてゐた。銀行に代つて汚れた胴卷きが幾重にも彼等の肉體を卷いてゐた。そして、市街戰で破壞された木造家屋の貧民窟で産れる乳兒は、襲來する傳染病と、乳兒賣買人のために無ざうさに喰はれてしまふのだ。

ミス・リ・シユ・エンは、この連鎖長屋にむかひあつた下層地域の工場寄宿舍に監禁されてゐた。彼女は人間の滿潮期に自分の周圍をめぐる暗い煉瓦塀をみつめてゐた。午後九時になると工女たちは燈火を奪はれて、タンヤン路に面した窓にあつまつて、むかひの貧民窟を眺めた。そこでは人々が一塊に密集して、電燈を失つた暗い底にカンテラを灯して「シイコ」賭博を始めた。街路に投げ出された家をもたない苦力たちが、夜の路上に斑點をつくつてゐた。

タンヤン路の百軒長屋には日光がなかつた。家屋には便所のかはりに楕形の便器が、食堂と寢室を兼れた薄暗い部屋の片隅に置か

れてゐた。かつてこの街には鮑、鵞、火腿、家鴨などの美食の香がただよつたことはなかつた。脳髄をまで刺戟するやうなゴマ油の臭氣と、腐敗しかかつた豚肉と、饂飩粉にまみれた主婦の顔と、殘飯賣買人を迎へる歡呼と、魚肉を油で炒ためた唯一の美味があるのだつた。

だが、女工達には快樂があつた。工場の蒸氣で滿された湯槽に彼女達が浴してゐると、工場の男たちがどやどやとやつてきた。便所ではブリキの便器に不思議なものが沈んでゐた。そして同性愛。深夜になると門衛は工女を街頭に連れ出した。そこで彼女達は何をしてゐたか？　リ・シユ・エンはこゝで生活をしてゐた。人身賣買のからくりのなかで奴婢にされたリ・シユ・エン、彼女は女給工會に密に機脈を通じた……。

ここで――僕は二人の姉妹の生活を斷片的に敍した。だが、これは都會を構成する歡樂地帶を對蹠的な景觀の一つの暗示だ。これらの新色い既のやうな人間のつくつたベーブメシトな[illegible]なければならないのだ！　かつて第三インターナショナルの指令によつて行はれた上海コムミユン、その三月革命も、國民黨内部における左派、乃ちボロヂン、チルキンス、陳獨秀等のマルキシズムによる政策の敗退によつて、ふたたび悲慘なプロレタリアの貧困が上海をおとづれた。その新軍閥を行使する中華資本トラストが、世界資本主義の一使徒として上海を中心にした金融資本戰の渦中にあるとき、英國の金融資本主義の印度における金買銀賣の政策によつて忽ち、支那全土は銀貨暴落による不況のどん底に陥つてしまつた。

この政策の萬華鏡のなかにあつて、マルキシズムの隆盛資本主義時代の睡眠な指導理論の對立！　そしてミス・リ・カイ・エンも、ミス・リ・シユ・エンもその影絵におどる可憐な影繪に過ぎないのだ。

これこそ、あまりにも Nonsense――だと思ふのだが、流行のつくりもののサンセンスに中毒した一部の人々にはこの一文を、これだけで終りとしては、なにがアンセンスかと詰問されるかも知れない――。

V

一年後、上海の夏。工部局警察は苦力のロカ・チンが英國領事館のまへで卑猥な流行歌を放歌したうへ、合衆の婦人の面前でアスファルトに放尿したといふので、ロカ・チンは捕へられて重刑を受けた。

ロカ・チンは碼頭苦力だつたので、彼の仲間の一團はパブリツク・ガーデンに集合して重刑の不當を決議すると、H・B・Mの建物に向つて彼等の武器によつて大砲を鳴らした。それに對する彈壓のために、瓦斯の充滿した部屋に檢束された一人の苦力が封入された。その紳士道における名譽心を維持するための暴戻に反抗してバンドの碼頭苦力は不潔同盟を開始した。四川路から南京路の繁華街にとつて、惡臭を身にまとつた苦力の集團が汚濁を撒き散らして行進する。これにたいする英國の黑い肪量は、印度巡査の月給十五弗と、極東人の寛容とをもつて盡した。だが工部局の巡警によつて忽ち解散を其列は命ぜられた。

翌日になると車夫が不潔同盟に加入した。それと同時に暴力による香氣ある地上の復歸が剝されて、つひにすべては武裝を解除した。

不潔同盟は擴大する。上海の全勞働者が街頭の景觀を變革するために、過去の美にたいして挑戰した。この戰において勝利に生れた犠牲者は病毒の亢進によつて鬼面となつた

リ・カイ・エンが、隔離室を出奔して大馬路までやつてきたが、綺羅を着飾つた群集のなかで腐敗した肉體を晒して死んで行つた。
時刻を同じくして南京路のイルミネーシヨンの下で血を吐いて死んだ女があつた。工場を抜け出したリ・シユ・エンの蠶食された最後であつた。

ちよう法な友達

窪川いね子

昨年の初夏のことである。私たちの遅い朝飯のところへ、一人の友達が飛び込んだ。友達は外からまつ直ぐに上つて來て、懷ろ手のまゝほい、と首をすくつて挨拶をし、

「ちよつと頼みがあるんだがね。」といふ。

「なんだ。」

「半日でいゝから人をおいといてもらひたいんだ。」

友達はそこで初めて坐り、かいつまんで話し出した。

友達が先日の拘留中に、同房の一人の若い男と親しくなつた。仲間の品物を無断で賣つて訴へられたのだと言ふ男だつた。

その男が今日、警察からまつすぐ私の友達のゐるナツプの事務所へ友達を頼つて來た。そして宇都宮の實家へ歸る旅費を貸して貰へまいかと言ふ。友達はそれで、その旅費を工面してやらうと思ふのだが、その時間だけ男をあづかつてくれといふのだつた。ナツプの事務所へその男をおいておくわけにはゆかないからであつた。そんなルンペンに金なんか貸してどうするのだと言へば、友達は、その男を何かに利用しようと思つてゐるらしい口吻をもらした。その男は宇都宮へはちよつと行つてくるだけなのであつた。

「いつたい何をしてゐる男かね。」

「横濱で、商店のウインドの硝子を拭いて歩く商賣だとか言つてた。」

「へえ。」

とにかく、その男を驛へ待たせてあるといふので、今日半日だけならといふことになり、友達は出掛けていつた。

男は、何だか厚ぼつたいズボンを穿き、上衣はきないで、ワイシヤツの上にスエーターをきてゐた。スエーターのゑりのひらきから派手な、安つぽいネクタイが目立つた。顔色の赤い、鈍感さうな、ぶく〳〵した大柄な男だ。大きなお尻をしてゐる。想像してゐた氣味の惡い目つきなんてものは少しもない。

その男が、きちんと兩方の指先を揃へて疊に手をつき、額が疊につくやうにとよく言ふが、さうでなく、兩方の人差指と親指の間に出來た三角形の中に、自分の鼻が丁度入るやうな格好でおじぎをした。私たちは思はず面喰つた程だつた。圖體の大きい、派手なネクタイを結んだ若い男が、まじめにそんなおじぎをした。

少し滑稽になり、私たちは幾分氣をゆるした。友達が間もなく出掛けたあと、私たちは先づ風呂へ行くやうにその男にすゝめて、手拭や石鹸や、湯錢など持たせた。こつちにしても、留置場の毎日を知らないではないし、

そこいらに蟲でも落されては厭だとも思つた。男は殊勝げに、少し尻上りの方言でいちいち詫を言つた。

その日私は外出するつもりだつたが、そんな男を一人家へおいておくわけにもゆかないので止めた。三吉にもなるべく早く歸るやうに頼んだ。留置場の中で知り合つた男に、自分の家へ用を頼み、女房をひどい目に合はせたといふやうな話などを私は思ひ出した。

丁度その時、女人藝術から「一錢も無かつた時の話」といふのを書くやうにいつて來てゐた。私はそれを書き出した。男は上り口の三疊で午睡をしてゐた。

――一錢も無かつた時の話は、私にとつては決して過ぎし日の思ひ出話ではありません。それは思ひがけない災難でもないし、從つて非常に困つたといふやうな話でもありません。今日なほ、しば〳〵起る現象であります。――

私は實際明日の小遣ひを案じつゝ女人藝術の原稿にさう書いてゐた。

夕方になつても會社に出た友達は歸つて來ない。三吉だけは丁度晩めしに間に合ふやうに歸つて來て、私たちはその男といつしよに御飯をたべた。その男はいくらすゝめても魚を食べなかつた。

「これがいちばんいゝんですよ。」

さう言つて、たくわん許り食べた。

そして食事が濟むと、膳の脇に身をすざらせ、例の、疊についた兩手の指の間に鼻の入るおじぎをして、殊更に改まり、

「ごちさうさま」と言つた。甘つたるい、女性的な聲だ。

「いやあ。」

三吉が思はず笑つた。男は不氣な顏をしてゐる。

「あの、ぶく〳〵した尻と同じだれ。」

三吉がその聲を評して祕かに私に囁いた。

拘留された事件については、友達のレインコートを無斷で賣つて、その友達に訴へられたのだと言つた。

「友達甲斐のない、けちな野郎ですよ。」

三吉がそのことをまたあとで私に言つて笑つた。

「留置場の中ででも、コソ泥に困つて、どいつもこいつもきまつたやうに、友達の物を友達の物をと言ふよ。」

金策に行つた友達は十二時になつても歸らない。仕方がないから寢ることにし、他の泊り客なら六疊にいつしよに寢るのだが、何か厭な氣がして、上り口の三疊に寢てもらつた。

翌朝、掃除をする時になり、その男のまめまめしく立働くのに、押しつけられて氣れ〳〵しさを感じながらも恐縮した。家の中の掃除をすまし、その上に表の硝子戸を拭き、門口を掃き、それから私の鏡を拭いてくれた。揮發油を綿にしめして鏡の曇りを拭いてゆきながら、アルコールが無い時は、揮發油でいゝのだと講釋した。ガラス拭きは彼の商賣なのだ。宇都宮から歸つて來たら、また硝子拭きをやるのかと聞いたら、不景氣で駄目だから、何か他のことをやるのだと言つた。

その日も友達はなか〳〵來ない。男は板橋に知り合ひがゐるからといつて、私のうちから十錢の電車賃を持つて出掛けた。

友達はそのあとで三圓作つて來て、男には逢はずに歸つた。

その夜男は三圓の金を手にしながら、なかなか出掛けようとしない。干瓢は好きか、とか、鋒を上着に持つて來ようとか、私の家に柄の長い高級が無いので、高級の講釋をしたり、値段を言つて見たり、また干瓢の話をし

たり、ぐづ〳〵してゐる。干瓢と箒は宇都宮の名物だと言ふのだ。汽車の時間が無くならないかと言へば、十二時頃まで大丈夫だと言ひ、そんなにおそくなつては向うの驛を降りてから困るだらうといへば、田舍の家から驛のある町へはよく遊びに行つて夜中に歩いて歸つたものだと言ひ、一度驛へ時間表を見に行つてまた歸つて來たりしてゐたが、やつと十二時頃に歸つて行つた。女性的な聲で、尻上りに、金をつくつてくれた友達によろしく言つてくれとか何とか挨拶をした。しかしもう奇妙な例のおじぎはしなかつた。

　それから二日經つた。私たちは一緒にどこかへ出掛け夜おそく歸つて來た。近所はみんな寢てゐた。鍵をかけておいた臺所口へまはると、裏から出てくるその男に出喰はして吃驚した。

「どこへ行つてたの。こんなにおそくまで。」

　男は、自分がまた私の家へきたことの不自然さなどにはかまはず、慣れ〳〵しげにさう言つて、私たちをまた面喰はせた。

「待つてたんですよ。今まで。」

　さうして男は私たちのあとから家へ入つた。この前の時の服裝と寸分違はない格好をしてゐる。派手なネクタイ、だぶ〳〵のズボン、スエーター、帽子無し、小さな風呂敷包までそつくりそのまゝだ。

「どうしたの、もう宇都宮から歸つて來たの。」

「ええ、歸つて來ました。お父さんや、お母さんにも逢つて來ましたよ。」

　おとうさんや、おかあさんと、男は他所行きの言葉をつかつた。

「ほんとですよ。お袋さんがね、もう東京さいぐなつてね、だけんど、田舍にゐても仕方が無いからね。」

　それから男は、干瓢と箒がこの家に送つてくるから、どうぞ干瓢を食べておくんなさいと言ひ、箒は十本許り持つて來たと言ふ。

「十本！　十本なんてどうするの。」

「ええ、ね、お宅に一本、それから松田さんにも一本上げようと思つてね……」

　男は私の友達の名を言つて「旅費をつくつて貰つて、お禮をしないぢや惡いからね。」

　友達は自分の家があるわけではないし、箒なんか必要ないのだが、そんなことには氣もつかないやうに言ふ。

「その他に横濱にもやる友達が二三人ゐるからね。」

　それにしても十本といふ數は多すぎるが、男は、つじつまの合はないことなどにはとん着しない。

「それから、田舍から爲替が送つて來ますからね。」と、またつゞけて厄介なことを言ひ出す。

「こちらか、横濱の知り合ひの家かどつちかへ送つてくることになつてゐますからね、私がまた近いうちに來ますから。」

　三吉がそれを聞いて明かに厭な顏をした。

「どうして君、切角行つてゐて、自分で持つて來なかつたの。」

「ええ、持つてゆけつて言つたんだけとね、郵便局が間に合はなかつたので、ね、近いうちに私取りに來ますよ。」

　三吉はさういふ口實で、これから度々來られちや困ると思つた。無理に、男がこれから行くといふ横濱の所番地を聞いて、金が來たらこちらから送つてやることにした。

　翌朝男は朝飯を食べて歸つた。また箒と干瓢のことを言つた。近い內に箒を自分で取りに來るから。

　私は半分はほんたうにして、その男の派手

なネクタイをした首をかしげて、だぶ／＼のズボンを穿いた大きな尻を振り、十本の幟をかついだ姿を想像してをかしくなつた。

しかし干瓢も幟も來はしなかつた。

私たちは金の入る仕事がちつとも進ます、いよ／＼金策に困つていつた。最後の手段として取つておく古新聞も賣つてしまひ、質草になるやうな物は何ひとつ無い。草笥の中にはシャツやさらしの下着類の他には、消耗品だからと言つて質屋で取らないえり卷がある許りだ。洗ひざらしの浴衣まで入つてゐる。

頭の中で家の品物を數へ上げてゐた私は、ふと目をきよろつかせて三吉を見た。

「うん志賀さんの荷物の中に白ズボンが一つ入つてゐるよ。あれを入れようか。」

「あのトランクにそんなものが入つてゐるかい。」

「たつたひとつだけれ、あとは何も無いわ。靴下の破れたのばかりよ。」

「それを借りようぢやないか。訴へられるぞ。」

二人はこの間の男のことを思ひ出して笑つた。

私は立つて行つて、三疊の草笥の上にある預り物のトランクの蓋を開けた。あらつ、私は急いでかきまはした。

「無いわ。」

「無いツ、どうしたんだ。」

三吉が立つて來た。

「こないだの男よ。」

「はゝあ。」

私はその男を、トランクや草笥のおいてある三疊に寢かすのはちよつと不安でないこともなかつた。しかし草笥の中の空つぽであることが氣安くさせたのだつた。

「一足お先にやつちやいやがつた。本職だからな。」

二人は笑つた。

「また、友達の物をちよつと默つて借りて來たんだ、と言ふんだらう。」

先生の廣告隊

井伏鱒二

私の中學校時代の體操教師神田先生は、東京に出て來て輕便食堂を開業した。私は先生の唐突な訪問をうけて、そのことを知つたのである。

神田先生は實に頑迷な人で、すでに私は十年も以前に中學を卒業したものであるにもかかはらず、先生は私のことを中學生と同樣にとりあつかつた。

「しばらく君に會はなかつたが、君は瘠せたれ。多分この下宿の賄は、榮養價がとぼしいのだらう。今日は、君、遠慮しなくてもいいから、莨をすひたまひ。君は髮の毛をながくのばしてゐるんだから、莨はすつてゐるだらう？」

先生の頭髮や口髭はすつかり白くなつて、眼鏡は十年以前よりも更らに强度の老眼鏡であつた。私たちは中學生のとき、先生に大學目藥といふニツク・ネイムをつけてゐたが、（そんなに先生の頭髮口髭は偉大である）けれど今は最早、先生の顏には深い皺が出來て

ゐた。そしてその全般の容貌は、大學目薬の商標といふよりも寧ろ神農湯の商標に似てゐたのである。

先生は懐中時計を出して、それを耳に近づけて振り動かした。之は單に時間を見るときの仕草でなくて、先生が機嫌のいゝときのいつもの習慣である。おそらく先生は十年前の教へ子に會つてうれしかつたのだらう。私は中學三年の二學期のとき機械體操をしてゐて逆さに落ちて氣絶したことがある。そして息をふきかへしてみると、私は宿直室に寢てゐて、神田先生が私の頭のところに立つてゐた。

「おゝ生きたか！ おゝ生きたか！」

先生はさう言つてそのときも懐中時計を耳に近づけて振り動かしたのである。

――私は先生が何の目的で私の下宿を訪れて來たかを知つたが、先生の要求に對して私は直ぐには答へることができなかつた。先生の經營する輕便食堂は開業一週間になるが、一日平均客は五人にすぎないといふ。それ故先生は店の繁榮策として、私に廣告隊の一員になつてくれと申し込んだのである。それは先生のいふところによると、先生と私とが長方形のアンドンを背負つて、輕便食堂の附近一帶の街を歩きまはらうといふのである。すでにアンドン二箇とノボリ二本とは先生がこさえてゐる。そしてアンドンには「カロリイ豐富、安値美味」と記し、ノボリには「うまくて滋養のある神田輕便食堂の三食」と書いてあるといふ。ノボリやアンドンのほかにビラまでつくつたので、先生は明日の買ひ出しさへもできなくなつたと言つた。

私はよほど暫く考へてから言つた。

「街かどへポスタアでもかけてみたらどうでせう？」

「開店御案内といふポスターを出してみたんだがね。三十枚も書いて、それを紐でぶらさげるやうにこさえて、三丁おきくらゐに軒へ掛けてまはつたんだがね。たいていの家ではポスターを掛けるのを嫌がるやうだね？」

「神田輕便食堂といふ名前が頑固すぎるのではないでせうか？ カロリイ軒だとか、ホオル・アペタイトだとか、スウホイト食堂だとかさういふ名前にしたらどうでせう？」

「そんな名前は輕薄だね」

「食堂へ來るお客は、たいてい獨身ものが多いだらうと思ひますから、きれいな女給を置いたらどうでせう？ 月給を奮發したつて、損にはなりませんよ」

「そんなことは絶對に厭やだ」

「それで料理の味をよくして、定價を安くするよりほかはないでせう。東京ではどんな商ひをしても競走者が一ぱいゐます」

「料理の味は自信がある。買ひ出しにも自分で行つて自分で料理をつくつてゐる。たゞ自分ひとりでは忙しくて困るが、いまのところは忙しいとも思はぬ。君定價も安いよ」

若し私が先生のために職業廣告隊を雇ふことができるならば、先生はどんなによろこんだであらう。專門の廣告隊は飾りのついた陽傘を背中に結びつけ、腹には鐘や太鼓を掛け、彼等は滑稽な歩きかたをして片手で太鼓と鐘とを巧みにうち鳴らす。そして街かどまで來ると、何だか知れないが面白さうなことを怒鳴つて、通行人たちの注意をうながす。けれど私は、神田先生よりも更らにひどく貧乏であつたのだ。こんなに貧乏な人間こそ廣告隊に應募したいと考へることがあるかもし

れない。

先生はうつむいて、

「どうか頼む。電車賃は負擔する」

と言つた。

私は決して先生の廣告隊に加はることを忌避しようとしてゐたのではない。そこで次のやうな理窟をつけて、先生の要求に應じたのである。

「私がこんなに貧乏してゐるので、私に廣告隊員になれと仰有るのならば、私はお手傳ひしません。けれど若しさうでなかつたなら、大いにやります。たいへん理窟つぽいことをいふやうですが、かういふ慘めな暮しかたをしてゐると、こんなにひがみます」

先生は直ぐに立ち上り、懐中時計を耳もとで振り動かして、

「さあ出かけよう」

と言つた。

先生と私とは、神田輕便食堂の近くにある原つぱで、街をねり歩く時の練習をした。私の恩師神田先生は、左の肩にノボリをかつぐと直ぐに肩が疲れ、右の肩にかついでも直ぐに肩が疲れた。ノボリの竿はそんなに太くて長かつたのである。そして右の肩にかついだときには、ふところのビラを一枚づゝ出すのに都合が悪かつた。赤い色のビラ紙には、先生の文章でもつて體育ならびに健康に關する論文が六號活字で五十行も印刷してあつたが、こんなに堂々たる體育論は、輕便食堂の開店廣告文として適當であるとはいへなかつたであらう。食後は必ず三十分間くらゐ電車に乘つてはいけないとか、朝起きて食堂へ來る前には體操をせよとか、そんな事が印刷してあつたのだ。けれど輕便食堂に來る客は、常になるべく腹のへらないうちに用事にとりかゝらうとしてゐる。食堂が便利なところにありさへすればいゝ。

私たちはふところから廣告びらを一枚づゝとり出す練習をした。ノボリをかついで歩きながら、さういふ手先きの仕事をするには、その度ごとに人さし指を舌でなめなければいけなかつた。風の吹き工合ひによつてノボリは左右にゆれ、用心ぶかくしてゐなくては惱ごひよろめいた。私の背中では、アンドンの紙が恰も障子の紙を指で押すときみたいな音をたてゝ、背骨をあまり曲げてはアンドンが毀れさうになつた。しかし背骨を曲げないでノボリの太い竿をかつぐことは、とても困難であつた。先生のアンドンは、すでに紙が破けて「安価美味」といふ字は裏返しになつてぶらさがつてゐたが、私は先生の注意をうながすことを止した。若し貼りなほさうなぞと言ひ出されては、容易な時間では仕事が終らないに相違なかつたからである。

先生は疲れたので、私の歩行のしかたを見物することにしたが、

「もすこし、ゆつくり！」

といつて私の歩調に注意を與へた。體操の時間に先生はこの通りのことを、この通りの嚴格な口調で幾度いつたことであらう。

「先生、あまりゆつくり歩くと、ノボリがふらふらして困ります」

「肘を脇につけて！」

「肘を張らないと、ノボリが倒れさうです。先生、竿を短かく切つたらどうでせう？」

「がまんしたまへ！」

私は原つぱを一周した。先生はノボリの竿を土地へ垂直に立て、私の一歩づゝ歩行に調

子を合せて小刻みに合點する仕草をしたのである。若し私たちの歩行教練を見物してゐた人があるとすれば、歩き疲れた廣告屋が休息するための木影をさがしてゐるとでも思つたであらう。

　私たちは街へ出た。先生は私の先頭を歩いた。そして先生は通行人たちに廣告ビラをくばることに急でありすぎたので、ノボリを工合ひよくかつぐことに疎そかであつた。ノボリの竿は絶えず店の軒や看板にあたり、その衝動によつて先生は幾度もよろめいた。

「先生、ノボリが竿にまきついてゐます」

　さういつて私は先生に注意したが、

「重くていけない。君、持つて行つてくれないか？　ビラは僕がくばる」

　そして先生はノボリを私の肩に載せたのである。追加されたノボリは、私の體力を削減し、私はだらしなくひろがつた衣服の衿をあはせることもできなくなつた。額の汗は顔のくぼみからくぼみへ流れた。そしてノボリは竿の先で威勢よく風にひらめき、その手ごたへは竿を傳はつて、私のふしあはせな肩に好ましくひゞいたのである。

　先生はすつかり元氣づいて、通行人たちに遺漏なくビラを渡さうとした。けれど多くの人びとは、アンドン背負ひの與れる菊版型の赤い紙片に、彼等の利益になることが書いてあらうとは信じてゐない。彼等は先生のさし出した手にひろがへるビラを強ひて見まいとして、急ぎの用事がある人みたいに正面を向いて歩いて行つてしまふ。そして萬一にもビラを受取つたものがあるにしても、彼は一秒間後にはそれを手から滑り落して行つてしまふ。さういふとき、私は先生の悄氣加減が先生の背中やアンドンの紙に映像してゐるのを感じた。店先で遊んでゐる幼な兒や侘しげな服裝をしてゐる人たちのみが、先生の希望を充たすことができたのである。幼な兒たちは赤い色のビラをもらふと、それに何が書いてあるか讀めないにもかゝはらず、彼等は幾度も先生の傍に走りより、

「もう一枚おくれ！」

　さういつて、小さな手をさし出す。その度ごとに先生は、この上もなく得意げで且つ滿足らしかつたのである。（完）

文壇アンデパンダン【第二次豫選結果】

　われ／＼が苦熱に喘ぎながら嚴選檢討幾度か會議を經て第二豫選を通したのは下記十二篇である。審査は更に續行される、此の中より一篇或は數篇の採用作品を決定し、來る十月號（九月中旬發行）の中央公論および婦人公論誌上に發表する。同時に採用篇に對する出版要項をも具體的に發表するであらう。
　第二豫選に洩れた方の原稿は、それ／＼返戻しましたから左樣御承知下さい。

小説	土は叛く	寺神戸誠一
小説	街の國際娘	北村透馬
小説	過渡期の暴風	和田隆
小説	蠻歌	飯田眞一
小説	左側を歩め！	田宮鋼
戯曲	偶像南京に君臨す	野口活
小説	どん底に燃える	山口勝清
小説	第三投手	山本御之
小説	鉛筆娘と大統領	半田義之
小説	摸索時代（のひとりごと）	佐山けい子
戯曲	争ふ人々	小野金次郎
小説	日本海に漂へる島	豊永智友

昭和五年八月

中央公論社出版部

牧野伸顯論

馬場恒吾

牧野内大臣とは如何なる人か。吾々は最近になつて甚だしく彼れの人物を知り度いと思ふ心が起つた。それは國の客觀的狀勢が彼れの地位の重要性を加へて來たからである。

内大臣の任務は天皇陛下に對して常侍輔弼し奉る事にある。尤も國政の事に關しては輔弼の責に任ずるものに國務大臣が居る。だから原則としては内大臣は政治に干渉しない。だが、内閣更迭の際には、陛下から元老に對して、誰れに内閣を組織せしむべきかの御下問がある。今は西園寺公が元老として奉答するけれども、西園寺公亡き後はどうなるか。將來の事は何んとも豫想出來ないが、常侍輔弼の任に當る内大臣の責任が重くなる事は疑ふ餘地がない。

併し吾々が内大臣の人物に關して、非常の興味を喚起されたのは、かうした政變の時の事を思ふからではない。現在及び將來の日本の内閣が汎べて微力にして國民の信賴を得る力がなかつたと云ふ場合には、只皇室のみが國民の信賴の目標になる。其時は内大臣は内閣總理大臣以上に重要な職務となる。

元より内大臣を煩はすやうになるのは立憲政治の本旨ではない。若し今の政黨政治が眞實に國民の意志を代表する場合には政府がそのやうに國民の信賴を失ふやうな事態は起らない。だが現實の事實としては、選擧が悉く國民の自發的な投票に依つて行はれたと斷言するものはない。それが全部でなくとも、投票が買收され、金が政治を動かすことは、疑はんと欲して疑ふべからざる事實になつてゐる。其結果として既成政黨が作る何の内閣も、何れも國民に信賴せられざる要素を含んでゐる。吾々が彼等の存在を忍ぶのは只次善の策として忍んでゐるのみだ。彼等が早く灰を被つて自己精算をするのでなくば、國民の

方から玉石混淆に既成政治家を敵視する時代が來る。或は已に其時代が來たのではあるまいか。

例へば現在の不景氣問題に其兆候を見る。不景氣が只の經濟問題である間は其取扱ひは簡單に濟む。即ち吾々は辛らいのを我慢して此世界的不景氣の嵐が通り過ぎるのを待つより外はないからである。だが、それが思想問題となるときは、さう簡單に片付けられぬ。何となれば、吾々は何故我慢しなければならないかと反問し得られるからである。既成政黨の作る政府の下に一部資本家が莫大な利益を占める時、一般民衆は何故吾々のみが我慢しなければならぬかと叫ぶ。かうした狀勢の下に、國民の心を緊張せしめて、一致團結して此苦境を切り拔ける決心を起さす事は、蓋し民政黨内閣でも、政友會内閣でも其力の及ぶ處ではない。力の及ばざるとき、彼等は皇室の力に縋るかも知れない。それ故に吾々は牧野内大臣に目を注ぐに到つたのである。

牧野伸顯伯は大正十年に宮内大臣になり、十四年に内大臣になつた。彼れの前には桂太郎公、大山巖公、松方正義侯、平田東助伯と云つたやうな人が内大臣であつた。桂は内大臣になつて間もなく宮中を飛び出して、總理大臣になつたので、宮中府中の別を紊るものとして、物議を起した。憲政擁護運動が起り内閣が潰されたのが其時の事である。内大臣に政治的野心のある事は禁物である。其點に於ては牧野は極端に無難である。

田中義一内閣の時、薩摩の或人々は牧野に向つて倒閣運動を起した事がある。それは田中は長州出身の首相である。薩摩に取つては、この事が癪の種であつた。それで牧野の處へ坐り込んで、田中内閣を倒す運動に加擔せしめんとしたのである。だが牧野は其運動に動かされなかつた。宮中の重臣として猥りに政爭の渦中に投ずる事は愼むべきものとした。此人々は牧野は恰かも政友會を贔負することであるかの如く云つて憤慨したが、牧野は特に何の内閣を贔負すると云ふ譯ではなかつたらしい。前に若槻内閣の時に、政友本黨の黨首床次竹二郎は朴烈問題で政府を倒さんと企てた。同じ黨の長老山本達雄男に相談すると山本はそれに贊成しなかつた。床次も此運動を思ひ止まるかの如く見へたが、翌日になると、同じ薩摩出身の牧野の處へ行つて朴烈問題で政府を彈劾した。然るに、牧野は事皇室に關する事を、政爭の具となす事は好ましからぬと云ふ意向であつた。だから此事で床次に一臂の力を假すを肯じなかつた。

何れの内閣に對しても、牧野の態度は、陛下の御信任あらせられる内閣ならば、内大臣としては其内閣が、政策を行ふ事を援助こそすれ、邪魔をすべきでないと云ふのであるらしい。こ

れは内大臣としては正しい態度と云ふべきである。彼れは小心翼々として、此正しき態度を維持せんと勉めてゐるかに見へる。

内大臣と云へば一般世人はそれこそ頑冥固陋な封建思想の固りと思ふかもしれない。所ろで、牧野はそれとは反對に、寧ろリベラリストと云ふべき程の進歩的な思想の持主である。彼れがまだ文部大臣であつた頃彼れは或時元帥の山縣有朋公に招かれた。會つて見ると、山縣は今歐洲にはデモクラシーの思想が流行してゐる。若しそれが日本に來るやうな事があれば、日本の國體を傷ける。何んとかして此思想が來ぬやうにする分別はあるまいかと云ふ事であつた。牧野は日本が外國と交通してゐる以上、外國の思想が日本に來ぬやうにすると云ふのは到底出來る事でない。それよりは寧ろ、日本は外國の思想を研究して取るべきものは取り、捨つべきものは捨てる。さうしてこそ日本は健全なる發達を期すべきであつて、日本の國體は外國の思想に依つて動搖するほど、それほど薄弱なものでないと云ふ事を説明した。其時は山縣は此説明で滿足したやうであつたが、後になつて又牧野を招いた。そして矢張心配で堪らぬ。デモクラシーとは一體どんなものかと質問するのであつた。牧野は答へて、民の心を以て心とすると仰せられる大御心が即ち其眞髓とも云へる。日本の皇室は國民の崇敬の的である故に、國體は益々安固である。デモクラシーは國體を強くこそすれ、弱くはしないと説明したと、これは第三者を通して聞いた話であるが故に、言葉に多少の相違はあるかもしれぬのだが、意見は牧野の云ひ相な事である。

牧野は宮内省に入つて以來訪問客を斷つて、讀書に多くの時間を費してゐる。外國の思想に關しては、彼れは相當に深い研究をしてゐる。思想は思想を以て戰ふと云ふ信條を彼れ自身に關する限り實行してゐるのである。だから其方面では好んで色々の人の説を聞く。

私は大正八年巴里講和會議の時、初めて彼れに合つた。日本の講和全權としては西園寺、牧野、珍田(故人)、伊集院彥吉(故人)、松井慶四郎の五人が集つてゐた。或時、私は鈴木文治、船井陸郎(故人)、小村俊三郎の三氏と共に牧野全權からホテル・モーリスの食事に招かれた事がある。鈴木氏は勞働運動の爲めに氣焰を吐き、吾々は新聞記者的な書生論を述べた。牧野全權は厭な顏もせずに吾々の云ふ事を最後迄聞いたのである。其時私は、此人は憎まうと思つても、憎めないほどの善良な紳士であると思つた。と云ふのは私は其當時、講和會議に於ける日本の全權の行動に不滿であつた。人種平等案を否決せられて、それ

と引込む法はないと思つたからである。然るに牧野全權の憂鬱な顔を見ると、私は怒るよりは、寧ろ手を取つて泣き度いと云ふ感情に迫られた。元よりそれほど懇意でなかつたから、そんな事はしなかつた。

日本の陰險窮りなき政界に、何故牧野の如き善良なる政治家が育ち得たか。それは彼れの政治家としての生い立ちが順境に惠まれたからではあるまいか。人の知る如く、彼れは維新の功臣大久保利通の次男である。長男利和(近頃迄侯爵)は上野から高崎に行く日本鐵道の創立に關係した人である。そして大久保の政治上の遺産は牧野が相續した形になつた。大久保利通は岩倉具視、木戸孝允と共に維新の三傑と云はれるけれども、明治初頭の十年間に於ける日本の政治は大久保を中心として發展した。若し彼れに進歩的、文化的な政策を遂行せしめたる相棒があつたとするならば、それは大隈重信であつた。之に對立してゐたのが武斷的な西郷隆盛であつた。西郷は初め征韓論に敗れて薩摩に歸り、明治十年に西南戰爭を起して城山の露と消へた。大久保と西郷とは同じく薩摩の出身で、刎頸の友とも云ふべき間であつた。彼れは最後まで西郷が叛亂を起さうとは信じなかつた。西南の亂が起りさうになつた當時、西郷は日當山の溫泉に行つて居た。大久保が伊藤博文に遣つた手紙の中に、西郷は叛亂に關係してはゐない、彼れは溫泉に行つて何も知らない。西郷の流儀は若い連中に云ふ丈の意見は云はず、そして最後に一喝して靜めると云ふ風であるから、今度も今に皆んなを靜めるであらうと云ふ意見を述べてゐる。だが事實は餘りに準備が出來過ぎてゐた爲めに、西郷も叛亂の仲間入りを



最近の牧野內大臣

するに至つた。大久保は此間の西郷の心事を書物にして殘さうと企ててゐる内に、明治十一年五月十四日淸水谷で島田一郎等の爲めに暗殺されたのである。牧野は父の遺志を繼いで、後に出版された『西郷隆盛傳』に大久保の見たる西郷觀を織り込ませたのである。

明治四年に岩倉大使の一行は修交と見學の爲めに二ヶ年に亙る歐米漫遊を行つた。大久保、木戸孝允、伊藤博文など、明治政府の中堅が皆此一行に加つた。所ろで、牧野は其時十一歳の少年であつたが、兄利和と共に、父に從つて米國に亙つた。そして大使の一行は歐洲に渡つたにも關らず、此二人の少年は米國に殘つて、フイラデルフヒヤの中學に入つた。牧野は三年間米國の學校に居て日本に歸つた。小兒の時に先づ西洋の文物に觸れたのであるから、これからはミツシリ東洋の事を勉強させなければならぬと云ふので、彼れは今の帝國大學の前身である開成校の漢文科に入れられた。其在學中に父の變死に遭つたのである。牧野は七ヶ年開成校に居た。卒業すると間もなく、彼れは英國にある日本公使館のアツタセとして倫敦に往つた。

彼れが倫敦に居る際に、其時は最早明治政府の大立物になつてゐた伊藤博文が、憲法取調の爲めに歐洲に來た。伊藤は自分の先輩であり恩人である所の大久保の遺子を長く外國に捨てゝ置くを好まなかつた。彼れは牧野に向つて、これから日本に歸つて自分のする憲法制定の仕事に關係せよと云ふのであつた。牧野も已に三年も倫敦に居て、稍ゝ日本に歸り度いと思つてゐる頃であつたから、喜んで伊藤の言ふ通りにした。

蓋し牧野が最も尊敬してゐる政治家は伊藤博文であらう。牧野に云はせると、伊藤は長州出身の政治家であるけれども、彼れの心の中には長州も薩州もなかつた。只一心に國家と皇室の事を自分自身の事のやうに考へて、何日もそれを背負つて立つと云ふ心持ちで居る。伊藤は女の事などでは隨分如何はしい噂を立てられた。併しそんな事で、伊藤の政治家としての純な氣持ちは曇らなかつたのだと、牧野が伊藤に傾倒してゐる如く、伊藤も亦牧野に對してよく面倒を見たのである。

明治廿一年黑田淸隆内閣が出來たとき、彼れは總理大臣秘書官になつた。彼れの家は永田町の文部大臣官邸の向側にあつた。今も文部大臣官邸は同じ所にある。文部大臣は森有禮であつて、碁が好きだつた。牧野は其時分から碁が好きであつたと見へて、夜になると、森有禮の所に行つて碁を打つた。廿二年二月十一日憲法發布式が行はれる。其前夜も遲くまで牧野は森の碁の相手をしてゐた。翌日憲法發布式は新宮城正殿で行はれる。牧野は早くから式場に行つて居ると、文部大臣の秘書官が

駈け付けて、森有禮が刺客に暗殺されたと云ふのである。牧野は式場に居なければならぬ用事はなかつたので、直ちに文相官邸を見舞つた。森有禮は大禮服の儘絶息してゐる。雪の降る寒い朝であつた。牧野は森有禮が其思想に於ては寧ろ保守的傾向のある人だと云ふ事を知つてゐた。其人が全く世間の誤解の爲めに斃れた事を惜んだ。

牧野が世間から存在を認められるやうになつたのは、彼れが明治廿五年に組織された伊藤内閣の文部次官になつた頃からである。彼れは其時茨城縣の知事をしてゐた。それを文部大臣の井上毅が中央に呼寄せて次官にしたのである。井上毅が世に出たのは牧野の父、大久保利通に發見されたからである。大久保は明治七年臺灣征伐事件に關して、支那へ談判に出掛けた事がある。支那に行く船の中で種々の手紙を見てゐると、其中に司法省七等出仕井上毅が出した意見書があつた。大久保の隨員中には長三洲、田邊太一と云ふ如き豪傑も居たが、大久保は井上の意見の節の徹底してゐるに動かされた。これは用ゆべき人物だと思つて、電報で、井上を北京に呼寄せた。それが井上の出世の緒になつた。井上が牧野を文部次官に拔擢したのには大久保に對する感謝の意も加つてゐたのであらう。所ろで、井上は文部大臣になると、度々喀血して起き上る事が出來ない。しかし病氣はしても、元氣旺盛で、寢床に居りながら、書類を取寄せて何かと計畫する。恰かも死ぬる前に少しでも國家の爲めに盡し度いと云ふ樣子であつた。それは牧野の頭に深い印象として殘つてゐる。井上が病氣で辭職した後に、芳川顯正が少しの間文部大臣となり、それから西園寺が文部大臣となつて來た。牧野は初め西園寺の如き聰明な大臣の下に、次官としてどう勤まるかと思つた。然るに西園寺は極めて大綱を總括するのみで、文部の行政を殆んど牧野に任せ切りであつた。併し此關係で、西園寺は牧野を信用するに至つたと見へて、後に西園寺が内閣を組織する時、何日も牧野を閣僚に加へ、彼れが巴里媾和會議の首席全權にあるとき、牧野を次席全權にしたのである。

其當時は内閣が變つても次官は變らず、牧野は伊藤内閣の次ぎの松隈内閣に暫らく文部次官として留任してゐた。其時の外務大臣は大隈重信、次官が小村壽太郎であつた。大隈は小村を通じて牧野に向つて、外國に行く氣はないかと聞かしめた。牧野は暫く外國に往かなかつたので、大に其氣がある事を答へた。それで彼は伊太利駐在の公使に任ぜられ、一年ばかりして墺太利に轉任して、其所に七ケ年勤めたのである。其間に日露戰爭が起つたので、牧野が墺太利に居る事が永くなつたのである。戰爭中は露西亞の情報が牧野の手を通して日本に傳へられ

た。それは牧野の功績の一つとして記憶せらるゝ。何故墺太利で露西亞の事情がよく判つたかと云へば、當時墺太利は露獨墺に分割された所の波蘭の一部を支配してゐた。波蘭は分割されたと云へ、元とが一國であつたが故に、墺太利領の波蘭では露西亞領の波蘭の事情が手に取る如く判る。從つて墺太利では、露西亞の事情が別に間諜的の事はしなくとも、自然によく判ると云ふ順序になつたのである。日露戰爭が終り、日露の國交が恢復された時、牧野は當時の外務大臣小村壽太郎から電報を受取つた。それは國交恢復後の露西亞に初めての公使として行けと云ふ要求であつた。牧野はそれをことわつた。だが、重ねて小村から、是非往つて吳れと云ふ電報があつたので、牧野は露西亞に行く事に決心してゐた。暫らくすると、今度は西園寺から電報が來た。今度自分が內閣組織の大命を拜したから、牧野に文部大臣になれと云ふのであつた。日露戰後の政變で、桂內閣が倒れて、西園寺內閣が出來た時である。かうして彼れは第一次西園寺內閣の文部大臣になつた。第二次西園寺內閣の時には彼れは農商務大臣になり、大正二年の山本權兵衞內閣の時は外務大臣になつた。此內閣が潰れた後に、彼れは樞密顧問官となり、外交調査會の委員となり、講和會議の全權になつた。かくの如く、彼れの政治的生涯は極めて順調に進んだ。順調であつたが故に、彼れの性質はひねくれる機會がなく、其善人たる素質は七十歲になる今日迄完全に保存せられて居る。

牧野を批評するものは云ふ。牧野は薩摩人に似合はず頭が良い。自分が正しいから、物の視方も正しい。だから判斷を誤ると云ふ事が稀れだ。だけれども惜い哉、勇氣に缺けてゐる。又の大久保利通の如く天下を敵として戰ふ所がないと。成程積極的に働き懸ける事の少ない點から云へば勇氣に乏しく見へる。併し消極的に自分の所信を守る事に於ては勇氣がある。

歷史で見る大久保利通は鋭敏果斷の人のやうであるが、事實は寧ろ鈍重の人であつたと云ふ。物の決斷をするに永い時間を必要とする。併し一度決斷をすれば、決して動かない。牧野は其鈍重な性質を受け繼いだのだと思はれる。

三浦觀樹將軍は且て牧野を評して、彼れは石橋を叩いて、そして渡らぬ人だと云つた。牧野の熟慮は有名になつてゐる。其碁の永い事に關聯して一層有名になつた。牧野が且て松田正久と碁を打つてゐた時、古嶋一雄が批評して、あの二人が碁を打つて、其勝負が付くときは、內閣が變つてゐるであらうと云つた事がある。二人共西園寺內閣の閣僚であつたのである。

牧野の碁が好きなのは親讓りである。大久保は島津久光公に接近する爲めに、故らに碁を稽古した。牧野の碁は犬養毅と匹敵

して實力が初段以上である。只犬養の碁は早く、牧野の碁は遲い。何故一つ石を措くにもさう永く考へるかと、之を其道の人に聞くに牧野は只碁の勝負を樂しむのでなく、碁の味を味ふ。だから一つの石をもおろそかには下ろさぬのだと。之は已に藝術の三昧に達した境地だ。此心事を他の政事向きの事柄にも適用してゐる。さう見ると、牧野の出所進退が稍々諒解される。

それは人間であるが故に、缺點を探せばいくらも缺點はあるであらう。だが公平に觀て、牧野と云ふ人に私心のない事丈けは事實だ。又彼れとしては私心を貯へる必要もない。大久保の子として、順調に發展した政治家として、私心を有つ必要がない。只一意專心に常侍輔弼の任務を盡くし、各政黨を公平に取扱つて、立憲政治を圓滿に發達せしめる事を願つてゐる。或は其力の足らざる所はあらう。併し全身を捧げて、皇室と國民に奉仕せんとしてゐる事は、認めてやらなければならぬ。

今の政界は怒濤狂瀾の世界である。陰謀や排擊の亂舞する時代である。其間に在つて、國爭の上に超然として、靜かに時代の流れを眺める。そして一心に奉公の誠を盡さんとする。牧野は確かにクラシカルな存在だ。其所に古典的な靜寂さがある。此人の姿を考へると、心が自然に靜かになる。それは環境と修養が彼れに與へた力である。

ウルトラ物語

新居格

（一）

筆者のわたくしは今、國立アパアートの一室に住つて居る。誰一人訪ねて來る人はない。訪ねて來ないのは當然で、そこに居ることを誰もが知らないからだ。よし知つたにせよ、こんな遠いところに暑い日に誰が訪ねて來るものか。賑やかなことのすきな筆者が仕事のためとは云ひ條ちつとも口を利かない幾日を續けてゐる。人影のない雜木林の中を孤獨の散歩をしながら野生の桔梗、女郎花、撫子、百合を發見してはひとりでうれしがつてゐる。少々どうも退屈だが、これから開展して行かうと思つてゐる生活のために我慢をしてゐる譯である。

ウルトラ物語を書くには今ではわたしのペンに草の葉の匂がしみ込んで居過ぎる感じがする。空と松の樹と、草花と、毎日のやうに空をとぶ飛行機とそれだけを眺めて暮らしつゝある自分だから。

ウルトラとは「超」であり、「過」である。過激、急進的、極端の意味である。ウルトラを頭にくつ附けた文字はざらにある。英佛の字引を引いて御覧なさい。ウルトラ・モダンと云ふ言葉がある。社會運動の一派にウルトラと稱されてゐるのがある。何事によらず社會事象のうちで、尖端的な點で稍常軌を逸したやうなもの――常人の想像力をどんな意味に於いてでも超へてゐるものをキャッチして書いてくれとの注文だが、前にも云つたやうに草原に坐つて雜木林の蔭にゐては尖端感覺はとても鈍つてゐるにちがひない。それにわたしの解釋するところでは尖端が眞に尖端であらうものなら、それは錐の鋭い穂先のやうに鋭角的な筈だが却つて人目につかない性質のものではないのかと思つてゐる。云ひ換へれば、顯現的な存在ではなくて、夏のさなかにそつと忍び入る秋のそよぎのやうにそれとは分からないものではないのかと思ふ。だから、眞の尖端的なものは、特に、超尖端的のものは徴候的なものではないかと考へてゐる。だが、現代での尖端は何れも華やかな晴々しい裝をして登場する。或は怪奇にして奇拔、突飛にして駭目的な跳舞をしながら立ち現はれる。

わたしは曾つて「後端人はかく語る」と云つたものを書いて、呆きれた數箇の例を羅列したことがある。その中でわたしは歎じて云つた。われ〲の青年時代には男女ともひどく常軌的で、その間多少常軌を逸したやうな存在があつてもそれは二二ンが四、二四が八の範圍に於いての奇拔だつたが、今の青年男女になると、全く二二ンが五とも二四が十五ともなるやうなことになつて來たから驚くと云つた。だが、實のところわたしは少しも驚いては居ないので、心では痛快がつてゐるの

である。わたしの悪い癖として心にもないことを痛歎してみたり、世道人心を憂ひたりする口吻を洩らしてはみるが、それはあきらかに嘘である。その心裡を看破してかわたしのところへはつまり常軌を逸した手紙と話とを持ち込んで來る人々が多い。わたしはわれ老たり矣、そんなこともあるのかね、と嘆息しながらも一方北叟笑むこともある。

わたしは他のところで一金十圓也、小生今回東大文科に入學しましたから入學祝として右の金子を御送金下さらば幸甚と云ふ手紙を受取つたことを書いたことがある。全く未知の學生だが、こんなことは一寸想像のつかぬ仕方であつた。わたしは金がないので送つてあげなかつたが、金があつたとて送つてあげるかどうか分からぬ。いろんな文學者にもその青年は同じ文句の手紙を出したらしいが、もう少し世の中が進んで親戚と云ふやうな墻壁がなくなり、知人、友人、未知人の間の區別もなくなつてほんとうに四海同胞の感情が横溢する時代にもなれば、未知の學生にも入學祝を出すであらうが悲しいことにはその學生は少し進み過ぎてゐた。手紙をもらつた人たちも知らない人から何の因縁もないからと云ふ古風な考方で大方は送金しなかつたでもあらうと思ふ。だが、それに類似の手紙が一再ならず舞込んで來る。靜岡縣の某所から來たのがそれだ。大意はかうだ。君には一面識もない僕だが、この手紙を出す。この手紙は既に十二人の人に出したが、その人々は何れも默殺した。君は十三人目だ。そして君はこの手紙を默殺しないことを望む。この手紙を出すのは一つのお願ひがあるからだ。その願ひと云ふのは二百圓送つて呉れろと云ふことである。云々。

靜岡の某氏！　わたしは君の手紙を默殺はしない。しなければこそこゝに記録するのだ。けれど、君は事の最初に於いて認識が不足してゐる。五月も、六月も、そして七月も立て續けに月末の支拂のモラトリアムを施行した僕にあてゝ二百圓送つて呉れもないものだ。君は實にいろんな計畫を書いてあつた。よしそれが十分信憑しうることであるにしても、わたしに云つて寄越されたのが過失だ。君のねらつた十三人目の僕もお氣の毒ながら資格がなかつた。お生憎さまである。

私はこの種類の手紙を各地から何度うけとつたか分らない。だからこの種の手紙は全く刺戟が失つてしまつた。その人たちの徒勞をお氣の毒に思ふより外はない。それらを通じて考へることは共に何らかの因縁乃至引かゝりがなければ恐らく出さないであらうところの手紙がそんな觀念を蹴飛ばして出されうる時代になつたことだ。之は尖端的なことだらうか、そんな風の行き方は。何れにしろわたし共からすれば二二が五乃至七の寸法らしい。

（二）

女性の方はさすがに別である。だが、彼女たちが大膽に且つ明快にその意思と感情とを表出することに於いて異りはない。だが、卒直に云へばやゝ誇張的である弊はないでもない。

わたしは千葉龜雄氏とかう云つて話し合つたことがある。同じ言葉でありながらその言葉の意味が漸次變つて來た。古い時代の人々は昔しながらの意味で解釋をする。それだから怪しからんことを云ふものだとなる。だが、新しい今の時代では意味が違ふのであるから昔風の人にとつての驚きがあまりにも常凡に

なつてゐる。今の言葉の用法を昔風の人々に分かるべく教育する必要がありますねと。

例へばわたしがしばしば引く例だが、ある女性「がこれからはご懇意にね」と云ふところを「あのこれからは愛して下さいましね」と云つた。

今の人ならそれがご懇意にねと云ふことであることは分かつてゐる。けれど古風の人ならば「愛して下さいまし」ねと早速愛戀的な色彩を塗つて解釋するのである。その間のひらき、その間の語法の相異に關する觀念なしには現代にたいする適當な見解を加へることは出來ないのである。

この雜誌の姉妹雜誌「婦人公論」の美人投票に當選した大阪のX夫人、その人はわたしには未知の人だが、彼女は自分のご主人のことを常に「わたしの彼が」と云つて表現する。「あなたの事をゴシップ・モンガアが種にするさうだ。それはわたしがあなたの繪葉書を打ちやらかしてあつたからで、こちらはゴシップは慣れつこで平氣ですが、あなたは淑女故によしなきことをかゝれたらお迷惑ですからわたしの不謹愼をお詫びします」と云つてやつたら、彼女は「ゴシップなんて平氣よ、それよりか今年の夏の日傘の色が心配なの、黄橙色の上衣に似合ふ日傘の色が何だか、その方が餘程氣がゝりだわ」これが令夫人の放言だらうか。だから、その人の注文でその人のペットであるアンゴラ猫にモン・シェリーと云ふ名前をつけてあげたら、「いゝお名前、とても素敵、有難う（ルメルシー）ございます、この小猫も後一と月もすれば戀をし出すと思ひますわ」と返事を寄せ、彼女の弟さんは姉は唇の美容のために徒にキッスをしたがつて困ります。で、わたしは彼女の後始末のために忙がしいこと夥だしい。

だが、わたしはそれらは彼女竝に彼の好ましい氣紛れな藝術的惡戯に過ぎないので、それは好ましくはありえても常に不謹愼とも何とも思はないけれど、もしもその種の手紙を堅苦しい古風の解釋をもつてすれば、それらがどんなにみだらな言葉になることか。

だから、ある女性の如きも「あなたはけふは聖テレジアさまのやうに淸らかに見へますよ」と云ふのにたいし、「さうですの、そんなに云はれますことも時折はございますけれど、時にはあなたはけふはとても淫蕩的な顏をしてゐてよと云はれることもございますわ」と答へる。

涼しい、澄んだ空のやうな明眸でさり氣なく答へてゐる。

だが、そんな手紙や對話はホンの序曲に過ぎない。とても〳〵、「なか〳〵」の言葉だつて行爲だつてありさうなのである。

「夫婦とは何ぞや、夫婦とは。それは相對して顏を見合つてゐる間、如何にも夫婦らしく表現すればいゝのですわ。夫が居ないときは對立的關係に於いて發生した夫婦關係は内容にも、形式にも存在しないことよ。その間は地下の下水道、そこに流せばいゝことよ」

「お前は俺以外に關係のある男はあるかね」

「えゝあつてよ、五人計り」

「大抵は見當がつく。だがそれはダアチーだなあ」

「ではあなたに伺ふわ、あなたは洗濯したヘンカチやワイシャツを使はないこと」

「そりや使ふさ」

「ぢや、それと略同じじやないこと」

おゝ何と云ふ悪魔的な對話だ。

「わたしが、結婚した譯をご存じ?」

「そりや分かつてるさ、好きだからだらう夫が」

「さうでなくもないかも知れないけれど、實はあたしあなたとより自由に逢へるからよ、だつて、うちぢや兩親がとても嚴重でせう。それにあの人とても寛大だわ、だからさ、あの人と結婚したの、あなたにもつと自由に逢ひたいために」

呪はれた對話であるかな。わたしはそんな話を人からきいて、呆然とした。話したその人の作り話なんだらうか、それともさうした恐るべき對話が事實あるほど事ほど左樣にこの日本の風俗（勿論あるにしても一部特殊の例であるに違ひなからう）乃至若きものの考方に生じたものなのだらうか。

新聞紙はいつか二人の大學生が一人の女とその一切を共有しながら愉快に生活してゐたことを報道したことがある。それがもし事實あつたものなら、わたしが人にきいた以上の對話だつて强ち嘘ではなささうだと思へるのだ。

ある若い夫婦があつた。夫は近ごろ流行の馘首になつて失業者になつた。就職するのが困難なので、仕方がないから家でブラ〳〵遊んでゐた。妻は或る仕事（その仕事は寫眞の色づけだとか）のために毎日外出する。そのうちに妻君はさる會社の課長程度の人と戀に陷ちる。戀は時間を徒に消費するものだ。だから、夜の歸宅が自然と遲くなる。でも主人はそれに就いて何とも訊かない。時たま妻君が「お待ちになつたでせう、隨分、」と言つても主人公は至つて呑氣である。

「仕事があるんだから遲くなるのも當前さ」

さう云つて寢轉んで足をピン〳〵動かしながら笑つてゐる。

仕舞に細君の方がやり切れなくなつて思ひ切つて課長との關係を打ち明け、だから離緣さして頂きたいと云つたさうだ。

それでも飽迄も呑氣な夫である。

「さうかい、さうならさうと云へばいゝのだ。今迄心に持ち耐へて餘計に氣を揉む必要もなかつたらうにさ。よし來た。離緣狀かい、書いてやる。待つてお居で、おい硯の蓋を持つてくれよ」

淡々として水のやうに、また風のやうにきわめて爽やかに別かれた二人である。

かくて女は間もなく課長夫人。元の亭主はそこで妻君のやつてゐた仕事をやつてみたが妻君ほどうまく往かない。「女房がどこへ行かうが構はないが、仕事が思ふやうに取れないのはいささか閉口だなあ」と歎じた。

所が課長夫人は時々遊びに來る。夜遲くまで遊んでゐる。時には「今夜は遲いから泊まつてゆくわ」なぞと云ひ出す。

「困るなあ、お前は他人（ひと）の女房ぢやないか、今夜は、歸つてくれよ」

「構はないの、そんなにあなた困らなくていゝわよ、だから泊まつて行くわ」

「さうか、そんなことでもいゝのかなあ」

この話も他人から聞いた話であるから事の眞疑は保證の限りではない。けれど、その話をきゝながら、わたしはカアルシアンシウニヒテンの或る小說を思ひ出した。こんな話を書くと世上のモラリストたちは書くに事を缺いて何と云ふ不倫、と云ふよりもやゝこしい事を書いて世道人心を惑亂させるのだと仰言るかも知れない。そしてそのお咎めも尤だとも思ふのであるが事實以上のやうなことが存在

してゐるのだから仕方がない。常軌を脱してゐるとは明らかに言へやうと思ひますが、われ〳〵はしかしそのうちに何かを考へ出さねばならない。

(三)

エロのウルトラだ、グロテスクのウルトラだ、イデオロギーのウルトラ、さてはウルトラ・モダン、服裝上のウルトラ、生活樣式のウルトラ、流行に最尖端を行くウルトラ、科學知識の清新な光を誰よりも先きに知得するウルトラ、それはまことにさま〴〵なウルトラ的樣相と形態とがあるであらうこと、いやたしかにあることはわたしにだつて考へられる。とても常人では想像の付かない尖端があるさうだ。アメリカなぞも莫迦氣た男と女とはそれは〳〵つまらない、奇拔で突飛なことを競爭してやつてゐるらしい。耐久ダンスだ、ベイ食ひ競爭だ。サラサパリラの飮み比らべだ、ピアノの連續演奏だ、お喋り競爭だ、その他等々だが、わたしに云はせると何でそんなことが尖端であり得やう。尖端とは何ぞやと云ふと、わたしの見解するところでは理智主義が創造する合宜的な新形態(生活その他あらゆるものを通じて)の嶄新なる創成であらねばならぬ。それがとんがつてゐればゐる程尖端の度が強くてそれがウルトラにまで突き拔けるのである。であるから、尖端とは服裝について云ふなら清潔と非贅澤と無裝飾と合目的性とが生んだ極端に隙間のないカッチリした美であるべきだと思つてゐる。

兩性問題に就いて云ふなら、わたしは今どきのあくどいエロチシズムを認めない。安香水と安白粉とを撒き散らしたやうな、ゴミゴミした肉の市場に何の問題をも認めることは出來ない。わたしは不自然に堅まつた兩性の方程式を認めないと共に、不自然に混亂した方程式をも認めない。不自然に固まつたものよりは不自然に混亂した方をとる。今(露骨に云ふが)の日本には家族制度の形式的な云はゞ形骸とも稱すべきものは殘存してゐるが、內容的には著しく變化し、動搖し、混亂し、崩壞しつゝあることを認めたいやうである。それを象徵してゐるやうな生活形態が大分發生して來たかの如くである。性的解放の時代を前兆するやうな現象がそこゝにある。事實がさうでなくともさうした言論と感情とがある。例として上述した二三の對話がそれだ。課長の妻となつた女の例がさうだ。誰もさうした對話と事實とがあらうなぞとは思はなからうけれど、あるのだから仕方がない。その類のことでもつと〳〵奇拔或は古い言葉で云ふなら亂倫の現象が存在するかも知れない。それらをウルトラと云つていゝかどうかわたしは知らない。けれど、そこに間違つた固定があるとき、そしてそれが自然な形態にまで溶け込むその過渡期の一種の無晶形だとすれば、それを古い革袋でもう一度掬い取ることは出來ないのぢやないか。

眞に尖端的なものは決して常軌を逸してはゐない。それは固定的な既成の常軌からみると逸してゐることになるかも知れないが、それは云はゞ新しい常軌、卽ち新規範である。それは前にも云つたやうに微動的にまた潛在的に進んで行く。それと流俗的なウルトラとを混同してはならない。世間で云ふところのウルトラ性は遺憾なことにはやゝ流俗的色彩の現象に就いてであるらしい。そこにわたしが、謂ふところのウルトラ性にたいして疑問をもつのである。その根本的な見解をしばらく措いてウルトラ的な現象を見るとまことに多いかの如くであるし、しかもそれらは何れ

も一寸した部分的縫形に於いて成り立ちてるのだから譯はない。例へば從來の海水着のうちから背中の方をなくしたものが出來ればそれだけでウルトラモダンの海水着になるのだから容易である。帽子の形に少しく新奇に變形してもすぐにさうだ。そしてそれを一人の女が目につくやうに冠むつて歩けばそれがすぐ行人を駭目させる。惡戯なジヤアナリズムがそれをよし來たと許りに煽り立てる。

その頃溫和しい女の聲樂家某女史が一寸ばかりアメリカへ行つてゐて歸つて洋服の上に羽織をはおつて街を歩いてゐた。すると新聞社のカメラマンがそれをカメラにスナツプして紙上に揭げ標題をつけて曰はく「陽氣の加減?」。そのころには尖端と云ふ言葉はなかつた。ましてウルトラなぞとは云はなかつたが今なら「陽氣の加減?」の代りに「街上のウルトラ・モダン!」とでも題したに違ひないのである。だが云ふ、何でそんなのがウルトラなものか。そんなのがウルトラモダンならアメリカ映畫を幾つか見ればいくらでも拾ひ出せることである。何も奇抜を競ふアメリカ女にその例を求めずとも湘南あたりの海水浴場で泳ぎもしないのに華やかな海水着を着て、パウダアとルウヂユとで美しく化粧し、しやれた日傘、海水靴、紫陽花の海をバツクにシヤンペンのやうな泡を立てる渚をしなり〳〵と歩るいてゐただけでもウルトラにならあね。と云ふのは海水着とは泳ぐために用ゐるのが常軌だからである。

まして常凡の想像しないやうなウルトラ生活をキヤツチせよとの御註文だが、國立に草と木と風と空とを相手にこの日頃を過しつゝある常凡生活のわたしには出來兼ねる。

去つて硬派のウルトラに移つて考へてみよう。ウルトラ物語は例の歷史に有名なウルトラモンテン黨を初めとして、言葉としてのウルトラ・リベラリズム、ウルトラ・コスモポリタニズム、ウルトラシズム、ウルトラ・ロアイアリズム等、等、等。だが、今どきのウルトラとはウルトラ―レヴオリユシヨネールの意味である。つまり、社會思想の中の極端に過激なものになるであらう。そんなのは所謂合法主義的な存在にはならない。マルクス主義の中でも合法主義の主張に立つものは非合法主義の連中をウルトラだと呼ぶでもあらう。極左共產主義者と雖國家形態は認める。であるとすれば、國家形態をすら認めないアナルシストはさらにウルトラ的な主張だと看做すかも知れない。しかし逆の立場に立つて非合法主義は合法主義の不徹底と妥協性とを非議するかも知れない。だがそんな理屈つぽいことは物語にはならない。物語ともなればそこにあるウルトラ的な擬態についてである。何故なら、眞のレボリユシヨナリストは常軌を容易く破綻させるやうな間の拔けたことは戰術上にだつてしたがらないからである。硬派のウルトラ擬態は「この人を見よ」と云はぬばかりの見得を切る。役者のするやうな悲壯な臺詞と沈痛な表情をしたがる。だが、それが尖鋭化された分子の態度であるかのやうに容易く思はれる社會はまだ〳〵お目出たい限りである。

ウルトラ・モダンにしろ、思想上のウルトラにしろ、それが形態の上だけで問題になつてゐる間はほんものではない。

眞のウルトラは先づ沈潜する。そして時を得て冲天の勢で飛躍するものであることが考へられはしないか、浮動せる社會の表層にうたかたの如く浮びながれるウルトラ、今はその時代でありはしないか。

國際庭球戰に於ける 日本選手の活躍

福田雅之助

　一九二一年(大正十年)は東洋の一孤島日本が澎湃たるテニスの大洋に生れ出でた年である。アメリカに於て名聲嘖々たる熊谷に、印度を風靡した清水がウインブルドンを經てアメリカで合し、理知に富む柏尾をマネジャーとして、日本はデヴィスカップ戰の第一歩を玆に印した。その成績は華々しかつた。決勝に強剛アンダソン、少壯左手のホークス、及ドッドを以つてティームを組織した老大國濠洲と對戰した。而もその經驗に富み優秀な技術を持つオーストラリヤを無名の日本が四對一で一蹴し去つたので、世界はアット驚いてしまつた。それで初陣の日本は光榮ある戰ひをカップ保持國のアメリカに挑んだ。アメリカはティルデン、ジョンストンの二大家がシングルスにウイリアムス、ウオッシュバーンがダブルスに、動かばこそのティームを作つた。熊谷は不幸枯草病にかゝり振はず、ダブルスは簡單に破れ、只清水がティルデンに對して二セットを先取し、後二ポイントを得れば巨人ティルデンを斃し得たと云ふ名高いスパイクの跡を史上に殘して終つた。日本の參加はデヴィスカップ史上に著しい印象を與へた。それでニューヨーク在留の日本人は此光輝ある戰跡を永久に記念する爲め醵金して大銀杯を作つた。それがニューヨークカップで第一回以來、全日本シングルスのチャレンヂカップとされて居る。日本人が感嬉したばかりか、アメリカの球界に日本のテニスを徹底的に知らした。そのエピソードとして三菱銀行は熊谷バンクと呼ばれ一時に名が揚がり、預金が頓に殖へたとの事である。日本の誕生は誠に目覺ましいものであつた。

　それ程世界のテニスに大きな波紋を畫いた日本の進出も、當の日本の内地に於ける響きは誠に微々たるものであつた。日本の新聞は「運動界便り」として、外電をほんの四五行報じスコアーの載つて居るのが上々であつた。日本人の頭には、それ程デヴィスカップなるものがピンと來なかつた。然し十年後の今日は如何か。デ盃戰は社説に論ぜられ、その報導は二段拔で數段を費して居る。時勢の進化とは云へ日本がテニスに向ける目の著しい變化を物語るものである。

　確か大正九年の秋に軟球の三校鼎立、—早大、高商、高師—が破れ東都は俄然硬球に移つた。慶應は既に孤立しつゝも雄々しく硬球を採用して居た。大正九年は日本のテニスのエポックメーキングである。當時我々はレギュレーション〳〵と呼んで居た。ハードボールの名稱は餘り用ひられて居なかつたと記憶する。その名を今呼び返して見ると過去の匂がする。勿論ボールなどは決して潤澤ではなかつた。それで東京ローンテニス倶樂部の使ひ古したスラゼンジャーボールを讓り受けて解

らない硬球を軟球式にプレーした。古ボールだからフェルトは既に擦り切れて居たし、當時は縫目があつたのでそこから綻びて來たそれを丹念に縫針で縫ひ直し地の目がはつきり見へる迄打つて打つて打ちまくつた。ラケットは硬球用としては高價なものが、銀座のファーマシイに輸入されて居たもの丶、外人が賣拂つて行つた古ラケットを横濱の山下町の古道具屋に探しに行つたものである。若しガツトでも張つてあるものを見附ければホク／＼として喜こんだ。だから當時二本のラケットを持つて居るプレヤーは稀だつた。第一回K・Sカップ戰が大阪の鳴尾で行はれた時あれ程のマッチにライトボールが二、三打しかなく、而もコートが濡つて居たのでボールは直ぐ黒くなつてしまふのに、セットでも濟まなければ變へて貰へなかつた。ガツトの張りなどプレヤー自身でさへ解らない位で、肝心なルールは生半可だつたのでコートチェンヂなど苦心したものだし、審判のコールなど怪しいものであつた。

然し硬球の禮儀などは好く守り兎に角新しい道に向つて孜々として研究の道を歩いて行つた。實に血の出る樣な思ひがあつた。何事も最初に道を開いた人は苦心慘憺して居る。

大正十年の秋凱旋將軍の如く清水選手が歸朝され硬球の洗練された妙味を日本のプレヤーに示し未だ見ざりし境地を展開し日本のテニス熱を頓に煽つた。

ニューヨークカップが日本庭球協會にニューヨークの日本人から寄贈されて、大正十一年の秋帝大コートで全日本男子選手權大會の第一回が開かれた。帝大コートを圍むテニスファンは黑山の樣であつた。

越えて大正十二年の春我國から最初のデ盃戰選手として福田が送られた。在米の清水、柏尾の兩選手に合してデヴィスカップの第一戰をモントリオルに於てカナダと對戰した。モントリオルに於ける日本の人氣は素晴らしいもので、カナダが敗戰の浮目を見ながら、三日間を通じて三千人以上の觀衆がコートを圍んだ。恐らくカナダ人で日本人を見た人は初めての人が澤山あつたであらうが、日本人のプレーを見て日本に好意を示して集れた事は非常である。清水のスマイルは殊に有名であつた。モントリオルに於ける數日はカナダに日本を知らしめたと同時に、我々はカナダの人間をよく諒解したと思ふ。ケベックには日本の領事館があつたが、日本人と云ふものをカナダ人が好く知つたのは或はこれが始めてゞあつたかも知れない。我々を一日ハドソン河流の清楚な家に招いて呉れた、ルーサー一家とは未だにクリスマスカードを交換して居る。人情は何れの國の人も美しい。幸ひ五對零で勝つて忘れ難い思ひ出を殘したモントリオルを後にして、強敵濠洲に對戰する爲めに我々はシカゴに向つた。

清水は少壯のホークスに捻られる程老へては居なかつたが、二年前アンダソンを斃した程の意氣はなかつた。福田は只善戰したに止つて日本は四對一で濠洲に破れ、大正十二年のデ盃戰の幕は閉ぢられた。

日本人として忘れる事の出來ない大正の大震災が九月に起つた。忘れもしないウエストサイドで夕刊を見て横濱が大火だと云ふ事を知つた。その後の我々の心配は言語に絶すると云へる。實情を知る事が出來ぬだけに一層痛切であつた。レクドクロッスの活躍は目覺ましく涙ぐましかつた。それと共に庭球關係

で忘れ難いエキシビションを催して呉れた。そしてその收入を全部日本への義捐金として寄附して呉れた。一はジャクソンハイツ、一はメープルウッドであつた。ジャクソンハイツの催しにはティルデン、ウオナー、アロンゾ兄弟、單身小ヨツトを操縦して渡米したフランスのゲルボール等國際的の集りであつた。メープルウッドではティルデンが自身コートの上で彼のラケットをオークションした。その價二百弗、私のガットの切れたラケットに對して百五十弗のチエックが送られた。これなどはスポーツを通じての誠に麗しい人情美の表はれでラケットからラケットへボールが彈き返される間に醸された國境を超越した善意として特に記し度い。

大正十三年には原田がアメリカへ來た。そして福田と共に日本代表ティムのメンバーとして更渡英した。清水に次いで印度で名を爲した岡本は遙々印度からロンドンに到着し、太田は上海で病でたふれたので代りに本多が來、並にオリンピックの日本代表は勢揃ひしてウキンブルドンに參加した。濠洲の名人ブルックスが四十歲の老齡で倚ハンターの少壯を屠る妙技に一驚した。ラングラン孃がコートに姿を表はすと觀衆は雲崩を打つてそのコートを圍んだ。ブルックスにしても、ラングランにしても孰れもその國の名を脊負つて居ると感じさせる。或ショーハーが「清水」は如何したかと聽いた。それ程清水の名は英國には有名である。清水の名の口に洩れる處そこに日本が生きて居る樣に感じて嬉しかつた。

我々は愈々パリのオリンピックに參じた。福田はチンメルを破つたが其次はコシェにアサリ片着けられ、本多はボロトラから一セットを奪つて退き、岡本クレーコートで振はず、原田はラストエイトに殘つてモルプルゴの爲めに破れた。我々の成績は華々しいとは云へなかつたが、パリジャンにジャポネの名を口にさし、日本と云ふ國の存在を知らしめる貢獻はあつたと信じる。我々はラケットを携げた日本からの使者であつた。

岡本、原田、福田と三人ニューヨークに歸り直ちにカナダのモントリオルに再び行く。シングルスは岡本、清水、ダブルスは岡本原田、シングルスに全勝したがダブルスに惜敗した。懐しいハドソン河のルーサー家を尋ねて舊交を溫めたことは嬉しかつた。

直ちにアメリカのプロヴィデンスに引返して濠洲と對戰した。パタソンとホツドが全てのプレーを二人してした。日本はカナダ同樣の組合せで行つたが五對零で敗退した。

一九二五年に日本は日本の敗北が一般に豫想されて居た強敵スペインをバルティモアーに於て擊退した。この勝因は原田の活躍がシングルスに弟のアロンゾを破つたからであつた。ダブルスは頗る危い瀨に臨んだが清水の老巧が好く日本を危地から救つた。スコアー三對二。濠洲とアメリカゾーンの決勝をボストンで行つた。原田が勝敗決定後パタソンに快勝しただけで、日本は一九二三年以來苦手のオーストラリヤに三年連續して敗退した。

一九二六年は日本に取つて記憶すべき戰績を殘した年である。原田鳥羽俵と三人がティームを作つて先づメキシコへと遠征した。そして鳥羽が一點を讓つただけで終り、サンフランシスコでフィリッピンと准決勝を行ひ、此を一蹴し更にモントリオルでキューバと決勝を行ひ五對零の大勝を博した。オーストラリ

ヤが參加しなかつたので日本は易々としてアメリカゾーンに勝ち歐洲ゾーンの優勝國フランスとフォレストヒルスでインターゾーンの決勝を行つた。前年パタソン、アンダソンを屠つて一躍フランスをしてチヤレンヂに入らしめたボロトラは、此年のティームには居なかつた。ラコスト、コシエ、ブルニョン、が日本に對戰した。原田は第一日ラコストを破つた。俵は二セットを先取して後二ゲームでコシエを粉碎する處迄行つた。然し後の二ゲームから引つくり返されて惜敗した。ダブルスは第三セットに2ゲームを得ただけで後の二セットは零を喫せられた。餘りに悲慘なレコードであつた。原田は第三日目コシエを擊破して日本のフアンに驚天動地の思ひをさせた。それ故俵のコシエに對する惜敗を一層殘念に思はせた。日本に取つては惜しいチヤンスであつた。原田はジョンストン、ハンター、ラコスト、コシエの世界的名選手に快勝して此年アメリカのランキング第三位の名譽を得た。熊谷清水の出現後日本は久しい間これに次ぐプレヤーがない物足らなさを常に感じて居たが、一九二四年渡米以來一心に此技を磨いた原田は、茲に於て二大先行者の優るとも劣らざるプレヤーとなり、日本のテニスの名が漸く世界的に忘れられ樣とする時に於て、再び日本の名を白熱的に燃へ揚らしめた。原田の功績は偉大である。

一九二七年清水をキヤプテンとし、原田、鳥羽、太田はロンドンを經てアメリカに赴き、三木の手腕が認められてティームに加へられ渡米した。

第一戰はセントルイスでメキシコと對戰したが、キンセイ兄の問題が起つた。然し原田太田共に樂々キンセイを破つたので懸念した程の事なく、淸水原田がダブルスに負けたのみで終つた。

モントリオルでデ盃戰四回目のカナダとの對戰を行つたが、結果は意外であつた。ライトの進境が著しく、賴みにした原田はストレートで破れ、太田もその轍を踏み、二人共クロツカーから二點を奪ひ鳥羽原田で二セットオール後ダブルスに奇勝を博したので漸く敗北だけは免れた。そんな哀れな調子だつたので、原田は前年の樣な凄い當りを見せなくラコストに、太田はコシエに[illegible]され、日本は三對零で再びフランスに破れた。フランスは旭日昇天の勢でアメリカに挑戰し、ラコストがティルデン、ジョンストンの兩雄を屠り、コシエが最後のポイントをジョンストンから奪つたので、一九二〇年以來世界を風靡したアメリカの殿堂は茲に崩壞して、デヴィスカップはパリに渡つた。

一九二八年は安部が新たに日本から行き、鳥羽太田と共にキューバとカナダを破つたが、アメリカに五對零で慘敗した。

一九二九年には太田安部がアメリカとアメリカゾーンの決勝を行つたが、アメリカはヘネシー、ヴアンリンで日本を四對一で破つた。太田對ヴアンリンは太田セットをリードされ確か5オールで中止となり、次の日にマッチが延期された。太田は此悲境から美事に挽回してヴアンリンを斃し、貴重な一點を日本に齎した。

今迄の日本のプレヤーは、アメリカを目指して行つたが太田はロンドンに滯在した。そしてロンドンを中心として全ゆるトーナメントに出場した。勿論メンスシングルス、ダブルス及ミツクスドダブルスに出場した。或時は八度優勝を續けるレコードを作つた。それ故太田の名は普くイギリスに知れ亘つた。國[illegible]々、而も[illegible]の感情を表へ出さないで默

々としてプレーする太田は何處までも日本人である。殊に角太田は今迄の日本人が全てアメリカへ行つたのに、彼はロンドンに向ひ、そして今迄餘り知られて居なかつた日本のテニスを歐洲に知らしめる魁をなした。

昨年の秋はコシエ・ブルニヨン・ランドリー・ロデルのフランスティームが來朝した。原田が第一戰でコシエを破り、佐藤(次)がブルニヨンを、それから關西に於てコシエを除いて續々日本のプレヤーがフランスのプレヤーを破つた。電信は世界に散つて日本のテニスの充實味が知られた。歐洲ゾーンに出る時期が今年到來した。日本は原田、太田、安部、佐藤と云ふ、今迄にない充實したティームを作つて、歐洲に遠征した。佛のリベラ、ロンドン等でシーズンの初めの技を練つて居た日本ティームは、五月二日から、ハンガリーの首都ブタペストで、ハンガリーに對戰する事になつた。ハンガリーにはケールリングと云ふ名プレヤーが居るので少し不安を感じたが、原田の健闘はその不安を美事に除き日本は四對零でハンガリーに勝つた。ブタペスト、ハンガリーの名が我々に親しまれた樣にブタペストで日本人のプレーを見たハンガリー人の日本人に對する印象は深かつたであらう。第二回戰は東洋の友邦であるインドとロンドンで顏を合せた。幸ひ樂々と四勝した。次いで日本のティームは、フランスのハードコート選手權大會に出場した。二回戰で原田は濠のホップマンに、安部はモルプルゴに破れたが、太田は英のコリンス、佛のロデルを破つてラウンドを重ね、四回戰で佛のボロトラと對戰した。二セットオールとなり、太田が6—5で優勢の時ボロトラが脚に痙攣を起したので太田はボロトラが回復する迄猶豫を與へた。このマッチはテニス界の論爭を起した。が太田のスポーツマンシップは假令惜敗したが大いに賞揚された。米のハンターとベルの或る試合にベルがスマッシュしてマッチポイントを得たが、その爲めに痙攣を起してコート上に斃れた。ハンターはアンパヤーに『マッチポイントが冷へるを待されるのは俺には堪へられないから俺が相手を棄權にして吳れ』と審判に申込んでサッサと引上げたそうである。それで審判はベルを棄權にしたと。ベルは頗る不服だつたとの事である。英のオースティンが昨年秋のプレンと對戰し二セットオールとなつた後やはり痙攣を起した。その一點が英獨の決勝點となる貴重なポイントだつたが、オースティンは休まなかつた。そして潔く棄權した。こんな例は色々ある。皆マッチが決せられ樣とする瀨戶際である。そんな時各國の國民性が表はれるから面白い。

ロンドンからスペインのバロセロナに長驅した。そしてスペインとデ盃の第三回戰を行つた。日本は四勝した。然しダブルスには意外の敗北を嘗めた。そのラストポイントは原田がアウトだと思つたので受けなかつたが、ラインスマンはインにした。それで結局呆氣ない終りとなつたが、觀衆はアウトと認めて、日本ティームに破れる樣な拍手を送つたと報じて居る。原田も不滿であつたらう然し笑つて讓つた處に日本人の特徵が窺はれる。アメリカ人なら一揉めする處である。

チェッコの首都プラーグに第四回戰を行つた。原田が初日にメンツェルに破れた意外の報知を握つた。太田は第三日にこれ又同じプレヤーに負けて日本はチェッコに二點を奪はれて驚いた。大陸は廣い。意外な處に意外な強敵が潛んで居た。又ロンドンに舞ひ戻つてウホンブルドンの大會に參加した。佐藤はアイルランドのロシヤースに、太田は米マンギ

ンに第一日に轡を並べて斃れ、三回戰には原田は英のグレゴリーに、三木はマンヤンに、安部は南阿のスペンスに破れ、日本のシングルスはこゝで全て消え去つた。原田安部は二回戰でアリソン、ヴアンリンにストレートで片着けられ、三木、佐藤は三回戰を生延びたが、濠洲のホツプマン、ウヰラードに負けて、ウヰンブルドンの潮面は終つた。歐洲ゾーンの決勝は尚耳新しい七月十一日から三日間、伊太利のゼノアで伊太利と鎬を削つた。原田は第一日に敗れて居たモルプルゴを、而もストレートで打取つた。一勝一敗となる。ダブルスは大丈夫と思つて居たのに意外の敗報に接し優勝の希望は薄らいでしまつた。第三日に太田が引つくり返すのを唯一の望にして居たが、モルプルゴは餘りに強かつた。日本は三對二の接戰で伊太利に敗れ日本としてのデヴィスカツプは終りを告げた。

日本は南航北馬して五ヶ國と戰つた。捷報が頻りに傳へられただけでも日本として嬉しかつた。今迄アメリカに向けられて居た目が歐洲の大陸に向けられた。ライトボールからスラセンジャーへの變化の樣に。ドローも好かつたが日本が決勝に入つたのは決して偶然でない。慾を言へばイタリーを敗つてアメリカと血戰したかつた。然し日本の得た收穫は有形無形に於て非常に大なるものであると信じる。先づ日本の名を歐洲の全土に知らしめただけでも偉大な貢獻である。異なる國々のプレヤーに對戰した日本のプレヤーは得難い體驗をした事であらう。東奔西走席の溫まらない程忙しい活躍を續け、ホームコートに待つ相手をビシ／＼斃して行つた處は實に痛快である。今年のデヴィスカップの參加國は歐洲ゾーン廿四ヶ國、アメリカゾーン四ヶ國で都合廿八ヶ國がフランスに向つて挑戰した。世界にこれ程大きな動きはない。ロンドンの軍縮會議にどれだけの國が集つたであらう？　これ等の國を代表するプレヤーの旅券はラケット一本である。プレーヤが行く處の何處のコートにも善意と友情とアンダスタンデングがある。七割とか八割とか相互に相手の顏色から貪欲の腹の底を探らうとして居る軍縮會議とは雲泥の差である。コート上に於ける國際的競技は餘りに公平である。餘りに明る過ぎるから不純の混る餘地がない。心から融和した國交である。スポーツを通して結ばれた國交は、シルクハツトにスワローテールのそれでなく、直接心から心への結び着きである。人間本質の蘇りであるから殊に尊い。

日本は今年の歐洲ゾーンの參加に據つて日本のテニスの世界的地位を判然と知つた。原田太田安部は既に先行者である。日本は其等のプレヤーより優れた若人を作り上げねばならない。其等のプレヤーに優れたものは必ず出る。日本として出さねばならない。其曉に始めてデ盃獲得が夢見られる。アメリカは若人に據つて今年のデ盃選手が組織された。之等若人の意氣は甚だ強い。或は今年かも知れない。今年でなくとも近き將來に必ずデヴィスカップは寄贈國に還る。アメリカは底力のある新人を多く持つ。これが强味である。テルデン、ジョンストンの樣なベテランが現はれると其等の新人は影に隱れる。

日本はアメリカのテニス歐洲のテニスを殆んど諒解した。これから日本は日本としての特徴を持つテニスを編み出さねばならない。日本はその針盤によつて飽く迄勇敢に進んで行けば好い。そのテニスとは何？　コシエ流のそれではない。常に偉大なティルデンのテニスであらねばならない。（一九三〇、七、一九深夜）

玉の腰の女王

丸木砂土

ぶうしえ描く

佛蘭西十八世紀の畫家フランソア・ブウシエ程、女の臀を描いた畫家はあるまい。しかもそれは悉く玉の臀である。玉の腰である。巴里倫敦の名立たる畫廊に蔵する「ヱヌス」、「レダ」、「ヱヌスの勝利」、「横たはる少女」、「パンとニンフ」は、すべてがロココの美であり、十八世紀の精神であり、その繪の中心は女の臀である。

この女の臀の畫家を、最愛した女王こそ、「國王の爲の賣春婦」と稱せられた、ルイ十五世の寵姫ポンパヅウル夫人に外ならない。夫人の麗姿をゴンクウルは書いて、その肌は眩くばかりの白さである、唇は稍色褪せてゐる、けれどもその眼は、何とも言ひ現し難い色を持つてゐる、黒い瞳は蒼みがかつて、誘惑する魅惑を帯びてゐる、その髪の色は、明い栗色の花やかさを帯び、その齒の美さは言ふまでもない、最も人に媚びる微笑は、兩方の頬に笑くぼを浮ばせてゐる、と描寫してゐるが、ゴンクウルの尙力說してゐる處は、その腰である。ポンパヅウル夫人の腰は、圓くして、大きくもなく、小さくもない、見事な臀の恰好であつたに相違ない。そこで夫人の御愛顧を蒙つてゐる艶美の畫家ブウシエが、この一國の帝王の寵姿の、丸々と臀を現した姿を描いても、更に不思議はない筈である。或は太陽の王ルイ十五世も、女の臀の圓さを特に愛せられた帝王であつたかも知れない。嘗て王に媚びんとする侍臣が、十五歳の少女の裸像をブウシエに描かしめて之を獻じた處、そのモデルとなつた少女は直ちに召されて、王の愛撫を蒙る事となつた例がある。ブウシエはこの娘を描くに、長椅子の上に腹這ひになつて、無遠

歐に臀を現はした姿勢を執らしめたが、後にポンパヅウル夫人も亦、これと同じ形をとつて、美しく軟かきクッションの上に、長々と腹這ひになり、肩から腰へは、僅に薄衣を以て被ふも、この線の眞中に、花の如くに開き丘の如くに圓く蹲まるものは見事な夫人の臀に外ならない。そこから美しき左の腿は、長椅子から下へ、右の腿はクッションの陰へ、いづれも甚だ肉欲的に投げ出されてゐるが、殊に左の部分に至つては、豐麗なる臀から分岐する腿、柔き關節、膝の後の薄き膚、滑かな脚から足の裏の極めて微細な美しい皺を見せた處に、ブウシエの並々ならぬ好色畫家である性が窺はれる。

臀は第二の顏である。ポンパヅウル夫人は何を好んで、この第二の顏まで、ブウシエに描かしめたか。これはルイ十五世の寵愛を一日も衰へしめず、この淫猥なる帝王をいやが上に刺戟せんとした一方法であるに過ぎない。夫人は元來が餘り健康無比の體ではなかつた。ルイを誘惑する爲には、秘に自ら刺戟劑を用ひて昂奮せしめ、秘戯愛撫の途に出でたものらしい。これはゴンクウルの書いたやうに、夫人の唇の色が決して鮮かな色でなかつたといふ事に明かである。夫人は白帶下の持病があつた。巴里の惡戯な人マウレパは之を嘲笑して

夫人を飾る多くの美あり
生々したる諸相と自由の姿
又その足の下より花開き出づ
惜むらくは、白き花なることを

と言つてゐるのは、華麗の女王の人に言はれぬ病氣として、餘りに痛々しい。

けれどもブウシエは必ずしもポンパヅウル夫人を裸でのみ描いてゐるのではない。世界の名畫として殘つてゐるブウシエゑがく夫人の肖像に、長椅子の上に稍寬いだ形を以て腰を下し、顏を半ば横に向けて。いかにも戀を想ひ戀を待つ貴婦人の姿を描いてゐる。支那絹のクッションに突いた右手、膝の上に本を持つ左手、顏には僅に白粉を施し、髮には僅に一二の花を飾り、胸のあたりは四角く肌を露し、小さい薔薇と銀のレエスを以て取圍み、長い裳の下からは、薄桃色に銀の刺繍をした細い靴が、夫人のいつもの癖で、組み合はして見えてゐる。十八世紀ロココの華麗時代を代表する美人がポンパヅウルであるならば、この時代を代表する精神は、ブウシエの彩管でなければならない。この女は常にこの男の空想によつて化粧し裝飾し、この男は常にこの女の下僕となり顧問となつて、愈々その美を琢磨した。畫家は夫人の居間に自由に出入した。すべての秘密を知つた。すべての戀愛を耳に入れ、すべての立案に參與した。ポンパヅ

ウル夫人がルイを翻弄した一切の美的誘惑は、恐くブウシエの幻想を實現したものと見てよい。

退屈なる十八世紀

私は十八世紀といふものを、寧ろポンパヅウル夫人の生れた千七百二十二年から、死んだ千七百六十四年迄の間と考へたい。八代吉宗將軍の享保年間から、十代家治將軍の寶暦年間に至る時代であり、日本のロココ元祿は過ぎたが、人間は繊弱安逸を好んだ頃である。ゴンクウルは佛蘭西のこの時代を以て、美しき退屈の世紀と名付けた。あらゆる社會的生活の華美と繊麗と優雅とは、發達し切る處まで發達してしまつて、人はこの完全なる享樂の中に、遂に自分自身でもどうかしなければならない世紀病に襲はれたのである。それは無限なる疲れである。それはすべてのものから趣きを、生活から驚きを奪つてしまふ、何とも分らない或るものである。この無限の何とも分らないものこそ、この時代の世紀病であり、この贅澤なる病氣から生れた道德こそ、極端なる惡であり、恐るべき好奇心であつた。人は好奇心から自殺さへした時代である。

この退屈を代表する人物こそ、ルイ十五世に外ならない。ゴンクウルはこの一人の王者の戀物語は、一人の男の退屈の物語に過ぎないと斷言してゐる。ルイは千七百十年の生れであるから、ポンパヅウル夫人よりは十二年も年上である。「多く愛されたる者」ルイの名は、必ずしも二十八人の寵姫嬖妾を備へた爲のみではない。その性格の眞直と溫柔とは、眞に佛蘭西人の愛好する處であつた。けれどもルイは自ら國政改革の任に非ずとして、王位を捨てやうとしたが、これを捨てては今度は自らの享樂を滿足せしめる方法がない。ルイは自分の歡樂の爲に佛蘭西國家の百年の大計の前には、目を閉じたと言はれても止むを得ない。けれどもルイの眞に好きなものは狩獵のみであつて、この他一切の淫樂歌舞は、これによつて唯退屈を逐ふための手段に過ぎなかつた。この退屈がルイの善良なる性情と生きんとする心を、恐く窒息せしめ、之に加ふるに宮廷の毒された空氣が、ルイの青春の力を奪ひ、黄金の籠に閉じこめられた退屈の憂欝の中に、次第に沈湎していつて、心を衰へしめ身を細めたのである。

この退屈を救はうとして、美貌才氣、肉欲情操のあらゆるものを捧げ盡したポンパヅウル夫人に、ルイがその言ふが儘に身も心もしかも一國の政治をも放擲したとしても、決してこの二人の惡德と呼ぶ事は出來まい。ルイの寵を得た夫人は、寸時も王を退屈させない事に盡してゐる。夫人が宮中に入つてから、

ルイの宮廷は恰も十八世紀のアラビヤ夜話の世界となつたと言はれたのも、偏にポンパヅウル夫人の力である。

成り上らんとする女

この一世の美婦ジャンヌ・アントアネツト・ポアソン・ポンパヅウル侯爵夫人も、生れは決して好い家柄ではない。僅にオルレアン公の主馬頭の娘である。千七百四十一年に從弟と結婚して、エチオル夫人と稱したが、これはほんの形式的結婚に過ぎない。從弟は體も醜く小く、夫人は夫に對して甚だ冷淡であつた。けれどもこの結婚は夫人にとつては、一つの手段であり過程であつた。夫人はこの結婚によつて、今迄よりも高い社會的位置と多少の財産を得た。ここに十九歳の花の如き若い貴婦人が先づ出來上つたのである。

そこでこの若い女は、なぜ國王ルイに近付かうとする、驚くべき野心を起したか。それはポンパヅウルの弱點でもあり、女の弱さでもある迷信で、これは後になつても祕かにヱルサイユへ呼び寄せて占はせてゐた骨牌占ひの言葉と、娘の美しい成長と才智を見て、思はず母親の洩らした獨り言が、若いエチオル夫人をして、自ら「國王の爲の一口の食ひ物」と成らんとする希望を起させたのである。そこで今の結婚生活を打ち破つて、新たに男を持つならば、それは國王ルイの外はないと確信したポンパヅウルは、どうやつてルイの目を牽かうとしたか。

これ以來ポンパヅウルは、あらゆる機會と時間とを利用して王の目につかうとした。もとより夫人には少しも頭の上らぬ夫は、之を否應言はせない。それにはルイの最も好んだ狩獵の機會を掴んで、御獵の人々の集るべきセナアルの森に出掛けて、そこで夫人は御獵の人達の馬の間、犬、從者の間へ、さながら蝶のやうに、忽ち青い衣裳、忽ち薔薇色の衣裳と、瞬時に衣裳を着替へては、翩々として立ち廻つたのである。物々しい狩獵の人達の間に、この花やかな美婦人の擧動は、誰の口にも上らざるを得なかつた。王は之を見て直ちに次の日には宮廷で「可愛いいエチオル」の噂さが上つたものである。その次には千七百四十五年二月二十八日のマリア・テレシアの謝肉祭大假面舞踏會であつた。ルイ十五世は、踊の最中に一人の美しい假面の女に捉へられた。王は極めて巧妙な手管と口說にそのかされて、思はず乘り出してきた時に、この假面の女はハンケチを床の上に落した。國王ルイはこのハンケチを拾ひ上げた。それから二三日たつと、王は寢所に入つて、侍從の一人ビネエと女の話をした。ビネエはエチオルの親戚で、忽ちこの假面舞踏會の女の話が出た。エチオルは言葉巧に、この女が小さい時から國王ル

イを好いてゐると吹き込んだものである。すると今度は謝肉祭の後四月の第一週に、ヱルザイユで伊太利喜劇の催しがあつた。この時舞臺の隣の棧敷には、エチオル夫人が盛裝して現れてゐた。その後である。ヱルサイユ中に、國王ルイが人を交へずにエチオル夫人と晩餐を共にした、といふ噂が立つた。更に四月二十二日には、エチオル夫人は國王に二度目の晩餐に招かれた。お相伴をした男は、ルクセンブルク公爵とリシユウリウ將軍であつた。その晩王は西班牙大使の舞踏會にお出ましに成る筈であつたのが、遂に顏を見せずに、しかもその晩餐が翌朝の五時まで續いたといふ事であつた。その晩エチオル夫人は侍從ビネエの差金で、どこまでも温和に、嫋々たる樣子をして見せた。

ここまで近付いた夫人は、ルイの腕に抱かれ乍ら、今の夫がこの關係を耳に入れれば、どんなに自分はひどい目に逢はされるか、それが怖いと口說き出した。王はヱルサイユの隅にある家に夫人を隱し、夫エチオルを遠ざける約束をした。五月六日に王はフランデルに出掛けやうとして、遂に初めてエチオル夫人を自分の妾にすると斷言した。千七百四十五年九月十四日には盛大なるこの「國王の爲の賣春婦」の謁見式があつた。夫人はルイと改めて拜謁してから、皇后マリイ・レスチンカにお目にかゝつた。この皇后と愛妾とが逢つたら、どんな話をするだらうとは、巴里あたりで盛に取沙汰されたものだが、皇后は夫人を引見して

「マダム・ド・セサクさんのこの頃の樣子を知らせて下さい。わたしは巴里で懇意にして、何度も逢つてゐますから」

と言はれた。夫人もこれには間誤ついて

「皇后樣、必ずとも心にかけて、お知らせ申上げます。」

と答へて、引下つたさうである。

かくして貴婦人エチオル夫人は、見事にポンパヅウル夫人の名を賜つたものである。

芝居の夜

これから以後の宮廷に於けるポンパヅウル夫人は、誠にこの世をば我が世と思ふ槪がある。大官を左右して、財政外交に口を出し、親類縁者を高位高官に就かしめて勢力を扶植する等大いに努めた。けれども何と言つても夫人の仕事は、ルイをして一刻も退屈せしめないに在つた。かくして十八世紀に於ける千一夜の宴は初まつたのである。

夫人は王を悅ばす最も好い方法として、先づ芝居を選んだ。善美を盡したヱルサイユ宮殿内の廊下に、急拵への舞臺では、

千七百四十七年一月十七日に佛蘭西で初めてモリエルの「タルテユフ」が國王の面前で演ぜられた。この無遠慮な喜劇が、退屈がつてゐる國王の氣に入つて、大いに笑はれた事は云ふ迄もない。管弦樂は專門家でなく、宮中の人々が受持ち、女優の筆頭にはポンパヅウル夫人自ら立つた。國王は簡單な椅子に腰掛けて見てゐたが、ある幕が終ると、夫人に向つて「あなたはこの佛蘭西で最も美しい人だ」と言つた。

夫人は元來が芝居好きであり、今度の一座を組織するについても、十ケ條の役者樂屋心得を出した位だが、千七百四十八年には、又新しい舞臺を拵へて、十一月二十七日に舞臺開きをした。見物席は藍色と銀色とで裝飾して、天井には夏空の輕い雲を描き、綺麗と艶笑の樣を盡した。黑い男の衣裳の間には、咲き崩れた罌粟の花のやうに、珍しい眞赤な衣裳が交つてゐた。見物席には小さい美しい化粧の人達が耳を傾け目を開き、微笑した。ルイは皇后を右手に座らして見物した。皇后は黑い蝶と名付けられた、古風な髷に結つて現れた。

この芝居は王の狩獵と前後して、絶え間なく行はれたので、エルサイユは高位高官を集めて、政府同樣になつてしまつた。同時にこの芝居は、夫人が國王の目と心を悦ばし誘惑する爲には、大成功であつた。少くともこの點ではポンパヅウルに敵ふものはなく、自ら女優として舞臺に立つては、日頃の美貌は愈々玉の如く光つたばかりではない、舞臺の上のあらゆる纖巧なる臺詞廻し、好色的な表情、眼差の阿媚、優雅な動作は、悉く眠れるルイの心を生々とし鮮明ならしめ、活殺自在であつたに相違ない。殊に夫人の衣裳に對する敏感は驚くべきもので、ある時は少女の衣裳、ある時は農夫の女の衣裳、青い襞、白い腰、花を飾つたドミノ、薔薇の短衣、希臘の衣裳で現れるかと思へば、麥藁帽子を冠り、銀のレエスを飾つたと思へば、亞細亞風のマントを羽織り、千變萬化の多彩と魔術を恣にしたものである。國王ルイは勿論この光と色とに昏々として他愛なく眩惑されていつた。

建築

夫人はルイの愛寵を辱けなくすると共に、ルイから賜つたお手當も素晴しい。その全盛時代は毎月の收入百五十萬法にさへ昇つた上に、王からは多くの別莊土地を賜つてゐる。夫人はエルサイユから一哩ばかり離れた處に、「小さい館」といふ邸を買つてゐるが、その建物の右手には堀割があつて、一艘の檣船を浮べてあつた。その水の面には、建物の小さい柱廊が影を映じてゐた。千七百四十八年八月の一夜である。この堀割の水には

ゴンドラを浮べ、イルミネエションを施し、硝子提灯を點じ、そこへ夫人はルイを招待した。これは夫人がルイの招宴の返しであつた。この夜宴は十時に初まつたが、ルイがまだテーブルに着いて食事をしてゐる内に、もうポンパヅウルは夜の衣裳をつけて現れて「皆様どうぞこちらへ」と案内をしたので、一同は夫人の後へついて、小さい森の中へ入つてゆくと、そこには小さい子供達がバレエを踊つてゐて、同時に合唱が起つた。王の面前へは一人が羊飼ひの姿で出て來て、王を太陽に例へた祝詞を申上げ、男も女もドミノと假面をつけて、輝く夜の森に散つた。

ポンパヅウル夫人の建築趣味は、多くの見事な建物と庭と階段と噴泉を今日まで殘してゐるが、土地建物を買ふ費用に比べて、内部の彫刻繪畫の裝飾の爲に費した金は、驚くべき金額に達してゐる。夫人が金に飽かした代表的建築は、ベレヴユウの宮殿である。これは規模こそ小さいが、贅を盡した點に於て、佛蘭西藝術の粹を蒐めた美術館ともいふべく、ポンパヅウル夫人の神興によつて、奇蹟の如くに、地上に生れ出たモデルである。二年の歳月を費して、千七百五十年十一月二十五日に、この善美の館の落成式を行つた處が、暖爐の烟がうまく外に出ないで失敗し、本當の竣工式は十二月二日に開き、小さい支那風の裝飾をした舞臺では、王を慰める爲に「建築師になつた戀の神」といふ面白いバレエを催した。その中には往來一箱を載せた車を引張つて來て、その箱を引つくり返すと、中から一杯の女がこぼれ出て、これがバレエの踊り子だといふ趣向があつた。

夫人がその才智を建築庭園の裝飾に費した事は、必ずしも夫人の趣味にのみよるのではない。その壁模樣、卓子の配置、彫刻、色彩の變化によつて、ルイの心を倦怠せしめないやうにする一手段ともなつたと見られる。その造る庭の如きも、必ずしも常に佛蘭西造庭術の絢爛のみを盡さないで、野薔薇の垣、水仙、撫子、菫を植ゑ散らして自然の花の匂ひに滿ちた牧歌的庭園も拵へた。

この變化によつて王を倦かさないやうにする爲には、夫人自らの風姿も變つてゆかなければならない。そこで夫人は王の前に出る時にも、ある時は東洋風の女酋長の衣裳を着る時もあり、女植木師の姿でゐる時もあつた。この女植木師の姿は、肖像畫に寫されて、夫人の繪の最も美しいものの一枚に數へられてゐる。頭には麥藁帽子を冠り、左腕には薔薇の花籠をかけ、右手にはヒヤシンスの花束を持ち、藍色の輕々した衣裳は、これも「侯爵夫人の服」と稱せられた色であつた。夫人には又畫家ヴ

トオの意匠によつて染めさせた衣裳もあつた。これも「ポンパヅウル好み」と後世呼ばれた。

睨み合ひ

國王ルイを全く掌中に翻弄して、宮中に誰一人權勢並ぶ者のないとなれば、必ず祕に之に反抗し嫉妬する者のゐる事は、ポンパヅウル夫人もよく承知してゐた。夫人に對して隱然たる男女の敵は、宮中到る處に潜んでゐた。そこで夫人も油斷がならないから、肝心のルイの態度を常に探索してゐなければならなかつた。夫人の生涯は見る人を眩惑する花やかさを持つてゐるけれども、夫人の心は常に不安と焦燥に逐ひ立てられてゐた事は察しられる。殊にルイを取卷く惡者女官の中には、既に他の女を國王に薦めたものがある。或る日ショアソヨル・ロマネット夫人といふ若い女が、ルイの心を試してみる試驗臺になつて、ルイに近付けられたが、ポンパヅウルはこの夫人をまだほんの子供だと思つたのが誤であつた。ルイの心は見る見るこの女に索かれて、或る日ルイと夫人との話聲が暫く途絶えた後、夫人は髮を振り亂し、衣裳をはだけて、ルイの居間から出てくるに到つた。待ち構えてゐた女官エトラアデ夫人は、兩腕を開いて夫人を抱き迎へて、結果はどうかと訊いた。

「え、とうとう行く處までね。あたしとても愛されたの。王様も幸福でゐらつしやるわ。きつとあの方逐ひ出されてよ。だつて王様はあたしにお約束なすつたんですもの。」

若い貴婦人は、髮を抑へ、胸を躍かして、まづ之丈答へた。之を訊いた宮廷の女官達は、思はず歡聲を擧げたといふ事である。

ポンパヅウル夫人を國王から遠ざけやうとするあらゆる奸策の計畫、ルイに對する讒言、夫人の奢侈に對するルイの注目に對して、夫人は唯ルイに泣き付いて、敵となつた女官をエルサイユから逐ひのける外に道はなかつた。かういふ時には、夫人の芝居好きから來た舞臺の表情、媚かしさ、涙、昂奮は、ルイをかき口說くには、大に役立つたものらしい。けれども夫人の卓上の手紙が、忽ち無くなる事があり、人の出入、扉の開閉、靴音一つにさへ、耳立てなければならぬ不安な體となつてしまつて、今の今まで部屋の外で微笑し愛嬌を振りまいてゐた夫人が、自分の居間に入るや否や外套もマッフも引きちぎり投げつけて、泣き崩れ、憤激して、お傍附の女中も手をつけられなくなつた。けれどもかういふ外部の伎略、奸謀、惡計に對し、夫人はその智慧を盡して戰ひ初めた外に、夫人にとつてはもつと悲しい恐るべき敵が、我が身自身に在つた。それは國王の愛寵

を奪はれまいとする夫人の肉體的誘惑力の衰へであつた。夫人はルイの肉欲を刺戟する爲には、まづ己れの情欲を刺戟しなければならなかつた。夫人は元來が健康體ではない。そこで年齢と醜さと疲勞と戰ふ爲には、あらゆる刺戟劑と媚藥とを用ひた。戀愛に必要な焔を與へると稱せられた、怪しい東洋渡りの祕藥も用ひ、效著しいといふ藥草を服し、更に閨房祕戲に至つては、あらゆる遊女の死力を盡し、我れと我が病的な冷い肉體を燃やして、官覺を虐げ、無理の上にも無理を遂げて、ルイの肉欲を、我身に繋いでおかうとした。

方向轉換

かうして肌は荒れ、肉は痩せたポンパヅウルは、自分の今の位置を保つ上には、新しい方法を執る外はない。そこで自ら王に新しい寵姫を薦めて、しかも王に與へたこの自由の活殺を、祕に我が掌中に握つておかうとした。そこでルイの前に現れた可憐な少女は、まだ僅に十五歳で、全身笑くぼと稱せられた程に軟い初肥りのルウベンス好みの型で、畫家ブウシエがモデルに使つてゐた女であつた。王は直ちに夫人の計略にかかつて、この女の爲に王の淫樂の場所である鹿苑内に小さい家を設けて、いはゞ之を新しい妾宅とした。ここは後に續いて王の變妾を養ふ窟になつてしまつた。此處にゐる間に女が姙娠すると、サン、クルウの下屋敷に移され、母子共に莫大のお手當を頂戴して、田舍へ下つて嫁にゆくのである。之等の指揮をポンパヅウル夫人は自ら執つた。夫人は或日王に向つて

「どうぞ王樣も一日なり二日なりサン・クルウの窟までお出まし願ひたう御座ります。わたくしが御案内させ申上げます。そこでお出で遊ばしますと、もう今にもお産の紐を解かうとする、若い子を御覽遊ばすで御座いませう…王樣はぜひ洗禮にもお立合遊ばして、父と母のお名をお記し下さいまし」

と言ふと、王は笑ひ出して

「その父親は、ごく正直な男ぢやぞ」

「えゝ、この世界の誰にも愛せられて、知る限りの人は、どなたも崇拜してゐらつしやるお方ですわ」

王は夫人に接吻して感嘆した。

「あゝ、あなたは何といふ美しい人だ」

すると夫人は王の心臟の上に手を當てて

「此處でございますの、わたくしの苦勞は」

とさも賴りなささうに、王に秋波を送つた。

この頃にルイと夫人との間にどの程度の肉體的交渉があつたか、それは分らない。但しこの四五年以來王と夫人は唯プラト

ニツタの交りのみであり、二人を繋ぐものは、共通の趣味と興情と習慣のみであるといふ噂も立ち、又夫人が頻りに宗教的な心持に變つてきて、基督を念ずる事深く、毎日禮拜堂の彌撒を終つても、多くの參詣の人の歸つた後を、唯一人殘つていつ迄も祈禱に耽つてゐる姿が人の目にたつやうになつた。同時に夫人もエズイト教の一教父に目をつけた。この教父は當時聖者の一人に數へられた貴族だが、夫人との往來が頻繁になるに從つて、教父の首席は憤つてその出入を止めやうとした位に、夫人は坊さんの仲間には評判が惡かつた。殊に夫人がルイの妾といふ位置から、遂に皇后職の公職に就く希望を持つてゐるといふ時に對しては、憤慨する者多く、殊にいつもは何事も王の言ふ通りになつてゐたさすがの皇后マリア・レスチンスカも、特に王に謁見して、夫を欺いて離れたやうな女に、かゝる重職を與へる事の不可を説いたが、その時王は何とも答へなかつたに拘らず、千七百五十六年二月七日皇后は人を命じて、ポンパヅウル夫人を皇后職に就かしめるの手紙を受取つた。一方に夫人はこの就任が決して自分の意思からは出なかつた事、エズイト教の懺悔文に無理に爲められた事等を説いて廻つたが、二月九日には既に六時間に渉つて皇后の彌撒に從ひ、晝餐に陪食する等着々その位置に歩を進めて行つたのである。

學者と美術

同時に夫人は自分の周圍に、著名の學者詩人を集める事を怠つてゐなかつた。少くとも夫人は佛蘭西歴史に名を殘す丈の女になりたい野心は滿々として持つてゐたのである。繪畫に自分の姿を殘すのみでなく、一天才の書く、詩句、獻詞に名を書かれておきたい希望を抱いてゐた。夫人がこの意味で、時代の著名の學者の爲に、金を出し、宮殿の中に住まはせ、アカデミイへの道を拓き、投獄せられるのに對して辯護をした。

最も夫人のお氣に入りは、文學者のヴルテエルであつた。夫人がヴルテエルの爲に盡した事は並々でない。又ヴルテエルも夫人の爲には、宮中の從者であつたのみならず、夫人の武器であり道具であつた。ヴルテエルの諷刺、論議、攻擊の中には、いつもポンパヅウル夫人の意思が入つてゐた。かうして夫人は一生の間ヴルテエルに對しては、時々喧嘩をし乍らもその深い友愛を示し、ヴルテエルも常にこれを感謝してゐた。

ルツソオを夫人は梟と呼んでゐたが、この男の我儘勝手な氣性を馴めやうとして、夫人はあらゆる事をしてやつてゐる。その外夫人の手のかかつた者には、クレビヨン、ビユツフオン、モンテスキウ、マルモンテル等がゐた。

夫人の學者愛護は、一つは野心と名譽心との爲の非難はあるが、美術の愛好は、夫人の最美しい性情の一つと稱せられ、今日佛蘭西に殘された十八世紀名畫美術品も、夫人の奬勵がなくつては、遂に世に出なかつたものが多い。夫人も自ら銅版畫を描いたが、作品は勿論上手なものではないが、夫人の優しい心を示すには十分であり、殊に夫人は心を籠めて、美術家を愛護した。美術の爲には、夫人はその一生の一部を捧げたのみではない、美術は夫人の奢侈であると共に、その廢墟を爲したものと見てよい。畫家、彫刻家、銅版畫家で、夫人の引立によつて世に出たものはいくらもあつた。十八世紀の佛蘭西美術は、夫人の尊い紀念品だと言つてよい。夫人はこの時代の美術を以て傳統的の單調と服從から解放し、羅馬希臘の美術と緣を絕たせやうとした。夫人の主張した處は、十八世紀の佛蘭西畫家は、その時代の生活を現さなければならぬ、といふ事にあつた。さういへば十八世紀夫自身が、すでにポンパヅウル夫人自身といふべきもので、夫人の趣味は悉くこの時代の美術に現れてゐる。美術のみではない。この時代の流行に、ポンパヅウル夫人から創められたものが多いと共に、その華麗、優雅、媚態は又夫人の時情に基くものであつた。美術工藝の方でも、寢臺、煖爐、鏡、ソファ、手筥、扇、紙入、手提げ、小楊枝の類に至るまでポンパヅウル好みの名を附けて、どれ程今日まで愛好せられる佛蘭西趣味を殘してゐるだらう。ルウブルを完成して、ここに佛蘭西國の美術館を造らうとするのも、夫人の念願の一つであつた。

今日佛蘭西の誇りである、セエブルの陶器工業が、今日の盛大を贏ち得たのも、一にこの夫人の力に俟つ處が多い。十八世紀に於ける歐洲の陶器は、獨逸ドレスデンを中心としてゐたのに對して、夫人はどこ迄も佛蘭西陶器の名によつて、獨逸陶器を粉碎しやうとした。千七百五十六年にセエブルに移された陶器工場は、ポンパヅウル夫人によつて大規模な建築に變り、新しい化學家を任命し、新しい見本と試驗を求め、佛蘭西のあらゆる陶土は試みられて、遂にセエブルの陶器工場を、絨氈ゴベリンの工場と同じやうに、帝室所屬の事に聲明した。その工場ではあの美しい軟かな薔薇色を發明して、これを「ポンパヅウル淡紅」と名付けた。セエブル陶器の優雅と柔軟さは、ポンパヅウルのインスピレエションそのものに外ならない。遂にこの陶器は、ヱルサイユ宮殿内で展覽會を開くに及んで、夫人は「お金を持つてゐる方で、この陶器をお買ひにならないのは、市民の義務を認めない事ですわ」と言つた。

千七百五十六年に勃發した七年戰役竝にその前後に於ける夫

人の佛蘭西内外の政治に關與した詳細及リシユウリウ將軍との關係は、茲には略したい。唯この間の外交問題に口を出したポンパヅウル夫人の心持には、女の野心を滿足させる外に、秘に女らしい復讐心に燃えてゐた事は爭へない。フリイドリヒ大王に對しても、自分をコチロン四世と惡口を言ひ、夫人の美を以て「小さい美」だと嘲笑したに對して、何とかして仇を討つてやりたいといふ心持が、七年戰役の一つの原因だと見ても好いとさへ思はれる。

南京繻子を乞ふの文

夫人は手紙を書く事の極めて好きな女であつた。或る時、父に宛てた手紙の末に、「私まだこれから六十通ばかり書く手紙がございますの」ともあるが、人に物を贈る文、さる公爵の誕生を祝ふ文、ダイヤモンドの耳飾りを賫拂はんとする文、肖像畫に係る手紙等その時々に觸れた無數の手紙を書いて、それが悉く自由な生きた短い文章となり、夫人の退屈、氣晴し、焦燥をよく現してゐる。私はその書簡の中で、ごく平凡な一本を讀んでみやう。

「千七百四十七年　七月二十八日

お懐しき「おば樣」、此度の戰ひに、さしもの敵をお負かし遊ばした王樣の大勝利には、わたくしも本當に悦んでおりますの。あなた樣の祝ひのお言葉、何よりもうれしく拜見致しましたわ。

それから、わたくしの欲しいと思つておりますのは、染めてない南京繻子でございますの。もしそれがございませんでも、椅子に張る絹地で恰好なものがございましたら、色は黄でも白でも、種々緋、絲、藍、何でもよろしうございますわ。どうせ琥珀よりはもちが宜しうございますからね。それからこの琥珀地のものも何かお目に止りましたら、二三百尺程寢室用にお取りおき下さいまして結構ですわ。

それではおば樣、御機嫌よく。いつも御親切の程陰ながら有難く存じます。おば樣と同じ月日におりますこと、何よりうれしうございますわ……」

最後の强敵

この優しい手紙を書いた晩年である。夫人には遂に恐るべき敵が現れて、ルイ王の寵を奪ひ、夫人の生涯に致命的打撃を與へるに至つた。それはロマンといふ辯護士の娘で、ワルニエ夫人の手で王樣にお目にかゝつて、忽ちお手附となつてしまつた。この新しいお妾は、さすがのポンパヅウル夫人にも全く缺けてゐた、自墮落の美を持つた女であつた。何よりも目にたつたのは、身の丈を殆ど蔽はんばかりに長い黑髮で、その美しい肉體は、東洋風な疲れと歡樂的な懶惰との中に、寢椅子の上に

横たはつてゐた。この女は王の宮殿には住まはないで、巴里郊外パッシィに小綺麗な家を構え、忽ち生れた男の子を乳母車に乗せて、チュウレリィ宮殿の附近へやつてくると、町の人達はその周圍に群集して、子供を抱かうとした。すると女は

「あつ皆さん、どうぞ赤様をそんなひどい目に逢はさぬやうにお願み致します。どうぞ王様のお坊様に息をおつかせ下さいまし」

と大いに得意になつて言つた。王子はレエスの衣裳を着せて、玉のやうに美しかつたさうである。

或る日この女は巴里市中のブウロウニュの森の端れで、この子供を遊ばしてゐると、そこに二人の貴婦人が近付いてきた。一人は顔をハンケチで抑へてゐたが、もう一人の貴婦人が、美しい髪をダイヤモンドの櫛で束ねた、この母親に挨拶をして、

「まあ、好いお子さんだこと」

と云ふと、女は得意に

「私はこの子の母ながら、ほんとに好い子だと存じますわ」

「さぞお父様は綺麗なお方でゐらつしやいませうね」

近松の文句なら、あの子生んだる親見たや、といふ處であらう。

「え丶、美男でゐらつしやいますの。名前を申し上げましたらあなた様もさう仰有るに違ひございませんわ」

「してみると、どなたでせうか」

やがて二人の貴婦人は、其處から又離れて行つた。口のあたりからハンケチを外したのは、ポンパヅウル夫人であつた。夫人は絶望の心持で、一緒に行つた女に向ひ「確かに母親も子供も、二人とも美しいわね」と言つて、ヱルサイユに歸つた。

絶望の夫人

「わたくしは年を取るに從つて、段々考へが哲學的になつて參るやうでございます」

夫人は兄に宛てた手紙の一節にかう書いてゐる。ゴンクウルは夫人の性格を以て、世間のいふやうに晴れやかな賑かな女ではなくして、寧ろ眞面目な、悲しい性格であつたと言つてゐる。少くともルイの恩寵全く衰へた晩年に於て、夫人がなほ出來得る限りの智慧と色情を以てルイを誘惑しやうとし、同時に自分の名望の破滅を恐れ、名譽心と野心とを交ゝ全からしめんと悶えて、遂に自殺まで考へるに至つたのは、華やかな半生に比べて餘りにも悲劇的である。ルイが夫人を最後まで表向きは手放さなかつたのは、夫人の自殺を恐れたはかない慈悲の爲めであつた。

佛蘭西一代を惱殺したポンパヅウル夫人の美貌が衰へ初めたのは、千七百四十八年に既に之を怪んでゐる人がゐる。千七百四十九年といへば、夫人がまだ僅に二十七歳の年增盛りである。體は瘦せてきて、胸の膨みは失せ、顏の下半面は黃色くなつて、濕ひのない顏立となつてしまつた。明かに貧血と癥黃病の徵候と見られた。夫人の不健康には色々の原因があるやうだ。第一が月足らずの生れらしい。第二に肺を犯されてゐたらしい。ごく若い時に血を吐いた經驗もあつた。更にこの弱い體を無理矢理に、若さに任せて押し通してきた過勞こそ、夫人の肉體をも精神をも困憊し盡したものに外ならない。千七百五十六年頃になると、ひどく心臟が弱つてきた。鼓動が烈しくて步けないのである。千七百五十七年十一月に、夫人は意を決して、遺言書を書いておいた。この頃から夫人の容貌は、愈ゝ凄みを加へて來て、いかに化粧を凝らしても、その微笑と笑くぼが、反つて歪み顏を作るばかりであつた。

更に夫人を苦めたものは、ルイから賜るお手當の減少であつた。ルイの愛情濃やかであつた頃の、每月のお手當二萬四千法は三千法に減り、更に嘗ては五萬法から頂戴した正月のお手當が、今は全く無くなつてしまつた。この手許の苦しさを補はふとして、夫人が手を出したのは賭博であつた。夫人はこの賭博によつて、千七百五十二年には三萬八千法の儲けを得てゐるけれども、一つ外れた時には、眞珠の腕環も、煙草入も、裝飾品も悉く賣り飛ばしてしまつた。それでも借財は益ゝかさむばかりであつた。夫人はその臨終に、僅に數圓の金を書き物机の上に殘して死んでいつた程、手許の金には不自由してゐた。

夫人の健康は次第に惡くなり、咳が出たり、熱が上つたり、一進一退していつたが、遂に千七百六十四年四月十五日の棕櫚日曜日に、この一代の變姿、ロココの女王は、すがれた花の崩れる如くに死んでしまつた。臨終に迫つて、夫人は淋しい頰に紅を塗り、王の許を得てマドレエヌ寺の僧を枕許に呼び、更に取亂した處もなく、兼て書いておいた遺言書をもう一度開いた。遺言書の內容は、實に女らしく細々と、しかも召使の者までに、着古した衣裳のかたみ分けを悉く記してあつた。

「王樣にもお願ひ致しまする。どうぞわたくしのかたみをお受け下さいまし。王樣にはわたくしの巴里の宿を差上げたうございます。これはお孫樣のどなたかのお住ひに宜しいかと存ぜられます。プロヴンス伯爵樣がお住ひ下されば、わたくしのお願ひにも叶ひまする。」

といふのが、ルイへの名殘りの文字であつた。

夫人の遺品には、遺言書に書いてないものが三つあつた。それは夫人が兼ねて可愛がつてゐた鸚鵡と犬と尾長猿であつた。

愈々臨終に近付いて、夫人は烈しく苦悶した。その苦悶の有様は、名優のする芝居のやうな悌があつたと稱せられた。息を引取らうとする最後に、夫人は細々とした聲を擧げて

「一寸お待ち下さいませ、坊様、わたくしも御一緒にお伴致しますわ」

と言つた。臨終の場所はヱルサイユの王の小さい下屋敷、四月十五日午後七時である。病牀についてからは、約二ヶ月であつた。四十三歳の姥櫻である。

夫人の死骸は無慘にも、まだ全く冷くなり切らない内に、擔架の上に眞裸にして抛り出され、それを經帷子で固く卷いたので、痩せた胸も腹も足も、體の形の儘に露れた。この擔架を二人の男が擔いで、ヱルサイユの夜の往來へ出た。

墓

夫人の葬式の日は、ひどい風雨であつた。ヱルサイユ宮殿の前の大通りを、葬列は巴里へ向つて進んで行つた。もう午後六時の黄昏である。ルイ十五世は侍從を一人從へて、自分の部屋の露臺に出て、手に時計を持つて、この葬式を見下しながら

「夫人はひどい天氣に葬式をなさるな」

と言つた。王は雨に濡れるのも構はずに、葬列が見えなくなる迄露臺に立つてゐたが、やがて暮れかけた部屋に戻ると、その頰には二筋の涙が流れて、思はずから嘆息した。

「これが夫人に對する、唯一つのわしの禮ぢやつたか」

佛蘭西國民のある者は、この哀れな夫人の墓碑だと言つて、次のやうな文句を書いたものがある。

「此處に眠る者は、十五年の間處女、二十年の間賣女、七年の間秘に女の媒をなせり」

（昭和五年八月）

脫稅物語

小汀利得

一

稅制が段々複雜になり、國民の一擧手一投足すべて稅がついて廻るやうになると、脫稅がついて廻るやうになると、從つて脫稅する者も從つて多くなる。

數で最も多いのは、印紙稅法違反の名でやられる判取帳や、假領收證の違反で、罰金や科料を課されるやつだ。しかし之等はいづれも無知の結果犯す罪の無いもので、計畫的にやる富豪の相續稅、所得稅の大脫稅、不良商人の關稅のスマッグリングに至つては最も憎むべき典型的脫稅である。

保善會社すなはち一族の資産を會社組織にして、その會社の所有に假裝することは、合法的脫稅の代表的なものとして、永い間やかましく論議されたものだが、世の中が不景氣で、そして稅ばつかり高い當節では、合法的な脫稅なら企てる方が當り前になつて、誰も不思議になんぞ思はなくなつた。

ところが帳簿を誤魔化して、實際利益のあつたのを損をしたやうに見せかけたり、利益を少く出す方法を取つて、所得稅を誤魔化すものが非常に多い。

その最も多いのは假裝記錄の方法で關係會社の多いもの丶間では特に之れが行はれ易い。この假裝記錄で現實にあつた利益をさうでない樣に、某大會社が實上百何十萬圓を隱匿して居た事件や、成金の某が仕入勘定の科目中に所謂金何十萬圓を隱した等の事件は、いまは一昔前の語り草になつて居るが、近頃は稅務官吏の眼識が進んで、この種の誤魔化しは直ぐ看破されるもんだから、近頃はもつと合理的な方法を發見するやうになつて來た。其は一年に入つて來る所得や利益を何年かに分割して收納する＝いやさう假裝する＝方法である。

一例を擧げると、山林所得だ。『山林の所得は前年中の總收入金額より必要の經費を控除したる金額』によつて課稅されることになつて居るので、十萬圓の收入があつた場合には、之れを二回に割つて今年現金で五萬圓を受取つて、殘りの五萬圓は翌年受取る豫定のやうにして置く、さうすると十萬圓に對する所得稅は七千八百二十八圓だが、半分の五萬圓になると、稅金は二千七百三十圓になる。所得稅の累進率の結果十萬圓と五萬圓とで、かういふ大きな差が出て來るので、前に擧げた樣な儲かつたものを隱して置くのとは違つて、稅務署を誤魔化し易い。

かういふ技術上のやり方一つで、累進率の適用されて居る所得稅は、多くもなり少くもなるので、戰時好況時代以來大きな富豪や、大會社の間には老練な稅務官吏上りの社員を雇入れて、合法的乃至合理的脫稅を圖ることが一つの流行となり、他方では獨立てさういふ稅の專門家を雇入れる力の無い者の爲めに、『稅務辯理士』だの『稅務代辯人』だのといふものが續々現はれて來た。

二

一體どんな貧乏人でも、日本では税の負擔から免れることは出來ない、上戸黨が酒一升飲めば、それが酒精分二十三度以下のどぶろくでも三十六錢、清酒なら四十錢の税は屹度掛けられて居り、下戸が砂糖一斤嘗めても、白砂糖なら一斤九錢の消費税は必らず拂はされる。しかし之等はいづれも間接税だから、直接税のやうに脱税を圖る餘地がないわけだ、そこで脱税といへば、まづ金持ちといふことになり、金持ちとまでは行かないでも、少くとも素寒貧の自由勞働者なんかでは縁の無い話で、最近大衆黨が政府を攻擊する聲明書を出して、政府は富豪の脱税や不納、滯納を默過して無產階級に對しては徒らに彈壓を加へると抗議を申込んで居るのも、畢竟するに、貧乏人には脱税の餘地の無いことを語つて居るものといふべきであらう。ところが隨分ひどい貧乏人でも、脱税で裁判沙汰にされた例もある。その代表的なものは白相文吉といふ水呑百姓が專賣局に收める煙草を栽培して居つたが、金がないのでつひその葉つぱを一枚もぎ取つて喫んでしまつたといふので、葉煙草專賣法違反として、訴へられとう〱大審院まで煩はしてやつと無罪の判決を受けた。『一厘葉煙草事件』であらう。專賣局の役人は煙草畠へ行つて、葉を一枚々々勘定して置く、そして其が若し一枚でも足りなくなつて居ると、この白相の樣に葉煙草專賣法違反の脱税犯として訴へられる虞れがあるのだから、如何なる貧乏人でも全然脱税問題に縁が無いとは決していへない。

水呑百姓の脱税といへば、酒造税法違反事件はいまでも最も多くある事件である。これはいふまでもなく酒の密造がつかまつた場合の事件だが、酒造税法二十二條には『免許を受けずして、酒類を製造したる者は三十圓以上五千圓以下の罰金に處し、仍其の製造に係る酒類及其の容器、器具、器械を沒收す』とあるが、田舍で百姓がつくれば、自作の米でうまい酒が只で飲めるのを、一升四十錢の酒税と外に所得税や營業收益税のかゝつた高い酒を飲ませるものだから、いまなほ農村ではこの密造が絕えない。特に盛んなのは生活の程度が低く、しかも酒を飲む癖の直らない東北の一部に多い。僕が直接東北に勤務して居た税務官吏から聞いた話だが、或る山間の部落などでは家の中ではつくらないで、十町も十五町も隔つた山の中につくる、それも頗る大規模で近くへ行つて見ると酒の香がプン〱する程だ、しかし全部落が擧つて脱法行爲をやつて居るから、部落有の山林の中でやつて居る密造者が何の某かといふことは判りつこない。違反者の摘發に行く時には無論警察官を伴れて行くが、實際は手がつけられない場合が多い。脱税者が甚しく兇惡な場合には、山の中で暗討的に斷崖から突き落されたなどゝいふこともあり、もつとひどいのになると、目の前に密造酒を發見して『これはなんだ』と詰問したところ『これは下肥だ』といふ、そんな馬鹿なことがあるものか、この匂ひでも判るぢやないかと押問答してる中に、百姓の方では恰度手に持つて居た肥桶杓を突つ込んで『愚鬪々々いふなら、當樣飲んで見ろ』と税務官吏の鼻のさきにつき出したので、現在眼のあたり脱税の本物を見て居りながら押へ切れなかつたなどゝ、いふ悲喜劇もあつたさうだ。

大體脱税行爲は税が餘りに高い場合に起るので、酒なんかでも昔は誰にでも只で勝手につくれたものを急に税率をどん〱上げた結

果少からず脱税が行はれるので、之れは日本だけの現象ではない。世界大戰前までは、税金を收めることに、一種獨特の誇りを感じて居たイギリス人でも、戰後急に脱税者が多くなつたところを見ると、脱税と國民性との間には、特別な因果關係はなく、あるのは經濟關係丈のやうだ。

三

脱税で最も憎むべきものは金持ちや地主のそれで、東京市内や近郊の地主の横着は目にあまるものがある。

市内一流所の住宅地に、いま以て山林、池沼、田畑が存在して居ると聞いたら、誰れも本當にしないたらうが、まだ〳〵多くの山林や池や沼がある。それを税務署が承知して居りながら改めさすことが出來ないのは、持主が大富豪や貴族で、之れに手を下すんなら、その前に自分の首を洗つて居なければならないからだ。もつとも十五銀行の沒落や、急激な經濟上の變化から、大邸宅の切賣開放が行はれて市内のこの種の脱税は大分減つた。しかし市内で土地の脱税行爲が減つたと同時に、之れに反比例して郊外では露骨な脱税が行はれて居る。

震災以後の郊外の發展は著しいものだが、地目は依然として田畑若しくは山林になつて居り、しかも、高い地代は實測した坪數に應じて取り立てゝ居る。若し彼等地主が家を新築すれば、その家は一年、二年、なかには三年も四年も屆け出でずに、不動産取得税も家屋税も脱税の儘であり、町村の役場は彼等地主の代表者を以て固められて居つて、年々嵩み行く町村費は、正直なサラリーマン階級の肩に全部轉嫁されつゝある。

いやそれだけならばまだしもであるが、彼等の中には消極的な脱税だけでは、滿足出來ないで、公有の土地を削り、之れを盜んで居るものさへも少くない。すなはち町村道や公有水路を埋め立てゝ、之れを猫ばゝして居る程である。

それから脱税で、いつも新聞種を播くのは關税の遁脱だ。關税の遁脱では數年前に服部金太郎氏の服部時計店や、淺沼藤吉氏の寫眞器店が大脱税を試みて、とう〳〵裁判沙汰にまでなつたことは、讀者の記憶に新たなところだが、大正十三年七月、いまの濱口首相が大藏大臣時代に、奢侈品關税を課することゝして以來、ダイヤモンドその他の寶石、貴金屬寶石類の脱税は滅つ切り殖えて來た。緊張らないで高價な品物に、無暗に高い關税を掛けた結果、脱税が盛んになるのは、世界の關税史上明らかなところで、特に歐洲大陸諸國、アメリカとキヤナダ、アルゼンチンとウルグアイ等々は脱税にはほと〳〵弱らされて居る。

この關税の誤魔化しには、なか〳〵のロマンスがあつて、日本でも煙草が專賣で高いもんだから、外國を旅行したものは屹度、煙草を買つて來る。紙卷なら百本まで、葉卷なら五十本までは無税だから無事だが、それ以上のものを大きなトランクの底に隱したり、ポケツトに忍ばして置いて、税關の目を掠める。

下關や神戸で、汽車に乘つて寬いでから、その脱税品を吹かしてるのを專賣局のスパイに見付られて、ひどい目に遇ふものも少くないが、愛嬌なのは絹紬や緞子を胴にぐる〳〵卷にして、體の動きが取れない、まるでビヤ樽見たいな格好をして棧橋へ降りて、難なくつかまるなんてのも少くない。尤もこの絹紬なんかは五六年來日本の方が支那のよりも安い爲め、かうしたユーマーに富むスマグラ

ーは居なくなつた。

たゞ貴金屬類の密輸入は依然盛んで、ダイヤモンドの如き、もと五分の税が急に贅澤品關税で十割になりながら、相場は一向上げず、いまでは反つて世界並みに下つて居る、關税が高いといふので、個人の旅行者で密輸入を企てる者も少からずあつて、當のダイヤモンドはうまく隱して居たが箱を持つて居たのでバレたなどゝ云ふ笑話もあるが、それ位なことで日本のダイヤモンドの相場の下る道理がない。之れは寶石類專門のスマツグラーが居るからで、日本では神戸に巣を喰ふジユウの一團が、大連や上海の一味と聯絡を取つて、大規模にやつて居るのである。

阿片の密輸入も公然の祕密で、これまた專門家はジユウである。

尤も大正十五年には、星製薬の社長星一氏と關戸、木村の三人が臺灣で阿片令違反で第一審は有罪となり、百二十六萬圓といふ大きな追徴金を課する判決を受けた事件はあるが、これは密輸入では無く、阿片の値の高くなることを見越して總督府の註文以外の品物を思惑買ひした爲めにやられたので、結局二三審共無罪の宣告を受けた。

さらに去年は當時の遞信大臣久原房之助氏が、上海の阿片密輸團たる六公司と稱する匿名組合に對して、大村清なるものをして交渉せしめ、ペルシヤ產の阿片の賣買を行つたと云ふ事件が、民政黨側から議會に持ち出され本會議でも豫算委員會でも、盛んに論議されたが、これは久原氏には直接關係無いものであつたやうだ。

日本へもジユウの手で大分入るが、阿片の最大需要國たる支那に對しては之等のスマツグラーの活動は目醒しいもので、ハルピンあたりに居るジユウの妻君や娘が胴中に油紙に包んだ阿片を卷きつけて長春や奉天、大連に入り込み、滿鐵附屬地の日本警察にあげられて居るのは、現に僕も見たことがある。

もう一ついやな脫税はピストルである。不思議に強盜なんかゞつかまると、ピストルを持つて居る。あれはやつぱりジユウや支那人のスマツグラーの密輸品ださうであるが、同じ脫税でもピストルなんて物騷なものゝ、密輸入だけは愛嬌なんかちつとも無い。

四

最後に二つ三つ、世界的な脫税ロマンスを述べて置かう。

誰でも知つて居るのは、高い高い關税障壁を持つて居るアメリカ合衆國への密輸入國の活動である。アメリカは東と西の長い海岸線の外北はキヤナダに、南はメキシコに之れ亦長い陸境を持つて居る。その上に關税の率が高いので、昔からアメリカの税關のスパイは大いに活動をして居る。歐洲との關門ニユーヨークその他の税關では、大西洋上の船にはポツターを乘せて歐洲から來る乘客に目を光らして居るが、それでもダイヤモンドの密輸入が今日までに何十萬ドルに及んで居ることは、アメリカ各税關の調べとベルギー、オランダ等ダイヤモンド工業國のアメリカへ賣つた額との相違が明らかに示して居る。

ところがウイルソン大統領の禁酒實施以來酒類の密輸入の多いと驚くべきものがある。これは金さへ出せば、禁酒のアメリカでいつでも上等のアルコオルが得られるとで判る。大西洋岸から來るものはまだ始末がいゝが、キヤナダとの境界の湖や川には、税關吏の嚴重な看視の眼の前で、アルコオルを載せた密輸船がキヤナダ領内を唯々あてどもなく遊弋して居る。そして一寸でも看視隊に油斷があると、之等のアルコオル船はアメリカ領へ入つて脫税どころか絕對の禁止品を密輸入する。その五月蠅いことは、日本でいふ飯の上の

蠅以上だ。それからもう一つ、有名な脫稅密輸國は南米のアルゼンチンである。アルゼンチンでは數年前各種の關稅を引上げた、その中には日本の綿布も入つて居たが、當來ばつたり綿布の輸出が止まつた。といふとアルゼンチンの關稅は大變な利き目があるやうだが、實は一向さうでない。アルゼンチン行きが止まると同時に、隣國のウルグワイへ盛んに同じ綿布が出るやうになつた。不思議なこともあればあるもの、ウルグワイのやうに人口の少いところへ、どうしてかう急に綿布が賣れるのかと調べて見たら、全部同國を通じてアルゼンチンへ密輸入されることが判つた。それはこの兩國の間には大きなリオの河がある、この河とも海ともつかぬ、リオ・デ・ラ・プラタの海岸線の長さは非常なものなので、アルゼンチンでは、充分承知して居つてもこの白晝公然行はれる密輸(?)を取締る方法がない、若し强ひてやらうと思へば何萬人の警察隊をつくらなければならないのでみすみすこの不都合な脫稅者をば放任して居るのださうな。

かう見て來ると、稅の負擔がますます重くなり、世界各國共の障壁が段々高まる現狀では、當分脫稅は後を絕つことはあるまい。

出版部便り

『文壇アンデパンダン』は別掲公告の通り十二篇の佳作を殘して、之の中から採用篇を詮衡中である。どんなものが出るか？　斷然たる天下の期待が此擧に集り、前景氣素晴らしく、「出版されたら一冊でも三冊でもいゝ、全部揃へて配本して呉れ」といふ註文が全國書店に殺到してゐるさうである。

『ゴーリキーの四十年』第一部傍觀者が先月末手に入つた、本社では直ちに飜譯に着手すでに大半出來上つた。久しい期待に世界中のインテリを焦らしてゐた此の作品は、どんなに深い感銘を與へる事か、恐らく之が最後になるであらう世界的文豪の逸品によつて、讀者は眞正面からあのロシヤ革命を傍觀することが出來るのだ。

『牧逸馬のこの太陽』は東日大每の同時連載で日本中の青年子女を惱殺した快長篇、通俗小說界に革命的轉機をもたらして新聞社側から一年でも二年でも續けて呉れと强請されたものである。愈々九月五日全國一齊に配本する。

『現代人物評論』雜誌「改造」及び「中央公論」に每號執筆して好評を受けてゐる馬場恒吾氏の政界巨頭評論を纏めて近刊する。四六判五百頁内外、定價一圓五十錢の豫定である。

『唇はなぜ紅い』宇野千代氏最近の力作、女でなければわからないモダンガールの心理がよく描かれてゐる。大松竹のオールスターキャストで映畫化される問題の小說、十月上旬本社より發行する。定價一圓二十錢の豫定。

『西部戰線……普及版』逸早くわれらの處女出版、西部戰線異狀なしは發行後此所に一年、東西朝日新聞の續篇掲載と、ユ社特作大映畫の到來で今年の秋は、再び西部戰線時代を現出するであらう。われらは、此機に於て、本書の奉仕普及版發賣を斷行する事にした。恐らく、此所數日中には諸君の前に提供されるであらう。改版縮刷三百五十一頁定價一圓送料六錢。

『眞理の春』と『猶太人ジユス』は夏枯れをフツ飛ばして完全に天下の人氣を浚つて仕舞つた。中央公論社フアンの畑的に多いかをこんどシミジミ思つた、實に心强い、腹が立つ程うれしい。どんな事があつても、此期待と御愛顧に背かない積りだ。

カッフェ漫談

廣津和郎

○

私にカッフェ新哲學を書けといふ。そんなものは書けないと答へると、どうしても書けといふ。私は非常なカッフェ通だと思はれてゐるらしい。いろいろな雜誌のゴシップの中に、カッフェと文士といふと、よく私が引合に出される。別段訂正するでもないとほつたらかして置いたのが、嵩じ嵩じて、カッフェと文士といふと、いつか自分が聯想されるやうになつたらしい。困つたことである。おまけに最近この中央公論の姉妹雜誌たる婦人公論に、『女給』といふ小説を連載し始めたので、ゴシップからの聯想が更に輪を描かれて、それでカッフェ新哲學といふやうなものでも持つてゐるに違ひない人間と思はれたらしい。

カッフェ新哲學——今のやうな忙がしい世の中に、どうしてそんな暢氣な哲學など組立ててゐる暇があるものか。哲學が厭なら、何もそんなに組織立たなくてもよろしい、雜文、感想、或は漫談と稱する程度のものでもよろしい。兎に角カッフェについての文章を物せといふ。そこで、自分はいろいろなカッフェ通の文士諸君を頭に思ひ浮べて、それ等カッフェ道精通の士を前にして、自分のその道についての淺學を恥ぢながら、思ひ切つて引受ける事にしたわけである。松崎天民、酒井新人、それから近藤經一、菊池寛、畑耕一、それにカッフェ第一期時代から、未だにその巡禮を止めない吉井勇等々の如きは、何と云つても自分などよりはこの道の造詣が深いと云つていい。

日本のカッフェの歴史がどの位になるか、正確な事は私は

知らない。鎧橋の近くにメエゾン鴻の巣が出來て、谷崎潤一郎吉井勇及びスバル派の當時の新興藝術派達が、青い酒、赤い酒に、自然主義時代の灰色的時代相をあざ嗤つたのは、約二十年程前の事かと思ふ。雜誌『青踏』派の當時のギヤルソンヌ達が、男のする事は何でもしてやれと、同じく赤い酒、青い酒を痛飲し、吉原の妓樓に押上つたといふやうな噂の上つたのもその頃だつた。——當時早稻田の學生だつた自分などは、新聞、雜誌で、噓か眞か知らないそれ等のゴシップを見る度に、その威勢の好さに壓倒されてゐたものだ。

松山省三のプランタンが出來たのもその頃だつたと思ふ。それから淺草のよか樓が美しい女の寫眞入の新聞廣告で、當時の新人達の獵奇心をそそつてゐたのもその頃だつたと思ふ。——自分の記憶は正確を缺く恐れがあるが、或は銀座通の臺灣喫茶店ウーロンは、それ等のカッフェよりも、更に早く出來てゐたかと思ふ。兎に角、尾張町の角に、ライオンが出來て、ビール幾らとかが賣れる度に、店頭のライオンが『ウォー』と唸り聲を發し、その全盛をうたはれたのは、その少し後だつたと思ふ。

その外に、それと前後して、當時の東京に評判だつたカッフェは、赤坂の赤坂カッフェエ、日比谷のマンハッタン、それから今上海亭になつてゐる場所にあつた銀座の清新軒ぐらゐものだつた。——それから小さな家ではあるが、今でもその淸楚な感じで淺草に行く度につい寄つて見たくなる廣養軒、今のおかみさんのお絹さんが、その當時の初々しい若い姿で、みづから店頭に出て客をあしらふのが評判になつて、これも亦當時の藝術家達を集めたものである。

これ等の時代の事を書くのは、併し私には適任ではない。吉井勇か松山省三にでも書かせたら、面白いカッフェ文獻が出來ると思ふ。

○

私が宇野浩二等とカッフェエを歩きまはつたのは、それから大分後の事になる。鴻の巣に青い酒、赤い酒を飲んだ連中をカッフェエ第一期生とすれば、我々はさしづめ第二期生と呼ばれるのが至當だらう。第一期生が盛んに横行してゐた頃には、我我は神田の食道樂青羽亭あたりで、當時八錢だつたカツやハムライスに、相當に幸福を感じてゐた。そして若し銀座通に出られて、バウリスタで一杯五錢の珈琲に同じ値段のドーナッツでも食べられれば、我々は大概の不平を忘れてしまつたものだ。」——實際宇野と二人で、若し五十錢の金があれば、その頃本郷西

片町にあつた彼の家（そこに私も同居してゐたのだ）から片道は歩いて、銀座まで出かけ、そこで珈琲を飲み、一時間ぐらゐは腰をかけて、何か樂しげに語り合つてゐたものである。

その中に、いつか我々も小説を書くやうになり、原稿料が這入るやうになると、音羽亭やパウリスタだけでは滿足出來なくなり、銀座の表通のカフエに、そろそろ進出し始めたのである。

最初何處で出會つたのか忘れたが、何處かのカッフェエで久米正雄とひよつこり會ひ、何でも銀座から須田町の露月亭あたりまで、順々に梯子をやつた事を覺えてゐる。もつとも、彼のはウヰスキーを飮むのだから、梯子と云へるが、自分のは珈琲か紅茶で誤魔化してゐるのだから、梯子の名に値しないかも知れない。確かそれが彼と二度か三度目に會つた時だつたと思ふ。彼が赤門派の新進作家として現れ、自分が早稻田の新進作家の間に數へられるやうになつて間もなくの事だつたから、二人とも子供らしくて元氣がよかつたが、昔からのカッフェエについて考へて見る時、いつもその時の事が浮んで來るのは、その時彼が著てゐた外套と私が著てゐた外套とが、恐ろしく特色があつたがためである。

新進作家になつても、到底外套など買へる餘裕のなかつた自分は、父ゆづりの古トンビを著てゐた。玉蟲色の甲斐絹の裏のついた、胸のボタンが二列になつてゐる、あの古トンビである。これは明治の中期頃はやつた外套で、大正六七年頃の銀座通を濶歩出來る代物ではなかつた。自分は寒いからそれを著て歩いてゐたが、どうも胸のボタンが二列になつてゐるのは、始終氣になつてゐた。だから胸をややすぼめる樣にして歩いてゐた。

ところが、當時有名な赤門の新進作家である久米正雄に會つて見ると、これ亦やはり二列のボタンのついたトンビを著てゐる。而も自分のより尙古くて、色も羊羹色で、どう見ても町の四辻の新聞賣の爺さんが引つかけてゐさうな品物である。恐らくこれも親讓りに違ひない。多分御眞影事件で責任を明かにした彼の謹嚴なる父上からの遺物だつたに違ひない。——併し兎に角、いろいろ由緒あるトンビであつたかは知らないが、銀座から須田町へのあの大東京の目拔通を、三十前の好い若者が、そして當時賣出しの新進作家ともあらうものが、互に著て步けるやうな外套でないやうな外套を、二人は引つかけて歩いてゐたわけなのである。

無論二人は外套の事は一言も云はなかつた。併しその二列のボタンのついたトンビの胸を、久米正雄が何のひるむ處もなく開け擴げて、グビリグビリとウヰスキーを飮んでゐる恰好を見ながら、私は「恐ろしくこの男はなりふりに構はない男だ」と思

つて感心したものである。

併しそれから間もなく、私はラクダメルトンの繻子裏の外套を新調した。そしてその後久米に會つて見たら、彼も亦同じくラクダメルトンの繻子裏の新調を著てゐた。

私はひそかに顔笑んだ。

こんな事はカッフェエとは何の關係もない事である。併しその當時のカッフェエ漫歩を思ひ出すと、カッフェエそのものよりは、そんな事の方が頭に浮んで來る。

我々が最も多くカッフェエを歩いた當時、一番足を多く向けたのは臺灣喫茶店である。この店は今でもあるが、併し主人夫婦が競爭心がないためか、はやつてもはやらなくても超然としてゐる。併し昔はなかなか盛んなものだつた。近藤經一の『第二の誕生』で有名なお夏つちやんのゐた頃は、我々がウーロン黨になつた時よりももう少し前で、その當時も盛んだつたが、我々が集まつた頃も亦全盛だつた。（我々より年齢の下の近藤經一が、ウーロンの初期に、既に『第二の誕生』を書くやうなロマンスを惹起してゐたといふ事は驚嘆に値するではないか。恐らくそれは近藤經一が中學を出たか出ないかの頃だつたと思ふ。）

このウーロンには地震前までは、二階に特別室があつた。確か十錢か二十錢の金を拂ふと、そのスペシャル・ルームで、二時間でも三時間でも、本を讀んだり、原稿を書いたりしてゐられた。ウーロン茶一杯で、何時間腰かけてゐても、おかみさん（この人は奥さんと呼ばれてゐるが）は厭な顔一つしなかつた。まことにノンビリした好い氣分の家だつた。――震災後は二階を止めて、階下だけになつて、せせこましくなつたので、行く氣がしなくなつたが、實際震災前のこの店のやうな店があつたらどんなに好いかと、近頃のせはしない、がつがつしたカッフェエを見るとさう思ふ。

露西亜で殺られた大庭柯公も、理想的なカッフェエはウーロンだとその當時云つてゐた。あれで『新聞や雜誌が自由に縱覽出來たら』と彼は註文してゐたが、全く震災前のウーロンの特別室のやうなものがあつて、主なる新聞と主なる雜誌とがそなへつけてあつたら、我々にもどんなに嬉しからうと思ふ。

○

震災が何もかもを變へてしまつた。併し震災一二年後まではまだライオンその他は感じがよかつた。ウェエトレス達は、何も錦紗の著物を競ふ必要はなかつた。娘らしくして、銘仙を著て、客の註文をはこんで來れば、それでよかつた。――ライオンは最後まで昔の品位を守つて、女給を客の前に腰かけさせな

かつたが、今度の改築後、たうとう時勢に抗し兼ねて、その長い間の傳統を破り、腰かける事を許すやうになつてしまつた。

併しこの店には、未だに十年前からの馴染客が、色氣そつちのけでスタンドの前に立つて、如何にも飲む事それ自身が樂しいといふ顔付で、酒を飲んでゐる。それが何をしてゐる人であるか、何處に住んでゐる人であるか解らないが、今までライオンに這入つて見ると、いつでも十年前から知つてゐる顔の二つや三つに必ずぶつかる。――『おお、まだあの男も健在にしてゐるな。何處の誰だかは知らないが』かう思つて、頰笑みたくなる。東京市の何處を歩いても出會つた事がないのに、この店に來るといつも見る顔……

ライオンにはさういふ好さがある。その好さも今は次第に消えて行きつつあるが、併しまた何處かに『自由主義時代』の面影を止めてゐるノンビリさがある。

もつとも震災前のウーロンの二階をなつかしみ、又その當時のライオンの上品さをなつかしむといつた心持の殘つてゐる我々は、現代のカッフェを談ずる資格は、ほんたうにはないのかも知れない。喫茶店やビーヤホールと全然區別が出來て、それ自身の性質を發揮して來た現時のバアやカッフェは、ジャズに面をそむける氣持の少しでもある我々よりも、もつと新時代になつてしまつたのかも知れない。

そこに持つて來て、大阪氣分の輸入である。

最初東京から輸出し、今や大阪から逆輸入する形になつて、終にカッフェの面影は、全く昔日と違つたものになつてしまつたのである。

銘仙のライオンを、錦紗のタイガーが壓倒したのも、カッフェ史の上では、もう大分事古りたことになつてしまつた。そのタイガーも最近は沒落して、サロン春、ゴンドラ、美人座、サン等に、その全盛を讓つてしまつた。

それ等の推移が何處から來るか。うかつに歩いてゐる私などには、その原因がよく解らないが、併し新しいもの、新しいものと追つて行く醉客の好奇心を滿足させてゐる間だけが、その生命らしい。これを六ケ敷く時代相と關聯させて考へても見たが、併し私には別段そこに特殊なものは感じられない。何故かといふと、新しく大仕掛なものが出來ればそれがはやり、他に又新しく大仕掛なものが出來れば、更にそれに客を奪はれて行くからである。今年の始めには、最も新しかつたサロン春が、何處よりも全盛を極めてゐた。タイガーなどの沒落が早められたのは、この大カッフェが出來たためである。そこにゴンドラの改築が出來、ライオンの改築が出來ると、更にそこに客が

集まり、そして最近では美人座が大阪支店と銘打つて出來たので、それに今や一番客の好奇心がそそがれてゐる。――實際はやるのも早いが、衰へるのも早い。

或人が、今日のカッフェエにはなくて、裏通りの小さなバアにあると云つて、私を二三案内してくれたが、併し半裸體の洋裝の本格的エロ氣分は、一遍に私に嘔吐を催させてしまつた。大倉の裏通に並んでゐる小バア、小カッフェエ……露骨が面白い人は、その邊をうろついて見るがいい。いや、更に露骨が面白いと思ふ人なら、銀座を捨てて、新宿のカッフェ街、バア街に行つて見るがいい。――多年カフフエエを歩いてゐる筈の私の如きがその入口で立ちすくむ程、それ程やけくそに所謂流行の「エロ」に充ちてゐるから。

○

何でも警視廳の調べによると、女給の中の一割八分は風俗問題での注意人物ださうである。もつとも、人傳に聞いたのだから、はつきりした事は知らぬ。一割八分と云へば、割合に尠いといふ風に思ふ人もあるかも知れない。けれども、二千人中三百六十人だと考へれば、決して尠い方ではないだらう。若し流行病か何かなら、その割合は、戰慄すべきものであるからである。――併し或口の悪い男の説によると、善良な家庭の細君をも交へて、その位の比率は女全體の比率と云つてもいいかも知れないさうである。

併し彼女等は我々が思つた程出鱈目なものではない。と同時に、又案外眞面目かと思ふと、さうでもない、と云つた風である。――つまり一概には云へない。中には箸にも棒にもかからない連中がゐると共に、上流家庭の女學生などよりもずつと眞面目でしつかりした女もゐる。

もつとも、日本の警視廳は、職業を持つてゐる女は、總て色目鏡をもつて見る癖があるから、一寸男と散歩した位で、醜業婦扱ひをされ、そしてさういふ扱ひを受けたといふ事から、却つて反抗的に女の墮落を早める嫌ひがありはしないかと思ふ。

マアジヤン・ガールが出來れば、直ぐ其取締り規則が出來る。それも女を罪人扱ひにする日本の警視廳らしい遣方である。

今のやうにせち辛い世の中では、金が多少自由になる中年からの男が、女に取つては頼りに見える。そこを利用して、若い女を誘惑して行く中年男、金で女を墮落させて行くさういふ男を、女そのものよりも取締らなければ、何と云つても女は可哀さうだと、私などは思ふ。（完）

アメリカ通信

失業のアメリカ

在ニューヨーク本社特派員　清澤洌

一

フォードを訪ねてデトロイト市に出た時のことである。ナイヤガラ・フォールからそこに晩に着いた私は、手荷物をホテルにおくと、そのまゝブラリと夏の街に出て、目あてもなく散歩してゐた。

暫らく行くと私はアメリカに發見すべからざるものを發見した。街の角に二重折りの小階子を立てゝ、そこから雄辯に米國の經濟組織を攻撃してゐる辯士があるのだ。聽衆は七八十名もあらうか、引き切りなしに通る自動車の騷音が、時々辯士の聲を遮げた。

辯士は米國の目下の失業者が七百萬人以上に達するといつた。『失業問題の解決を資本家に望むのは、山に登つて魚を捜すやうなものだ。この問題で直接に影響を蒙るものはわれ等勞働者なるが故に、この問題の解決にはわれ等自身が當らねばならぬ。』われ等勞働者と力を入れるかれを見ると、白いカラーをかけて立派な、夏服の紳士姿である。

かれは更に續けていつた。『勞働者のとる給料は、かれ等が生産するもの、極めて一部分であります。それだから世界の生産は、かれ等の給料を以ては買ひかへすわけにはゆかない。そこに必らず資本家に對する餘剩が殘る。この餘剩をどうにか處分してしまふまでは——賣つてしまふか、捨てゝしまふまでは生産は中絶せねばなりません。工場が閉ると勞働者は失業して、物が買えなくなる。物が買えなくなると市場の恢復は益々遲れる。あなたは何時までそうやつて待つて居るつもりなのですか。』かれはバタンと演壇代りの階子を叩いた。

コンヴエンショナルなこの議論も、米人の聽衆には珍らしいか、かれ等の多くは大きく肯いて傾聽してゐた。辯士は米國の失業數が漸次増して行くのに、ロシアでは新らしい計畫によつて、失業問題などは全然ないといつた。『この世界一の富裕な國にあつて、パン一つも得られない人間が町に滿ちてゐるのだ。どうすれば救はれるか。生産機關を少數者の手から取りもどすのだ。』かれは自から問ふて自から答へた。

話しが終つて、『自分達の運動のために應分の寄附を乞ふ』といふと、オバーオールの勞働者が、みんなポケットから金を出した。その中には

一弗紙幣も少なくなかつた。

私は自分の金を帽子の中に入れながら、今まで廻つて來た町で——紐育でも、フイラデルフイアでも。ワシントンでも。かういふ光景にめぐり合はせずに（失業者示威運動の當時は私は歐洲にゐた）、米國で最も發達した工業都市であるデトロイトで、しかもフオードに逢ふ前夜に、革命を説く一團に打突かつたことを興味あることに思つた。デトロイトは誰も知るやうに自動車の都。今回の米國の不景氣も、昨年の夏、この町を蔽つた暗雲が全米を蔽ふに至つたものなのだ。

翌る日、フオード會社に行くと、ソヴエート・ロシアから來た練習生といふのが五十名近くゐた。フオードはロシアの産業化を助けるために、出來るだけの援助をしてゐるのだといふ。私を案内したある社員がいつた。

『ロシア人といふのは、一體どういふ人々でせうか。こゝに來ても到底、あんな忙がしいことには向きませんよ。迚も機械について行けません。あれで産業化だの機械化だのが出來るものでせうか』

米國の過去の經濟哲學と繁榮は自動車を中心にしてデトロイトから起つたといつてもいゝ。米國の將來の問題も、この發達した工業都市に顯著な失業問題から頭を擡げるであらう。

二

一體、現在米國に失業者が幾らあるのか。これに關する統計は、調査館に行つて調べても、その數字は明らかではない。左翼理論家はその立場から成るべく多い數字に傾くやうである。たとへば伯林で發行する『第三インタナショナル・プレス・コレスポンデンス』のヴオルガ氏の如きは米國の失業者數を七百萬といつてゐる。（序手だからいつてをくが、日本の最も有力な雜誌において、ある理論家がこの論文をそのまゝ翻譯して、しかも自家の説の如くに發表して居る。左翼理論が多くの場合判で押したやうに同じであるにしても。またこの雜誌が日本へ輸入禁止をされてゐて、多數の人の手に入らないにしても。これは甚だ不德義たるを免がれない。もつとも共産主義は思想の共産をも意味して、他人のものはおれのものだといふのなら別だけれども）。

われ等の知るところでは米國の失業者數を七百萬と數へたものは餘りない。メセロール（Darwin Meserol of the National Unemployment League）氏が六百六十萬人と數へてゐるのが最高で、多くはこれが高すぎるといふに傾いてゐる。

米國勞働組合の會長グリーン氏は本年四月一日、上院商業委員會において、その會員の一割九分が失業して居り、この比率を全部の勞働者に應用すれば三百七十萬人になるといつた。同氏は曰く

『わが組合の失業統計によると、過去二十七ケ月の間、全職業を通ずる失業者の數は、かつて九パーセントより少なからず、時には二十二パーセントに及んだ。これについて注目すべきことは米國の繁榮が絶頂に及んだ一九二九年においても、平均失業者數は九パーセント以下に下らないことである。殊に昨年十一月より經濟界の不況により失業者激增し、本年二月は過去三ケ年の内最も多數であつて、

四人の内一人までは失業者であることを示してゐる。建築業においては四割三分まで失業者である。工業産業全般を通じて勞働者に支拂ふ給料は、株暴落後一割四分の減少であり、鐵道に動く勞働者に對する給料は一割二分を減じた』

この發表があつてから後も、同組合の統計は大體一割前後を往復してゐるから、グリーン氏の統計は今尚訂正する必要を見ないが、併し同組合は比較的に熟練職工をその會員にしてゐるから、全般的失業者數はその比率以上だと見なければなるまい。

上院議員ブルックハート氏は失業者數を三百萬から六百萬の間だといひ、同じく上院議員クーゼンス氏は、政府要路の人がかれに語つたところだとて、三百十萬人だといつてゐる。

米國政府の統計局は四月に、米國一部の失業者數を調査したが、その結果が最近に發表された。それによると『もしこの統計が一般に適應されるならば米國の失業者數は二百四十九萬八千五百八十八人になる』といつてゐるが、これは一般に想像されるよりも少數で、專門家の間では、それが工業區域を蔽はず、以て正確な基礎數字となすにたらないであらうとされてゐる。

いづれにしても本年度に行はれた米國統計が完成するまでは正確な數字をうることは困難だが、比較的に公平だと思はれるのはスチュワード・チェース氏の推測で四百萬内外とするものである。同氏は曰く

『私の想像では四月における失業者數は少なくとも四百萬人を下ることはあるまい。統計を調べてみると、現在の失業者數は平時の二倍だと思はれる。もし米國の有職者數を三千萬人とし、その七分が職のないものだとすれば——これは保守的な觀測だ——恒久的失業者は二百萬人であり、この倍が四百萬人である。これは比較的公平な推測だとは思ふが、保守的である』(Harpers Magazine, July)

と云つてゐる。

中央公論の夏期特別號で猪俣津南雄氏は米國の失業者數を六百萬人とし、勞働者が一千萬人だから五割五分から六割にあたるといつてゐるが、勞働者數を一千萬人とするなら六百萬人は途方もなく多すぎる。こゝで引照した數字は、單に工業勞働者だけでなくて、(Gainfully employed)の三千萬を標準とした結果である。

試みにこれを比率にしてみると、米國勞働組合員(會員三百五十萬を有する)の失業者數は左の如くである。

年次	總職業%	建築%	印刷%	金屬%	その他
一九二八年一月	一八	三六	四	一八	
四月	一六	三二	五	一二	
七月	一二	二四	五	一三	
十月	九	一八	五	八	
十二月	一三	二三	三	八	
一九二九年一月	一五	三〇	四	八	
四月	一二	二九	四	六	
六月	九	一九	三	五	

八月	九	一八	四	一七	
十二月	一六	三二	四	一一	
一九三〇年一月	二〇	三八	五	一五	一二
二月	二三	四三	五	一八	一三
三月	二一	四一	六	一八	一三
四月	二一	四〇	六	一九	一二
五月	二〇	三七	六	一九	一三
六月	二〇	三七	七	二一	一三

右によつて最も不況なものが建築業、最も動搖のないものが印刷工であり、そしてこの平均が二割内外を上下してゐるのを知ることが出來るであらう。

三

米國の失業者が六百萬人であり、四百萬人であり、或ひは二百萬人であることは、併しながら、この問題の重要性を少しも輕減しては居らない。資本家に對しては猫の如く柔順である勞働組合會長グリーン氏でさへも、上院に對して

『失業問題を現在の如く目標なく漂流させるならば、われ等は從來統制があつたわが組合員が、永遠にしかあるべしと期待するわけにはゆかぬ』

といひ、また『政府はこの人々に對する前後策をとるべし、然らざれば革命はわれ等の手中にあり』と脅してゐるのである。

然らばこれが原因は何か。われ等はこの問題に關する對策として何が考へられ、實行されて居るかを紹介する前に、簡單にこれに觸れる必要があると思ふ。

失業者輩出の第一の原因が、資本主義經濟組織にあるのは申すまでもない。これについてはこの文において深く觸れる意志はないが、アメリカの經濟的大恐慌がこの國を襲ふたのは、今回が第五回目である。第一回はナポレオン戰爭の後を受けて、世界商業が盛んになり十二ケ年の間繁榮を續けたのであるが、一八三七年の恐慌に化した。

その後、カリフオルニアに金鑛が發見され移民の西下、馬匹による農耕、鐵道の開通等の事實により再び繁榮期が來たが、結局これに行詰りが來て一八五七年、銀行破碇と共に恐慌が來た。この繁榮の壽命は八ケ年であつた。

南北戰爭の後に、米國の繁榮期はまた始まつた。太平洋沿岸における處女地の征服によつて景氣は高調に達し、繁榮を誇る事十四ケ年、一八九三年の恐慌に終つた。これが最も長期に亘る繁榮期であつた。

その後、一八九八年にはアラスカに金鑛が發見され、その頃から漸く擡頭して來た電氣事業と機械産業は羽をのして、米國の景氣は上向いたが、タフト氏が大統領になつた頃、九ケ年の壽命で終つた。

一九一〇年から一九二〇年の間の米國經濟界の事は、その間に世界大戰があるので、平時の狀態としては論じられないが、一九一五年に襲來しかゝつてゐた不景氣風は歐洲戰爭によつて飛散して、大景氣が來た。併しそれは戰爭終止して二ケ年、一九二〇年五月から恐慌の徴候を示

し、一九二一年には極端に惡化した。

一九二二年には再び景氣恢復して、世界各國がその疲弊に喘ぐ際、米國一人繁榮を誇つてゐたが、一九二九年十月の株式暴落を端緒として恐慌時代は出現した。

これを周期的な意味からすれば、米國の繁榮は十二ケ年、八ケ年、十四ケ年、九年、十年、八ケ年といふやうに平均十ケ年餘を示して居り、その終りにはかならず恐慌が來て居る。更にこの景氣恢復までには幾何の時日がかゝるかといふと、恐慌後一ケ年目からは普通の經濟狀態に入り、第二ケ年目からは好景氣になつてゐる。今回の不景氣は昨年夏からであるから、今秋にはやゝ平時狀態に入り、來年から好景氣の車が廻るであらうと信じられてゐる理由はこゝにある。

この經濟恐慌が來る毎に、その犧牲になるものは勞働者であり、失業者が街に溢るゝのは申すまでもないことである。

四

第一を周期的な經濟恐慌による失業なりとして、第二以下をスチユワート・チエース氏に從つて左のやうに分類しよう。

第二　季節的失業――これは例へば罐詰業の如く、夏季だけには運轉するが冬期は閉鎖するもの。

第三　技術的失業（テクノロジカル・アンエンプロイメント）――文字はやゝ妥當でないが、技術の進歩と共に機械を以て人力にかへ、その結果失業を生むもの。

第四　習慣的失業――第一、第二、第三の原因を以て、失業長きに亘り、ために勞働にたへざる階級を生む事。

右の四つを以て大體に失業の種類を分類しうるが、最近の米國には更に二つの種類を加ふることを必要とする。

第五　所謂ストップ・ウオッチ失業――米國における能率研究の結果は、必ずしも機械によらずして、タイムの研究によつて、錬瓦工が二人でなすことを一人でなしうるやうになつて來て居る、これが人間を不要にする。

第六　合同失業――米國における最近の傾向は會社の合同にあつた。この合同の結果は副社長や事務員やが、一時に解雇されるのである。この數が必ずしも馬鹿にならぬ。

かりに經濟恐慌による周期的失業は、その期間も少なく、一時的救濟により解決するとしよう。問題は恒久的なる失業者をどうするかである。そして米國勞働組合會長グリーン氏によれば、その數は組合勞働者の九分を下らず、全米的にいへば二百萬を前後して居るといふのである。

米國産業界の能率は止まるところなく進みつゝある。ある英國の經濟學者がいつたやうに『米國の富源は豐富であるが故に、それ等は浪費されて居る、米國の勞働者は高價であるが故に、それは經濟化（エコノマイズ）されて居る。』この結果は勞働者は街に放り出される。

四ケ年の間に、煙草製造は五十三パーセントの増加であるが、就業者數は十三パーセントを減じた。精油は八十四パーセントの生産増加であるが、その間に頭數は五分を減じた。電球製造機が、廿四時間に七萬三

千個を造り出すに及んで、それが一臺揃る毎に、二千人の熟練職工は不要になるのだ。凡そかういふことを擧げれば限りがない。

アメリカに來て目立つのは、電車や乗合自動車などを運轉しながら車掌の役目をつとめるのが多いことである。私がいつかハリーウッドに行つた時のことである。そこの案内人が、大舞臺を指さして

『あれは手で造つたんです、これも手で造つたものなのです』

と、手で造つたものであることを非常に高貴なもの、やうに勿體ぶつていつてゐた。この國で機械を使はないのは 尻をふくことぐらゐなものである。

始めの間はこの機械によつて彈き出された人間は、新興の産業に吸ひとられた。映畫産業とか、ラヂオ産業などがこれである。現に自動車産業の如きは一九〇〇年以來、四百萬人を吸收してゐる。併しその吸收物も、もう下向きになつてゐる。

アイロン・エーヂ誌にこんな記事がある――

『機械化による産業界の能率が過去二十五ヶ年と同じ率によつて將來も進むならば、二十五ヶ年後においては、現在七十人を要しかつては百人を要した仕事が、僅かに四十五人を要するにすぎないであらう。自動車産業においては一九一四年に百人を要したものが、今は僅かに三十人を要して居るにすぎない』

この餘る人間をどうするか。ミッチエル博士の統計によると一九二〇年から一九二七年までに、主にこの理由から來た失業者が六十五萬人あるとのことである。

この外に合同による失業者がある。かつては一萬弗乃至三萬弗の年俸をとつたものが、今はその半分でも滿足するからといつてゐるが、それでもなほ仕事口はない。無論、將來も新らしく發明さるべき産業に、ある程度の勞力の需要あるべきは豫見しうる。併しそれは剩餘人員を滿たすにたらぬであらう。

米國は一九二九―三〇年の經濟恐慌に會して、上下始めて眞劍に失業問題の重大性を自覺するに至つた。極端に樂觀的であつた米國人が、從來この問題に何等の注意を拂はなかつたのは、この統計好きの國民を以てして、完全なる失業統計一つないのでも知ることが出來るであらう。

五

大統領フーヴァ氏は、昨年の秋、株式界の崩壞と共に、失業者の續出を知るや、一方一億三千萬弗の減税を斷行すると同時に、直ちに米國産業界の巨頭を招いて前後策について協議した。巨頭達はこの危機に際して、愛國的動機からだけでも、大統領と協力すべきことを契つた。白亞館は一時、産業界の大本營の觀を呈した。

『ビジネスには出來るだけ政治を少なく、政治には出來るだけビジネスを多く』(More business in Politic, less politic in busines) それを標語にしてゐるアメリカが、經濟恐慌が來る毎に、政治が常にビジネスの埒内に踏み込むのは――そしてかういふ場合ビジネスに統制を必要とする事が將來に對し何を語るかは別な機會に說くを要しようが、今回の場合において、フーヴァ氏が最も極說し、かつ實業家が裏書きしたのは、

公私の土木建築事業及び工場擴張、修繕等をこの際に實行することであつた。これと同時に勞働者の給料引下げを行はざることを申し合せ、フオードは歸宅すると直ちに給料値上げを聲明したのであつた。

この公共事業の擴張はフーヴァ氏が今更考へついたことではない。かれが大統領當選に確定するや、かれは當時、ニユーオリアンスにおいて開會されてゐた各州知事會議に手紙を送つて、その州の土木事業を延期し、不景氣時期にこれを利用して、失業者救濟その他に當てんことを希望したのである。かれが一方個人企業家にこの事を懇請すると共に、州當局者に勸告したのは無論である。

この結果、土木事業は本年度において頗ぶる活潑な活動を見るであらうと豫想された。本年の春、商務長官ラモント氏は發表して公共土木事業に費消する額は、七十億弗に及ぶべく、これに個人の住宅、工場等が昨年度三十億弗を費やして居るから、總計は百億弗——少なくとも九十億弗には達すべしと豫想したのである。

併し産業界は單なる一時的感激や、愛國心では動かぬことが、月日の經過するに從つて知れて來た。過去の經驗では土木費の下落するのは、繁榮の峠が崩れてから九ケ月乃至十八ケ月の後である。大戰後の恐慌期においては、その崩壞は一九二〇年秋に始まつたが、建築諸費用が底をついたのは一九二一年の夏であつた。商賣人である大實業家の何人が、現在眼の前に下落しつゝある物價を見て、高價なるものを買入れる者があらうか。

フーヴァ氏は米國の經濟恐慌を見るのに、他の米國人と同じ過誤を行してゐた。かれは株式暴落以前において、普通かうした場合に見うる諸現象、殊に物價騰貴のことのないのを見て、インフレーションは單に株式界に限られて居り、ビジネスそのものは健實であると信じてゐた。故にかれは何回も極端なる樂觀說を發表すると同時に、本年三月七日には左の如き聲明を發したのである。

『總べての徵候を綜合すると、失業問題に與へた打擊は、今後六十日の間には失くなるであらう、季節的な失業は調節され、他の要素は漸次力を得、また諸種の機關は政府と協力して經濟界を復活せしむるであらう』

この豫言はフーヴァ氏の他のそれと同じく實現しなかつた。それはたゞ一時株式界を樂觀せしめて、昨年秋の株價より四割を騰貴せしめ、一時的空景氣を見せたゞけで、失業者は依然減少せず、建築、土木界の如きは却つて惡化してゐるのは前揭の統計によつても明らかである。

フーヴァ氏の過誤は何處にあつたか。かれは生產過剩の事實を認めえないところにあつた。前に書いたやうに米國の產業合理化の結果は、現在米國は一ケ年に七百萬臺の自動車を生產しうる設備がある。然るに米國一流の賣捌方法を以てしても、五百萬臺以上を賣るのは困難である。クーゼンス上院議員によるとラヂオの製造工場は一ケ年に一千五百萬臺の製造能力があるが、市場で處分しうるのは三百萬臺ぐらゐなものである。産業合理化そのものに轉換期が來たことを示すものである。

今回の恐慌前においても、過去のそれと同じ現象が現はれた。即ち一九一九年の大恐慌の例をとつてみると

『銀行ばかりではない。商工人も法外に將來を抵當に入れた。製造家は充分な保護を見込んでその工場を擴張し、生産を倍加した。土地會社はその財產で借金し、利益を得られないやうになつた。農業家は猛烈にその土地を改良した。運輸會社は巨額の金を投資して配當を得られず、況んや負債を償ひえなかつた』』(Katherine Coman, 『Industrial History of the United States』)

といふ狀態であつた。

これに加へて當時になかつたところの賦割拂込制度が事態を困難にした。自動車に例をとると昨年の生産額が約三十七億弗であるが、これが三分の一までは賦支拂ひ中にあるものである。この點については勞働組合のダラキン氏も認めて『勞働者はその俸給を抵當に入れて物を買つた。これは疑ひもなく生活程度を向上させたが、併し餘りにこれを擴げた結果は不景氣を煽り、失業によつて更に問題を難化せしめた』といつてゐる。勞働者は失業によりて拂込みを繼續しえず、更にその損失は保險會社と卸商に及び、事態を困難にならしめて居る。

生產過剩を重大なる原因とする經濟恐慌の對策として、大統領フーダア氏は、その經濟恐慌を來たした原因――工場の擴張、工事の增加を進めて居るのである。今回の失業問題が、かりに一時的に解決しても――かれの發言は今までのところ事每に事實によつて裏切られた――永久の問題は尚將來に殘るのである。かれの功績としては今回の機會において『產業調査會議』の創設にあるが、かれの經濟觀は米國を以てしても餘りに保守的である。

然らば失業問題の解決策について、現在何が考慮されてゐるか。目前の問題としては上院議員ブルックハート氏は、失業者の一時的救濟のために議會に五千萬弗の支出を要求する法案を提出してゐるが、恒久的なものとしては左のやうなものがある。

第一　失業調査及び公立職業紹介所の設置――これは二つに分けてもいゝし、一つにしてもいゝ。米國において失業の數字すら明らかならず、勞働者の分配が不可能なる現狀に顧みて、この案の必要は今や漸く認められて來たやうである。

ニューヨーク選出の上院議員ワグナー氏は三個の失業對策法案を議會に提出した。即ち(一)就職の安定を期するため、中央政府は合衆國の公共事業の建築、修繕について、組織的なる規法を設くべし(二)職業紹介所について全國的なる組織を造るべし、(三)勞働統計局をして就職狀態に關する調査、發表、報告をなさしむべし。といふの三條である。第一については後に說くが、二、三はこの機關設置の必要を主張するものであつて、いづれも上院は通過してゐる。

この第三案の勞働統計局案は、今後四ヶ年に、中央政府は千六百萬弗を支出し、一ヶ年四百萬弗づゝをこの目的に消費する。そしてその內三百萬弗を、人口に應じて州に分與し、同じ機關を設けしめるか、既設のものに補助せしめる。もし各州が進んでこれをなさゞる時は、當局の長官はこれを設けることゝす』、

といふのがその骨子である。

この案は、かつて一九二二年の失業問題會議（當時の商務局長官フーヴァ氏を議長とした）の際にも提議されたものであつたが、景氣恢復と共に忘れられてしまつた。當時の案は、『勞働交換のために相連絡する全國的機關を作り、失業者は(イ)仕事を得るために登錄するか(ロ)保險準備金より保險金を分與するために登錄することにする』。かくして失業に對する對策を平時においても講ずることが出來るといふのである。

米國の如く市場が廣汎で、紐育の失業狀態は必らずしもシカゴのそれと同じでない國においては、かゝる組織は極めて必要であつて、從來單なる風評によつて勞働者が一つの町に蝟集して來る例は稀ではない。この點は米國勞働組合も對策の一つとして提言してゐる。

第二　失業保險の確立——失業統計のない米國に失業保險のあるわけはない。この確立は漸く米國の輿論になつて來た。ニューヨーク州知事ルーズベルト氏は六月卅日各州知事會議でこれが必要を說き、『産業傷害保險が既存する以上、失業保險の必要はある。現在紐育州には七十歲以上の男女に對する老年保險があるが、これを失業者に擴張すべきである。但しこれには(一)仕事を與へられたるに拘はらず、これを受諾しないもの（二）一人にして二ケ月乃至は三ケ月以內に仕事を變更せしめぬやうにする事等の注意がいる。そして同時に危險なことは政府及び社會が、その失業の費用を定期的收入から支拂ふことである。故にこれは（一）別途の會計にする事（二）これが費用は勞働者自身の據出による事』を主張してゐる。

不思議に米國勞働組合は、その對策の中に失業保險を主張して居らぬが、他の小團體、特に左翼の人々がこれを要求して居るのは勿論である。

第三　公共事業の擴張——失業對策の內最も力を入れてゐるのは道路、公共建築物の擴張である。ただ問題は世間が不景氣になつて來て、失業者が溢(あふ)れ出したといふので、泥縄的にこれを擴張しても、その成效は大なるを得ない。平年時における注意深き組織的計畫がこれを實行して好果を得られるのである。紐育の失業(アンエンプロイメント)リーグの如きも、この公共事業の擴張を、第一の問題として速やかなる實行を合衆國及び州政府に迫つてゐる。

七

以上は失業の目前、かつ法律的解決策であるが、これ以外に經濟的解決策がある。

第四　産業の規則化——産業を投機的ならしめずに、豫かじめ豫算を作つて、生産を一定せしめることである。現にアイボリー石鹸を製造するボロクター・アンド・ギヤンブル會社の如きは翌年の生産目錄を作り、勞働者にして同會社に六ケ月以上就働したものに對しては、一ケ年に四十八週間（一ケ年は五十二週間）の仕事を保證して居る。そして過去の經驗は三パセント以上の狂ひを生じたことがない。またボルチモアー・オハイオ鐵道の如きも最近この種の組織をとり入れた。

一ケ年の需要が大體に決してゐる以上は、これを豫じめ知つて實行することは、多くの産業にとつて不可能のことではない。併しこれが機械

の發達及び合同等から來る失業問題を解決しないのは勿論であつて、單にそれは季節的及び恐慌期における、ある程度の對策を講じうるに限るのである。

第五　勞働時間の短縮――生産力の增加が失業を生む大なる原因なりとすれば、勞働時間を短縮して全部に職を與ふることは當然の結論である。これについて米國共產黨の機關誌デイリー・ウオーカーの如きは、その標語として一日七時間、一週間五日の勞働時間を叫んでゐるが、他の主張に似合はず、寧ろ保守的なりといはねばならぬ。フオードの會社は既に一週間五日制をとつて、良好なる成績を收めて居り、それは漸く他の受入るところとならんとして居る。米國がこれに向ふのは時の問題である。

第六　少年勞働者の年齡引上げ――現在の少年勞働者の年齡制限は重なる州においては十四歲である。これを十六歲に引上ぐる運動が一部に行はれてゐる。最近米國の產業は極端に老人排斥の傾向あり、四十歲以上になれば、最早どこでも雇入れぬといふ有樣である。靑壯盛りの少年の仕事を、老年者に與へることは一部の失業問題を解決する助けにはなる。

第七　退職手當――不思議なことには米國には退職手當の制度といふものが殆んどない。日本におけるこの制度を以て、產業界の負擔なりとして攻擊して來たものである。併し米國にてもこの必要を認め來たり、デニソン製造會社、アマルガメーテツド・クローシング・ウオーカーズの如きはこの制度を設けてゐる。將來、「失業に對する準備金」といふものが、必らず生れて來るであらう。

對策について最早これ以上を述べるスペースがなくなつた。たゞ、最後に書いておきたいことは、米國において失業者は重大な問題を形成して居るけれども、富豪の寄附金と婦人の活動による慈善事業が多く、そのドン底の慘めさにおいて他の國と相當の隔りがあることである。先頃救世軍の山室軍平氏が米國に來て、それ等の實際を目擊し、『あれが失業問題といふものなら、米國の失業者は極樂生活だ』とて、低金國の失業者の窮迫ぶりが、日本のそれと比較にならざることを話してゐた。

いづれにしても失業のアメリカ――眞劍なアメリカは一九三〇年を出發點として行進を始めて來た。（昭和五・七・一六）

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデング五九〇区
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく為替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾銭以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

最も經濟的な 實用替ズボン

本社代理部の替ズボンは、價格に品質に已に定評あるもので、何れも地方在住の愛讀者諸君のために、特選したものばかりであります。

舶來黒サージ(ヒザ當付)	七圓五十錢
上等黒及紺サージ(ヒザ當付)	六圓三十錢
黒及紺サージ	四圓
合着用立縞黒サージ	二圓八十五錢
上等黒絹セル(ヒザ當付)	六圓
優等黒絹セル(ヒザ當付)	七圓
薄ランシヤ・フランノ(薄茶、灰、紺)	五圓

◆夏季特價提供品◆

スポーツ用白ギャバヂン　一圓六十五錢
厚地茶縞スレン(園藝用)　一圓六十五錢

寸法
大　腹綱鯨約二・四尺　股下一・九尺
中　同　二・二尺　同　一・八尺
小　同　二・一尺　同　一・七尺

御註文には大中小の別と參考に全身長も御記入下さい。(股下はクルブシ迄を計つたもの)

送料内地十八錢　領土四十五錢

古書賣買のお取次

「古書案内」は従來古文書、和本錦繪等も扱品中に加えてをりましたが、右の中には思はぬ高價な内容を持つものがあり、再び求め難いものを含む場合さへ少くありませんので、今後はこれ等の類に屬するものは一切お受けしない事に致します。要するに賣買共に普通の古書のみをお扱ひ致します譯ですから、左の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用を願ひます。

規定

A、御註文には住所氏名を明記して下さい。
B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。
C、送品は送金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御註文後送金までの間に其品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知をきを願ひます。
D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等詳細にお書添へを願ひます。時には、現品を拝見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。
E、御照介の宛名は、「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

代理部特製品案内

圖書券

この圖書券は、中央公論、婦人公論、本社出版物の購讀は勿論、代理部の何品のお註文にも應じます。五十錢、一圓、五圓、十圓の四種。

夏の香水（スヾラン）
秋の香水（ヘリオトロープ）

本社四季の香水の一つ、佛蘭西製に優る本社特製品、紳士淑女の愛用品、本誌及婦人公論愛讀者のお家庭におすゝめ致します。定價各二圓。

コーリンス・ホワイトナー

初秋の日は一層ひどく肌が焦けます。このホワイトナーには日焦止めと同時に、肌の白美劑が多量に含まれてをります。海水浴には是非用意すべき品、婦人令孃への贈答品に最適、定價一圓二十錢。

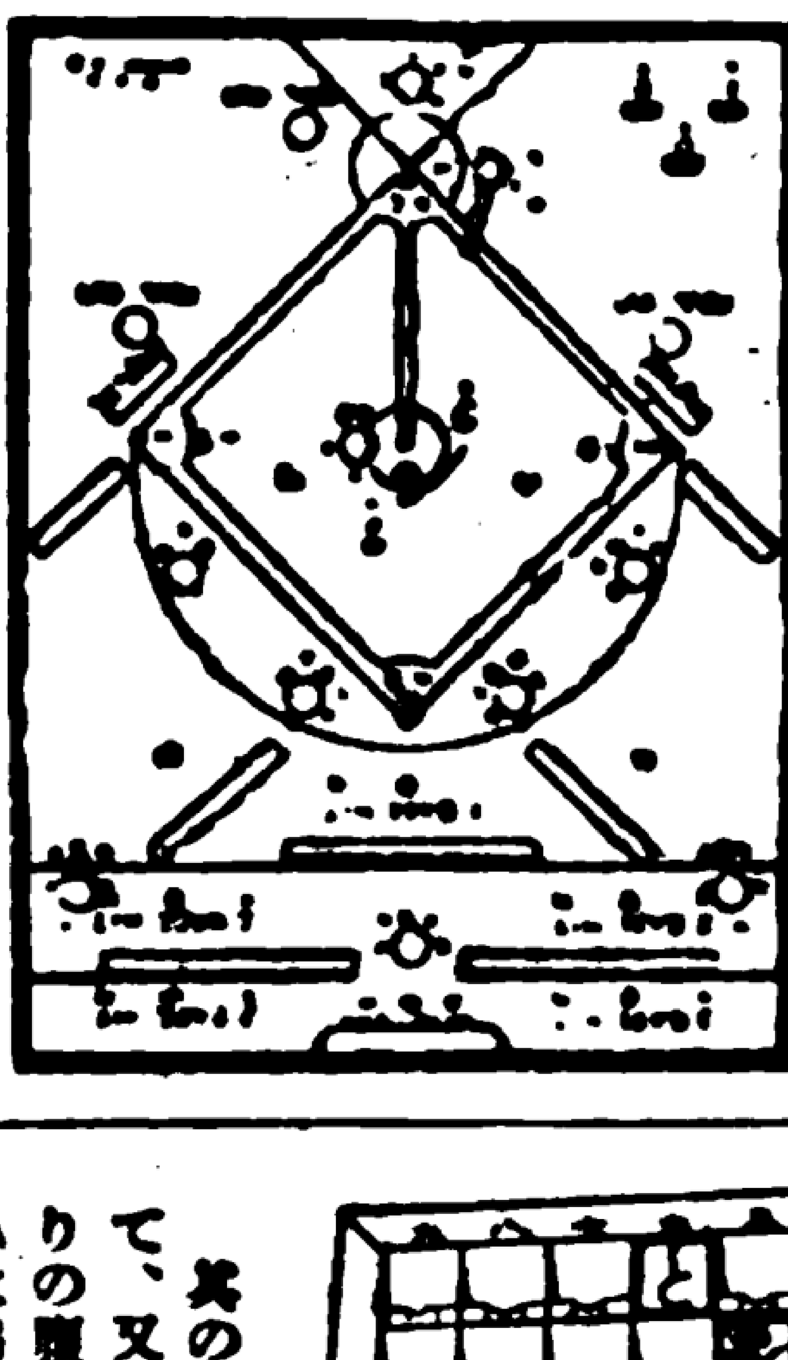
コーリンス・リクイドホワイトナー

夏から秋への婦人の美は、本品によつて保たれます。洋裝婦人の腕に、襟に、日に焦けぬ事妙。奥樣同志の贈物に、外出勝な婦人の簡單な化粧料として第一等。定價一圓。

コーリンス・ハイゼニツククリーム

本品は肌の營養クリームです。夏の日に荒らされた肌は、今の中にこのクリームで整えてをく事です。定價一圓五十錢、

誰にも愉快な野球競技盤



盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持ちで立向ふ打手との敵味方緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

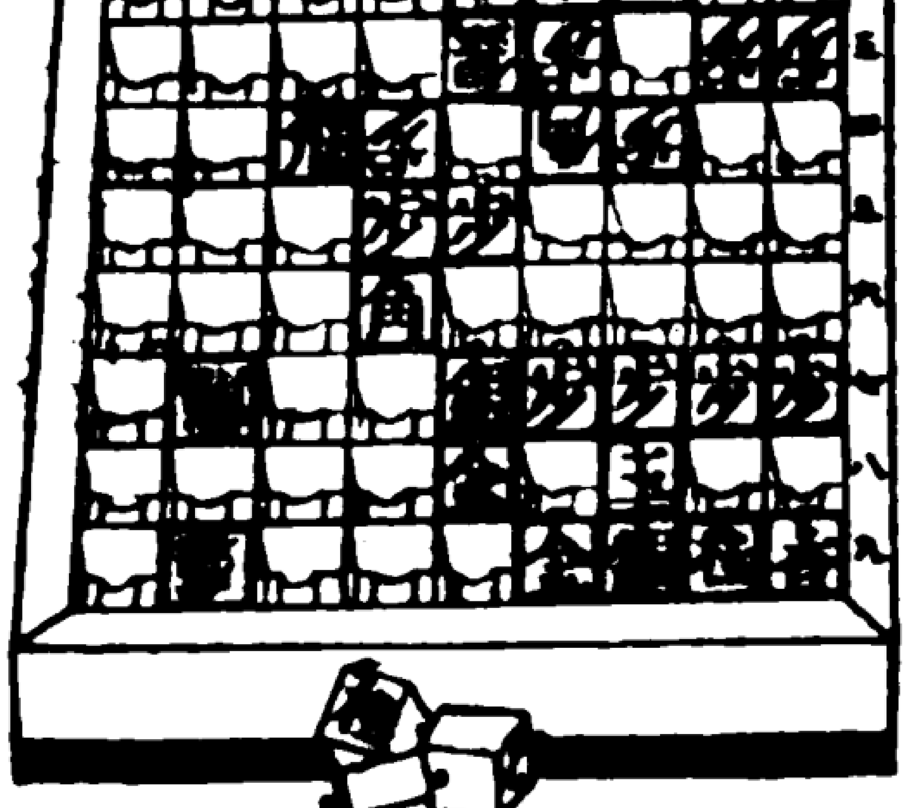
選手はもとより、春秋のシーヅン毎に野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢
送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　鮮土小型は四十五錢　中型は五十五錢

最小型將棋盤

縦三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型郵便將棋盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから。ポケットに入れて少しも重く感じる事なく。駒には一個一個磁針が附けてある等。婦女子の眼にも可愛らしい程のものです



[illegible]は尽く文字を用ひ、盤には縦横に數字が記されてありますから、棋譜を見ながらの研究には一番便利です。

其の他電車汽車の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棋家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價（駒全部附）　一圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
　　　鮮土　四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遅れますから、御註文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

¥1.20

"VALET"
Auto Strop
Safety Razor

泡立つしやぼん湧き出る微笑

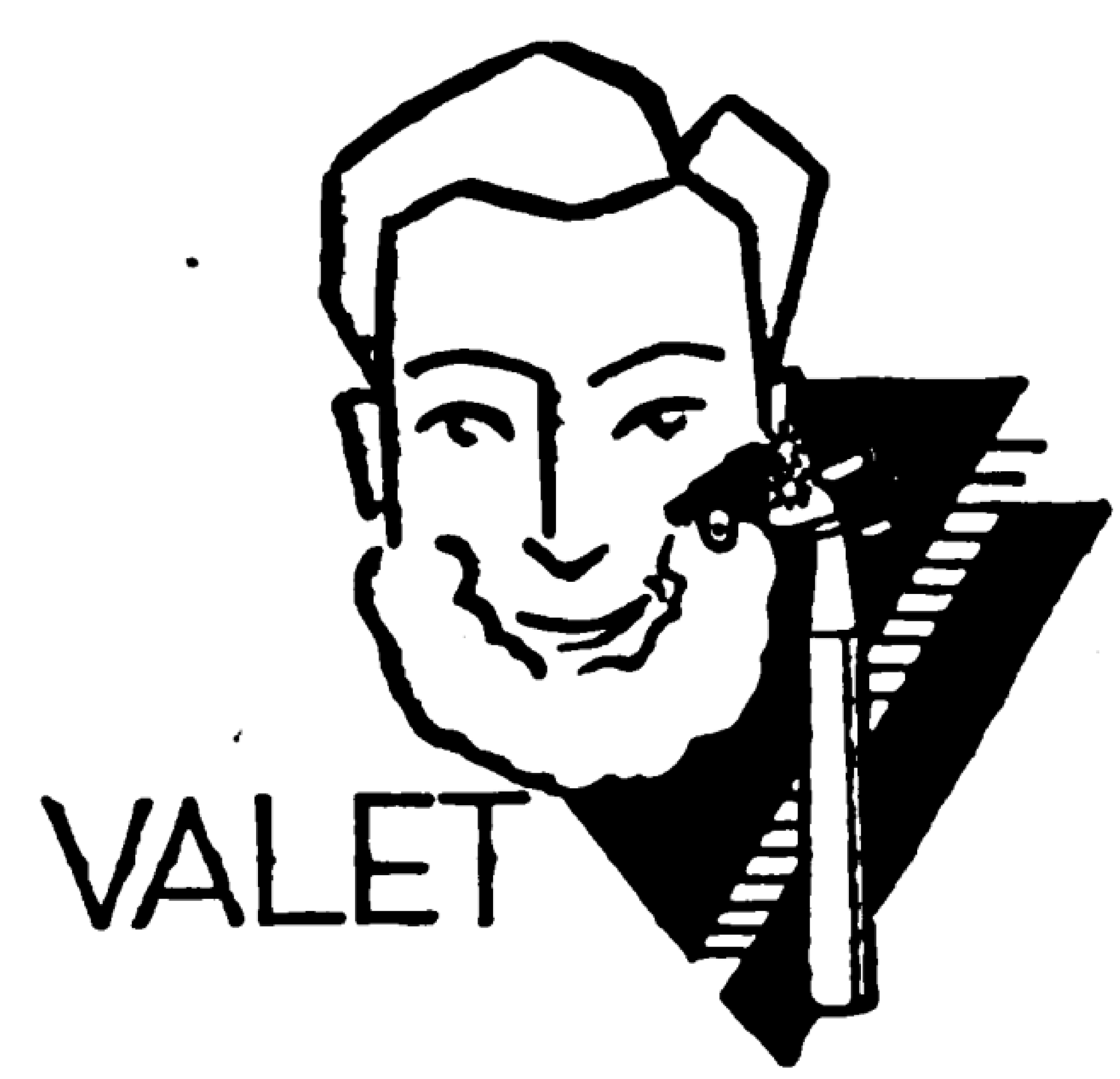
快適無比の剃ごこち

剃刀で研器を嫌れ一枚の刃が半年使へる

バレー自動研安全剃刀

B型　一・三・五〇以上各種
C型　一・二〇　一・七〇　三・三〇　四・八〇
替刃利用ナイフ（刃一枚附）　・八〇

販賣所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等
取次所　中央公論社代理部



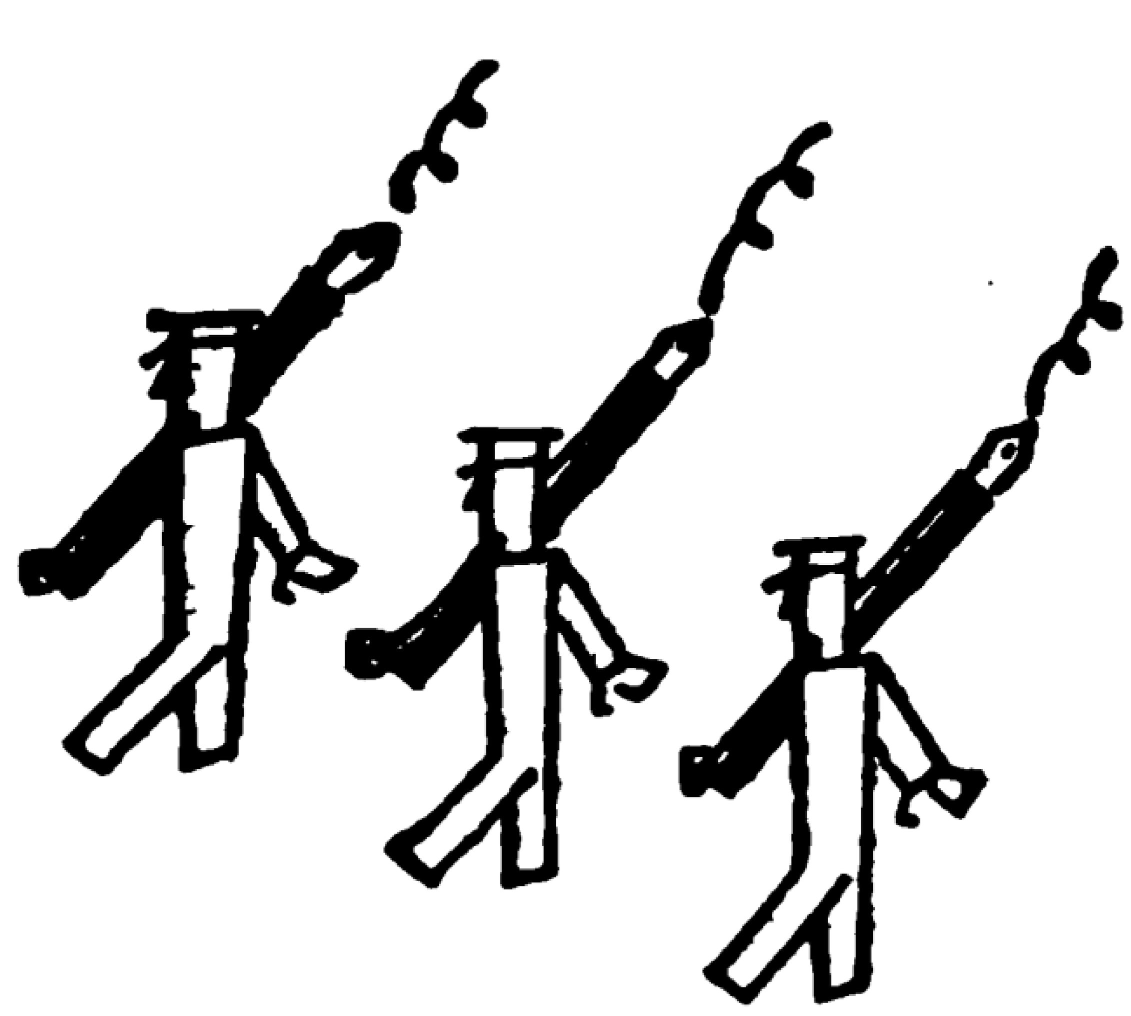
Athena the Pen

能率第一、實質第一
優良第一の國産品

使へば使ふ程書きよくなる

アテナ萬年筆　参圓五拾錢以上
オノト萬年筆　七圓五拾錢以上

萬年筆には國産優良インキアテナを御使用下さい
（送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋
横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル

海妖

—世界怪奇實話 VIII—

牧逸馬

1

有名な巴里の新聞マタン紙の創設者の一人に、アルフレッド・エドワルドといふ富豪がある。マタン紙は、今では相當古く、その言論など世界的に權威あるものだが、エドワルド氏は、創業當時から莫大な出資をして、この事件のあつた一九一一年の頃は、重要株主としてマタン社の財政を押さへてゐたのみならす、經營や編輯の表面にまで活躍してゐた。で、巴里の百萬弗新聞記者(ジャアナリスト)、Matin の實際の社長、と言へば、この Monsieur Alfred Edwards のことで、當時歐米の新聞界に鳴り響いた人物だつた。非常な精力家、博識家で、算盤とペンを兩手に使ひこなしたところなど、今日のこの尖端ジャアナリズム時代を招來した最も記憶さる可き草分けの一人と言はれてゐる。其の年は、歐羅巴の記録にちよつと類のない暑かつた年で、七月に這入ると間もなく、エドワルド氏は、極く親しい友人夫妻を數組(くみ)、善美を盡した私有快走船(ヨット)エイメ號に招待して豪奢な水上の避暑旅行に出た。何しろ巴里一流の趣味人をすぐつた此の一團だから、主人役のエドワルド氏夫妻を中心に、甲板の遊戲、談笑、舞踏、甘美な食卓と諧謔を載んだエイメ號は、滿々たる涼風を含んで主客とも滿足以上のうちに、七月二十一日、月曜日和蘭の側から、ライン河へ這入つてゐた。

氣まぐれの、急がない旅である。景色の好いところへ來ると半日も停船して釣竿を下ろしなどしながら、一九一一年七月二十四日の夜、エイメ號——The Aimée——は、ライン中流の河床に錨を投じて、流れに押され乍ら一夜を明かすことになつた。あの「ジャネットの悲劇」として西半球を騷がし、今だに忘れら

れずにゐる神秘な事件は、この夜、投錨後間もなくの出來事だつた。

和蘭の國境を離れて、まだ幾らも航行してゐない。その日の豫定は、ウヰイゼル泊りだつたが、燒くやうな暑い日で、殊に夕方に進むにつれ、遮る物のない河上は一面の斜陽を照り返して、甲板の日覆の下に出ても、風一つ動かない暑さだつた。陽は沈んでも、熱氣は殘つてゐる。一行は、噴き出る汗を持て餘して、何をする氣もなく、甲板に搖り椅子を竝べてしきりに冷やし三鞭の杯を傾けてゐた。滿潮が重く渦卷いて、いつもよりは速い水勢である。船は、流れに逆らつて、日の入り時から眼に見えて脚が遲くなつた。それに、今夜の錨はウヰイゼルといふ旅程ではあつたが、やつと今、エメリツヒ市と平行のところまで進んだばかりで、その、海のやうに廣いライン河の岸に、中世紀的な城壁に圍まれた古いエメリツヒの町の屋根々々が見える。これからウヰイゼル迄は可成りの航程だし、其處は、折柄灯のつき初めた河岸の町を望見して繪のやうな景色なので、一つにはそれが、エドワルド氏の愛妻の氣に入つたのだらう。この若いジヤネツト夫人の發議に、急にその場に錨を投げて一晩船を流すことに決まつた。ところで、この Madam Ginett Elwards は、近代的特產物の一つの、あの甘やかされて手に負へなくなつてゐる名流の若奧樣」なる典型的なタイプで、平素から、年上の良人エドワルド氏を完全に牛耳り、エイメ號では、文字通り女王だつた。エドワルド氏がマタン社の事實上の社長だつたやうに、ジヤネツト・エドワルド夫人は、このエイメ號の事實上の船長だつた。その希望は、直ちに命令である。それでも、デユポン船長は、實際家の立場から、航行船の多い中流に一夜漂ふことの危險を指摘して、岸の突堤に停泊するため、船首をエメリツヒ町の方へ向けたのだが、こゝで、飽くまで河の眞ん中に假泊して一晩過ごさうと主張したのは、再びジヤネツト夫人である。岸には、ラインの蠅と呼ばれる獨特の底の淺い傳馬船や、工作船や浚渫船が、それこそ蠅のやうに、眞黑に固まつて繫留してゐる。そこへ割り込んで行つて、不潔な水上生活の惡臭のなかで朝を待つのはたまらないといふのである。それに、土地の貧乏人どもが無禮な好奇心に眼を光らせて集まつて來て、一擧一動看視的に見物されるのもやり切れない。惡童は石を投げたりする。さう言つて夫人は、美しい眉をひそめた。むしろ遠く錨を投げて流れに乘つてゐたはうがいゝ――何によらず、彼女の一言はエイメ號の法律だ。この場合だけ例外である筈はない。デユポン船長も折れて、そこで、エイメ號は其の儘沖懸りのやうにラインの急流に停船して錨を入れたのだが、こ

のジャネツト夫人の主張は、實に自殺的――自殺であるとすればば――行爲だつたと言つてい丶。デユボン船長の常識的指令に從つて岸に碇泊してゐたら、この事件は存在しなかつたに相違ない。

夕陽が落ちると、空模樣が變つて來た。急に風が出て、暴風雨を豫告する氣壓だつた。その間に、エイメ號の食堂には明々と灯が這入つて、主客は、何時ものやうに歡談の裡に晩餐を終つてゐた。船が大きく搖つて、皆あまり食が進まなかつた。酒杯にも手が出なかつた。食後、一同は思ひ思ひに船中に散らばつて、一團は甲板椅子へ歸り、中には、食堂から直ぐ自分の船室へ引き籠つたきり、眩暈氣味なのか、出て來ない人もあつた。

この、暗い甲板に居殘つて雜談に耽つてゐた人々は、エドワルド氏とジャネツト夫人、デユボン船長、狩獵家として又マタンの寄稿家として知られたシャルル・キユヴアリエ少將、保險會社の重役でエドワルド氏と同じやうに物識りで聞こえた老モツフア氏、巴里聖ノウレ街の大きな洋服屋さんボウル・フエラル、そのほかソルボンヌの經濟學教授デニユウ博士がゐた。それらの夫人達も交つて、晩餐前から話が續いてゐたが、食後銘めいの甲板椅子へ歸つた時、先刻デユボン船長が、ジャネツト夫人の提案に反對して、闇夜の中流に錨一つで漂ふのは危險だと言つたことが、また誰の口からともなく持出されて、新しく論議された。そして、これから發足して、何時の間にか人々は歴史的に有名な海上遭難とか、海の不思議とか言つたやうなことを話題に、何しろ佛蘭西一流の博識家揃ひなので、次から次と色いろな實例や物語が展開されて、それは、傳說に富むこのライン河上の納涼にふさはしい、怪異的な、興深い座談會の觀を呈し出してゐた。

が、この特定の夜に、この特定の一團が、この特定の話題に就いて、そんなに熱心に語り合つた、語り合はなければならなかつたといふことは、その直ぐ後に起つた事件を考へ合はせると、これこそ實に怪奇、正に怪奇以上であると言はなければならない。怪力亂神を語らずといふが、紳士達の間には、婦人連を怖がらせる興味も、幾らかあつたのだらう。後でデニユウ博士は、現場に近い獨逸領デユツセルドルフ市の聯合通信特置員にインタヴヰウされて、斯う言つてゐる。

「今から思ふと全く不必要な、そして不氣味な雜談でした。話材そのものが不氣味であつた許りでなく、何故あの晩に限つてあんな古い事件にあんな新しい興味を感じて話し合つたか、それが實に不氣味なのです。私達はまるで何か私たちの上に擴がつてゐる大きな手によつて操られでもするやうに、さうです、

憑き物でもしたやうに、熱心な額を集めて話し込みました。海の不思議――あのメリイ・セレスト號事件に關して語り合つたのです。The Mary Celeste! 何といふ永久に呪はれた名でせう。」

その夜このメリイ・セレスト號事件を主題に話が彈んだことは、デニユウ博士だけでなく、エドワルド氏を始め、キユヴアリエ少將もモツフア氏も洋服屋さんのボウル・フエラル氏も夫人達も、巴里警視廳の取調べに對して、異口同音に證言してゐる。こゝが、この「ジヤネツトの悲劇」に言ひ知れない怪異の色を塗る大事な點なのだが、問題のメリイ・セレスト號事件といふのは、一八七二年の出來事である。この年、一九一一年からは三十九年の昔だ。ひとりモツフア氏が青年時代だつただけで、夫人連の中にはまだ生れてゐない人もあり、紳士達の多くもやつと子供の頃だが、有名な海上の神秘事件として未だに語り草にされてゐるし、記錄や書物で讀んでゐたので、皆一通り知つてゐた許りでなく、實際シヤルル・キユヴアリエ少將やデニユウ博士は、如何にも趣味の讀書人らしく、當時その喧しかつた騷ぎを直接耳にしたのみか萬事物識りの古老で通つてゐる筈のモツフア氏や、海事專門家のデユボン船長が、却つて聽手に廻らなければならない程、二人は、そのメリイ・セレスト號事件といふのに詳細に通じてゐて、また魅力ある座談家でもあつた。でエドワルド氏も時どき口を挾んだが、話したのは主にキユヴアリエ少將とデニユウ博士だつた。婦人達は、ラインの夜風許りでなく、寒いものを感じて、肩をすぼめてゐた。キユヴアリエ少將が後日マタン紙に寄せた繪畫的な描寫に依れば、「皆は臆病な女學生のやうに顏を凝視め合つて、難破船の船員のやうに闇夜の甲板に集まつてゐた。」

2

イヴア・スコチアと英吉利の間を通つてゐる帆船デ・グラシア號が、大西洋をビスケイ灣へ差し掛つたところで、ジブラルタルの海峽を指して航行しつゝあると覺しい一杯に帆を張つた二本檣の大型帆船に出會つたのは、一八七二年十二月五日の午前十時頃だつた。

その朝同時に、the Dei Gratia 號は、西印度へ進路を向けてゐる一隻の獨逸貨物船にも逢つて、兩船は海上遙かに挨拶を交してゐるが、この二つの船の乘組員が、その時、兩船の間へ割り込むやうに進んで來た其の二本マストの大型帆船を望見すると、船そのものには、別に異常は認められない。綺麗な新しい船體で、損傷等も何ら見られないに係はらず、眺めてゐるうちに、何うも樣子が變だといふことになつた。まるで千鳥足

と言つた具合に、始終進路を離れて、風向などにも頓着なく、見てゐる間に、總帆がだらりと下つたり、横ちよに風を受けて傾いたり、後退りしたりしてゐる。海は靜かで、風の具合でも申分ないのだから、この出鱈目な大型帆船(ブリガンチン)の行動は、忽ちデ・グラシア號と獨逸汽船の注意を惹くに充分だつた。誰も運轉してゐる者がないのか、さもなければ醉漢が舵を取つてゐるやうにしか見えない。兩船とも信號を發してみたが、帆船からは何の應答もないので、獨逸汽船は其の儘水平線の向うへ消えて終ふ。が、多分に好奇心を唆られたデ・グラシア號は、不安定な相手の動きに注意して衝突しないやうに徐々に近づきながら、ボイス船長とアダムス運轉士が望遠鏡を探つて見ると、帆船は、確かに只事ではない。甲板の上に人つ子ひとりゐないのである。暴風雨にでも遭つて全員本船を捨てたにしては、船の外觀は完全過ぎる程完全だ。しかし、呑氣な帆船のことだから、この快晴と廣い大西洋に安心して、暫時船を流して、乘組員一同船底で晝寢でもしてゐるのかも知れない。その時代の帆船などにはよくあることだつたので、デ・グラシア號でさう言ひ合つてゐるうちに帆船は漂ふやうに接近して來る。眠つてゐるなら起してやれ、ボイス船長――Captain Boyce――の命令で、運轉士のMr. Adamsが綱を引いてデ・グラシア號に咆えるやうな非常警笛が上つた。それでも、何ら答へがない許りか、帆船は依然として生色を呈して來ない。ボイス船長は初めて重大な不審を感じて帆船に乘り移つて調べてみることになつた。急停船したデ・グラシア號から、ボイス船長自身と、Critton という二等運轉士と、二人の船員を乘せた短艇が下ろされた。海面は鏡のやうに浪一つなかつたが、四人は、不氣味な豫感に襲はれながら漕いで行く。疫病船かも知れないし、乘組員の一人が發狂して他を鏖殺し、船中に潜んでゐるといふこともあり得る。或ひは、さうして通行船の注意を惹いて置いて一時に襲撃しやうとする海賊船とも考へられるので、迂濶には乘船出來ない。大聲に呼ばはり乍ら帆船の周圍を漕いで船尾へ廻つてみると、船名と船籍港が書いてある。Mary Celeste. New York. ボイス船長等は欄干に綱を投げ掛けて、間もなく其の帆船メリイ・セレスト號の甲板に立つてゐた。

船中はひつそりしてゐる。甲板には、生きた人影がない。と言つて屍骸もない。四人は、交る代るに呼んだ。おうい!――Ahoy!が、人の出て來る氣配もない。誰もゐない船――無人船なのだ。しかし、乘組員が周章て丶船を離れたらしい跡もなく、船具其他船中の状態は整然としてゐて、何ら異變があつたとは想像されない。主な積荷は、酒精類と玩具である。それも安全

に船艙に積まれてあつて、手を附けた模様がないのだ。整頓された甲板に海の太陽が照つて、操る人のない帆が風にはためいて怪鳥の羽叩きのやうに聞こえる。ボイス船長以下、デ・グラシア號からの四人の訪問者は、言ひやうのない戰慄に捉はれた。船首から船室、船尾樓(プウプ)の下まで覗き廻つて、一應限なく船内を審べて見たが、何處にも何らの異狀がない。たゞ人が居ないだけである。船底(ホウルド)に水が這入つてゐないことで、何處も漏つてゐないことが判るし、圓桁(スパア)も、ロウプも、帆も、凡て在る可き所にあつて、帆船としての設備、備品等、完全でそして清潔である。帆桁索(ブレイス)は一つ一つ正規の繋栓(ピン)に留まつてゐる許りか、何よりも不可解なのは、非常用の短艇が一隻も失くなつてゐないことだ。皆ちやんと短艇掛(ダヴイツト)に納まつてゐるのだ。これで、乘組員が船を見棄てたのでないことは確定的に判斷されたが、それは一層不氣味さの度を加へたに過ぎない。何時何處の物蔭から何が飛び出すか判らないと言ふので、四人は、極度に緊張した神經で警戒し合ひながら、跫面を忍ばせて船内を歩き廻つた。何處かに船長以下乘組員の屍體が轉がつてゐなければならない。炊事場の隅々から水槽の一つ一つまで丹念に覗いた。中央船艙(メイン・ハッチ)の覆ひが半分ほどめくり掛けた儘になつてゐたので、一同は、このハッチの下に屍骸が重なつてゐるに相違ないと這入り込んでみたが、暗い中に荷物が竝んでゐるだけだつた。見廻れば見廻るほど、謎は深まつて、キャプテン・ボイスの一行は、會體の知れない大きな恐怖に直面してゐた。

若し船内が亂雜になつてゐたら、乘組員の居ないことも説明がついたかも知れないが、度々言ふ通り、萬事きちんと整頓してゐて、塵一つないやうに掃除の往屆いた、何處を見ても手入れのいゝ帆船である。何一つ――全乘組員の他――無くなつてゐないのだ。白晝の大洋に漂ふ、この整然たる無人の帆船は、正に百パアセント以上の不氣味さだつたに相違ない。が、船長の船室らしい部屋を精査すると、ある可き筈の時辰機が無かつた。しかし、この發見は、何ら神祕を解く鍵にならないのみか、疑問は、増す一方である。乘組員の暴動とか何らかの騷動といふことも、帆船などにはよくあることだが、この場合には、この一絲亂れない船中の狀態が、さういふ想像を完全に逆證するものであつた。

實際、メリイ・セレスト號上の生活は、或る瞬間まで、幸福に、そして常態(ノウマル)に續けられて來て、其の或る瞬間、突如として乘組員の全部が姿を消したものとしか考へられないのだ。その證據には、今絞つた許りで未だ濡れてゐる洗濯物が、水夫達の船室の前に綱に掛けてあつて、水が滴つて、甲板を一線に濡らしてゐた。それ許りか、船長室には、食べかけの朝飯が其のまゝ食

卓に載つてゐた。

食卓には、四人の人間が向つてゐたらしく、そのうち一人は確かに子供と見えて、小さな匙でオウトミイルが半分ほど食べてあつた。船長の椅子らしい上座の卓上には、眞ん中から切つた固茹での卵子が二個、二つとも玉子コップに這入つて立つてゐた。その傍に、今子供に飲ませやうとしてゐたかのやうに、咳止め薬の壜が置いてあつた。そのコップも、細長い薬壜も、ちやんと立つてゐるのだ。しかも、氣のせいか、オウトミイルや玉子は、まだ幾らかあた丶かみが殘つてゐたやうだと言はれてゐるが、これは後日、一般に論議されて、ボイス船長らの錯覺であらうといふことになつたけれど、しかし、考へてみると、洗濯物から水滴が垂れてゐた位だから、朝飯が冷え切つてゐなかつたとしても、別に不思議はない譯である。かうして食卓が其の儘になつてゐて、倒れ易いコップや薬壜が立つてゐたといふ事實だけで、極く最近まで人がゐたことが肯定される。十二月の大西洋は決して風穏きといふことはない。長らく無人の船なら、船の動搖で、それらの食器は卓子から滑り落ちるか、尠くともコップと薬壜だけは倒れてゐなければならない筈だ。のみならず、炊事場には、朝飯の殘りが鍋にそのま丶になつてゐて、料理人のらしい使ひかけの剃刀が一丁、刄に一杯短い剃毛を附けたま丶、炊事室の上に抛り出してあつた。船長の寢室と思はれる一室には、覆を取つたミシン臺があつた。臺の上に、圓い指抜きが、胴を下に轉がり落ちずに載つてゐる。ミシンには、子供の前掛服（ピナフォア）が縫ひかけてあつて、袖を縫ひつけやうとしたところで針が止まつてゐるのだ。丁度ミシンを使つてゐた女が、鳥渡呼ばれて起つて行つた後の景色である。ミシン臺の周圍の床には、女の兒の玩具が散らかつてゐた。つひ今し方まで、母と幼い娘が居たことが解る。これは船長の家族であらうといふことになつた。その頃の帆船などでは、船長は妻子を乗り込ませて一緒に航海したもので、これは珍らしいことではなかつた。

船長室にも、何ら取り散らかされた跡はない。現金箱は鍵が掛つてゐて、手を觸れた形跡もないし、他の貴重品も何一つ失くなつてゐない様子だ。海賊に襲はれたとも思へないのである。書棚には、宗教と音樂に關する書物がぎつしり詰まつてゐて、二人の運轉士の部屋と覺しい一室には、二つの懐中時計が卓子の上に置いてあるだけで、こ丶も、すべてきちんと整理されてゐた。水槽には充分の飲料水があるし、食品室（カディ）は各種の食糧で充滿してゐる。何もかも清潔に乾いてゐて、最近浪をかぶつた跡も、暴風雨に遭つたらしい様子も見られない。船員が船を捨てたものとしても、その理由は何處にも發見されないのだ。それ

に、短艇が一隻も無くなつてゐないで、全部縛り付けてあることを忘れてはならない。が、不思議なことには、必ず船に備へ付けてあるべき書類が、若干紛失してゐた。運轉士の部屋で、航海日誌が發見されたが、十日前の十一月廿四日まで記けてあつて、それ以後は白紙である。その廿四日以後に遡つて記錄を調べてみても、單に普通の航海日誌で、何らこの神祕の說明となる可き手懸りは發見されなかつた。それよりも、一層事態を不氣味にしたのは、海圖室の柱時計が時を刻んでゐたことである。が理由は何であるにしろ、この、一人も人が居ないといふ事實は現實に、乘組員全部があつと言ふ間に船を去つたことを示してゐる。一度に甲板から海へ飛び込んだか、或ひは何處かのボウトが舷側へ横付けになつて、朝食半ばに、又は仕事なかばに、總員を何處へか伴れ去つたか、其の何れも說明にならない說明である。たゞ船長室に、綱切用のナイフがあつて、血痕らしい小さな黑點が附いてゐたといふが、ナイフの汚點はあり勝ちのことで、何ら重要なことを物語つてゐないと言つていゝし、船首部の右舷の欄干にも、血のやうな小さな黑い斑點と、手斧かナイフで鳥渡欄干の木材へ切り込んだらしい跡が見られたと言はれてゐるけれど、幾ら手入れの行屆いた船でも、飾り物ではないのだから、そんなに精密に見て廻れば、小さな汚點や瑕あとの一つや二つは、何ら不思議でなく存在し得るに決つてゐる。それからもう一つ、それも船首の、丁度吃水線の舷側の板が、一寸剝ぎかけたやうになつてゐたが、明らかに中止した形になつてゐて、航海中の作業だつたものか、何者かの害心の跡か、ボイス船長らには判斷の下しやうがなかつた。積荷の酒精分も見て安全で、少しも洩つてゐない。船員達の部屋には、寢床の寢具が、人の形に凹んで竝んでゐて、めいめいの所有品箱には水夫の持物らしい、哀れを催すやうな詰らない品物が、大事さうに仕舞つてある。遠い港の情婦の寫眞なども枕頭に飾つてあつた。何處から何處まで、今の今まで何事もなかつた船中生活を物語つてゐるだけで、些少の書類と時辰儀と、船長と其の家族、及び全船員が一人殘らず消え去つてゐる他、何一つ紛失してゐず、何らの異狀も認められなかつた。

これが、世界海洋史上未だに最大の謎とされてゐる、有名なMary Celeste號事件である。

3

生々しい血痕の附着した長劍が、船長室の入口に落ちてゐたとも言はれてゐるが、この一項は、他の多くの記錄の何れにも發見されない。只、事件後三個月を經た一八七二年三月十五日

發行の英國雜誌 The Spectator の記事に、斯うあるだけだ。「去る十二月五日、ノヴァ・スコチアの帆船デ・グラシア號は、北緯三八・二〇、西經一七・一五、アゾウレス群島附近の大西洋上に於て、無人の米國大型帆船メリイ・セレスト號を發見し――。」と前述のデ・グラシア號船長ボイス等の實見談を記載して、その中で、この血の附いた長劍のことに言及してゐる。スペクテイタア誌は、この記事は十二月十二日附のジブラルタルの新聞 The Gibraltar Chronicle から借用したものだと本文の終りにも言明してゐるのだが、其の原文のジブラルタル・クロニクル紙の記事には、血の附いた長劍のことなど出てゐないのである。スペクテイタアの記者が、海洋小説でも書いてゐる氣になつて鳥渡創作を混へたのだらう。

ジブラルタルが最も近いので、デ・グラシア號は、メリイ・セレスト號に三人の船員を分乘させて、曳船してジブラルへ入港した。直ちに米國領事館へ急報する一方、法規に從つて、海事局に船體救助の賞與金下附方を申請した。海事局が、難破船として一應メリイ・セレスト號を海事裁判所へ廻してゐる間に、米國領事は紐育へ照會電報を發して、間もなく判明したところに依ると、The Mary Celeste はノヴァ・スコチアの建造で六百六噸と合衆國船舶簿に登録されてゐて、所有者は紐育のウインチエスタア會社、同年九月三十日に、伊太利のジエノアへ向けて紐育を出帆したとある。船長はベンジヤミン・ベネデイクト・ブリグス――Captain Benjamin Benedict Briggs――海事關係者の間に知られた有能な老船長で、宗教的な人格者でもあり、部下の信愛と尊敬を集めてゐた。乘組員は、二人の運轉士を加へて總計十二名、ブリグス船長はよく夫人と愛孃を同船せしめて航海に出てゐた。このジエノア行きの航海にも二人はメリイ・セレスト號に乘り込んでゐて、娘のボウリンは七歳だつた。

そのうちに、ジブラルタルの海事裁判所で幾多の手續きの後デ・グラシア號の乘組員は海上の船體救助に對する法定の賞金として一千七百磅を受取り、ボイス船長らの關係する限り、この事件はこれで片附いた形だつたが、ブリグス船長以下メリイ・セレスト號の乘組員の運命は、合衆國政府が大西洋沿岸各地の領事館を督勵して、多くの經費と時日の下に、實に徹底的搜査を續行したに係はらず、依然杳として消息を斷つた儘――今日に及んでゐる。たゞハイランダア號といふ英國汽船が、メリイ・セレスト號が無人船として發見された前日、即ち十二月四日の未明、アゾウレス群島の南で同船と擦れ違ひ、その時は兩船信號を交換して、メリイ・セレスト號から「萬事異狀なし――All Well」といふ手旗信號があつたと言ふ新事實が現はれたが、こ

れが果して何の程度に正確なものか、何の記錄を調べてみても、このハイランダア號 The Highlander の證言に關しては、これ以上何も出てゐない。

米國政府の搜索は、海軍力を藉りてまで、三年間も續いて、世界各國の海事管轄官に照介を飛ばして手掛りを求めた。晴れ渡つた眞晝、靜かな海上に漂つてゐた整然たる無人船の神祕は大西洋を挾む兩大陸の公衆の好奇心と想像力を限りなく刺戟した。あの、デ・グラシア號の四人が、ひつそりと靜まり返つたメリイ・セレスト號の甲板を步いた。以來、實見者のボイス船長、クリフトン二等運轉士等を初め、或ひはデ・グラシア號の乘組員に依つて、或ひは英米佛各國の海事研究者と一般人によつて、ありと凡ゆる推測が下されて、新聞雜誌等の刊行物は、一頃競つて、少しでも可能性の强い說明を提供しやうと、一般の投稿を歡迎したものだが、一つとして祕密の眞相に觸れた、乃至は近いと思はれるものはなかつた。ブリグス船長も家族も現れて來ないのだから、船中に何か殺伐な事件があつたらしいとも想像されるが、彼らなり、乘組員の一人なりが生きてゐて事實を公表しない限り、このメリイ・セレスト號の祕密は、こゝで永遠に、大きな「?」として終つてゐる。

迷信的な解釋も出た。海蛇、巨大な章魚、未だ人間に知られてゐない海の怪物、さういつたものが現れて船員を掠つたのではないかと言ふのだが、こんな子供欺しのやうな話は何ら說明にならない。アゾウレス島の附近には、昔から「盲目の白い海蛇」なるものが棲んでゐると信じられてゐて、その仕業に相違ないといふ說も出たが、勿論餘りに荒唐無稽である。船長が發狂して全乘員を海へ抛り込んで自分も投身したのだらうと言ふ人もあつた。それにしては、格鬪や混亂の跡が少しもないのが理窟に合はない。

無人のメリイ・セレスト號は紐育のウインチエスタア會社へ廻送されて、新しい乘組員(クルウ)で一航海南米へ往復したきり、直ぐ賣物に出たが、幽靈船といふ評判で長い間買手もつかずにブルツクリンの波止場に繫がれてゐた。そのうちに船名を變へて儺(ナヤ)船(アタア)に出て、一八八五年にキユバの海岸で座礁したシテイ・オヴ・オマハ號といふのがこのメリイ・セレスト號の成れの果てだつたと言はれてゐる。

船舶の行衞不明は左程珍しくないけれど、このメリイ・セレスト號事件は、當時歐洲各國と亞米利加から凡ゆる人々が凡ゆる解答を提げて現れたほど、類のない不可解な事件として世間を騷がしたのだつた。四十一年後の一九一三年、十一月號の The Strand Magazine に、倫敦ハムステッド Peterborough Lodge

小學校の校長で M. A. Howard Linford といふ人が、メリイ・セレスト號の乘組員の一人だつたと稱する同家の老僕 Abel Foxdyk なるものの談話を寄稿して、鳥渡世の注意を惹いたことがあるが、事實相違の點が多く、問題にならなかつた。たゞ何處の何者とも知れない老下男の出鱈目を眞面目に取つて雜誌へ書いたりした校長先生の責任が問題になつただけだつた。

海には海自身の、吾われの知らない獨自の劇的生活と愛憎と神祕があるのかも知れない。ポウの "Tales of Mystery and Imagination" と、コルリッヂのあの幽怪哀調の詩 "The Ancient Mariner" は、このメリイ・セレスト號を材料にしたものである。

が、それにも增して奇怪なのは、この事件から三十九年を經た一九一一年七月廿四日の夜に、かうしてライン河上に私用船エイ九號を流して談笑してゐたあのエドワルド氏、ジャネット夫人、モッファ氏、キュヴァリエ少將、ボウル・フエラル氏、デニユウ博士とその夫人達の間に、何うしてこのメリイ・セレスト號事件が話題に上らなければならなかつたか。そして何故人々はあゝ眞劍に此の過ぎ去つた事件に就いて討議しなければならなかつたか。何によつてさうされたか。デュボン船長の注意から出發して、幾多の難船の例、海の不思議といふやうなことから、自然と話頭が動いて、其の時迄まだ世人に頭腦を絞らせてゐた此の有名な海の怪異事件へ話が漂つて行つただけのことに相違ないけれど、デニユウ博士ではないが、如何にも「後から思ふと全く不必要な、そして不氣味な雜談だつた」と言つていゝ。「話材そのものが不氣味な許りでなく、何故この晩に限つてこのメリイ・セレスト號事件にそれ程の新しい興味を感じて話し込んだか、それが實に不氣味なのだ。」しかも、キュヴァリエ少將とデニユウ博士を主な語り手として、其の夜エイメ號の甲板上に、このメリイ・セレスト號の話が續いたことは、前にも言つた通り、居合はせた人が皆、後で係官の前で陳述してゐる。

あゝではないか、斯うではないかと夫ぞれ名答を出すのが面白くて、この事件は、不氣味乍らも、座談としては、何時も賑はふのだつた。で、其の晩も、エイメ號の人々は、銘めい意見を吐いたり、反駁し合つたりなどして、何時までもこのメリイ・セレスト號の話を續けさうな模樣だつた。夜が更けたと言つても、まだ九時頃だつた。元へ返つて、もう一度キュヴァリエ少將の記述をマタン紙から引用すると、「皆は臆病な女學生のやうに顏を凝視め合つて、難破船の船員のやうに闇夜の甲板に集まつてゐた。」

實際、その時、社交室(サロン)の時計が九時を打つてゐた。このこと

は、例のデュッセルドルフの聯合通信員がデニユウ博士から取つた談話にも博士は確かに九時打つのを聞いたとある。

その九時打つのを聞くと、ジャネット夫人は、急に何か思ひ出したやうに、甲板下の自分の船室へ降りて行つた。一同は、其の快活な、と言ふより、むしろお轉婆なジャネット夫人が、口笛を吹き乍ら、大きな音を立てゝ階段を駈け下りて行くのを耳にして、しきりに話しを續けてゐた。眠りの早い對岸の田舎町エメリッヒの灯が、一つ二つ消えかけてゐた。

ジャネット夫人が船室へ這入つて直ぐ、やつと椅子にでも掛けたと思ふ頃、欠伸のやうな微かな、長い聲が上つて來て、甲板の人々の耳に這入つた。

「聞こえましたか、今の。」一人が訊いた。「誰かが呼んだやうですよ。」

「ジャネットさんの聲でしたわ、確か。」

「何うしたんでせう――？」

鳥渡耳を澄ましてみたが、その儘何の物音もしない。蟲が報せたとでも言ふのか、エドワルド氏は、急に氣になつて耐らなくなつた。直ぐ階段を走り降りて、ジャネットの船室をノックした。キユヴアリエ少將と洋服屋さんのフェラル氏が、エドワルド氏について見に行つた。ドアには、内側から鍵が掛つてゐる。慌しくノックし乍ら、エドワルド氏が呼んだ。

「ジャネット！」

何の應へもない。室内はしいんとしてゐる。何か異變を感じた三人は、力を合はせて扉を破つて、轉がるやうに這入つてみると、船室は空である。ジャネット夫人は居ないのだ。狹い船室で、椅子と小寢臺があるきりだから、探す餘地も、見廻すところもない。きちんと片附けられた部屋の波斯絨毯の上に、今ジャネットの着てゐたドレスが圓く脱ぎ捨てゝある。彼女の體臭のやうになつてゐる愛用の香水が、うつすら漂つてゐた。やつと首だけ出る、圓い船窓が開け放してあつて、黑く光つて流れるラインの水が、夜の唄を歌つてゐた。一方は内部から鍵の掛つたドア、三方は鐵板の壁、それに、一つの小さな、やつと首が出るだけの圓窓――この、何處からも出るところのない狹い船室内で、ジャネット夫人は煙のやうに、完全に消えたのだ。今日まで十九年、いまだに消えたまんまである。

4

何ら滿足な解釋が下されてゐないが、滿足な解釋のないのが、即ち滿足な解釋だと言へるやうな氣がする。キエヴアリエ少將もデニユウ博士も、あの晩だけメリイ・セレスト號のことを話

し合つた譯ではないが、あの時ほど新しく、その不思議さを全身に感じて、犇々と呼吸の迫るやうな氣のしたことはなかつたと言つてゐる。

メリイ・セレスト號から人を摑み取つたsomethingが、このエイメ號からジャネット夫人を掠め去つたのだ。たゞ、メリイ・セレスト號からは全部の人間を抜き除つたが、エイメ號からはジャネット一人だつた。

Nadaud と Pelletier の兩氏記錄の中に、この「ジャネットの神祕」に關する記述があるが、こゝでは大分小說的に取扱つて見たやうに書いてある許りか、佛蘭西の物らしく、こんなところへも忘れずに三角關係の要素を挾んでジャネット夫人にそんなやうなことがあつたかの如く、仄めかしてゐる。假りにジャネットに戀人があつたにしたところで、それは何も、この、低い呻き聲を一つ殘して、やつと首が出るだけの小さな窓から、あつと言ふ間にライン河の闇黑に霧散したといふ、怪奇な事實そのものの說明には少しもならないのだが、例へば斯うだ。エイメ號で、ジャネットが階下の船室へ下りて行くところで――

夫人は船室へ這入つた。内部から注意深く錠を下ろしてドレスを脫いだ。裸體の上にキモノを纒つて、髮を解き始めた。栗色の頭髮が、濡れた藻のやうに、重く彼女の肩に掛つてゐる。それから夫人は、小さな卓子の前にすわつた一枚の書簡紙を取つて、書きはじめた。

「愛するアンドレ――。」

まるで私室を覗いてでもゐるやうな克明な描寫だが、André などと普通名詞のやうになつてゐる呼名だけを持つて來たところで何にもならない。が、兎に角、そのジャネットの戀文は何うなつたかと言ふと、この記述に從へば、エドワルド氏と一緒にキユヴアリエ少將とフエラル氏が船室へ這入つた時に、その内の一人が素早くこれを見つけて、何も知らないエドワルド氏の氣持ちを察して突嗟に隱したといふのである。言ふ迄もなくこれは、一般には根も葉もないナンセンスとされてゐて、他の記錄には一切採用されてゐない。しかし、ナンセンスはナンセンスだが、斯ういふ噂が出たと言ふのは、ジャネット・エドワルド夫人は元女優で、巴里の舞臺に鳴らした女だつた。藝名を Geneviève Lantelme と言つて、「魔術的なランタルム女王」と呼ばれた位、この名で知れ渡つた巴里劇界の謂はゞ偶神だつた。エドワルド氏は、先妻に死別して間もなく、事件五年前一九〇六年に、このランタルム孃を「金で買つて」、結婚したもので、ルウアン停車場の隣のジャンダルク・ホテルで祕密に式を擧げてゐる。式に列したのは、ランタルムの母親のフオッセイ夫人だけだつた。

Communauté と謂つて、結婚と同時に、エドワルド氏の全財産半分が、ジャネットの有になる特別の結婚形式だつた。

斯うしてジャネットは、エドワルド氏の愛妻となつたが、エイメ號事件の時は、エドワルド氏は五十四歳、ジャネットは廿八だつた。エドワルド氏が如何に普段から愛妻家であつたか、殊にエイメ號に於ける沒我的な奉仕振りは、十五人の客と、女中が一人、給仕人が一人、デユボン船長以下八人の乘組員が口を揃へてゐるところだ。だから、例へいまこのジャネットの失踪を自殺と假定しても、何ら自殺の理由と目す可きものが發見されないのである。物質的には惠まれ過ぎる程惠まれてゐるのだし、第一、性來呑氣な女で、その他の精神的な苦痛などがありさうなジャネットではなかつた。其の晩も、例ものやうに元氣よく、メリイ・セレスト號の話しを氣味惡がりながらも、しきりに合槌を打つて聞いてゐて、自分でも、その神祕に對する解釋を、考へ考へ話してみたりしてゐたが、そのうちに、社交室(サロン)の柱時計が九時を打つと、思ひ付いたやうに甲板の搖椅子を離れて獨りで階下の船室へ駈け降りて行つた。ジャネットは始終駈け下りたり駈け上つたりしてゐるので、誰も氣に留めなかつた。この、華やかなジャネット夫人が、口笛を吹いて階段を走り降りるところを想像してみると富豪の若夫人らしいcarefreeな態度で、ジャネットは、船室へ這入る。急に疲れを感じて、もう甲板へ歸らないことに決めて、寢卷に着更へる。脱いだドレスを足許の床に其の儘にして、船室に空氣を入れやうと窓の方へ進む。窓を開ける。前から言ふ通り、やうやく首が出るだけの、圓い小さな船窓だ。ちよつと外を覗く。黑く光つて流れるラインの水が、夜の唄を歌つてゐる。其の時、その小さな窓から何者かの手が伸びて來て――ジャネットは低く叫んだまゝ、その狹い船室内に居なくなつたのだ。たしか、これ以上、誰にも想像出來ないのである。

その夜、エイメ號で、食堂から直ぐ自分の船室へ引き籠つた客の一人、ピカルド夫人といふ作曲家の話には、「何時頃でしたか、私はうとうとしてゐましたが、まだそんなに晩くなかつたと思ひます。ジャネットさんのお部屋のはうで、何ですか口を抑さへられてゐるやうな聲がして、間もなく、ジャネットさんの姿が見えないと言ふ大聲がするので、私も、喫驚して出て行つて見ました。客から乘組員まで、みんな其の船室の前に集まつてがやがやしてゐましたが、私は初めジャネットらしい惡戲で、何處か隱れてゐるのだらうと思ひました。デユボン船長なども、さう言つて笑つてゐました。」

キユヴアリエ少將が、エドワルド氏と共通の友人ドウリアツ

ク博士へ打つた電報が、巴里へ這入つた最初の通知だつた。それは、翌廿五日午前十一時五十分に、附近のマリアンバム局で受理したもので、十二時三十分に巴里へ届いてゐる。簡單な電文だつた。「ジャネット甲板より墜落、溺死す。エメリッヒ市セムデン局宛て來否返電あれ。」同日午後六時に、ドウリアツク博士は、ケルン經由でエメリッヒへ急行して、翌朝博士から、また同じやうな電報が巴里の夫人の許へ飛んでゐる。「ジャネット夫人過失にて甲板より落ち、激流に流される。屍體發見されず」かうして最初は、とても公衆に信じられさうもない此の神秘なる件に、當然疑ひを挾んで生ずるであらう不愉快な、そして不必要な風評をば妨ぐために、一同口を揃へて、ジャネットは自分の間違ひでエイメ號の甲板から落ちて行衛不明になつたといふことに誤魔化して終はらうとしたのだつたが、この細工は直ぐに露れて、眞相は——と言ふより神秘は、忽ち疾風のやうに全巴里に傳はつた。散歩街から散歩街へ、劇場から編輯局へ、そして取引所へと、物語的な不氣味さが波紋のやうに擴がつて行つて、一時は、全市「ジャネットの神秘」で持切りの有樣だつた。殊に、事件の直ぐ前に、メリイ・セレスト號の話が出たと知ると、人々は、傳說的な怪異感を新たにして、直ちにこの三十九年を隔てた二事件を結びつけ、恰もこのジャネット事件の核心を究めるためには、その根本として、メリイ・セレスト號の謎を解く必要があるかのやうに、また改めてメリイ・セレスト號に對する興味が再燃し、到るところで話題に上つた。

獨逸のデュッセルドルフも、現場に近いだけに、最も騷いだ町の一つだつた。餘り評判が高いので、場所が獨逸領ではあり、官憲も放擲して置けず、七月廿六日に警察が調査を開始してゐる。その時のデュッセルドルフ發聯合通信に依ると「ジャネットランタルム失踪事件に關する帝國檢察官の活動は、ジャネット夫人は、甲板で涼んでゐる際、急激に意識を失つて欄干から河中へ轉落したものであるといふ調査の結果を公表して、廿七日をもつて打切つた」とある。が、同じくこのデュッセルドルフの聯合通信員によつて、あのデュユウ博士等の談話が發表されて、公衆は、この獨逸警察の公表が單に責任逃れの形式的なもので、遙かに事實から遠いことを知り拔いてゐた。巴里の警察も動いたが、一應關係者を訊問しただけで、深入りすればする程、神秘の色が濃くなつて手に負へなくなり、やがて警察の威信にも關しさうなので、エドワルド氏が猶太人なところから、嚴正な意味で佛蘭西國民ではないから人事的に管轄が違ふなどと妙な事を言つてさつさと手を引いて終つた。一說には、この不氣味な評判が一層高くなることを懼れて、エドワルド氏が私

かに當局に握らせて手離して貰つたのだとも言はれてゐる。勢力家だからさういふことも出來たであらうが、例へ警察が躍氣になつて審べたところで、一般に信じられてゐたやうに、底にメリイ・セレスト號事件と絲を引くものがあるのでは、到底何ら解決の曙光をも見なかつたに決まつてゐる。

七月三十一日に、エドワルド氏は、屍骸のない葬式を行つてジヤネツト夫人の遺品を Père Lachaise の墓地に埋めた。今でも、このペラシエイズ墓地の八九區といふ一隅に、碑面に"Requies Aeterna."――「久遠の平和」と彫つた墓石が建つてゐる。それが、空の棺を沈めてゐるジヤネツトの墓である。

その儘、日が經つた。

勿論、屍體の捜査は、ライン下流の全帶に亙つて、大々的に行はれた。が、發見されなかつた。發見される譯はない。あのやつと首だけ出る窓から、何うしてジヤネツトが河へ落ち込んだと考へることが出來やう? 二週間程後に、リイスに近いォベル・ミイルメエテルの税關棧橋に、ジヤネツト夫人の裸體の屍體が流れ着いたとあつて大騒ぎをしたが、全然別人だつた。

―軍事探偵秘話―

或士官の怪失踪

浦路耕之助

『事實は小説よりも奇なり』と云ふ警句があるが、今私がこゝに發表する事件がそれである。

讀者諸君は恐らく此の想像も及ばない事件を、二十世紀と云ふ言葉が既に古臭くなつて仕舞つた昭和の世の中に、そんな奇怪な事が有り得る道理がない、それは探偵小説家の夢想的創作であらうと、言下に云はれる事と思ふ。

事實確かに驚く可き奇怪な事件であつた。若しも私自身が此の事件に關係した一人でなかつたならば、話を聞いたぐらひでは迚も眞實とは思はないであらう。

此の事件が起つたのは昭和〇年〇月〇〇日の午後二時から、十一時迄の間であつて、翌日の新聞は全國一齊に貿易港として有名なK市在泊中の〇國軍艦士佐の一士官が上陸後、行衛不明になつたと云ふ記事を載せたのであつた。

恁う云ふと記憶のいゝ讀者諸君は、あゝそんな事もあつたつけと思ひ出さるゝ事と思ふ。次で翌日の新聞は憲兵隊と警察が共力して、士官の行衛を搜査中なるも依然として五里霧中と報告して居た。越へて事件發生後四日目の新聞は、遂に陸上捜査の手の盡きた當局が、或は士官が海中に醉餘墜落したのではあるまいかと、K港全部に亘り潜水夫を使用して海底の大搜査を行ふ事を報じて居た。

新聞の記事は此の士官の失踪を、比較的簡單に取扱つて居た爲に影響の少ない他地方の人々は餘り好奇心をそゝられなかつたやうであるが、流石にK市の人々は事件發生地だけに噂は噂を生んで海底捜査の日になると艦載水雷艇の發着になつて居た波止場は、黒山のやうな群集であつた。

捜査は午前八時頃から始められて、午後五時近く迄波止場を

中心に行はれたが、第一日は遂に何等の手懸もなく終り、當局も見物人も失望のうちに、明日を思ふ期待に慰められて引上げたのであつた。次で第二回第三回と順次港内の潮流方向に從ひ一週間と云ふものは毎日海底捜査を行つて、港内殆んど餘す處なくやつたのであつたが、當局の折角の努力も空しく、士官の行衛不明事件は遂に迷宮入りをして仕舞つたのである。

こゝ迄は當局も新聞社も、また讀者諸君も知つた事實であり、同時に單なる士官の行衛不明事件で、何等奇怪な事もないのであるが、此の士官の行衛を知る時、そこに幾多の怪奇な話が生れて來るのである。殊に〇〇〇〇との外交上にも大問題が起る憂ひがあるのだ。では當局は其筋に今日迄此の事件の眞相を發表しなかつたのであらうか。いな、此の奇怪な事件の眞相を知つて居る人々は、〇〇〇部の最高幹部の將軍連中と、機密に關係した〇〇との極く少人數で當局も知らないのである。

「君、今朝の新聞を讀んだかね？」

私が顔を洗つて、部屋に戻つて來ると、床の中で上海日日新聞を讀んで居た潟が訊ねた。

「あゝ、讀んだよ、そして君の枕元にちやんと畳んでおいたのだ。」

「では、或士官の行衛不明の記事を讀んだらう。」

「讀んだ。」

「少し變だね。」

潟はそう云つて新聞を投げ出すと天井に向いて考へこんだ。

私も實は此の記事を讀むと直感的に、頭にピンと來た事があるので、椅子に腰掛けながら、

「何うもやられたらしいね。」と云ふと、彼は何時もの癖で、「ウン」と一度返事をして起上ると思ひ出したやうに、

「俺もそう思ふんだ。」と答へた。

それから毎日私と潟とは、絶へず或る興味を以つて此の事件の成行に注意を拂つて居ると、段々日數が經つにつけ二人が直感的に考へた或事を裏書するやうに、事件は遂に迷宮入をしたのであつた。

「到々、洪君、僕達の豫想通り當局には氣の毒だが事件は迷宮入りをしたね。」

潟が皮肉に言つた。

「そりや當然さ、當局の著眼點や探訪記者の見解が、全然此の事件からかけ離れて居る以上、迷宮入りは脱れないよ。考へても見給へ、警察權の行き屆いて居る日本の然も人目の多いK市のやうな大都會で、〇國軍艦の士官か

天に上つたか、地に隠れたか、さしあたり昔なら神隠しにでもあつたやうに、突然行衛不明になつた以上、そこに何か非常に大きな手が延ばされて居る事は、容易に想像されるぢやあないか。それを如何に謎の事件であるからと云つて、世間に有り勝な失戀とか、官金費消とか、精神錯亂とか、又は單なる港の闇に住む悪漢の仕業とか云ふものに結びつけ、生と死と行衛不明との筋を作つて此の種の事件に對する常套的見解で糸をたぐつて見たところで、恐らく此の迷宮の扉は永久に開かれないと思ふ。』

『勿論、事件の中心人物が〇〇〇〇を持つた士官であると云ふ點と、實に想像も及ばない程巧に事が行はれて何等の證據も殘されて居ない點とをもつと愼重に考へる心要があるね。だが各國が、國際間の裏面に〇〇の魔手を延ばして如何に活躍して居るかと云ふ事を知らない者達は、外國、殊に御都合主義のヤンキーや老巧なジョンブルと云へば、人類愛だ、平和だ、自由だ、平等だと云ふ彼らの宣傳的廣告に惱瞞されて、一から十迄紳士だ、人道主義者だ、平和愛好者だと、その實質が鵺とも知らずに尊敬して居るのだから、堪らない。アメリカ・インディアンに對する非人道的私刑や、印度或はタスマニア州に於ける虐殺だけでも如何に慘忍野蠻であるか、之を充分知りつゝもなほ西洋謳歌熱にうかされて、祖國の缺點を云々しては彼等を擁護する程病膏肓に這入つて居るのだから、此の事件を單なる事件として扱つても仕方がないさ。』

二人が此の事件に對する最後の記事を讀んだ日の午後、正確に云へば事件發生後十四日目の午後三時少し過ぎ、その頃或る事件の探索に必要なところから利用して居た、閘北寶興路の上海切つての顔役、李盛祥の家の二階で此の事件に對する當局の見解が、餘りに平凡すぎるところから、議論めいた話をして居る時、

『洪さん、電報』と云つて若い者が、〇〇〇〇本部からの暗號電報を持つて來たのであつた。早速披ひて見ると、

〇〇〇〇〇〇〇〇〇を命ず直ちに〇〇へ向け出發すべし。

と云ふのである。そこで二人は話をそのまゝ打ち切つて、直ちに〇〇へ向けて上海を出發したのであつた。

〇〇に來てからも馮と私は此の事件の事を、氣にかけて居たのであつたがそのうち仕事が、忙しくなつて來たので、何時の間にか忘れるともなく忘れて仕舞つて居たのであつた。ところが手をつけて居る〇〇〇〇〇軍港問題の事が終りかけた頃、突然意外な問題が起つたのであつた。

それは我海軍が精鋭を世界に誇る〇〇母艦〇〇の寫眞と、武

裝に關する詳細なる記事が、〇〇〇〇の新聞に掲載されて居るのである。當局では竣工以來此の艦の寫眞撮影を絶對に禁止し、勿論、武裝に關する何等の發表もすることなく、極祕にして居たので、關係者以外の者は海軍部内の者すら知らない程で、國民はただ〇〇と云ふ〇〇母艦が出來たそうだ位しか知つて居なかつたのである。

それが〇〇〇〇〇新聞に專門家でさへも驚く、實に詳細な記事と共に掲載されただから奇怪である。

直ちに私達と〇〇〇〇本部との間には暗號電報が幾本か飛び、〇〇〇〇滯在中の特務機關の〇〇は一齊に活動を開始したのであつた。私と馮は手下の〇〇〇〇人ジャッキを連れて、〇〇から更に五日の航海をして太平洋を東に渡り、〇〇〇〇の〇〇〇〇〇にある記事を掲載した新聞社の、〇〇を探索したのであつた。

〇〇〇〇〇に到着して廿日目の夕方、新聞社に印刷職工として潜入したジャッキから寫眞と記事の出處は、〇〇〇〇軍事〇〇局からであると云ふ事を報告して來たのである。そこで直ちに〇〇〇〇本部に報告して、〇〇〇〇の同志は互に連絡をとり〇〇〇〇軍事〇〇局の〇〇のうち、最近日本から歸つた者、また日本滯在中の者に關する、種々な情報を集めたのであつた。

〇〇の探索、それは太平洋の眞中で逃げた魚を捜すと同じやうに非常に困難な事で、局外者から見れば、一種のドンキーホーテとも見れば見られるであらう。

私達三人が此の昭和のドンキーホーテとなつて、〇〇〇〇〇〇〇へ來た時は、もう秋も半を過ぎた十一月の末であつた。

私達は毎日のやうに酒場やダンスホールや賭場に入浸つて、盛に遊び廻つたのであつた、と云ふと仕事をそつちのけにして仕舞つたやうに聞へるが、遊ぶ事が私達の仕事に一番必要な事なのである。

こんな場所こそ人の噂の花の咲くところであり、假面を脱いだ赤裸々な人間を見る事の出來る場所である。左様しからばと四角張つた時、人間がその缺點や祕密を容易に表すものではない。頭の禿げた思慮も分別もある親父が、小娘に鼻毛を拔かれるのも、謹嚴溫厚な紳士(ゼントルマン)が一變狂暴無賴の人になるのも、何時か自分の祕密も假面も脱いで仕舞ふのも酒と女と金との踊るどん底でなくては見られないのである。

私達は此の赤裸々な惡魔の微笑な場所で、皮肉にも絶へず緊張した氣持を内に隱しながら、彼等と様に遊蕩三昧な日を送つたのであつた。

―上海の或る富豪の馬鹿息子と友達に―

『金は幾位でもある。』

怎うしたジャッキの宣傳は見事に奏效して、馮と私の二人は忽ち此の種の社會の話せる男としての人氣を得、有象無象がうぢやく／＼と集つて來るのであつた。

彼等が狸であれば此方は狐である。欺されて居るやうで欺して居るのだから面白い。

ところが或日、一人の日本人が突然私達の宿屋を訪ねて來たのであつた。

早速逢つて見ると彼は、

『君達は支那人と云ふ事だが、實際は日本人である事を、確かな筋から調べて來たのである。苟も日本人で有りながら何故支那人と僞つて居るのだ。』と顔の色をかへての嚴談である。どんなに支那人だと云つても承知をしないで、仕舞ひには威し文句を並べるのだ。そんな事に驚く我々でもないが、大事の前の小事であるから、『まあ、まあ、』とジャッキが中にはひつて幾らかの金を包んで歸したのであつた。

私も馮も此の男の言葉の中に、――確かな筋――と云ふ言葉があつた事が、直感的に頭に來たので早速ジャッキに命じて、後をつけさせると同時に、馮と私は手分けをして此の男の身元を洗つたのであつた。

その結果、此の男は太平洋岸に於ける有名な無頼漢で、日本人から毛蟲のやうに嫌らはれ誰一人相手になる者もないので、今ぢあ排日の中心である、○○○の○○の犬になつて、在留同胞の缺點や無辜の事實を誇大に賣り込み、私慾を肥して居る事が判明したのであつた。殊に耳寄りな話は彼と非常に仲の悪い破荒戸の一人である男が、

『彼の奴、二ケ月許り前、餘程甘い賣込みがあつたと見へて、しこたま金を貰ひやあがつて、ハリウッド酒場の女を身受した』

と云ふのである。

だが仲の悪い奴等の間には隨分ひどい捏造的な話があるのでその儘受取る事は出來ないが、兎に角一應あたつて見る事も無駄であるまいと思つたので、段々手を盡して調べ上げると、ハワイの或る日本人破荒戸を○○○○○の者に紹介した爲に、千弗近い金を貰つた事が確になつた。

一通の紹介狀が千弗――幾位金の唸つて居る○○○○でも、餘りボロイ話である。

で、一つ彼の奴を洗ひ上げたら、意外なものが飛び出すかも知れないぞと考へたので、萬事の手筈をきめると、ジャッキを使ひにやつて、

『此の間は親分とも知らないで大變失禮をしました。今日は改

めてお近づきの爲に、夕食を差上たいと思ひますから、使の者と一緒にカルトン・カフエーまで御出を願ひたい。」と政を招待したのであつた。

此方に計劃ありと知らない政は、すつかりいゝ氣持になつてジヤッキと一緒にやつて來たのであつた。

私は出來るだけ下手に出て、一にも二にも親分、親分と煽り立てる。女の前で煽り立てられるので奴さん、いやに親分風を吹かせて、すゝめられるまゝに呑むが、中々の酒豪で容易に醉はない。

盛に自慢話に花を咲かせて氣焔をあげるので、一寸、一寸、水を向けるが心がしやんとして居て、肝心のところへ來ると話をフイとそらして仕舞ふ。流石は○○○○○の密偵を勤めるしれ者だけある。

そこで第二段の方法を實行する事にしたが場所が悪いので、頃を計つて、女の處へ遊びに行こうと云つて表に連れ出し、淫賣宿のアスターハウスへと行つたのである。

こゝで又飲みなほした。女には馮が先に來て金を握らし話がちやんと出來て居るので、盛にすゝめて醉ひ潰しにかゝつたが、一向利き目が現れない。仕方がないので一Narcotic を一服とると、天下の親分も他愛なく眠むつて仕舞つた。

仕事はこれからである。一應政の身體檢査はやつたが、別に何の役に立つ物も出て來なかつた。尤も之は念の爲にやつた迄である。そこで女には更に金を與へて、充分明日の朝まで眠り續ける政を預けると、三人は彼の自宅へ深夜の街に自動車を飛ばせたのである。

ウキックハム街の路地内、五軒長屋の一番奥の端れにある、汚い煉瓦壁の二階屋である政の家の前に來た時は、もう午前一時頃であつた。

私と馮とは入口の横に隠れて、ジャッキが案内を乞ふと政の歸りを待つて居たと見へて、ハリウッドの酒場女だつたと云ふ女房が出て來て「まだ主人は歸らない。」と云ふ。

勿論歸つてゐないのが本當で歸つて來て居たら大變だ。だがそんな事は夢にも知らぬ氣に、

『先刻、アルハンブラの賭場で別れる時、今夜一時迄には家に歸つて居るから、行先がなかつたら訪ねて來いと親分がお仰しやつたので實はお言葉に甘へて來たのです。』

とジャッキは如何にもがつかりしたやうに云つた。そして『土間の隅でもいゝですから……』と親分に來いと云れた事を充分含ませて哀願する彼の様子、中々何うして手に入つたものだ。話が如何にも哀れつぽいので、「親分、親分、」と主人を呼ばれ

た手前、つい姐御らしい氣分になつて、

『ぢあ、そのうち親分も歸つて來るだらうから、上つて待つてお出で、』

と云ふ事になつたのであつた。

恁うなると仕事は先づ九分通りの成功である。あとは此の女を眠らして仕舞へばいゝだけである。ジャッキが家の中に這入つて三十分許りすると入口から彼が出て來て呼んだ。早速私と政は家の中に這入つて行くと、人情深い姐御は親父の居間で、長椅子(ソファ)の上に豚のやうな身體を延して、悠々と夢路をたどつて居た。

そこで三人は手分して隅から隅迄、蚤一匹も見脱さない位嚴重に、家宅捜査を行つたのである。其結果、

ハワイの荒破戸(ごろつき)から來た手紙を五通、〇〇〇〇會社支店長から報酬金を受取つたから約束により千弗送ると云ふ〇〇からの手紙一通。政が〇〇〇〇〇局に密告した覺書の日記帳が一册。〇〇〇〇軍事〇〇局からの命令らしい暗號文の手紙が二通。その外、政が〇〇〇〇人や日本人と一緒に寫した寫眞が數葉。

これだけ手に入れば先づ大丈夫である。時計を見ると午前三時少し過ぎ、歸るには時間の都合が悪いので、五時近く迄休息して一先づ宿まで引上ると、かねての計畫通り帳場の方へは『急に出發する事になつたから』と云つて支拂を濟まし荷造りして置いたトランクを自動車に載せて波止場へ行くと、昨日切符を買つて置いた所の、午前十時に日本へ向け出帆する郵船會社の春洋丸に乘込んだのであつた。

太平洋を西へ七日船は無事ホノルヽへ着いた。私達は上陸すると日本人旅館日の出ホテルに落ち着いて、次の船の出帆迄に政の知り合である荒破戸(ごろつき)の吉村を洗ひ上ることにしたのである。

最初それとなく吉村の容子を探つて見ると、四ヶ月許り前に日本へ或る〇〇〇〇人と一緒に歸つた事が判明した。それは政と往復した手紙の文句を裏書する事である。で早速私達三人は吉村に面會して頭から高飛車に特務機關の〇〇を明示して彼を半分威しつけ、半分は利を以つて誘つたのであつた。

金の前には主義も節操もない彼は、私達に反抗する不利益よりも、黄金の前に頭を下げる事の利益を覺つて、案外簡單に白狀したのである。

彼が政からの紹介狀を持つた〇〇〇〇人に面會すると、〇〇〇〇會社員と云ふその男が言ふには、

『今度日本のK市に會社の支店が新に設けられ、自分が初代の支店長として赴任する事になつた。ついては何分初めての處であるし、支店も自分が行つてから開設すると云ふやうな譯で、誰

かK市を充分に知つた相談相手が欲しいので、かねて眤懇にして居るミスター村上（政の事）に話したところ、ホノルヽに居る自分の親友である吉村がK市の者だから紹介をしやう。若し吉村が貴方の話を聞いて、一緒に日本に歸つて、K市へ行つて吳れゝば大變都合がいゝではないかと云ふので、御相談に來た譯である。何うか是非此際自分を助けると思つて一緒にK市迄來て貰ひたい。就ては甚だ失禮な申條であるが、旅費滯在費小使等の負擔は勿論、期間の長短を問はず報酬として三千弗差上たい」と云ふのであつた。

その頃吉村は賭博に負けて素寒貧になつて居たのに、棚から牡丹餅式の話が降つて湧いたので、早速二言となく引受けかけたのであつたが、話が餘りうま過ぎるので一應考へた上でと云つて別れると、洋服を質に置て金を幾位かつくり、村上の處へ大丈夫かと念押しの電報を打ち、相手は充分信用の出來る人であると云ふ返事を受取ると、やつと安心して彼は此の支店長と云ふ男と一緒に日本へ向け出發したのであつた。

Y港で上陸した彼等は一先づT市へ行つて日本ホテルに泊り、〇〇〇大使館への手續を濟ますと、K市へ汽車で行つて海岸通りの世界ホテルの一室に陣取り、支店開設の爲に奔走したのである。

吉村は支店長の注文がむづかしいので、毎日〳〵足を棒のやうにして搜し出したのが、海岸通り二丁目の〇〇〇ビルヂングの六階であつた。そこをオフィスにすると、自宅としては山手の一番町にある、嘗て歐洲戰爭時代に一躍船成金となり、虎大盡と歌はれた金野氏が、その後の財界恐慌の爲に沒落して投げ出した、宏壯な邸宅を、借受けたのであつた。愈々支店の開設も出來たので、滯在一月餘りで吉村がホノルヽに歸る事になつた時、支店長は君の代りに誰か君のやうに話せる者を是非紹介して欲しいと云つたので、ガイドをして居る友人の山田を紹介したのであつた。

ガイドと云ふと大變聞へはいゝが、その實貿易港に巣を喰ふイカサマ商人と結托して居る外人相手の香具師である。吉村は此の男を支店長に紹介して、約束の三千弗を受取つて歸つて來たと云ふのである。

以上は吉村が私達に語つた話の大體である。

話を聞いて居ると色々不審の點があつた。然し餘り突込んで聞く必要もないので、一先づ此話はこれで打ち切つて、第二段の仕事にかゝる事にした。だが若し吉村が內通でもすると困るので、彼に誓をさせると同時に、ジャッキを尾行させて置いて、各方面の同志へ向けそれぞれ暗號電報を打つて調査を依賴したのであつた。

二三日すると各地から續々返電が來た。それを綜合して見る

と、全〇〇〇〇に〇〇〇〇〇會社なる物は無しと云ふのである。本社のない支店——こんな不思議な事があらうか。そこで吉村の監視をホノルヽの同志に頼んで私達三人は、急遽日本へと歸つたのである。

日本に歸ると一應T市の〇〇〇〇本部に出頭して大體の報告をなし直ちにK市へと向つた。そして更に私達は四人の同志の加勢を得て、此の本社のない支店の正體を摑む可く活動を始めたのである。

段々苦心をして調べて行くと、益々不審な事が出て來て、何うやら〇〇母艦の怪寫眞事件に關係のある點が漸次有力になつて來たので、一同は流石に緊張してなほも努力したのであつた。

或る同志は〇〇銀行の行員を買收して、支店の金が〇〇〇〇大使館から送つて來る事をつきとめた。一方支店長の家のアマ(女中の事)になつて居る同志の女からは、三ヶ月程前病氣で客死し、Uの火葬場で燒きMの外人墓地に埋めたはずの、トムソンが〇〇〇〇の〇〇〇〇〇市から手紙を寄越したと云つて來る。またガイドの山田をつけて居る者からは、彼が此の一二ヶ月前から急に商賣で儲けたと云つて、新しい家に引越し家財道具を新調して居るがその金は何うやら〇〇〇〇〇の支店長から出て居るやうであると云ふ報告が來た。刻々と集る情報は益々不審なもの許りである。

殊に醫師の死亡診斷書がありK市の〇〇〇〇領事館に死亡屆出濟みで、Uの火葬場の帳簿に記入され、立派に葬式を出して、Mの外人墓地に埋めたといふ確證のあるトムソンが生きて居て手紙を寄こしたと云ふのだから、實に奇怪至極である。

直ちに〇〇〇〇の同志に暗號電報を打つて、トムソンが確かに生きて居るか何うかと云ふ事を、至急調査させた。折りかへしトムソンは三ヶ月前日本より歸り、目下當〇〇〇〇市の自宅に住せりと云つて來たのであつた。此の報告を受け取つた私達は、此の奇怪なる死人が何人であるかと云ふ事について、種々意見を交換したのであつた。

此結果一同の意見は、〇〇母艦の怪寫眞事件と此のトムソンの奇怪なる死亡事件、それに迷宮入となつて居る士官の謎の行方不明事件の三者は、皆同一の事件であると云ふ事に一致したので、愈々最後の大活動を開始したのであつた。

暗號電報は遠く海外に飛び、八方に同志は手を延ばして、その活動は眞に目醒しいものであつた。その結果支店長と云ふ〇〇〇人が〇〇〇〇軍事〇〇局の〇〇であると云ふ確證が、同志の女の色仕掛からまんまと手に這入つたので、或夜私達は宏壯な支店長の家に乘込んで彼を〇〇すると共に嚴重な家宅捜査を行つたのである。

同時に吉村も私達の手で〇〇した。之に前後して〇〇〇〇の

同志からトムソンの○○に成功した事と、入手した一切の情報を通告して來たのであつた。

こゝに於て諸種の證據と彼等の自白、並に調査の結果を綜合して、此の奇怪なる事件の大體を發表すれば、支店長と稱する男は、○○○○軍事○○局の敏腕なる○○であり、トムソンもまた○○であつたのである。

彼等は○○の機密を盜む可く、政から吉村、山田へと絲をたぐり、之等無頼漢を黃金の手で操縱し、一面○○○○大使館の庇護のもとに、大膽不敵にも魔手を延ばして居たのであつた。

彼等が虎視眈々として機會を狙つて居る時、○國軍艦土佐がK市に入港したのであつた。殊に、土佐乘組の一士官はかつて山田が、一水兵として現役にある時の分隊長であつた。最初彼は唯昔の上官に久し振りに面會すると云ふ、單なる氣持で訪問したのであつたが、明日でも拙宅へ御出で下さいと彼が云ふと、士官は明日の晚○○造船所の海軍技術官と打合せの事があるので上陸するから、時間を早めに上陸して一寸お邪魔しやうと云つた。其時彼の頭にフト浮んだのは技術官との打合せ——○○書類、そしてかねて內々頼まれて居た○○○○支店長の言葉——莫大な報酬金であつた。

山田は明日の午後二時に稅關波止場で出逢ふ事を士官と約束して上陸すると、直ぐその足で山手一番町の支店長の家へ行つたのである。支店長は山田の話を聞くと非常に喜んだが、さて報酬の問題となると、仲々容易に話がまとまらなかつた、と云ふのは山田の方では萬一の場合は生命も飛ぶ仕事、三萬圓は是非欲しいと云ふのであるが、支店長としては鞄の中を見ずに買ふのであるから、五千圓以上は出せないと云ふのである。そこで話はもつれて到々物別れとなりかけた時、トムソンがやつて來て、「まあ、まあ、」と中に這入り折角の機會だから、ウンと支店長に奮發して貰つて、一萬圓出すから辛棒して呉れと云ふ事になつて話がついたのであつた。

そこで今度は何うして、○○書類の入つた鞄を手に入れるかと云ふ事になつたが、何にしろ相手は死を恐れぬ武人である、うつかりして仕損じては大變なので、色々相談の結果酔はした上で山田が此の家迄連れて來ること、それから先はこつちで引き受けて萬事手落ちなくやると云ふ事になつたのである。

翌日の午後二時山田が約束の稅關波止場で待つて居ると、そんな事とは、夢にも知らぬ士官は流石軍人だけに時間通り艦載水雷艇でやつて來た。

山田は近くに自分の馴染みの家があるからと云つて、士官を案内して行つたのが、彼の根城として居る外人喰へ込み專門の、港では通稱後家サンで通る淫賣の集り宿である、名前だけは大變氣のきいた、Kグリルと云ふホテルの酒場であつた。

若いフラッパーな平氣で〇〇を見せる女達は、親分株の通稱狼(ウルフ)と呼ばれて居る山田から、腕に撚りをかけて賴むと云はれたのだから堪らない、海上生活ですつかり荒んだ相手の、首玉に抱きつく位の生優しさではなく、白晝平氣で士官の膝の上に腰掛けて盛にイツトを放つ、そして酒を無暗に呑ませる。之には百萬の敵をも恐れぬ士官も、木佛、金佛、石佛でない限り、女軍には降伏の外はないのである。醉ひが廻つて來るうちに情火は募る。彼等の必死の戰術は遂に奏效して此の悶苦しい士官を到々囚にして仕舞つた。頃を見て山田は女に指示すると、

『ねえ、私の家にこれからいらつしやい、』と甘つたるい口で盛にすゝめ、その姿ではあんまりだと、ホテルの着物にかへさせて洋服や何かは風呂敷に包み、天晴れ色男となつて出かけて行つたのが女の家とは眞赤な噓、例の支店長の宏壯な家である。こで又一騷ぎをやつて女は酒をすゝめる、だが醉つても流石は武人だ、艶だけは何時も自分のそばに置いて、横になれば枕にすると云ふ有樣容易に失敬する事が出來ない。仕方がないので女に旨を含めて寢室へと連れさせ、到々 Poisoning したのであつた。

さて困つたのは後始末である。警察權の行き届いた〇〇である以上、うつかりした事はない。ところがそこは〇〇〇〇軍事〇〇局のナンバーワンで自他共に許した〇〇の支店長である。早速〇〇〇〇人の醫者を連れて來て、トムソン病死の診斷書を作らせ、〇〇領事館、K市役所、火葬場、すべては外國人と云ふカモフラージユでまんまと僞り、不幸なる士官の骨をばM外人墓場へ葬つたのであつた。

一方トムソンは手に入れた〇〇書類を持つて鐵路Y市に向ひ同國汽船に變名して便乘、故國を指して落ち延びたのである。斯くして〇〇母艦の怪寫眞事件は、此のトムソンに依つて起されたのであつた。

だが天網恢々疎にして洩さず、遂に彼の奸計は白日の下に發(あば)かれたのである。〇〇〇〇軍事〇〇局が全世界に網を張つて居る以上、又〇〇にも之に劣らぬ〇〇〇〇があるのである、國際場裡の暗黑面、そこには赤露のゲー・ペー・ウーあり、カイゼルの密偵(スパイ)以來〇〇の密偵(スパイ)あり、〇〇〇の〇〇密偵局並に外交密偵部あり、表看板に平和を唱へ、人類愛を叫び、自由平等を謳歌する彼等の誰ぞ、嘗て我西園寺全權によつて提出された人種平等案を一蹴した者は。ヤンキーかジョンブルか。文明先進を誇るも裡には黑人私刑の非人道的行動あり、名譽ある虐殺史がある。誠に人間生活の存する所常に劇あり。社會暗黑面の怪奇、讀者諸君よ豈此の一編の Marvellousness なる事實のみならんやである。

編輯者雜記

×

「最新社會科學の頁」はいよいよ今月から附錄として附加へた。見らるゝ通りの卅頁を敢行した譯である。

本號は最初の試みとて尙遺憾の點もあらうと思ふが、號を追うて整然たる誌上の一大學府を形作らるゝこと請合である。洋の東西を問はず、買の左右を論ぜず、精緻な選擇と大胆な拔擢とによつて、わが社會科學の未來は、今後多大の犧牲を拂つて繼續さるべきこの頁に孕まれてゐる。

當代大家十七名家を一堂に會せしめた、これ以上の權威と偉觀がほかにあらうか。而も十二分の責任を以て臨まれた此等の諸氏に感謝あれ。

×

正直に告白して不明を陳謝する。折角計畫した夏季大學は申込者が思つたより夥なかつたのと講堂借受に講演の內容まで制肘を受ける憾みがあつたのとで斷然中止することにした。已に申込まれた百餘名の方々に對しては申譯のない次第で、其晉特に篤くお詫びしておいた筈だが、玆に更めてわれらの不明と粗忽を陳謝する。さうして、この酷暑中を特に本社のために御講演を快諾せられた竝々ならぬ好意の諸講師に對して特に深甚の感謝を捧げたい。

×

八月十三日、校了の筆を投ぜんとして靜に顧みれば、旣に漸く秋立たんずる氣配がする。壓倒的編輯陣を闘ひ取らんがための吾等にとつて炎暑酷熱と戰ふぐらゐのことは何んでもなかつた。背に一肌入れる閑もなく、吾等は十月の特別號に精進しようとしてゐる。努力と苦衷は目次を一瞥されただけで識認せらるゝであらうを信ずる。

×

高田保馬氏、三土忠造氏、坪內逍遙氏、茅野蕭々氏、いづれも珍らしい寄稿である。墮胎論、新支那論、牧野內府論、失業反對闘爭論、いづれも熱讀に値すべく、その他の讀物に至つては蓋し盛夏の饌、興味百パーセント以上。

×

殊に馬場氏の人物評論は天下一品、何人の追隨をも許さざるものとして好評嘖々。これを纏めて一册にしてくれとの希望の來狀が頻々とあるので、本社で出版することにした。九月下旬には出るだらうと思ふ。人物の興味を中心にした政界の裏面史として再讀に値すべく、大正から昭和へかけての政界の動きを、登場人物によつて映し出したオール・トーキーとしても亦祕藏に値するものがあらう。

×

何といふ幸運ぞ。「眞理の春」につゞいて「猶太人ジユス」の賣行き、停止するところを知らない。牧逸馬氏の「この太陽」も遠からず出來する。大方の讀者子に感謝の意を表したい。

×

本誌姉妹雜誌「婦人公論」は漸く機熟してこの十月號からいよ〳〵値下げを斷行する。本誌の値下げはいつの時になされ得るか。當分は內容本位！　八十錢でも、五十錢の雜誌に較べて決して高くない內容の充實を志して諸君の愛顧に報いよう。やがて時到らば……などと云ふのは止さう。缺損は雜誌を滅茶苦茶にする他ないから。敢て支持せられよ。

×

殺人的酷熱、殺人的不景氣、それでも吾等の雜誌は勇敢に讀者層を擴大して行く。頁い物の前には定價は問題ではないのだ。が、若し、定價を下げたら……われらの興味はこの一つに繫つてゐる。が功名を逸つてはいけない。例はそこらにいくらもある。自信と確信の持てるまでは、好意と同情ある讀者の諒察に俟ちたいと思ふ。

いろ〳〵の機會に親しく聲を寄せらるゝ愛讀者の方々に右一言申添へておく。

×

「文壇アンデパンダン」——飾にかゝつた十數篇、確に手應へはあつた。嚴選の上で近く無名の玉篇作什を發表するであらう。

×

激し暑く遊戯を孕んで、[illegible]漸く紛議に入らうとする。

警察の性質と密告利用の可否

長谷川如是閑

犯罪搜査の、便宜の爲に、市民からの投書を希望すると云ふ方法を、警察が採る事に就ては、專門的にはこういふ方法が全く時代遅れのものである事は定説になつてゐる事で、それは古來どこでも行はれた事であつたに拘らず、今日では最早やそれを實行してゐる所はあるまいと思ふ。が、もし我が國の警察が今更ら特にそれを思ひついたとしたなら、それは此方法が現にある程度まで、警察當局者に利用されてゐる故ではあるまいか。

國々の習慣で、警察に對する一般社會の思想なり、待遇なりがそれ〲違つてゐて、市民と、警察との關係についても、異つた狀態にあるのだ、日本の警察は色々の點で、どこの國のそれにも劣つてはゐないと云ふ事である。然し警察といふものが今云つた樣に、各國の實情によるもので、一概に何處の方法が最上とすると云ふ樣な事は云はれない。もし日本に於て、殊に、警察に對して投書のやうなのも、集ることが多く、密告者も多い、といふ樣な狀況があるならば、それは警察と市民との間がより良き狀態にあるためか、又はより惡い狀態にあるためであるかを、愼重に考察せねばならぬ。

警察は、元來自治の組織に屬するもので、國家機關としていふ事は、それ自體矛盾語でさへある。今日では、どこの國の制度でも一致して、警察を自治體の機關としながら、同時に國家の機關としてゐるが、それは理論上考慮を要する問題で、國家政治に關する警察事項は、社會的保安の機關とは、寧ろ判然と區別されねばならぬのである。警察の自治制度は、封建國家の場合には、國家的機關とは認められなかつたが、然し日本では今日の支那や中世のヨーロッパに於ける樣な警察の自治的性質は嚴重に守られてゐなかつたと云ふ事である。今日の高等警

察の發達は此の意味で警察から區別されねばならぬのである。

市民の自治的機關としての警察を、市民が自己の保安機關と考へる事は出來るが、國家にとつて、より重要な高等警察は、市民からは、自己の保安機關と見ることは出來ないもので、それは總ての關係で、軍隊と同じく、市民と對立的の地位にある機關である。

理論上高等警察なるものは、警察の範圍から除外さるべき機關であるとする、これが安當である。今日それが警察として、同一の機關に屬してゐる爲に市民の警察に對する觀念が正確を缺く樣になる。社會的安寧秩序と、國家的安寧秩序とは、ある場合には區別する事の出來ないやうな混淆を來すが、平生の場合は、それが截然區別されねばならない事は、軍隊と警察との對象が、判然區別せられてゐなければならないのと同じである。

高等警察は、消防機關や、社會的犯罪の防禦機關とは違つて、全く特殊の對象と云ふものだ、從つて、市民のそれに對する態度に於ても區別される必要があり、いかに警察を觀念すべきかに就いて、明確の概念を與へられねばならぬ。

投書の問題も、先づそれに基いて考察しなければならない。自治機關としての警察に對する市民の態度は、それが自分達の社會的安全を保護する意味から、それが脅される危險の生じた時には、それを警察に報告すると云ふ事も自治體としての警察の組織に於ては當然採るべき態度であつて、殊に義務とか、權利とかの問題ではない、それは火事があれば、報知機で知らすのと同じ意味である。完全に警察が市民の自治機關であるならば、密告や投書の利用も、原則として、否認する事は出來ない。

それにも係らず國家でも、自治體でも昔行はれたものの方法が自ら廢たれたのは、この理論上當然の約束が、實際上、多くの弊害を生じたからである。家庭に於ても惡い事の起るのは、互に警戒する必要があつて、それが爲には、相互に報告し合ふ必要もあるといふ事は、原則として寧ろ獎勵されてゐるのである、されば、原則としては家の中で互に隱し合ふ事は曲事であると、認められてゐるのだが、さればと云つて、互に訐き合ふ事が、昔から獎勵されてゐたかと云ふに、決してそうではない。

所謂訐いて以て直となすと云ふ事を否定したのは、倫理に對する道德からであらうが、互の間でも、所謂「云ひつけ口」なるものが排斥されてゐるといふ事情がある。それは、家の中に於ては、互に隱し合ふまいと云ふ原則を勵行する事が、却つて家族の不和を醸だす結果を來たすと云ふ經驗に基いたものである。警察も自治機關としての原則に於ては、市民に密告の責任があり、責任でなくとも自由があると云ふ事は、決して否定し得ない事だが、それが近代に至つて廢たれたのは、在の家庭内に於ける關係と同じ理由に因つたもの[illegible]

殊に、社會的關係に於ては、事情は一層複雜となり、家庭内に於けるよりもその祕密を必要とする——と云ふよりは寧ろ便宜とする——といふ事情がある。古代社會に於けるタブーなるものは、ある意味に於て、此の社會的協同生活の内部に於ける一定の限界を、規定したものであるともいへる。社會が複雜になるに從つて個人的事情も特殊的となり、財産の不平等、生活狀態の相違、享樂の差別、内部生活の特殊狀態、そう云つた樣なものは殆んど外部に對する禁止事項となつて、協同生活から嚴重に隔離されてゐる、さういふ必要が何處にあるかと思はれるものまでが、此のタブー的意識が經驗によつて祕密にされてゐる。隣家の内部を覗かれる樣な窓をつくる事は習慣上考慮する、已むを得ざる場合は目隱しをすると云ふ事が、嚴重に行はれてゐるのはその故である。

これに對して理窟の上から、家を覗かれる事に何の差支があるか、惡事を營んでゐるのでなければ、覗いても覗かれても差支へないではないかと云はれた時には、それに對抗する理窟はない樣であるが、然しそれが所謂タブーである。英國などでは有名な判決例に、他人の家の食堂を覗いたものが數百磅の損害を要求され、これに對して、覗いた被告は具體的に、何らの損害を原告に與へたのではないから支拂ふべき損害賠償は二片でよいと抗辯したが、裁判官はこれに對して、他人の家の食堂が、二片出せば、いつでも覗かれると云ふ事になつては、家庭の安寧が保たれぬ、と云ふ理由によつて、被告に對して、原告の要求する多額の賠償金を支拂ふべきであると、判決したと云ふ話がある。理窟にもならぬ事だが、それが社會習慣で、そのタブーが守られなければならない事は、今日に於ても變りはない。從つて人の私の事情や、他家の内部が、むやみに明かるみに曝け出されると云ふ事は、社會にとつて事實上何の損害は無くとも、安寧を害するものとして、タブーとされるのである。

そこから、自治體としての警察に對してさへも、市民の間にそれを防禦又は忌避する樣な、感情態度の普通に存在する事は、已むを得ない。今若しこの社會的タブーを平氣で破り得る者があるとしたならば、それは當然社會的感覺の缺乏した者で、他人の家の食堂を覗いたり、平氣で庭さきに這入りこんだりする、異狀感覺者である。こゝから密告と云ふ樣な事が、到底正しく行れるものではない事が解る。例へば告發と云ふ事は、國民一般の權利であるが、現に自分に關係のない樣な事件を、好んで告發する樣な者は、やゝもすると好訴狂と稱せられる精神病者であつたり、それに近い病的感覺の持ち主であつたりする場合が多く、さもなければ、何にかの目的をもつて、關係もない事件を摘發する樣な者が多い。現に新聞などで屢々さう云ふ告發事件が、色々弊害の原因になつてゐる事が報ぜられてゐる。

今日でも警察には日々色々な投書、其他の密告が集るに違ひないだらうが、警察當局者は、それをたゞそこに訴へられた內容の事柄を調査するに止めないで、その告發の動機なり、告發者の狀態なりに就いても、出來るだけ調査して、さう云ふ種類の知識が、果してどう云ふ性質の物であるかを、科學的に、統計的に、研究しなければならないのである。公然と密告の方法を採るのは、さう云ふ科學的研究の結果を公然と發表する事が出來る樣になつてからでなければならぬ。たゞ漫然と古代的、中世紀的の方法を採ると云ふ事は、無責任も甚しい事である。市民が此問題に對して、可否を云ふ樣な根據を持たない事を自分たちも又、惡根據で實行すると云ふ事は、一種の罪惡であると云つてい丶。

警察が前に云つた如く、國家警察としての特殊の機關を混淆させてゐる時には、密告の方法は一層不都合である。この場合は自治的警察の場合と性質を異にする。市民は此の如き機關に對して、何等協同する義務はなく、國家も又その組織以外の協力を求める必要もなく、それを求むれば、たゞ全く弊害を求めるものである。それは、軍隊の組織、諸官省の組織を見ても解る。軍隊は組織的協同の他は、市民の個人的協力は拒絕し、禁止してゐる。國家のあらゆる行政立法の機關も、こと〴〵くそこである。それはもし少しでもさう云ふ事が行はれるなら、忽ち組織の混亂を來し、軍隊ならば、それを有力な市民が私に利用し、國家的諸機關ならば、忽ちそれを腐敗混亂の中に投じて了ふ事實が、發生するに違ひないからである。

國家機關としての高等警察に對して、市民の個人的協力を求めるとか、市民がそれに對して個人的協力を與へるとかは、以ての外の事である。殊に政黨政治の時代に於ては、それでなくとも、警察は政黨の分野から獨立する事が困難であり、その社會的治安の責任さへも、國家警察の黨派化する事によつて、攪亂される事が常にある。これは警察が自治體の機關なると否とに係らない事であるが、日本の樣に自治體の勢力が國家の勢力より遙かに弱い場合には、國家警察の利用と云ふ事は、頗る危險である。アメリカの樣に自治體の力が強く、國家の力の弱い處では、警察は得て自治體のボスの私有物となつて常に弊害が續出し、現に強盜團などの爲に利用される處さへ尠くない。

國家の警察はその意味に於て、嚴重に市民の關與から超絕しなければならない。高等警察は此の意味に於て一般警察とは全然區別されなければならないものであるのに、今日では、それが混同されてゐるので、さう云ふ制度の下に於ては、一般警察は、寧ろ市民の關與から超然として、協同すべきものでなく、對立すべきものであるとする官僚的態度をとり、市民は寧ろ之と對立する地位をもつ樣な關係にある事が寧ろ安全であらう。密告の方法の如きはその意味に於て全く採用すべからざるものである。

文藝時評

正宗白鳥

「人の噂は依然として人の興味だ。けれども噂の對象は變化したといふよりは複雑多様となつた。野球選手や音樂家や俳優や、文士の名が、社會的に噂される特殊的な興味から普遍的の興味となつた。女給の名まで記憶しなくてはならんといふのだから、現代人となる、容易な仕事ではない。しかし、最近に於ては人の噂よりもむしろ集團の噂が興味を惹く。個性の表現を基調とした文學や演劇にさへ、花形が注目されず、集團的の藝術が鑑賞される。寶塚の歌劇や松竹の踊りなどにスターの色彩が薄いのもこの傾向以外のものでない」

私は、故郷でふと手にした大阪の新聞のうちの「現代世相寸評欄」といつたやうな欄内に、こんな評語を見つけた。かういふ見解は、この記者獨得のものではないので、近年いろ〳〵な雜誌で見かける常套語である。しかし、私は同感するのに躊躇する。スターの色彩が薄らいだのは、傑れたスターが無いためではあるまいか。文學方面にでも演劇方面にでも、鈍栗の脊くらべで、傑出した人物が出てゐないために、十把一からげで集團が目につくのではないか。映畫のやうな最近の集團藝術でも、チャプリンは光つてゐるではないか。フエアバンクスでもクラ・ボウでも、傑れた俳優は、集團としての噂を壓して個人としての噂を流布されてゐるではないか。日本だつて、いろ〳〵な團體の團員は、みな自己を發揮しようとつとめてゐるのだと、私は推察してゐる。却つて昔の人間の方が自己發揮慾が乏しかつた。無名戰士たるに甘んじ、椽の下の力持をして悔ひず、神のため國のため主君のため父母のために、自己を犠牲にし、自己の一生を埋沒して平氣でゐた人間は、昔には多かつたらしいが、今日ではさういふ人間は極めて稀であるやうに思はれる。賣名慾が鼻の先きにぶ

ら下つてゐるのに、自己を沒却して營々として世のために鬪つてゐるらしい言論文章を發表する青年は晒ふべきものである。

「人の噂よりも集團の噂が興味を惹く」と、寸評記者は云つてゐるが、その新聞では、人の噂を盛んに出してゐて、それによつて讀者の興味を惹かうとしてゐるではないか。現實暴露文學が最近の文壇に流行してゐるとしても、漠然としてある團體、あるブルジョアの現狀を暴露するよりも、ある知名の個人の現實を暴露する方が一層つよく讀者の興味を惹く譯である。個人を對象として愛も憎みも高調するのである。

私は、かねて讀みたいと思つてゐた「眞理の春」を、最近著者細田民樹氏から寄贈されたので、早速通讀して、通俗的讀み物として、著者の着眼の凡ならざるを察した。一方に何かの社會運動の卷添へを喰つて牢獄で苦まされる純情豐かな青年の生活を描き、一方に資本家の暴横惡埒淫蕩の生活を描き、それに青年と、忠實なその妻と、富家に生れながら所謂階級意識に目醒めたモダーンな女性との三角關係を配してゐるなんか、現代好みから割出した用意周到の作風である。これで讀者が隨いて來なければ、出版界は暗闇である。ことに、何の某として實業界に羽振りを利かせてゐる幾人かの名士を誰れにも實名の連想されるやうな假名を用ひて、縱橫にその內幕に立入つて現實暴露の筆を揮ふなんか、作者の際立つた思ひ付である。「集團の噂よりも個人の噂の方」が興味を惹くことを、作者は見破つてゐるのだ。在來の藝術家氣質から云ふと、際物の感じがするかも知れないし、モデルからの壓迫を多少は憚るであらうのに、それを押切つたところに、この作者の太々しさが察せられる。すでに、かういふ暴露で當てたとすると、これから模倣者が續出するであらう。暴橫惡埒な資本家諸氏は警戒すべきである。

細川氏の小說では、十年も前であつたか、生みの母が他家へ緣付いてゐるのを、ある少年が搜して訪ねて行く、哀れつぽい小篇を讀んだことがあつた。しかし、それなぞは、この作者の特色を現はしたものではなかつたらしい。その頃の文

章世界」に書かれた色の濃い家庭悲劇物語——淺薄な讀者には、ドストエフスキーかストリンドベリを連想させさうな小說——などが、この作者の持味を現はしたものと云つてよからう。大上段に振翳すことの好きな作者である。日本の作家としては規模の大きい作品を構成し得る素質を持つてゐる。規模が大きくても、うどの大木では仕方がないが、この作者はこまかい人情觀察も小味な筆使ひも心得てゐる。

しかし、この小說が評判を取つたのは、富豪階級の內幕を暴露して筆誅を加へたのに原因してゐる。不景氣の今日、失業者の多い今日では、ことに讀者を刺戟して、義憤の快感に醉はせ、あるひは、憎惡の思ひ羨望の思ひを沸立たせるであらう。私の少年時代には、自由民權運動がまだ餘波を打たせてゐて、自由太郎とか改進左衛門とか云つたやうな演說使ひが、をり〳〵わが鄉里の村々にも姿を現はした。そして、田舍の當面の時事問題を捉へて雄辯を揮ふこともあつた。村長とか郡長とかに、個人的攻擊公人的攻擊を向けると、聽衆は日頃の鬱憤を晴らしたつもりで、鼻を鳴らして喜ぶのであつた。「えゝぞ〳〵」「うまいぞ〳〵」といふ掛聲が起つた。私は、田舍の古ぼけた家の一室で「眞理の春」を讀みながら、ふと自由太郎演說の一場を思出して、懷舊の感に耽つたが、それは、この小說に、演說調があるためではないだらうか。作者は「私は大體非人情派で、個人的憤怨などわりに持たない性質だ」と云つてゐる。個人的憤怨に燃えた作品は、眞相をあやまるかも知れないが、痛烈骨を抉るところも自から出て來るのだ。この作品は「これでもか」〳〵と、聽衆の個人的憤怨を豫想しながら、辯舌を揮つてゐる感じがした。

私も、經濟界の內幕、金持の遊蕩振りを興味を有つて讀んだが、しかし、かういふものは、生中の小說的調理を加へないで、雜報的に敍述された方が、私の讀書頭腦には適してゐる。「ここは柳橋のある料亭の奧の一室、庭の燈籠の燈影でかはいさうに雛(小妓のこと)にまで深夜業を強いてゐた」と云ふやうなうまい文句も散見してゐるが、私は、經濟雜誌「ダイヤモンド」に連載されてゐる「東電問題の經緯」などを一層愛讀してゐる。經濟界の眞相がここに一層明かに見ら

れ、その問題に關連した人物の面目が、遙かに鮮明に浮上つてゐる。赤江父子だの生野齊信だの、宗なにがしだの、人となりが、一層よく私の頭に映つた。小説の方では作者はこれ等の人物を喜劇的赤い面に塗立てることを主としてゐる。「ただし、一萬三千五百貫の扉を持ち、二尺五寸の鋼壁を持ち、世界有數の金庫も、なるほど、敵の飛行機や盜難に對しては、百パーセントの安全を保ち得るかも知れないが、たとへば、空氣のやうに、鍵無くして闖入して來る時代の敵にむかつては、何の防備をする力もないのである。お生憎なことである」なんていふやうな脅かし文句は、見物を唸らせるのだが、この作者は以前から、何につけても、こんな強調した文句が好きであつたらしい。作者自身さう信じてゐるのであらうし、論文としてはかういふ脅かし文句が有效であらうが、藝術に於ては、これ等の文句を濫費しないで、内に潛めて置いた方が、却つて效果がありさうに思はれる。

私は、赤江洋太郎の西洋に於ける遊び振りの一端を、かの地で聞かされたことがあつた。それから生野齊信氏や藤永又左衞門氏は、私が巴里にゐた時分に來遊されたので、氏等の案内をした人から、氏等の動靜の一端を洩聞きした。ある日、私がその人に連れられて、シャンゼリゼに存在してゐるカッフエ・リドーといふ華美を極めた大きな享樂場へ行つて、奥州の山家猿が、はじめて東京へ出て、カッフエ・ライオンにでも連れて行かれたやうに、あたりの賑はひを、キョロキョロ見てゐたが、その時、場内の舞踏場では、幾組かの善男善女が、足取りのあざやかなダンスをやつてゐた。

「あの女は地方廻りの女優ですよ。藤永又左衞門さんが先日あの女を買つたのです」と、私の案内者は私に説明した。

「しかし、さういふ人は、年は取つてゐるし、言葉は分らないし、とても、新橋なんかで遊ぶやうに面白さはないでせうね。外遊した話の種に、女買ひをするんでせう」と、私は云つた。

巴里では漫遊者の誰れでもが話の種に女遊びの眞似事をするので、藤永氏は、金があるから女優を買ひ、貧乏人は金がないから安價な女を買ふだけの相違で、道徳的に一を是とし他を非とする譯に行かないだらうと思はれる。

「眞理の春」には、隅田川べりに富豪の秘密の享樂場が實在してゐるらしく書いてある。しかし、この作者の書振りが貧弱で沒情趣で、享樂場の幻影は我々の頭に浮べさせられないのである。「諸君。現代の日本に、失業者の洪水に悩まされてゐる今日、搾取階級はかゝる淫蕩な生活をしてゐるのであります」と、演説するつもりならこれでもいゝが、「作者の望むところは、何よりも、藝術作品として讀まれたいことである」といふのが、作者の本心であるとすると、作者の筆は目的を遂してゐないのである。享樂場と云つたところで、栢川容作君ぐらゐが驚く程度で、パリやニューヨークやベルリンなどの底拔けの享樂場に比べたら、極めてチャチな貧弱なものだらうと察せられる。ロシアにだつてそんなものはあるだらう。昔、大浦（小說中の假名）の先代が向島の別邸にひそかに美人を集めて、當路の大官を招待して、その好色慾を滿足させて、商業上の特權や機密を獲得したことが有名な噂の種になつてゐた。紅葉山人の「三人妻」の主人公葛城余五郎か、同じ紳商の雪村素六かは、この大浦をモデルにしたのだと、私は昔聞かされたことがある。その秘密の享樂場も紅葉は描いてゐるが、それは藝術的技巧を凝らしたものである。

かういふ淫蕩的生活を書くことのうまいのはゾラである。そゝつかしい批評家は、「眞理の春」なんかを見ると、作家をゾラに擬するかも知れないが、それは大ちがひである。ゾラは、淫蕩を描がいて、讀者をして恍惚たらしめる筆を持つてゐた。それに、ゾラは、人間一般の淫蕩性にメスを加へてゐたので、「ナヽ」「酒場」「土地」何とかいふ坊主など、どれにでも人間の淫蕩の底深い影を見てゐた。會社の社長や金貸や大官人だけが色慾旺盛で、不都合なことをすると、非難の評語を加へるやうな修身教科書的作品は著はさなかつた。

そのゾラも、一面では、卑俗な大衆作家とされてゐた。ゾラの全集を英譯したヴィゼテリーの「ゾラ傳」に書いてあつたが、「ナヽ」が出た時には、書店が非常な宣傳をして、サンドヰッチマンを市中に出したりした。新刊書の廣告に、サンドヰッチ男を用ひるのはこの時がはじめではなかつたかと私には想像される。それで、非常の賣高であつたが、一部の識

者は、ナヽの作意の誇張に失してゐるのに眉を顰めた。誇張か否か、我々他國人には分らないが、ゾラの見た人間性には國の隔てなく我々の心を惹付けるのは確かである。

「眞理の春」の作者は「非人情派」をもつて任じながら、作中の人物に一々道德的批判を加へてゐるのが、通俗讀者にはいゝのか知らないが、私には目ざはりであつた。そしてその道德的批判が私には腑に落ちない。生野老人の娘の相手に好意を寄せて書いてゐるのも、私には變に思はれる。金持の娘が婦人雜誌でも讀んで現代思想にかぶれて、小生意氣なことを云つて兩親を困らせるのも有りさうなことで、こゝに現代の一面が描かれてゐる譯だが、作者がその小娘の肩を持つて、暗にけしかけてゐるらしいのは、大人氣ない。小說讀者は若い女だから、その意を迎へて書くのが、通俗作家の守るべき信條なのであらうか。ことに、その小娘をして「我等のテナー」杉原芳夫の愛人朝子を贔負にさせる調子なんか、私には齒の浮くやうに感ぜられた。個人性を虐視した舊思想に捉はれないのはいゝ。しかし「浮淺な流行的新思想」の型に捉はれた見解も、我々には滑稽に感ぜられる。

かつて、森鷗外が「百物語」といふ短篇に於て、鹿島清兵衛といふ遊蕩兒の風格の片影を描いた。そして、作中に多少の批判の語を挿んだらしかつた。それに對して、森田草平氏が、大盡王鹿島のやうに巨萬の富を遊蕩のために消すやうな男の心境は、謹嚴な鷗外なんかに分るものかといふ意味のことを云つたので、鷗外は、それを氣にして「細木香以傳」の末尾に於て自己辯護をしてゐた。細木香以は、德川末期から明治初年にかけての代表的遊蕩兒であつたが、鷗外は、彼れの生活を叙するに當つて、森田氏の批評によつて反省したのか、極力事實の調査をして、すべて事實に基いて筆を運んで、何等の批判をも加へなかつた。藝術も千差萬別であつて、鷗外のやうな態度ばかりがいゝとは云へない。細田氏のやうな態度の藝術も存在を價ひしてゐる。しかし、ゾラだつたら、赤江洋太郎の遊蕩にしても、その行動を逼眞の筆によつて描き盡して、讀者をして、身その境地に在るが如く感ぜさせたであらうが、「眞理の春」は、あまりに熱烈なる道德意識に富んでゐるためか、批判を先きにして描寫を末にしてゐる感じがする。執筆の際、作者は、萬年筆とゝもに、鞭をも机邊

に具へてゐたのであらう。筆を擱いては、鞭を取り、鞭を擱いては筆を取つたのであらう。「一代の遊蕩兒」の心境は、鳳外が看破し描出し得なかつたやうに、細田氏も描き得なかつたのである。(附言、西鶴はえらい。この頃またその作品を讀返してゐるが、讀むたびに味ひが深くなる。一代の遊蕩兒の心境だつて、彼れの作品には髣髴として浮んでゐる)

栢山容作の拘留のあたりは、流石に手に入つてゐる。ありふれた他の作家のとは格段の相違がある。三角關係の經緯、は婦人雜誌程度でよく書かれてゐる。

總括して云へば、「眞理の春」は、通俗小説として近來の逸品であらうと思はれる。この作者はこれからます〳〵世間に迎へられ、この作者の書齋には、利に敏き書店や雜誌業者が殺倒するだらうと思はれる。作家として快心のことである。ただ、私は、この作者の手腕と度胸を信じるがために、多きを求めて苦言を吐露した。

農民は苦しい生活をしてゐるに違ひない。しかし私は歸村するたびに、都會文明の流込んでゐるのに驚く。こんな小さな貧しい村に、玉突屋が出來た。カフエーも出來て、女給が現れた。活動寫眞の巡回興行が絶えずある。それから、道路がよくなつた。水道も企てられた。蚊もいくらか減つて蚊遣火の煙りも昔ほど盛んでなくなつた。蠅や蚤も減つた。自分の村だけについて、私の生れて以來の變遷を考へると、日本の文化の進歩が却つて明瞭に分るやうである。それとゝもに、田園情調の稀薄になつたことは云ふまでもない。

都會の文學青年によつて書かれた農民小説や、机上のいゝ加減な統計表なんかで組立てられた經濟學者の農村論なんかは、要するに、理窟だけの空虚なものである。私は「ホトヽギス」七月號に、齋藤八郎といふ人の寄稿してゐる「村の人々」といふ小説を讀んで、これには、ある農村の人々の眞面目が寫されてゐると思つた。この作者は農村の人にちがひない。田舍に文明の色がついたにしても、それは皮相の點だけで、都會人よりも一層執拗な本能、利慾の念は、過勞な重苦しい生活のうちに、のた打ち廻つてゐるのだ。齋藤氏の小説のうちには、それがよく出てゐる。しかし、小説讀者には鳴

物入りの假空な小説でなければ喜ばれないのである。

この頃は、不景氣騷ぎ失業騷ぎで、それに關する議論が、新聞雜誌の呼び物となつて、讀者の注意を惹いてゐる。小説の題材ともなつてゐる。經濟界の慘苦、失業者の窮狀について心を惱まさゞるものは、現代離れのした神經の痴鈍な人間のやうに思はれる。しかし、私は、かういふ流行も長續きはしないだらうと思ふ。失業者が無くなるといふのではない。失業苦はます／＼深刻になるかも知れない。農村の疲弊などます／＼烈しくなるかも知れない。その結果については、いろ／＼な暗憺たる空想がめぐらされる。たゞ、雜誌讀者や小説讀者は、さういふ題材を取扱つた作品に飽いて來るのだ。讀者が歡迎しないものを、新聞雜誌が盛んに書立てる筈はない。それに、小説なんかの讀者は、いくらか生活に餘裕のある人間で、ほんとうの失業者や、炎天に田の草を取つてゐる農民が、雜誌の創作欄なんかを讀むことは少いだらう。小説讀みの若い男女が、貧乏たらしい小説を好む譯がない。

二三の有力なる婦人雜誌を見て、これ等の雜誌編輯者が、伶悧に讀者心理を捉へてゐるのに、私は今感心してゐる。その讀者心理も時代の假面を取れば、古今東西共通の人間心理で、赤江洋太郎君だつて藤永又左衞門氏だつて、あるひは、いろ／＼な作者だつて、大抵は同じことなのだらう。婦人雜誌のうちでも、最も時代の尖端を進んでゐるらしい「婦人サロン」のところ／＼を開けて見てゐるうち、ふと、楢崎勤君の「水着を着せた八百屋お七」といふのを讀んで、私は噴きだした。「お七」と呼ばれるたびに、お七は自分の名前が、いかにもクラシックなのに嫌惡をかんじ、もつと近代的な名がほしかつたので、自分の名の「お」を略し、「七」を「なな」と呼ぶことにした。ゾラのナヽを讀んでから思ひついたのであつた。話はそれからはじまるのであつた。面白い。しかし、かういふものを讀むと、黄表紙が連想される。德川時代にもいろ／＼な種類の文學があつた。最近の文學だの尖端的の文學だの云つても、「お七」をナヽと云ふくらゐな上つ面だけの相違で、中身は昔あつたものとさう違はないやうにも思はれる。黄表紙文學は概して詰らないものだが、それでも、中には奇拔なのもある。最新文學者の模範とするに足るものもあるのだ。

附録

最新社會科學の頁

編輯責任者

經濟學及統計學

小泉信三
上田貞次郎
河合榮治郎
阿部賢一
那須皓

政治學及法律學

矢内原忠雄
蠟山政道
美濃部達吉
穗積重遠
高柳賢三
高木八尺

社會學

戸田貞三

人文地理學

新渡戸稻造

文化人類學

松村瞭

歴史

黒板勝美
池内宏
村川堅固

目次（昭和五年九月）

經濟學

◆理論經濟學、學說史及び學說批判

●高田保馬「マルクス勞働價値說批判」(經濟論叢、三〇・一、昭和五・一月、頁六七―一一四、及改造、一二・八、昭和五・八月、頁四七―七七、所載論文の綜括的抜萃)可なりの長篇であるから、其の周到なる紹介は容易でないが、其要旨は下の如くである。第一、マルクスに於ける生產價格の學說は其の資本蓄積論と衝突する。卽ち利潤率の平均が行はるゝ限り、資本主義生產は單純生產の形に於ても擴張再生產の形に於ても進行し得ぬ。然かも資本主義生產の進行は儼然たる事實である。第二、利潤率平均の學說は勞働價値說の崩壞に導く。何故ならば、生產價格の學說を認める限り、個々商品の價格はその價値から、又商品總體の價格もその價格から無限に相離れるからである。素より、マルクスと雖も生產手段に於る價値と價格との乖離はこれを認めたが、この認識より當然生ずる歸結を求めなかつたところに彼れの誤謬がある。第三、彼れの差額地代論はその生產價格論と矛盾する。彼れは一方、地代を「生產物の餘剩價値の一部」と說き、他方、其を虛僞の社會的價値、――價値に非るもの――從つて餘剩價値に非ずと述べて居る。第四、進んで差額地代論其れ自體を吟味すると、其は却つて差額地代無きことの論證になる。土地の差等が生產の諸條件の中に屬し、從つて個別的價値を支配するものならば、限界地に於る生產物の個別的價値が市場價値を決定することは出來ぬ筈だから。今彼れの差額地代說を生かすならば――差額地代の存在は儼然たる事實であるが――平均的生產價格が市場價格を決定すると謂ふ彼れの根本的立場は全く崩壞する。(以上內在的批判)第五、二商品交換に於ける共通物の存在を一つのアプリオリとするのは誤である。交換比率は勢力關係によつて定るものであつて、共通物をもち込むべき必然性は何處にもない。事實上、ロザンヌ學派は此共通物を否定して交換比率の成立を明示してゐる。第六、假りにこの共通物存在の主張を認めても、その蒸溜法は過つて居る。事實上、使用價値を抽象することは出來ぬ。使用價値は質たると共に量でもあり得る。從つて使用價値から共通物たる資格を奪ふことは理論上正しくない。姑らく使用價値抽象の命題を肯定しても、あとに殘るところはたゞ勞働生產物たる屬性のみとは謂へぬ。又勞働の有用性卽ちその質を抽象することは論理上勞働そのものの抽象となる。何故ならば、前段に於いて、使用價値の質の抽象によつて、使用價値そのものを抽象して居るからである。第七、勞働價値說に於ける論證は循環的性質を有する。卽ち複雜勞働は單純勞働に還元せられ、その割合は交換比例に於て示されてゐるとの主張は一つの循環論であらう。何故ならば、この場合、交換比例は勞働量の比率によつて定り、勞働量の比率は交換比例に於て定まると說くことになるから。第八、所謂盲目的に作用する無規則性な平均法則としてのマルクス價値說は、(イ)各種勞働時間換算の割合に就て論證を缺く、(ロ)使用價値を前提としながらその作用を認めない、(ハ)限界概念を認めずに、何等の論證なき平均原理を採る、(ニ)その價格に關する生產費の法則と相容れぬ、云々(以上超越的批判)。紹介者、內在的批判の中に多くの僻見を認める。(小泉)

●高橋誠一郎「マーカンチリズムの重金思想に就いて」（三田學會雜誌、二十四・五、昭和五・五月、頁一—一八）此論文は筆者の多年に亘る經濟古文書涉獵の一成果である。是に從へばマーカンチリストは金銀のみ獨り富を構成するものと考へた、と謂ふ見解は輕卒なる俗說にて、如何なるマーカンチリストと雖も、金銀を以て唯一の經濟財であると想像するが如きことはなかつたのみならず、彼等の打破せんとした舊思想の支持者たるブリオニストすら、決して斯る誤謬に陷るとはしなかつた。素よりマーカンチリストが金銀の獲得を以て外國貿易により取得し得べき唯一の經濟的利益と觀やうとしたとは異論の餘地なきも斯る見解は當時の經濟的事情より說明し得られる。卽ちマーカンチリストが極端に貿易の差額を重視して金銀の流入を求めたのは主として先づ通貨の缺乏より生じた困難より免れんが爲めであつた。マーカンチリズムの重金思想は金銀蓄積欲より發生せるものではなくて、貨幣經濟の發達を見たにも拘らず、信用組織が猶ほ不完全であつた時代の產物と解釋されねばならぬと謂ふのである。（小泉）

◆社會主義、共產主義及無政府主義

●ゼヴエス「社會主義、共產主義及び集產主義の語源に就て」（Zévaès. A.; De l'origine des mots: Socialisme, communisme, collectivisme. Rev. mondiale, 193, Sept. 1929, pp. 7-14）

近世社會主義の初期の建設者達は社會主義なる語を使はなかつた。オオエンの門人達は己をフウリエ主義者並にサン・シモン主義者と區別するため一八三六年に於ける自派のマンチエスタア大會で、この語が採用された事實を指摘してゐる。經濟學者レイボオは一八三五年に此語を鑄造したと主張してゐる。英語は一八三六年以來、彼が「兩世界評論」に寄稿した論文を集めて、一八四〇年に出版した著作の標題に現はれてゐる。ピエエル・ルルウは一八三二年に「社會主義」なる語を鑄造したと公言してゐる。それは同年の「百科評論」に見えてゐる。然るにガブリエル・ドゥヴィルは「種蒔人」の一八三一年十一月廿三日號に掲載された「加特力教と新教」と題する論文の中で此語を發見してゐる。此文はアレクサンドル・ヴィネエと言ふ社會主義反對の一批評家の筆に成つたものらしい。「社會主義者」なる語はフウリエの機關紙「產業的改革」の一八三二年四月十二日號に掲載されたサン・シモンの一門下シャルル・ペラランの論文に初めて現はれた。是等の二語は一八七八年以來佛蘭西翰林院編の辭典に依て正式に承認さるゝに至つた。「社會化する」といふ動詞はサン・シモンの機關紙「地球」の一八三一年六月廿九日號に初めて用ひられた。「社會化」といふ名詞は同誌の一八三一年十月七日號に初めて見えてゐる。「共產主義」なる語が初めて印刷物に現はれたのは一八三四年の事である。一八四〇年には「共產主義者」の宴會が廣告されてゐる。同年倫敦に亡命中の獨逸社會主義者は共產主義勞働者敎育俱樂部（共產主義者同盟の前身）を組織した。「共產主義」なる語は一八七八年佛蘭西翰林院の正式承認を得た。「集產主義」なる語は白耳義の社會主義哲學者コランに依て、一八四三年出版の同氏著「社會科學」の中に初めて用ひられた。此語は一八六八年、マルクスの共產主義に反對するためバクウニンに依て用ひられ、更に一八七六年以來ジュウル・ゲエドに依て佛國に通

俗化さるゝに到つた。(小泉)

●經營經濟學、商業、工業、商業政策及

工業政策

●藤村豊太郎「ドイツ造船トラストへの途—戰後ドイツ造船所に於る鐵鋼業と金融資本の進營」(經營經濟研究、第四册、昭和五・五月、頁一〇三—二〇六)一九二一年末に存在した全ドイツ造船所二九の中、九までは一九一八年以後の創設に屬し、其造船能力は歐洲大戰前の五十萬噸に對して七十萬噸を數へると見積られた。其後今日迄に二個の重要トラスト化の議が行はれ、殊に第二の合同化によつてドイツ造船能力の三〇%は整理破壞された。第一のトラスト化の試は大戰後インフレーションの時代、此マルクの下落とライン鐵業地帶の喪失とに基く原料不足によつて、ドイツ造船業が操短をすら餘儀なくされた時、原料供給者たる鐵鋼業よりの參加によつて行はれた。併し一九二二年頃に始まる不況の進行に連れてマルクの安定、ルールの占領、造船業の業態惡化等は、「物的價値」の支配を中心とする垂直的結合の基礎を毀ち、そのため鐵鋼業は造船業より去つてしまつた。第二のトラスト化は一九二五年造船不況が絶頂に達した後此危機を脱出する爲になされ、金融資本が其主動力となつた。其成果はブレーメンに於るデシマーグ(ドイツ造船造機會社)とハムブルグの造船業再編成となり、前者は最近も合同への進出を示してゐる。如上トラスト化の傾向はよし造船業の技術的社會的性質が阻止的勢力を有つにせよ、ドイツ海運、鐵鋼、銀行業の最近の集中化に作用され、米國に現はれた世界恐慌の接近するの日、一層決定的となるであらう。(上田)

●高橋龜吉「資本王國の財產調べ」(中央公論、四四・一〇——四五・三、昭和四・十月——五・三月連載)日本は其狹き資本主義經濟の中で諸他資本主義强國にも類少き程の大きい財閥、三井以下三菱、住友、安田、淺野、大倉、古河、川崎等を有つてゐる。之等は元は其一家固有の事業內に立籠り、其中に他の資本の介入を許さぬと同時に自らも他事業に侵出しなかつたが歐洲大戰以來此鎖國的經營法を破り廣く主として金融資本の力を通じて產業の分野を支配するに至つた。其發展は(一)固有の銀行業の擴大、(二)新金融業(信託、保險)の新設、(三)弱少資本家の金融業の併吞の形に於て行はれた。其中心たる(一)は財閥銀行吸收預金の强大なる事實によつて示され、三井三菱住友安田川崎の五大閥は預金合計卅六億圓、全國普通銀行の四割を占め、信託にては全國信託財產總計の七割以上も同じく占める。此金融資本は貸出や社債の形で間接に各種產業を支配する外、子會社制や株式交換により非常に大きな資本の產業を直接に支配する。今昭和三年財閥の自己資本とそれが其に預金其他を通じ支配する銀行會社資本見積額を示せば左の如くなる。

	自己資本(千圓)	支配下銀行會社資本見積額(千圓)
三井	七〇〇、〇〇〇	一、六四四、二一四
三菱	五〇〇、〇〇〇	七二一、九四三
住友	一五〇、〇〇〇	二四三、七〇七
安田	六〇、〇〇〇	三〇八、一一七
川崎	二〇、〇〇〇	一一五、〇六六
大倉	七〇、〇〇〇	一一九、三六五
古河	四〇、〇〇〇	九一、九三二

又別に斯く支配する直系傍系企業拂込資本高と財閥自らの投下資本との百分比は左の如

くなる。

三井	三菱	住友	安田
三四・二	三三・〇	一四・七	三四・三

而も特に三井に見得る所であるが、斯く支配する主要企業は重要産業の代表的なる者が多く、更に貸出による統制産業が右の數字に加算されてゐぬことを思合せれば、日本の財閥が如何に日本産業全體に決定的な勢力を所有してゐるかが明である。將來金融資本時代の一層成熟すると共に其支配力の割合は更に大を加ふべきことが豫想されてゐる。(上田)

●**有澤廣巳**　「**本邦紡績業における技術的合理化**」(改造、一二・七、昭和五年七月、頁五一—六七) 歐洲戰爭以來アジアに廣い市場を得た日本の關鍵工業紡績業は、綿絲の細番化、輸出の綿絲より綿布への轉換を行つたが、戰後、殊に大正末年以降、戰時以來の莫大な蓄積利潤の力を以て、産業合理化を行つた。(一)エネルギー經濟として昭和四年迄七年間に石炭消費の節約三分一、電力化の傾向(同四年全動力の九割に至つた)が見られ、(二)機械の改良は紡機ではハイ・ドラフト機の増加を見る程度だが(紡機は同時度數増加による能率増進が大きい)力織機では著しく、平均職工一人當臺數は大正十一—三年一・一〇位に比し最近は一・六〇に及ぶ。(三)經營單位の擴大は典型的工場が一萬錘より二—三萬錘に移行する傾向に見られ、(四)合理化の結果として、さあれ同時に矛盾として勞働能率の増加即勞働の強堅化は勞働の減少となつて現はれ、それは操短なき織布部門で特に著しい(大正十五年以來勞働者數二割を減ず)。斯る合理化の進展は當然市場獲得の白兵戰へと導き、印度綿布關稅引上に見らるゝ日英の抗爭の如き、即ち其現れである。(上田)

◆財政學

●**土屋喬雄**　「**德川幕府の財政狀態の變遷**」(經濟學論集、八・二、昭和五・二月、頁三一一三—三五四) 德川氏が統一的、全國的封建社會を二百六十餘年の永きに亙つて維持したことは史上比類なき事だが、德川幕府それ自身の財政はその間に繁榮と窮乏の幾浮沈をなした。これ等の事情を古き記錄や歷史家の所説に據いて鳥瞰的に記述するのが本論文である。幕府の始祖家康は儉約の勵行、鑛山の採掘、海外貿易、沒收、等の方法により巨富をなし、嗣子秀忠に黄金三百枚、銀子一萬三千貫を與へ、訓戒として、不常の國費は年額の入額を以て辨ずべく、力めて金を貯ふることを以てした。その理由は軍國の費用、不慮の大災における賑救、及び饑饉に對する救荒の用意であつた。且つ退隱十年間に二百萬兩を貯へた(現今の貨幣價値に換算すれば三億餘圓に上る)。以て幕府の財政的基礎の強固さを觀るべきであらう。三代家光は土木その他の事業に積極策を大膽に取つたが財政の健實を失はなかつた。五代綱吉に至つて消費の膨脹、金銀産額の減少、正貨の海外流出により財政收支の均衡を失ふに至り、その對策として其後幕府財政家の常套手段である貨幣改鑄、苛斂誅求を實行するに至つた。その後幕府各時代を通じて財政に變遷はあつたが明治維新前においては幕府の財政は破綻狀態に陷り、天下の支配權を保持するの力が既に無かつた。(阿部)

●**汐見三郎**　「**六大都市特に大阪市に於ける租稅負擔**」(經濟論叢、三〇・一、昭和五・一月、頁二二六—二四三)大正四年乃至昭和二年

における大阪東京名古屋京都神戸横濱の六大都市の直接税負擔を、主税局統計年報書及び大阪市財政要覽等の資料により統計的に調査せるもの。選擇せる直接國税は地租、所得税、營業税、營業收益税、鑛業税、資本營業税、取引所營業税、の七種であつて、他種の國税は調査には入らない。之等直接國税の負擔を歷史的に調査すれば大正四年において全國直接國税の四分の一を六大都市が負擔したが、昭和二年に至つて二分の一を負擔することゝなつた。六大都市の人口は以上同年において全國人口の一割ありしもの一割二分に上つた。又大阪市の直接國税負擔額は全國直接國税負擔の五分四厘から一割に上つた。次に六大都市の地方税負擔――國税附加税と地方特別税を合せ――を觀るに、之等六大都市の府縣税負擔は全國の府縣税に比較せば大正四年の七分二厘のもの昭和二年の九分七厘に上り、市税においては同期間に一割二分四厘から一割六分八厘に增加した。而して國税地方税を合して六大都市の直接税負擔は全國直接税に比して以上同期間に一割六分五厘から二割五分八厘に上つた。又直接税一人當り負擔は九圓二十四錢强から三十五圓三十一錢强に增加した。（東京横濱兩市の震災復興は、その後都市の税負擔の内容を多少變へたであらう）（阿部）

●**土方成美　「社會政策上より見たる我國の税制」**（社會政策時報、第一一二號、昭和五・一月、頁一―一三）統計的研究によつてわが國の消費税が、反社會的、即ち所得小なるものほど負擔が重きことを論證せるもの。まづわが國税收入に對する消費税收入の割合が極めて高きこと、しかもその消費税及び關税が二百圓未滿の所得階級につき所得額の小なるものほど税負擔の重きことを東京市家計調査統計原表（大正十五年九月一日乃至昭和二年八月三十一日）によつて立證した。一ヶ月所得百八十圓乃至二百圓の一世帶の租税（直接間接税を合して）は所得額の三分二厘七毛であるが、六十圓未滿のものにとつては五分一厘七毛と云ふ重税に當つてゐる。更に内國消費税中、家計上負擔の重いのは織物消費税、酒類税、及び砂糖消費税であるが、その中酒及び砂糖の課税は小所得者ほど著しい負擔の增加を示してゐる。煙草專賣の負擔も同樣の結果を統計上に表はしてゐる。是等の逆進的課税の整理と共に、筆者は相續税の税率引上を主張する。（阿部）

●**シユワルツ　「歐洲及び歐洲外主要國の財政」**（Schwarz, O. Finanzen der europäischen und der wichtigeren aussereuropäischen Staaten. Finanz-arch. 46(1).1929. S.225-449）今日より云へば少し資料は古いが、各國財政の比較研究については世界大戰前からの著名な學者。本論文は主要諸國の戰時戰後における財政及び財政關係の概論であつて一時中絶せし研究の回復である（但し英國は茲に論ぜられてゐない）。戰爭により各國經費は異常に膨脹せられ、其後その膨脹は阻止せられたが、戰前には歸らない。恩給、復舊費、賠償、國債元利償還、地方經費等は各國藏相の心配の種となつてゐる。イタリーはフアシスチ治下に於て、中央地方の經費、財務の刷新、地方財務の統一的監督、國債整理、利子引下、銀行券發行制限、俸給と物價の安定を得てゐる。之に反してバルカン諸邦、特にブルガリア、ギリシヤ及びトルコの財政は今尚ほ不安定の中に彷徨し、外債を仰いで收支の均衡を保つの狀態た。北歐諸邦は財務會計方面において幾多の好經

驗をなし、國債及び專賣の管理のために自治團體が設置せられ、官業の純損益が明示せられるに至つた。戰爭は一般に地方團體の活動と地方税を中央における集中的支配の下に置くの財政的必要を生じた。賠償問題は未決なれども解決はもう目に見えてゐる（筆者云ふ、賠償問題はヤング案成立と共に一先づ解決した）。國際聯盟は各國財政の建直しを助くるに有用なる働をなすであらう。（阿部）

●G・ウエッヂウツド「勞働豫算は何處まで行き得るや」（Wedgwood, J. How far can a labour budget go? The Political Quarterly, January 1930. pp. 26—37） 同氏は近年相續問題について、英國學界に認められし新進學者。本誌は主として自由主義の立場にある人々の雜誌であり、その創刊號における一論文である。勞働黨が政權を屢々握るに至つて英國の一部に累進税は資本を海外に流出せしむるであらうと云ふ聲がだん／＼強くなつて來たので、これを論評し、合せて自己の意見を公開したものである。氏は資本の逃出と資本家の逃出を區別しなければならぬと云ふ。他國より税の重い英國の富者は自から海外に逃げて税を回避し、國庫は税收入減に直面する事となるが、從來の調査では大した事なく、將來も財産の沒收に近くなるまでは其虞れはない。のみならず現に事業に從事する者は容易に國外に出でず、容易に出づるものは裸の有爲の青年か無爲の利子生活者だらうが、前者は却つて喜ぶべく、後者も亦國內に居ない方がいゝ連中だ。然らば資本の逃出はどうかと云ふに、英國の所得税法ではその資本家が國外に出ない限り、所得が何處から來ようが之を課税する。そして資本家たる人間の移出はそう簡單ではないのだ。だから租税が重いと云ふことが直ぐに資本の逃出を來さない事は事實だが、問題の要點として英國人の選擇に委される途は二つだ。富及び所得の不平等か若くは貧乏の平等だ。より多くの富を平等に總ての英國人が受くる事は出來ない。而して英國の生産力の發達を介せざる（勞働黨の）政策及び分配問題を看過して單に生産力の集中を念がける自由論者は共に誤謬である。生産力と分配を相反のものと考へるのが致命的なのだ。卽ち富者より徵した富を保健や教育に投じて將來の生産力の發達に貢するか、技術及び生産裝置の完備を計るかにある。たゞ國家慈善の擴張は如何に人道的の引力は有つてゐても勞働黨政綱としては最後に來べきものだ。——筆者の評論はこゝに差控へる。（阿部）

◆土地問題、農業經濟及び農業政策

●津曲藏之丞「朝鮮に於ける小作問題の發展過程」（京城帝大法文學會第一部論集第二册朝鮮經濟研究、昭和四・九月、頁二八七—四二八） 朝鮮に於て自作耕地は四九・七%、小作地は五〇・七%を占め、之を從業者より見ると地主が三・九%、自作一九・一%、自作兼小作三二・五%、小作四三・三%である。地主と小作農とは增加の傾向にあり、他は累年減少しつゝある。小作形態は物納が約九三%を占め金納は極く僅かであり、小作方法は分益法が約七〇%を占めて居るが漸次定額法に轉化する傾向を見る。地主小作人の關係も契約關係に轉化しつゝはあるが尙封建時代の收租官に似た舍音が身分的關係に基き不當な支配權を握つてゐる。小作爭議は大正十二年に一七六件參加人員九〇六〇人でその要求には小作權の取消及移動が最も多い。總括的に朝鮮の農業は未

だ封建的形態を脱しきれないが、資本主義への發展途上にある事を否定し得ない。(矢內原)

●**工屋大助「都鄙負擔に關する考察」**(農業經濟研究、六・二、昭和五・六月、頁一—二三)我が國農民の租稅負擔は德川幕府治下に於て大約四公六民の割合であつたが、明治維新の農民解放と其後の國民經濟の發展とにより著く輕減されたことは事實なるも、之を商工業者俸給生活者等のそれに比較すれば甚だ重い。例之國民所得に對する直接國稅の比率は全國平均九・五%で農村地方は都市に比し僅かに重くなつて居るに過ぎぬが、所得に對する府縣稅の比率は平均六・四%にして、農村地方は都市に比し二倍乃至三倍重く、市町村稅も同樣全國平均九・五%の二倍に達する農業地方が多い。又之を農業者、勞働者、給料生活者の生計調査の結果に徵しても、年收千二百圓以下の所得ある農業者は其の生活程度に於て低きにも拘らず負擔は却つて勞働者に對して二倍乃至三倍、給料生活者に對して一倍半乃至二倍重いのである。其の結果地主は租稅負擔の輕き都市に移住し、實際農村に作る自小作農の負擔を益々重荷せしむる傾向が認められる。(那須)

●**大阪府農業能率調査會報告**(昭和五・四月)稻作及び麥作の耕種作業全般に就き、最少の疲勞を以て最短時間に最大の效果を舉げ且該作業を出來得る限り愉快ならしむる標準を探求せるものである。我國稻作作業中最も多忙を極め、而も未だ優良なる機械の利用を見るに至らぬ田植作業に就ての研究に依れば、田植の能率は正條植をなす爲に用ふる器準繩の張り方如何に至大の關係を有し、田植定規の如き器具の使用は却つてその能率を低下する。尙植手二、三人乃至五人までを一組となすを利とし、それより多きは不利を來す。更に之を時間的に見て、該作業は極めて苦痛多き動作なるを以て、植付開始後三十分も經過すれば最初の能率の二割餘を減ずる、依つて一動作繼續時間を二十分間とするを可とし、且一區劃の面積も餘り大ならざるを心理上より見て有利とする。要するに田植の標準能率は一分間植付株數三十株、一人一日一反四畝步位を普通とするが、熟練の程度如何に依つては、一人一日最大約[illegible]畝步の差異が見られる。(那須)

●**東浦庄治「所謂產業合理化運動と農業」**(農業經濟研究、六・三、昭和五・七月、頁九一—三五) 現實の所謂產業合理化は、「資本の利益を指標とする資本家的經濟組織の合理化」で就中自由主義を放棄して大資本の獨占主義を徹底する點に重きを置く。農業は此の場合二つの重要點で合理化と接觸する。一は失業問題他は農家の販賣購買に關す。輕工業即ち資本組成の低級なる工業に富む我產業の合理化は人間勞働の排除を主とし、更に生產制限は此排除を强くする。然るに我工業は之等失業群は素より從來向都せる農村過剩人口を吸收する餘地なく、之等は歸農するか農村に留る。既に我總戶數對農家戶數の%は昭和元年、四八・七なりしも翌年には五二・二なり。然も我農業には耕地擴張餘地殆んどなく以つて農勞働は强化され賃銀は低下し一般勞働市場を脅す。他面此の强化により農生產物は增加し且つ其生產統制不可能の故に價格は下落す。此の下落は大資本家の農產物(例繭)の購買獨占に伴つて愈々强化す。他方肥料の如き大資本の勢力の下に價格下落が防止

されんとする。今農業の合理化が存せば農業の自衞運動で流通方面に於ける農業の「力」の強化に外ならない。(那須)

●トーマス「印度に於ける自小作地の優劣比較」(Thomas, P.J. The economic evidence of tenurial systems, Indian J. Econ. 10(2). Oct. 1929, pp. 247—258) 自作農地が小作農地よりも經濟上の結果良好なりとする一般論は、印度の土地立法を立案するに際し、檢討せられた。然るに豫備調査の結果は、充分に開發せられたる水田に於ては自作地、小作地の生産力が殆んど相違なきを明かにしたのである。但し園藝地に於ては其相違は著しきものあり、自作地は手入管理行屆き、價値多き果樹が滿植され居るに反して、小作地は地力を消耗する一年生作物が多く栽植されて居つた。マラバール沿岸(Malabar Coast)のカノム小作(kanom tenure)は十三年を一期として契約するものであら、小作人はカノムと稱する保證金を地主に預け入れて小作地を獲得するものであるが、此の小作期間は更新連續せらるゝもの多く、甚しきは其のまゝ數百年間繼續するものがある。契約解除に際しては小作人は此のカノム及彼れの行ひたる土地改良に對する賠償を受取るのである。カノム小作制度は水田耕作が多年行はれ居り大いなる土地改良をなす必要なき地方では、工合よく行はれる。然し水路や池沼や井戸などの工事の資金を要する場合には、カノム小作人は之に投資するを悦ばず、爲めに此の制度は餘りよき結果を示さない。園藝地に於ては前述せる如く成績最も不良である。その耕作は不充分であり、又土地改良賠償額決定の方法も妥當でないのである。此等地方の農生産増加は人口の壓力の爲めに原野を開墾せるに基いて居る。以上は凡て統計的調査に基けるものであるが、小作制度に内在する不利の事情は、カノム小作のごとき比較的優良なる小作制にも免れ得ざることを示し、其の改善の爲めに適當なる土地立法が最も效果あるべきを語つて居る。(那須)

●クレルク「和蘭に於ける海面干拓の大工事」(Clercq, D. de. The reclamation of Zuider Zee on Georgist lines. Land and Freedom, Nov.-Dec., 1939. pp. 171—173) 和蘭ツイデル海の干拓は四百年來の大問題であつたが、一九一八年に於て和蘭政府は遂に本事業遂行の一案を採用し、翌年より着手した。在來の諸案と異りて事業經營者は政府自身である。之によりて和蘭本國總面積の約一割に當る三十四萬町歩の土地を新たに得る見込みであるが、完成は一九五二年になるであらう。海水をポンプにて排除せる後六七年を經過すれば、干拓地は立派に農耕用に供し得る。農業委員會の推測によれば、該地小作料として一町歩につき一〇乃至一三ポンド(我が百圓乃至百三十圓)を徴し得べく、之を賣却するとせば土地代價は一町歩二五〇ポンド(二千五百圓)位であらう。一部の人は該干拓地が私人に賣却せられざることを希望して居る。(那須)

●リツテル「獨逸に於けるライ麥の生産過剩難」(Ritter, Kurt. Das Problem des Roggenpreises, Wirtschaftsdienst. 14, Nov. 29, 1929. S. 2069—2073) 獨逸に於てはライ麥が生産過剩にして價格低落せる爲め之につきての對策が種々論議せられて居る。直接に價格を左右するものとしては關税政策、農業倉庫等が考へられ、間接に價格に影響するものとしては食糧並びに飼料としての消費の増大が考

へられる。リッテル博士は此等諸點を論評せる後に、價格を左右する爲めには長期に亘る方策を採る必要ありとし、出來得べくんば農業會議所其他の農業團體の干渉によりて、生産制限並びに生産費節減を行うべきを示唆して居る。(那須)

●パイヤン「佛國に於ける小麥及び甜菜の生産過剰論」(Payen, Edouard, Une Crise de abondance. J. d. Écon. 94 Dec. 15, 1929, pp. 385—391) 佛國に於ける二大農産物たる小麥及び甜菜は、共に生産過剰によりて苦しむで居る。生産者の歎願に基きて同國政府が保護的手段を採つたのは、事態の緊急を認めたるに出づるものであるが、併し其の手段の細目を吟味すると、現狀の認識に於て不充分なることや、一層適切有效なる行政の必要なることが判明する。殊に國家の保護的手段は容易に撤廢の出來ぬものであり、又これに限度を附することが困難なのではないかと考へられる。(那須)

◆人口論及人口問題

●山中篤太郎「産業革命期日本人口變動の一考察」(社會政策時報、第一一七號、昭和五・六月、頁七二—九八、一一八號、頁一二一—一三八) 我國の産業革命は明治三十年を境として進捗したるものとし、其前後に於ける人口態樣の變化を觀察するに、人口自然增加率は明治八—三一年の二十五ケ年間年平均千に付一〇・五九に對し、明治三二—大正一二年の二十ケ年間年平均は一二・八七に增加した。人口の地方的分布の狀態は、密度粗なる地方の密度指數はこの前後に於て變化なく、密集地の中では東京大阪神奈川等の府縣は增加的傾向たるに對し北陸四國は急速なる低下を示す(人口の地方的集中)。次に人口の産業別分布に於て、農家戸數の全國總戸數に對する百分比は明治一九—三六年の十七年間年平均〇・四一%を減じたるに對し明治三六—大正七年の十六年間の減少は年平均〇・六二%である。工場職工數の全國總人口に對する比率は明治二五—三二年間に〇・二%、明治三二—四一年間に〇・四%の增加に對し、明治四一—大正七年には一・一%を增加した。(矢内原)

◆植民政策及び植民地事情

●矢内原忠雄「印度幣制の植民政策的意義」(國家學會雜誌四三・十、昭和四・十月、頁一—五七、十一、昭和四・十一月、頁五二—七五) 曾て久しく印度の維持したりし銀單本位制は英本國政府の強要によつたもので、其結果は印度の財政的困難、經濟的發達の阻害及英國の富强であつた。其後金爲替本位制の下に於て印度の金の大部分は倫敦に置かれ印度資金の倫敦に於ける放資が行はれたるに反し、印度では資本の蓄積、金融の發達は獎勵せられなかつた。又この制度は爲替の安定を主眼としたる爲め國内産業の需要を冷遇し、又之によるルーピー價値引上は英國商品の輸入を促進し且つ印度の財政を鞏固にし以て印度統治安定の效果を有した。一九二七年の金地金本位制の採用は大戰後の印度産業及國民運動の要求を幾分認めつゝも同時に英國の利益を擁護せんとする政策の産物である。一貫して印度の金貨本位制要求を拒否し來れる所に英國の植民政策の表れがある。(矢内原)

◎四方博「市場を通じて見たる朝鮮の經濟」(京城帝國大學法文學會第一部論集第二冊朝鮮經濟研究、昭和四・九月、頁一—二八六)

朝鮮の現狀を見るに一方に於ては取引所、常設店舖等近代的取引の形式が着々と擴つて行くに拘らず、舊來の直接交換的なる「市場」も亦その數に於ても取引高に於ても增大して居る。この矛盾は最近二十年間内地人支配の下に發展せる資本主義經濟と大多數の朝鮮人の依然たる素朴經濟との並行を反映するものである。（矢内原）

政治學及び法律學

◆政治學及法律學の一般理論

●田中耕太郎「サビニーに於ける國際主義と自然法思想」（山田博士還暦祝賀紀念論文集、昭和五・五月刊行、頁三一三—三六六）本稿の目的はサビニーの歷史法學者たる一面に幻惑せられ、彼の他の一面卽彼の國際法團體の思想を基礎づける自然法的一面を無視するの誤解を正すにある。彼のかゝる側面を明にする事は決して彼の歷史法學建設者としての偉大を汚すものではない。これあるが故に、彼は彼自身の亞流と異り、法の價値判斷を忘れず、總ての法の普遍的課題を人間性の道德的使命に求め得たのである。彼の斯る思想は一面彼を育んだ環境が自然法的趨勢にあつた事と他面基督教的宗教思想の圓熟とに求め得る。されど彼の思想は未だ民族の基礎を離れ得ず、民族を以て法の創造者となすが故に、民族に依る法の差別を強調し國際私法の不可缺を認めざるを得ぬに至つた憾がある。我々の今後の問題は、當時に於ける彼の卓見を認めると共に、全人類團體の法卽世界統一法の實現の途に向はねばならぬのである。（穗積）

●牧野英一「法律に於ける道德的規範」（法學志林、三十二・二—四、昭和五・二—四月）「民法の基本問題」の第四次の事業として、權利濫用の法理の適用に依つて如何に道德的規範が法律の上に作用し得るやにつき實證的展開を見んとする。先づ最初に法律に於ける救助義務について論ずるならば、判例による進化のみならず立法による特殊のものとして海難救助の義務が諸國の立法により、又「救援救助に關する條約」に於て法律的義務とされ、之と相對應する救助料の支拂についても船主のみならず荷主も危險團體を構成する故に其の義務者とされる事實に注目せねばならぬ。而してかゝる義務は海商の範圍に限らず航空の方面にも擴張せられ一般化しつつある。更に又家族の關係に於ても家族連帶の觀念は内緣の夫妻の如く法律的ならざる關係にまで推及される事實にも又充分な注意が拂はれねばならぬ。（穗積）

◆政治學及び政治問題

●バーンズ「ファッシズムについて」（Barnes, J. S. Fascism: a reply. Criterion, London, 34 (8) Oct. 1929, pp. 70–83）此論文はファッシズム研究國際本部の書記長たるバーンズが、ファッシズム竝びにボルシェヴィズムの兩方を批評した、自由主義的立場の評論家エリオットに答へたものである。ボルシェヴィズムはファッシズムと異なる、(1)その理論的目的卽ち共產主義の點に於いて、(2)その公然たる唯物主義に於いて、(3)その家族主義への態度に於いて。兩者の哲學とも決して新らしいものでない。ファッシズムは獨裁主義であるが階級の夫れでない。それは人民主權の觀念、卽ち國家主權の觀念に代はるものである。ファッシズムは信ずる、(1)團體善の促進の爲めには強大なる、一の頂點に極まる所の權威を必要とすること

と、(2)技術と社會的責任ある貴族主義の統治、(3)法の支配、(4)國家統制の下に於ける個人的責任心の涵養、(5)公民的及び宗教的教育の必要、(6)法への服從を保障する自由の一形態、(7)個人主義とは對比せらるゝ所の個人的人格の發展、(8)或る種の國際的權威と對比せらるべき、國家なる一の集團に對してのみ最高の忠順を致すべき必要性、等々。伊太利に於いては、これらの諸目的をサンヂカ的組織、保險、社會的扶助、敎育等を通うして實現すべく試みられてゐる。それは國際主義に反對しない、而して、若しファッシズムが他の國民によつても樹立されるなら、平和は自ら到來するであらう。(蠟山)

●ラウズ「マルクス主義について」(Rowse, A.L. Marxism: A reply. Criterion, London; 34(8). Oct. 1929, pp.84—88) 共產主義は國家を超越することを目標とし、而して階級無き社會を目掛けてゐる。ファシズムは國家の榮光化とその團體人格組織に於ける集團と階級の永久化とを意味する。その目的を見るに、共產主義は國際主義的であるが、ファッシズムは國民主義的である。彼等は獨裁主義を共通にするが、共產主義的獨裁は過渡時であつて、目的に對する手段である。ファッシスト國家は先きに造られ、その哲學はその國家を理由づける爲めに作られたものだ。共產主義の目的は、政治的並びに經濟的の平等を有する、階級無き社會である。物質的及び非物質的要素とも共に考慮すべきは勿論だ。個人は物質的及び精神的の多數の要因によつて動かされるが、大衆に就いて論ずる場合は、その有效に働いてゐる動機は人々が共通に有してゐる所の——彼等の活計糊口に關するものだ、唯物史觀は宿命的ではない、なんとなればそれは進歩なるものが物質的環境に依つて條件づけられることを認めてゐるからである。(蠟山)

◆公　法

●佐々木惣一「兵力量決定に於ける政府及び軍部の關係」(改造、一二・七、昭和五・七月、頁一〇四—一二六) 統帥作用が政府の輔弼外にあるは憲法施行後の慣習法によるので、事の性質、或は憲法十一條十二條からは何等示されず、又憲法施行前の慣行は直に五十五條を破るものとはならぬ。統帥作用は軍に向けられる意思作用で兵力量決定が是に該當せざるは明である。軍政作用たる國防計畫に付、軍令部は其條例一條により參畫する。此場合若し同二條三條による帷幄の輔弼が認められるとすれば、實際上軍令部長が有力に大權作用に參畫しながら議會に對しては國務大臣のみ責を負ひ、憲法の法理に反する。即ち軍務作用にても帷幄の輔弼は單に國務大臣の輔弼なき統帥作用に付てのみあり得る。勿論國防に關する事は軍令部長は意見を立てねばならぬが、其意見を如何に處理すべきかは別問題である。政府は法律上軍令部の意見を參考するを要するが共同意を得るの要はなく、從つて法律上は帷幄を通じての兩者の交渉はない。(美濃部)

●美濃部達吉「我が國法に於ける軍部と政府との關係」(改造、一二・六、昭和五・六月、頁一九—二六) 統帥權の獨立は内閣官制上の帷幄上奏、天皇に直隷する統帥權の[illegible]閥等を見れば、現實の國法として認めねばならぬ。併し從來の慣例で政府が帷幄の意向に從つてゐるのは、軍務大臣が軍部の一員たる結果であ

る。又軍令部條例は本來統帥のみに關すべき軍令で、統帥以外の事は定め得ない。帷幄上奏が御親裁を經ても、大元帥としての御意思が決せらるゝのみ。又軍の編制大權が統帥大權と異るは、裁判所の構成が司法權の範圍外であるのと同じである。更に一國の兵力量決定には、國際關係、國民の經濟力、國家の財政力を考ふるを要し、又假想敵國の想定を前提とするが宣戰講和が國務大臣の輔弼による事から當然、戰爭の手段たる兵力量も專ら、内閣の輔弼を要する。故に帷幄上奏にて決された國防計畫は、法律上内閣を拘束しない。尙内閣の統一性を維持し、實際上内閣を軍部より獨立せしめるには、陸相海相の文官制の採用が極めて必要である。(美濃部)

●高橋貫三　「條約の違憲性」(山田教授祝賀論文集、昭和五・五月單行、頁二三九―三〇九) 最近の世界的法律秩序建設の趨勢に伴ひ、之と國内法秩序との調和の必要が條約の違憲性の問題を重要ならしめる。之を米國に就て見るに聯邦憲法の條約締結權制限に關する一般理論としては、三種の說が成り立ち得るが、結局條約も法律同樣憲法に違反し得ず、違憲なるものは裁判所に於て無效を宣言せらるべきものとするを正しいと思ふ。偖、實質上、憲法における條約締結權に對する制限如何を考ふるに、問題となるは、(一)條約竝に條約實施のための立法が、個人權の保障に抵觸する場合(二)州權と抵觸する場合(三)第四權たる條約締結權の行使が、三權分立の原則に反する場合(四)立法權と抵觸する各種の場合(五)司法權の規定に抵觸すべき場合(六)稀ではあるが、行政權と抵觸する如き場合等である。以上の場合を通觀するに、法律的には條約締結權に對する憲法の覊束は極めて少く裁判所も亦條約に就て違憲を宣言した例はない。唯一の保障と云ふべきは、上院による政治的性質のもの・みである。(美濃部)

●蠟山政道　「滿鐵附屬地の行政問題」(國際法外交雜誌二九・五―六號、昭和五・五―六月) 第三回太平洋會議は滿洲問題に就て幾多究明に値する問題を未了の儘將來の研究に委ねて居る。滿鐵附屬地の行政問題は卽其の一である。この問題を觀察する爲には滿洲全體に於ける日本の行政施設を概觀しその一分子としての附屬地を考へねばならぬ。又附屬地の性質に就ても國際法、國際條約のみから判定し得ない。更に國際條約締結の際に於ける日本政府の意圖が如何なるものであつたにせよ、過去二十五年の歷史的事實は附屬地を關東州租借地の延長と考へて居るものと見ねばならぬ。滿鐵の管理に屬する附屬地の地方經營もその行政主體は滿鐵ではなく、警察遞信軍事行政と等しく日本政府であり、凡て統治的な行政權の活動である。從來の如く、國際條約のみに基き、附屬地の警察行政を治外法權の延長と考へ、或は附屬地を支那内地の專管居留地と同一視し、居留地の將來の運命を直ちに附屬地に適用せんと考ふるは決して問題を圓滿に解決する所以ではない。(美濃部)

●宇賀田順三　「地方制改革の重點」(國家學會雜誌、四三・一二、昭和四・一二月、四四・三、五、昭和五・三、五月) 嘗て行政區劃上の一單位としてのみ考へられて居た地方自治團體が今や經濟的團體として重大な意義を有するに至り、一方自治權擴大の要求と、他方國家の鞏固な統一の要求との相抗爭する姿を見る。この相矛盾せる二の傾向が最近地方制の改革を實行したバイエルンに如何に現はれて居る

か。近時獨逸に於て經濟的發展と共に國家が統一的色彩を强めつゝあり、全地方を劃一的に統制し得る統一的地方制の必要は自治權の制限縮小となつて現れ、一方自治團體が今日治能力を發揮し得る爲め、從來の如く議決、執行、代表の諸機關が互に對立し相抗爭することを止め、一の地方會議制の採用等新に地方團體の組織を根本的に變更することゝなつた。結局バイエルンの地方制は進歩的條文の中に多くの反動的內容を包藏する。この矛盾は地方團體が經濟的活動を爲すに當りその正常にして敏活な活動を制限されることにより暴露さるべく、經濟的狀態が來るべき地方制改正の重點の推移を促す機因となるべきことを既に示して居る。(美濃部)

◆私　法

●**宮本英雄**　**「英法に於ける禁反言法理の發展過程」**(法學論叢、二十三・二、昭和五・二月、頁一—二七)　禁反言法理は、不動產法について普通法裁判所に於て萠芽を見出した。ゲルマン人の國王神聖視の觀念は、國王の印章によつて確保せられた文書は神聖であり眞實であり爭ふべからざるものであるとの考に至つた。そしてこの考は次第に捺印證書に及び、更には一定の方式に依る行爲にまで推及せられた。而して衡平法の裁判所は土地關係以外に擴大適用し其れを又一七六二年にマンスフィールドが普通法に逆輸入し一般原則が成立つた。元來大陸諸國に於ける法律行爲に關する意思主義が資本主義の發展に從ひ表示主義に代られるに至つた。英國に於ては法律行爲理論は發達して居なかつたが、經濟の進歩に伴ひ取引の必要に推されて、禁反言法理が之に先だつ事五十年に確立された。これ恰も英國資本主義が大陸資本主義に先だつた期間である。此事實の觀察は我々に或る暗示を與へる。(穗積)

◆國際法及國際政治

●**松原一雄**　**「國際法より見たるボイコット」**(法學志林、三二・六、昭和五・六月、頁三一—五二)　新しい國際的現象としてのボイコットは、國家又は聯盟が其統制の下に行ふものと私人又は私的團體が不規則無規律に行ふものとに區別せられる。並に問題となるは後者のみである。之はトルコ、バルカン、殊に支那に於て屢々行はれ、强國の主張に對する弱國の對抗手段として新しい方法形式であることが世界の注目を惹いた。此の種のボイコットの正否を國際法の觀點より考察するに、學者或は國際法上の復仇として之を是認せんとするも、今日復仇は國家の行ふものに限り、私人又は私團體は其權能を有しない。國際的制裁或は國策手段としてのボイコットは之を私人の手に委することは不都合且不可能である。故に此の種の行爲は、法律的には全般的若しくは部分的に或は國際法違反を成し或は條約違反を成すものであり、政治的には全く剛暴なる國家否認の行爲であると言ふの外はない。當該國家は之を否認し鎭壓すべく、然らざればボイコット從事者自身國家を否認し政府を否定するものである。(高柳)

●**今中次麿**　**「國家主權と國際法—並に國際法と自然法」**(國際法外交雜誌、二九・二、昭和五・二月、頁一—四〇)　自然法と國際法との歷史的關係は國際法が果して自然法を離れて存し得るかの疑問を起さしめるが、國際法の本質は團體規範であり團體の合目的性の表

現たる點に存する。國家主權の本質は、國家の主體性(統一性)の最高性と絶對性である。國際團體も亦主體性を有するけれども、團體自らは其構成者たる國家に對して支配權を持たないから、それは主權的ではあり得ない。國際法の執行者は當事國家自身である。併し國際法上の國家の執行力は本質的に國内法上の執行力と異り、一致せる構成員の共同目的の達成を主眼とするのであるから、構成員たる國家の主體性に主權的特性を與へ得ない。故に主權の觀念は今日の國際法關係に於ては之を適用すべき場所を與へられない。即ちそれは國家の國内法上の觀念である。超國家的國家の成立せる時初めて國際主權が完全に現れ來るであらう。(高柳)

●**横田喜三郎**　**「倫敦會議と潜水艦使用法規」**(國際法外交雜誌、二九・六、昭和五・七月、頁一―二三)　潜水艦使用法規に關する倫敦海軍條約第四編第二二條は大體に於て華盛頓條約第一條及第二條(效力未發生)の復活である。之に依て次の二規則が國際法上確立せる規則として受諾された。(一)潜水艦は水上艦と同一の國際法上の規則に從ふべきこと。(二)商船の破壊は、原則として乘客及船員を安全の場所に移した後でなければ行ひ得ないこと。此の規定と華盛頓條約とを比較檢討すれば、(一)商船に對する潜水艦の使用を全く禁止する主義を捨て水上艦と同一に取扱ふ主義を採つたのは、規定成立の實際的必要及國際法理論より妥當である。(二)華盛頓條約の如く簡單に規定すれば疑問を起し易く、詳細に規定するには軍縮會議の性質上不適當なる拿捕と攻撃に關する規定を削除して、(三)破壊に就き特に詳細の規定を設け、華盛頓條約の破壊規定を闡明し且補充する所あるは、正當なる改良である。國際法發達に貢獻する所大であらう。(高柳)

●**岡康哉**　**「個人の國際法上の地位に就て」**(法學論叢、二三・六、昭和五・六月、頁五七―九四)　國際法を單なる國家間の權利義務の關係のみを規定する法として狹く定義することなく、廣く國家其他の法主體を以て構成せらる、國際法團體に妥當する法規と解すれば、個人が國際法主體たることは國際法の本質に違反するものではない。現實に於ても世界大戰後の國際生活の變遷に從ひ、國際法が世界法に向つて進むと共に、國家を離れての個人の國際法的公民權の承認の傾向を認め得るのであるが、尙嚴密なる現行實證法上の問題としては、個人の主體性の承認は未だ例外的關係たるに止る。即ち僅にヴェルサイユ平和條約に基く國際混合仲裁裁判所への出訴權に於て個人個有の國際法的權利を承認し、或は個有の國際法よりより下位なる法段階にあるべき一種の國際法たる國際團體法を前提して、此の法が自ら其服從者として發見する個人が、此の法の關する限りに於て國際法主體たることを是認し得るに過ぎぬ。(高柳)

●**杉村陽太郎**　**「倫敦會議と日英米」**(國際知識、十・六、昭和五・六月、頁一八―二五)　倫敦會議の成果を先づ技術的に一瞥すれば、寧ろそれは壽府會議が不成功に終りたるを祝し得る程の收穫であつた。之は軍縮を欲する世界の氣運が年と共に加はりしに基く。次に、政治的に考察すれば(一)軍縮協定成立には、一面には社會不安、共産主義擡頭等の危險を防ぎ、人類の幸福、文明の進歩に好結果を及ぼし、(二)英米の均等は事實上は重要ならず、唯英國の國際的地位は特に自治領との關係上考慮すべ

きであり、(三)三國協定は太平洋及支那問題の前途に安定を與へ、極東に於ける日本の地位を益々鞏固ならしめ、更に(四)國際聯盟の大軍縮會議の開催を可能ならしめる。三國協定を可能ならしめた重要の一事項として英國が其傳統的海上優越權の完全なる抛棄を決意した事を擧げ、之を會議の成功に對する一貢獻として認むべきである。而して此方針は現時の英國に於て解決すべき急務として緊要の諸問題を持つ政治家の進路としては當然であり、國民亦英米建艦競爭の阻止及兩國の接近に滿足する。經濟上社會上數多の難問題を持つ日本の立場も之に類似するものがある。日米間の均衡に就ての問題は、實質上には極東問題に對する米國の發言權に關するのであるが、之とて最近の米支關係の變遷に鑑れば、最早米國が日本と對角線的に主張を異にすることは無いと云へよう。米國は、其の巨富を以てすれば其の艦隊を二三倍することは易い。乍然米國民の健全なる分子の間には建國以來の民主々義的良心は今尚强く流れて、其政界の正義の厳に喩へることが出來る。其外交に於ても、時に若人の無經驗に基く行動にも比すべきものが認められ、又ロンドン會議に對する態度も必しも單純ではなかつたらうが、米國の中心の動機は青年國の政治家と輿論の比較的純潔な理想主義に在ると云ふべきである。此事實は、歐亞の老大國が動もすれば理解し得ざる點であるが、之を認識することは世界の安全保障の爲に肝要である。(高木)

●**蠟山政道「太平洋關係の根本問題」**(外交時報、五三・一、昭和五・一月、頁一〇三—一一一) 世界大戰を轉機として國際關係の重心は歐洲大陸より太平洋に推移した。太平洋を舞臺として三個の對立が展開する、第一は新に英米の對立を中心とするに至れる歐米列强の抗爭關係であり、第二は列强と植民地民族との關係、及び自治領の地位の問題、更に又諸國と支那との對立關係であり、第三はソヴイエット・ロシアの聯邦と他國家との對立であつて、其の何れもの對立に關與して居るのが我が日本である。之等對立を貫く中心的形相を成すものに就ては人種的對立觀、經濟的對立觀、文明の相違による對立觀等諸說あるも、余は文明の差異に因るとせず寧ろ文明の發達段階に於て不均衡の存することが對立を形成すると考へる。既に此の對立は根本的な深さを有し、其の上に、人々の心理的狀態は、事態の根本關係を見究める冷靜さを保たしめない。太平洋諸問題の解決困難なる理由は茲に存する。對立が事實上解消し行く樣な事態の發達と、それを促進する人類の心理の展開とが、太平洋問題解決の鍵である。(高木)

●**ベアード「平和への展望」**(Beard, Charles A.: Prospects for peace; Harpers Mag., 945(158), Feb. 1929, pp. 320—330) 歐洲時局の種々なる變遷は當に將來の平和に對する希望を高めるであらう。農業貴族政治の衰微は、世界大戰に對して大なる責を負へる軍國主義的要素を脆弱ならしめた。同樣に非難せらるべき國家的資本主義はより多く平和に傾くべき國際的資本主義によつて其の地位を奪はれつゝある。產業統制が銀行家の下に移り彼等の勢力下に國際カルテルが組織せられ、投資財團によつて產業の所有權が分布し國際間の貸付により、各國の政府及通貨が安定すると共に、如何なる政府に取つても自國民の資本を保護の目的物として識別することが困難となる。此他ボルシェヴィズムの脅威、國際

聯盟等も亦平和の促進に與つて力あるものである。(高木)

◆國際事情

●アシユビイ「リージョナル政府に就いて」(Ashby, Edgar. Regional government; or, the next step in public administration. Journal of Public Administration, 7(4) Oct. 1929, pp.305—376) これは一九二九年度のホールデーン懸賞論文(ホールデン(Haldane)は英國行政協會の第一次會長であつたが彼れの死後同協會に於いて彼の記念の爲めに設けられたものである—蠟山註) に入賞せるもの。一九二九年の「地方行政法」は單にその端緒に過ぎぬ。次ぎの一歩はリージョナル政府でなければならぬ。今や國土は更らに廣汎な行政地域に對して用意が熟してゐる。自治を求める要求は既にウエールスにもスコットランドにも始まつてゐる。金融と産業の指示してゐる道に政府組織も從はねばならぬ。道路建設、警察、病院施設、都市計畫、電氣、課税及び内地航路等に於ける日常經驗はより廣き地域の功利と不可避とを示してゐる。新たなる集團は、諸都市とその附近の農村地域とを結合して、四箇若しくは五箇のリージョンに分たれねばならぬ。都邑及び農村地域の相互の利益の爲めに縣(The County Council)は「都邑の中に取り入れられ」ねばならぬ。斯くの如き企畫の下に於いては、中央政府は地方的立法の煩雜から解放され、より公正なる租税負擔の賦課が行はれ、都市計畫は、殊に幹線道路に關して、好結果を來すべく行はれるであらう。「田園に歸れ」の運動は可能となるであらう、なぜなら隣接の田園地域に於ける市營住宅や運動場が人々を牽き付けるであらうから。乘客專門の交通機關は改善されよう。國會に對する選擧區の再分配も適當な基礎を得るに至るであらう。(蠟山)

●ハウスホーフエル「ロシヤと農業制度」(Haushofer, Heinz Konrad. Agrarprobleme im agrar-politischen Licht.: Zeitschrift für Geopolitik 6(7). Jul. 1929, S.567—568) ソヴエート・ロシアは、西部並びに中部ヨーロッパに於ける農業制度の存續に反對する明白なる攻勢に於いて、中部ヨーロッパに於いてはその攻撃が殆んど絶望視されてゐる諸問題を過激なる方法に於いて取扱ふことに堪えられる。その攻撃たるや、大都市が農村に對して及ぼしつゝある影響が次第に增大しつゝあることの最も重要なる徴表であるが、しかもロシアに於いてはその攻撃は經濟的領域に於いてさへ政治的中央集權化の假借なき適用と結合してゐるのである。(蠟山)

社會學

●與江勝美「徳川時代に於ける大名の階級的内婚」(社會學雜誌、第六四號、第六七號、昭和四・八月、及十一月、頁七三—八三、及六二—七八) 徳川時代に於ける社會階級は(一)皇族、公家、(二)武士、(三)農民、(四)町人、(五)賤民に大別さる。當時の支配階級は武士であり、武士の最高に位せる徳川將軍家は強固なる中央集權的封建制度を確立し、主從關係の維持、階級差別の嚴守を強制した。從つて將軍の支配下にある諸大名は其の婚姻に於て必ず幕府の許可を請ふ必要があり、又幕府は相互に身分相應の者と通婚すべき事を武士に向つて命令した。著者は諸種の古系圖に據り、舊時代の約前半までに行はれた大名

階級の內婚狀態を明にした。卽ち第一に將軍家代々の夫人は殆んど皆皇室或は高位の公家階級出身である事。次に將軍は親戚關係の大名の娘を多數に養女とし之を外樣大名に嫁せしめた事。第三に德川諸分家の通婚も同一階級內にて行はれ、夫人には公家の娘が多く、大名、公家以外の下層階級の女は一名も無い事を詳細に調査研究した。(戶田)

●磯場保則「講社考」(社會學雜誌、六九號、昭和五・一月、頁一―二七)宗敎敎團の典型である宗派、叢林、講社を社會學的に硏究して宗敎敎團の社會學的本質を攻明しようとする、本論文は之が爲めに講社を主題とする一試論である。氏は講社を歷史的・發生的に觀て、祈願を旨とする祈願的講社、祈願を主として賴母子を從とする目的を持つ祈願的賴母子講社、賴母子を主とし、祈願を從たる目的とする賴母子的祈願講社の三類に分ち、講社本來の目的は宗敎的祈願を行事する結社であるが講員は之が爲めに一定の金錢納入を爲すのである事を說き、又講社の組織を、共通信仰を持つ講員の結社、宗敎體驗者の指導による講員の結社、個人或は團體の宗敎的目的を助成する爲めの講員の結社等に分つて說明し、以上をそれぞれ史料に徵驗して論證を進めてゐる。最後に敎團を例へばマキィバア、ギィゼ、ギッデングスの如く目的社會と見做すか或はテンニィースの如く共同社會と見るかに就いては氏は二元論的觀方を採つてゐるが、講社の社會學的本性に就いても亦二元論的立場を脫してゐない。(戶田)

●ゲック「獨逸に於ける社會心理學」(Geck, L. H. Ad Social psychology in Germany. II. Sociol. & Soc. Research. 14(2). 1929, pp. 105—129)獨逸に於ける社會心理學界の情勢を論述したものである。彼に據ると社會心理學とは群集內に起る心理的現象を取り扱ひ、之等の現象を記述し、分類し、分析する學問である。社會心理學者は社會心理的現象が起る構成要素、社會心理過程、群集內部の個人間の相互關係を硏究する。彼はオイレンブルク、ジンメル、ホルツアプエル、ブラウン、シュトルテンベルク、フィシャー、ヘルパッハ、ラープ、ヘゼ、ビューラア、シュネール、ゾーン、ゲック、クルューゲル等の獨逸の社會心理學說を敍述し批判してゐる。尙之等の外に社會心理學と見られ得る分野、例へばアルフレット・アドラアの個人心理學に關する著作、兒童の社會心理的硏究、精神病理學に關する論作、之等も亦社會心理學の範域と見られる事を述べてゐる。(戶田)

●ギンスバーグ「社會階級間の交流」(Ginsberg, Morris. Interchange between social classes.—Econ. J. 156(39) 1929, pp. 554—565)英國に於ける階級間の移動を測定する爲めに、著者は敎員、學生、役人、商店員、賃銀勞働者に質問紙を配布し、父系及び母系の三代前までの職業を記する事を依賴した。分類上第一階級を專門家、雇傭主とし、第二階級を俸給を貰つてゐる被雇傭者とし、第三階級を賃銀勞働者とした。二八四四の回答中、父を第三階級に有する者が一二パーセント、父の父を第三階級に有する者が一八パーセント程あつたに反して、第三階級で第一階級に屬する父を有する者は〇・六パーセントに過ぎない。階級の向上的傾向を示してゐる。此結果は之

な英國五都市に於けるボーレーの調査と直ちに比較は出來ぬが大體に於て一致すると述べてゐる。(戸田)

●**クラフト**　**「自然現象としての社會現象」**(Kraft, Julius. Soziale Erscheinungen als Naturerscheinungen—Kölner Vierteljahrsch. f. Soziol. 8(3). 1930, pp.273—280)　社會に關する諸研究が完全な科學的研究となる爲めには、先づ經驗的資料を正確に使用せねばならぬ事は敢て論ずる迄もない、次に最も重要な問題は社會的諸研究が據つて樹てられる基準たる前提原理を明確に定めて置かねばならぬ事である。此點に就いて最大難事の一は、凡そ社會現象を自然現象と見做すとすれば、如何なる意味に於て又如何なる範圍に亘つて斯く見做し得るかを決定する事に存る、又社會現象を自然現象として取り扱ふにしてもそれが唯物論に穽入らないように取り扱ふには如何にすべきか、斯ふした前提原理の問題を研究した論文である。(戸田)

●**ゾムバルト**　**「會得」**(Sombart, W. Das Verstehen. Schr. d. Deutschen Gesellsch. f. Soziol. 6(1). 1929. S. 238—247)　社會學は文化科學である、從つて自然科學とは異つた方法を持つてゐる。即ち社會學は「會得」的方法を持つてゐる。自然科學の認識は外部からの認識であるが社會學のそれは内部からの認識であり、内在的會得の方法に據ると。而して彼は此會得に三つの類型、(一)意味的會得 Sinnverstehen. (二)事態的會得 Sachverstehen. (三)心的會得 Seelverstehen. を區域して名々を詳らかに說明してゐる。(戸田)

文化人類學

●**田澤金吾、矢島恭介**　**「旅順老鐵山麓に於ける漢代塼墓」**(考古學雜誌、二十・二、五、昭和五・二月、五月、頁七一—一〇〇、三〇六—三二八)　東亞考古學會及關東廳博物館の事業として、昨年十月發掘せる南滿洲旅順に近き老鐵山西麓なる、南山裡、漢代塼墓群の發掘調査豫報である。**南山裡には塼墓が群集するが、今回發掘したのは六基である。同地の塼墓はレースの層を**以て蔽はれ、地中深く沒し、墳丘の如き外部施設が明瞭でない。槨室に方形單室にして羨門開くものと、略同形の二室を前後に並べ、兩室に通路を設け、前室前方に羨門の開くものとがある。共に羨門が右方に偏してゐる。室の床、壁悉く塼を以て作り、天井は略持送式穹窿狀をなす。羨門並に通路はアーチ即ち拱を用ゐてゐる。塼を彩色又は紋様によつて裝飾する。單室槨に於ては室の右方或は奥壁前面に副葬品を置き、左方に二棺乃至三棺を納めたと思はれる。發見遺物は泉貨・武器・裝身具・漆器及び陶土器等である。是等の墳墓群は墳の構造及出土品より察すれば、後漢代の營造と推定され、一昨秋東亞考古學會が發掘せる漢代土城なる牧羊城址と密接なる關係あることは明かである。(松村)

●**森本六爾**　**「關東有角石器の考古學的位置」**(考古學、一・一、昭和五・一月、頁一—七)　從來關東地方にのみ發見されたる有角石斧を、平型銅劍を模倣して製作せしものなりと見做し、石劍の一形式として、新たに有角石劍なる名稱を與へた。石劍を六形式に分ち、その原型となるべき銅劍諸形式の推移及分布と對照し、有角石劍が六形式内に於て、分布

の最東、推移の末端なることを説き、青銅器文化東漸過程に於ける一現象を示すものとする。而して有角式石劍自身の有する諸樣式に於て、全體としては、形が劍に近き（殊に銅を有する）もの程古く、劍を離れたもの程新らしいと考へて居るのである。（松村）

●**シアツフアー「太平洋諸島に關する管見」**（Schaffer, F. Betrachtungen über das pazifische Gebiet. Mitteil. d. Geog. Gesellsch. in Wien, 72(1—2), 1929, S. 81—108）太平洋諸島に於ける最初の居住者は、恐らくネグロイド、メラネジア諸族であつた。それは後に南東亞細亞から來たポリネジアンによつて驅逐され、殆んど絶滅に瀕した。島嶼種族の内にネグロイドの性質が痕跡的に存し、且つイースター・アイランドの遺跡にその型式と風習とを止めてゐる。ポリネジアンの移動は二千年前の昔から初まつた。強い放浪性が移動しつゝある彼等をして、人口稀薄なりし、ニユー・ギニー及オーストラリヤに居住することを避つたであらう。そして彼等はずつと北方の路、恐らくフイリツピンを通しての道をとつたものらしい。舟艇構造や、タロー芋で作つた食糧は、長期の航海を可能ならしめた。彼等は故地で有つてゐた文化を喪失して了つた。現在金屬、弓、催醉飲料、機織、土器を知らない。相當肉を利用し得る場所、丁度ニユー・ギニーの一部に於ける樣な所でも人肉喰食は發達しなかつた。太洋洲は三千五百萬の人口を容れ得るのに八十八萬しか居らず、ニユー・ジーランドは二千五百萬を入れ得るのに百三十萬しか居ない。布哇諸島は是等熱帶諸島の内で有利な發展を遂げ得ることを示してゐる。太平洋諸島の言語、歴史、民族學は未だ全く明かでない。言語學者は南方及西方の亞細亞諸言語に關して深き智識を必要とする。ホノルヽのビシヨプ博物館の發案で太平洋の國々は太平洋諸島に關する歴史及民族學的諸材料の記錄に協力しつゝある。（松村）

●**ハンメルマン「サイベリア舊石器時代遺跡發見木炭の研究」**（Hammermann, A. Kohlenreste aus den Lagerfeuern des Sibirischen Paläolithikums, Eiszeit u. Urgesch. 5(1—2), (1928, S. 39—45) ハンメルマンのとつた方法は水滴中に落した木炭の削片を、顯微鏡下にて檢した。此方法は舊石器時代遺跡から發見した木炭から、四種の樹木を同定し得た。かんば（Betula）、やなぎ（Salix）、まつ（Pinus sylvestris）及からまつ？（Larix?）。之等は西比利亞に於ける舊石器時代植物群に伴ふと見當づけられてゐる樹木である。（松村）

歴史

◆東洋史

●**佐中壯「五行の氣に就いて」**（史學雜誌、四一・二、昭和五・一月、頁一〇一—一二六）書經の洪範によると、五行は人生必須の財で、水火木金土の五の elements である。然るに戰國時代の末期に出來た呂氏春秋に見えるものは、五行の氣といふ考へになつてゐる。此の氣は精氣で清い氣である。物に對しては本原的なるものである。其故氣と財との關係は精粗、純不純の對立に外ならない。而して此の財は古代印度の五大說の Shitabhūtāni に類し、氣は Tanmatra に類し、又兩者の關係は Mischungstheorie に酷似してゐる。さて此の

呂氏春秋其の他戰國時代の書に見える五行の氣といふ考へは、鄒衍若くは其の學派の思想によるものであつて、彼の思想の骨子を爲してゐる五行思想、世界觀、神遷思想の三を閲して見ると、何れも印度の Brahmana の說に能く一致し單に之を暗合と見る譯にゆかなくなる。かく考へると Brahmana 思想の支那への輸入は、支那本來の財のみであつたに對して、新に氣といふ思想を導き出すに至つた直接の動因であつた、と考へるものである。(池內)

●**市村瓚次郎**　**「魏志倭人傳の解釋—特に生口に就いて」**(史學雜誌、四一・三、昭和五・三月、頁七八—九三) 魏志倭人傳に見える生口といふ語に就いては、從來留學生であるとか、漁者であるとか、或は捕虜であるとかいふ解釋が行はれてゐたが、市村氏は前漢以降の支那の史籍を閲した結果、生口には時代によつて三義ありとせられた。即ち第一は未開民族の意味であるとし、又戰爭の結果捕虜にされた未開の蠻族は大槪奴隸として使役されたから、こゝに第二の奴隸の意味が發生した。三國時代から、南北朝、唐、宋の時代にかけて、多く此の意に解された。第三は動物の意味を有するが、之は奴隸が動物同樣に酷使せられ輕蔑せられた結果で、元代以後の事と思はれる。後漢や三國時代の倭國が、生口を支那に獻じたのは、勿論支那から觀て、未開の人種であり、又奴婢其他の賤業に使役される爲であつた。更に氏は倭人傳中に見える持衰を生口と同一視し、海路の安全を得た報酬として、其の Ch'ih-shuai (sorcerer) に財物を與へたのであると解釋してゐる。(池內)

●**志田不動麿**　**「支那に於ける化粧の源流」**(史學雜誌、四〇・九、昭和四・九月、頁四七—九八)・この研究は A. Stein や Le Coq や P. Pelliot や我が大谷伯等によつて、支那の西邊から發見された、唐代美人畫の化粧の文獻學的解釋である。支那婦人の化粧法は貴族政治の完成と相俟つて具つた。從つて唐の時代を以て其の絕頂とする。唐に至る迄の歷朝の文化形態は、支那古來の陰陽、五行思想を經とし、西域、南海を經由して來た、印度や Iran の文化を緯として、織り成されたものであつた。化粧の原料として用ひられた Lead Powder, Safflower, Indigo は後者に屬するものであり、又化粧樣式上の額黃(前額の髮の生え際に黃色を塗布する法)や、或は五色を用ゐることは前者に屬するものであり、其中特に前額に貼り附け、或は畫かれた花鈿(紅色の華形文樣)は、印度の Hinduism に由來するもので、原は妖邪を拂ふ目的のものであつた。之は少くとも紀元四世紀の初めには、支那の廣東地方に傳つてゐたと考へられる。之等の化粧法は宋代まで行はれ、又其の影響する所は、記錄や繪畫の示す所だけでも、高句麗や、日本や、契丹等に及んでゐる。(池內)

●**池內宏**　**「新羅人の武士的精神について」**(史學雜誌、四〇・八、昭和四・八月、頁二四—三八) 新羅の興隆は、紀元六世紀の初めに在位した智證王に始まる。其の孫眞興王は六世紀中頃の君主であるが、先づ高句麗を伐つて南北兩漢江の流域を取り、加羅聯邦中の安羅を討滅して、日本の勢力を半島外に驅逐し去つた。然るに新羅はかの高句麗征伐の際、百濟の援助を得たのであつたが、後間もなく百

濟の領有に歸した舊高句麗領をも占有してしまつた。新羅に對する他の二國の怨みは之から深まつた。其の爲、此の後紀元七世紀の中頃、二國が唐に滅される迄、約一世紀の間、新羅は二國の挾擊に遭ひ、國步艱難を極めた。此一百年の間を能く耐へぬいて、遂に半島の主人と爲ることの出來たのは、一に當時の新羅人の武士的精神の賜物である。之は上は大貴族から、下は一般下級の武士や、佛門にある僧侶まで、然りであつた。幾多の悲壯なる武勇譚は、二國の壓迫を蒙りながら、祖國を擁護せねばならなかつた所の、當時の新羅の政治的狀態が然らしめたもので、從つて半島統一後の、唐の文化を攝取し佛敎亦頗る流行した下代の新羅人には、此の愛國的な勇敢で廉恥を尙ぶ武士的精神が消え失せてゐたのも故なきでない。(池内)

◆西　洋　史

●バートン「スメル人の出處」 (Barton, George A. Whence came the Sumerians? J. Amer. Oriental Soc. 49(3). Sept. 1929, pp. 263―268) スメル人は歷史の黎明以前よりバビロニヤに居た。彼等がそこへ來た時は、もはや餘程開けた農業民族であつた。その文化がエラムのそれと全然別個のものであつたことは今日明らかである。その言語はエラム人と異つて膠着的であり、又その陶器の型はスサで發見されたものとは全然違ふし、其の文字はエラムから起つたとは思へない象形系統のものである。彼等が南方の暖國から、波斯灣を經て、バビロニヤに入つたと信ずべき理由は種々ある。その衣服の如きもそれを示す。然し印度から來たとは思はれない。それはハラパ(Harappa)から出た印章の文字と、印度シンドのモヘンジヨ・ダロ(Mohenjo-daro)から出た文字とは殆んど類似がないのでも分る。東アラビヤのオマン(Oman)から來たと見るのが至當だらう。バクストン(Buxton)がキシ(Kish)から發掘した骸骨と、キース(Keith)がウル(Ur)で得たものとは、記錄の傍證するものがないから、決定的材料とはならぬ。最も可能的な假說はスメルは古石器時代の長頭(dolichocephalic)人種の子孫で、ハム・セム人種の中心から、遠く離れた山中に殘存して、全然特異の言語を發達させたと見ることであらう。(村川)

●カヴエイニヤツク「ミルチヤデスとツキヂデス」 (Cavaignac, E. Miltiade et Thucydide. Rev. de Philol. de Litt. et d'Hist. Anciennes 3(3). 1929, pp. 281-285) ミルチヤデスとダリウスのスキチヤ遠征との關係に就いてのヘロドツスの記載から見ると、ミルチヤデスは此の遠征の時一時逐ひ出された時、トラキヤの王オロルス(Olorus)に取り入つて、其の女のヘゲシピレ(Hegesipyle)と婚し、後イオニヤ叛亂のためにトラキヤとペルシヤ帝國との聯絡の斷たれたとき、ペルシヤに對する反動に際して、其の所有地を回復したといふ結論に達する。ミルチヤデスの什孫で歷史家なるツキヂデスの所有せる鑛山は彼の財產の一部で、キモンの勝利の後に取り還したものである。ツキヂデスの母ヘゲシピレが、ミルチヤデスの女とメレシヤス(Melesias)の子ツキヂデスとの間の子とすれば、ツキヂデスは其の父オロルスの關係でミルチヤデス

の後であるばかりでなく、其の母の方からも、やはりミルチヤデスの血を享けて居るのである。(村川)

●バアバア 「十七世紀に於ける和蘭と英國の商船」(Barbour, Violet. Dutch and English merchant shipping in the seventeenth century. Econ. Hist. Rev. 2(2) Jan. 1930, pp. 261—290)英蘭の商人は戰鬪資格を有する船を造ることを奬勵し、商船と中型軍艦との間に、殆んど區別を設けなかつた。積載量を主として造つた和蘭の平底船は、商品の嵩張つた貿易では、英蘭船を驅逐した。英蘭國産の檣は短くて、小船の外造られないのでバルト海から材木が英蘭に輸入された。それで利息の高いので英蘭の經費は一層嵩んだ。造船所の能率的組織や、廉い原料や、能率の多い勞働や機械や、松材使用などで、和蘭は廉價に造船した。英蘭船の方が頑丈ではあつたが、和蘭のは浮力に於て優つた。和蘭船は資本が安價で、船員の少いので經費が安上りした。船員は給料は高く、熟練で又清潔であつた。和蘭船の運賃は英蘭船に比して三分の一乃至二分の一方安かつた。それで和蘭船は航海條例當時の英蘭でさへ多く用ひられた。(村川)

●ロドキイ 「一八四〇年の平和維持聯盟案」(Rodkey, Frederik S. Suggestions during the crisis of 1840 for a "league" to preserve peace. Amer. Hist. Rev. 35(2). Jan. 1930, pp. 308—316)一八四〇年の危機に際し、メッテルニヒ公及オーストリヤ駐劄英國大使ボーヴエール(Beauvale)は歐洲に於ける平和維持の爲の聯盟の建設を計畫した。その計畫をボーヴエールは英國外務省に提出したが、英國外務大臣パーマーストン卿は之に賛成しなかつたので、他の諸國へは提出せられずに、そのままに放棄されたやうである。(ボーヴエールの書いた報告一通、欄外に註記せる二種の聯盟案、及びオーストリヤのフイケルモン(Fiquelmont)の執筆せる一書類が引用されて居る。)(村川)

●スウエイン 「ポツダム會議『傳説』の起原」(Swain, Joseph Ward. Origins of Potsdam Council "legend."—Current Hist. 31(4), Jan. 1930, pp. 733—740)世界大戰の末期に於ける聯合國側の宣傳の重要な題目の一であつたポツダム會議說は虛構に係ることが今や明にされた。同會議は一九一四年七月五日開かれ、そこで中歐諸國が開戰を決したといふのである。處が、それは最初一九一七年七月二十八日のロンドン・タイムスに現はれ、政治家は一時盛に之を利用した。この話は獨逸の社會主義者達が英國に傳へたもので、彼等はリヒノウスキー公(Prince Lichnowsky)の『予のロンドン使命』と題する私的覺書から此話を得た。公は一九一四年八月伯林に歸つてから、ゴシップを蒐めて書いたものである。同樣のゴシップは駐土獨逸大使ワンゲンハイム男(von Wangenheim)の耳にも入り、男は一九一四年八月米國大使モルゲンタウ (Morgenthau) に話したが、大使は當時之を信じなかつたやうであるが、三年後に之をニュー・ヨークのワールド紙に發表し、次に單行本『大使モルゲンタウの話』に載せたものである。(村川)



メキシカリ行

前田河廣一郎

1

俺達は、ビル・ヘーウッドを同志とする。その半ゼネレーションもおくれた後輩である。

爭議を應援する。武裝した反動團と鬪ふ。命令一下、俺達は百マイルを突破して來る。間斷なき旅と鬪爭が俺達の生活の日常である。

そのことを、仲間は、輕るく「ちよつと散歩して來る」と云ふ。

その實、常人は、辛らい、苦しむ、何處でどんなに虐められるか知れたもんぢやない。

しかし、いつか、俺達は、支部へ歸へつて來る。

——さういふ同志と、久し振りで握手すると、涙がこみ上げて來る。挨拶は粗

つぽいが、裏にはしんみの愛情がこもつてる。歸へつた當座は、その男は、集團のフレッシュな刺戟となる。鬪爭がない。ぼんやり何かの起るのを待つてゐる。事務所のまはりを、ポッケットへ双手を突込んでぶら〳〵してゐる。――この時は、俺達にとつて最も危險な時だ。さうだらう、仕合をしない拳鬪手を考へて見るがいゝ。戰爭のない兵隊を思ひ出して見ろ。軍馬だつて、退窟だと破目を蹴やぶる。

恐るいことには、俺達が神樣でも惡魔でもなくて人間であることだ。どんなに親しい仲でも、毎日だと飽きが來る。ハンガリーの監獄で、夫婦の革命家がからだを縛ばりつけられて投獄され、半年たつたら、一生の敵になつたといふ話もある。いくらソリダリチーを信ずる同志であつても、鼻づらをしよつちう突き合はしてゐたら互におくも出りやおらも、投げすやうになる。俺達のヘーウッドと、今は墮落したモイヤアとの喧嘩もさうだ。運動の安定期に來たのだ。その時は、自然の法則に從つて、運動の精神がぐつと低下してる。個人主義化する。互にデマを飛ばす。嫉妬を起こす。敵を忘れて親しい仲間を仇敵のやうに糺彈する。個人感情の聯絡運動がはじまる。運動の統一でなくて、缺點の統一運動が起こる。そこに內訌――分裂もやりかねない。そして、互に正義の喧嘩だと思つてゐながら、その實、みにくい資本主義そのものの腐蝕作用が蔓延してゐることを忘れる。

おまけに、加州の四月は暑いのだ。

だから、遠くから歸へつて來た仲間は、手のしびれるほど握手される。握手の次ぎに出盛りには只も同然の、眠氣を覺ますやうな果物の山が持ち運ばれる。オレンヂ、タンジエリン、メロン、何でも豐富だ。果物の香りは、さぞ仲間も腹を減らして來ただらうと想像させる。さう思ふだけで澤山だ。からりとした平和が、事務所に甦つて來る。――毎日、同じ駄洒落や、脂臭いパイプに飽き飽きしてる連中も、ハッキリ眼を開いて、自分達の立場を見直ほす。運動の輪廓が、ずうんと地平線に浮き揚がつて來る。新しい勇氣が、俺達の拳をぎゆッと固めさせる。そのうちに、又指命が來る。――

これは、俺達アイ・ダブリユウ・ダブリユウ黨員の強みだ。

合同以後、俺達は、あまりにも幹部間の分裂をくりかへし過ぎた。勞働者農民へむけての運動が、まるで本部の一番大きい椅子を奪ひ合ふための運動のやうに見えた。この傾向は不健全だつた。一度、シャーマン一派を卻け、次に、デ・レオンと別かれ——もうそれで澤山だつた。だから、仲間は、一定の黨員としての義務以外には、ひどく個人生活をまで拘束しないで、活動範圍を廣く取つた。互に信頼し得ない奴等は同志ぢやない。善い意味での自由行動も、ある程度までゆるされた。だからこそ、俺達は、生ぬるいS・Pや裏切り者のA・L・Lなんかのやれないことを斷行して來たんだ。いつも大きい敵を向ふへ廻はした。

しかし、仲間の裏切りは別だ。そいつは、知らされる。何かの形で、集團の統制に抑へられる。親しいながらも、そこに鐵則はあつた。

一年中、支部の指令を受けたと思ふと、鐵砲玉をきめこむ奴もある。それでも安心だ。その男のレポートは、きつと誰かの口を藉りて、事務所へ傳はる。あるひは、聯絡部が中間にゐて、生きた電報になる。時には、人ッ子一人乘つてゐない貨物列車の壁に、簡單なレポートだけが戾つて來る。全然歸へつて來ない連中も、さほど遠方まで捜がしに出る必要はない。途中で、傳令に行き當つた最初の同志が、その男が寢返へりを打つたか、殺ろされたかを逐一知らせてくれる。——かうして、ピンカートン探偵會社や州警察が嗅ぎつける前に、事務所は、特定の運動やストライキが勝つか、長びくか、暴動になるかをちやんと豫知することが出來たのだ。資本の攻勢にも、迅速なマヌーヴァが出來た。

今から半ケ月前に、コロラド州デンヴアーを釋放されたと聞いた、同志パット・オ・キーフィに、勿論、汽車賃なんて贅澤なもの、ある筈はないのだ。しかし、俺達の仲間は、スカートが長くて川の渡れない娘ッ子ぢやない。その十五日目の今日、オ・キーフイは、ロス・アンゼルスで俺達とオレンヂを剝きながら話してゐる。大半は、例の貨物列車の臭い特等席

で過ごして來たにちがひない。だが、こいつ、複雑な西部大陸の縱横の鐵道系統を知つてゐないと、一生かゝつたつて、ロス・アンゼルスへ着きッこはないのだ。――果して、オ・キーフィは、デンヴアーからピーブロへ拔けて、ニュー・メキシコからサンタ・フエ線で來れるところまで來て、あとはてくつたといふことだ。來れるところまで來たといふことは途中の給水所で見つかつて、ブレーキ・マンとファイア・マンにひつぱたかれ、アリゾナの沙漠の端ツ子で貨物列車から突き墜されたといふことである。

支部に躍り込んだ刹那、俺達は、顔中丹靴（タン・シユース）の靴墨を塗つたやうな、短かい、赤髭が生えてゐる怪物を見た。それが、碧い眼を瞬つて、名を名乘るまではアイルランド人パット・オ・キーフィであることがわからなかつた。しかし、彼れの云ふことを聽くがいゝ。

『俺ァ赤旗を見て來たんだぞ！』

歸へつて來る奴は、出て行つた時よりもみんな型が大きくなり、骨が硬くなつてる。たゞ、この潑剌とした男一疋の、ヅボンの胴廻りが、いやにだぶついてゐるのを見ると、俺達はへんな氣になる。途中の苦勞を思ひ浮べる。

事務的な、氣ぜわしい、ポイントからポイントについての書記からの質問がある。わかつてることだ。たゞ辻褄を合はせるだけの話である。二人とも笑つてる。

元來、パット・オ・キーフィは、ユータの鉛鑛へ、雑役に忍び込んで一と仕事するところであつたが、掴まつて、例の『禁止法令（インジャンクション）』でテンヴアに三月も喰らひ、ストライキは生ま燻しの石炭みたいに、ぷすッと煙をあげただけで、地方辯官と暴力團の靴の鋲に蹂躙（ふみにじ）られてしまつたのだ。――その失敗の埋め合はせかは知らぬが、彼は隙さへあれば、同じことを云ひつゞけた。

『俺ァ、赤旗を見て來たんだぞ！』

二人の男が、殆ど同時に揶揄ひ出した。
『鐵道のジャンクションでかい？——』
『お前こそ、赤旗みたいな顔ぢやねえか？』
オ・キーフィは、巨きい奴と格鬪する時のやうに、天井を向いて、テーブルを敲いた。
『本物さ。ほんたうの赤旗を——俺はアリゾナで見て來たんだ！』
新聞を讀んでゐた男は、ばさりと音を立てゝ、綴り込みを枠へ掛けた。
書記のコマトスは、たつた一つの事務用のロール・トップ・デスクへ、からりとペンを投つた。
俺達は、ボロ船のやうに軋しむ椅子を、思ひ思ひにまん中のテーブルへ集めた。
『面白い。話して見ろ、パット。——アリゾナと云ひァ沙漠だ。』
『ふむ、その沙漠よ。——』
かう云ひさして、パットは俄かに青年らしい含羞を、碧い眼のどこかに漂はせた。

2

これからが、パット・オ・キーフィの妙な冒險である。……
こゝに、沙漠を横ぎる何等の準備をもしてない一人の勞働者が、アリゾナはメキシコ寄りのユマから、加州へ抜けようとして、動かぬ波のやうな砂丘の斷續を、せつかちに上つたり下つたりしてゐる光景を想像して見よう。それが、同志オ・キーフィである。彼は、鐵道線路から離れて歩るいた。
くわッと太陽の炒りつける、ぼうばくとした白砂の海がひろがつてゐる。

かうなると、人間の視力は弱いものだ。最初のうちは、蒼い澄んだ空だと思つてゐたものが、次第にうす黒い鋼鐵色に變つて、やがては、無暗に熱い月夜の中をさまよつてゐるやうな錯覺を起こしてゐる。

その荒原の涯しない地平線に、何十年もかゝつて、やつと頭をもたげる物のやうに、不思議な點が見えはじめて、だんだん醜い怪物の姿に膨れ上がつた。大仙人掌(サボテン)の列である。近づくと、四丈も五丈もの肢體を躍らせた、刺(とげ)だらけな黝ろい植物の肉が、ところ〴〵裂傷して、毒々しい液汁を流してゐる。鹽のやうな砂の中から、にょつきり生えたこの植物を見てゐると、まるで、誰かゞ不氣味な惡戯から、この怪物をわざとそこへ突立てゝ行つたあとのやうな感じがする。凄味はその滑稽さにあつた。さらに、その林の蔭から何が躍り出すかを、思はせるところにあつた。——空腹で、水が欲しさに半氣狂ひになりながら、そこを逃げるやうに急いだであらうところの、パット・オ・キーフィの心理狀態には、この場合、觸れないことにしよう。

ヒーラ河とリオ・コロラドの交流した川床(アロヨ)の近くで、俺達のオ・キーフィは、突然、行手に不思議な都會を見た。——ぎら〳〵金色に光つた穹窿(ドーム)がある。眞つ白い近代的なビルディングがある、尖つた塔が突き出てゐる、さわやかな綠がその間を埋めてゐる。そして、そのところどころに、眼の冴えるやうな赤旗が、へんぽんと閃いてゐた。

これは、あの地方としては、あり得ないことではない。蜃氣樓(ミラージ)だ。つまり、こそりとの風もない沙漠の中で、ちがつた氣層の魔術から、太陽の光線に屈曲が生じて、遠くの景色が地平線に投げられるのだといふ。山の中の自動車道で、時折、行手に蒼い湖の現はれるものなどもそれだ。オ・キーフィは、それに向つて進んだ。

にしても、この一九二〇年代のアメリカに、ソヴエート・ロシアのやうな、大びらな赤旗が、どの都會にも翻へされてゐて、かくもアリゾナの沙漠に反映し、人もあらうに、俺達の間の直接行動論者であるオ・キーフィにそれを見せようとは！

『すこし、臭い話だな。』

『苦役でもしてたんぢやないか？』

この抗議に對して、オ・キーフイは、些かけしきばんだ。自分の眼を信ずることに於て、オ・キーフイは決して俺達の誰にも劣るわけではない。しかも、この男の眼は、深いアイルランドの海の色だ。

『俺が、釣り損ねた魚の法螺でも吹いてると思ふのかい？』

そこで、俺達も、この上しちくどく同志の言葉を疑ふのも、ちよつと變なものだと考へた。――それに、話はそこで終るのではないらしい。

大きいフライ・パンへ叩きつけられた雑魚のやうな恰好で、オ・キーフイは、その日の夕方、やつとカリフオルニアとメキシコ共和國との國境線へ辿り着いたといふのである。そこから、セントラル、ブローレー、サルトンなどの驛を過ぎてインペリアル・ヴアレーの『死海』をめぐり、ロス・アンゼルスまではほんの一とのしである。

ところが、カレキシコのステーシヨンには、相憎と特別列車が着いてゐなかつた。特別列車とは、野菜か、木材か、家畜か、アイ・ダブリユウ・ダブリユウを運ぶ列車のことである。それも、俺達の間では、この列車へはうまくこつそり飛び乗るべきものときまつてゐて、決して鐵道會社の時間表で、無駄な生命を棄てるやうに、これ見よがしに乗るべきものとはされてゐないのだ。

オ・キーフイは、貨車の着驛するまで、何處かで休息しようと考へた。

カレキシコの單調な大通りを歩いてゐると、酔どれのアメリカン・レツジヨンの一團が何やら、彼等だけの他愛もない冗談に大口をあいてわめきながらやつて來るのに出會はした。これは、日本で云へば、在郷軍人團の組織した反動團體である。鬪志のあるアイ・ダブリユウ・ダブリユウ黨員に、血の氣を見させようとすれば、こいつらの一人に靴を踏ませるに

限ぎる。この軍服を着たゴロツキどもは、世界大戰以來、何萬人といふ俺達へ石を投げ、家宅捜索をし、國境追放をし、鐵砲玉を浴せたのだ。この尻尾のない獣どもは金で買はれる。

さて、オ・キーフイは、いやといふほど足を踏まれた。足を踏まれた時に、踏まれた方が怒らずに、踏んだ方が怒るといふことは、ユーモアに富んだオ・キーフイにも思ひつかぬことだつた。そこで、オ・キーフイは踏まれた靴で、何か吸鳴つてゐる對手の内股を蹴り上げた。

『おい、こいつあ、ヴオーブレイだ！』

オ・キーフイの腕へしなだれかかつたほかの奴が叫んだ。『ヴオーブレイ』とは、世界の階級鬪爭を知らぬ奴等の、俺達に對する唯一の吼え方だ。

『アイ・ダブの乞食か？』

三人の奴等が、鐵のやうに引返へして來た。

オ・キーフイは、ピーブロでピストルを賣り拂つたことを後悔した。しかし、ビル・ヘーウッド以來、俺達の仲間には身を護る傳統がある。

『この犬ツころめ！』

彼は、奥歯を噛みしめて、第一の襲撃者を張り飛ばした。對手は卑怯にもつるんで來た。騎士道だの、喧嘩は一人と一人だのといふヤクザな道理は、アイ・ダブリユウ・ダブリユウを取り圍む時の奴等のフアッシズムには敎へてない。セントラリアでウエスレー・エヴアレストを殺ろしたのも、このフアッショだ。

『私刑だ！　私刑だ！』

一人が喉輪を攻め立てて、かう叫んだ。

オ・キーフイは、噛んだ、蹴つた、毆ぐつた、そして、最後に、一人のカーキー服のからだを躍り超えると、馬のやうに駈け出した。アイ・ダブリユウ・ダブリユウは、足の闘士を選ぶ。……どこまで走つたか、自分でも知らないうちに、オ・キーフイは、赤煉瓦の聳えた暗ら闇に、ギターの音に合はして、多數のメキシコ人の合唱してゐる音を聽いてゐた。蚊がうるさく責めたてて、暑苦しい煉瓦の下には、鼻もちのならぬ排泄物の臭ひがした。

歌の聞える方へ忍び足で行くと、むつとした煙砂のほとぼりが顏を煽つて、建物の角から廣場の中へ出てゐた。棕櫚の葉をわけてその邊を窺ふと、がらんとした倉庫のやうな建物に、四つ五つの電燈の光りが見えた。つまり、その建物には、それだけの窓しかなかつたのである。

「メキシカリの守備隊だよ。俺は、夢中で國境を突破して、兵舍の裏手へ逃げこんでゐたんだ。――そのバラツクにあ、カランザの軍隊が、食卓の上で賽子を飛ばしてゐやがつた。一と組の奴等あ、二階の窓から蛙のやうな聲で唄あ歌つてやがる。出たり入つたり、廣場へ寢轉んだり、鐵砲もろくすつぽう磨かないやうな怠け者が、――あれでも、三百人はゐたかな。俺は、そつとそこを拔け出して、表へ廻り、番兵の奴にカレキシコへの道を訊ねた。グリーザ奴、それでも、不意に闇から出られたもんで、吃驚して鐵砲を俺に向けたつけ。しかし、實彈が籠つてるかどうかはわかつたもんぢあねえ。どうせ、メキシカリの賭博町を保護するにあ人數が多過ぎるし、革命にぶつかるにあ、見てくれがヨタ過ぎる。俺あ、平氣で、鐵砲を撥ねあげて、覺束ないデーロオで云つた。――冗談するない、メリケンだよ、グリンコオだ、カレキシコは何處だ？――それで、睡氣がさめたらしく、番兵の野郎は、白い齒を見せて、右と左へ指を廻はした。」

そこから、オ・キーフイは逆に道をとつた。

米領カレキシコの町から、鄰邦メキシコ共和國の町メキシカリへ行くには、その間、わづかに二間幅の灌漑水の溝を越せばいいのである。溝には橋がある。橋の袂にアメリカの稅關が立つてゐるが、それは、東洋人の入國と、酒の密輸入を

取締るだけである。

アメリカ町のカレキシコが、學校と教會と、煙草屋と八百屋の立ち並んだ、無暗にだだつ廣い道徳的な町であるとすれば、橋一つ越したメキシカリは、年中謝肉祭のやうに色ランプを灯した、肉慾地獄である。――だらしのないメキシコ兵が、シガーレツトをふかし、ギターを奏いてひやかして歩くと、棕櫚の葉陰から、半裸體のスペイン娘が拍を鳴らしたてる。酒場は、指一本で押せる酸戸の中に、醉漢とジヤツヅと、あらん限りのリキユールの香りを籠めてゐる。支那人のファン・タンがあれば、大びらな猶太人の賭博宿殿が聳えてゐる。それらを縫うて、南支那の華僑が阿片臭い料理店を經營してゐる。――誰にも領けない理由から、二十年もこの方、絶對禁酒の状態にあつたオンペリアル・ヴアレーと、一間幅の溝を越したこの町は、こんな反動的な對照を描いてゐる。

そこで、アリゾナ以來の渇きを覺えたオ・キーフイは、最も入り易いやうな酒場をえらんで、孔のあいてゐない方のポケツトから、最後の銀貨をバーの上へ投り出した。その時、冒險なオ・キーフイの身の上には、もう一つの不思議が起つたのである。彼は云ふ。

「……泡を一杯受取つて、隅つこのテーブルへ腰掛けた。一と口やつて、ぐいとカウンターの奥を見る。そこに、ボローネでも、サワー・クラウトでも、ハツト・ドツグでも――何でもロハでぱくつくものがあると睨みア安心だ。かういふ場合の型はきまつてゐるアね。俺も、ひよいと起ち上つた。すると、足元にぴかりとしたよ。次のテーブルにア、遊び人らしい猶太人やメツクシンや、取り交ぜて四五人の奴等が、ポーカアに夢中になつてやがつた。そいつらの誰かが落つことしたのかも知らない。俺は、卸座に、ビールの泡を光る物の上へぶちまけた。ついでにまづさうに床へ唾を吐いて、唇を袖で拭つた。フリー・ランチなんかそつちのけにして、俺は手から滑べり落した帽子の泡を拭き拭き、一目散にその酒場をおん出たものよ。……」

といふ話の要點は、つまり、その晩、見るのも嫌になるほど支那料理を詰め込ませた上に、翌る朝のロス・アンゼルス特急に——人間の乗る平凡な汽車に——オ・キーフィを、大手を振つて乗らせ、支部へ着くと、いきなり滯つた黨費の半年ぶりを支拂はせたといふ、素晴らしい十弗金貨(イーグル)を、その酒場で收得したといふことなのだ。

ところで、その晩、パット・オ・キーフィはどこへ宿泊したか?——俺達は、彼が、支那料理屋で、三日ぶりでめしらしいものを詰めこんだあとは、暫く闇の中に彼を見失はねばならない。この沙漠の中の『モナコ』であるメキシカリには、いくらも、オ・キーフィのやうな氣の早い男の飛びこむ場所があつたし、それに、アメリカン・レッジヨンの待ち伏せをする惧れは、充分にあつたと見做さねばならない。

しかし、翌る朝のオ・キーフィは、もつと活動的であり、かつ好奇心に富んでゐた。彼は、この國境線上のやくざな町を一とまはりすると、そこにある淫賣窟、賭博場、支那料理屋、酒場、自動車の止まる廣場、闘牛場などのほかにも、このアメリカ資本主義によつて半植民地化された町の政治的中樞ともいふべき、州知事アルバレラ・ゴンザレスの邸宅を發見したのであつた。

それは、大通りの盡きるところを少し横へ入つて、そこだけ並木を持つた道になつてゐる『アラメダ』を通つて、鐵柵の門まで歩いて行けば、灰色な、角度の多い、スペイン風な、大邸宅として誰にも見える物々しい宮殿なのである。その鐵門には、チヨコレートで拵へたやうな二人の番兵が立つてゐて、靜かな朝を州知事閣下が、夜更けの賭博とバツカデリ酒のお蔭で、さわやかな眠りを貪つて居られるのを立ち番してゐるのである。オ・キーフィは、何氣なく建物の奥行きを眼で計つて、道に迷つたふりをして、あたふたと元へ引返へした。

それから、彼はかう云ふのである。

『——いいか諸君、俺の足元に十弗金貨が轉ろがつてたほど、メキシカリにはアメリカの馬鹿野郎共の金が落ちるんだ。

聞く由によると、州知事のゴンザレス、あいつは、賭場、酒場、淫賣、鬪牛、兩替、猶太人、支那人、メキシコ人――一切合財のあがりから百萬長者になつてやがるんだそうだ。皆も知つてるだろ、あのメキシカリだけは、本國政府に楯をついて、今ぢや半獨立國同樣になつてるんだ。俺にア、あんな腐つた土地へ落ちる金が惜しくてしようがねえよ。しかもアメリカ政府は外國のことなので、あすこに起る事件についちア空ピストル一發撃つことも出來ない立ち場にあるのさ。メキシカリへ落ちる金が、同志諸君には惜しくはないか？　カランザ政府は、現在、エラ・クルーツやソノラ地方の革命で頭にバンデリラを刺された鬪牛のやうに狼狽へてやがるんだ。あんなメキシコ兵の四百や五百は、俺達が束になつてかかりあ、わけもなく蹴つ飛ばせるぢやあないか？――おまけにこの俺の生きた眼は、メキシカリの十哩東で、赤い旗の立つた蜃氣樓(ミラージ)を見て來たんだ！……」

……これで、半年ぶりでひよつくり歸つて來た・オキーフイの話は終る。

日本人であり、平黨員の俺には、それからこの報告ともつかぬ報告が、幹部の間にどういふ風に討議されたかを、暫く耳にする機會を持たなかつた。

俺は俺で、二臺の古風な手フート式第五十號の印刷器を踏んで、町の日本人達の季節のジョッブ・プリンテングをやるのに忙殺されてゐた。それに、或る日、ひよつくり訪ねて來た、古い同志の加賀見が、尠からず彼れの新しい理論で、停止の狀態にあつた俺の思想を鞭打つたといふこともある。

加賀見は、もとソシアリスト・レエバア・パアテーに屬してゐた男だが、シカゴからニュー・ヨークへかけて、左翼運動の地下層を潛行してゐるうちに、いつの間にかボルシエヴィキの支持者になつてゐた。俺は、反抗しながらも、彼れの信ずるレニンズムなるものにずるずる引き摺られて行く自分を發見した。時偶來るほかの同志と同じやうに、この男も、暫く俺のところに泊ることになつた。彼が、わざわざ東部(イースト)から、俺のウオルチエスター・ストリートの店まで訪ねて來た理由

は、單なる友情の表現からでもなく、このカリフォルニアに例年の果物摘みの季節がやつて來たことにあつたらしい。それがわかつたのは、或る晩、店の手傳人の早川を歸へしたあとで、何やらくしやくしやと書いた原稿を持ち出して、紙代は出すから活字を拾はせてくれと賴んだことに原因してゐる。その時手にとつて原稿は讀まなかつたが、友人が夜通しかかつて組み上げたといふゲラに眼を通すと、ざつとこんな一聯のアジテーションが眼についた。

『人種問題の裏に、どんなカラクリが潛んでるか？

何故、諸君日本人は、アメリカから排斥されるか？

植民地ボスの請負制度を撤廢しろ！

ランチ從業員組合を、直ちに組織して、勇敢に植民地のブルジョアと闘へ！』

これらのミダシの下には、それぞれわかりやすい註釋がついてゐて、最後に大きいスローガンが、このビラをかう結んでゐた。

『シベリア出兵に反對しろ』

一度アナーキストの山佐なども働きかけて失敗したのであるが、カリフォルニアには、八萬人からの日本人が居り、そのうちの五萬近くは、ロス・アンゼルスを中心にした邦人社會を構成してゐる。

山佐の時代には、まだこの社會が、地方開拓熱にかられてゐて、成功主義の氣運が盛んであつたためにものにならなかつたのであるが、今勞働市場の狀態や、賃銀の値下げ、土地賃貸借問題などの起つてゐる最中とて、三萬人からの移動勞働者の間には、爭議の客觀的狀勢が、多かれ尠かれ、成熟して居るものと見做されてよからう。

『まあ、紙代だけ損するつもりでやつて見るさ。——この界隈の日本人ときたら、日露戰爭この方のことは、てんで御存じないといふ手合ばかりだからな。』

或る晩、早川が宿へ歸つたあとで、二人は煤ぼけた店に瓦斯を灯した。表のガラス戸は、すつかりシエードを下して、俺は加賀見の揃へて渡す新聞ザラを、一枚づゝ不恰好な機械の間へ挾み込み、それを足で踏みつけ、手でさし代へながら、その一枚一枚が、まだるつこい印刷物になつて嵩んで行くのを、腹立だしい氣持ちで見かへつてゐた。

『このうち、なァ、二十枚でいいんだから、ほんとに讀んでくれる奴があるといいぞ……。』

ぐらり、がつちん、ぐらり、がつちん――油切れのした機械の音の上に、加賀見の聲は甭高に響いた。それに返答がないので、彼は、獨り言のやうに附け足した。

『一枚でもいいんだ。――眞劍に讀んでくれる奴があつたら！』

これは、我慢強い態度だ、と俺は考へた。

恰度、この原始的な活版作業の最中であつた。綠のシエードを下ろした表のガラス扉の鐶が、かち、かちッと二度鳴つて俺の名を呼び立てる音がした。アメリカ人らしい。

俺は、細目に扉を開けて、そこに立つてゐるペンキ屋のサムを見出した。サムは、宣傳部の掛りになつてゐる。

『同志アーベ、忙しいかね？　ちよつとでいいから、そこのチヤツプ・スウイまで來てくれないかね？』

このペンキ屋は、年に三ケ月とペンキ刷毛を持つたことのないので有名である。俺は、加賀見にわけを云つて、上衣をひつかけると表へ出た。すぐさま俺のあとを受け繼いだらしい友人は、『阿部活版所』固有の『ぐらり、がつちん』を、不規則なリズムで繰返へした。

支那料理屋へ行くと、窓際の食卓をえらんだサムは、いきなり長い指を三本突き出して、鼻にかかつた低聲になつた。

『アーベ、三十弗作れ！　非常命令だ！』

サムの出し拔けには、こちらも長いこと慣れてゐた。この男は、ものを結論からしやべり出す男である。

『さあ、月末なら出來るかも知れんが……一體、何だね?』

ペンキ屋は、蝸牛の殼のやうに渦を卷いた瞳を、じいと俺の上衣の徽章の上に留めた。

『これからが、大仕事(ビッグ・ジョッブ)だ! やるよ! いよいよ、このロス・アンゼルス支部が、中心となつて活動を開始するんだ。——お前、ヘーウッドが、又、やられたのを知つてるか? どうも當分出られやしないやうだ。それ、この間の郵便局襲撃事件でな。だから、本部もこの際だ、恐らく默認するだらうといふ豫想さ。——そこで、一人當りが、頭割り三十弗といふことになるんだ。お前知らないか、例のパット・オ・キーフィの報告事項だが。』

俺は、サムの荒らつぽい顏の道具立てを、眼から鼻、鼻から顋まで改めて見てゐたが、一向に話が纏らないので、彼奴(やつ)のスウエターの胸にある、俺達の團體章に視力を集中した。

『おい、サム、何の事だい、オ・キーフィの報告つて?——あの蓄音機の話かい?』

七寶の圓い釦には、英語で『Industrial Workers of the World』と書いてあつて、その中に、三つの扇と地球儀の半分が描かれてある。

サムは、一と膝前へ乘り出すと、ペンキで荒れた掌で、俺の印刷インキだらけな手を包んだ。そして、強く握つた。

『暴動は革命の最高藝術だ。こいつは、レェニンだつけな。——俺達は、これから、メキシカリを占領するんだよ!』

3

眼に見えて、大きい反動時代がやつて來た。

一九一七年の九月五日をスタートとして、同二十七日まで、俺達は、機關銃のやうな支配階級の掃ひ撃ちに會つた。

この二回に亙る檢擧は、世界大戰によつて急激に帝國主義化したアメリカ資本主義のプロレタリアートの陣營に對する歩

暗戰であつた。

間もなく、カリフォルニア州に「クリミナル・サンジカリズム法令」が通過して、敵の主力は、俺達アイ・ダブリュウ・ダブリュウの陣營に對つて雪崩れこんだ。暴力、奇襲、夜襲、フレーム・アップ、集會の彈壓などによつて、俺達の前衛分子は、太平洋海岸一帶の陰慘な鐵窓の中に呑み竭されてしまつた。それでも飽き足らない資本主義は、仲間の三人目の男をスパイに仕立てて、黨員章を上衣へ附けてゐるもの、左翼新聞を讀むもの、アイ・ダブリュウ・ダブリュウ唱歌集を手にする女の子をまで曳き擦り込んで、フォルソムや、サン・クエステンや、サクラメントの監獄へ逮捕命令もなしに敲き入れた。

そこで、仲間の大部分は、密閉した室内にスティームを通されたり、鐵鎖で街にぶら下げられたり、巨大な水車のやうなボーロ廻轉監房で木鼠のやうに廻はされたり、腐つたパンと水だけを食はされたり、臍の水の中に立たされたり、黑人暴力團にバットで毆ぐられたりして、肉體の彈力が消耗すると、ペキンと古釘のやうに折れてしまつた。——自殺、發狂、餓死、インフルエンザの犧牲者、毆打による致死、これらはブルジョア新聞には一言半句も報道されないが、暴壓の濃霧が霽れるに從つて、仲間うちへは手にとるやうにわかつた。

しかし、俺達は、資本主義の正體を知つてゐる限りに於て、そんなものに屈服する集團ではなかつた。

フレスノに開かれた、言論自由獲得大會を見るがいい。俺達は、敵の武器を逆に使つて、監獄といふ監獄に同志をハチ切れるほど充滿させようとした。大會に出席した辯士、幹部、黨員のすべてが檢束されることを申合せ、そのために何千人といふ官憲を動員させた。それでも、全國から、同志はぞくぞくと集り、集つた。フレスノのありとあらゆる官廳は、仲間を收容するために解放され、それでも足らないところから新しいバラックが築造された。バラックが出來上らないうちに、地方々々からの同志が、海と川を水平狀態に置かうとする大洪水のやうに、フレスノの町へ一擧に氾濫した。——しまひに、俺達は、この××によつて、一時的なりと、この地方の言論集會の自由を獲得した！

一九二〇年、一月二日の夜、合衆國司法省は、檢事總長パルマーの秘密命令によつて、空前絕後の左翼運動者の全國的大檢擧を斷行した。

社會黨から分離した勞働者黨と共產黨の尖銳分子、それに俺達の間の生き殘つた鬪士の大部分は、この死に物狂ひの暴壓の手で、工場、鑛山、農村、北や南の深林、漁村、ドック、都會の安宿、本部、支部、爭議團本部、家畜牧場、最後の隱れ家としての友人の家……などから、きれいさつぱりと掬ひ上げられてしまつた。

あらゆる集會は、聽衆よりも官憲と暴力團の方が多かつた。出版物といふ出版物は、ことごとくトラックで運び出されて、廣場で石油をかけて燒き棄てられた。ブルジョア新聞は、聲を涸らして『赤色總攻擊』を叫びつづけた。普通の檢束や逮捕では讀者を煽ることが出來ないので、新聞は恐怖的な陰謀と、筋のあはないダイナマイト事件とを俺達になすりつけた。何等の罪名もなくて、一年、二年、三年と投獄されてゐる古い同志や、次から次と新しく投獄される同志の大群の間に、救援會の辯護士達は、もはや階級的義憤をさへ感じ得ぬほど疲れ切つて、鈍感に、事務的に、法律といふ×××な形式を通じて、一應の抗議を法廷へ申込むに過ぎなかつた。これらの法曹團を動かすために、一般大衆から應援基金を募集することですらもが非合法行爲として彈壓された。わけのわからぬ名目と、スパイの私怨と、アメリカン・レッジョンの發動化によつて、加州だけでも、千五百人の同志がそれぞれの監獄にブチ込まれて居つた。――それぞれの監獄には、人間を絞殺する太繩が、事實上死刑囚を絞殺するまでには一年間の試驗期を經ねばならぬといふ理由から、死刑執行臺の背後に、三十本も四十本も、重い砂袋を吊したまま、對手欲しげにぶるぶる緊張してゐた。

時しも、モスクワの第三インターナショナル本部からは、アメリカのプロレタリア運動の批判として、最も戰鬪的であつたアイ・ダブリユウ・ダブリユウの諸傾向のコムミユニズム運動と合流すべき諸特徴が高揚されて來た。

これは、強烈な電流のやうに、運動の全般面をショックした。

俺達の間にも、この批判によつて、急激にボルシエヴイキ化すべしと叫ぶものと、まだ西部鑛夫總聯合直系の思想的立場から、曾て分裂したことのあるデ・レオン一派の運動に均しい政治行動を避けて、家傳の「ワン・ビッグ・ユニオン」主義により、ますます經濟鬪爭だけに戰鬪力を傾注すべしと主張する者が現はれた。支部は、全國到るところで、この二つの傾向の間を動搖した。そして、數度の海嘯のやうな彈壓に洗はれた本部は、わづかにシカゴの一隅に、型ばかりの事務所を維持して、呆然とアメリカのプロレタリア運動に迫つた危機の前に、ホールド・アップに出會はした紳士のやうに兩手を擧げてゐた。最も悲痛なことは、この重大なモメントに、俺達のビル・ヘーウッドが、ラベンスウオースの監獄に、未決定の罪名で、飼ひ殺ろし同樣に監禁されてゐたことだ。

ロス・アンゼルス支部も、今後の活動方針については、數度の會議を重ねた。數度の激論ののちに、俺達は、徒らに意見の相違が、個人的色彩を帶びることを發見するだけで、時代の客觀的情勢に適應する結論は生み得なかつた。

そして、この紛糾のまん中へ、赤髭を生やしたパット・オ・キーフイが歸つて來たのである。

俺達の間に、メキシコとの交渉のあつたことは珍しくはないのだ。今から六七年前、ヴイアの革命軍に投じて、インペリアル・ヴアレー支部に屬した黨員達は、プローレーやインペリアルの町から、潛かに國境を越えてメキシコへ走つた。南米や、ニカラガ、メキシコ共和國などに現はれた、英米の帝國主義的資本主義の暗鬪は、メキシコ共和國内に於ける無產階級運動を、かなりの程度にまで刺戟し激成したのである。俺達に、若干の××と、政治的クー・デ・ターの手腕があれば、カランザ政府倒壞を目標とする國内の戰鬪的プロレタリアートと呼應し得ることは、手に取るやうにハツキリした。

それと同時に、オ・キーフイの報告を基礎として、支部がこの前哨戰の火蓋を切つたとすれば、その結果如何によつて支部そのものの死活の問題は別としても、アメリカの全プロレタリア運動にこれ以上の鋭い、果敢な拍車となることがほかにあり得ようか！

アッピールは、確實な同志にむかつて口づてに、狙らひ擊ちに發せられた。

計畫と作戰は、極祕のうちに進められつつあつた。――そのことを、俺達は、支部を中心とした雰圍氣に知つた。

見知らぬ同志が、默つて事務所へ來ては、金を置いて默つて歸へつた。金は、書記の手を通じて、會計のワイスの帳簿に記入された。會計のワイスは住所不定である。この男は、かういふ反動時代には、最も便利に出來た男だ。帽子の被りやう一つで、生つ粹の猶太人にも見え、ヤンキーの商館の外交員にも見える。どの群集へ交つても氷の一片のやうに目立たない。この男の信頼すべき同志であることは、過去十年の間現職を維持してゐたことによつてもわかる。特別な用務があれば、俺達は、書記を通じて、この男とどこかのホテルの應接間で會見することが出來た。支部に控へてゐて、受付を兼ねてゐるやうな、チヤちな會計では彼はなかつた。

事務所は、幾度かの手入れによつて、黨員名簿も、決議錄も、その他の重要書類も、一切置かないことにした。黨員自身がそれぞれ黨員名簿であり、議事錄であり、その他の重要書類でもあつた。この場合、原本が拘留されたり「クリミナル・サンヂカリズム法令」で投獄されたりすれば、その副寫本は、次の同志によつて固く守られた。この人間の肉の中に書かれた書類は、肉がちぎれるまで、或ひは黑焦げになるまで、仲間以外には開かれないことになつてゐた。反動時代はそれを俺達の肉體に強くタタキ込んだ。

平常集つて馬鹿話をしてゐる連中も、何かの力によつて、急に胸の中に大きい祭をしまつて置くやうな顔をした。彼等は、滅多に事務所へ來なかつたが、いつも事務所のことを考へてゐた。事務所には、時偶の、金を持つて來る見知らぬ仲間に應接する書記のコマトスが、がらんとした室内に小さく縮こまつてゐるだけで、いつも掃除の婆さんの箒の跡が綺麗に殘つてゐた。今まであつた室内のビラや、スローガンや、ポスターや、新聞雜誌、喫煙のほかに、何か變つたものがあつたとすれば、右手の壁に吊るされた「ランド・マクニアリー版」の詳細な北米・南米地圖である。コマトスは自分の

ロール・トップ・デスクから、その地圖を眺めてにやにやしてゐた。あまり遠くない俺は、時折、かうした雰圍氣に接して何かが今にも爆發しかかつてゐることを痛感した。

歷史的な俺達の支部は、ロス・アンゼルスの、イースト・サイドの貧民窟の眞つ只中にあることを誇つた。

この界隈は、曝れたコーン・ビーフみたいな、汚らしい煉瓦造りの二階家が、留度なくつづいてゐて、その牢獄の壁の下のやうな町幅には、無數の干物や、看板や、廣告のサインの間に、世界のあらゆる隅々からの移民が、上になり下になりして、そこを拔け出ようと藻搔いてゐた。

支部は、そのイースト・セコンド・ストリートの二百四十一番地にあつた。この家だけは不自然に發達した毒蕈のやうに壁のうすい五階の汚いビルヂングであつて、一番下がギリシア人の果物店、その横の船のタラップのやうな階段を五つ上ると、五十二番の室がそれであつた。

俺達はこの界隈を利用して、月に二三度は、きつと言論自由獲得運動の屋外演説をやり、屢々二百四十一番地の前にはロス・アンゼルス警察署の護送自動車が止つた。そして、いやが上にも亂入する警官の靴のために、階段はいつも生傷が絶えたことがなく、第四階目の室は三日とつづいて借りるものがなかつた。

ある土曜日の正午、俺は、掻き集められるだけの金を集めて、やつと三十枚の一弗紙幣を揃へると、それを納めに支部の方へ出掛けた。

街には、盛りを過ぎたオレンヂの匂ひが漂つてゐた。

白いオーニングの下で、永遠に林檎を拭くことを止めないギリシヤ人の果物屋が、見知り越しの俺を見て、惡魔のやうな口髭の下から、剽輕な聲で歌つた。

「ハレルーヤ・ウイ・アル・バム！」

いつの間にか、この男も、アイ・ダブリユウ・ダブリユウの歌を覺えてしまつたのだ。俺も、思はず、同じ調子を唸りながら、苦もなく五つの階段を傳はつて居つた。

事務所には、サムと、コマトスと、エリノアといふ下町の土地會社にタイピストをしてゐる女とが、まん中のテーブルに、顏をあつめて話してゐた。

『――ほら、來たぜ。もう來る時分だと、ちやんと噂してゐたんだ、同志アーベ。』

一瞬間、分れた三つの顏の間から、ペンキ屋の、人の二倍も擴大したやうな顏が、俺にむかつて笑ひかけた。俺は無言で、三人に近づいて、差し伸べられたエリノアの手を輕く握つた。

『好い天氣だね。もうインペリアル・ヴァレーのメロンが熟する頃だぜ。階下のグリーキが・ハレルーヤ・ウイ・アル・バムを歌つてたよ！』

俺は、柄になく輕るいことを云つて彼等を笑はせた。そして、隣のデスクへコマトスを呼ぶと、三十枚の紙幣をそつと手渡した。

コマトスは、イタリア人系のはつきりした表情で、俺の顏を瞶めながら、

『同志、有難う！』

と云つたと思ふと、紙幣といつしよに、強く俺の黑い手を握りしめた。

『その天氣の話だが――アーベ、どうだい、今日、俺といつしよにカレキシコの町まで散歩に出ないかね？　すぐ歸へつて來るんだ。――何、實は、同志エリノアの兄貴があすこの八百屋を經營してるんだが、ちよつとその地下室を借り受けたいのだよ。それには、君はいい口實にならうと云ふものだ。こんな好い日にア、御互ひに、印刷機やペンキのことは忘れてしまはふぜ！』

『ハレルーヤ・ウイ・アル・バムー』

エリノアが、椅子を蹴りながら、けしかけるやうに歌つた。りんりんと轉ろがる聲だ。

俺は、サムの言葉をちよつと考へて見た。

『カレキシコぢやなくて――！メキシカリぢやないのかね？』

この俺の質問を、ペンキ屋は、大きく手を振つて塗りつぶした。

『同じこと、同じこと。――大體が、同じ町なんだ。行くかね？』

『でも、東洋人はどうかね？』

この最後の疑惑は、淺薄な人種的偏見に、日常揉まれてゐる俺達メリケン・ジヤツプの、自然に出て來る推理過程である。

コマトスは、それを物理的に解決しようと試みた。

『カレキシコの町は、アメリカ國内さ。あすこへ行くには、サンフランシスコへ行くよりも世話はない。サム・ホイーラアは、カレキシコの八百屋にしか、用事はないんだからね。』

俺は、この圓滿な、アメリカ生れのイタリア人の解釋に、頭を下げるほかはなかつた。

『あたしの兄に會つたら、よろしくね。同志アーベ！』

もう一度、エリノアの冷やりと汗ばむだ手が、俺の掌の中へ滑り込んだ。

4

數時間の後に、二人は、カレキシコの貧弱なメーン・ストリートを、細かい、石灰のやうな砂ほこりを立てながら歩る

いてゐた。

このメーン・ストリートは、田舍町のどこのメーン・ストリートとも變りはなかつた。黄色な『ソコニー・オイル』の看板が出てゐると、ガソリン供給所がコンクリートで敷きつめられてあり、『クエーカア・オーツ』と『コーン・フレーキ』の廣告があると、その下には、ぷーんと鋸屑(おがくづ)の臭ひのする食料品店があつた。

バンガロー式の、輕便な住宅が、大通りからすこし横へ切れて立ち列んだむかうには、お定まりの鐘樓と教會が、平凡な僞善のシムボルとして立つてゐた。一軒の支那人の洗濯屋と、惡脂肪の煙を吐いてゐる安料理屋とが、その榮華の性質から、町の單調さに、多少の賑かさを添えてゐたとしても、絶對に植物つ氣のない、噎せるやうなセメントの焼ける町並には、同じ捏ね粉から造られたパンほどの變化もなかつた。

西日に傾いた、この南加州の町では、やつと人間が『午睡(シエスタ)』から醒めたらしく、ところどころに水道の管へ撒水器を取りつけてゐるシャツだけの男や、スクリーンを撥ねのけてバスケットを抱へて買ひ出しに出る女などが、懶い動作で俺達の視線を出たり這入つたりした。

かういふ、砂つぽい、烈しい日光に灰になつたやうな單調な町を、俺は、もつとも複雜な豫測の下に歩いてゐた。——俺は、メキシカリを占領する時のことを考へてゐた。その考へには、すこし前に、汽車の中で、サムに訊ねた言葉の返答からずうつと絲が曳かれてあつた。

『あの三十弗で、何をするのかね？』

サムは、躊躇なく答へた。

『鐵砲を買ふのさ！』

『ふむ、そりやわかるが、——それにしても、ほんとに戰爭をするつもりなのかね、メキシカリの軍隊、？』

「まあ、市街戰といふところだらうな。」

「ともかく、メキシカリへ行つて見ようぢやないか。——」

「おつと、皆まで云ひつこなしだ。先づ、用事の方から定めて行つてさ！」

これだけの短かい會話ではあつたが、それは極度に壓縮された爆發物のやうに、ほんのわづかな時間で、俺の頭の中でいろいろな方向へ炸裂しはじめたのである。事實、俺は、カレキシコの町を眺めて歩るいてゐるのではなくて、頭の中に跳るダイナミックな景色を、だらけた外部の光景と照らし合はせて見て、その平氣さ、のん氣さ、單純さに驚いてゐたのも同然であつた。——俺の頭腦は、そこここの壁に刳ぐられるであらう、外れ彈丸の彈痕を見た。それは、橋一つ越したメキシカリ守備隊の、町を遮斷して匍伏した散兵線から、唸りを擧げて飛んで來る滅多打ちの彈丸であるかも知れない。そのために、不意を喰つて逃げそこなつた、今傍の玄關のスクリーンの中で、棕櫚の團扇を使つてゐる老婆は、小鳥のやうにきりきり舞ひをして、籐椅子の下へ斃れるかも知れない。……屋根の上に見張りをしてゐた俺達の仲間が、サイドウオークでメキシコ兵に追ひつめられた一隊の仲間が、地下室や、市民の店へ逃げ込んだのを汐に、大きいソンブレロを目標に、高い所から一齊××をするかも知れない。今、途中でも見受けた、赤いハンカチーフを首に卷き、黄ろい木綿のヅボンを穿き、カーキー服を着たメキシコ兵が、どさりどさりと砂を摑んで倒れて、そのまま永遠に身動きをしなくなるにちがひない。その時、サン・デイゴあたりから、急を報ぜられた陸戰隊でもが、トラックで急行して來て、俺達を背後から機關銃で一掃してしまひはしないものか？　サン・デイゴからここまでは、山路を幾時間かかるものかしら？　味方はそこまで、すべてをタイムで計つてゐるだらうか？　一番先きに、橋の袂のアメリカ稅關を占領して、そこを本部として幾隊にも分かれて、兵營と官邸と、その他メキシカリの目貫の重要地點を占領した方が、仕事は早くはないか？……

「同志アーベ、ここだ。」

サムは、町はづれにあと四五軒しかない、二階建ての果物店の前で俺を呼び留めた。この町でも、ずうつと古るく建てられた方の家らしく、すべてが木造で、ショウ・ウィンドウの下は地下室の揚げ蓋になつて居り、揚げ蓋には指を引懸けて開けられるやうな鐶がついてゐた。深く垂らしたアウニングには、殆ど消えかかつたほどに、

『Green's Fruits Store & Groceries』

と、字の痕が辿られた。

グリーンといふのは、恐らくこの果物店の主人、同志エリノアの兄の名であらう。グリーン氏、あまり商賣が榮えるといふ方でもなさそうで、ガラス窓の奥のバナナは、黒く果を切り落した幹に、まだ、十房ほどのバナナをすげてゐて、それの新舊のコントラストが、すべてを語つた。新鮮な果物の名産地であるカリフォルニア州に、店へ這入ると、饐えた甘酸つぱい貯藏した果物の臭ひが鼻を撲つたのである。

閉ぢたスクリーンの音で、奥から一人の小柄な中年の男が、ひよいと顔だけ見せて、もう一度隠れると、今度はあらためて、口を拭ひながらあらはれた。

サムは内側のポッケットから、一通の紹介狀を取り出した。

『ミス・グリーン――あのロス・アンアンゼルスのモフイエット・リアルテーに御勤めになるミス・エリノア・グリーンからの御頼みで參りましたが。』

手紙が、ショウ・ウインドオの方へ向けられて讀まれた。簡單なものらしく、讀み終へると、グリーン君は、じろじろ俺達の上へ田舍もの相應の彎曲した視線を投げた。

『この文面によりますと――妹は、わしの地下室を友人の方の爲めに借りたいといふことですが、貸して上げてもよろしいが、何を入れなさるんでせうか？』

『いや、それは、かういふ理由なのです。――サムは、すつかり小市民的な語調になつてゐた。先づ、グリーンさん、日本人アーベ君を御紹介いたします。これは、ロス・アンゼルスに永年住んで居られる、日本紳士です。つまり、ミス・グリーンへ私が御近づきになつてゐますところから、友人アーベ君とミス・グリーンとの橋渡しをしたのも私といふことになるのです。さて、私の日本の友人は、今度、一つ商賣變へをして、あのメキシカリの支那料理屋の一軒が賣物に出てゐますので、あすこを經營したいと仰言るのです。これは表向き賣物と云つて廣告してある筈のものぢやないので、かういふことはその道の手を通じて行はれることは御存じの通りです。ところで、その支那料理店は、リー・チエンといふ支那人の名にはなつてゐますが、實は日本人が經營してるんださうです。どうも、かういふ混み入つた話は、私共アメリカ人にはハッキリしないのですが――いづれにしろ、貴方だつて、私だつて、あんまり支那人と日本の人とは見分けがつきませんのでな。謂はば、そりや、當人同志のことに任せて置いた方が一番早わかりがすると申すものでせう。――ええと、そこで何とか云つたね、アーベさん、あんたのリー・チエン料理屋の日本人の主人の名は？』

俺は、口から出任せのサムが繰りひろげる法螺の網から、やつと顏を上げて、かう答へただけが精一杯だつた。

『早川、早川ですよ。』

『さうさう。そのハヤカーワが、店を讓り渡す條件は、什器家具權利一切引くるめて幾何といふ値段なので、それには、いろいろアーベさんが土地に慣れない點もお有りだから、一週間ほどは店に同居して、客筋のことや、料理萬端教へてから歸國されるといふことなのです。――すると、困つたことには、このアーベさんですがね、この方はまだ獨身でこそ居られるが、ごらんの通りの紳士で、一軒の家をちやんと借りて居られる。從つて家具なども一揃ひ御有りになる。こちらへ移つて來られゝば、いづれどこかへ家を借りられるなり、間借りをされるなりなさるでせうが、事が早急なもので、おいそれと空家も部屋も見つからないといふのです。――といふわけでしてな、實は、御妹さんにその話を申上げますと、

兄の店では、から申しちや失禮ですが、大した品物もあつかはないし、話のつけやうでは相談に乘つて下さるだらうとのこと。――長いことは申上げませんが、どうでせう、グリーンさん、ほんの二週間ほど、アーベさんが店の方をすつかり呑み込まれるまで、二回か三回に運んで參ります家財道具を、地下室へ御あづけ下さいませんでせうか？――値段の方は、直接アーベさんと御話合ひ下さいますれば、それでいいので、ただ、そのこの紳士は、いままで日本人關係の御交際が多うございますから、英語があまり達者ぢやなからうとは思はれますが――何、これも外國人であれば、無理のないことでしてな。如何でせう、大體、こんな事情なのですが。」

俺は、英語の能不能は別としても、實際、何から何までも、嘘で積み上げたサムの雄辯に魅せられて、あつけらかんとして聞いてゐるよりほかはなかつたのだ。

グリーンは、あらためて、俺の姿を、上から下まで、一應檢査すると、言葉を多少潤色して切り出した、――と云つて俺の斑點のある平常着に、この田舍商人の敬意を誘ふべき何物もないとは知つてゐるが。

「二週間ですかね？何時からですかい？」

サムが話を引取つた。

「實は、今晩も最後の調印といふところで、これからメキシカリへ行かれるのでしてな。それが定まらんと、運搬して來る日取りも定まらんわけですね、アーベさん？」

俺は出來るだけブロークンに答へた。

「署名する――店ゆづり渡す日決定する――それからです。」

「實はな、地下室には、家で食べる物をすこしかこつてあるんでな。ようごわすよ。――ともかく、明日なりと小僧に云ひつけて、掃除はさせて置きますが、まあ、充分風を入れて清潔にして置きませう。荷物は隨分あるんですか？」

『荷物——大きいです。しかし、小さいのもある。箱、樽、家具類、別にいたむ物ないです。』

『ぢや、片側だけで足りますね？　ともかく、ごらんになるかね？』

サムは、對手を抑へた。

『いいえ、決して。御話でわかります。ぢや一つ御値段のところを、なアアーベさん？』

『さア、他人に貸したことつてないんだが、——どうぢやろ、一週間三弗位では。その代り、荷物は責任を持つて保管しますわい！』

『アーベさん、三弗とはどうですか？——まあ、倉庫のない場所柄、ちと値は張るが我慢しますか？』

『さうです、三弗よろしい。』

『ぢや、グリーンさん承諾されました。だが、間違ひの起らぬやうに、一つ何か書き物でも差上げませうか？』

『いゝや、日本人のアーベさんだから、わかつとりますよ。二人と同じことを云つて來る日本人もありますまいて。』

『全く。——いや、これで、私もすつかり一方の安心はつきましたよ。では、これから、もう一つの方——ですが、こいつは、日本人同志ですから、私などの出る幕ぢやないので。では、グリーンさん、四五日のうちに、トラックでアーベさんなり私なりがつき添つて運搬して參りますから、その節お金は御渡ししますよ。——實はな、このアメリカ人の私がこんなに立入つて御世話するといふのも、五年この方、アーベさんは、私の家を借りて居られるんでな。いや、家主といふものは、良い店子には眼がないもんですよ……』

喜々としたサム・ホイーラアは、この邊一帶に常識となつてゐる、朽廢の表象を、一と振り振つて、慇懃にグリーンへ別れを告げた。龍は、こみ上げて來る哄笑を堪へて、赤くなりながら、不器用な挨拶をして、店を出た。と、サムは、あわてて店へ驅け戻るなり、

『この扉には、錠は降りるんですね？』

と主人へ訊ねた。

『錠つて別にないが、使はん時には、中から心張棒をかることになつてますぜ。——この邊ぢや、別に物騒なこともありませんからな、それで澤山ですよ！』

グリーン氏は、扉口まで出て來て、かう云ひながら、大きくもない腹をぶくりと夕陽の下へ突出して見せた。

二人は、暫らく笑ひを殺ろして、稅關の前まで歩いた。『ユー・エス・カストム・ハウス』と書いてある、申譯けばかりのコンクリートの小舍から、恐ろしく毛のない頭が電燈の下に光つてゐて、後ろ向きになつた奥には一枚の新聞がひろげられてあつた。更らに、その奥には、眼鏡をかけた、黑い髪の若い男が、丹念にピストルを磨いてゐた。二人は、別にこの淋しさうな役人達の輕蔑の標的ともならずに、橋を越すことが出來た。

のんどりした水が橋の下に湛へてゐて、それが流れるでもない癖に澄んでゐるのは、さすがに巨萬の費用を投じて、リオ・コロラドから灌漑用に水を引いてゐる大きい貯水池の有效さを見せてゐた。

「おい、非道いな！ すつかり俺をへんな役にしたてたもんだね！」

俺は、火山灰のやうな砂地に足を踏み入れると、いきなり、サムの肩を背後から敲いた。サムは、けつと笑つて、くるりと俺の方に向き直ほると、唇へ人差指を當てた。

「叱ッ。——これから、俺達の行くべきところは、リーチ・エンのチャップ・スウィだつたね。」

リー・チエンとやらの支那料理店では、俺達が冗談のやうに、店を賣るか賣らないかと訊いて見ると、凄ごみのあるほど揉み上げを剃り込んだ若い給仕と、帳場の鼈甲眼鏡の爺が、喧嘩をするやうな聲で問答した揚句、鼈甲眼鏡は、煙管の尖端を揮つて、覺束ない英語で叫んだ。

『千年後になつたつて、ノオ！』

客の二人は思はず苦笑した。

『グリーンが、こんなところへ來て、餘計なことを聽いたりしやしないかね？』

『大丈夫、あの田舍者は、支那料理に阿片が這入つてると云つて、エリノアとさへ、いつしよに行つたことはないさうだよ。ともかく、かう話が定まりあ、スピードを掛けなくつちや！』

『何だね、荷物といふのは、サム？』

『わかつてるぢやないか――鐵砲さ。すこしづつ送つて置くんだ。ほら、給仕がやつて來た。――やあ、リー君、これが美容盤（フウヨウハイ）だね。序に、冷やしたビールを二本賴むぜ！　終列車は――九時三十五分だつたね、サクラメント行のは？』

その時、階段を轟かして、どやどやと上がつて來た客があつたので、二人は專念に長い支那箸を使ひはじめた。

來た客は、俺達二十萬の黨員の血を絞つて肥つたやうな、赭ら顏のアメリカン・レッジョンの一團であつた。

『オ・キーフイ！』

鷄卵をはさみながら、俺がかう囁いた。

サムは、默つて、胸の黨員章を外づして、ポッケットの奥へ深く押し込んだ。彼れの二重瞼には、異樣な閃きがあつた。

5

俺は下町を歩いてゐて、意外な人間に出逢はした。

『よう、同志ワイス！』

同志ワイスは、乙な鳥打をかぶつた顏を、あらぬ方へそむけた。見れば、スポーツ・マンもどきの、半ズボンを穿いて

ゐた。富豪のゴルフ氣狂ひででもなければ、そんな恰好をしてゐるものは、ロス・アンゼルスには見當らない。それに英國流の革の鞭！

俺が、もう一度言葉をかけると、立停まつた支部會計は、正確に均整のとれた顏を屹とまともに向けた。

『君、恐らく人違ひでせう。――僕の名は、チャールス・ランドンといふのですが。』

その言葉と眼の力には、犯し難い威嚴があつた。

『これは御免下さい。』

俺は、さう詫びて、ワイスが一流の銃砲店へ、鞭を揮りながら、無雜作にはいつて行く後姿を横眼で睨んだ。

その翌日、同じワイスが事務所にひよつくり入つて來たのに會ふと、その時は、先方から言葉をかけた。

『ああ、同志、きのふは失禮、ああいふ人混みでは、ほかに執るべき手段はなかつたのだ。』

『ランドンさん、もう大分荷物は集りましたかね？』

『ランドンとか言つたね。私も不意の名前でもう覺えてゐないが。――今日、サン・フランシスコや、オークランドや、サクラメント方面から、君の荷物が大分着くことになつてゐる。最初の引越しをやるのは、おそらく明日の午後からかと思はれるが、君は、トラックへ一緒に乘つて行けるかね？』

『始め一囘だけは、どうしても行かないと具合が惡るいだらうね？』

書記のコマトスは、露骨に地圖の上を指さしながら、シーラ・ネヴダの麓を、サン・バーナディノから「死海」へ走る弦のやうな一線を辿つて、南加州の大盆地に散らばつた村々町々を拂ひのけるやうに手を動かした。

『同志アーベ、まるで保養に行くやうなもんだ。砂はひどいだらうが、トラックなら時間もかからないし、ぜひ行つて貰ひたいね。――計畫は、もう仲間では祕密を保てぬほど進展してゐる。ここ四五日で、××の全部を送つてしまはないと

非常に手違ひが生じるかもしれん。――理解出來ますか、同志？」

そこで、俺は、全然自分と關係のない木の箱や、セメント樽や、いかにもシャツや小道具の入つてゐさうなトランクなどを滿載した一臺のフォード・トラックへ同乘して、その翌る日の晝方、稍々約束の期限より早すぎたので面喰つたらしいグリーン氏の店へ、どかどかとそれらを運び込んだ。

インペリアル・ヴァレーの見渡す限りの耕作地には、ところどころ狼火(のろし)のやうな龍卷が起つてゐて、サン・ヨシント山脈が透明な紫の襞を織つて、金粉を張らしたやうな西の空に聳えてゐた。先を急いだ俺には、書記コマトスの誘惑したやうな絶好の景色などは眼に入らなかつた。やはり、これも同志の一人である、トラック運轉手のマルフイといふ男と、沈默を挾み勝ちな會話を取交はしながら、いつの間にかカレキシコへ着いてゐたのであつた。

グリーン氏は、約束通り地下室を掃除して、馬鈴薯のサックや、その他怪しげな古い果物の匂ひの殘つた箱類を地下室の一隅に重ねて置いてくれた。

俺達二人は、かなりの重さの荷物を、それとなく冗談を云ひあひながら、地下室の左隅へ秩序的に積み重ねて行つた。支部で、殆んど幹部總掛りで荷造りしたといふ「俺の」道具類は、必要以上にも嚴重に錠や封印が施されてゐて、もし強いてグリーン氏が疑ひの眼を以つて見るならば、それらがあまりにも荷物らしく繕つてゐる點であつたらう。俺は、約束の三弗を前金として渡して、その受領書に、誰でも俺の署名があれば荷物を引換へに渡してくれるといふ覺えを書いて貰つて、荒れ馬のやうに筋肉を翻弄するトラックを支部の前で下りた。

「明朝、又早く伺ひます。」

マルフイは、それらしい挨拶をして車をスタートさせた。

事務所には、十時を過ぎた頃にも拘らず、瓦斯火をつけて書記や仲間の四五人が、熱心に俺の歸りを待つてゐた。

『やあ、引越しはどうだつたね？』―サムが、一同の中から、親しげな笑ひを見せた。

『これが、受領書。誰が行つても、俺の名前をサインして置けば、荷物は受取れるやうになつてゐる。――だが、少し厳重過ぎるね。もうちつと、花筒だとか、バスケットとか、アルミの薬罐の一つぐらゐは景物に添へないと――獨身者の引越しとは思へないぢやないか。』

一同は手を拍つて笑ひ出した。エリノアは、早速明朝までに、彼女のボードアから何かな貢献すると云つて、そこに又子供らしい物議をかもした。

『コルセットはやめてくれよ。』

『同志エリノアのスカートが鞄からはみ出たりしてるちあ、尚更疑惑をひくといふもんだね。』

その間も、一同は手を休めずに、毛布の包みや、南京米袋の包を、わざと洋傘の柄をはみ出さしたり、ステッキの尖端を括りつけたりして、荷拵へする手を休めなかつた。

新しい蓆包みを縛りかけてゐるのをちらと見ると、油紙の間から、よく磨きのかかつたウインチエスター獵銃の銃身が、黝く瓦斯の光りを反射した。

『明日は、休まして貰へんかね？――實は、大急ぎの印刷物が、もう二日も遅れて困つてるんだが。』

『やあ非常に御苦勞でした。この最初の運搬さへ圓滑にすめば、あとは誰が行つてもいいと思ふ。それに、グリーン氏は同志マルフィの顔を知つた筈だから。――同志アーベ、この際君が働いてくれたことは、俺達の間にどれだけ發憤剤となつたかわかりあしないよ！』

如才ないコマトスは、から云つて俺の手を握つた。

俺は、幹部が絶對秘密主義をとつてゐる態度にはいささか慊らなかつたが、運動の性質上一般討議に付すべき種類のものでなかつたから、矢のやうに心をついて來る好奇心を抑へて外へ出た。

もの の半ブロックも歩いたと思ふと、背後から呼びかける聲がしたので、待つてゐると、それは帽子にハット・ピンを刺しながら驅けて來るタイピスト・エリノアであつた。この女は、教育宣傳部の係りの一人で、支部でもかなり活動的なレコードを持つてゐた。未婚で、もう四五に手がとどいてゐさうな娘であつたが、どういふ理由か、同志達の間にも、彼女との戀愛事件は聞いたことはない。からだの上半身に比べて、下半身がいやに發達してゐて、その小さな顏で、殆んど長い腿や脚の動作がコントロール出來なくて困つてゐるといふ表情をしてゐた。

「同志アーベ、少し一緒に散歩なさらない?」

「散歩といふと、この足は自然と私の家の方へ近寄つて行きますよ。ウォルチェスター・ストリートですが。」

「ええ、結構。何なら、貴方の印刷所へ伺つてもいいわ。──靜かな晩ですね。」

暫くの間、二人は默つて、自分の跫音に警戒するやうに歩いた。

「──貴女は御存じでせうが、もう何人ほど今度の事件の參加者が出來ましたかね?」

エリノアは、さりげなくその邊を見廻はした。

「もう二百人から集つてますのよ。事務所へは來ないんですが、めいめいに聯絡をとつてゐるんです。──それが、私達の黨員らしい、實にユーモアに富んだものよ。割當てのお金が出來ないで、ホテルにベル・ボーイをしてゐる同志だの、レストランのテップを漁つてゐる給仕だの、大急ぎで果物摘みにランチへ行つた同志だの、それはそれは、いろんな人がゐるの。ネヴァダの一人の同志は、アッピールを受けた時、恰度月給日で三十弗こつきりしかなかつたので、それを持つたまま、あすこから乞食をして昨日事務所へ着いたさうです。──同志ワイスの話では、もう準備は八十パーセントまで出來てるんですつて。だから、始めるのは、もう間もないことでせうよ。」

「二百人──案外尠いですね。もつと大勢集るのかと思つたが。」

「それはね、今度の場合は特別なのよ。だつて、一般の全國支部へ、こんなことを觸れまはすわけにはいかないでせう?

――だから、私達の支部が口火を切つて、それがものになれば、直ちに全國的アッピールを出して、總動員をするやうになるかもしれないわ。問題は僉よ。そこが又、あのメキシカリ占領を急ぐ理由でもあるのです。」

俺は、同志達が、かほどまで熱誠に計畫を運んでゐるにも拘らず、まだこの突飛なクー・デ・ターの基本的な部分に、一つだけ非論理的なもののあるやうな氣がしてならなかつた。それは、歯車へ挾まつた小砂利のやうに、何となく俺の氣持ちを煩はした。

「一體、それはいいとして、果してメキシカリの占領が出來るかしら？誰か、あの兵營の武器や、彈藥や、ゴンザレス邸宅の内部などを調べたでせうか？――それから、キャンプ・カーネーには、アメリカの軍隊がゐる筈だし、サン・ディゴには海軍根據地があり、ナショナル・シテーには飛行隊の溜りがあるんだが――アメリカの軍隊は、軍事干渉をしやしないかしら？」

「それは、もう、とうに試驗濟みなのですわ。同志アーベは、メキシカリに、あの屯營所の内部に、私達の同志のゐることを御存じないでせう？――それから、アメリカの陸戰隊や在鄕軍人團を心配したら、私達ビラ一枚撒くことは出來ないぢやないの！　私達の過去の鬪爭で、そんなのはいつも敵にまはつてゐるぢやありませんか！――それが、又、私達のプロパガンダの最も有效に作用する部分だと知つてゐなけりあなりません！ですから、そういふことは、一切心配しないで、皆で勇敢に鬪ひませう！」

ここで、俺は、もう一度この女の汗ばんだ冷めたい手を、俺の掌のうちに發見して、二人は別れねばならなかつた。

エリノア・グリーンが、赤い頭巾を風に靡かせて、トラックの上から、彼女の上半身が撓ふほど大きい赤旗を振つて、メキシコ兵の亂射するアメリカ製の銃彈の間に、ヒステリックな聲を張り上げて仲間を鼓舞してゐる姿が、いつの間にか俺の殺氣立つた腦裡に現像化されてゐた。

店へ歸へると、加賀見は蜘蛛の巣のかかつた活字のケースの間からひよつくり立ち上つて、にやりと笑つた。

「阿部君、この頃、大分活動してるやうだが、君達の支部は、何か暴動でも計畫してるんぢやないか？」

俺は、店の奥の方を覗いて、早川のゐないのを見定めたうへで否定した。

「しかし、いよいよアメリカ政府もやるらしいな。こないだ大檢擧をやつた、あいつは、アメリカにゐる各國の共產黨員を追放する段取りなんださうだぜ。――さうなると、勿論、片山老人などもやられるかもしらんが、まさかあの人は日本へは歸るまい。」

「國外追放か？――ブルジョアつて、奴は、どこまで馬鹿に出來てるか底がしれんね。三四百のアヂテーターを追つ拂つたつて、自分らの資本主義組織が繰返へし繰返へし、戰鬪的なプロレタリアを生んで行くことを知らないんだ！」

「そこが、史的唯物觀のないあさましさ！」

それから、俺は、眠るまで加賀見の唯物辨證法的世界觀を聽かされたことは無論である。幾度か、アイ・ダブリユウ・ダブリユウ運動の、必然にコムミユニズム化するであらう過程を、俺達は今通過してゐるのだと云ひかけて、俺は口を噤んだ。人間は、感興に乘じて、主義や運動方針を第三者に傳ふべきものではない。

二日經つてから、俺は、日本人の店のレター・ヘッドを屆けながら事務所へ立ち寄つて見た。

朝のことなので、書記のコマトスがたつた獨りで、郵便で來たらしいニュー・ヨークの「コムミユニスト・ウオカー」を讀んでゐた。いたつて閑散なものである。この頃は、筋向ひの猶太人の煙草屋の前に、義足を嵌めてゐる男のやうに、自分の足を持て餘して、終日この二百四十一番地の入口に眼を配つてゐる探偵も、ぱつたり姿を消してしまつた。恐らく、ロス・アンゼルス本署では、彼々是々の主腦幹部を引上げたから、あとのヤクザ者達にア、何が出來るもんか――と葉卷を啣へて、テーブルへ足を乘せてゐる思想主任があることであらう。

「同志コマトス、世界はどう動いてるかね？――變つたことは？」

「御早う、同志アーベ。引越しよ、今日の午後に最後の一回をやるよ。それで御終ひだ。――どうだ、案外敏活に運んだ

らう！君自分を慶賀していいよ。」

彼は、軽るく笑つて、俺の薦めたシガレットを一本抜き取つて火をつけた。俺は低聲になつた。

「動員は――何日なのかね？」

コマトスは、双肩に小氣味良いゼスチュアを見せた。

「サムに訊ねてくれ。あれは知つてる。いや、サムは、そのために、君のところへも近々行く筈だ。」

「よし、サムを待たう！」

その足で、俺は、もう一軒の日本人商店の註文を取つて、店へ歸つた。

煤けた店先には、鮮かな苺の小箱を並べて、早川と加賀見とが、顔を赤くしながら撰んでゐた。

「阿部君、どうだ、あのビラの報酬だよ。この間撒きに行つた苺畑の一人の同志が、今日これを細君に届けさせてくれたんだ。やはり、同志はきつと何處にもゐるもんだね。まあ、一つ撰んで見たまへ――」

俺は、加賀見の光つた顔を見るのが嬉しかつた。

その晩、この前と同じ刻限に、ペンキ屋のサムが鐘を鳴らした。本を讀んでゐたので、それをベッドの上へ投ると、俺は急いで外へ飛び出した。

「歩きながら話しよう、同志。」

いつになくサムは厳粛な顔をしてゐた。空には、半分に割れた月があつた。さばさばした涼氣の中に、梅の花を思はせるやうな、レモンの花の香りが流れてゐた。

「先發隊は、明朝、別々の汽車や通路から、五十人ほど出發する。六七人の小さなグループになつて、支部に直接關係してゐる同志が、それを引率することになつてゐる。明後日、朝の一番の列車で、後の五六十人が續發して出發する。――その他は、事務所で聯絡をとつてゐて、電報一本ですぐやつて來るやうに手筈がきまつてゐる。先發隊の連中は、決して

カレキシコの町へ一齊に繰り込むわけではない。ヒーヴーや、セントラルや、インペリアルや、そのほか、ステーションの附近に合圖を待つてゐることにする。どうせ、俺達は、野宿には慣れてゐるし、からだは土工か百姓のやうな、身框な服裝で行くんだ。――そこで、同志アーベ、君だが、君は、明後日の朝の一番に間に合ふやうに、少しボス臭い恰好をしてステーションへ來てくれないか。君は、つまり、インペリアル・ヴアレーのブローレーまでの切符を、集つた人數だけ買つてくれりあいいんだ。そして、ボリの奴が不審に思つたら、ブローレーのメロン・ランチへ大至急手當り次第の勞働者を雇つたといふことにすりあいいんだ。それで、明日、事務所でワイスと會つて、旅費その他は貰ふやうにしてくれ。――よくはわからないが、敵の情勢如何によつて、俺達は、すぐにも××準備をしなければならないかもしれない。ともかくブローレーへ着いたら、鐵道線路に添ふて、但し鐵道から見えない距離を、カレキシコへ向つて歩いて來てくれ。――いいか、同志、俺は急ぐから、ここで別れる。握手。革命的グリーテンクズだ!」

大男のサムは、俺の手を握つたかと思ふと、町角の建物の蔭に、もう消えてゐた。

俺はわくわくする氣持ちを抱へて、再び店へ戻ると、ディーツゲンの「一勞働者の見た人間の頭腦の働きの性質」に眼を注いだ。しかし、活字は、むやみと横に流れて、アルファベットの一つ一つが、いろいろな帽子や武器を持つた無限の同志が、大陸を越えて、メキシコへ……メキシコへと雪崩れこむやうにしか見えなかつた。

同室の加賀見が、時折眼を覺して怪しんだほど、俺はその晩、昂奮で眠ることが出來なかつた。

「どうしたんだね、馬鹿に昂奮してるぢやないか?――何か事件でも起つたのか?」

俺は、シガレットへ火をつけながら、去りげなく答へた。

「いよいよ、左翼の連中が追放されるとなると――片山老人を、俺はよく知つてるのでね。」

「なに、老人は、ロシアへ行くよ。トロツキーも知つてるのだし、ルトガスの家にもゐたことがあるんだ。」

「さうか、それぢや安心した。俺達一同で、旅費でも拵へにゃならんかと思つてゐたんだが……」

それでも、翌る朝には、腫れぼつたい眼をして、俺は事務所へ出た。少し早いくらゐだと思つてゐたが、支部では大勢の同志が集つて、中央のテーブルを境に、重要な會議でもしてゐるらしく、默りこんで掛けてゐた。不思議と、誰一人發言する者がなかつた。人間の重みに悩んだ椅子が、頻りに悲鳴を上げてゐる。

俺の挨拶に對して、二三の同志が首を動かした。

――では、これから、その昨夜の失敗の顛末を報告しますが、それは、實に簡單明瞭な手違ひなのであります。同志パツト・オ・キーフイが、同志マルフイと最後の荷物輸送に從事されたのでありますが、不幸にして、ステーション傍に於て、同志オ・キーフイは、過日彼ともの爭ひをした一團のアメリカン・レツジョンに見つかつたのであります。その結果、二人の同志アイルランド人は、かなり勇猛に鬪爭したのでありますが、つひに彼等の捕へるところとなつて、同じトラックを押收された上に、直ちにいづ方へか護送されたのであります。俺達同志の信念としては、二人の同志が決して武器の輸送先を述べるものとは思ひませんが、今後、當然これを手蔓として、官憲は各方面を探査することと思はなければなりません。――從つて、我々がビル・ヘーウッド入獄以後の素晴しい活躍として計畫しました、メキシカリ・ソヴエート共和國××のプランも、ここに暫時伏せなければならない客觀的狀態に入つてゐると思はれます。――遺憾ながら、今朝まで本支部の知り得た狀態は、この程度に限られたものでありまして、同志オ・キーフイ及びマルフイに對する態策は、その所在地の判明するまで決定しないのであります。しかし、ここに列席された顧問辯護士ウイリアムス氏を通じて、極力兩君の保護救濟に努力することは申上げるまでもない。――だが、ここに、支部長としての私が、一言この事件の内容について批判しますれば、それは、我々アイ・ダブリユウ・ダブリユウ黨員は、もはや、個人的暴力などといふものを極力高揚しなければならない時代に入つてゐることだと思はれます。コムミユニスト・ハンド・ブツクにも、個人的腕力の必要は、必ずしも强調するには當らぬと云つて居ります。これは、一つの批判でありまして、今後も、凡ゆる問題の解決に、この

精神を以つて當りたいと思ひます。これで報告は終ります。」

會計兼支部長ワイスの意外な報告に、三十人ほどの仲間は、暫く息もつかずにぢつとしてゐた。どの椅子も、からだの重味に軋しむやうなことはなかつた。

と、突然、タイピストのエリノアが、立ち上つて、わあツと泣き出した。

それに續いて、滿場の椅子が一樣に古船のやうに軋しみ出した。

「俺達はロシアへ行く！」

「アイ・ダブリユウ・ダブリユウを、コムミユニスト・パーテーへ解消しろ！」

「ビル・ヘーウッドへ電報を打て！」

この最後の聲が、ペンキ屋のサムの咽喉をついて出ると、書記のコマトスが勢ひよく起ち上つた。

「同志諸君、ビル・ヘーウッドは、今朝、同志ワイス個人宛に、ソヴエート・ロシアの建設こそは、我々アイ・ダブリユウ・ダブリユウの年來夢みて來たことが實現されたのであると、個人的意見を送つて來たのであります！」

思はず、三十の椅子は蹴飛ばされて、この支部開設以來、かつて耳にしたこともないほどの朗かな笑ひが、朝の日光の下で爆發した。見る間に、俺達の仲間は、涙と笑ひと握手のうちに、大きい事務所を、一瞬間のプロレタリアのダンス・ホールとしてしまつた。

――一九三〇・七・二八日――（了）

（附記）この小説は、同志S・Nのアメリカに於ける經驗の一部を、約三時間の會話によつて創作したものである。近頃、プロレタリア文學運動の何物であるかを知らぬ、卑劣な辯舌家達は、私の『太陽の黒點』『セムガ』等の創作が、誰か、第三者の代作であるとさへ斷言してゐるほど（岩手毎日新聞七月二三――二六日）非階級的言辭を弄するのを見受ける。運動の過程には、つれにかういふ不健康な現象の生ずることは想像出來得るが、そのことを以つて自から階級戰の外へ、己を投り出すことを自覺しないデマゴーグ達は憐れむべきである。一言動機を明かにして、讀者に警告する次第である。



鞭

横光利一

船が長崎を出てからの最初の夜になつて私が夕食をとらうとしてゐると、急に無線電信がかゝつて來て一等船客の乙竹順吉と云ふ青年に自殺の虞れがあるから監視を賴むと云つて來た。私が事務長になつてから三年になるがこんな電信を受け取つたのは初めてなので暫くは思案にあまつたが自殺をしやうと云ふ男を監視してみるのは監視の仕甲斐があつて面白い。いつたい死ぬ男と云ふものは死ぬ前にはどんなことをするものなのか船の中で自殺をするからはいづれ投身するのにちがひないとしても、死のうとするものを死なさないやうに邪魔をするのも慘酷だしこれはどうしたものかと私もだんだん眞面目になつて來て、出來るなら何とかうまく自由に死なせてやりたいものだとも思ひ出したが、しかし電信がかかつて來てゐる以上私の監視區域で死なれては職責上都合が惡いのでさう自由に樂々と海中へ飛び込ませてもをけないのだ。

船室へいつてみると乙竹順吉は一見したところ自殺しさうに思はれない頼母しげな青年でどことなく私の義理の弟に似てゐるところが、私に此の男を死なしてはならぬと先づ思はせてしまつた。生きてゐる人間と云ふものは自殺なんかしやうと思つてゐる人間を軽蔑する癖のあるものだが、その人間を直接見ると急に今度は自分自身を軽蔑したくなつてくると云ふやうな一種の風格に迫られるものである。まことに自殺しやうと云ふやうな人間はわれわれ凡人とは逆の行動をしやうと云ふのだから相方の考へてゐる顔面の激しい差の間へこちらが落ち込んでしまふのだ。つまり二人の間へ渦が出來るのであらう。ところが自殺をしやうと考へてゐるものはこれもまたわれわれには分らぬ渦の中へ捲き込まれてゐるにちがひないのだから渦と云ふものはどこにでもあるものらしい。私は二人の間で巻いてゐる渦の中へはなるだけ捲き込まれないやうに氣をつけてひとつ乙竹順吉に近づいてみやうと考へた。それで彼がボルンデツキからサーブデツキへ出て來て欄干にもたれて海面を眺めてゐるときに彼の傍へよつていつて「あなたは乙竹さんでいらつしやいますか。」と訊いてみるとさうだと云ふ。それで私はこれはいきなり無電がいま這入つて來たことを彼に報らせてやるのも自殺をひきとめるのには效果があらうと思つたので、「實は私は事務長の坂巾と云ふものですが、今丁度長崎から無電がありましてあなたを監視せよと云つて來たのですが、御迷惑かもしれませんがしばらくお邪魔をさせて貰ひます。」と云ふと乙竹は別に狼狽もせずに「どうぞ」と云つたまゝ、また海の面を眺め出した。私はそれだけ云つて了ふともうどれだけ彼に嫌はれやうとかまはぬのでひとつつまらぬことでも云つて彼の考へを邪魔してやらうと決心した。しかし事實乙竹は無電で報せて來たやうに自殺をしやうと思つてゐるのかどうかそれだけでは分らない。ひよつとすると上海あたりへ行くからには自家へは自殺をするなどと嚇かすやうな様子をしてをいて他に何か彼の目的があるのではないかとも思はれないこともないので、先づ最切にぐいとひいてみるつもりになつて、「私たちはこんなに海ばかりを見てゐますとときどき生きてゐるのか死んでゐるのか分らなくなりますがあなた方いまのお若い方はもうこんな馬鹿な生活はあまりお好きでないやうですね。」と云つてみると、乙竹は

默つてゐて何も答へない。しかし私にとつては彼が默つてゐやうがどうしやうが翌日の三時になつて陸地が見え出すまで彼を死なさなければそれで良いのだから、それまでの時間を何ででもい、水の這入らぬ船のやうに一生懸命に詰め込んでゐなければならない。私はそれへ詰め込むものを言葉で詰めやうと思つてゐるので、もし私の言葉がそんなにうるさいんならそれなら彼は早く死ねば良い。何も向ふがうるさいからと云つてこちらが遠慮してゐなければならぬやうならだいいち此の世の生活ではないのだから。しかし、何が贅澤だからと云つて他人に自分の自殺するのを報らしめるほどの贅澤は此の世にはなからう、全く無駄なことをほかの他人にさせ續けてそして最後に自分がのんきに死のうと云ふのではないか。生きてゐるものと云ふのは死ぬもののために生きてゐるのではないなどと私はひとり胸の中でそろそろ乙竹順吉にぶんぷんし始めて來たのだが、それにしてもこれから明日の三時まで饒舌り續けてゐなければならぬと云ふのは死と競爭してゐるやうなものである。それにいちいち深く考へて饒舌つてゐては私は彼の考へに負けてしまふに定つてゐるのだからこれは何んでものべつ幕なしにぺらぺらやるに限ると思つてさて何から話さうかともう考へながらも、うつかりして相手がどうして自殺する氣になんぞなつたのかと訊き出したら彼に同情してしまひさうなのでなるだけそんな原因や理由なんかは耳に入れない工夫だけ絶えずしながら饒舌つていかねばならぬと思つて私は、「もうこのあたりから時間を一時間遲らせて支那時間にしないといけませんが、なさいましたか。」と云ふと、したと云つて乙竹はそろそろ私から放れやうとし出すので、私はまたその後を追つていきながら、「ラヂオも丁度もう上海のがかかつて來てをりますよ、サロンへいらつしやいましたら、」と云ふと、サロンももう倦きたと云つて笑ひながら、無電が來たと云つたが長崎の警察からか自分の家からかと訊き返すので警察の方からだと答へると、彼はまた欄干に肱をついたまま默り出した。それで私は、「無電と云ひましても何も私はあなたが御思慮のないやうなことはなさるまいとは思つてをりますが、しかしこれは命令ですからあなたが御上陸なさるまではお世話申上げなければなりませんので、どうぞその間だけは私に免じてお世話させていただきませう」と云ふと、乙竹は急に羞しさうに顔を赧らめながら、「僕は別に無電を打たれるやうな覺えはないんですから、僕を自

山にさせてをいてくれませんか。」と云つてさつさと自分の部屋の方へ這入らうとするので、部屋へ這入られて首でも縛られては困るから這入るなら私も一緒に這入つて行かうと思つて彼の部屋の入口までついていくと、乙竹はそこで振り返つて私に、「君は僕の部屋へまでついて來る必要はないぢやないですか。」ともう少々いらいらし始めたらしく突きかかつて來たので、「ええ、もうそれは重々失禮だとは存じてをりますが、あなたお一人にしてをきましてもしや申し譯のないやうなことにでもなりましては、親御樣に對してすみませんし會社の信用にもかかはりますので、どうぞ暫く」と云ふと、乙竹は泣き出しさうな顔をしながら自分のコンパートメントへ横になつて、仕方なささうに雜誌の頁をぺらぺらと捲くつてから煩く煙草を吹かせたかと思ふと、また私に向つて來て、「君、本當に僕は何んでもないんですから、もう休んでくれ給へ。僕は君に始終見られてゐるんだと思ふと苦しくなつて仕樣がないんです。だつてあまり馬鹿馬鹿しいぢやないですか。」と云ふ。馬鹿馬鹿しいのはこちらだ。「しかし、私も船には幾年も乘つてをりますが、かういふ役目を云ひつかつたのも今が始めてですからどんなことをしていいのか全く私にも見當がつきませんので、どちらも今度は災厄に逢つたのだと思つて明日まで我慢をしやうぢやありませんか。私にしましてもあなたがいくら何んでもないと仰言いましたところでそのまま御信用申上げていいかどうか分りやうもございませんし。」と言ふと、乙竹はそれはさうだと云ふやうに柔和になつて、「あなたはお酒は」と訊くのである。「いや、その事は—」と云ふやうに私は笑つて「お酒は私は頂戴しないことにしてゐますので、」と云ふと、乙竹はケースの中からウイスキーの瓶をとり出して、「どうもあなたを見てゐるとお氣の毒ですが、これも仕方がありませんから暫く僕も勝手な眞似をさせて貰ひます。どうぞ御ゆつくり。」と云ひつつひとり瓶の小口を美味さうに舐め始めた。私は彼に馬鹿にされ出した自分に氣附いた。が、私だつて今の彼なら、此の世の最後に邪魔するものを愚弄してから死んでやらうとも思ふであらうとも想像されて、先づ先づと我慢をしながら彼のしたいままにさせてやるのも生きてゐるものの勝利を感じることだと大きくなり、「お見受けしたところお痩せになつてゐられるやうですが、あまりそんなものを澤山召し上つてお身體に障りませんか。」と私もいい氣になり始めると、乙竹は「いやもう、こんな

身體も今のうちですからなるだけ使つとかないと後で役に立たなくなりますよ。」と體を翻へして來られるので、「ひ私も面白くて相手が自殺をする男だなどと云ふことは忘れてしまひ、「何んでございますか、上海へは度々いらつしやるんでございますか、もし初めてでいらつしやいますなら面白い所ならいつでも御案内いたしますが、御遠慮なくどうぞ。」と云ふと、乙竹は親しさうに笑つて「あなたと一緒なら安心して遊びにいけさうですね、ひとつお供をさせて貰ひませうか、何分僕は初めて、なもんですから、行きあたりばつたりに面白い所を覗いてみやうと思つてたんです。」と云ふので、「では明日は御一緒にダンス場へでもひとつ」と云ふことになつたまま暫く私も默つてゐたのだが、ふと、氣がつくと、一緒にお供をしたいと乙竹が云つたのは死出の旅路へ一緒に行かうと云つてゐたやうな氣持ちがして、無氣味なことを匂はす男だと思ひながら、「お供をさせていただくのも結構ですがあなた方お若い方と御一緒ではわれわれはもう骨折り仕事でございますね。一時はこれでも他人様には遜れをとらない方でございましたが、もう此の頃では第一足がききませんでございますよ。」と云ふと、乙竹は私の表情から私の云つた底意に初めて氣附いたやうに眼を光らせながら、「あなたのお身體つきではどうもあまり太つてらッして汗を拭きじと踊りとでも云ふやうでさぞお苦しいことでせうね。僕のやうにかう瘦せてゐてはまたあんまり輕すぎて困るんですが、まだ太つてゐるより輕い方が僕らの時代には幸福ですよ。」と云ふ。

私は乙竹がそれほどまでの冗談を云つて揶揄ふやうではもう死ぬ氣使ひはないと思はれたので、私の部屋へ煙草を取りに行かうと思つて立ちかけると、今度は乙竹が私の後から追つて來て、私が廊下を曲ると彼も曲り、私が梯子を降りると彼も降りるので「どちらへいらつしやいます」と私が訊くと、「いや、ちよつとそこまで」と云つて、まだ私の後からついて來るのである。これはもしかしたら死ぬ前には非常に淋しくなつて人から放れられないのではないかとまた私は私で思ひ出し、それでは矢張り彼の後をつけ續けてゐなければと思つて「どうぞお先へ」と云ふと、乙竹は私を見上げて「ぢや、お先きへ」と云ひつつ階段を昇るのだが、私の隙を見て海へでも飛び込むつもりではないかと思ふと、「お先きへ」と挨拶した彼の言葉さへ籠つて來て私の足も自然に早くなりサルンデッキへ出て漸く振動を強めて來た船體を感じながら二人は

泣んで海面を眺め始めてゐても、無言が續くと何となく顏にあたる夜氣さへ大げさに感じられて來るのである。「もうだいぶん皆さんに暈が廻つて來てをります、があなたはいかがです。船にはお强くていらつしやいますか、」と私が訊くと、「いや、少し苦しくなつて來ました。」と云ふ。それではウヰスキーを飲んだり私の後からついて來たりしたのは暈をなくするためだつたのかと思ふと、私も氣が拔けて、「それではもつと散歩をなさいましたら、」と彼をすすめて甲板を歩き出した。すると、乙竹は私に名前は何と云ふかと訊くので名前を云ふと、「僕はあなたにこんなに御厄介にならうとは思はなかつたですね、何とかこれはお禮をしなければいけないと思ひますが、」と云ひつつ急に立ち停つて暫く默つてゐてから、また歩き出して、「よほど苦しくなつて來ましたが、これで二十五度まで來てゐるましやうか、」と訊いたかと思ふと、急に私の肩へ手をかけて「あなたはよほどお丈夫ですね、十八貫もございますか、男は重くなくちやいけませんよ、僕は輕くて大失敗をしましたが、船の沈むやうなときは輕い方がよいですね、」と無理に快活にならうとするので、私は彼がよほど苦しいのを我慢をしてゐるのだなと思つたが、結局は苦しい方が生命を續けるには役に立つので、そのまま彼の胴を支へるやうに抱きながら甲板をぐるぐる廻り出した。私は彼をさうして抱きながらも、こんなにされてゐたなら彼とて飛び込むことも出來なくて困るのではないかと思つてもみたが、しかし、それにしては海へ飛び込むやうな樣子も彼に一向にない所から考へるといつの間にかもうそこまで私が彼に油斷をさせられてゐるのではないかと逆に用心をし始めて、しつかりと彼の身體を抱き續けたのだつたが、私が彼を支へやうとすればするほど彼は私にもたれかかつて來て、これでは船の暈が酒の醉ひに變つて來たのではないかと思はれるほどだんだん私が疲れて來た。それで私は「お苦しければお部屋でお眠みになりませんか、」とすすめてみると、部屋へ行かうと云ふから、それからまた私は彼を部屋まで運んでコンパートメントの上へまで乘せてやると、乙竹は感謝の意を表しながら、「どうもあなたには厄介のかけ續けですみません、何かお禮をしなければ、」とまた云ひつつあたりの自分の持ち物を搜すやうにするので私は、「あなたにお禮を云はれるやうなことなんかしてゐるませんよ。却つてお邪魔をしてゐるやうなものですから、」と云つて彼を制すると、彼は眼を閉ぢたり開けたりしながら、

「君、坂中氏、もう眠んでくれませんか、僕はこれからちよつと眠りたいんです、どうぞ。」と云ふ。「おや、どうぞ御ゆつくりお眠みなさいまして、私はここにもう暫くゐさせていただきます。」と云ふと、乙竹は眩しさうに眼をはちはちさせ續けて、

「君、眠るときまであなたに厄介をかけてはすみませんね。僕は酒にも少し醉つてゐるし船にも醉つてゐるので、どつちの醉ひの方が本當だか分らないんですが、しかし、僕はあなたを惱してるんぢやありませんよ。あなたはさきから僕に惱されまいとばかりしてらつしやいますが、僕はあなたの御親切なお心はよく知つてるんですから、どうぞ僕を信用して怒らないでゐて下さい。もう暫くすると、あなたは僕に怒りなさるに定つてゐますが、そのときはそのときであれもああ云ふ惡い奴だと思つて下さい。もう暫く眠ませて貰ひます。」と云ふと靜になつた。私は彼が眠つた振りをしてゐるだけだと思つたので、彼の横の椅子の上で雜誌を見ながらときどき乙竹の方を見るやうにしてゐる、といつまでたつても乙竹は眠つた振りをしてゐるので、それでは本當に酒が廻つて眠りついたのであらうとも思はれ出し、耳を彼の口もとにつけて呼吸を窺つてみると確にどうやら眠つたらしい樣子である。私は我慢をしてゐた煙草をとりに自分の部屋へ歸らうかと思つたが、それでもここまで見張りをしてゐて急に今になつて隙を盜まれてしまつては取り返しがつかぬので、まだまだ彼が眠てしまつたものとは思はないやうに用心をしながらその場に腰を据ゑ續けた。ところがもう殆ど夜が明け始めて海面がそろそろ濁り出した頃だつたであらうか。私は彼の顏色が普通の色とは違ふので脈を見るつもりで手に觸つてみるとひやりとするのだ。私は直ぐ彼の用ひたウヰスキーの小瓶を手にとつてみたがもうそのときは遲れてゐた。瓶の中に仕込んであつた砒素はもう完全に彼の身體を廻つてゐるのだ。私は私の習慣から大きな海ばかりに氣を取られてゐた自分の間拔けさに驚いたが、それにしてもさうまでうまうまとしてやられやうとは思はなかつたので、暫く死體になつてゐる乙竹を眺めたまま、彼の最後に謝罪した言葉を思ひ出しては生きてゐるものの馬鹿さに打たれてゐた。しかし、彼にしても一度死ぬ覺悟をしてゐたからにはまだまだ他の方法も用意してあつたにちがひないのだ。そんなことにも氣附かなかつた私は、それだからこそ彼の自殺をそんなにも助けて鞭打ち續けてゐたのでもあつたらう。



嵐を衝いて

徳永直

一　社會民主々義

1　T・ワン、T・ツウ、T・スリー

氷雨の降る傳通院の裏坂を、先頭の阿彌陀帽が、兩腕にガッシリ抱いた團旗を中心に、會場を脱出した休戰反對派は、頭からヅブ濡れになりながら、駈け下りて來た。

捲かれた團旗の、槍の穗先が、氷雨に濡れて青く光つた。

……吾等は死すまで×旗を……

男達に負けずに駈けてゐる女達の中で、唄歌が起つた。クルリと捲くつた着物の裾ウラまで、泥汁をハネあげながら、房ちやん達が怒鳴つた。仰

向いた若い男や女達の顔に、氷雨が涙のやうに流れた。

…捧げてす、むを誓ふ…

男達も唄つた。いや唄つたのでなくどなり返したのだつた。後方から前方へ、そしてまた前方から後方に、お互ひに励まし合ふやうに怒鳴り合つてゐるのだつた。唇は寒さのために紫色にふるへ、唄は調子ッぱづれになつたが、そんなことはどうでもよかつた。誰かゞ叫べば、誰かゞすぐにこたへた。六七十人の若い休戰反對派は、その叫び聲を、各々の胸に呟きながら、一樣に身體の心底に、熱いものを感じてゐた。唄聲は、一番先頭から、最後の女達の一人まで、みんなの心を、目刺し鰯のやうに、一すじの糸につらぬき合してゐた。

坂を驅け下りて、長屋の路次を二つまがると、爭議團本部の前へ出た。嵐の去つたアトのやうに、本部は何處も此處も開け放しで、散らかつてゐて、人影がなかつた。何時も張り込んでゐるスパイ達も、今日は大會の方へ動員されてゐた。

團旗を眞ン中に於て、みんなはそのまはりに目白押しに坐つた。おくれ走せにやつてくる者もだんだん多くなつた。二階から、階下の六疊、八疊打ッ通したところもいつぱいになつて、椽側まで溢れた。ワケなしにアトからついて來た者は、前方の男の肩につかまつてハシ上りながら、團旗の槍の穗だけめつけると、何だか安心したやうに腰を据へた。

二階で、杉本(阿彌陀帽の男)、守家・清瀨・久下等反休戰派の先頭に立つた靑年達が額をあつめてゐた。十四五人の、二階の最高幹部室にゐる手合は、みんな若い者ばかりだつた。今朝までの本部の顏觸れとはすつかり變つてゐた。たとへば、杉本・守家なぞは、爭議開始以來本部の二階にあがつたことは始めてゞある。彼等はいままで秘密の戰線についてゐたのだから……。で、彼等は早急に如何にして此の難處を切り拔くべきかで協議せねばならなかつた。

『アジトとの連絡は?』樣子を知つてる清瀨が、杉本に訊いた。

『斷たれてる!』如何にすべきか? 事態は急であつた。

清瀬はとにかく最幹共の釋放運動を起さうと云つた。杉本は、最幹會議の中に於ける從業員代表側と組合代表側との軋轢を云つた。そして直接吾々はアジトの命を待つより他はないと云つた。

「たとへばだ、萩村・山浦・細井・伊藤・大石の一派は、まだ勞働組合運動から一歩も拔け出てゐない、彼等は一にも二にも、經濟的勝利にのみ縋りついてゐる。今となつてはたゞ解雇者の多くなることばかり恐れて、遮二無二、ホコををさめやうと考へてゐるんだ、だから……」

杉本は、穴のあいた阿彌陀帽の上から、ゴシゴシ頭を掻いた。

「だから、中井や寺石、特に寺石と萩村は衝突が激しい、寺石は萩村を監視しろとまで云つてゐる」

最幹會議の中に於けるこうした對立は、杉本や、宇家の他を除いては初耳だつた。

「そこで、中井も決心したらしい。アジトは最近、このサンヂカリズム派に對して、壓迫を加へると共に、爭議を最後のマッセンストライキに導いてゆく方針を、この最後まで持ちつゞけてゐるものだと俺は考へる」

「異議なし！」久下と、清瀬が一緒に云つた。

「サンヂカリストに、政治鬪爭の價値なんかわかるめえ」

「博同印刷の開拓者（萩村のこと）も、時代が疾つくに過ぎたんだ」

若い者達の頭には、福本イズムの「政治的價値」が百パーセントに占領してゐた。

「おい杉本ゐるか？」

階下から、太かい男が上つて來た。色が黒くて、唇の厚い、一寸黒んぼ見たいな若者で、印度虎といふ渾名を持つた印刷工だつた。

「レポだぞ！」

印度虎は、小さく折つた封筒を、阿彌陀帽の鼻ツ先に突き出した。

「來た？」

直覺的に皆の頭にそんな感じがした。杉本が封を切ると、皆が顔を寄せた。

指令九七號

一、本日午後×時、例の場所に於て、T・ワン會議を持つべし。

一、會社との交渉は更に續行す、徹底的に休戰派を驅逐すべし。

一九二六・××日

T・ワン委員　杉本殿

A

「そら見ろ！」

杉本はすぐ立上つて云つた。

「守家、表へ出ろ！」

反休戰派擴大運動は、殘つてゐる人々に任かして、阿彌陀帽と、トンビ姿の守家とは本部を出た。

レポが飛んで、T・ワン委員は、定刻前に集合した。

暮れ合ひの、灯の入つた白山藝妓街の裏通りを、委員達は思ひ思ひの變裝で、葬儀屋の裏二階に上つて來た。第一班、守家、第二班、次田、第三班、杉本、第四班、黑岩、第五班、關口(冨ちやんのこと)、第六班、宮森……。

T・ワン會議とは、特別警備第一委員會の略稱である。この特別警備は、爭議團表面の組織特警とはまた違つてゐた。全

然秘密に屬し、直接アジトとの連絡を持つ以外には、他の組織とは何の拘はりも持たなかつた。しかし事實に於ては、T・ワンは、班全體の細胞に責任を持ち、T・ツウは、所屬班内細胞のT・スリーに對して責任を持つてゐた。更に、T・スリーは班内細胞中のエゼント(T・スリー候補者)に對して責任を持つてゐた。

爭議團全體の、あらゆる活動は、このT・ワンから、T・スリーに至る委員會の活動によつて刺戟され、輿論を形造られてゐたものだつた。が、團員の多くはその存在を知らずに過ごしてゐたのだ。

召集者の杉本が、まづ口を切つた。

『われわれのアジトは、尚健在であることを、まづ諸君に報告する』

『ありがてえツ』

今日、豚箱から出て來たばかりの黒岩は、女の着るやうな柄の、ドテラの下からむき出した太い毛ずねをハタいてよろこんだ。

『そこで、アジトの誰かゞ出席するまでに、吾々は、今日の狀態に於て、切迫した今日の事情の下でこのT・ワン會議は何をすべきかを討議したいと思ふが、異議ないか?』

『異議ねえ』

細面の眼のよく光る第二班の次田と、小男の富ちやんが云つた。

『たゞし、決議は一切出來ないぞ』

杉本が念を押した。

『もう、俺の班は、全體の統制が利かなくなつた』

次田が卒直に云つた。

『そうだ』

他の二三が同感と云つた顔でうなづいた。

『裏切りは續出するし、班長會議は、帆柱のねえ舟みたいに、フラフラしてやがるし……』

次田は、猫脊を益々前へ屈げて續ける。この男はまだ廿三四だが、早くから植字工になつたせいか目立つて猫脊だつた。

『もう、俺たちが、暴力を持つて引き止めるより他に道がねえと思ふ』

『バカ、それぢや分裂を大きくするやうなもんぢやねえか』

六班の宮森が云つた。胃脚氣で青ぶくれしてるこの印刷工は、この一座で廿六の一番年嵩だつた。

『ぢや、てめえどうしたらいゝと云ふんだ？』

次田はムキに喰つてかゝつた。

『せつぱ詰まつてんだぞ、今更說敎の時期ぢやねえや、おたんちんめ、最幹會議だつて半數はヘコたれてる今日、そんな日和見で間尺に合ふかい！』

『バカ』

宮森はよくバカをのつけから云ふ男だつた。しかし、相手の次田より落付いてニコニコしながらバカと云つた。

『おめえの暴力とかを、後方へつかふんでなく、前へむかつて投げつけるんだ、前へ！』

『……………』

次田は默つて、言葉の意味を考へてから、——そうか——とうなづいた。

彼等の間に、新らしい『政治鬪爭』の芽がグングン生長してゐた。彼等は一切、合切を、政治的價値に換算する鬪爭方法を學びつゝあつた。その點で、同じ陣營に在りながら、萩村達は、すつかり違つてゐた。せつぱ詰まつた狀勢の中で、萩

村達は暗くなり、見透しがつかなくなつてゐるのに反して彼等はせつぱ詰まつた狀勢の中から生れ出て、次の輝かしい鬪爭を見透し、希望を持つてゐた。

『で、此際、われわれは……』

次田が、また前へ乘り出した。この男はよく喋べつた。默つて聞いてれば一時間でも二時間でも喋べつた。眉毛の薄い、形のいゝ鼻梁を持つた青年は、お經を讀むやうに、疲れることなしに喋べる。

『だんぜん、爭議團大衆の前に、公然と姿を現はすことが必要ではないが、T・ワンからT・スリーに至る爭議團前衞が、敢然と姿を出現することに依つて、反休戰派の勢力を擴大することになりはしないか……』

皆もそれを考へてゐた。しかしすぐは誰も云ひ出さなかつた。抹香くさい寺の葬儀屋の二階の四疊半は、なまめかしく出來てゐた。色紙を貼つた衝立と、朱塗の衣紋掛と……。外戸は風が騷いでゐた。秘密は內部に護られてあつた。皆は風の音を聽いてるやうに眼を瞑つてゐた。守家が云つた。

『そうだ、そして休戰派の民主々義どもがのさばり出した今日、いやでもそうしなくちやなるめえ』

守家の云つてることは、室中の者の云つてることだつた。そのとき、

『中止!』

と、杉本が手をあげて、皆を抑へた。彼は背後の狹い階段に足音をきいたからである。

釣鐘マントに角帽を冠つた男と、毛皮の襟のついたトンビを着た男が入つて來た。角帽をのけるとそれが中井で、もう一人は毛皮の襟のマントの下から、油じみた菜ッ葉服の南とだつた。

『フフフフ』

皆が、その變裝を脫ぐ二人の樣子を見て含み笑ひした。しかし、中井はニツコリともせず相變らずノンキな馬面を、ま

つすぐに皆の方へ向けて坐つた。

杉本が、今日の總會のことを云はうとすると、中井がそれを抑へた。

『知つてゐる……。で、會社側との再、いや三度目の交渉は、更に續行することになつてゐる。交渉委員中、高木、秋村、他二三は、既に今夕に豚箱を出されたんだ、所謂交渉のために……』

『ホウ！』

中井は皆のおどろいた顔に頓着なく、

『それは支配階級の手だ！　元氣のいい分子を引ッこ抜いておいて、交渉をさせやうと云ふのさ、むろん骨抜きの班長會議の回答なんかは會社の方だつてアテにしてない！』

皆は、まじまじと中井の馬面を見詰めてゐた。それを南が、ニコニコしながら、一人一人の眼をさぐるやうに見てゐた。此の百姓みたいな男は、評議會關東地方の爭議部長で、この爭議の責任者であり、アジトの首席だつたが、それを知つてるのは、ホンの僅かの人々だつた。

『諸君は、よく團旗を護つて來た、そして今後も護らねばならぬ、成程爭議は、經濟的には正に敗北であらう。それは爭議の當初から見透されてゐたものだ、しかし、要は政治的にどれまで勝ち得るかだ、死もの狂ひの資本の攻勢に對して、それを政治的に導いてゆくより他に、吾々の運動の勝利、そして展開の道はない！』

皆には、中井の言葉が、よく判つた。で、そのたんびに、ガクンガクンとうなづいた。

『そして、こうした時期に、怖るべき日和見が、妥協派が發生した。いや、その正體を現して來た。それは秋村を中心とする一派だ！』

この言葉は、皆の頭にガクンと來た！

『勿論、彼等はハッキリ意識してないかも知れない、しかし、彼等を打つちやつてはおけない、然るべき方法を講じなければならぬが、それはまづ吾々に任かしておいて貰ひたいんだ』

『そこで……』ゴクリと咽喉を鳴らして、中井はすぐつゞけた。

『諸君の任務だが、T・ワン會議は、直ちに行動にうつれるか?』

杉本は、――ん――とうなづいて見せた。

『T・スリーまで動員が利くか?』

『むろん!』

杉本は確信を持つて答へた。それまで默つてゐた南が、胡坐のまゝ皆のまへに、膝を寄せて來た。

そして三枚の、青寫眞を、皆の前へ出した。皆はそれを覗き込んだ。

青寫眞は、會社の構内××だつた。細かに、各工場の入口から、事務所の位置、輪轉機室の、輪轉機の据付位置まで、精密に描かれたものだつた。

それは、嘗て、あのカフエー・カナリヤの二階で、あのグロテスクな室で、中井、八尾、そして今は東京にゐないと云ふ綿政と、そこへレポを持參した秋村の注意とで出來上つたあの地圖だつたのだ!

八ツの頭が、室ン中でピッタリ密着いた。のぶとい南の咽喉に嗄れる低い語尾がかすかに洩れるだけだつた。

約廿分!

南が顔をあげると、つゞいて、ヘシ折れた草が頭を持ちあげるやうに、緊張した顔が、以前の位置にかへつた。

『皇國の興廢、此一戰だ!』―

南が云つた。南らしいノンキな言葉だが、南自身の聲も、かすかにふるへを帶びてゐた。みんなも默つてゐた。二分、

三分、五分！　みな默つてゐた。中井が沈默を破つて、ピンと云つた。

「ぢや」

そして南と二人で立上つた。

『大丈夫……』

杉本が坐つたまゝ仰向いて、手を指しのべて云つた。

二人の足音が階段下に消えると、次に、次田と、富ちやんが立上つた。五分ばかりおいて、杉本が立上つた。そしてまた十五分ばかりして、宮森と、黒岩と……。最後に守家が、この「つれ込み」家の主人に、金三圓を拂つて、出て云つた。

2　奴隷に正義はない

氷雨は降つたり止んだりした。

斷れ目を、風がさわいだ。本堂裏の墓地に、塔婆と石碑の數百、數千が、古めかしく、そしてまた威嚴をもつた馬鹿々々しさで、氷雨と風の中で、×××のやうに、一切の世間の出來事に無關心で、尊敬と犧牲とだけを要求してゐた。

そしていま、この墓地から、傳通院本堂の巨大な廻り廊下や、廊下の椽下やに、人々が溢れてゐた。若者、親爺、中年の女工、暗い眼付、口汚ない罵聲、憤りを含んだ呼聲——三人、五人、或は十四五人も——繋ぎ綱の切れた小舟のやうに、ぶつつかり、もつれ、そして急に離れたりした。一つの群へ、一つのかたまりが落合つて、二ゝ言、三言話し合ふと、フイとまた、急にバラバラに、崩れたりした。

本堂の會場からは、所在なく、フラフラと人々が出て來た。古ぼけたトンビ、黒い作業服、上つぱりを持たない若い女達……。

「チッ、馬鹿々々しい」
「カッドウでも見たいわ」
休戦派とも、反休戦派ともつかない女工達の一部分は、本堂の廻椽（まはりえん）のてすりによつかかつて、ふてくされてゐた。
「何云つてんだい、お湯錢もないくせに――」
「ああ、いやだ、いやだ」
洒落者（しやれ）の、白粉をつけた女工は、遠く山門の向ふに見える賑やかな街（まち）を見て首を振つた。
「あんたそんなこと云ふと、高ちやん達に休戦派と睨まれるよ」
「何でもかまはないわ、カッドウ一つ見られるんぢやなし、家に歸りや、モウロクどもに、米がない、飯米（はんまい）がないつてこぼされるし……」
「馬鹿云つてらあ、苦しいのはあんた一人ぢやないつてことよ、
「だから飯も食はずに、勇敢につてんでせう。――おえらうござんすわ、
「チッ、この反動め！」
しかし、彼女達のこの會話は、彼女達の眞實のものを、一つも語つてゐるのではなかつた。彼女達の心底は、何が何だかわからないのだ。彼女達をひつぱつてゆく力の大きさの方へ引き摺られてゆくのだ。
彼女達は五人寄り、十人押しかたまつて、一つも中心がなかつた。彼女達の中心、高枝や、おぎんや、房ちやんたちは退場してしまつた。たゞ譯もなしに退場しおくれてしまつたので、中心をうしなつて、トコロテンのやうにフラフラしてゐた。
「いつたいあたい達はどうすりやいいの？」

彼女達の仲間の誰も答へなかつた。手製のオールバックも、束髪も、七三も、恰好の悪い銀杏返しも、天神まげも——彼女達は、無關心にボンヤリと、お正月になつても、半襟一つも買へないことや、兩親の愚痴や、失業のことや、毎日のまづい煮豆ばかりのお惣菜のことなどばかりが頭に浮んでゐた。

で、彼女達は、帆柱を失つた彼女達は、誰かゞ云ひ出したことには答へず、白粉をつけたオールバックが、活動寫眞のことを話し出した。皆が注意をすぐ奪はれた。林長二郎と、岡田時彦と、そして——ブルジョア名優は、彼女達に「夢」を與へる。お經が老人達に與へるクラシックな「夢」であるならば、彼女達の愛する時彦や、傳明や、長二郎は、ジャヅ的な「夢」を與へて呉れる戀人なのだ。其處には現世の苦痛の「一切の忘却」がある。

彼女達は「一切を忘却」しやうとしてゐた。其處から「くされ」が湧いて出た。眞實の階級的な「反抗」と「昂奮」が、しだいに蔭を押し消されつゝあつた。

本堂内では——休憩であつた。もう二時間も休憩をして、班長會議は、奥の控室で、いつまでもこれも中心のない議論が涯しなくつゞいてゐた。

休戰派には、理論がなかつた。それで時の推移を待つてゐた。消極的にボイコットすることによつて、蔭で愚痴を云ふことに依つて、お互ひの心を、お互ひでサビさしてゆくことによつて——休戰を望んでゐた。反休戰派が叛旗を奪ひ、退場したことは、自然發生した休戰派の正面の道をとざしてしまつた。班長會議は決議を引つ込め、休戰の希望者達、疲れて、フテくされてゐた親爺達は、だから——本堂を出て、フラフラと、本堂の廻りを、墓地をウロついてゐた。

斑點だらけの中折帽を冠つた作業服が、墓地の、ギラギラ光る花崗石の碑の後へ近づいていつた。

碑のそばに、仲間の機械場の親ぢが二人立つてゐた。

「どうする?」

近づいた中折帽が眼で探ぐりながら云つた。相手の二人の眼も警戒してゐた。黄色くやけたトンビを着たのが、近づいた仲間の眼色を讀んでゐた。

『どうつて、おめえ、アハハハ』

とつつきの惡い笑聲を出した。中折帽も笑つた。一寸三人共默つてゐた。彼等は、勞働者は、進むときは晴れやかになり、元氣になるが、退くときは、陰氣になり、疑りぶかくなり、暗くなるのだ。

中折帽が、相手の腹の見當をつけて云つた。

『俺もストライキいやんなつちやつた、これぢやまるで、おめえ……』

そして相手の眼色を見た。相手に警戒の色が急に解けた。トンビが歩き出した。二人が從いていつた。古い塔婆の陰で三人が立止まつた。

『俺らもいま二人で話してゐたとこだ』

四邊を見廻してからトンビが云つた。

『しかし、正面から俺らあ工場に入りてえとも云えねえしな』

『ん』

中折帽がうなづいた。――若え奴等(T・委員會)につけまはされたら、やりきれねえしなア――

『で、よ』

トンビがしやがんだ、他の二人もしやがんだ――。

『會社にや、もう五百人もゐるつて話だよ。おめえ知つてゐるか、あの普通警備隊にゐた大野よ』

『それがどうした?』

『昨日から工場に入つてんだとよ、あいつが！』
『ホウ、あんな強いことを云つてた奴が？』
中折帽がしさいらしくうなづいた。傍で今迄默つてゐたトンビのない羽織の痩せたのが附加へた。
『大野だけぢやねえ、松永も、よ、ホラそれから加瀬もよ、梅田も、其の野郎もよ』
『ヘエ』
中折帽は、自分だけ馬鹿正直だと思つた。
『でな、新田』
トンビは聲を低めた。
『俺ら、明日の晩あたり、みな樣子を見た上で、工場へ入つちまはうと思つてるんだ』
中折帽も、羽織の男も默つてきいてゐた。そして中折帽の新田は、グヅグヅしてゐられないと考へてゐた。拔がけしたい、今夜のうちでもおやぢ（彼等の職長）をたづねて見やうと考へてゐた。しかし口には出さなかつた。彼等は互ひに瞞しつこしてゐた。
『シツ』
トンビが手をあげた。三人は何喰はぬ顔で、塔婆の蔭を離れた。眼を光らせた若い男達三四人、いそぎ足で見廻つて來た。その中に久下も雜ぢつて見えた。
青年達の間に、急速に組織された反休戰派の糺察隊であつた。
だが、休戰派の群は、五人、十人となつて、糺察隊の眼を掠めては、うろついてゐた。其處にかたまり、此處をうごいて、ふらふらしてゐた。

『だいちよ。この爭議の原因からして、すこし若い連中の尻馬に乘つたんだよ』
境内の銀杏樹の下で、十二三人が不揃ひな感情を顏に現はして立つてゐた。
『いくら組合が強いからつて、遊びの職工まで馘首にしちや不可ねつてえ方はねえ』
ヤケにバットの吹がらを踏みつけながら、勇み肌の、ルラー場の親爺が、ひとりで啖呵を切つてゐた。まはりの皆は話を聞かぬふりしてそつぽ向いてゐた――。こんなことが、若し昨日云はれたら、彼は殺されたかも知れなかつた――棒杭の火が消え始めると、その燃えつつある棒杭自體のガスが湧發するやうに、お互ひが、お互ひでビックリするやうな、ガスが其處、此處に、醜くさらけ出された。
或るものは默つてきいてゐた。「勇み肌」ルラー場の親爺の云ふ事は大變な間違だが――それを知つてるが――口に出して訂正しやうとはしなかつた。そつぽ向いて默つてゐた。また或るものは、ルラー場の親爺と同じ樣に考へてゐた。理想はええがなア、もう俺らは根がつゞかねえ――。
彼等は疲れ、そして暗くなつてゐた。何時の間にか、社會民主々義のサビが、彼等をすつかり蝕み、つくしてゐた。
『初ちやん、のぶちやん、松ちやん……』
廻廊下の下の方で、房ちやん、ぎんちやん、高枝なぞが立つてゐた。
呼ばれた廻椽の上の女工達は、慌てゝ振り向いた。高枝がキッと云つた。
『婦人は第三本部へ直ちに集合――』
オールバックも、七三も、銀杏返しも、おどろいて立上つた。林長二郎の面影が、一足飛びに、眉根をキツくしめた高枝の顏へ變つたとき、彼女達は慌てた。
房ちやんが、がらがらした調子で怒鳴りつけた。

「一時間以内に、本部の點呼に洩れた者は、裏切りと認めます――」

女達は一人殘らず、高枝達に引率されて、第二本部へ引きあげて行つた。

しかし、男の方はそうたやすくゆかなかつた。班長會議は、富ちやん、清瀬達が、アジトから出された最幹會議を代理する指令を示したときすぐ服從したが、休戰派の親爺達は、一人減り、二人去りして、第一、第二本部の點呼に來た數はわづかであつた。

そして、彼等休戰派は何處へいつたか？

「御めんなさい、」

第二印刷課の職長の家の入口で、背開の中折帽が立つてゐた。

「御めんなさい」

おづおづした聲で、もう一度呼んだ。内部では禿頭の肥つた職長が、鼻の頭を赤くして晩酌に醉つてゐた。

「だれだ？」

中折帽はずつと入つて行つた。酒の相手をしてゐた職長の乾分が振り返つて玄關口を覗くと職長に云つた――また野良犬がけえつて來やしたよ――。

職長は盃を口から離すと玄關口へどなつた。

「てめえ、何しに來た？」

中折帽は、覺悟して來たものゝやうに、玄關をにじり上ると、襖ぎわで頭を低げてゐた。

『面目もありやせん』
呟くやうな低い聲が――おお、誰に面目ないと云ふのか！
職長は見向きもせずに云つた。
『けえれ、けえれ』
新田は益々低く頭を低げた。四十づらさげて、これから何處に入れてくれる工場があるだらう。
『お腹立は尤もさまで……、どうかご勘辨なすつて下さい。今後は決して』
一つ二つ毆られても――新田は頭を疊にすりつけたまゝ、限りなく卑屈になつてゆく己れを意識してゐなかつた。奴隷根性が、イカの墨汁のやうに、彼の身體に充滿してゐた。彼は涙さへ出て來た。そつとふきながら、みじめに哀れつぽい聲を出した。
『どうか御勘辨なすつて……』
少しばかり頭を持ち上げたとき、しかし、惡い奴が傍にゐるのに氣がついた。酒の相手をしてゐる男は、仲間の僞公の野郎だつた。訪問隊だつた彼が、最初から裏切つてゐた僞の野郎を追駈けまはして毆つた記憶が一緒に湧いた。
僞の野郎は、新田の視線を感ずると、ニヤニヤしながら云つた。
『新田、おめえにや世話になつたなア、へへへへへ』
酒癖の惡い『僞』の野郎は眼をギラつかせてゐた。新田は「僞」の膝を寄せる氣配を感じながら頭を擦りつけてゐた。
『オイ、新田』
職長がフイに云つた。
『おめえ、工場に入れて貰ひてえといふのか、え？』

『ヘエ』

新田は顏をあげて職長を仰ぎみた。

『だがおめえ、會社はもう爭議團からは一切雇はねえんだぞ』

『……………』

『新規入社としてなら採用してやるんだ』

新田はよくわからぬと云つた顏をあげた。

『新規採用つてなあこうだ。おめえが從前勤めてゐた七年と何ヶ月といふのを認めねえんだ。早くいやフイたこだ。また賃銀だつて今度は十二社協定で出來上つた案に基くから、二割ばかり値下だ、それでよきあ……』

『え、それで結構で、どうぞお願ひ申します』

おお、奴隷に正義はない！　三ヶ月間を、血を流し、屍をさらして鬪つてきた三千の反抗の魂は何處へいつた？　彼等が三年前に多くの犧牲を拂つて鬪ひとつた二割賃銀値上と、十二社協定（東京印刷大資本家のカルテル）打破のために陣地をさゝへて來た、あのプロレタリア魂は何處へいつた？

『おやぢい』

醉つて靑くなつてゐる酒癖の惡い『爲』は、職長に云つた。

『おらア、こいつに一寸ばかり云ひ分があるんだ、かまはねえなア』

職長はニヤニヤしながら云つた。

『ん、少し度性骨を治してやれえ』

『爲』は、グラグラ酒くさい息と一緒に寄つてきた。

「やい貴様に殴られた分を返(かへ)してやるんだ」

拳が二つ、三つ、新田の鼻ヅラをかすめた。

黒い鼻血が、絲のやうに新田の口のあたりを流れた。

「貴、貴様ッ」

眞ッ赤に腫れあがつた頬のあたりを抑へて、新田は思はず膝を立て直すと、職長が冷やゝかに云つた。

「きさま、手むかいする氣があるのか？」

「……」

「口惜しかつたら爭議團に歸つて貰はうぢやねえか」

立ちかけた膝を浮かしたまゝ、新田は垂れる鼻血を片手で抑へてうつむいた。そしてやがてボツボツと膝を落してしまつた。

記憶せよ？　奴隷に正義はない!!!

3　退却と前進と

Dといふ經濟新聞社の三階の一室で、爭議團の交渉委員達が、もう一晩を明かしてゐた。

豚箱から出て來た高木、秋村、寺石、山浦、龜井、伊藤――それにアジト(表面は組合代表)から中井と南。

朝飯か濟んだアトで、社の給仕が、お茶を持つて來てくれた。窓から冬の弱い日射しが疲れた皆の顏を照らした。寢不足の充血した眼が、皆の形相を沈鬱にしてゐた。

そして特に、秋村や、山浦、龜井、伊藤たちの顏は暗かつた。窓越しに、秋村は多く考へ込んでばかりゐた。

大建築物ばかりの、この丸ノ内界わいは、あらゆる響きが、厚味を持つてゐた。重くて、こもつてゐた。はるかの下界で、自動車の警笛が、煙草のけむりのやうに、下からのぼつてきた。

背後のドアが、フイと開いた。

「やア、お早う」

調停者側の一人、このD經濟新聞社の社長石川氏が姿を現はした。和服の懷手した、野人風の男である。

「いまね、小林君から電話でね……」

皆が振返つたとき、ドアの傍で立つたまゝ、石川氏は風邪をヒイた聲で云つた。

「十時までに、會社の回答を持つてゆくといふんですがね、待つてて下さい」

中井はニッケル側の腕時計を見てから、

「アト、一時間半ですね、承知しました」

と云つた。石川氏はスリッパの音をさせて出ていつた。中井が南と顏見合せた。南がニヤニヤしながら低い聲で云つた。

「むろん、會社はつつぱねて來るよ」

秋村は南の方を一寸見たが、そのまゝ默つてゐた。中井は秋村の方を注意深く見てゐたが、これも默つてゐた。

室ン中は重くるしかつた。默つてゐればゐるほど、この八人の交渉委員達の間に、感情的にも距りが、溝が出來てゆきそうだつた。

秋村は立つて、室ン中をウロつき始めた。彼の頭の中には、幾つもむすばれてとけない疑問が成長しつゝあつた。

その疑問にはいろいろの形があつた。小兒病的な若い連中(彼は彼の古い鬪爭の經驗からこう考へる)に對する反感から湧きあがつたもの、寺石、中井達の陰謀的な策動に對する反感から湧いて來るもの、また山浦や、伊藤、龜井達——從業

員代表達の不平や、藤口などが反映して形を造りはじめてゐるもの……。

勿論、感情は感情とし、理論は理論とするだけの理性は失はないつもりだが――畜生！　若い奴らは、一にも政治的價値、二にも政治的價値といふ、いつたい「政治的價値」つて何だ？

なるほど――

ストライキを、社會的にアッピールして、政治的な效果から、爭議を有利に導く――と云ふことは從來やつても來たし、わかつてゐた。

しかしだ――。

廣くもない四角い室を、秋村は、右に往き、また左にゆき、そして立ちどまる。

しかし、勞働組合それ自體は飽迄經濟鬪爭の機關ではないか。しかも、今朝報告された團の情勢を見ろ！　裏切は續出し、團員は疲勞と困ぱいの極にある。彈壓は激しく、兵糧は絕へた！

そして、工場にはスキヤツプが五百から超へてゐる。

俺達は――

こゝで一應、ホコをおさめなければならない――。二歩前進のための一歩退却だ！

全員解雇！　成程、彼自身も團員をはげますときに、そう喋べりはした。しかしまあ考へて見ろ！　三千の人間が、一人殘らず失業するなんて、いつたい考へうることだらうか？　皆がそれを承知するだらうか？　少數の若い連中はとにかく、大部分のものが、默つてそれに從ふであらうか？

出來ない、そんなことを誰が皆の前で、宣告出來るんだ！

十年も、或は廿年もの、唯一の生活の箱の中から、永い習慣から――。

萩村はめまひをおぼえた。頭も肩も、三千の悲鳴の重みに抑へつけられて、室の隅の椅子に、兩手で身體を支へた。彼自身の廿幾年の職工生活が——妻子を抱へ、老いた兩親を抱へて街頭にほうり出される。——それが三千倍になつてのしかゝつて來る——。

「寺石なんぞの獨身者にやいゝさ、また、中井なんて職業革命家にやいいだらうさ、もちろん俺達幹部のハシクレは、かねてから覺悟してゐる。しかし、一般の世帶持や、數人の家族を養つてる女達はどうする——その苦みは中井達にやわからねえんだ」

山浦や、伊藤が、蔭で、萩村にさゝやいた言葉だ。その中には多くの偏見があることは、彼萩村だつて知つてゐる。中井が、たつた一人の母親を捨てゝ運動に投じてゐる彼が、そんな男でないことは彼にだつてわかる。が、しかし、何故に、第一、第二の解決機會を冷やゝかに見送つて、最後の全員解雇までに突つ張らねばならないか？

萩村は、自分の行くてを、そこで見失つてゐた。イタチに道を切られたやうに、右を向き、左を向いてゐた。政治的闘爭の展開が——眞實の××的闘爭への展開が、ぱつたり扉を閉ぢられてゐたのだ！

南や、中井、寺石達は、元氣のいい笑聲をたてゝ、アクどい女の話をしてゐた。どつちつかずの高木が、そのずんぐりした身體を、テエブルによつかゝらせて、ゲラゲラ笑つてゐた。

しかし、山浦、鶴井、伊藤達は、多く默りがちだつた。

要領のいい組合長高木を除いては、暗流はしだいに濃く、ハッキリと二つに別れはじめてゐた。

中井は、それを心で感じてゐた。笑ひながら、その馬面に光る小さい眼で、萩村の様子を、心で測つてゐた。

そして、重みにガッチリ堪へるやうに、彼の長い顋を、いつも、笑つてゐるときも、しつかりと、首の上にひきつけてゐた。

團の情勢は、成程悪い！　スキヤツプは五百を超へ、會社は事實、こゝ數日で、當面の作業には困らない程度に復活しつゝある。T・委員會からの報告を見ても、團員の多數が、かつて毆つた裏切に、毆り返されながら、工場にもぐり込みつゝあることがわかる。そして交渉は昨夜以來少しも進展しない。調停者團は、會社の意嚮（即ち、幹部總檢束後、骨拔きになつた班長會議に回答された、あの屈辱的條項）を傳へて、少しも進捗しないのだ。會社が恐らくは、從來の顧客（大和講談社、婦人界社を始め十幾つの大出版會社の註文）を見捨てゝしまはうとしてゐる決意さへ推察出來る今日——有利な經濟的條件の獲得は、殆んど絶望かも知れないのだ！

三千の失業者！

彼の心は、傷口を針でつゝかれたやうに疼く。よく光る小さい眼に、瞬間的に傷々しいまでに、堪へ切れない悲しみが、フィと通り過ぎる——。

しかし、それは誰にも氣付かれないほどの瞬間である。平常には——キラリとかわいてゐる。寢不足の血走つた眼は、鋭どくかわいてゐる。

三千の失業者のうめきを聽きつゝも、彼はガツチリと、かわいた眼で、敵の陣營から何一つ見落してはならないのだ！

無産階級は、大同印刷の爭議團だけではない。火蓋を切つて打ち出され始めた資本家階級の攻撃の第一發で、例へ三千の同志が斃れたとしても、そのために幾千萬の、日本無産階級のために、後退ざりしてはいけない。後退ざりすることは、幾千萬無産階級全體の死滅を意味する。

彼はかわいた眼で、ぢつと敵を、空間を睨んで、堪へる——。

全國評議會の麾下では、關東のN紡績、I鐵工所等等、關西では、H樂器爭議、W紡績等等、九州では、北海道では——、相踵いで打ち放す敵彈の十字火の下で、幾千の勞働者は、同志は、勇敢に××上りつゝあるではないか。全軍のためにた

と八三千の爭議員が全滅しても、一歩も××は許されぬ――。

中井は、長い顋をぴたりと、ひきつけて、かわいた眼で空間を見る――。

卑怯者去れ――。社會民主々義者よ去れ――。精鋭の數百の青年達は、まだ決死的に活動してゐるではないか。賴もしく、勇敢な若者達よ！　彼は、T・委員會の青年達を思ひ出すたびに、明るくたり微笑する！

そして――。

暗くなり、愚痴つぽくなつて來た秋村の擧動に絶へず注視を忘らない――畜生！　銹をのぞくためには、俺達は何者をも容赦はしないんだぞ――。

十時を、針が過ぎた。

南が、冗談を止めて、

「そろそろ來る頃だな、しかし……」

百姓男は、大きな聲で話した。

「いつたいこの爭議の調停者側は何回變つたい。えゝと、これと三度目だな」

「相變りましてか……」

寺石が、近眼鏡の奥で、眼だけで笑つた。

「いや、相變つたんぢやないさ……」

中井が皆に說明するやうに云つた。

「今度の、小林、渡邊、それからこの新聞社のおやぢ石川、この三人の調停者達は、個別的に見ると矢張り皆四井財閥のチヤキチヤキだ。小林が越後電力會社の副社長、渡邊が王子製紙社長、菱原の秘書、石川が四井財閥のお目付役、D經濟

新聞社の社長——これで調停者團の正體がハッキリとするだらう」

「第一、調停者團なんて、超××的な存在がありうると思ふのが間違ひだ。凡ては階級的利害にからむ、彼等の腕利き達が、表面は團の情勢が惡くなつてる現在に於て乘り出して來たことは、四井財閥の、いや日本の全資本閥が、一番戰鬪的で階級的な評議會に對して、今後の××を劃策するための前哨なのだ。大同印刷爭議が、大同印刷だけの問題でなく、全日本の勞働階級に直ちに起り來る、いや起りつゝある××××の最初の、烽火だといふことを、最も具體的に物語つてゐるものだ」

「でも、小林の野郎、そんなに爭議團が頑固を云ふなら、私は手を退きますと云つて、昨夜は歸つちまつたぢやないか」

高木が訊いた。

「なんの……」

南が笑ひ、ながら答へた。

「ありや手だよ、見てるたまへ、今日はまた洒ア洒アとやつて來るから……。うん、間違ひはねえよ、だから俺が昨夜云つてやつたんだ——勝手におひきなさい、別に俺の方で頼んだんぢやねえや——つて」

そのとき、階下の、この建物の入口で、自動車のバックする音が、きこえて來た。

石川氏が、ドアを開けて入つて來た。

「諸君、小林君と、渡邊君が來ました。ぼくの室へ集つて下さい」

「承知しました」

中井はそうこたへて、石川氏の出てゆくのを見送つてから、皆の顏を全部、テエブルの眞中に突出して、低聲で打合せた。

『いいかね』

中井は特に、萩村の方を鋭どく睨んで、

『絶對に、絶對に――だ。昨夜の決議通りだよ、それから一歩も弱音を見せてはならん。決議は念のため、もう一ぺん繰り返しておかう――』

第一、解雇者は昨夜讓歩した三百名以上は絶對に出さんこと、解雇者には三ヶ月分の手當支給のこと、第二、爭議期間日給全額支給のこと、第三、組合交渉權を認めること――。

『いいかね』

萩村は暗く頭を俯向けた。會社側は、前日云ひ途つた――三分の二解雇のこと、三分の一は會社任意採用のこと――で頑張つてるんだ。調停者はそれから少し色をつけてなら纏まる可能性があると言明してゐる。頑固に突張るより何故、他の條件を讓歩して半數でも工場に返してやるやうにしないか――。

しかし、彼も決議に背むくことは出來なかつた。八人が、社長室へ入つていつた。

室ン中に、半分白髪になつた五分刈頭に、べつかう縁の眼鏡をかけた五十あまりの洋服の紳士、小林を眞ン中にして、右が、同じ洋服の、四十位の敏捷さうな好紳士の渡邊秘書と、そして右に石川氏が和服で腰掛けてゐた。

『よう、あンたは、手をヒカなかつたんですか』

恍ぼけた南が、笑聲にまぎらせて、のつけから小林の痛いところを突いた。

『まア南君、さういやがらせを云ふな、吾々も持つて生れた世話好きでね、アハハハ』

渡邊秘書が、そばからひきとつて笑つてしまつた。小林といふ半白頭髪の紳士も、微動だに見せずニコニコしてゐた。

が、南と、渡邊秘書の笑聲が消えると、すぐとげとげしい空氣が、室いつぱいに殘つた。

給仕が、お茶を一つ一つ、テエブルの上へならべた。室中がだまつてゐた。渡邊秘書が云ひ出しさうにして、一寸機會を待つてゐた。

中井のかわいた小さい眼が、それを鋭どく睨んでゐた。――畜生！ 何か威嚇かしを云ふつもりだな――。

誰も咳一つしなかつた。渡邊秘書が、交渉委員達を一廻り見渡すやうにして口を切つた。

「實は、僕も、小林氏と同樣に、折角此處まで諸君と接衝して來たが、手をひかんければならんかも知れん――」

テエブルの上の茶碗の一つ一つの湯氣が、次第に消えていつた。皆の、心の動搖が、顏に現れるのを妨げないやうに……。

「ハハア、なるほど」

南が、かるくかへした。手ごたへが薄いとみると、思ひきつた樣子で、渡邊秘書は云はうとしたが一寸ためらつて、小林の方を見た。小林がそれを眼で受取つた。

「なんです、バカに勿體つけて……」

百姓男は、相手を呑んで出た。

「實は……」

それまで默つてゐた半白頭が、少し身體を起して云つた。

「會社は一昨日、爭議團へ申し送つたあの條件でいやなら、これ以上接衝する意志がないといふんだ！」

來た！

秋村達が怖れてゐたものが來た。

中井のかわいた眼が、キラリとひかつた。

――畜生！ 見くびつたなア――。

4　社會民主々義者

それは懸引ではない！

落付いて、半白頭の紳士が、テエブルの上のシガーケエスから、煙草をとりあげてゐるその面付でもわかる——會社の腹だ！

『ナルホド』

またゝき一つしないで、じつと睨んでゐた南が、咽喉の奥で云つた。そして、それきりでまた一分經つた。室中の誰もが、呼吸をしてゐなかつた。

馬鹿に一分間が永かつた。中井達の方で、何とか云はねばならなかつた。一秒經てば、一秒だけ見透かされるのだと思つた。それでもかるくハネ返す言葉が出なかつた。咽喉の奥につまつて出なかつた。

『……』

とうとう渡邊秘書に口を切られた。

『それでは、假にも調停者なる吾々三人の顏がたゝん、諸君へだけでなく、社會に對してもあまりに面目がないからなア』

皆の前にならべられてあるお茶が、すつかり冷めたくなつた。

中井の馬面が、みじんも動かない！

『そこで、吾々三人協議の上、手を退くまへ、も一度の、最後の調停案として、作つたものを此處へ持つて來てゐるんですが、さて——』

美しい鼻ヒゲを持つた渡邊秘書は、半白頭と、石川氏の方をジロリと見て、それきり口をつぐんだ。

「しかし、それを諸君と會社側にお見せするまへに……」

代つた半白頭が、煙草を灰皿にのせて、中井や南の顔をジロリと見た。しかし、相變らず、中井の顔は微動だにしない！

「諸君の腹を……、云はゞ覺悟を、きかしてもらはなければならぬ」

石川氏と、渡邊秘書の眼が、せはしなく、皆の顔を、探ぐるやうに動く……。

調停者の最後案！

それは正しく、文字の限りにおいて僞りはない！　大同印刷會社大川の意志は、この半白頭の越電副社長の意志であり、半白頭の意志は社長大川の意志なのだ！　四井財閥の、日本勞働者全體への××××なのだ!!!

中井の小さい眼は、傷むほどかわき、南の鋭どい兩眼は、にじみ出るほど血走つてゐる――。

そして彼等の中で、誰も一語も發しない。

一應、別室で協議すべきだらうか？

中井のかわいた眼が、チラリと萩村の方を見た。そしてすぐ以前の位置へ戻つた。

――不可ない！　萩村の奴は、休戰したがつてゐる。

こゝで、かんじんなこゝで――腹を見せたら、この紳士達は、今後の爭議のたびに、枕を高くするだらう！　××戰の全線に、動員されつゝある勞働者の頭上に、彼等は的確な照準を持つことになるだらう。一擧に××を浴せかけるだらう――。

そして腹をきかなければ見せられない調停案とは何だ！　内容は知れきつてゐる――。

中井はまたじつと、半白頭の顔に視線を据へて、つよく顋をひきつけてゐる。

「中井君、そんな考へ込む程大したことぢやないぢやないか」

渡邊秘書が、柔かくイナさうとした。

「此處まで闘つた爭議團だ、また會社側だつて、壹阡萬の資本と、三拾幾年のノレンを棒に振つてるじやないか、モウ負けるも勝つもありやしないぜ」

「まつたくだな、相撲なら同體に倒れたと云ふ奴だね、まあ一旦治めて、それから水でも呑んで、取りなほしたらどうだい」

伊藤や、山浦達がつれ込まれて、石川氏の言葉に笑はうとした。

「ウフン」

南が、少しおくれて、鼻で笑つた。

「水を呑んでるとこを、ポンと睾丸でも蹴られたらなア、アハハハ」

中井は、それでも笑はなかつた。

闘ひは一人と一人ぢやない！　大川社長が大同印刷壹阡萬と、三拾幾年のノレンを棒に振つて、尚頑強に突張つてるのは何のためか、印刷産業大資本家の十二社協定に、新たに復歸し、東京印刷同業組合の副頭取に、就任したといふのは何のためか？　濱阪、大川の握手は何のためか？

それこそ、四井財閥の、日本資本家階級の總××の先陣を承つての、彼等階級の總合××なのだ。

中井は、南と顔を見合した。

三千の失業者よ！　中井の兩眼に、瞬間に傷々しい影が通り過ぎる――そして三千の××よ、十字火の下に、進め！

一歩も×いてはならない！　中井はシツカリと顔をあげた。

「小林さん……」

不意を打たれて、半白頭と、渡邊秘書が、顔をあげた。

『吾々の腹は、昨夜お話した通り——です』

渡邊秘書が、いくらか慌てゝ、

『君、中井君、それじや話にならんがな』

半白頭は、重々しく云つた。

『おや、吾々も、手を退くより他はない！』

そこで、中井はつよく云ひ切つた。

『どうぞ……』

彼は、椅子から起ちかけながら、

『會社と同様、吾々も、調停をお斷りいたしませう！』

椅子が、ガタリと音をたてた。

南と高木も起ち上つた。他の者もつゞいて起つた。

それきりで、ドアを出ていつてしまつた彼らのアトに、八つのお茶だけが、つめたく殘つた。

『中井君』

石川氏がドアの外へ追ひかけて來た。中井は立止まりながら、じつと石川氏を見た。

『まあこれでお別れになるとしても、喧嘩別れはアトが惡い。いま晝飯を出すから食つてゆきたまへ』

『ありがたう』

中井は、階段の下り口に待つてる南達の方を見ながら、

「われわれも忙しいから。これで失禮しませう。爭議團員は空ッ腹かゝへて待つてますからね」

D經濟新聞社の玄關先に出ると、急に肌寒く、空ッ風が吹いてゐた。

丸ノ内の通りは、自動車道路だ。電車道までは、六七丁もあつた。中井を中心に、南、高木、寺石などが、先頭を歩いた。二三間おくれて、萩村達が歩いた。彼等の中心が何時の間にか、二つに別れてゐた。無意識のうちにも、こうしたところが現れた。

電車が來ると、一緒に乘つた。

「ぢや、俺は本部に、一時間ばかりおくれてゆくから、こゝで失敬」

水道橋で、それまで中井と打合せしてゐた南は、電車を下りた。中井が高木にさゝやいた。

「T・委員會の「明日の朝」の準備にゆくんだよ」

傳通院坂下の第一本部へ着くと、中井や高木を始め、萩村達も思はず玄關に上りそびれた。

たつた三四日のうちに、これは何といふ變りやうだ！

入口の門にかけられた「爭議團本部」の看板ははづされて見えなくなつて居り、椽先にひつちらかされた、ビラや、赤い腕章や、こはれた椅子や、水溜りに踏みにじられたインキのしみたテエブル掛や、焚火したアトや——そして、開けつ放しの泥によごれた椽先に、ゴロ寢してゐる團員達や——玄關ワキの受付は失くなり、上り口に、てんでにころがつてる下駄や、靴やが——一切の秩序が、何時の間に、何處にどう消え失せたのだ！

「おい、最幹が歸つて來たぞう」

玄關口に、火鉢を股にしてゐたトンビを着た製版の親爺が、威勢のない聲で、奥の方へどなつた。

「ナニ？」

奥の八疊や、六疊や、臺所の方まで、マントにくるまつたまゝや、寢て居るのや、不しだらに坐つて下らない話をしてゐる連中や、將棋を指してゐる皆が、そのまゝの姿で、ジロリと、先頭の中井を見た。

『たゞ今』

中井は阿彌陀帽を脱いで元氣に會釋してみせた。しかし、皆はジロリと眼を光らしただけであつた。冷やかな、疑りと輕蔑とだけで彼等は最幹を見た。

『どうでえ、皆馘首（くび）か？』

『まさか、皆馘首なんてこたあるめえ？』

秋村は、暗い面持で皆を見てから、默つて二階へ上つた。中井は返事をせずに、皆の顏ぶれを見て歩いて、それから二階へ上つた。

報告しろい！」

『うちぢや嬶子供が待つてるんだ！』

その聲を聞きながら、中井は二階へ上つた。――このてあひはモウ駄目だ――

『早速、應急方針をたてなきあ不可ない』

寺石は、亂雜にひつちらかされた、五つ六つのテエブルの上を、ひつかき廻して歩いた。班長の安藤が、T・委員のゐなくなつた跡をひとりで整理しかねてゐた。

『ふーむ、ひでえな、第五班は廿八名しか點呼を受けてねえ』

點呼簿、會計簿、それから、亂脈になつた班長會議報告書、全然の白紙である行商隊報告書――

『畜生、訪問隊の報告は？』

班委員の安藤は、ノンキに口笛を吹きながら、
『訪問隊員が工場にもぐり込んぢまいやがつたんだよ』
はづれッ放しの雨戸の間から、風がしみる。空は低く、また霙でも降りさうだ。階下では、皆が時折ゲラゲラ笑ふか、でなければ梯子を上つて來て――早く報告しろ――と怒鳴つた。
『いまゆくから靜かにしてゐろ、このルンペンめ！』
寺石がどなりつける――。斎生、第六班の倉庫や發送部の野郎は、もうすつかり反動でゐやがる――。
萩村達は、火鉢の火を眺めて、じつと考へ込んでゐる――あいつらだつて最初は勇敢だつたんだ――。
『おい萩村』
帳簿を積重ねながら、寺石が鼻ッ先に冷笑を泛べて皮肉つた。
『おめえ、今更ら馘首が怖くなつたんか』
『ナニ？』
『いまならまだスキャップになる餘地があるぜ』
萩村が、赤くなつた顔をあげた。
『何だつて斉二才、も一ぺん云つて見ろ！』
中井が、のそりと入つて來て椅子に腰掛けたが、爭ひが目に入らぬやうに默つて考へ込んでゐた。
『ヤイ小兒病め……』
中井の膝を蹴飛ばして、セトの火鉢を飛び超えた萩村が、寺石の首根ッこに飛びかゝつた。寺石もすぐ向き直つて取つ組んだ。高木や、伊藤達が引き別けやうとしたが、上になつてる萩村はなかなか手を離さない。――斎生め、俺ァ今日ま

で我慢してゐたんだ——。

『陰謀のかたまりめ！』

寺石の近眼鏡がケシ飛んだ。

『止せ、止さんか？』

高木や山浦達に引離されたが、相變らず寺石は冷笑を泛べて、鼻血を拭つて居り、萩村は息を切らしながら叫びつゞけた。

『畜生め、貴樣は無產階級のバチルスだぞ、陰謀と、仲間を蹴落す策動の外に、一體おめえが何をしたといふんだ、畜生め！』

萩村は止め度なしに怒鳴つた。

『なるほど、インテリ出の貴樣にや、辨當飯の味あわかるめえ、三千の爭議團が馘首になつたつて痒ゆくもあるめえ、しかし、考へて見ろ、三千の失業者にや、一萬以上の家族があるんだぞ、この小兒病め！』

中井は相變らず默然として眼をつぶつてゐた。梯子の傍では、物音におどろいた團員達が三つ四つと顏を突ン出して來た。

『貴樣は——失業者が多くなりや、それだけ××あ早えんだ——つて吐かしたのを覺えてるだらう。サア爭議團員の前で、モウ一ぺん吐ざいてみろ！　畜生！　貴樣こそ勞働者の敵だ！』

そのとき、中井が、グツと馬面を差出して、靜かに萩村に云つた。

『そして、君も、無產階級の敵だ——』

おどろいた視線が、中井を見守つた。中井はハツキリと語尾を強くして云つた。

『俺は、執行委員長として、萩村及び寺石を、爭議團則を亂したものとして、査問委員會に告發する！』

『どうして、俺が勞働者の敵だ、俺が……』

萩村は、ブルブルふるへる拳を握りしめながら、中井に近づいた。

『それは……』

『君は、社會民主々義者だからだ！』

中井は、顔をピッタリひきつけて云つた。

毆りかゝらうとする萩村を、高木がおしへだてた。中井は咽喉にかすれる聲で、だがハッキリと、

『君は、こんな重要なときにあつて、爭議團員の中の、日和見的分子や、裏切共に對してさへ、何らかの理論をめつけてやらうと焦つてゐる。その爲に暗くなり、涙さへ流さうとしてゐる。それは眞實の戰鬪的分子、爭議團の前衛から大衆を引離さうと企ててゐるものだ！』

『嘘、嘘だ、俺が何時、日和見になつた？』

萩村は、高木を押し飛ばして近づかうと荒れまはる。

『バカッ』

曾て見たことない中井の怒聲が、室いつぱいにひゞいた。

『俺達は前進しなければならぬ。そのためには一切の日和見主義は排されなければならぬ。俺は委員長として命ずる。二人は査問委員會まで廿四時間の禁足だ！』

梯子段のとこには、五六十の顔が、口々にさわいでゐた。中井はそつちへ近づいていつた。

『諸君、交渉は決裂した、そして再び交渉の機會は來ないであらう。吾々は全員解雇を覺悟せねばならぬ』

呆氣にとられた休戰派達の顏を睨めつゝ中井はつゞけた。
『鬪ひは生きるか死ぬかだ。この最後の戰ひに怖くなつた奴は、すぐ此處から去れ。吾々は吾々の最後の力を以て、この資本××の砲火の下に前進しなくてはならない。一歩も××してはならないんだ！』

二　熱火盡く

1　誤算

しかし、また反休戰派は、各班にわたつて、急速に秩序を回復しつゝあつた。休戰派は追ひしりぞけ、若い者が、代つてその部署につき、T・委員會は表面に姿を現して、非常時の、嚴重な取締を實行した。
そして、T・ワンからスリーまで、更に擴大された精銳を動員して、力は一點に集中されつゝあつた。
『かゝる非常時に於て、眞實のドタン場に於て、憎むべき反動、社會民主々義は……』
第二本部で、中井は演說してゐた。さほど廣くもない階下で、六七十人が、室の眞ン中に坐つてゐた。ヤツと鼻たらし子僧あがりの若者や、まれには宗教じみて熱心な老人や——そして大半は、精銳の青年達を中心の——從來の團組織に一番ウヅもれた職工たちだけであつた。
『民主々義は發生する。否、假面を脫ぐんだ。——工場に裏切つて入つた奴、消極的にボイコットとして家庭でコソコソしてる奴——更に、他の工場にもぐり込みつゝある奴……』
そして殘つて居るものは、ホンの少數の、お話にならぬ少數の諸君たちだけなのだ！　中井は不意と肌寒さを感じる。
『彼等は勝ちほこつてゐる會社側に、更に決定的な確信を與へてゐるのだ！　しかも交渉は再びないであらう。吾々は最後の決心を、固むべき、その時期に於て、彼等の裏切、ボイコット、反動化は、まさに、砲火を浴びて勇敢に前進する吾々

××的勞働者の顔に泥を塗るものだ！」

少年工、女工、老職工、そして中心の青年達――は、中井の馬ヅラを見入つてゐる。一語も發せず見詰めてゐる。その嘘のつけない眼の群、頑固で純情な眼の群――恐怖と昂奮と、正義と反抗に、チラチラと燃えてゐる眼の群――。

少數が――如何に微力な――しかし君達こそ――中井は、滅多に演壇で喋べつたことのない中井は益々明瞭になりながら、そして心は益々熱くなりながら、呼びかける。

「しかし、君達こそ――少數の、しかし大多數であるところの若き君達こそ――三千の、三ヶ月の、大爭議の中から生れ出た諸君こそ、この激しい××の下を突喊し、前進し、榮譽ある大爭議の、××を擔つてる人々だ！」

中井は演壇を降りた。そして昂奮した顔に、微笑を泛べながら、若い人々と別れて、すぐ次の會場へ行く。

中井が出ていつた跡で、富ちやんが名前を呼んでゐる。返事した青年少年達は、直ちに席を離れて一定の場所に集る――

「蘆川君、安西君、野見君、廣井君、笠井君、手塚君………」

T・ツウ、同スリー及び擴大された人々だ。

室ン中は寒く、日射しがすつかりとざされて、暗くなつてゆく。富ちやんに指揮されて、名前を呼ばれた若者達は、バラバラに、一人、二人と會場から出てゆく！

何處にゆくのか？　それはわからない。殘つてゐる人々も、それを聞くわけにゆかない。室内は暗く、そして緊張してゐた。

夜になつた。風が激しくなり、白山の森からうづまき下す空ッ風は、「太陽のない街」の頭上をかけめぐる。

博同印刷の各工場の入口、東西の通用門には、××と、守衛と、そして澤山の暴力團が、風の中を警戒してゐた。

『チッ、雪になるんぢやねえか』
印度虎は、釣鐘マントを、スッポリ頭から冠つてあるいた。
『大きな聲出すねえ』
一緒に歩いてゐる杉本が、低い聲でたしなめた。電燈工夫用の外套頭巾から、眼だけを覗かして、これもコッソリと歩く。
塀際を這ひ、溝ン中をつたつて、二人は暗をよつて歩いてゐる。清水谷電車道の裏通りである。
暗の底に、大同印刷工場の十幾つの、鋸歯形の屋根が、黒々と見える。電車の音も聞へない、時折激しく風がうづまいて過ぎる。
午前一時頃だ！
二人の黒い影は、清水谷の坂を半分下りて、右に消えた。
『氣をつけろ……めつかつたら百年目だ！』
路次を行つた突當りに、暗の底に低く突這つた長屋が見えた。
『おい』
長屋の一つ〳〵當をつけて進みよると、杉本が、小さく表戸を叩いた。印度虎は長屋のワキにはりついてゐる。
耳ざとくきゝつけたらしく、内部ではゴヽヽヽヽッゴッ下りて來る氣配がする。
『責任者か？』
杉本が小さく開いた隙間から云ふ。
『さうだ、黒岩だ！』

杉本の聲だとたしかめて、内部の男が暗がりで云つた。内部からは、幾人もの低い囁き聲や、のんきないびきの聲や、咳拂が聞へた。暗の中にうづまつた若者たちの呼吸づかいだ！

『指令だ』

杉本が云つた。

『こゝは何人だ？』

『十八人』

『午前五時だ』

『よし』

『受持は西門』

『ん』

『合圖は、喊聲だ！』

『わかつた』

『それから……』

杉本は、一寸咳をして、

『絶對に、アトを振返つてはならぬ。いゝか。倒れた者は乘り超へてゆくんだ！』

風が、また一しきり、トタンぶきの長屋の屋根をゆすぶる。

『わかつたか、ぢや、これが最後の指令だ！』

杉本と印度虎は、長屋の表戸を離れた。そして、また次の家を求めて、二人は忍んでいつた。

針が午前二時を指してゐた。

レストラン・カナリヤの、例の裏二階の室で、中井と南が、火の消えた火鉢を挾んで、默りがちに坐つてゐた。

眼は血走り、頰は尖つて、不規則な呼吸づかひが、お互ひにわかる——。

武裝を如何にすべきか？

アジトの二人を、今苦しめてゐるのは、この問題であつた。大衆的な××の經驗——それが二人になつた。いや恐らく、誰もがなかつたであらう。從來の爭議は、少なくとも組織的には、農民一揆を除いてはなかつたのだ。

『もう時間がない』

中井が腕時計を見て云つた。

『うむ』

南は、まだ腕を拱んでゐる——。

カサツ、カサツと梯子段の方で音がした。守家と、次田が入つて來た。そしてすぐまた、杉本と印度虎が入つて來た。

『東門は六十七人』

守屋が報告した。

『西門は八十一名』

杉本が云つた。

默つてゐた。南が決心したやうに顏をあげて、低いが鋭どく云つた。

『よし、西門は責任者杉本君、東門は守家君だ。方法は昨夜の決議通り——』

──東門は一せいに、通用門を乘り越へて鐵工場へ侵入し、ハンマ、スパアナ、ボート等を××として持ち、それからミレー印刷室、製本工場を拔け、事務所へ行く──西門は、二手に別れ、一方は平版課各室、一方は長驅して、輪轉機室へ驅け込み、用意の砂袋によつて、輪轉機を××すること──

南は、實際上の心得を、念入りに注意した。それから大きな手を指し出して握手した。

『ぢや、ゆきたまへ、必らず後を振り向くな、倒れた仲間は×み越へてゆけ！』

杉本と印度虎と──守田と次田と──コツそりと梯子を降りて外へ出た。

「チツ、とうとう降つて來やがつた』

フワリと、頰に密着いて、冷たく解ける粉雪が、激しい風に揉まれながら、落ちて來た。

見る間に、あたりは仄明るく、しだいに、足許を照らして、そしてクツキリと、靴アトを刻んでゆく──。

作者附記──發表順が前後しましたが、これが一て、先回發表の分、「失業者の波」「新生活」等、はずつとアトです。

毎月一回一日發行

定價		送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年八月十八日印刷
昭和五年九月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　竹内喜太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ内（〇〇〇）五三五・五三六・五三七番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


内面艶消
マツダランプ

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**

By The Chuo Koron Sha Publishing Co. Tokyo Japan.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. *Entered* at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
昭和五年八月十八日